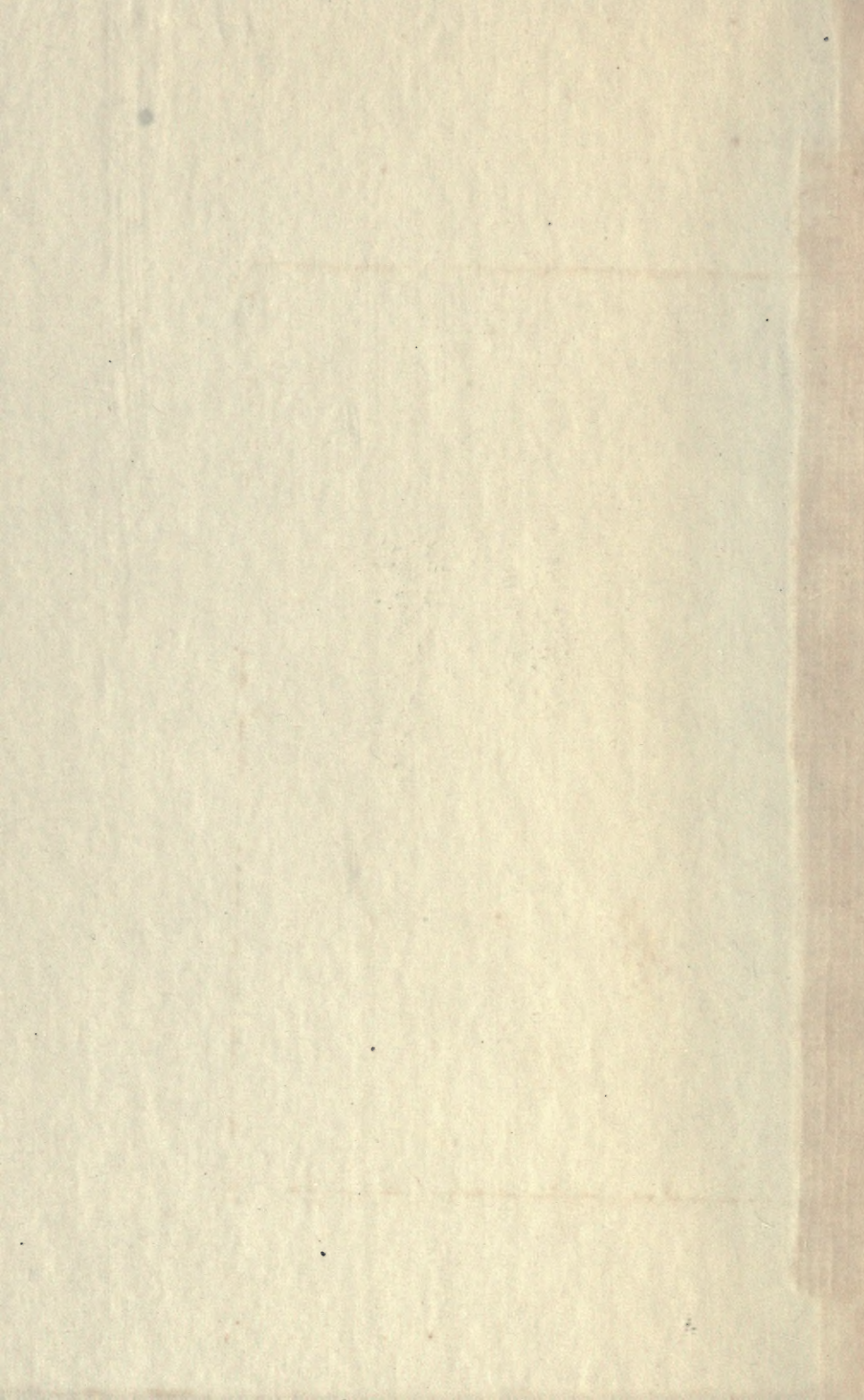


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03148 5998







大東出題

東京市立第一高等學校

不
價

東京市立第一高等學校

東京市立第一高等學校

東京市立第一高等學校

昭和六年三月十五日發行
昭和六年三月十五日發行

東京市立第一高等學校

昭和六年三月十日印刷
昭和六年三月十五日發行

不許
複製

發行所

國譯一切經大集部二

編輯者兼

岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者

渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所

日進舎
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

東京市芝區芝公園地七號地十番

大東出版社

振替東京一九四七一番
電話芝三〇一四〇六番

て我と爲し、乃至知る者は是れ我なりと。眼は即ち是れ我の因縁なり、乃至意も亦是の如くなり。橋陳如、諸の外道は、眼を説いて向に喩へ、我をば見に見に喩ふ。若し是の如くならば、是を顛倒と名く。何を以ての故にとならば、言ふ所の見とは、即ち是れ和合なり、和合の中に於て、私の想を生ず、是の故に顛倒なり。若し向を眼に喩へ、見を我に喩ふと言はば、是の義然らず。何を以ての故にとならば、向中の見者は、亦見亦聞き、亦識り亦觸る。眼は是の如くならず、是の故に見者をば、我と名くるを得ず。向は久故なりと雖も、見る事猶ほ明了なり、眼若し久故なるも、是の如くなるを得ず。我とは常に名く。若し我にして見聞せば、我は即ち無常なり。若し無常ならば、云何ぞ我を説かん。橋陳如、衆生は是の顛倒の因縁を以て、四諦を見ず。如來は是の顛倒の相を了するが故に、名けて正智と爲す。是の人は則ち能く顛倒の相を壊す、若し顛倒を壊すれば、則ち魔業を破せん。若し魔業を破せば、是の人則ち能く諸龍を救拔せん。橋陳如、是の故に我れ今能く諸龍を救はん」と。

【五七】 以下脱文あり。卷第四十四以下参照。

爾の時世尊、帝釋たいてしやくに告げて言はく「橋戸迦、娑婆世界の有らゆる諸山にては、須彌を最と爲す。我も亦是の如く、諸の衆生に於て、最も第一たり」と。

爾の時、一切の龍王、是の語を聞き已り、各佛に白して言はく「世尊、唯願はくは、憐愍もて、我等の苦を救ひたまはんを」と。佛の言はく「諸の善男子、汝等先づ當に至心に佛を念すべし。我れ當に之を救ふべし」と。

爾の時世尊、橋陳如に告げたまふに、其の音遍く十方世界に聞えたり。「橋陳如、一切の諸法は悉く皆無常なり、一切の諸法は、生ずれば無常に住す。何を以ての故にとならば、因縁によつて生ずるが故なり。一切の因縁生の法は、即ち是れ苦なり。若し法の生ぜん時、即ち是れ苦なり、即ち是れ癩瘡かそうなり、即ち是れ有支うしなり、即ち是れ生老なり、即ち是れ生滅あり。橋陳如、眼は即ち無常なり。若し眼生ずれば、即ち是れ苦なり、即ち是れ癩瘡なり、即ち是れ有支なり、即ち是れ生老なり、即ち是れ生滅あり。乃至意も亦是の如し。橋陳如、若し眼滅すれば、即ち是れ生老病死等滅せん。即ち是れ一切の有支うし滅せん。乃至意も亦是の如くならん。衆生は眼の生滅を知らず、是の故に流轉りゅうてんして五道の中に在り。如來は眼の生滅を斷ぜんが爲の故に、法を廣説するなり。亦爲に苦と斷苦の行法とをも説く。是の故に、如來は是れ梵中の大梵、天中の大天、象中の大象なり、是れ沙門中の大沙門、婆羅門中の大婆羅門、慈中の大慈、悲中の大悲、無上の尊にして、大丈夫だいじやうぶと爲し、已に生死大海の彼岸に到り、最大の福田にして、無勝の施主たり、其の心平等なれば大法王と爲す、大禁戒と無上の精進とを持し、善く梵行を修して正道を了知し、大導師と爲つて、餘の業に通達す。橋陳如、善く眼の生滅の因縁を知るが故に、如來と名け、了知せざるが故に、名けて凡夫と爲す。云何ぞ知らざるを名けて凡夫と爲すとならば、橋陳如、一切衆生は皆我有りと説く。是の故に眼の生滅の相をば見ずして、五道に輪轉す。橋陳如、諸の外道有り、説いて言ふ、見る者をば、之を名け

愍の故に、能く是の如き諸龍王の苦を救はん」と。

或は説いて言ふ有り「此の如きは、乃ち是れ化自在天、化樂天、兜率陀天、夜摩天、忉利天、四天王など、憐愍を以ての故に、能く是の如き諸龍王の苦を救ふなり」と。

善住龍王の言はく「是の光明は、即ち是れ光味菩薩の光明にして、憐愍を以ての故に、諸龍王の苦を救ひたまふなり」と。

寶髻龍王の言はく「是の光明は、乃ち是れ出家して、鬚髮を剃除せる大徳人の光にして、憐愍を以ての故に諸龍王の苦を救ひたまふなり」と。

海龍王の言はく「是の光明は、是れ如來の光なり。何を以ての故にとなれば、憐愍を以ての故なり。如來世尊は、諸の衆生に於て、一子の想を修し、能く衆生の一切の苦惱を救ひ、無量世に於て修行し、六波羅蜜を具足したまへるは、唯一切衆生の、無量の苦惱を救済したまはん爲なり。是の故に一切の欲色界の天は、大供具を設けて之を供養するなり」と。

爾の時世尊、帝釋に告げて言はく「橋戸迦、我れ此の娑婆世界に遊ぶが如きは、衆生を化せんが爲なること、汝の三十三天に在るは、三十三天を度せん爲なるが如し」と。橋戸迦の言はく「世尊、我れ今未だ無邊の智有らず、云何ぞ我れ能く諸天を化すと説かん。世尊、是の須彌山には無量の天、無量の林天、無量の鬼神、無量の乾闥婆、無量の緊那羅、無量の迦樓羅、無量の阿修羅、無量の摩睺羅伽、無量の諸龍、無量の大仙、無量の聖人有り。唯願はくは、如來、憐愍の心を以て、是の如き無量の衆生を化度したまはんを」と。

爾の時世尊、熙怡微笑したまふに、無量色の光、其の口より出づ。青・黄・赤・白・玻璃・雜色にして、遍く十方幽冥の處を照らすに、無量億の梵天の光明、無量億數の釋天・日月にも勝れ、能く一切の諸惡魔業を壞したり。

の時梵王、是の如きの言を作す「唯願はくは如來、此の路を經涉して我が座上に坐したまはんを」と。爾の時他化自在天、復闍浮檀那寶を以て、床及び道を作り、亦言はく「如來、願はくは此の路を行きて我が座上に坐したまはんを」と。爾の時化樂の諸天、復天の金を以て、床及び道を造り、亦言はく「如來願はくは、此の道を行きて我が金床に坐したまはんを」と。爾の時、刪兜術陀天、復天の銀を以て、床及び道を造り、亦言はく「如來願はくは、此の道を行き、我が銀床に坐したまはんを」と。時に夜摩天、復瑠璃を以て、床及び道を造り、亦言はく「如來願はくは、此の道を行きて瑠璃の床に坐したまはんを」と。時に忉利天、復眞珠を以て床及び道を造り、亦言はく「如來願はくは、此の道を行きて、眞珠の座に坐したまはんを」と。時に四天王、復瑪瑙を以て、床及び道を造り、亦言はく「如來、願はくは此の道を行き、瑪瑙の床に坐したまはんを」と。時に四阿修羅、復栴檀を以て床及び道を造り、亦言はく「如來、願はくは此の道を行き、栴檀の座に坐したまはんを」と。

爾の時世尊、心に憐愍したまふが故に、佛像を化作して、遍く六道を行き、遍く六座に坐し、如來の眞身を以て、梵王所設の道・座に處在したまひ、一一の化像に、皆無量の聲聞菩薩有り、以て眷屬と爲す。一一の化像所有の光明は、猶し無量の日月の光明の如くなりき。是の諸龍王、化像を見已り、心に恭敬を生じ、各是の言を作す「今須彌山は乃至是れ千の日月の如し」と。

難陀婆羅陀の言はく「如來世尊は、無量の梵天と與に須彌山に越きたまふ。是れ其の光明にして、日月に非ざるなり。汝等若し解脱を得んと欲すれば、應當に至心に専ら如來を念じまつるべし。如來世尊は已に無明を壞したまふ。是の故に今是の如き光明有るなり」と。

阿那婆達多龍王の言はく「是の光明は、是れ魔の所有にして、佛光には非ず。何を以ての故にとならば、一切の欲界は魔波旬に屬するが故なり。是の魔波旬は、能く是の惡を作す。波旬は今、憐

【五】梵に Surtasita 欲界の第三天、普通兜率天と呼ぶ。

生の中に於て、最も殊勝たり、一切法の中に於て、心に自在を得、諸法の海に於て、已に彼岸に到り、能く一切衆生の苦惱を救ひ、其に安樂を施したまふこと、平等にして二無く、一切を憐愍して能く正道を示し、正眼を惠施したまひ、一切天龍の供養する所、能く一切十方世界の、有らゆる人天の微妙の供具を受けたまふ。世尊、我れ今多く無量の苦惱を受く、唯願はくは慈悲をもつて、少しく救拔を垂れたまはんと」と。是の諸龍王、心に佛を念じ已り、尋で自ら身を見るに、先の如くにして異なる無かりき。

時に光味菩薩、諸龍王に語るらく「如來の功德は不可思議なり、衆生の爲の故に、無量世に修行して六波羅蜜を具足し、三の慈悲を説いて衆生を調伏し、一切法の、我無く作無きを説き、陰・入・界四大煩惱を説き、煩惱の性及び衆生の性を説き、一切法の性無く相無く、礙無く作無く垢無く淨無く、明無く暗無く取無く捨無く、行無く住無く一無く二無きを説きたまふ。陰・入・界等及び四大も、亦復是の如くなるを、第一義空と名く。是の故に如來は能く衆生を調し、無上尊と爲りたまへり。是の故に如來こそ能く、汝等の無量の苦惱を抜きたまはんと」と。

日密分中 救龍品第六

爾の時世尊、光味菩薩に告げたまはく「善男子、汝今諸龍の業を聞かんと欲するや不や」と。光味菩薩、佛に白して言はく「世尊、今正に是れ時なり、唯願はくは演説したまはんと」と。佛の言はく「善い哉、善い哉、善男子、至心に諦聽せよ、當に汝の爲に説くべし」と。爾の時、一切の天・人、好香華・妓樂・旛蓋を以て、佛を供養したり。

爾の時世尊、欲・色界の一切の諸天、無量の聲聞及び菩薩衆と、摩伽陀國より、須彌山に趣きたまふ。爾の時梵天、七寶の座を設け、以て如來を待ちたてまつる。復七寶の街道を造作する有り。是

【五三】 以下脫文あり。卷第四十三、參照。

【五四】 卷第四十三、後半。

【五五】 卷第四十三、須彌山頂品第十一。

才智聰達なりき。王に夫人有り、欲心發動し、王と與に遊行し、一林中に在つて、貪心もて王を視、即便姪身す。是の時夫人、時満ちて即ち其の兒を生むに、頭耳項眼脣口など、悉く皆臚に似、餘の分は人に似たり、其の母見已り、即ち怖畏を生じ、之を廁中に擲つに、身の未だ地に至らざるに、是の時、驢鬼空に於て接取し、雪山の中に往き、瞻看哺養すること、猶し生子の如くなりき。爾の時、雪山の中に、甘善の藥有り、驢鬼採取し、以て是の兒に食せしむ。是の兒食し已るに、身則ち轉翼し、大光明の福相有り、智慧慈悲を具足す。是の因縁を以て、諸天禮拜し、供養讚歎し、是の兒の爲の故に、雪山の中に於て、諸種類の藥草果臚有る「を取つて食はしむるに」、餘の相悉く轉じ、唯脣のみ臚に似たり。是の故に名けて 驢脣仙人と爲す。六萬年に於て、禁戒を受持し、常に一足を翹ぐ。一切の梵天・魔天・帝釋など、大に供養を設けて之に供養し、皆悉く合掌して、驢脣仙人に白ふらく「何の願をか欲求する、唯願はくは之を語れ、若し我が力の能くする「所ならん」には、我れ當に汝に施すべし」と。仙人答へて言はく「我れ今星宿を了知するを得んと欲す。衆人の爲の故に、心に憐愍を生ずればなり」と。一切の天の言はく「若し一切衆生を憐愍するが爲に、知るを得んと欲すれば、願はくは當に之を説くべし」と。仙人の言はく「梵天、我れ實に最初の宿を解せず」と。

是の宿を説ける時、諸の大龍王は、光味菩薩に於て、心に歡喜を生じたり。爾の時光味菩薩、諸の龍王の爲に、微妙の音を出して、三寶を讚歎し、又是の言を作せり「我れ今眞實に、汝等の苦惱を救拔する能はず、唯如來釋迦の尊有す、乃ち能く之を救ひたまはん。釋迦如來は、諸の衆生を調伏せんと欲するが爲の故に、無量の世に於て、能く珍とする所を捨て、慈悲を修習したまへるは、苦惱を救はん爲なりき」と。

爾の時、一切の龍王・大小男女など、至心に佛を念じて讚歎歸依すらく「世尊に南無しまつる、衆

【四二】驢脣、日藏分に法盧虱吒に作る。

【五〇】以下、星宿を説く文、脱す。卷四十一の後半と、第四十二並に第四十三の首部とを参照。
【五一】卷第四十二の最後の段参照。

【五二】卷第四十三。

是の五仙人は、悉く五通を得て雪山に住し、悉く光味大仙人の所に在つて正法を聽受し、光味菩薩は亦、種種無量の讚歎を以て、如來を讚歎したり。

爾の時仙人、悉く一切龍王の音聲を聞き、聞き已つて即ち光味仙人に白はく「頗し諸龍の哭聲を聞くありや不や」と。答へて言はく「已に聞く」と。「大士、唯願はくは彼に往いて、其の苦を救済したまへ」と。光味答へて言ふ「汝等往くべし、我れ去るを得ず。所以は何んとならば、今大天有り、無縁の慈を聞受するを得んと欲するがなり」と。

時に四仙人、光味を禮拜し、佉羅毘山に往きて之を救済せんとす、諸龍見已り、即ち各聲を擧げて、哀を求め、救を求めたり。仙人答へて言はく「我れ救ふ能はず、彼の雪山中に、一菩薩有り、名けて光味といふ、彼能く救拔せん、吾等能はず。汝等一心に、哀を求めて禮を作せ」と。時に諸龍王、各自ら同聲もて、彼に向ひ禮を作す。

爾の時光味、是の聲を聞き已り、無量の諸天大衆と、佉羅毘山に至るに、龍王見已つて、頭面もて禮を作し「唯願はくは大士、我等の苦を救ひたまへ」と。爾の時、光味菩薩、時已に到るを知り、星宿を説かんと欲す。爾の時、大海龍王、光味菩薩に白して言はく「大士、是の星宿は、誰の所説にして、誰をか大星と作し、誰をか小星と作し、誰をか日月と作し、何日の中、何の星か先に在り、云何が満月なる、云何が時と爲し、是の如きの星宿は、何天にか繫屬し、性は是れ何等なる、何か軽く何か重き、何か善く何か悪き、何か食し何か施する、誰か此の晝を造り、誰か此の夜を作る、影の幾歩あるを、名けて曰つて轉と爲す、云何が南轉、云何が北轉なる。大士、汝は諸仙」の「中」に於て、最も第一たり。唯願はくは具足し、分別解説したまはんを」と。

爾の時光味菩薩、諸の龍王に告ぐらく「大王、先に過去世の賢劫の初に、旃陀延城」といへるあり「其の城に王有つて、無量淨と名け、正法を以て國を治め、欲樂に貪せずして、常に寂靜を樂み、

【四〇】 賢劫 *Brahmakalpa*

【四一】 旃陀延、日藏分には障波に作る。

【四二】 無量淨、同に大三摩多に作る。

佛の言はく『大臣、善い哉、善い哉、若し人、金の須彌山の如くなると、并に七の寶物を以て、無量世に於て、佛を供養せんに、其の福は、菩提心を發すに如かず。何を以ての故にとならば、是の心を發す者、乃す是れ十方の諸佛を供養すればなり』と。

爾の時、戒梯菩薩、即ち座上に於て、如法忍を得、坐より起ちて、頭面もて禮を作し、佛を繞ること三匝し、身の上衣を以て佛に供養し、乃至四萬四千の大衆も、亦復是の如くしたり。

時に魔波旬、其の大臣及び其の眷屬など、已に佛に歸依したるを見、心に苦惱を生じ、牢く門戸を閉して、一面に却坐す。

爾の時世尊、即ち大衆の爲に、三種の慈——所謂生緣・法緣・無緣——を説きたまふこと、虚空目中に宣説したまふ所の如くなりき。

爾の時、一切の諸天龍王、悉く皆仗羅塔山なる、先聖の住處に集會したるに、動かんと欲するも能はず、行かんと欲するも亦然かなり、大身を現ぜんと欲するも、復能はざりき。尋いで難陀・婆難陀王に向ひ、是の言を作す『大王、先に作す所の臭穢の死屍は、皆是れ波旬の所爲たり、是の故に、我をして、悉く此に來至して是の小身を受けしむ。若し能く魔波旬に歸依せば、解脱を得べし』と。爾の時、伊羅跋羅龍王の言はく『魔王は今、本心及び其の神通を喪ふ、云何ぞ當に能く汝等を救済すべけん』と。

爾の時龍王、或は四天王に歸依する者有り、或は忉利天、或は焰摩天、或は兜術天、或は化樂天、或は他化自在天、或は梵天等に歸依する有りき。

爾の時、海龍王、即ち是の言を作す『汝等見すや、釋迦如來には、一切の賢聖・人天・雜類など、大に供養を設けて歸依するを』と。爾の時、或は龍王有つて、那茶仙人、或は、馬藏仙人に歸依し、或は、廣仙人、或は、光味仙人、或は、跋伽婆仙人に歸し、是の如き等の五種の仙人に歸依するに、

【三七】 卷第二三、淨目品頁參照。

【四〇】 那茶、日藏分には那茶に作る。

【四一】 馬藏、同に阿收求多に作る。

【四二】 廣、同に毘梨呵とす。

【四三】 光味、同に殊致阿羅漢とし隨言光味と註す。

【四四】 跋伽婆、同に婆揭蒲に作る。

爾の時如來、禪定より起ち、一面に坐して常身を示現したまふに、大臣既に如來の常身、摩伽陀國に在すを見、見じつて即ち是の念を作す「瞿曇沙門は、神通を退失したり、將た我に於て怖畏を生じたるや。我が所に於て大惡を生じたるや。我れ應に先づ彼の瞿曇の所に至り、與共に談論すべし」と。爾の時大臣、即ち大衆と與に、往いて佛所に至り、偈を説いて言はく、

「汝の身は未だ生死の海を度せず、云何ぞ當に能く衆生を度すべき、瞿曇、諸の衆生を誑き、説いて當に大涅槃を得べしと言ふ勿れ」と。

爾の時如來、復偈を以て答へたまはく、

「我れ已に生死海を度し、亦永く一切の有を脱するを得たり。我れ慈悲の因縁を以ての故に、説いて言ふ、衆生も當に涅槃すべしと。汝已に昔無量世に、無上菩提の心を發起し、已に曾て無量數百千巨億の諸世尊を供養したり。汝今定んで當に佛道を得べし、云何ぞ我れ衆生を誑くとは言ふ、我れ今汝に大念力を施し、便ち至心に本身を觀ぜしむべし」と。

爾の時大臣、是の偈を聞きじり、即ち自ら過去の本身を觀察し、了了に明に菩提心を發し、無量無邊の諸佛を供養したるを見、見じつて即時に、心大に慚愧し、如來の前に於て頭面を地に着け、懺悔作禮して佛に白して言はく「世尊、我れ今已に無量世中を憶ふに、菩提心を發し、已に曾て無量億の佛を供養し、諸佛の所に於て妙法を聽受し、已に六波羅蜜を修行するを得たりき。世尊、迦葉佛の時に、一比丘有り、聲聞乘を説けるも、我れ思惟せず、便ち言はく、「是の語は是れ佛語に非ずして、魔の所説なり」と。是の人已に菩提の心を發し、菩薩の道を行じたり。是の因縁を以て、迦葉如來は、我に記を授けたまはざりき。我れ是の事に因り、魔界に生じ、是の身を受けてより來、已に五萬七千億歳を經たり。世尊、我れ寧ろ是の過去等の身を以て、地獄の苦を受くるも、終に菩提の心を退せず」と。

至るに、其の山平坦にして、廣縦正等四萬由旬なり。皆是れ先聖の遊居せるの處にして、七寶もて具成したり。乃至難陀、婆難陀王も亦、住處を捨てて此の山中に至る。四大海中の有らゆる龍王、及び其の眷屬——無量無邊なる——伊羅跋龍王、善住龍王、龜龍王、阿那婆達多龍王、目真憐陀龍王、德海龍王、水德龍王、舍德龍王、樂德龍王、阿波那羅、山德龍王、牛德龍王、伊羅跋多龍王、長臂龍王、長髮龍王、淨龍王、迦羯羅龍王、水瀾龍王、黑髮龍王、金色龍王、舍拘龍王、念彌龍王、象龍王、利牙龍王、有行龍王、疑網龍王、長面龍王、赤眼龍王、樂見龍王など、是の如き等の、閻浮提土の有らゆる龍王、其の數八萬、并に其の眷屬、乃至四萬四千國土の有らゆる龍王など、皆仗羅塔山に至る。北鬱單越に二龍王有り、一を無邊と名け、二を金身と名く。是の二龍王、無量の衆と及び四萬四千國土の龍王も、亦此の山に至る。東弗婆提に二龍王有り、一を名けて月と爲し、二を婆私吒と名く。是の二龍王、無量の衆生と及び四萬四千國土の龍王も、此の山中に至る。西瞿耶尼に二龍王有り、一を寶髮と名け、二を光髮を名くると、及び四萬四千國土の龍王も、此の山中に至る。及び四天下の四生龍王、并に其の眷屬も、亦此の山に至る。是の諸龍王は、其の身皆、四寸の藥根の如くなるに、瞋恚を以ての故に、身は須彌の如くなりき。

時に魔波旬、是の如き等の諸龍王を見已り、其の眷屬に告ぐらく、「諦に聽き諦に聽け、我が力を以ての故に、是の如き龍をして、宮室より出で、彼の大山に至らしむるに、悉く勢力を失して瞿曇沙門を毀壞する能はず」と。

爾の時、復大臣有り、名けて戒梯と曰ふが、即ち魔に白して言はく「大王、是の如き龍王は、釋迦の身を破壞せんと欲するが爲の故に、一處に集會し、各是の念を作す「我れ今當に何等の方便を以て、瞿曇の身を壞すべき」と」。波旬答へて言はく「我れ是の事有り、若し審にせんには、汝當に往きて看よ」と。爾の時大臣、百千萬の衆生と、彼の山に往かんと欲す。

【六】以下、卷末に至る迄の文は、麗不是を缺く。今三本に依つて加ふ。

「如し其れ怨敵の勢力大たらんには、當に詐つて親を現せば、則ち壞すべし、若し瞿曇の、大力有るを知らば、先づ當に詐つて親厚の心を現はすべし」と。

時に魔波旬、復偈を説いて言はく、

「我れ若し詐つて親厚の心を現せんこと、瞿曇の身を毀滅せんと欲する爲ならんには、即ち頸下に死屍を繋げられ、一切人の爲に呵責せられん」と。

是の時大臣、復偈を説いて言はく、

「一切の欲有は是れ魔界なるに、有らゆる人天は如來に屬す、願はくは王、切に惡龍王に勅したまへ、是れ能く瞿曇の身を破壞せん」と。

時に魔波旬、復偈を説いて言はく、

「若し汝審に龍に力有るを知らば、我れ己に心を失ふ〔を以て〕、汝自ら約せよ、若し實に能く瞿曇を壞せんに、我れ還土及び本心を得ん」と。

爾の時大臣、即便諸の惡龍王に宣告すらく「汝當に我が爲に、瞿曇の身を壞すべし」と。時に諸の惡龍、將に空を飛ばんと欲するも、動く能はず、即ち大臣に語るらく「來命を敬奉し、往いて毀壞せんと欲し、適此の心を生ずるも、便ち去るを得ず」と。爾の時大臣、即ち怖畏を生じ、是の如き念を作す「我れ若し今、魔の大力を現じ、諸の惡龍をして心に瞋恚を生ぜしめん、瞋恚を以ての故に、則ち能く瞿曇の身を毀壞せん」と。

爾の時龍宮に、化の死屍有つて、充滿側塞す。諸龍見已り、自ら宮室に於て、心に甘樂せず、是の念言を作す「是れ誰か此の死屍を化作する」と。復思惟すと雖も、誰の爲す「所たる」を知る莫かりき。

爾の時、一切天下中の諸大龍王、及び其の男女大小の眷屬、即ち宮室より出でて、依羅遮山に

【三七】 依羅遮 Rucyāra + 寶山、又は七金山の一。鹽林山といふ本經の日藏分及び月藏分はこの山にて説かるとあり。

爾の時波旬、悉く娑婆世界の、佛身内に在るを見、見已つて悲泣し、涕淚横流し、心に愁惱を生じ、若しは坐し、若しは起ち、若しは行き、若しは立ち、進止出入に、手を以て頭を拍ち、亦苦惱を受く。乃至一切の眷屬も、亦復是の如くなりき。時に魔波旬に、一大臣有り、名けて三六空樹と曰へるが、魔の愁惱せるを見、偈を説いて言はく

「何の故にか愁惱して獨り行き、其の心迷亂せること狂人の如く、所至の處に、心樂たのしみまざる、唯願はくは天王、因縁を説かんを」と。

時に魔波旬、復偈を以て答ふらく

「我れ瞿曇くくどんの大神力だいじんりきを見る、是の故に惱を生じて狂ひ行き、内心躁動して、安んずる所無く、愁熱の逼切眷屬に及ぶ。如來の無邊身を視見するに、悉く一切の娑婆界を受け、我が境界をして悉く空虚たらしむ、是の故に我れ今愁惱を生ず。十方じふしやう所有の諸聖人は、悉く來つて此の世界に集會し、大に供養を設けて佛を供養す、是の故に我をして愁惱を生ぜしむ。如來の大神力だいじんりきを瞻せん視し、及び眷屬の、佛に歸依するを見て、我れ今獨り行きて伴侶無し、是の故に我をして愁惱を生ぜしむ」と。

爾の時大臣、復偈を説いて言はく、

「我れ今多く諸の眷屬有り、其の心弊惡にして器甲を具す、力能く如來の身を破壊し、及び能く大神力を毀壞せん」と。

時に魔波旬、復偈を説いて言はく、

「我が今の眷屬は、深く佛を畏る、云何ぞ能く神通力を壊せん、若し心に毀壞を生ぜんと欲する時は、則ち自ら身の五縛を被むるを見ん」と。

是の時大臣、復偈を説いて言はく、

【三六】 卷第四十一。

【三七】 空樹、日藏分には戒依止に作る。下(三三一頁)に戒梯と云へるもの。是に當るべし。

爾の時、娑婆世界の一切衆生、同じく共に聲を發して、是の如き言を作す『我等是の善因縁を以ての故に、願はくは後に共に、一國土中に生れ、十方の諸佛を覩見するを得、三惡業の道、已に消滅するを得しめたまはんを。若し衆生有り、佛の神變を見、阿耨多羅三藐三菩提心を發さざらんには、當に知るべし、是の人常に黑闇に行かんを。諸の菩薩等は、衆生の爲の故に、種々の苦を受け、或は化して佛と作り、或は辟支佛と作り、或は聲聞・梵天・帝釋、四大天王・那羅延の像、自在天の像、龍の像、鬼の像、阿修羅の像、轉輪王の像を作し、若し佛界有り、應に聲聞を以て調伏を得べき者には、聲聞像を現じたまふ。是の如き等の化は、自ら十住に非ずんば、爲し能はざるなり。是の故に無上菩提の心は、無量無邊の功德を成就す』と。

爾の時、一切諸佛身内所有の衆生、偈を以て頌して曰はく

「諸の惡心の因縁を以ての故に、生老病死の苦に流轉す、善知識に親近せざるを以て、是の故に彼岸に到る能はざるなり。若し能く諸の惡心と、諸の惡邪見・惡因縁とを遠離し、能く三有生死を斷たば、是れ則ち能く彼岸に到らん。衆生は人身を得難く、得已るも、善友に值遇せんこと難く、篤信の心も復得難く、得已るも正法を聽くを得難し。若し能く菩提心を發す有らば、是の人能く諸の煩惱を斷じ、亦能く無量の衆を教化し、大神變を現ぜんこと、今の佛の如くならん。若し能く永く二法——所謂常斷二見等——を斷じ、若しは一切行の無我なるを見なば、是の人を名けて善思惟と爲す。若し能く苦・集の諦を修集せば、是の人能く諸の煩惱を斷ぜん、若し能く菩提心を發起すれば、是の人則ち諸の世間に勝れん」と。

是の偈を説き已るに、無量の衆生、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、復衆生有つて緣覺心を發し、復衆生有つて聲聞心を發し、或は衆生有つて無量の陀羅尼を得、復衆生有つて、如法忍・不退忍・如實忍を得、或は須陀洹果乃至阿羅漢果を獲得する有りき。

【三】 苦、魔本は者に作るも、三本に依つて苦を取る。

【三】 卷第四十終。

得、若しは三乘を退せざる有らんに、是の如き衆生も、亦定に入らん。復衆生有り、三寶の所に於て、信敬の心を得んもの、亦復是の如く、禪定に入らん」と。

爾の時世尊、即ち三昧に入りたまふ、其の三昧をば、一切佛境界と名け、行智廣くして虚空の如く、一切の智者をして、日月の光明を喜ばしむ。是の如き三昧は、聲聞緣覺及び諸菩薩の、知る能はず、計量する能はざる所なり、是を佛境界三昧と名く、如來是の三昧に入り已りたまふに、娑婆世界・百億の四天下・百億の須彌山、百億の日月、乃至百億の有頂など、是の如き等の土、悉く佛の身に入り、娑婆世界・地獄・餓鬼・畜生・天・人の、苦を受くる有る者は、皆除滅するを得て、一切歡喜すること、譬へば比丘の第三禪に入るが如くなり。有らゆる一切の菩薩摩訶薩、悉く定より起つて、佛の光明を見、光明を見已つて、自所有の光、尋で滅して現ぜず。一切の聲聞、受くる所の快樂は、譬へば比丘の第三禪に入りたらんが如くなりき。

爾の時、一切無量の衆生、悉く皆自ら如來の毛孔を觀るに、一一の毛孔より無量の光を出して、恒河沙等の日月の光明の如く、亦恒河沙の十住菩薩所有の光明の如くなりき。是の如き光明は、悉く能く遍く十方の佛土を照らしぬ。

爾の時、十方の諸佛世尊、各大衆に告げたまはく、『諸善男子、汝等頗し釋迦如來の大光明を見るありや不や。是の如き光明は、無量無邊の功德を成就す。是の光は大慈大悲に因る。諸の衆生を憐愍するが爲の故なり。是の故に今、諸の衆生に大神變の相を示す。一切の衆生、是の光を已るや、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發さん。他方世界に、諸の衆生有り、神通を得ん者、皆集つて此の娑婆世界に至り、其の得ざる者は、遙に禮して供養するなり』と。

爾の時、一切の菩薩、悉く七珍・種々の華香・伎樂・幢蓋を以て、供養恭敬し、尊重讚歎す。諸の衆生有り、佛身に處る者は、皆悉く之を見、見已つて復無量の快樂を受けたり。

【三〇】一切佛境界、日藏分に、一切如來境界日月三昧に作る。

【三一】各自國に於て、その大衆に告げたまへるなり。
【三二】此の段、日藏分には偈を以てす。

無量の衆生は、如法の忍を得、無量の衆生は、空・無相・願陀羅尼に隨ふを得、無量の衆生は、不淨觀を成就し、無量の衆生は、阿那波那を成じ、或は舍摩他を得、或は毘婆舍那を得、或は聲聞・辟支佛法を得、或は菩薩法を得、一切の女人は、聞き已つて悉く女身を轉ずるを得、欲界の衆生は、悉く快樂を受くること、三禪地の如くなりき。爾の時、一切の天・人・八部は、佛を供養し、歡喜して住したり。

爾の時、頻婆娑羅王、佛に白して言く、「世尊、此の世界中の無量の菩薩、成就すべき所の光明妙色をば、我れ本よりこのかた、未だ曾て見ず、未だ曾て聞かず。世尊、是の菩薩の光は、能く一切の娑婆世界を照す。若し是の菩薩、阿耨多羅三藐三菩提に近かば、其の光云何ぞや」と。「大王、若し菩薩有りて、無上菩提道を成就せんに、其の光能く十方の世界を照す。何を以ての故にとならば、善法もて諸功德を莊嚴するが故なり、莊嚴の法を成就具足するが故なり、一切の善根多く增長するが故なり、無上菩提道に近づくが故なり、無上菩提の道を畢竟するが故なり、如來正法の果を受くるが故なり、無邊の法を分別演説するが故なり、得べき所の身に、罣礙無き故なり、清淨眞實の法を獲得するが故なり、修集すべき所、彼岸に到るが故なり、未來世の業も已に盡すを得るが故なり、無量の佛の正法を成就するが故なり、能く無上の妙法輪を轉ずるが故なり、一切法に於て自在を得るが故なり、一切衆生の根に通達するが故なり、永く一切煩惱の習を斷ずるが故なり。是の故に、光明悉く能く遍く十方の世界を照らすなり。大王、佛功德の大勢力に隨ふが故に、亦能く十方の諸佛を觀見するなり」と。

王の言はく、「世尊、我れ今十方の諸佛・菩薩・聲聞を見んと欲す」と。爾の時世尊、阿若憍陳如に告げたまはく、「若し我が弟子の聲聞の人にして、在家なるも、出家なるも、是の人各々、深く自ら、所有の善法・思惟して、我も亦如來の三昧に入らんと欲せんに、若しは人・天有つて、如實の忍を

【三六】阿那波那、Anāpānāsuñhīti、出息入息を數へて、心を鎮むる觀法の名。

【三七】三禪地、第三禪天なり、この天を定生喜樂地を名け、深妙の禪定より、身心の快樂を生ず。三界九地の中には、此の地を受樂の限とす。

【三八】日藏分に對照するに、以下脫文あり。

【三九】卷第四十、佛現神通品第七。

る所に非ず。眼識の空なるが如く、一切法の空なること、亦復是の如くなり。是の觀を作す時、空三昧門を得、或は須陀洹果乃至阿羅漢果を得ん。

「眼を觀すること既に然り、耳鼻舌身意も、亦復是の如し。身の無我なるを觀すれば、髮も亦我無く、皮毛血肉・筋骨膿髓、腸唾煖氣・上下の諸風、壽命名字も、皆我有ること無きに、直に衆縁の和合を以ての故に、名けて身と爲す。身觸の因縁の故に、身識を生じ、識の因縁より名識、名識の因縁より六入、六入の因縁より觸、觸の因縁より受、受の因縁より愛、愛の因縁より取、取の因縁より有、有の因縁より生老病死等、是の如き等の法は、身識を生ずるに因る。而も是の身識も、亦復十方より來らず、所因の念、身識を生ずれば、是の念も亦滅し、身識は二念の中に住せず、亦念に語つて、汝住せよ、我れ滅せ「んと言はず。而も此の滅の法も、亦處所無し。是の故に、諸法は縁合するが故に生じ、縁散するが故に滅し、縁有るが故に生じ、縁無きが故に滅す。是の故に當に知るべし、實に我有ること無きを。而も是の因縁も、亦作と受と無く、作者作ること無し、是の故に我無し。若し我無ければ、我所も亦無し。是の故に身性には、我と我所と無し。合無く散無きは即ち是れ生滅なり。一切の諸法も、亦復是の如し。一切の法性は、取無く捨無く、諸の聲聞・緣覺・諸佛の造作する所に非ず。身識の空なるが如く、一切法の空なること、亦復是の如くなり」と。是の觀を作す時、空三昧門を得、或は須陀洹果乃至阿羅漢果を得ん。

「舍利弗、若し比丘有り、能く是の如く、眼と身との無我を觀すれば、當に知るべし、是の人は三昧門を得、諸天世人の爲に、供養せられん」と。

是の法を説きたまへる時、無量の衆生は、過去の惡業を、悉く除滅するを得、無量の衆生は、法眼淨を得、無量の衆生は、須陀洹果乃至阿羅漢果を得、九萬四千の衆生は、是の如き淨陀羅尼を獲得し、無量の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無量の衆生は、菩提の中に於て、心退轉せず、

倒の心の故に、横に我想を生ず。智者は深く我有ること無きを觀知し、是の觀を作し已つて、則ち顛倒を破す。舍利弗、云何が智者は、無我を觀するとならば、所謂身を觀じて諦に無我を知る。何を以ての故にとならば、和合を以ての故に。復次に眼を觀するに、亦我有ること無し。何を以ての故にとならば、四大合するが故に。若し眼の轉瞬するは、即ち是れ風力なり、是の如き風は、虚空に因つて、去來迴轉す、而も虚空の性は、性無所有にして亦不可説なり。若し無所有・不可説ならば、即ち是れ無我なり、是の故に虚空は實に我有ること無く、是の空中の風も、亦復無物にして、宣説すべからず。是の故に無我なり。風を觀するが如く、地も亦是の如く、地も亦無物にして、宣説すべからず、是の故に無我なり。水・火も亦爾り。是の故に當に知るべし、眼の四大も、亦復無物にして、宣説すべからず、是の故に無我なり。

『若し復眼色の因縁の故に、我相有りと云ふ有らば、是の義然らず。何を以ての故にとならば、眼中に我無く、色も亦是の如く、而も和合の中にも、亦復我無し。和合の因縁は眼識を生ずるも、而も是の識中に、亦復我無し。識に因つて色を生ずるを名けて名色と爲し、名色の因縁は六入を生じ、六入の因縁は觸を、觸の因縁は受を、受の因縁は愛を、愛の因縁は取を、取の因縁は有を、有の因縁は生老病死等を「生ず」。是の如き等の法は、眼識に因つて生ず。而も是の眼識は、亦復十方より來らず。所因の念は眼識を生じ、是の念亦滅す。眼識は二念の中に住せず、亦念に語つて、汝住せよ、我れ滅せんと云はず、而も是の滅法は、亦處所無し。是の故に諸法は、縁合するが故に生じ、縁滅するが故に滅するなり。若し因縁の故に生ぜば、無縁には則ち滅せん。是の故に當に知るべし、實には我有ること無きを。而も是の因縁も亦、作と受と無く、作者有ること無し。是の故に無我なり。若し無我ならば、我所も亦無し。是の故に眼性には、我と我所と無く、合無く散無く、即ち是れ生滅す。一切の諸法も、亦復是の如く、一切の法性は取無く捨無く、諸の聲聞・緣覺・諸佛の造作す

「憍陳如、云何が房舎に於て、不可樂想を生ずるとならば、比丘若し房舎に入らん時、應に是の如き念を生ずべし——地獄に入つて諸苦惱を受くるが如く、是の如き房舎は、即ち是れ和合なり、有らゆる材木は即ち是れ人骨、土は是れ人肉なり。乃至一切の床榻被褥（三）も、亦復是の如しと。是の觀を作す時、是を世間不可樂の想と名く。若し能く是の如き想を觀察せば、是の人即ち如實の法忍を得、空無相無願等の忍に隨はん。是の人樂うて空相を修せん。空相を修するに因つて、一切法は悉く是れ生滅し、苦空・無我を見、陰・入界・十二因縁と、一切法性の苦・空・無我なるを觀せん。是の如く見已れば、即ち須陀洹果乃至阿羅漢果を得ん。

「憍陳如、世間不可樂の想を修集すれば、能く欲貪と色・無色の貪、一切の憍慢・疑・掉・無明とを斷じ、乃至無學地を得ん。是を隨無願陀羅尼を具足すと名く。憍陳如、是の陀羅尼は、能く一切の惡魔を破し、乃至能く三寶をして增長せしむ」と。是の法を説きたまへる時、無量の衆生は法眼淨を得、無量の億衆は諸漏永く盡き、八那由他の衆は、無願陀羅尼に隨ひ、無量の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、五萬八千の衆生は、不退の菩提心を得、無量の衆生は、如法の忍を得たり。

爾の時、無量の衆生、佛に白して言はく「世尊、一切の衆生、若し是の法を聞かんに、云何が阿耨多羅三藐三菩提心を發さざらん。我れ今是の法を護持・聽受せん」と。佛の言はく「善い哉・善い哉、諸大檀越、汝等今、大法を護らんと欲すれば、護法に因るが故に、未來の世に、當に無量の福德果報を得べし」と。

爾の時、舍利弗、佛に白して言はく「世尊、（三）德華密佛の、虚空密菩薩摩訶薩を遣はして、持ち來らしむる所の欲陀淨羅尼をば、唯願はくは之を説きたまはんを」と。佛の舍利弗に告げたまはく「諦に聽き諦に聽いて、善く之を思念せよ。當に汝の爲に、德華密佛遣はし來る所の欲陀淨羅尼を説くべし。此の土の衆生の四倒を壞せんが爲に。舍利弗、此の土の衆生は、實に我有ること無きに、顛

【三】榻、細長き牀。

【四】掉、麗本牒に作るも、今三本に依る。

【五】德華密、北方なる普光身世界の佛なり。三一〇—頁參照。

一なり。智者云何ぞ能く分別して知るとならば、智者息の出入の數を觀する時、深く息の冷煖乃至一切毛孔の出入を觀す。是の出息を觀じて、諦に知る、是の息は本無にして今有り。若し本無にして今有らば、是れ無常の相にして、決定の相無く、電の水に畫くが如しと。是の如く觀する時、身の行相を得。是の如き相は、何の因縁に従ふやを觀じて、即ち知る、是の相は覺觀に因り、覺觀の性は、本無にして今有るを。是の故に無常は是れ斷すべき法なり、是れ解脫すべきなり。是の覺觀の相は、心に因つて生じ、心も亦本無にして今有り。本無にして今有るは、是れ無常の相なり、破壊すべきの想なり、歸依無きの相なり、物有ること無き相なり、我有ること無き相なりと。是の觀を作す時、諸行の中に於て、心則ち悔を生じ、能く世間不可樂の想を修す。汝等比丘、若し能く深く是の如き三行を觀すれば、則ち能く永く一切の煩惱を斷じ、能く正見を淨め、生死の法を斷じ、平直の道を成じ、正聚に攝せられ、須陀洹果乃至阿羅漢果を得ん。橋陳如、智者は諸行の中に於て、不可樂の想を修す。

「橋陳如、云何が比丘、所著の衣を視じて、不樂の想を作すとならば、若し比丘有り、衣を裁ち衣を縫ひ、衣を見衣に觸れ、衣を著し衣を脱せんに、是の如きを觀ぜん時、血塗皮爛して臭惡むべく、蟲所作の處の如くにして、樂むべき處無し。是の如く觀ぜん時、衣に於て貪心即時に除滅せん。

「橋陳如、云何が食不樂の想を修集するとならば、若し比丘有り、鉢を執持せん時、血塗の鬻餓、爛臭惡むべく、蟲所住の處の如し。若し食を得ん時、應に觀すべし、是の食は死屍の蟲の如くなりと。若し鉢を見ん時、末骨の如き想をなし、飯漿を得ん時、糞汁の想を作し、諸餅を得ん時、人皮の想を作し、所執の錫杖には、人骨の想を作し、乳酪を得ん時、膿血汚想を作し、若し菜茹を得ては、髮毛の想を作し、種々の漿を得ては、生血の想を作せ。橋陳如、若し比丘有り、是の如き觀を作す、是をば食の不可樂想と名く。

無色界の煩惱を斷たざるべからざるなり。

【二〇】愛、麗本受に作る。今三本に依る、

【二一】鉢、鉢多羅 (Patila) の畧、應器と譯す。比丘の食器なり。

【二二】錫杖、梵に Klankhala 乞食、又は驅虫の爲に持つ杖なり。錫とは振る時、錫の音を作すに依つて取る。

千萬劫なるも、常に苦惱を受け、黑闇を行く。智者は觀已りて、世間不可樂想を修集す。

『橋陳如、智有るの人は、次に人身を觀するに、一切皆、生苦・老苦・病苦・死苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、飢渴困苦、欲苦・瞋苦・嫉妬等の苦、兩舌惡口寒熱等の苦、諸惡獸の苦、惡王等の苦有り、是の人身中に、是の如き苦を受く。智者云何ぞ、不可樂想を修集せざらん。』

『橋陳如、智者は云何が、欲天の不可樂想を觀するとならば、智者は、初に、欲界の六處を觀するに、是の中の衆生は、欲愛の所焦にして、受くる所の果報は、等しからざるが故に苦しみ、無常の故に苦しみ、取苦・盡苦・愛別離苦あり。智者は云何ぞ、中に於て不可樂想を修せざらん。』

次に、色界の十六住處を觀するに、是の中に諸天、世の禪定を修するも、有漏の故の苦、無寂靜の苦、所欲の故の苦、有勝定の苦、善法藏の苦、未解脫の苦、彼岸を知らず・地獄・餓鬼・畜生・人の因縁を盡さざるの苦あり、是の苦を觀じ已り、智者即ち不可樂想を修す。復次に色界の衆生は、或は無漏の禪定を修集する有るも、是等は八正道を具足する能はざる苦、八正道の方便を具せんと欲する時の苦、無學地を得ること自在ならざる苦、緣覺の三昧を得ざる故の苦、如來の三昧を得ざる故の苦、一切衆生の境界を觀察する能はざる故の苦あり。是の如き衆生は、色界の中に於て、若し涅槃に入るも、是の如き苦を受く。智者云何ぞ、色界中に於て、世間不可樂の想を修せざらん。

復次に無色界不可樂想を觀察せんに、彼の中の衆生、有漏三昧を修するの苦、學地に自在を得ざるの苦、又正法を聽聞するを得ざる故の苦、畢竟して、愛を斷ずる能はざる苦、捨命して退かんと時に邪見を生ずるの苦、永く三惡道を斷ずる能はざる苦、捨命して墮するの苦あり。是の如きを知る時、世間不可樂想を修集す。

『復次に橋陳如、世間とは即ち是れ行、行に三種有り、身行・口行・意行なり。身の行とは、謂はく出入の息なり、口の行とは、所謂覺觀、意の行とは、所謂想受なり。是の三種の行は、其の相是れ

〔八〕阿鼻(Āpīti)、無間と譯す、苦を受くこと、間無ければなり。

〔四〕雪山(Himalaya)、印度北境に聳ゆる大山、千古雪を頂けば、雪山といふ。

〔五〕漿は飲料なり、勢はこがしなり。

〔六〕欲界の六天は、四天王天・初利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天なり。

〔七〕色界、此處に在つては、身體、國土など、總て殊勝精妙なれば、この名有り。十六は、梵衆天、梵輔天、少光天、無量光天、極光淨天、少淨天、無量淨天、福淨天、無雲天、福生天、廣果天、無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究竟天なり。

〔八〕世舍論頌疏(八)

〔九〕俱舍の禪を以て、禪定なり、有漏の禪を、三界を九地に分ち、上地と下地とを比較して、下地は脆なり、苦なり障なりと觀じて之を厭ひ、上地は靜なり、妙なり、離なりと觀じて之を欣び、以て次第に下地の惑を斷ずる禪定なり。

四禪、四無色定、四無量心定これなり。こは佛法と外道、凡夫と聖者に共通す。

〔一〇〕無漏の禪定、四眞諦等によつて修する出世間の法にして、三界所屬の心體に屬せず。故に無漏の定を得んには、

食不淨想を説きたまはんを。若し佛、不可樂想・食不淨想を宣説したまはんに、衆生の聞かん者、欲に貪を生ぜず、食に貪を生ぜざらん。世尊、若し衆生有り、能く苦く欲心貪心を呵責せられんには、當に知るべし、是の人速に彼岸に到らん」と。

佛の言はく「橋陳如、至心に諦に聽け、我れ今當に一切世間の不可樂想・食不淨想を説くべし。橋陳如、世に二種有り、一は衆生世、二は器世なり。衆生世とは、所謂五道の衆生なり。器世とは、欲界の中に二十處、色界に十六處、無色に四處有り。

云何が 欲界に二十處有るとならば、八大 地獄あり、一一の地獄に十六の圍遶する有り。一に等活、二に黑繩、三に衆合、四に叫喚、五に大喚、六に熱、七に大熱、八に阿鼻地獄なり。若し衆生にして、身口意の惡有らば、悉く是の如き大地獄の中に生じ、大苦惱を受けん。是の諸衆生は、妙色を見ると雖も、樂想を生ぜず。是の因縁を以て、復大苦を生ず。聲・香・味・觸も、亦復是の如し。智有るの人は、是の事を觀已るに、不樂の想を生ず。

橋陳如、若し畜生を觀るに、其の身細小なること、猶ほ微塵の十分の一の如きあり、微塵乃至菓の如き有り、一由旬乃至百千萬由旬なる等有り、是の諸衆生、或は壽命有ること、一念の頃の如きより、七念の頃に至り、或は一劫より千萬劫頃に至る有り。是の諸衆生は、法行・智慧・慚愧・憍慢の心有ること無くして、當に苦惱を受け、大怖畏を生じ、各々常に相害せんとの心を生じ、一切の諸善法を遠離し、常に黑暗を行き、常に邪道を行す。是の故に智者は、不可樂の想を修するなり。

「橋陳如、智者は餓鬼の身を觀するに、或は長さ一尺、或は人等の如く、或は百由旬、或は雪山の如きが、當に飢渴を患へ、裸形無衣にして、被髮を身に纏ひて慚愧有ること無く、羸瘦して骨立ち、身に血肉無く、各惡心を生じて、心に憊弊無く、濕冷の諸氣、永く無くして復有り。或は 鐵・鐵沙・鐵丸、熱炭・熱膿、熱血・熱風、熱草・熱果などを食し、然も得る能はず、恒に供足せず。壽

【二】世、遷流の義、破壞の義。衆生世とは生あるもの、器とは國土を指す。

【三】欲界、淫欲と貪欲との強盛なる有情の住する所處をいふ。二十とは八大地獄、畜生、餓鬼、人界の四大洲と六欲天をいふ。

【四】地獄、那落迦 Kāruṇika の義譯、地下に在る獄なればこの名あり。瞻部洲の地下、五百由旬の所にありと。八大地獄の一一は次の如し。

(一)等活(Saṃghāta)、彼處の有情、種々の研刺磨擗に遇ふも、暫く涼風に吹かるれば、等しく蘇活するが故にこの名あり。

(二)黑繩(Kaustubhi)、先づ黑繩を以て支體を秤量し、後斬斷する故にこの名あり。

(三)衆同(Saṃghāta)、衆苦俱に來て身を過め、合黨して相害する故に、この名あり。

(四)叫喚(Kāruṇika)、衆苦に逼られ、悲號して、怨叫を發するにより、この名あり。

(五)大喚(Mahāraṇa)、劇苦に逼られて、更に大哭聲を發するれば、この名あり。

(六)熱(Atapaṇa)、火身に隨て起り、苦熱熾え難きにより、この名あり。

(七)大熱(Praṇāpana)、熱中の極なる故にこの名あり。

八正道に因つて、須陀洹果乃至阿羅漢果を得ん。善男子、光明佛土の聲聞の人は、是の如き法を觀じて、即ち道果を得るなり」と。

是の法を説きたまへる時、無量の衆生、如法の忍を得、無量の衆生、如實の忍を得たり。

爾の時世尊、復憍陳如に告げたまはく『若し四眞諦にして、一念に證すべくんば、如來は應に一切衆生の爲に、一行・一法・一事を演説すべし。若しは一人の證せん時、一切の衆生も亦應に同じく證すべし。何を以ての故にとならば、煩惱同じきが故に。亦應に八萬法聚差別の異有るべからず。憍陳如、是の故に衆生は、應に種々の因縁を以て調伏すべく、一縁を以てすべからず。憍陳如、一切の衆生は、實に一乘・二行・一貪・一念・一欲・二解・一信にあらず。是の故に如來は、種々の句・偈・名字、種々の法門を宣説するなり。是の義を以ての故に、如來は十種の神力を具足す。憍陳如、一切の衆生は種々顛倒の相を具有す。是の故に如來は、顛倒を破せん爲に、無常相・苦相・無我相、眼相・爛相・青相・壞相・離散等の相を説くなり」と。

『世尊、云何が名けて、一切世間不可樂想とは爲し、云何が復、食不淨相とは名くるや』と。佛の言はく『憍陳如、汝今是の如き事を問ふべからず。何を以ての故にとならば、彼界に道を得ると此界に道を得るとは、其の相各異ればなり。憍陳如、我れ若し具に説かんに、衆生の聞かん者、或は迷悶を生ぜん』と。『世尊、唯願はくは、憐愍して、諸の菩薩の、能く信解せん者の爲に、分別宣説したまへ。世尊、是の諸衆生、若し是の如き二相を宣説したまふを聞かば、能く善子を種え、善根を増長し、能く無明を破せん。世尊、一切の衆生は、癡愛の因縁もて、生死を樂む。是の故に生死は始無く終無し。世尊、一切の衆生は、食の因縁を以て、貪欲を増長す。世尊、一切の衆生は、初より未だ是の如き二相を聞くを得ず。是の故に生死に流轉し、五道に大苦惱を受く。如來世尊は、大慈大悲もて、無量の世中に、常に衆生を念じたまふ。唯願はくは如來、憐愍の故に、不可樂想・

佛果を得、八千億の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提心を得、無量の衆生、不退心を得たり。

爾の時、阿若憍陳如、佛に白して言はく、「世尊、高貴徳王佛の持來する所の、欲隨無願陀羅尼をば、唯願はくは如來、分別解説したまはんを」と、「憍陳如、我れ今當に説くべし、至心に諦聽せよ。憍陳如、諸衆生の觸と欲とに繫縛せられて、解脫を知らざる有り。是の人應に無願解脫を觀じ、是の如き念を作すべし、欲欲・色欲及び無色欲、觸欲解脫などの、是の如き諸欲は覺觀に因つて生じ、諸行の因縁たり。是の諸行には、作者有ること無く、受者有ること無く、風に因つて生ずるが如く、我が身口意の行も、亦復是の如く、風に因つて生ず。是の風に因るが故に、身增長を得、是の風に因るが故に、口增長を得。我れ風は即ち入出の息なるを觀するが如く、諦に一切身の諸毛孔は、風の因縁に従ふを觀じ、復一切不淨の物を觀じ、復是の身命終の時、是の屍には更に風息の出入すること無きを觀じ、復是の念を作さん、「我が身口の行は風に因縁す。若し風無ければ、身口の行の因縁も無からん。是の故に、爾の時、空三昧を得て、修集增長し、修集に因るが故に、能く欲・貪乃至觸欲を斷ず」と。是の觀を作し已らば、須陀洹果乃至阿羅漢果を得、或は阿耨多羅三藐三菩提心を發す有らん」と。

爾の時、善意覺觀菩薩摩訶薩、佛に白して言はく、「世尊、若し聲聞の人、不淨の相を修せんに、相を成ずるを得已れば、何等の相か有る」と。「善男子、若し欲貪の相を破壊せんが爲には、不淨の相を修し、心を眉間まへまに繋けて、自ら身骨を觀する、是を一相と名く。若し自身及び他身を觀する、是を二相と名け、又一切悉く是れ不淨なりと觀する、是を三相と名く。是の人能く苦集くじつの、盡く淨なるを觀するをば、舍摩他しゃまたと名け、煖法の相を得るなり。是の人、是の如く白骨を觀する時、智を見ること燈の如く、身の四行乃至一塵を觀する、是を頂法ちやうぽうと名く、四眞諦しつしんじを觀する、是を聲聞の不淨觀ふじやうくわんと名け、舍摩他定を成就獲得する、是を白骨觀相はくこくくわんさうと名く。是の相を觀する時、八正道はつじやうだうを得、

【二】 四方堅幢世界の佛なり。二九九頁參照。

【五】 欲欲、欲界に對する食欲。

【六】 是の如き云云の句、體本は知是云云に作るも、今三本に従ふ。

【七】 日藏分に對照するに、以下に脫文あり。

【八】 善意覺觀、同じ正念智に作る。

【九】 煖法、見道に對する四加行位の第一位。既に總別の念處を経て、専ら四諦の十六行相を觀する位なり。之が爲に將に見道の無漏智が發せんとして、先づ相似の解を生ずること、火の發せんとして先づ煖相あるが如きなり。

【一〇】 頂法、煖法の後念に生ずる善根を頂法といふ。具に四諦を觀じ、十六行相を修する位。進んで次の忍位にも入り、退いて煖位等による頂點にあれば頂位といふ。又退位中の最高處なれば頂位と名くともいふ。

見の因縁有り、聞の因縁有り、念の因縁有り、觸の因縁有り、是の四縁に因り、諸の衆生をして、一切諸善の根本を遠離し、生死の中に於て、大苦惱を受けしむ。

「憍陳如、云何が名けて觸欲の解脫を爲すとならば、若し比丘有り、能く白骨を觀じて、是の思惟を作さん」色は即ち是れ四大の所造、四大の所造は即ち是れ常性無く、堅牢なること無く、離散の法は皮毛肉血なり。智者云何ぞ、是の身中に於て淨好の相を生ぜん」と。是の觀を作し已らんに、悉く一切十方の淨色に於て、即時に不可樂の相を獲得せん。是の比丘復是の念を作さん「我れ是の相に於て、樂うて修集せば、則ち一切の煩惱・生老病死を斷除するを得ん」と。是を舍摩他と名く。若し足骨乃至頭骨を觀すれば、是を毘婆舍那と名く。既に是の如き毘婆舍那・舍摩他を觀じ已れば、息の出入を觀じ、息の出を見る時、即ち是の念を作さん「是の如き風は、何處より來り、何處に去するや」と。是の如く觀する時、身相を遠離し、空相を生じて内法を見ざる、是を内空と名く。我が所及び外の色相を見ざる、是を外空と名け、内外色の空を觀じて、復是の念を作さん「我れ今入息の相を修集し已りて大利益を作し、能く一切内外の諸色を壞す。我れ是の如き内外の色相を壞するは、皆是れ入息觀の因縁なり。是の因縁を以て、我をして内外の諸色を見ざらしむ。我れ色相無きは即ち是れ空力なり、我れ今定んで一切諸法の、去處有ること無く、來處有ること無きを知る」と。是の觀を作し已るに、有らゆる覺觀は、一切永く斷ぜん。復是の識を觀すらく、「是れ一切の覺觀の因縁なるを知らば、我れ當に心意識の行を遠離すべし。何を以ての故にとならば、若し生有らん者は、當に知るべし、定んで滅せん」と。是の觀を作す時、須陀洹果乃至阿羅漢果を得ん。若し覺觀は是れ滅相なりと觀すれば、即ち滅定を得。是を不共凡夫如空陀羅尼と名く。是の持は無量の功徳を成就し、永く無量の諸大苦惱を斷ず」と。是の法を説きたまへる時、九萬二千の衆生は、須陀洹果を得、六萬の衆生は阿羅漢果を得、九萬九千の衆生は、如空陀羅尼を得、八萬の衆生は辟支

卷の第三十二

日密分中分別品 第四の二

爾の時、阿若憍陳如、佛に白して言はく、「世尊、云何が名けて蓮華陀羅尼とは爲す。日密菩薩の宣説する所の如く、智者にして受持・讀誦・書寫すれば大利益を得て、三界を樂はず、無相解脫門を得ん者、皆能く諸の煩惱を斷じ、七返常に、人天の身を受け、欲界に在りと雖も、欲の爲に汚されず、諸天世人に、常に敬恭せらる」と。

佛の言はく「憍陳如、問ふ所の蓮華陀羅尼とは、聲聞緣覺の知る所に非ず、是の陀羅尼は、乃ち是れ十八不共法の行なり。憍陳如、假使我れ無量劫中に於て、是の持を宣説せんも、終に盡すべからず。亦聞く者をして、迷悶の心を生ぜしめん。是の陀羅尼は、唯佛のみ能く説き、唯佛のみ能く聽くなり。何を以ての故にとらば、是の陀羅尼は、知り難く解し難し。餘の三も亦爾なり」と。

「世尊、唯願はくは、如來當に空の如き、空行陀羅尼を説きたまふべし」と。「憍陳如、至心に諦に聽け、當に汝の爲に説くべし。憍陳如、若し衆生有り、放逸の因縁より、觸欲の心を生ぜんに、是の人、解脫の處を知らず、生死に流轉し、無量の世中、三惡道に在つて、大苦惱を受けん。菩薩摩訶薩、諸衆生の、是の如き等の無量の苦惱を交くるを見て、憐愍の心を生じ、勤行して息まず、遍く諸道を修し、是の行を作し已つて、阿耨多羅三藐三菩提を得、菩提を得已つて、苦の解脫を説く。衆生聞き已つて、即ち苦を脱することを得。苦の解脫とは、即ち是れ初果乃至阿羅漢果なり。憍陳如、云何が觸欲なる。觸欲と言ふは、一身共に合するなり。身の合に因るが故に、則ち觸を生じ、觸に因つて樂を生じ、樂に因つて苦を生ず。苦の因縁の故に、生死の苦惱、是より生ず。憍陳如、四毒蛇の如きは、四の因縁を以て、能く衆生を害す、見と、瞋と、觸となり。欲も亦是の如く、

【一】 卷第三十八、(日藏分定品第四)のついで。

【二】 南方山王如來所説の陀羅尼(卷第三十一、二九四頁)

【三】 瞋は、はくなり、瞋はかむなり。

「若し識處は即ち是れ覺觀、癡・疣・煩惱のごとくなるを觀じ、「我れ空處・識處を遠離したるが如く、無想處を修せん」と、是の人、無想を修し已つて、無想定を得る、是を共凡夫人如實陀羅尼と名く。

「若し識處を觀じて、即ち是れ癡疣・苦惱の法なりとし、「我れ識の相を觀することを遠離したるが如く、次に無想の相を觀ぜん。無想と言ふは、即ち是れ我無く我所の相無きなり」と。是の觀を作し已り、即ち須陀洹果乃至阿羅漢果を得る、是を不共凡夫人如實陀羅尼と名く。

「若し能く無想處を觀する者有らば、即ち是れ細想なり、「我れ是の無想處を遠離したるが如く、非有相非無想處を觀ぜん」と、是を共凡夫人如實陀羅尼と名く。

「若し非想非非想處は、即ち是れ大苦なり、是の處は斷すべく解脱するを得べしと觀せんに是の觀を作す時、須陀洹果乃至阿羅漢果を得、永く一切の欲食・色貪を斷じ、凡夫の名を離れて、聖人の號を得、永く一切三惡道の因を斷ずる、是を如實陀羅尼と名くなり。

「是れ彼の諸佛の遣し來れる所、日密菩薩の齋持せる所なり。能く一切の諸法煩惱、一切の惡見・我見・取見・戒見・常見・斷見・命見・作見・士夫見・受見・色見・觸見・出見・四大見を斷ぜんと欲すれば、能く是の如き等の見を斷ず。是の陀羅尼は善能く陰・入・界等を了達し、能く諸見を淨め、能く受くる者をして、永く安樂を受け、衆魔を沮壞し、惡龍を調伏し、諸の天をして喜ばしめ、阿修羅を壞し、迦樓羅を調し、能く刹利・婆羅門・毘舍・首陀を喜ばし、能く惡欲を斷じ、坐禪する者をして、寂靜を食樂せしめ、能く一切の諸惡重病を療し、能く一切の諸惡鬪訟を防ぎ、能く法界を増し、能く三寶を護り、能く盡智無生智を得て、無明の聚を壞せん」と。

如來是の陀羅尼を説きたまへる時、無量の衆生は須陀洹果を得、無量の衆生は阿羅漢果を得、無量の衆生は是の持を得し、無量の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無量の衆生は無生忍を得たりき。

大方等大集經卷第三十二

【六】 同に、第七解脱門といふ。

【六】 同に第八解脱門と名く。

にして、空の如く無邊なり。我も亦是の如し」と言ふ、是を共凡夫如實陀羅尼と名く。若し能く一切の法中に、我無く我所無きを觀する有つて「空處は、即ち是れ無我、色に我有ること無く、若しは如來を念じ、若しは如來を觀するに、即ち是れ我なり。我れ佛を見已つて、沙門果乃至阿羅漢果を得ん」と言ふ、是を不共凡夫如實陀羅尼と名く。

【若し】淨我を觀すれば、即ち是れ空處、空は即ち我心なり。若し能く永く一切の煩惱を斷ずれば、即ち是れ淨心なり、若し能く八直の正道を修集せば、是を淨心と名く。能く是の如く修すれば、即ち能く須陀洹果乃至阿羅漢果を獲得せん。是を不共凡夫如實陀羅尼と名く。

【復色を觀する有らんに、色相は即ち分別の相なり、分別の相は即ち是れ瞋の相なり、瞋恚の相は即ち是れ生死の相なりと觀じ、「我れ今生死の相を斷ぜんが爲の故に、心相の空なるを觀す」とする、是を兵凡夫如實陀羅尼と名く。

【又復、我を觀するに、即ち是れ寂靜、我れ今亦、未だ覺觀を斷ぜず。若し我れ我を觀するに、虚空の如し、我我は即ち是れ苦、苦の從生する所をば、即ち名けて集と爲す。是の如く、苦と集とは、是れ斷すべきの法なり、是を名けて滅と爲す。苦と集と滅とを觀する、是を名けて道と爲す。須陀洹果乃至阿羅漢を得る、是を名けて不共凡夫如實陀羅尼と名く。

【又復念言すらく、「我れ何を以ての故に、虚空を觀する。虚空は即ち我、我は虚空を遠離する觀者の若し。次に識處を觀するに、虚空觀の如く、識の觀も亦爾り。空の無邊なるが如く、心も亦是の如し」と。是を共凡夫如實陀羅尼とは名く。

【若し能く識は即ち是れ苦なるを觀し、苦の所從を知る、之を名けて集と爲し、苦集の斷すべき、是を名けて滅と爲し、苦・集・滅を觀する、是を名けて道と爲す。須陀洹果乃至阿羅漢果を得る、是を不共凡夫如實陀羅尼と名く。

【五四】日藏分には第三解脫門と名く。

【五五】淨我、我の清淨不濁なるをいふ。

【五六】八直の正道、八聖道を指す。

【五七】第四解脫門と名く。

【五八】我我とは我と我所との謂かり。

【五九】日藏分に、第五解脫門と名く。

【六〇】虚の字、麗本に缺けたり、三本を以て補ふ。

【六一】心は識の謂なるべし。

【六二】苦、麗本若に作るも、元明本に依つて苦となす。

【六三】日藏分に第六解脫門と名く。

て見るが故なり。心は即ち我が身、我は即ち虚空なり、我れ覺觀に因つて無量の佛を見る、我れ覺心を以て佛を見、佛を知るも、心は心を見ず、心は心を知らず。我れ法界の性は、堅牢無く、一切の諸法は、皆覺觀の因縁に従つて生ずと觀ず。是の故に、法性は即ち是れ虚空、虚空の性も亦復是れ空なり、我れ是の心に因つて、青・黃・赤・白・雜色の虚空を見るなり」と。神變を作し已り、見る所、風の如くにして眞實有ること無し。是を則ち名けて、共凡夫人如實陀羅尼と爲す。

「是の人復、是の念を作す、「若し虚空有らんも、即ち是れ取無く、覺觀有ること無く、宣說すべからざること、我が心の、離れて虚空を觀するが如くなり」と。亦心相を觀じて遠離を作さず、一切の作を離れ、發心を作さず。設し發すも尋で滅せん。心の緣滅するを以ての故に、是の心便ち滅して、身口意を淨の、滅定を集修せん。是の人、長夜に心を繋けて定に在り、滅定より起ち、其の壽命を捨てて、涅槃に入らん。是を不共凡夫人如實陀羅尼と名く。

「云何が名けて、共凡夫人如實陀羅尼とは爲すとならば、若し能く是の如き思惟を作す有らん「我れ意に隨つて觀ず、色は即ち是れ見なり、色は即ち是れ我が心なり、我が心即ち色なり、我れ一切の色相を遠離し、虚空の相を觀するが如しと。是の人、爾の時、虚空の相を修せん。是を則ち名けて共凡夫人如實陀羅尼と名く。若し能く是の如き觀を作す有らん「色は即ち是れ虚空なり、我れ是の如き色の因縁を以ての故に、虚空を觀することを得、虚空の性は、無障礙と名け、是れ風の佳處なり。是の如き風は、四大に因つて生ず、我が是の色相も、亦復是の如く、四大に因つて起り、虚空風色などは無差別なり。一切の法性は、性自ら空寂なり。自他の性を觀すること、亦復是の如し。虚空は是れ無生無滅なりと。是の觀を作す時、念を如來に繋け、是の念を作し已つて、虚空の中に無量の佛有るを見、即時に阿那含果を獲得する、是を不共凡夫人如實陀羅尼と名くるなり。『復是の念を作して「虚空と言ふは、即ち是れ我なり、即ち是れ淨我なり、即ち是れ我心なり。我は無色

【五二】日藏分には第一解脫門と名く。

【五三】同に第二解脫門と名く。

は離散し、若しは骨の白きこと貝の如くなる五〇を諦観すべし。當に深く心の、何處に樂住するやを觀すべし。知り已つて即ち取るべし、外色を觀するが如く、自身も亦爾り、若しは青色乃至貝の如の如し。晝の如く夜も亦是の如く、夜の如く晝も亦是の如く、去の如く來も亦是の如く、來の如く去も亦是の如くなり。爾の時若し、外物の樹木・人畜・雜物などを見んに、皆骨想を作す、是の觀を作しじるに、乃至命終まで、貪心を生ぜじ。是の人、現在に能く欲を離るるも、他世には未だ能はず。是の人、若し能く空陀羅尼を修することを獲得せば、即ち能く、骨の離散を作す相、沙・彼塵などの如くなるを觀ぜん。若しは自、若しは他に、色相の一微塵の如きをも見ざらんには、即時に虚空の相を獲得し、一切の色は青琉璃の如くなるを見、見已つて復、虚空の黄色なるを觀ぜん。能く黄色・赤色・白色・雜色・琉璃色なるを觀じ、若しは地・水も亦琉璃の如しと見ん。是の人能く、一切の大地は四指許の如しと觀ぜん。若し動かさんと欲すれば、即ち足指を以て之を躡み、動をして隨意久近ならしめ、乃至大地・樹木・山河も、悉く之が爲に動ぜん。若し諸の水、種種の色を作すと觀ぜんに、或は分陀利華・優鉢羅華・拘物頭華・波頭摩華の如く、一切の水に於て行住坐臥せん。一切の山、種種の色を作し、其の形細軟にして五一兜羅綿の如くなるを觀じ、而も其の中に於て、行住坐臥せん。又自ら身は輕くして漂ふこと風の如しと觀じ、是の觀を作し已らば、能く虚空に遊んで、行住坐臥せん。是の人復、火光三昧に入らんに、身より種種妙色の光明を放たん。又復焰摩迦定に遊入せんに、身上より水を出し、身下より火を出さん。是の如き等の大神變を作し已り、復是の念を作さん、「我れ當に云何がして諸佛を見るを得ん」と。爾の時、其の觀る所の方面に隨ひ、悉く佛を見るを得、多く觀すれば多く見、少く觀すれば少く見ん。見已つて復念すらく、「諸佛世尊は、從來する所無く、去るに所至無し、我が三界は心なり、心は身に因る、我れ覺觀に隨つて、多を欲すれば多を見、少を欲すれば少し。諸佛如來は、是れ我が心なり。何を以ての故にとらば、心に隨つ

【五一】以上の如き觀を作す次第を分つて九相(又は想)とす智度論二十一參照。

【五二】兜羅綿(Ed.), 絮、野蠶繭など譯す。草木花葉の總名ともいひ、野蠶の繭ともいふ。

と。是の觀を作す時、阿那含果を得。是の阿那含は、悉く一切貪欲の心を斷ず。唯九事の、未だ能く除斷ぜざる有り、一に色愛、二に無色愛、三に掉、四に慢、五に無明なり。是の人若し如來の身を見ることを得ば、便ち是の念を作す、「我れ當に數を知るべし」と。是の人爾の時、少を觀じて少を見、多を觀じて多を見ん。復是の念を作す「是の如き諸佛は、何處より來る」と。復是の念を作す「是の如き諸佛は、從來する所無く、去るに所至無し、我が三界は心なり、是の心は身に因る。我れ覺觀に隨ひ、多を欲して多を見、少を欲して少を見る。諸佛如來は、即ち是れ我が心なり。何を以ての故にとならば、心に隨つて見るが故なり。心は即ち我が身にして、我れ即ち虚空なり。我れ覺觀に因つて、無量の佛を見、我れ覺心を以て、佛を見、佛を知るも、心は心を見ず、心を知らず。我れ法界の性、堅牢無きを觀ず、一切の諸法は皆、覺觀の因縁より生ずればなり」と。是の故に一切の有らゆる性と相とは、即ち是れ虚空、虚空の性も亦復是れ空なり。若し初めて菩提心を發す者有らば、當に無量の諸法の因縁を制すべし。是の人若し聲聞を求むる心を發さば、爾の時即ち無相三昧を得、彼の無明をして永く滅せしめ、寂靜ならん。亦復隨順空忍を獲得せん。是の人若し、虚空は是れ空なるを見なば、爾の時即ち、身心の寂靜を得ん。是を則ち名けて空解脱門と爲し、阿羅漢を取らんこと、則ち難からずと爲す。若し復滅定解脱を修行すれば、爲に無量の諸法の因縁を滅せん」と。

是の法を説きたまへる時、九萬九千億の衆生は、修定忍を得、八萬四千の衆生は、修空忍を得、六萬の衆生は、空三昧解脱門を得、二萬の衆生は、悉く現見諸佛三昧を得、八萬四千の衆生は、阿羅漢果を得、無量の衆生は、須陀洹果を得たり。

『復次に憍陳如、若し比丘有り、自ら己身を觀じて不淨の想を作すも、自己の心を調伏する能はざれば、是の人次に應に、死屍の若しは青色に、若しは爛壞し、若しは赤色に、若しは腫張し、若し

【四〇】掉、廢本條に作るも、今三本に従ふ。

【四一】我が三界、日藏分には、三界受三身心、但虛假、といふ。

遠も亦是の如く、此の如く彼も亦是の如し。他の如く白も亦是の如し。是の人若し能く是の心を修集せば、即ち貪愛に於て、疾く解脫を得、是の身は骨筋節の相連り、心は身に隨つて行するを觀ぜん。爾の時、心を繫けて額上の、髮際の如き處に在らしめ、心に樂たうて是の如き相を修集し已らば、身に寂靜を得て惡相を見ず、惡事を見ず、惡緣を見ざらん。是を則ち名けて奢摩他と爲し、心の寂靜と名く。云何ぞ復身の寂靜と名くるとならば、是の人定に入つて入息を減せんに、既に入息無ければ、何ぞ出息有らん。是を則ち名けて身心の寂靜と爲し、身心寂靜なるは、即ち舍摩他の因縁なり。是の人、身の有らゆる骨節の離散を觀すること、沙の風の爲に吹かるが如く、見已つて即ち空・無物の想を生じ、虚空なるを觀する、是を則ち名けて身心の寂靜と爲し、是を舍摩他に因つて、定んで解脫を得とは名くるなり」と。

「世尊、虚空の相とは、是れ有爲の相なりや不たや」と。「憍陳如、是れ有爲の相なり」と。「世尊、虚空若し有爲の相ならんには、是れ自相と爲すや、是れ他相たるや」と。「憍陳如、若し能く一切の法界及び有爲界を觀察する、是を名けて自相と爲す。何を以ての故にとならば、若し能く色の寂靜なるを觀察すれば、即ち佛身を見る。所以は何ん。若し人、骨を觀じて、能く沙の風の爲に吹かるる如くならしめん、是の人、能く色の貪・色の欲を破し、能く深く色の實性を觀察せん。是の人の所見は、皆虚空の如く、十方の諸色も、空なること瑠璃るるの如くなるも、中に於て復無量の諸佛を見、乃至十方も亦復是の如くならん。復如來の三十二相・八十種好を見、十方の世界も、亦復是の如くならん。是の人若し生死の法を悔むを得なば、即ち自ら思惟すらく「我れ當に佛に問ふべし、是の如き虚空は、誰の所作にして、當に云何がして滅すべきを」と。是の念を作し已り「我れ已に問ひ已り、我れ已に知り已る、虚空の性は、作者有ること無し、當に云何が滅すべき。虚空と言ふは、覺有ること無く、物無く數無く、相貌有ること無く、出無く滅無し、一切の諸法も、亦復是の如し」

善女人にして、若しは自ら利し、他を利し、共に利せんと欲すれば、常に當に勤求して、善友に依るべし。憍陳如、若し人能く是の如き、欲性の相を觀察することを作さんには、當に知るべし、是の人、久しからずして、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。

「世尊、云何が善友なる」と。憍陳如、夫れ善友とは、所謂諸佛・菩薩・諸阿羅漢なり。又善友とは、即ち我が身是れなり。何を以ての故にとらば、我れ常に一切衆生を憐愍し、能く諸欲の、有らゆる過患を説く。是の故に大衆、應に我が語を受くべし。我れ所出の語には、終に二有ること無く、言虚妄ならず、兩舌語せず、無義語に非ず、魚惡語に非ず、所言誠實にして、慈語・悲語・安衆生語をたす。我れ今當に諸欲の罪過を説くべし、汝等應當に一心に受持すべし。既に受持し已らば、三惡道を脱し、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。

爾の時、娑婆世界の一切衆生、同聲に發言すらく「世尊、唯願はくは、欲の罪過を宣説したまへ。我等今當に、至心に受持すべし」と。

佛の言はく「諸善男子、四種の欲有り、一に色欲、二に形欲、三に天欲、四に欲欲なり。是を名けて四と爲す。云何が色欲なる。四大は色を造るに、凡夫は我・衆生無きを見ず、顛倒の想を生じて、男女の想・上下の色想の、是の色は愛すべく、是の色は惡むべきを見る。是の顛倒に因り、男女の相を見るが故に、貪欲の未だ生ぜざるをして便ち生じ、生じ已れるを増長せしむ。是の人は是れに因つて、善根及び善知識を遠離し、善く身口意の業を護る能はず。是の故に名けて惡法の聚とは爲す。何を以ての故にとらば、欲の解脱を觀察する能はざるが故なり。是の義を以ての故に、三惡道を増し、地獄・餓鬼・畜生の身を受け、無量の世中に大苦惱を受くるは、皆貪欲に由るなり。貪欲の因縁は、欲をして増長せしむ。若し智有る者、女色を觀察せば、不淨の相を見、皮膚肌肉・筋骨・血脈など、見已つて心に樂うて是の想を修集せん。女身の如く、男身も亦爾り。近の如く、

【四六】色欲、日藏分には色貪に作る。

【四七】身、麗本に無きも三本によつて加ふ。

なり。憍陳如云何が欲愛なるとならば、言ふ所の欲とは、名けて放逸と爲し、放逸の因縁は、則ち貪の觸と爲り、觸の因縁を以て、則ち樂の想を生じ、樂想の因縁は、則ち身心を焦し、身心を焦すが故に、樂うて十惡を行じ、十惡の因縁は、則ち能く三惡道の苦を増長す。若し人身を受けて、貧窮困苦あらんに、貪の因縁の故に、五道に生を受け、羊中に生在して、多く苦惱を受け、是の苦を受くと雖も、心に慚愧無く、悔悵を生ぜず。若し少善に因つて、還つて人身を得んも、愛心増長すれば、愛の増長の故に、身は不淨にして、無量の諸重惡業乃至五逆を造作し、是の因縁を以て、復地獄に於て、大苦惱を受けん。一切の苦を受くるは、皆愛の心に因る。是の故に如來は、愛の解脱の爲に、正法を宣説し、欲法を呵責するなり。若し衆生有つて、是の如く欲を呵責するを聞くを得已り、欲を觀すること、果の如く、大毒樹・毒盆・行脚の如く、刀の如く賊の如く、旃陀羅の如く、熱鐵丸の如く、惡雹雨の如く、惡暴風・毒蛇・怨家・空野の羅刹の如く、刹害人の如く、莢の如く塚の如しと。若し人有り能く是の如き觀を作さんに、是の人所有の、愛と貪と、愛の膩・愛の著・愛の害・愛の熱・愛の憎等の法は、尋で即ち除滅し、滅し已つて法を念じ法を樂ひ、法を學び法を受け法を取り、法を勤求し、財法・藏法・淨法・行法あり、法に歸依せん。是の人は死に臨んで法念を獲得し、法念に因るが故に、尋で十方の諸佛、法要を宣説し、衆生を教化するを聞くことを得、既に法を聞き已つて、心に歡喜を生じ、歡喜を生ずるが故に、諸佛の色身を覩するを得ん。是の人は身を取れば淨國土に生じ、三惡道無く、常に善人と遊止し、共に俱に智慧・捨施・精進を具足し、慈悲を修集し、衆生を調伏して、煩惱の習を斷じ、無量の莊嚴功德を具足すること、譬へば香篋に、以て衣服を盛るに、衣服皆香るも、篋の香の減ぜざるが如くなり。

『憍陳如、若し諸の衆生、善願力の故に、淨國土に生れ、善衆生と共に、同じく事業を共にせんこと亦復是の如く、自ら諸善を増すも、彼の善の、減すること無きが如し。憍陳如、是の故に善男子、

【四四】毒盆、日藏分には如く、
 滿五毒藥一とす
 【四五】行脚、同じ、如く瓶・瓶
 囊一とす。

量の世中に身具足し、亦無上の眞智慧をも得ん。若し能く一たび是の偏持を聞かんに、即ち諸の煩惱を摧滅するを得、一切の人天に供養せられ、無生及び盡智を獲得せん」と。

日密分中 分別品第四

爾の時世尊、四大菩薩に告げて言はく『善男子、汝若し此の世界に住せんとならば、意に隨つて所有の善法を修集せよ』と。時に四菩薩及び其の大衆は、即便各各意に隨つて定に入り、既に定に入り已つて、身より光明を出すこと、猶し一燈の如く、乃至猶し無量の日月の如くなりき。

爾の時、大徳阿若憍陳如、佛の神力を承けて、即ち是の念を作す、「我れ今若し如來に一義を問ひまつらんに、如來は是に因つて、或は當に是の如き四陀羅尼をば、分別廣説したまふべし。如來の説きたまふ時、其の聲必ず、娑婆世界に聞えん。衆生は聞き已りて、疑網の心壊し、向の法中に於て、大光明を得、彼岸に度し、正定聚に到り、惡道に墮せず、一切悉く純善の法を行ぜん」と。是の念を作し已り、即ち座より起ち、敬意もて、默然として、合掌して立てり。爾の時佛、阿若憍陳如に告げたまはく『汝將た大義を問はんと欲せざるや』と。『是の如し、世尊、實に諮啓しまつらんと欲す。惟願はくは聽許したまへ』と。佛の言はく『憍陳如、汝今時なるを知れ、我れ當に一切の疑網を破壊すべし』と。

憍陳如の言はく『佛經中に説きたまふ如くんば、二種有り、所謂愛と 士夫と生死を行くなり。云何が愛と名け、云何が士夫なる。何の故にか如來は、是の二種、生死を行くと説きたまふや』と。佛の言はく『善い哉・善い哉、憍陳如、快く斯の問を發し、能く大に無量の衆生を利益することや。是れ時を知るの間なり、是れ如法の問なり。諦に聽き語に聽け、吾れ當に汝の爲に分別解説すべし。憍陳如、愛に三種有り、所謂欲愛と色・無色の愛となり。復三種有り、所謂有愛と 斷愛と法愛と

【四〇】 以下亦脫落あり。

【四一】 卷第三十八、(日藏分、定品第四)。

【四二】 士夫、日藏分には富伽羅 (Tudgala) に作る。

【四三】 斷愛、日藏分には離有愛となす。

に共に發ちて娑婆界に來至し、悉く自ら其の身を變じて轉輪王と爲し、種種の寶を以て如來を供養し、頭面敬禮、右遶三匝し、却いて一面に坐せり。

日密分中 分別說欲品第三

爾の時、頻婆娑羅王、無量の菩薩、或は梵の像、或は帝釋の像、那羅延の像、轉輪王の像を作せるを見、座より起ちて、敬意合掌し、一面に在つて立つ。爾の時、日密菩薩摩訶薩、即ち佛前に於て、偈を以て讚歎すらく

「諸足の中に於て最も殊勝たり、諸の惡見に大光明を放ち、正道を行する者には法印を施し、惡龍及び四魔を摧滅したまふ。堅法幢を堅て、解脱を施し、大法炬を以て衆の闇を壊し、善友に親近して定を修集し、衆生を愍むが故に福田を説きたまふ。佛・法・僧寶は甚だ得難く、人身及び信心も亦復得難し、人身をば得と雖も、善友は難し、善友を得る者は煩惱を壊す。衆生は闇に行きて結の河に没するを、如來船師は能く拔濟したまふ、四方の諸佛は我を遣して來らしめ、今大會に於て欲を與ふることを説かしむ」と。

日密菩薩、是の偈を説き已り、其の本土地に教誡せられたる如き事をば、皆悉く之を説きつ。
爾の時世尊、舍利弗に告げたまはく「是の陀羅尼は、四方の諸佛所與の欲なり。此の土の衆生を利益せんと欲するが爲なり。舍利弗、汝當に是の陀羅尼を受持讀誦書寫して、四衆の中に於て、廣く分別して説くべし」と。

爾の時、虚空密菩薩摩訶薩、復偈を以て佛を讚ふらく

「如來は眞實に法界を知り、魔衆に正直の道を示したまふ、若し眞實に信心を生ずる者有らば、是れ則ち能く三惡道を破せん。如來に一の香華を供養するも、無量世に無上の樂を受け、無

【三七】 日藏分には續いて、德華藏(本經の德華密)佛と虚空藏(本經の虚空)菩薩との、この陀羅尼に關する問答を掲げて、卷第三十六を終る。

【三三】 卷の第三十七、日藏分菩薩使品第三。

【三九】 以下、日藏分に對照するに、數段の脫落あり。

『善男子、若し人有りて是の陀羅尼を聞かんに、有らゆる煩惱、尋で即ち薄少にして、正定聚に入る。善男子、我れ是の如き無量の方便を以て、衆生を調伏し、六波羅蜜を修集するを得、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得しむ。善男子、是の陀羅尼は、能く衆生の爲に、大利益を作し、能く一切の諸惡重病を斷じ、能く一切妊身の女人及び處胎の者を護り、一切の結を滅し、陰・入・界を知らしめ、四魔所有の境界を摧伏して、能く一切の諸天を歡喜せしめ、諸の惡鬼をして、知足の想を生ぜしめ、能く惡龍をして、心に大に怖畏せしめ、能く一切の惡邪の諸論を壞し、諸の四姓をして心に歡喜を生ぜしめ、能く女人の貪心をして、自ら除かしめ、多聞の者をして、念心堅牢ならしめ、坐禪の人をして、心に善寂を得しめ、能く一切國土の惡相を壞し、三寶の種をして斷絶有ること無からしめ、能く法界をして、增長無減ならしめ、能く佛法をして、廣普流布せしめ、能く一切の無明癡聚を壞し、能く盡智無生智を得しむるなり』と。

爾の時世尊、即ち此の陀羅尼句を説きたまはく、

『摩那叉 阿婆叉 伽羅婆叉 闍維叉 摩摩那叉 又婆叉 摩陀叉 那荼那叉 那荼羅休 比婆那吒 却伽那吒 阿吒那吒 究那吒 波利究婆那吒 那荼那吒 富利迦那吒 遮凡婆羅那吒 却針婆羅那吒 佛迦羅那吒 帝婆留陀邏那吒 三摩羅蛇那吒 尸利拘婆那吒 憍多吒 多荼羅婆 摩留多却婆 提休叉 婆提邏酬 挫摩那酬 婆呵那富置 散提邏闍婆 阿摩摩闍婆 摩休羅 伽闍維 阿涅那 阿涅那邏婆 阿涅那叉 阿婆呵末力伽涅那叉 伊槃都豆跋寫 莎呵』
『畢竟して苦を盡す、是を名けて呪と爲す』。是の呪を説きたまへる時、彼の大衆中の六萬億の人、如法の忍を得、復六萬の人有つて、正定聚に入る。『善男子、我れ今是の淨陀羅尼を以て、彼の佛に欲を與へん。汝當に受持して誦・讀・寫すべし』と。

時に虚空密著菩薩摩訶薩、敬つて佛の教を承け、是の陀羅尼を受持・讀寫し、無量の菩薩と、俱

を樂み、三惡道に於て、心に怖畏を生ぜんを。世尊、何の呪藥か有つて、能く是の事をか辦する」と。時に無量の佛、即時に我に三三淨陀羅尼を施したまへり。是の持力ちぢりを以て、我をして、無量の世中に、無量無數の衆生を調伏せしめ、之に勸めて六波羅蜜を行ぜしむ。我れ無量無數の世中に於て、常に念じ、何處にか是れ妊身の諸女人等の、惡鬼乃至惡藥を防護すべき有らんとし、是の故に我れ往きて先づ三歸を教ふ。三歸を教へ已るに、一切の惡衆及び諸の毒藥など、能く害を加ふる無く、是の兒生れ已るに、常に善心を得、智慧具足して、身體缺くるところ無く、若し遊行せん時は、常に無量の善神の爲に擁護せられ、面貌端正にして、衆生樂見し、樂うて慈悲・布施・持戒・忍辱・精進を修し、寂靜に處在し、樂うて禪定を修し、善知識に近づき、智慧を具足し、諸の苦惱を壊し、一切の天鬼は、樂うて供養を爲し、生死を厭離し、涅槃を甘樂し、若し無上菩提の心を發さんには、即ち阿耨多羅三藐三菩提を得、若し辟支佛心を發さんには、即ち辟支佛道を得、若し聲聞心を發さんには、即ち如實の忍を得たり。是の諸衆生、永く惡趣を離れ、常に善道を行じつ。善男子、我れ是の如き、無量の方便を以て、衆生を調伏するは、阿耨多羅三藐三菩提の爲なり。

〔三三〕若し衆生有り、大重病に遇はんに、師子の皮を取り、呪を以て之を呪し、持つて病者に與ふ。若し其の皮無ければ、若しは肉、若しは骨、若しは肉骨無ければ、若しは糞塗及び屎處の土を取り、若し糞土無ければ、呪を以て索を結び、或は符書を作つて、以て病者に與ふれば、病即ち除愈す。若し樹に華果無ければ、呪せる雨水を以て、持つて澆灌せんに、便ち華果を得。若し亢旱の時、龜心三三を求覓して、五返之を呪して龍泉の中に置かんに、則ち大雨を降す。若し多雨の時、穀麥を壞敗せんに、城邑聚落に、蟒蛇三三の皮を求め、七返之を呪して、龍泉中に置かんに、霖雨即ち止む。若し其の國土に、多く怪異・惡風惡雨・惡星日月有らんに、應に七日の中、白を淨め、服を洗浴し、乳糜を食し、七日の中、是の呪を讀誦せんに、諸の惡異の怪、尋で即ち消滅せん。

〔三三〕淨陀羅尼、日藏分に奢摩毘多悉致婆多羅とす。

〔三四〕大重病、日藏分に重病とす。

〔三五〕龜心を求覓して、日藏分に取三溝漬中諸不淨汁、安二龜甲中、以二呪呪之、以三澆波連樹葉、糞三此龜甲一とす。

〔三六〕蟒は巨大なる蛇なり。日藏分には、取二阿闍迦、罽陀頭中珠一とす。

我が土地に、上味を具足せん」と。彼の佛の世界の、有らゆる菩薩は、大念心有り、精進・持戒・智慧具足すること、猶ほ諸佛の清淨世界の如く、禪定を修集して、成就具足し、若し禪定に入らんに、其の身より光を放つこと、或は一燈の如く、或は百千無量の日月の如くなるが、悉く共に集會して、佛の説法を聽く。若し十方の諸菩薩等有り彼に來至せんには、皆定より起ちて彼の國に往至し、釋迦牟尼如來及び其の大會を觀見し、陀羅尼を聽き、神通に遊戲す。

「善男子、汝若し娑婆世界に往かんと欲せんも、彼の土の衆生は、壽命短促にして、諸の惡病多く、智慧・善根・福德・善行、皆悉く薄少、三惡道に於て怖畏を生ぜず、財物に貪著して、心清淨ならず、多く嫉妬を懷き、慚愧有ること無く、樂うて十惡を行す。是の諸の衆生、或は雜行有り、是の身を捨て已つて、即ち其の國に於て、大惡鬼と作り、乃至惡迦那富單那と作り、惡鬼と作り已つて、地味乃至一切の果・祿・穀米等の味を收取す。若し食する者有らば、身に惡病を得て、勢力有ること無し。是の諸惡鬼、常に衆生の初生長大なるを伺ひて、能く其の命を斷つ。是の故に其の土の衆生短壽なり。

「善男子、我れ本菩提の道を修集するの時、亦常に願を發すらく、「願はくは我れ來世に、常に精進を勤めて不休不息、無量の諸佛を恭敬供養し、正法を聽受し深義を問難せん。我れ當に云何が處胎の者を護り、其の母子、產生して安隱ならしむべき。若しは天龍鬼、若しは雜刹鬼、若しは阿修羅、若しは迦樓羅、若しは緊那羅、若しは摩睺羅伽、若しは拘嚧荼、若しは荔梨多、若しは毘舍遮、若しは富單那、若しは迦多富單那、若しは受多羅、若しは阿衛末羅、若しは一行乃至四行、若しは起死屍鬼など、若しは毒もて道を蠱はし、若しは惡藥もて、若しは身心に觸れんも、是の如き等の事、是の母子の爲に、惡を作す能はず。乃至生れ已り、乳哺飲食長養大時に、惡を作して、其の心をして濁らしむる能はざらんを。乃至夢中にも、亦復是の如く、常に十善を行じ、施を樂み戒

【七〇】 大惡鬼云云、日藏分に、有る生於惡夜又中、迦吒富單那中、乃至阿迦富單那とす。Kam-jitana は極臭鬼、又は叫喚作災怪鬼と譯す。

【七一】 藪、草の實にして核の無きもの。

【七二】 受多羅、日藏分に烏摩羅に作る。

【七三】 阿衛末羅、同に阿跋思摩羅に作る。Aparimita は鬼の名、顛病鬼、形影、轉筋など譯す。

【七四】 一行、同に一日瘡とす。

【七五】 起死屍鬼、吉遮と譯すといふ。

羅婆娑薄 烏阿 阿婆阿 阿蓮婆阿 婆蓮阿婆蓮 婆呼伽豆住尼提羅涅槃希 莎呵

爾の時彼の佛、此の陀羅尼を説き已りたまふに、時に彼の會中に、復無量の菩薩大衆有り、聲を同じくして讃へて言はく『善い哉、善い哉、我等も今日、亦彼に往かんと欲す』と。彼の佛告げて言はく『宜しく是れ時なるを知るべし。汝若し往かんに、一切變身して、那羅延の像を爲せ』と。皆言はく『是の如し、世尊』と。

爾の時光密菩薩と諸の大衆とは、一切化して那羅延の像を爲し、俱に共に發ちて、娑婆界に來至し、既に此に至り已り、虚空の中に於て、細金沙を雨らし、持以て釋迦如來を供養し、既に供養し已つて、空より下り、頭面もて敬禮し、右邊三匝して、却いて一面に坐せり。

爾の時北方に、八萬恒河沙等の諸佛世界を過ぎて、彼に世界有り、普光身と名け、五滄を具足す。是の中に佛有し、德華密如來、應供・正遍知・明行足・善逝・世間界・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號し、今現在に、諸の衆生の爲に、法化を宣説したまふ。彼の大衆中に、一の菩薩有り、虚空密と名く。會に在つて法を聽き、虚空を仰瞻して、諸の菩薩、其の數無量なるが、北方より南方に來趣するを見、即ち佛に白して言はく『世尊、何の因縁の故に、無量の菩薩、北方より來つて南方に趣くや』と。佛の言はく『善男子、南方に八萬恒河沙等の諸佛世界を過ぎて、彼に世界有り、名けて娑婆と曰ひ、五滄を具足す。佛世尊有り、釋迦牟尼と名け、今現に世に在つて、諸の衆生の爲に、妙法を宣説し、三乘を分別して、大法幢を堅て、廣く法聚を説くに、十方の諸佛、悉く彼の國に集まり、諸の菩薩の爲に、寶幢陀羅尼を解説し已り、各各本所住の處に還歸したり。釋迦如來は、故に大衆菩薩聲聞の爲に、法要を宣説したまふに、多く祕密甘露の語有り。若し聽かんと欲すれば、彼の國に往くべし。釋迦如來は、常に大願を發したまふらく、『若し十方の諸菩薩等、來つて我が語を聽く有らんに、即ち十八不共の法を得ん』と。又復願ふて言はく、『我れ成佛し已らば、願はくは

【三】 那羅延(Narayana)天上の力士の名。

【四】 普光身、日藏分に普上香とす。

【五】 德華密、同に德華藏とす。

【六】 虚空密、同に虚空藏とす。

ん。

「善男子、釋迦如來の娑婆世界に、若し衆生有り、禁戒を受持し、三寶を敬信し、妙法を諸啓し、讀誦・書寫せんに、歡喜の心を得ん。是の因縁を以て、即ち三惡道の業を過ぐるを得ん。若しは未來の重惡の罪有らんも、即ち現在に苦を受けて小しく頭痛に遇はん。若しは財物を失し、眷屬離れ壊し、惡名遠く聞え、若しは打罵せられんも、則ち除滅するを得ん。善男子、是の如き神呪は、無量の功徳を成就具足し、能く一切の有らゆる惡業を壊し、能く衆生の爲に、大利益を作し、能く衆生の無量の惡心を流ぎ、大光明を作し、大念心を得、大寂靜を作さん。是の人常に、十方の諸佛・菩薩・聲聞・緣覺・諸天・龍鬼・人王の爲に擁護せられん。是の人死に臨んでは、十方無量の諸佛を見るを得、佛の所説を聞かん。諸佛讚へて言ふ「善い哉・善い哉、善男子、我が淨妙の國土に來生せんことや。我れ能く汝をして、速に十地に住せしむべし」と。是の尋時に歡喜心を生じ、歡喜心の故に、則ち深信を得ん。是の因縁を以て、則ち淨妙の國土に生じ、生れ已つて即ち三十住の正位に階し、阿耨多羅三藐三菩提を得ん。善男子、汝是の如き神呪を受持し、讀誦通利して、娑婆世界に向ひ、先づ往いて釋迦如來を問訊し、然る後に宣説すべし」と。

爾の時世尊、即ち此の陀羅尼を説きたまはく
「却伽波利車陀 竭婆又斯 竭婆哈 邪陀波邏婆伽差 又婆俞岐 波邏提呵哈 舍摩那思迦提
三摩呬伽受徒 阿又蛇那泐 又婆婆祇 尼陀那闍徒 三摩那闍徒 阿陀舍蛇闍徒 比波邏娶闍
徒 斯又闍徒 斯若闍婆闍徒 娑利羅仇呵闍徒 沙羅仇呵闍徒 闍婆那拘施 婆陀那拘薄 思
婆陀那緋 比婆波邏羅泐 優波迦羅摩那緋 阿那婆哆羅哈 波羅提迦邏呬那 婆迦哈施 婆盧
遮那婆呬迦羅哈 迦摩婆施 阿舍却岐 那蛇軍祇 邪陀婆薄 基離那婆薄 留遮婆薄 婆
呬摩迦哈 舍利蛇婆薄 摩伽闍徒 訶利拘那婆 那蛇那目哈 婆羅又拘羅 那蛇那受哈 因陀

【三】善男子云云、日藏分
に在つては、次の呪の後に、こ
の相當文を出す。

【三】十住、十地の謂なるこ
と前に註したるが如し。(卷三
十一、註八參照)。

五有の身口意の惡をば、皆能く淨ならしむるを得ん。善男子、若し人有り、能く是の呪を聽受し、持誦・誦讀し、乃至七日のあひだ至心に忘れざれば、當に知るべし、是の人の一切の惡罪、皆悉く消滅せん。五逆罪と方等經を誘ると、聖人を毀咎すると、四重の禁を犯すとをば除く。是の人は、求むる所乃至菩提をば、意に隨つて即ち得ん。若し檀波羅蜜を修行せんと欲すれば、亦成就するを得、乃至般若波羅蜜も、亦復是の如し。

『善男子、娑婆世界の有らゆる衆生は、因縁有つて、呵責の法を得ること無し。何を以ての故にとならば、十方世界の擯遺すべき所の諸の惡業生は、皆彼の娑婆世界に往生す。是の故に能く、五逆の惡罪を作し、方等經を誘り、聖人を毀咎し、四重の禁を犯せばなり。是の人、是の業の因縁を以ての故に、多く惡道に生れて無量の苦を受け、既に受け已つて、又十善の法を得る能はず。是の因縁を以て、復還娑婆世界に生る。是の人若し本信根乃至慧根を修集したらんには、終に弊惡の國土には生ぜざらんも、是の如き惡法の因縁を以ての故に、惡國に生れ、諸根殘缺して、人身を具せず、念心有ること無く、飲食・衣被・臥具・醫藥、嚴身・資生の須つ所をも得難く、壽命促短にして、安眠を得ず、智慧・善根・福德を具せず、吉事尠少にして慈心有ること無く、樂んで惡業を行じ、樂んで惡見を修し、樂んで邪事を読み、樂んで惡友を信じ、樂んで惡願を發し、諸の病苦多く、惡處務多く、常に熈んで三惡道の法を増長し、邪神に敬事して、性を受くること弊惡、調戲嫉妬し、諸の不善の業を具足・成就し、樂んで三寶を誘り、樂んで三惡道を行するなり。

『是の惡業生も、是の呪を聞き已らば、生死の法に於て悔心を生じ、三惡道を離れ、信根乃至慧根を修集し、亦樂うて六波羅蜜と清淨の梵行とを修行し、壽を増し算を益し、惡病の苦を除き、智慧熾盛、親厚にして損する無く、一切の善法も耗滅有ること無く、十善の法を具足成就し、長く三寶を益し、樂うて法行を修し、諸の衆生をして、是の如き無量の善法を具せしめ

【六】 五逆、また五無間業ともいふ、恩田と福田に違逆する五種の暴惡なる罪なり。

【七】 四重の禁、また四波羅夷(Pratihārya)ともいふ、比丘に對して四戒を犯す罪なり。姦戒、盜戒、殺人戒、大妄語戒の四なり。

【八】 因縁云云、日藏分相當文には、不到三涅槃道とす。

【九】 壽を増し算を益し、日藏分には増し益壽命とす。

【一〇】 親厚云云、同じ資財無損といふ。

又婆 三摩流波脾蛇又婆 合摩迦闍又婆 又蛇邏婆又婆 扇多脾婆邏又婆 那奴那 泥那奴那

阿婆泥那奴那 那蛇波那移那奴那 伊槃都頭吒寫莎呵

爾の時、佛、光密功徳（光密）に告げて言はく『善男子、汝、是の持（ぢ）を持つて彼の世界に至り、先づ起居を聞ひて、然る後之を説け』と。時に諸菩薩、佛に白して言はく、『世尊、我れ已に是の陀羅尼を受持す。我れ往かんと欲すと雖も、然も畏想を生ず。何を以ての故にとならば、曾て佛より聞くに、彼の土の衆生は、惡見成就し、貪・瞋・癡多く、女人の語に隨ひ、能く速に阿鼻獄（あびやく）の業を造作すと』。佛の言はく『善男子、汝は彼の土の諸天下の、二界の中間の二十一日の大金翅鳥——大海の六萬四千萬の諸大龍王を恐怖せしめ、佛法僧寶に歸依して、菩提心を發さしめたる——に非ずや』と。『世尊、實に聖教の如くなり』と。『善男子、國土に 亢早（こうそう）あらば、汝は 象龍・馬龍・金翅鳥龍として、七日中に於て大雨を降注し、諸の惡龍をして恐怖を生ぜしめたるに非ずや』と。『世尊、實に所言之如し』と。『善男子、汝是の如き諸惡龍の中に於て、猶ほ畏を生ぜざるに、何に縁つて、今怖畏を生ずるや』と。

『世尊、譬へば智人の、他處に多く寶藏有りと聞くが如し。是の人即ち往いて、以て之を 抓把（つかひ）し、把り已つて漸く見、心に歡喜を生じ、竟に疲厭無けん。我れ亦是の如くなり。如來に問ひまつるに因つて、是の如き實語を聞くを得、是の語を聞くに因つて、大勢力を得、能く佛印を執つて彼の土を調伏せん』と。佛の言はく『善い哉・善い哉、善男子、我れ當に汝に、大神良呪——能く諸業を淨め、因縁を淨め、調伏を淨め、欲を淨め、增長（あうまう）を淨め、平等を淨め、惡風を淨め、行を淨め、無明を淨め、生死を淨め、一切の煩惱を淨め、一切三界有爲の法を淨め、彼此を淨むる——を施すべし。是を名けて呪と曰ふ。善男子、是の如き 神呪（しんじゆ）をば、彼の國の衆生に聞き已らば、上中下の結（むす）、皆悉く微薄となり、色無色の 有（あ）も、亦復是の如くにして、皆恒河沙等の劫中の諸業を超越し、一切

【八】 是の持、日藏分には無頭順陀羅尼に作る。三一八頁参照。

【九】 二界の中間云云、同に、四天下中、二十一日化作金翅鳥とす。

【一〇】 亢早、大ひでり。象龍等、日藏分に象頭、馬頭大龍王身とす。

【一】 抓、つまむ。

【三】 日藏分には、是の文の代りに陀羅尼を説く。

【四】 神呪、同に、智慧依止授記陀羅尼と名く。

【五】 有、界といふに同じ、次にいふ有も同じく五趣をいふ。

卷の第三十二

日密分中 四方菩薩集品第二の二

爾の時、西方に、四十恒河沙等の諸佛世界を過ぎて佛の世界有り、名けて 堅幢と曰ひ、五滯を具足す。其の土に佛有り、高貴徳王如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上土・調御丈夫・天人師・佛・世尊と名け、今現在して、法要を宣説し衆生を教化したまふ。彼の大衆中に一の菩薩有り、光密功徳と名くるが、虚空を仰瞻して、諸の菩薩、西方より來つて、東方に趣くを見、見已つて佛に白して言はく『世尊、何の因縁の故に、無量の菩薩、西方より來つて、東方に趣くや』と。

佛の言はく『善男子、東方に、此を去ること、四十恒河沙等の世界に、彼に世界有り、名けて娑婆と曰ひ、五滯を具足す。釋迦如來此の因縁を以て、諸の衆生の爲に、妙法を宣説す。名けて大集と曰ひ、三乘を分別す。三寶の性を斷絶せざらん爲の故に、魔界を破せんための故に、法幢を堅てんための故に。一切十方の無量諸佛、悉く彼の國に集まり、咸共に寶幢陀羅尼を宣説し、説き已つて各各本の住處に還れり。釋迦如來は、諸の菩薩及び聲聞衆の爲に、四無礙智、清淨梵行を敷揚宣説す。善男子、汝今頗し彼の世界に詣り、彼の佛を見んと欲するや不や。我れ今亦、彼の佛に欲を與へんと欲す、所謂斷業陀羅尼なり。無願の定に隨ひ、無量の功徳を成就具足し、能く欲貪、色無色の貪、憍慢、我慢、我慢を斷じ、乃至盡智・無生智を得、阿耨多羅三藐三菩提を得ん』と。

爾の時世尊、即ち陀羅尼句を説きたまはく

- 『合那舍婆 摩舍那舍婆 阿婆又舍 又礙舍婆 遮礙舍婆 輪盧多舍婆 其浪那舍婆 視睨婆婆 迦蛇舍婆 摩那舍婆 又婆那陀 遮礙卑利癡比又婆 輪盧多阿婆又婆 其浪那紙紙又婆 親睨婆又婆 迦蛇迦遮摩又婆 摩那烏闍又婆 阿路迦若蛇又婆 頻闍散迦羅摩又婆 安仇遮却伽

【一】 卷第三十六、日藏分陀羅尼品第二の二參照。
 【二】 日藏分には堅固幢とあり。
 【三】 同に智徳大王とす。
 【四】 同に姿徳藏とあり。

【五】 同には單に衆生の爲に三乘の法を説くとするのみ。

【六】 日藏分相當文には、以四無礙智、説三解脱門、清淨梵行と云へり。

【七】 以下同に、彼佛今説、日藏法行壞能壞界、名曰娑品。能破一切衆生惡業。我有三陀羅尼欲、一名無願願、汝可三欲往と。

に往くべし」と。是の時、彼の土に多く無量の菩薩摩訶薩有り、俱に定より起つて、共に佛に白して言はく「世尊、我れも亦娑婆世界に往き、釋迦如來を觀見・禮拜し、大集經典を聽受諳啓せんと欲す」と。佛の言はく「善い哉・善い哉、善男子、往かんと欲すれば意に隨へ、今正に是れ時なり。善男子、汝等は帝釋の像を化作すべし」と。

時に香象菩薩摩訶薩、及び其の大衆は、悉く皆身を變じて帝釋の像を爲し、俱に共に發ちて娑婆世界に來詣し、到り已つて、即ち娑婆世界に於て諸香を雨散す。所謂牛頭梅檀ゴブゼンダム香、堅鞞香ケンニウキウ、多摩羅拔・沈水の諸香、多伽羅香などを、以用て釋迦如來に供養したり。爾の時、香象王菩薩と其の大衆、空より下り、頭面もて佛を禮し、右邊三匝し、却いて一面に坐せり。

大方等大集經卷第三十一

【六】香、麗本句に作る、今元明の二本に依る。
【六二】鞞、麗本腰に作るも、今三本に従ふ。堅鞞は、日密分相當分に龍身牢固香とあり。

に通達して、心に疑闕無く、人天も其の心を沮壞する能はず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得て、人天の爲に供養せられん。

「善男子、是の行を受け已つて、娑婆世界に往かんには、應に怖畏を生ずべからず。善男子、若し淨世界所掩しよんの人、悉く彼の土に在るも——所謂五逆と方等經を謗すると、聖人を毀咎すると、四重の業を犯すと——是の如き人等は、多く汚辱と共にたり。娑婆世界の釋迦如來は、本願の因縁により、彼に於て身を現したり。善男子、若し彼の世界の、有らゆる人間にして、是の行を聞き已らば、七年の中に、慈悲の心を修し、口の四過を離れ、六念を修集せん。是の人は復、當に自を淨めて洗浴し、鮮潔の衣を著け、東方に向つて至心に禮らいを作し、是の如き等の行陀羅尼を誦し、乃至七年に、有らゆる諸惡、皆悉く除滅せん。若し女人有りて、能く是の如くに行ぜば、即ち女身を轉じて、男子の身を得、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ん」と。

爾の時世尊、即ち是の陀羅尼を説きたまはく

- 「含羅那脾蛇 式又脾蛇 密提脾蛇 波羅呵那脾蛇 律提脾蛇 因提利蛇脾蛇 婆羅脾蛇 蒲澄伽脾蛇 三摩提脾蛇 陀羅尼脾蛇 又提脾蛇 長那脾蛇 阿留波脾蛇 阿尼闍脾蛇 末力伽脾蛇 阿若那脾蛇 波羅提散比陀脾蛇 復彌脾蛇 邨陀脾蛇 摩訶吽羅脾蛇 摩訶伽留那脾蛇 卑利癩比脾蛇 薩埵脾蛇 陀摩脾蛇 多摩脾蛇 阿路迦脾蛇 波羅提婆娑脾蛇 波羅提首六迦脾蛇 伽伽那脾蛇 摩留多脾蛇 首若吽脾蛇 波羅提多脾蛇 阿尼蜜多脾蛇 具沙脾蛇 靳遮那蛇 阿比娑娑 阿突那 阿突那 阿婆訶遮遮 遮遮羅比牟 又蛇比牟 阿摩脾蛇比牟 阿三牟陀遮羅比牟 車陀比比牟 阿迦舍比牟 蒲波舍摩比牟 阿那娑娑比牟 阿訶訶比牟 阿羅波邏比牟 郁波舍摩娑利羅比牟 莎呵

爾の時、香象王菩薩、佛に白して言はく「我れ當に 大行陀羅尼を受持讀寫し已つて、娑婆世界

【六〇】大行、日藏分に、無盡根大受記陀羅尼といふ。

能く菩提道を得るの行を施すべし。

『善男子、若し衆生有つて、是等の行を聞かんに、當に知るべし、是の人は能く、恒河沙等の惡業の因縁を破壊し、三障を斷絶するを得べし。惟五逆と一方等經を謗り、聖人を毀訾せんをば除く。

善男子、若し人有り、信心もて是の如き等の行を聽受せんに、是の人は意に隨つて、三乘を獲得し、

十方の諸佛菩薩・阿羅漢等を離れず、常に三業を淨め、衆生の意に隨はん。當に知るべし、是の人は能く、一切乃至瞋目を捨して、一切の諸惡も、害を加ふる能はざるべし。是の人若し尸波羅蜜を行

ぜんに、忍戒・聖所樂の戒、聖所念の戒、大寂靜の戒、梵・釋・四天王を調伏するの戒、婆羅門・刹利・

毘舍・首陀を調伏するの戒を具するを得ん。是の人は終に、自ら己身を讚して他身を毀訾せず、心に

常に世中の利養を呵責し、臥するに安く、悟るに安く、身に病苦無く、飲食を得易く、一切衆生の

樂見する所たらん。是の人死に臨まば、則ち諸佛菩薩を親見するを得、諸佛讚へて言はん「善い哉・

善い哉、善男子、善く禁戒を持し、精進して懈る無かりき。當に我が國に生るべし。我れ能く汝を

して五九 十住の位に住せしむべし」と。已に佛を見已り、心に歡喜を生ぜん。是の因縁を以て、捨身

するに則ち淨國に往生するを得、位階十住にあり、乃至は阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

『是の人、若し毘梨耶波羅蜜を行ぜんに、大力を成就し、身心に病無く、健かに布施戒波羅蜜を行

じ、人・天・阿修羅等、悉く來つて、是の人を供養禮拜し、乃至は阿耨多羅三藐三菩提を得ん。是の

人、若し屬提波羅蜜を行ぜん時は、法縁の忍を得、一切の衆生を覺せず。見ざらん。是の人、若し一

切衆生の爲に割刺せられんに、終に一念の惡心をも生ぜず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得、常に人・

天の爲に供養せられん。是の人若し禮波羅蜜を行ぜんに、法縁の禪定・解脫を得て、十方の諸佛、時

として念ぜざる無く、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得、常に人・天の爲に供養せられん。是の人、般若

波羅蜜を行する時は、常に諸佛菩薩の爲に護られ、寂靜を樂うて心界を調伏し、了了に一切の法界

【五二】この二句、日藏分には、恒河業障、衆生障、法障、煩惱障に作る。

【五三】三障、一に煩惱障、貪等の三毒の惑。二に業障、五逆十惡の業。三に報障、地獄等の苦報。

【五四】方等、方は方正、等は平等。中道の理は方正にして、衆生と佛と平等なるをいふ。此の義によれば一切の大乗經の通名なり。

【五五】忍戒以下、日藏分に依れば、常勤精進、住忍辱中、得歡喜心得隨順心、隣惡衆生……亦如己身、當爲一切聖人之所讚歎云云といふ。

【五六】十住、日藏分によれば十地の異名なり。菩薩の階次五十二位中、第四一——第五〇の位なり。

爾の時世尊、即ち此の陀羅尼句を説きたまふらく

『豆菴提 豆菴提 奥又豆菴提 波羅婆娑豆菴提 薩婆阿迦舍豆摩 阿耨吠伽 罽呬多吠伽阿

罽吠伽 阿婆羅阿却伽 阿那若却伽 罽也佛提却伽 婆路遮却伽 式喻却伽 比提彌邏却伽

烏摩摩却伽 烏羅却伽 阿又却伽 蛇婆摩那却伽 濕波却伽 蛇婆比若那却伽 遮嚴陀兜却伽

蛇婆摩那比若那陀兜却伽 折挫利密兜波那却伽 蛇婆阿脾陀尼迦却伽 豆吠却伽 蛇婆末力却

伽 比婆婆那 阿比又婆 阿婆那那 比那那 婆牟陀那那 薩婆迦邏那那 薩婆散呖那比具波那

那 阿翼之那那 又婆 又婆 伊利 蜜利 伊伊利 伊伊蘭彌利 莎呵

爾の時世尊、香象王菩薩に告げて言はく『善男子、是を五三隨空三昧陀羅尼と名け、永く一切の欲

貪・色貪及び無色貪を斷じ、乃至一切煩惱を斷除す。善男子、汝當に一心に是の陀羅尼を受持讀誦し

て、彼の世界に往き、衆生を教化すべし』と。香象王菩薩の言はく『世尊、我れ已に至心には是の持

を受誦して、今彼に往かんと欲するも、然も畏を生ず。何を以ての故にとならば、我れ曾て佛よ

り彼の世界の衆生は、弊惡にして貪瞋癡の多きを聞きたればなり』と。時に山王佛、香象王に告

げて言はく『善男子、汝は常に婆羅門の像を化作して衆生を教化し、或は摩醯首羅の像、或は帝釋

の像、或は彌羅延の像、或は鬼の像、天龍の像、阿修羅の像、轉輪王の像、婆羅門・刹利・毘舍・首陀

の像、大臣・長者の像、聲聞の像、男女等の像もて、衆生を教化するに、云何ぞ方に、彼の世界に

於て怖畏を生ずと言ふや。善男子、我れ當に汝に、大法・行法の一切の智慧、能く諸行を知つて四處

を破するの行、能く一切の衆生 調するの行、能く一切の衆生を喜ばしむる行、三寶を斷ぜざるの

行、能く一切の惡業を調するの行、能く一切衆生の惡業を壊するの行、大慈大悲の行、三惡道を破

するの行、衆生を救ふの行、惡見を破するの行、能く女業を壊するの行、一切法無盡の行、能く一

切の擧會を破するの行、能く一切の三昧・禪通を得るの行、能く衆生を、歡喜せしむるの行、乃至

【五三】香象王、日藏分には單に香象に作る。

【五四】隨空、同に順空陀羅尼と名く。卷三三、三一六頁參照。

人、八萬四千、是の持を聞き已り、尋て女身を轉じて男子の形を得たり。

時に佛、摩娑の華鬘を以て、日密に告げて言はく「善男子、汝此の鬘并に陀羅尼を持し、娑婆世界に往き、彼の佛釋迦牟尼を供養せよ」と。爾の時日密、彼の如來より、默然として受けぬ。時に會中の八萬の菩薩、俱に佛に白して言はく「世尊、我等も亦彼の世界に往かんと欲す」と。佛の言はく「善男子、善い哉、善い哉、汝等若し往かんに、一切當に梵天の像を現すべし」と。

爾の時大衆、即便化して梵天の身と爲り、娑婆世界なる釋迦如來の所に往き、到り已つて、即ち此の娑婆世界に於て、瞻婆華を雨らし、頭面もて釋迦如來を敬禮して、右邊三匝し、即ち一面坐せり。時に佛、故に頻婆娑羅王の爲に、法行を宣説したまふ。

爾の時南方に、一由旬滿城沙數の諸佛世界を過ぎて、一の世界有り、袈裟幢と名く。其の中の衆生、五淨を具足す。其の土に佛有り、山王如來・應供・正遍知・明・行・足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と名け、今現在して諸衆生の爲に、法要を宣説したまふ。彼の佛世界に、一菩薩有つて香象王と名く。虚空を瞻仰して、無量の菩薩、南方より北方に趣向するを見、見已つて佛に白して言はく「世尊、是の如き菩薩摩訶薩などは、何の因縁の故に、南方より來つて北方に趣くや」と。佛の言はく「善男子、北方に一由旬、滿城沙數の世界を過ぎて、國有り、娑婆と名け、釋迦如來、中に在つて、大集の妙典を宣説し、三乘を分別し、三寶の種を斷絶せざらん爲の故に、法行を斷ぜず、魔界を破せんための故に、法幢を堅つ。故に一切十方の諸佛世尊は、悉く彼の土に於て寶幢陀羅尼を宣説敷演し、説き已つて各各本の住處に還る。釋迦牟尼は、諸の菩薩及び聲聞の爲に、法要を宣説す。善男子、汝等頗し彼の世界に詣り、法を聽受せんと欲するありや不や。我れ今亦彼の佛に欲を與へんと欲す。所謂業を斷ずる陀羅尼門、隨順空門なり、色貪・憍慢・我慢、我慢を斷じ、乃至靈智・無生智を得んが爲の故なり」と。

【四】瞻婆は瞻波迦(Ondra)の略、樹の名、金色花樹と譯す。其の花香氣あり、遠く薫す。

【五】華鬘、梵に Krutuma-
dāra 花を多く貫き結び、首又は身を飾るに用よ。

【五】山王、日藏分に、山帝釋王とあり。

【五】滿城沙數、麗本は單に城沙に作るも、今三本に作る。數の不可計なるを意味す。

集せん。若し人有り、能く王・刹利・婆羅門・毘舍・首陀【七】衆の中に於て、是の陀羅尼を宣説せんに、聞く者尋で、出家の心を發さん。若し女人有り、能く至心には是の陀羅尼を聽きて受持讀誦せんに、即ち女身を轉じて男子の身を得、阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉有ること無く、乃至大般涅槃を證得し、終に更に女人の身を受けざらん、自ら發願せんをば除く。善男子、若し人有り、是の總持を以て、餘の藥草を呪し、持つて鼓貝に塗り、若しは打ち若しは吹かんに、若し聞く者有らば、邪見蠱道【八】の諸の弊惡の病も、能く之に加ふる無けん。善男子、是の陀羅尼は、是の如き無量の福德を成就す」と。

爾の時世尊、即ち是の陀羅尼を説きたまはく、

『黒陀摩提 比路迦摩提 伊梨翅低利菴 流遮修流遮 佛提比佛提 摩阿佛提 溫摩提溫摩多波羅提 菴陀摩 羅伽婆羅迦陀羅波利提徒陀摩 頻豆頻豆摩提 至吒至吒波羅提徒陀摩迦翅戰陀豆 呵呵至置 呵多尼咩 呵多迦摩比岐 比摩多佛題 呵多蛇其攝 呵多比三摩其攝 呵多三牟陀闍脾 呵多比摩多邏祇 呵多希隨 呵多遮知 呵多達波羅闍 呵多婆休羅闍 呵多婆闍摩提 呵多留伽摩提 呵多烏伽賴咩 呵多陀摩密提 呵多薩婆優波陀那 若若若 比闍若若 比婆闍若若 婆邏末力伽若若 伊沙安兜邏伽豆唎 莎呵』

爾の時世尊、日密菩薩に告げて言はく『善男子、是の蓮華持は、能く四流を斷ず、汝當に至心には是の持を受持して、彼の世界に向へ。何を以ての故にとならば、彼の佛世界には、百億の魔衆有り、能く衆生の有らゆる善法【九】を壞す。善男子、汝等若し是の陀羅尼を誦すれば、則ち彼の惡魔の爲に侵されず」と。

爾の時日密、無量億の諸菩薩と俱なりき。無數の天人、佛に白して言はく『世尊、如來の智慧は不可思議なり、我等昔よりこのかた、未だ曾て是の陀羅尼を聞かず』と。爾の時、彼の佛世界の女

【七】衆、屬本は耳に作るも、今三本に依る。

【八】日藏分には、日眼菴華陀羅尼に作る。

請は即ち我が身なり。世尊、我れ彼の土に於て、白衣の像を現じ、諸の衆生の爲に、法要を宣説し、或る時は婆羅門の像を現し、或は刹利の像、或は毘舍の像、或は首陀の像、自在天の像、或は帝釋の像、或は梵天の像、或は龍王の像、或は阿修羅王の像、迦樓羅王の像、緊那羅王の像、辟支佛の像、聲聞の像、長者の像、女人の像、童男の像、童女の像、畜生の像、餓鬼の像、地獄の像「などを現じたり。」衆生を調せん爲の故に」と。

是の時衆中に、諸の菩薩有りて、其の數八萬、同一の三昧に出入すること、共に俱なりき。復無量無邊の菩薩有り、其の心掉動するも、至心に念を繋げ、釋迦如來及び諸の大衆に、親近して親しく見ることを得んと欲し、并に微妙の大典を聽かんと欲したり。是の如き大衆は、皆共に心を同じくして、彼の界に往かんと欲したり。「我れ是の輩の爲に、大事を説かんと欲す。何を以ての故にとらば、是等の大衆は其の心未だ定まらず、若し彼の界に往くも、或は顛倒を生じて惡知識に近づくかん」と。

爾の時彼の佛、日密に告げて言はく「善男子、汝今應に怖畏の想を生ずべからず。何を以ての故にとらば、我れ今當に、汝等菩薩に、不共法の行、無想の行、調伏の行、解脫の行、生死を分別する行、三寶を斷ぜざる行、大慈大悲の行、一切智解脫の行、四魔・惡邪論を破壞するの行、盡智・無生智の行、畢竟入涅槃の行を施すべし。是を蓮華陀羅尼と名け、諸の菩薩をして三界を樂まず、無相解脫の門を證し、無行解脫の門に入らしめん。善男子、若し信する者有り、能く至心に是の蓮華持を聽かんに、是の人能く、一切の貪欲、一切の煩惱を薄くし、身を捨して七世のあひだ、常に天に生れて宿命を識知するを得、欲界に處りと雖も、欲の爲に汚されず、常に出家を樂ひ、一切の人・天は、樂んで供養を與へん。善男子、若し人有り、能く至心なること七日、及び是の持を聽かんに、終に三惡中に墮墜せず。善男子、若し人・天有り、是の持を聽かんに、欲法を遠離して禪定を修

彼の四衆に向ひ、具足して宣説せよ」と。

爾の時世尊、即ち是の陀羅尼を説きたまはく

一 婆移婆蛇波利婆哈 婆醴婆阿波利婆哈 卑利癡比卑利癡波利婆哈 阿脾阿婆波利婆哈 祇祇祇

闍波利婆哈 摩哈摩羅波利婆哈 吠岐却伽波婆哈 阿路超阿路迦波利婆哈 哆呼哆 摩波利婆

哈 思哈思羅波利婆哈 伽呼伽摩波利婆哈 阿步婆阿步婆波利婆哈 羅摩 羅摩 羅摩 羅摩

羅摩 邏羅 邏羅 邏羅 摩比挫若那 復多其醴復多其力摩波利婆哈 遮麗其力醴遮麗其力

摩波利婆哈 輸路多其力醴輸路多其力摩波利婆哈 其浪那其力醴其浪那其力摩波利婆哈 時睨

其力醴時其浪摩波利婆哈 迦蛇其力醴迦蛇其力摩波利婆哈 摩那其力醴摩那其力摩波利婆哈

摩陀其力醴摩陀其力摩波利婆哈 脾陀那其力醴脾陀那其力摩波利婆哈 窆囊其力醴窆囊其力摩

波利婆哈 優波陀其力醴優波陀其力摩波利婆哈 婆婆其力醴婆婆其力摩波利婆哈 闍提其力醴

闍提其力摩波利婆哈 闍邏摩那羅其力醴闍邏摩那羅其力摩波利婆哈 吠薩薩多波其力醴吠薩薩

多波其力摩波利婆哈 阿邏波邏麗其力醴阿邏波邏麗其力摩波利婆哈 阿拔多 比跋多寫阿

婆邏牟波摩薩寫比伽 比尼跋多 阿陀利也賴呼 散比伽扇提 莎呵

爾の時、日密菩薩摩訶薩、佛に白して言はく、「世尊、我能く彼に向ひ、是の呪を宣説せん。但

彼の土に於て、怖畏の想を生ず。何を以ての故にとらば、如來は向に、我が爲に宣説したまふら

く「彼の土の衆生は、諸の弊惡多し、猶ほ生鬻・生盲・生啞の如く、女人の意に隨ふ」と。世尊、若

し女人の意に隨順する者有らば、當に知るべし、是の人は永く善根を斷ずればなり」と。佛の言は

く「善男子、汝今現利・後利の爲にあらず、當に一切の衆生を饒益せんが爲なるべし。但往いて宣説

し、疑慮を生ずる勿るべし。善男子、汝は彼の土の 維摩詰たらすや。何の故に怖畏を生ずる」と。

日密菩薩、默然として答へず、「善男子、何の故にが默然する」と。日密の言はく「世尊、彼の維摩

【釋】 同に日行藏菩薩とす。維摩、梵に毘摩羅結(Vimalakīrti)淨名、無垢稱など譯す。佛時代に於ける毘耶離(Varanasi)城の居士なり。維摩經の説に依れば毘耶離城に在つて、布施等の六度を買行し、身は俗に在る一居十なるも、其の修養に至つては、佛弟子も遠く及ばず。維摩嘗て病む。佛は舍利弗以下の弟子に、順次、彼を訪ひて法を説かしてめんとせられたるも、皆辭して受けず、遂に佛自ら往いて維摩と問答せらる。その所説たるや、般若系統の空思想にして、大乘の興起が保守派に反抗して起れる自由思想に眞ぶ所多きを示すものともいふべし。維摩經參照。

ち、一燈炬〔乃〕至億 日光の如くなり。善男子、若し法を護らんと欲すれば、定より起つて、娑婆世界に詣るべし。善男子、彼の佛世界の有らゆる衆生は、煩惱堅牢にして、繫縛深重、其の形醜穢にして、多く憍慢を起し、惡口兩舌もて實語を遠離し、其の實は愚癡なるも、智慧の相を現はし、多く慳貪を起すも捨離の相を現じ、多く詭曲有るも質直の相を現じ、心に濁亂多きも清淨の相を現じ、多く嫉妬有るも柔軟の相を現じ、楽しんで別人より離るるも和合の相を現じ、多く邪見を起すも正見の相を現す。彼の國の衆人は、女人の語に隨ひ、語に隨ふを以ての故に、善根を斷絶して三惡道を増す。善男子、汝今頗し能く我が爲に使を作して彼の國に至るや不や。我れ欲を與へて、彼の如來をして、善く法要を説かしめんと欲す。言ふ所の欲とは、謂はく眞陀羅尼なり。是の陀羅尼は無量の功德を成就具足し、能く欲貪、色、無色の貪、憍慢・我慢・一切の取貪、一切の五蓋、一切の我見と斷見、戒取・見取・邪見と常見、衆生見・士夫見・作者見・受者見・人見・天見、色見・聲見・香見・味見・觸見、四大の見、出見・生見、滅見・住見などを斷ず。是を隨如眞忍と名く。是の陀羅尼は、能く眞實に、色乃至識、眼乃至意、陰入界の諸入、解脱の法界、無上の妙樂を知る。善男子、彼の界の衆生は、生鬻・生盲・生啞の如く、貪欲に犯醉したり。是の故に欲を與へ、隨如眞實陀羅尼一切法藏不可思議諸法の門もて、能く一切諸魔の伴黨及び魔の境界を壞せん。善男子、是の陀羅尼は、亦能く一切の魔衆を調伏し、能く一切の諸惡毒龍を怖れしめ、能く惡鬼をして知足の想を生ぜしめ、能く一切の阿修羅衆を化し、能く一切の大金翅鳥を調し、緊那羅を怖れしめ、諸の 刹利・婆羅門・毘舍・首陀をして、敬信を生ぜしめ、能く一切の、女身に貪する者を壞し、多聞の者をして愛樂の心を生ぜしめ、刹禪の人をして心に寂靜を得、善く一切の諸惡重病を療し、能く一切國土の惡想を除く——所謂惡賊・惡鳥・惡獸・惡風・惡雨・惡寒・惡熱などなり。善男子、若し人有つて、能く是の如き陀羅尼を誦せんに、則ち能く無量の諸佛を見ることを得ん。善男子、汝是の呪を持つて彼の國土に至り、

【四一】この陀羅尼、日藏分は日藏法行壞龍堽界烟品盡一切衆生惡業陀羅尼といふ。

【四二】戒取見取邪見、邪見は因果の道理を擧無して、惡も恐るるに足らず、善も好むに足らずとする謬見。見取見は劣りたる知見を始とし、其の他種々の知見を取りて、これ最勝殊妙なりと思ふもの。戒(禁)取見は、見取見より、遂に非理非過の戒禁を始として、其の他種々の行法を取つて、之を生天の因、又は涅槃の道とすもの。

【四三】日藏分には此四諦順忍一切法常住藏不可思議法門といふ。

【四四】刹利の上に屬本は羅刹の二字を加ふ、今三本によりて略す。

人を護るも、無量の諸惡比丘を護らざらん、是の王は身を捨てて淨佛土に生じ、常に三寶に値ひ、久しからずして、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。大王、我れ今一人にして、人の不淨物を受畜するを聽さず、惟大衆の、受畜して用ふるを聽す。大王、若し人有り、能く法を護持すれば、當に知るべし、是の人は乃ち是れ十方の諸佛世尊の大檀越にして、大法を護持す。大王、僧物は掌り難し。我れ今惟二人の、掌護するを聽す——一は羅漢比丘の、八解脫を具するもの、二は須陀洹の人なり。大王、是の二人を除いて、更に人の、僧物を掌護するもの有ること無し」と。

日密分中 四方菩薩集品 第二之一

三六

一

爾の時世尊、頻婆娑羅王の爲に是の法を説き已りたまふに、東方に國有り、名けて 無量と曰ふ。彼の中に佛有つて、五功德と名け、常に妙法を説いて衆生を教化す。一菩薩有り、名けて 日密と曰へるが、至心に法を聽き、虚空を仰瞻して、無量無邊の菩薩有り、東方より來つて西方に趣向する有るを見、即ち佛に白して言はく「世尊、我れ東方無量の菩薩、西方に趣向するを見る。何の因縁を以て、淨妙の國を捨てて穢土に趣向するや」と。「善男子、西方に此の無量無邊恒河沙等の諸佛世界を過ぎて、彼に世界有り、名けて娑婆と曰ひ、五淨具足し、弊惡の衆生、其の土に充滿し、釋迦如來、中に於て三乘の法を宣説す。佛の正法を増長せんと欲するが爲の故なり、三寶の種を斷絶せざらんが爲の故なり、魔界の堅法幢を破せん爲の故なり、法の久住して滅盡せざらん爲の故なり。彼の佛の世界に、無量の佛、無量の菩薩有りて、寶髻陀羅尼の法を宣説し、既に法を説き已りて、釋迦如來は復、三乘・四無礙智・四種梵行及び四攝の法を説くに、無量の衆生、是の法を説く時、心に疲厭無し。甘露を樂うが故に、彼の如來の本願力を以ての故に。四方の無量の諸佛・菩薩、悉く其の土に集まる。佛説法の時、諸の菩薩衆は、悉く禪定に入り、既に定に入り已つて、身より光明を放

【三】 檀越、Dānātthi 施主をいふ。越は施の功德をなして、己が貧窮の海を越ゆる義なり。

【三】 僧物、衆僧の共有物件。

【三】 卷第三十五、日藏分陀羅尼品、第二の一参照。

【三】 無量、日藏分には無盡徳といへり。

【三】 五功德、同に勝波迦華色王如來とあり。

【三】 日密、同に日行藏とあり。

【四】 寶髻、同に寶髻陀羅尼といふ。(卷二五、二六、參照)

陀羅と爲す。是の如き比丘は、應に共に住すべからず、共に和合すべからず、應に九十九羯磨を作すべからず。是をば比丘の事業を喪失して、貪處に墮在すと名く。大王、寧ろ旃陀羅人と共に同止せんも、是の如き惡比丘と住せざれ。何を以ての故に。是の如き比丘は、善根を燒滅し、三世の善・慈愍の心を斷ずればなり。是の惡比丘は、即ち是れ圍圓にして、生死の法を増さん。即ち是れ人天の諸惡種子なり。何を以ての故に。是の人は自他・人天を欺誑すればなり。是の如き比丘は、解脫の燈を滅し、能く法幢を摧き、能く法海を涸らし、説法の者を破し、能く施王を誑き、和合僧を破す。若しは惡王有り、若しは刹利・婆羅門・毘舍・首陀など、是の如き諸の惡比丘を擁護せんに、是の王は便ち當に三惡道の業を増し、天・人に惡種子を殖す。大王、若し惡比丘にして、如法に住する者を呵罵責・數せんに、敬信の諸王は、應當に擯驅すべし。若し擯驅せば、王は多く福を得ん。若し王にして信無ければ、如法の比丘も、應に彼の惡比丘と住すべからず。如法の比丘の、智慧有る者、應に先づ王の所に往き、是の如き言を作すべし「大王、今能く法を持するや不や」と。王若し答へて「大德、我れ能く如法に佛法を護持す」と言はば、智者は爾の時、便ち默然たるべし。若し彼の大王、貪心有らば、比丘に語つて言はん「大德、是の寺廟の中には、多く衆生有り、我れ當に云何が五比丘の爲に、多人を驅遣すべき」と。智者聞き已つて、應に復往くべからずとて、便ち當に捨去して、寂靜の處に至るべし」と。

王の言はく「世尊、若し惡王有り、是の如き惡比丘の語に隨順せば、是の大地は、云何ぞ能く是の王を載する。此の過に従つて、無量恒河沙劫に、終に復人身を受くることを得る能はじ。無量の衆生は解脫を得已るも、是の王は猶ほ故の如く、未だ三惡道の業を斷ずる能はざらん。大王、若し未來世に信ある諸王、若しは刹利・婆羅門・毘舍・首陀など有り、能く法師を護り、塔像を造立し、衆僧に種種の須つ所を供養し、惡比丘を治し、護法の爲の故に、能く身命を捨し、寧ろ如法の比丘一

【二〇】羯磨、Karma 受戒、贓罪、結界等の、戒律に關する事に於て、意を身口の上に發動して、滅罪生善等の事を成辨するをいふ。九十九の數、日密分に見えず、只數多きを示すか。

【二一】ともに、かはやなり。

【二二】和合、僧伽の事。譯、和合僧は梵漢雙舉なり。比丘、三人以上、同處に集まり、同じく戒を持し、同じく道を行ずるを和合僧といふ。

【二三】業、麗本に缺くも、三

【二四】數も亦責むるなり。

す、是の比丘すら、猶ほ衆僧と名く、何に況んや無量をや。大王、若し無量の僧、悉く禁戒を破せんに、但五人をして、清淨如法ならしめ、若しは施する者有らんに、無量の福を得ること、稱量すべからず、計數すべからず。何を以ての故にとならば、佛法を持する者を護る有るを以ての故なり、一切の諸衆生を憐愍するが故なり、其の心平等にして二相無きが故なり」と。

王の言はく、「世尊、破戒の比丘は、衆に處つて信施を得べきや不や」と。「大王、王の國內に、一の罪人有り、未だ擯驅に及ばざる有るが如く、王若し施を利利・婆羅門・毘舍・首陀に給するに、是の人類し樂を受くるを得るや不や」と。「不らず、世尊」と。「大王、破戒の比丘も、亦復是の如く、衆中に在りて信施を受くと雖も、安樂を得ず。何を以ての故にとならば、禁戒を破するが故なり、如法ならざる故なり。大王、是の如き人は、一切の十方無量諸佛も、護念せざる所にして、比丘と名くと雖も、僧の數に在らず。何を以ての故にとならば、魔界に入るが故なり。禁戒を持する者は、即ち佛弟子にして、禁戒を毀つ者は、即ち魔の弟子なり。又戒を持する者は即ち出世の道、禁戒を破る者は、即ち世道に入る。我れ都て、毀戒の人、人の信施——葶藶子の如きをも——を受くるを聽さず。何を以ての故にとならば、是の人は如來の法を遠離するが故なり」と。

王の言はく、「世尊、破戒と言ふは、何等の相有り、知るを得べきや不や」と。「大王、智有れば能く知る。大王、若し三寶を恭敬する能はざれば、信心を生ぜず、慚愧有ること無く、師・和尚・耆老・長宿・同師・同學に於て、恭敬を生ぜず、聖幢を摧滅して、梵行を修せず、慳貪を増長し、樂んで居家に在り、口の四種の業を清淨にする能はず、常に食心を修して法心を遠離し、樂んで世間無益の事を説く、是を比丘の初の破戒の相と名け、未だ毀禁戒を具足せずと名く。若し是の如き等の、奴婢・象馬・牛羊・野驢・鷄猪、乃至八種不淨の物を受畜すれば、是を毀禁戒を具足すと名く。是の如きを名けて、沙門中の滓、沙門中の曲、沙門中の幻、沙門中の賊、沙門中の醉、沙門中の斲

【五】四種は口の四過と稱せらるるものなり。

【六】信心は法を樂求する心。

【七】八種不淨物、梵行を染汚する、八種不淨物なり。解一からず、佛祖誡記四に依れば、律を案するに八不淨とは、

一に田圃、二に種植、三に穀帛、四に畜人、五に樂禽歌、六に錢寶、七に擗笠、八に象金飾

林及び諸雜物なりと云へり。

【八】梵に Oup Flite、尊者、嚴誡など譯す。四姓の外に在

つて。屠殺を業とするものをいふ。

ど。『大王、若し佛の在世及び滅度の後、若しは惡王利・婆羅門・毘舍・首陀有り、法師の是の如き等の物を侵奪して、得る所の罪報をば、分つて百分と爲すも、上に得る所の罪は、其の一にも及ばざるなり』と。

頻婆娑羅王の言はく『世尊、法の如くに治する國には、是の王得がたし、若し不放逸なれば則ち能く法を護り、若し放逸ならば、則ち護る能はず。世尊、能く法を護らば、何の功德をか得る』と。『大王、譬へば人有りて、能く如上の衆生に、壽命・眼目・手足を與へんに、是の人の得る福は、寧ろ多しと爲すや不や』と。『世尊、能く一人に命・目・手足を與ふるに、其の福尙ほ多し、況んや爾所の人をや』と。『大王、若し法を護つて得る所の功德をば、分つて百分を爲す有らんに、先に得る所の福は、其の一にも及ばざるなり』と。

王の言はく『世尊、若し一法師の物を受け取る有らんに、是れ罪を得るや不や。若し一法師を擁護する有らんに、復福を得るや不や』と。『大王、若し一法師の物、「乃至五法師」の物を受け取り、一法師及び五法師を護らんに、所得の罪と福とは、正しく等しくして別無し。大王、若しは一廟寺、若しは一村落、若しは一樹林に住する。五法師、若しは、健提を鳴らして四方の僧を集め、客僧集まり已るや、次第に房舎・飲食・臥具・醫藥を賦給して、愷情の心無く、初夜・後夜に讀誦講論し、生死を厭患して、専ら涅槃を樂ひ、自ら身を讚せず、彼の短を訟めず、少欲知足にして、常に讚歎を樂ひ、少欲知足にして、心に精進を勤め、寂靜を志樂して、念・定を修し、衆生を哀愍する、大王、是を衆僧の、如法に住するものと名く。戒と精進とを護り、佛の密藏を持し、讀誦書寫して教詔を分別する、是を衆僧の、衆生を哀愍し、衆生を利益するものと名く。能く如來の十二部經を持し、亦能く寂靜の禁戒を奉持し、賢聖の功德を具足し慚愧する、大王、是を衆僧の、大功德海と名く。天人の師と爲り、能く大に無量の衆生を利益し、能く一切衆生の苦惱を斷じ、能く一切衆生に解脱を施

【二三】日藏分によれば、一人乃至四人にては、田宅、園林、象馬、奴婢等の常住僧物を受くることを許されず、五人にして初めて聽さるるなり。
【二四】健提 Chanda 打て聲を作すべきもの、稱。釋氏要覽に依れば、是れ鐘磬なり。石板、木板、木魚、砧槌など、聲有つて能く衆を集むるもの、皆健提と名くと、日藏分には單に鳴鐘と云ふ。

は、當に知るべし、是の王は、現世に二十種の惡を獲得すべきを。一に天衛護せず、二に惡名遠く聞え、三に親友遠離し、四に怨敵增長し、五に財物損耗し、六に心散亂すること多く、七に身具足せず、八に睡眠を得ず、九に常に飢饉を患ひ、十に服する所の飲食、變じて惡毒と成り、十一に民愛敬せず、十二に隣國、數侵し、十三に所有の眷屬は其の教を受けず、十四に祕密の事をば、謀臣は顯露にし、十五に所有の財物をば、水火侵奪し、十六に常に重病有り、十七に藥湯も行かず、十八に醫藥も療さず、十九に藥水も下らず、二十に常に不淨を念ず、是を二十と名く、是の身を捨て已れば、尋で復當に阿鼻地獄に生るべく、一劫のあひだ苦を受け、是の劫を過ぎ已りて、餓鬼の身を得、大空野に處り、藥水・飲食の名をも聞かず、諸根殘缺して身具足せず、無量歲の中、大苦惱を受け、是の果を受け已つて、大海中に生れ、大獸の身を得、無量由旬のあひだ、大肉團の如く、常に衆生の啖食する所と爲つて、大苦惱を受けん。若し人身を得んも、無佛の處・五滓の世に生れて、耳目具せず。大王、未來の惡王は、是の如き等の諸大惡報を得ん」と。

王の言はく「世尊、我れ今寧ろ地獄の身を受けんも、終に是の惡王の身を受けざらん」と。佛の言はく「大王、今是の法——法師の財物——を以て、汝等有信の諸王に付囑す。何を以ての故にとならば、夫れ法師は即ち是れ、如來法身の藏なればなり」と。王の言はく「世尊、若し諸の刹利・婆羅門・毘舍・首陀にして、能く是の如き法財を護持する有らば、其の人は當に何等の功德をか得べき」と。佛の言はく「大王、是の如きの人は、一切の聲聞・緣覺に勝る。大王、譬へば人有り、能く一切十方の衆生所有の壽命を斷じ、其の眼目を奪ひ、其の手足を截らんが如し。大王、是の如きの人、得る所の罪報は、多しと爲すや少きや」と。頻婆娑羅王、默然として答へず。佛の言はく「大王、何の故にか默然たる」と。王の言はく「世尊、是の人所得の惡業の果報は、稱量すべからず、計數すべからず。世尊、若し一人に於て此の惡業を造るに、罪尙ほ計り難きに、況んや一切人をや」

【二】阿鼻(Avīci)無間と譯す。八熱地獄の最下。この地獄に墮したるものは、苦を受けて間なしといふ。五逆・謗法の者の墮する處。

【三】啖、すするなり。

得んも、空土の、三寶無き處・五滓の世に處在し、盲にして眼目無く、常に重病に遇ふて、諸の糞穢を食し、是の身を捨て已つて、還地獄に墮せん。何を以ての故にとらば、法師所得の物を受くるを以ての故なり。是の惡比丘は、三寶をば、能く壞し、能く滅し、能く斷じたれば、是の故に是の如き惡果を獲得するなり」と。

爾の時、衆中に一大德比丘の、伽耶迦葉と名くる有り、佛に白して言はく「世尊、是の如き人は、人と名くべきや不や。我れ今思惟すらく、是れ人には非ずと。何を以ての故にとらば、是の人は、深く利養の心の爲の故に、禁戒を受持す、故に人に非ずと名く」と。佛の言はく「善い哉、善い哉、迦葉、寧ろ地獄等の身を受けんも、終に是の如き等の物をば、受け取らざれ。善男子、人身は得難きに已に得、佛法は遇ひ難きに已に遇ひ、禁戒は受け難きに已に受け、而も聖行。梵行に趣向せざる、是をば大利益の事を喪失すと名く。是の如き惡人は、貪食の心の故に、禁戒を受持して、法心の爲には非ず。是の如き癡人は、多聞の力を以て、及び國王大臣の力を以ての故に、是の如き物を受けて、即便當に大惡業の果を得べし」と。

爾の時、頻婆娑羅王、佛に白して言さく「世尊、出家の人は、是の如きの物を受けて、是の如き果を得。在家の人は、其の罪を受くること云何」と。佛の言はく「大王、汝今應に是の如き事を問ふべからず」と。王の言はく「世尊、我れ聖行を修するも、終に是の如き等の物を受け取らず、未來世の諸惡王等の爲に、是の如き事を問ひまつるのみ」と。佛の言はく「大王、我れ若し未來の惡王所得の果報を宣説せんに、不信の者有らば、大罪報を得ん。是の故に我れ今之れを置いて説かさるなり」と。王の言はく「世尊、惟願はくは、如來、未來世の刹利・婆羅門・毘舍・首陀の、信敬有り、佛法を奉持し、法師及び財物を守護する者の爲に、具に分別して説きたまはんを」と。

佛の言はく「善い哉、善い哉、大王、若し未來世の諸惡王等、法師の是の如き等の物を侵奪せんに

【九】法師所得云云は、如法の比丘に供養せんと欲したるを、破戒の比丘が受けて、如法持戒の比丘に與へざればなり。

【一〇】梵に Gayakasyapa、三迦葉の一、もと事火外道たり、伽耶城中に住み、五百の徒衆あり、如來の化に會ひ、外道を捨てて佛に歸したり。もと所住の處に因んで伽耶迦葉と呼ぶ。

調するなり。是の如きは、以て七寶・香華・伎樂・幡蓋・瓔珞の供養に勝るるなり。

『善男子、我れ爾の時に於て、心に亦之を受く。是の如き施に由つて、是の如きの衆生は、具足して當に三乗の果報を得、心退轉せざるべし。若し諸の衆生、我が爲に屋と經行の處とを造らんに、我れ即ち受用せん。若しは樹林・華園・講堂・精舎ならんも、及び我が所有の弟子に供養する、飲食・臥具・病藥・房舎ならんも、我れ亦受用せん。若しは諸の法師、高座にて說法せんに、我れ是の時に於ても、亦至心に聽かん。若しは法師に、衣食・臥具・病藥・房舎・園林・服乘・田宅・奴婢を施さんに、我れ亦之を受けん。是を法供養と名く。是の如きの人は、能く身心を淨め、身心を莊嚴し、亦能く阿耨多羅三藐三菩提心を莊嚴し、能く無上微妙の快樂を得、能く一切の物を施し、一切の人に施し、一切時に施し、能く一切の果を受け、一切の人より受け、一切時に受けん。是を惠施の福を成就すと名く。

『是の人終に三惡道に到らず、不墮の法を得、意の求むる所の如くにして、三乗より轉ぜず。是の人常に二種を具足するを得、所謂財と法とにして、求むる所の物をば、意に隨つて即ち得、常に十方の諸佛の爲に念ぜられ、能く一切の魔の境界を壊せん。若し信する者有り、其の所有を以て、法師に奉施せんに、若し破戒のもの有り、是の如きの物を受くること、乃至一葉一華一果ならんも、是の如き癡人は、是の因縁を以て、大不善の報を得、現在には即ち四大惡果を得ん、一に惡名遠く聲え、二に親しむ所の師友、悉く皆遠離し、三に大重病を得、苦惡して死す——所謂死する時、飲食を下さず、惡色を觀見し、是の因縁を以て、口語る能はず、牛糞穢に臥するなり。四に所有の六物及び餘の財貨は、僧中に至らず、或は火の爲に焼かれ、惡賊に封られ、後世に復四種の惡報を受けん——所謂地獄・餓鬼・畜生と、若しは人身を得んも、身に手足無く、若しは餓鬼を受けて、無量の歲中、水漿を見ず、其の名をも聞かず、畜生の身を受けては、常に泥土を食し、若し人と爲るを

【五】 三乗、聲、教、苦の三乘。

【六】 我が爲に云云、原本は具造屋室と作すも、三本は爲我造屋に作る。今後者に從ふ。

【七】 經行、一定の地をめぐるあること。坐禪して睡眠を催す時に、之を防がん爲、又は運動の爲などにす。

【八】 六物、比丘の常に所有すべき六種の衣具、即ち僧伽梨(九條又は二十五條の大衣)、弊多羅僧(七條の中衣)、安陀會(五條の下衣)、漉水囊、麈尾(鉢、尼師壇(座具))。

の禪定を修すべし」と。

時に諸の菩薩、即便修に入り、入り已つて或は身より、光明を放つ有つて、猶し一燈炬のごとく、釋・梵の身光の如く、日月光の如く、三の日光の如く、四の日光の如く、八の日光の如く、千の日光の如く、億の日光の如くなりき。是の如きが、遍く娑婆世界を照らすに、是の光能く、無量の衆生の身心をして、寂靜ならしめ、三惡に在る者は、諸の苦惱を離れ、邪見の人は、惡見を遠離して、永く貪欲・瞋恚・癡・怖・飢渴等の患を離れたり。

爾の時、此の佛世界の衆生、皆共に佛・法・僧寶を供養し、善法を増長す。爾の時、此の佛の世界、并に及び十方恒河沙等の無量世界の、若しは空と不空、及び淨と不淨との光、遍く十方の佛界を照らし、有らゆる菩薩の、能く聖行と菩提道とを行する者、一念の頃に於て、悉く來つて大寶坊中に聚集し、頭面もて佛を禮し、却いて一面に坐せり。

爾の時世尊、聲聞衆に告げたまふらく「汝等比丘、頗し是の如き善神足を見たるありや不や。是の如き神足は、能く一切惡魔の境界及び諸有の處を壞し、能く法界を護り、能く一切諸佛の境界に行き、聲聞・辟支佛界を分別し、一切の有らゆる神通に出勝す。善男子、一切の菩薩、大神通を示現する所以は、衆生の諸善根を増さんが爲の故なり、三寶の性を斷絶せざらん爲の故なり、未信の者、信心を得んが爲の故なり、已信の者、增長を得んが爲の故なり、衆生をして安樂を受けしめん爲の故なり、大乘の法を長養せんと欲するが爲の故なり、身をして常樂我淨を得しめん爲の故なり、是の如き等の諸因縁を以ての故に、諸の衆生に、是の如き神通を示すなり。

『是の如き菩薩の行に隨ふ處、是の中には佛法即ち增長を得て、若しは現在・未來に、久しく住して滅せず、有らゆる衆生は、塔廟を修立し、衆僧を供養し、無盡の身と無苦惱の身とを求め、作す所の供養は、皆生身・法身を作す。生身供養とは、即ち是れ塔像、法身供養とは、十二部經を書寫し讀

續まんとするに、小乗は希望卑小にして、他を顧みる暇無き、長時の修行に堪えざる如き、その主なる相異點とす。

【一〇】この段と、前の段とは晉譯の所説簡なり。
【一一】釋梵は帝釋、梵天をいふ。
【一二】千、麗本十に作る、今三本に依る。

【一三】安、麗本五に作るも、今三本に従ふ。
【一四】常等の四は、涅槃の四種の果徳を指す。一、常は常住の謂、大涅槃には時、空を超えて、生滅せざる果徳あるをいひ。二、樂は安樂の謂、大涅槃は生死逼迫の累を絶して、無爲安樂の果徳あるを云ひ。三、我は眞我の謂にして、妄執の我を離れて、八自在ある眞我の果徳あり。四、淨とは清淨の謂、惑業の垢を離れて、湛然清淨の果徳あるをいふ。

惟願はくは哀を垂れて、愛の過咎を分別演説したまはんを。如來は能く衆生の六根を淨めたまふ、重ねて願ふらくは、清淨の法聚を演説したまはんと。」と。

佛の言はく、『善い哉、善い哉、善男子、若し能く六波羅蜜を行する有らば、即ち能く自ら、心所行の處を知る。是の人終に聲聞乘を念ぜず。復無量の諸行を修行すと雖も、未だ其の邊を得ず、亦聲聞・辟支佛地を怖畏・退墮せず。若し諸の菩薩、四無量を修集する能はざれば、是の如き菩薩、菩提道に於て、則ち退有りと爲す、是をば六根を清淨にするを得ずと名け、是をば法に於て貪有り慳有りと名く。是の如きを名けて、他行を行じ、自行を行ぜずと爲し、是をば七財を成就する能はず、一切の衆生を生死海より度脱せしむる能はずと名く。是の故に説く、是の如き行は、即ち是れ聲聞辟支佛の行なりと。我れ初に四聖諦の行を演説し、後に復續いて諸菩薩の行を説かん』と。

爾の時、一切の大衆、咸是の念を作す、如來は將た聲聞乘を説きて、大乘を説かざらんと欲したまふや、將た如來は、是の如き菩薩衆を樂みたまはざるに非ずや、如來は三寶の種性を斷ぜんと欲したまふなずや。何の故にか大乘の妙法をば説きたまはざる。諸の天と人との、信を得んが爲の故に、未だ菩提心を發さざる者、發心せんが爲の故に、已に發心したる者、增長を得んため故に、諸の衆生の、信心を得んが爲の故に。如來にして若し大乘の法を説きたまはんに、無量の衆生は、當に菩提の心を發起するを得、不共の法を修行するを得るに因つて、法陀羅尼を成就し具足すべきに』と。『善男子、聲聞乘は即ち大乘なり、大乘は即ち聲聞乘なり、是の如き二乘は、差別有ること無きなり』と。

爾の時、衆中の、諸の十住に住する諸菩薩等、是の如き言を作す『世尊、我等已に無生法忍を得、我れ已に能く如來の十八不共法の行を行じ、我れ已に諸の聲聞乘及び大乘を解了したるも、是の如き衆中の無量の衆生は、小乘と大乘とを解するを得る能はず』と。『諸善男子、汝等當に不退

【六】この段、日藏分には、女を以てし、説相や異なる。

【七】大乘、音にはたい菩薩道とのみ云ひ、本文には、以下、に大乘又は小乘の語を出すも音譯には相當文無し。

【八】十住、菩薩の修行に依つて得る位をば、普通五十二位とする内の第二段第十一位心第二十位を十住位とす。發心より灌頂位に至る十階あり、今は十地の別名として用ひらる。十地は、かの第四十一喜地より五十位までにして、觀喜地より法雲地に至る十階あり。

【九】小乘と大乘。大は廣大、乘は運載の義。即ち是れ菩薩大根性の人を運載して、菩提涅槃の彼岸に達せしむる、自利々他悲智並べ行ずる法門を大乘と稱し、また上乘とも稱す。音譯して摩訶衍 Mahāyāna (マヘン) といふ。是に對して、聲聞緣覺等の小乘を運載して、灰身滅智の涅槃に至らしむる、利己的の法門を小乘とす。もといはれ大乘と稱するの徒、彼の狭少を蔑むによつて起る所か、蓋し教理の上よりすれば、大乘の所説は幽玄なるに對し、小乘のそれは淺近なり。修行の上より云ふも、大乘は發心廣大にして、利他救済を先とし、能く長時に無量の功德を

卷の第三十一

日密分中 護法日品第一

爾の時世尊、故に欲・色二界中間の、大寶坊中に在し、大菩薩——其の數無量なる——と、諸大衆の爲に、虚空目の出息・入息の甘露門を説き已り、默然として住したまひ、一切の大衆も亦復是の如くにして、各是の念を作す「如來は今日、深く我が心に法を欲して厭く無きを知りたまひ、必ず當に甘露の法雨を降注したまふべし」と。是の念を作し已り、合掌恭敬して、如來を瞻んことを樂ふこと、猶し篤病のもの、良醫を見んことを樂ひ、闇に處る者、光明を覩んことを樂ふが如く、水に没せる者、彼岸に至らんを樂ふが如く、苦を受くる者、歸依を得んことを樂ふが如く、一切の大衆も、亦復是の如くなりき。

是の時、衆中に一菩薩有り、蓮華光功德大梵と名く、己に無量無邊の佛所に於て、諸の功德を種え、善根を増長し、阿耨多羅三藐三菩提心に於て退轉せず、法縁の慈を具足成就したるが、坐より起つて合掌恭敬し、長跪して佛に白して言はく「世尊、一切衆生の心所縁の處は、邊際有ること無く、曠速無形にして、其の性本より淨なり、諸有の中に於て、能く障礙するもの無く、通達して眞實を知るを得んと欲するが故に、精勤して四無量心を修集し、修集するに因るが故に、盡智を獲得す。世尊、若し三界の性をして、本より淨ならしめば、何の故に是の如き盡智を修集する。惟願はくは如來、諸の菩薩の爲に、敷揚散説したまへ。退轉の者をして、不退を得しめんための故に、無量の煩惱界を摧滅せんための故に、無邊の諸苦聚を斷破せんための故に。惟願はくは如來、心を垂れて憐愍し、未だ曾て聞かざるところを説きたへ。衆生未だ曾て聞かざるところを聞き已り、生死の海を度して、愛の樹を摧折せんを。何を以ての故にとならば、一切の煩惱は愛を以て根本と爲す、

【一】 卷第三十四以下の、日藏分參照。

【二】 日藏分には王舍城迦蘭陀竹園とあり。

【三】 同相當文には如下遺急難一思求依護とあり。

【四】 日藏分には大梵天王、功德蓮華光といふ。

【五】 同には偽文を以てし、説相異る。

そ講説する所、錯謬しうじゆ有ること無し。是の如き菩薩ぼさつは、眞空しんくうの義もて、法門を分別し、乃ち能く是の如き經典を宣説するを得ん。善男子、汝今已に第一の處に到り、四辯を成就して、自在無礙なり。是の大乗經をば、他より聞かずして、能く分別したり。善男子、汝今是の如き住位を成就し、身・口・意の業に、錯謬有ること無し。何を以ての故にとならば、菩薩所修の三業成就するには、常に智慧を以て根本と爲すが故なり。善男子、已に無量百千萬億の諸佛世尊有りて、皆共に稱揚して汝の所説を聽けり。無盡意、汝本已に我が所及び諸佛の所に於て、畢竟懺悔して漏失有ること無かりき」と。

爾の時、尊者阿難、佛に白して言はく「世尊、此の經をば何が名け、云何が奉持すべき」と。佛阿難に告げたまはく「此の經をば無盡意所説不可盡義章句の門と名け、又大集と名く。當に是の如く奉持すべし。阿難、汝應に是の如き經典を信受すべし。何を以ての故にとならば、汝是を受け已らば、得る所の持念、前に倍すること千數なり、若し他の爲に説けば、則ち佛事を立せん」と。佛是を説き已りたまふに、無盡意菩薩摩訶薩、尊者阿難・舍利弗、諸天・龍神・乾闥婆・阿修羅等、一切の大衆は、歡喜せざる莫く、禮を作して去りぬ。

【六】 大集、晉譯缺。

【七】 晉譯阿耨末菩薩經、八卷第七終。

の處は、諸の佛界に至り、當に知るべし、佛世尊の如くならんを。我が今所有の、憍慢・嫉妬・貢高の心は、無盡意の威徳力を以ての故に、皆已に摧伏せらる。我れ今當に、是の如き經典及び説法の者を護るべし。是の經の、所在流布の處には、乃至一念の心をも起して留難を作さざらん。何に況んや身往くが故に、因縁を作さんをや」と。

爾の時佛、尊者阿難に告げたまはく「汝今日より、當に正法の久しく世に住せんが爲の故に、是の經典を受け、持つて讀誦し説くべし」と。爾の時阿難、正服にして起ち、偏に右肩を露し、右膝を地に著け、前んで佛に白して言はく「世尊、我れ今敬まつて佛の教を奉じ、是の經を受持せん。但恨むらくは、廣宣流布すること、諸の菩薩の如くなる能はざるを」と。佛の阿難に告げたまふらく「汝且く自ら安んぜよ、今此の會中に、諸の菩薩摩訶薩等有て、自ら能く護持して、此の經典をして廣宣流布せしむべし」と。

爾の時會中に、六十億の諸菩薩摩訶薩の、應に法を護るべき者有り、即ち座より起ち、合掌して佛に白して言はく「世尊、我等要す當に此の經を宣傳して、十方に至らしむべし。娑婆世界の彌勒大士は、自ら當に中に於て、是の典及び説法の者を護持したまふべし。世尊、若し佛滅後、後の五百歳に、若しは菩薩有り、是の經典を聞いて受持讀誦せんに、當に知るべし、皆是れ彌勒の神力の建立する所なるを」と。爾の時佛、護法の菩薩摩訶薩衆を讚へたまふらく「善い哉・善い哉、諸善男子、汝等は但に、今我が前に於て、正法を護持するのみに非ず、亦曾て過去恒沙の諸佛の正法を護持したり」と。

爾の時、無盡意菩薩摩訶薩、佛に白して言はく「世尊、我れ今自ら少智慧の分を以て、是の經典を説くに、文字句義必ずしも具足せず、今佛前及び無盡の法を成就すべき所の諸菩薩等に於て、過失を懺悔す」と。佛の無盡意菩薩に告げたまはく「善男子、若し菩薩有り、四無礙智を得んに、凡

堪任して、爲に衛護・供給・侍使を作し、當に是の人に於て、如來の想を起すべし。何を以ての故にとならば、是の經典中に、諸の乘を出すが故なり」と。

爾の時、釋提桓因、即ち座より起ち、合掌して佛に向ひ、佛に白して言はく「世尊、我れ數佛より、無量無邊百千の經典を聞くも、未だ曾て是の如き經典——深義を分別せる——を聞くを得ざりき。世尊、在在處處の國土・郡縣・城邑・村落に、此の經を説く者有らば、我れ躬ら當に、三十三天と、故に往いて聽受し、并に法師を護つて其の氣力と、勇猛の精進、正念の辯才とを益し、是の法師をして、諸の大衆に於て、畏るる所無く、廣く能く是の如き經典を宣説するを得しむべし」と。佛の言はく「善い哉・善い哉、憍尸迦、汝是の法を説かん者を擁護して、勇進正念辯才を得しめんと欲することや。憍尸迦、若し是の法を説かん人を擁護せんと欲すれば、即ち諸佛の正法を擁護すと爲し、正法を護らん者は、則ち一切衆生を擁護すと爲す」と。

爾の時、梵自在天王、合掌長跪し、前んで佛に白して言はく「世尊、若し是の經典の流布せん處には、我れ躬ら當に、其餘の梵衆并に諸の眷屬と、禪の喜樂を捨てて彼所に往詣し、聽受諮請すべし。我れ彼に往かん時、當に四瑞を現じて、其をして覺知せしむべし。云何が四とは爲す、一に微妙の光明を見せしめ、二に殊異の香を聞くを得、三に説法の者をして、無礙の辯及び正憶念を得、説く所吉祥にして章句を失はざらしめ、四に其の大衆をして、善の欲心を發し、法を聽かんことを喜樂して、厭足有ること無からしむべし。是の四瑞を以て、當に知るべし、梵天王は其の眷屬と、躬ら來つて法を聽くと」と。

爾の時、第六の魔王波旬、合掌して佛に白して言はく「世尊、是の如き經典は、我が勢力をして、一切羸劣ならしむ。何を以ての故にとならば、若し菩薩有り、是の經典を聞きて、受持・讀誦し、他の爲に廣説せんには、當に知るべし。其の人即ち爲に記を受けん。世尊、是の如き菩薩所住

【五】 晉譯に拘翼とす。

【六】 四、晉譯には章句相次、義不相越と。

【七】 住、麗本住に作るも、今三本に依る。

心に智慧と方便とを成就するも、若し此の經を離れなば、我は是の人を説いて未だ能く六波羅蜜を具足せずと。舍利弗、若し善男子・善女人有り、是の經典を聞きて信解・受持・讀誦・解義し、如説に修行せんに、我れ是の人を説いて、已に諸波羅蜜を具足すと爲す。何を以ての故に。舍利弗、若し菩薩有つて、此の經を受持し、他の爲に演説せんに、即ち檀波羅蜜を具足すと爲す。何を以ての故に、諸の施中に於て、法施を勝と爲す、初より菩薩の心を忘失せざればなり。若し此の經を持せば、即ち是れ戒を持す、故に能く尸羅波羅蜜を具足す。何を以ての故に、一切の菩薩所學の禁戒は、是の經の所攝なればなり。若し此の經に於て能く堪忍して樂めば、一切の衆生も、壞する能はざる所たり。能く是の中に於て、進んで忍辱を修すれば、即ち羼提波羅蜜を具足すと爲す。若し是の經典を、勤行轉説し、身口意の業を、精勤修集せば、即ち毘梨耶波羅蜜を具足すと爲す。若し是の經に於て、其の心寂滅にして、散亂有ること無く、一心の定意に、法相を分別せば、即ち禪那波羅蜜を具足すと爲す。若し是の經に於て、自ら現智を得、他より聞かずして、正行の智を得なば、即ち般若波羅蜜を具すと爲す。舍利弗、若し菩薩有り、勤めて是の經を學し、若しは諸波羅蜜を具足せんと欲すれば、則ち難からずと爲す。舍利弗、若し菩薩有り、此の經を學習し、受持・讀誦し、如説に修行し、經卷を書寫せんに、當に知るべし。是の人には、一切の佛法、已に手に在りと爲す。四大の性は、變じて異ならしむべきも、是の菩薩の心は、阿耨多羅三藐三菩提に於て、復た轉すべからず。舍利弗、此の經典は、即ち是れ菩薩の不退轉の印なり、是の故に、菩薩は當に是の印を求むべし。若し善男子善女人有つて、是の印に親近せんに、則ち一切の佛法に親近すとは爲すなり」と。

爾の時四天王及び其の眷屬、即ち座より起ち、合掌向佛して、佛に白して言はく「世尊、我等四王は、是れ佛弟子にして、已に道迹を得つ。若し善男子善女人有つて、是の經を受持せんに、我等

【八四】自ら現智云云、晉譯には、現在智慧、摺取其義とす。

是の人は則ち是の無盡の法を具足すとは爲す」と。

爾の時世尊、覆肩衣を以て、無盡意に與へ、讚へて言はく「善い哉・善い哉、大士、快く是の義を説けり、但に我の許すのみには非ず、十方の諸佛も亦復是の如くなり」と。爾の時無盡意菩薩摩訶薩、兩手もて衣を捧げ、自らの頂上に置き、佛に白して言はく「世尊、諸天世人は、當に是の衣を視ること、塔の想に過ぐべし、是れ如來の受用したまへる所なるを以ての故なり」と。爾の時多く種々の寶衣、種々の寶蓋、種々の寶樹、種々の寶臺有り、十方の世界より自然に來り、無盡意を覆ひて、供養を爲せり。是の時の寶衣・幡蓋・樹・臺など、自然に是の如きの言を演出す「善哉・善哉、善男子、善能く是の無盡の法門を説きつ。汝の説く所の如きは、我等の許す所なり」と。

爾の時舍利弗、佛に白して言はく「世尊、是の如き寶衣と供養の具とは、何處より來りて、乃至是の言を出せるや」と。佛舍利弗に告げたまふらく「是の無盡意菩薩の、初めて阿耨多羅三藐三菩提心を發したる時、化せる所の衆生は、皆十方に於て、已に阿耨多羅三藐三菩提を成じたり。是れ彼の諸佛正遍智等なり。恩を知り恩を報するが故に、是を遣はし來り、是の無盡意の眞實の功徳をして、稱揚讚歎し、并に復説く所の經典を供養するなり」と。

爾の時大衆、無盡意菩薩摩訶薩に於て、倍恭敬を生じ、尊重・讚歎して、是の如き言を作す「我等今、快く大利を得て、無盡意菩薩を見、恭敬・供養・尊重讚歎するを得、并に是の無盡の法門を聞くを得つ。若し耳に無盡意菩薩の名字を聞くを得る有らんに、亦善利を得ん。何に況んや眼に見、兼ねて是の典を聞かんをや」と。

爾の時世尊、大衆の中に於て、是の語を聞き已り、舍利弗に告げたまふらく、若し善男子・善女人の、菩薩道を學する有らんに、一劫の中に於て、諸佛を供養し、戒と威儀とを學び、堪忍力を以て諸衆生の生死の苦際を盡し、精勤修集すること、頭の然るを教ふが如くし、諸の禪定に於て、一

【六二】 覆肩衣は、支那の舊譯家にては左肩を覆ふものとし、新譯家は右肩を覆ふ僧祇衣の異名なりとす。智度論三によれば、佛は特に阿難に對して覆肩衣を用ふことを許されたりとあれば、普通は用ふること稀なりしか。晉譯は單に體衣といふ。

【六三】 耳、麗本直に作る、今三本に従ふ。

たるに、有煩惱を示すは、是れ方便なり、已に重擔を捨したるに重擔有るを示すは、是れ方便なり、能く根の量を知り、量に隨つて說法する、是れ方便なり、善能く鈍根の衆生を誘進する、是れ方便なり、時と非時とを知る、是れ方便なり、行すべき道を知つて、邪に墮せる衆生を、正道に安置する、是れ方便なり、能く量をして無量と作し、無量を量と作す、是れ方便なり、損壞の者をして、本の如く還復せしむる、是れ方便なり、勝 他を显现する、是れ方便なり、涅槃に五欲の樂有るを示説する、是れ方便なり、已に解脱を得たるに、繫縛有るを示す、是れ方便なり、生死に處在して生死に墮せざる、是れ方便なり、諸の威儀に於て、專當する所無く、亦退失せざる、是れ方便なり、唯衆生のみを觀じて、持戒及び毀戒とを觀ぜざる、是れ方便なり、諸見の縁を攝して、諍競を生ぜざる、是れ方便なり、悉く是れ音聲にして假名無實とする、是れ方便なり、常に三界に行く、是れ方便なり、解脱の相行を得る、是れ方便なり、凡夫に親近すること、聖人に親近するが如くなる、是れ方便なり、涅槃を證せずして、常に生死に處る、是れ方便なり、魔の行處に於て、大光明を顯はし、煩惱有ること無き、是れ方便なり、一切は是にして、一切は非とする、是れ方便なり、舍利弗、是を菩薩、方便を修行すること、亦不可盡なりとは名く。

『舍利弗、是を菩薩摩訶薩の 八十無盡と名く。是の八十無盡は、悉く能く一切の佛法を含受するなり』と。無盡意菩薩摩訶薩、是の法門の品を説ける時、六十七百千の衆生——未發心の者——は即ち阿耨多羅三藐三菩提心を發し、五百二千の菩薩摩訶薩は、無生法忍を得たりき。

爾の時大衆、種種の華香、種種の華鬘、種種の華蓋を以て、如來及び無盡意、并に是の經典を供養し、上空中に於ては、無量の天樂有り、自然に聲を出して是の如き言を作せり『諸佛世尊の、無量の劫に於て「修」集したる阿耨多羅三藐三菩提をば、無盡意菩薩は、今是の大集經中に於て、已に其の義を説けり、若し是の無盡の法門を聞く有りて、信解・受持・讀誦・解說せば、當に知るべし、

【八一】他、麗本地に作る、今三本に依る。

【八一】卷第二十七の發菩提心の無盡以來、本卷の方便の無盡に至るまで、説ける所を總攝するなり。但し八十と算定する方法明ならず。何者、實際は八十に餘ればなり。

は是れ彼の伴のたり、諸波羅蜜は能く我を使はず、而も我れ能く諸波羅蜜を使はん、一切の善根も皆亦是の如くし、是の如き等の法は、我が伴に非ずと雖も、我れ要す當に行すべしとて、他の勇猛を恃ます、自力もて獨り行じて伴無く、道場の金剛座處に坐して、諸の魔衆を壞し、一念の慧を以て阿耨多羅三藐三菩提を成じ、我れ當に是の如く覺了分別すべしと「言ふなり」。舍利弗、是を菩薩の一道無盡とは名くるなり。

『復次に舍利弗、菩薩摩訶薩所修の方便も、亦不可盡なり。云何が方便なる。一切の法を見る、是れ方便なり、諸法を發起する、是れ方便なり、菩薩の使と爲る、是れ方便なり、畢竟の分別、是れ方便なり、齊限有ること無き、是れ方便なり、志意に常に出世の法を求むる、是れ方便なり、布施の時に於て、即ち能く諸波羅蜜を具足する、是れ方便なり、禁戒を持する時、在在處處に、自在に往生する、是れ方便なり、忍辱を行する時、自身及び菩提の道を莊嚴する、是れ方便なり、精進を行する時、心所住無き、是れ方便なり、禪定を修する時、退失有ること無き、是れ方便なり、慧を修行する時、無爲を證せざる、是れ方便なり、慈心を修する時、力勢無きを感む、是れ方便なり、悲を修する時、生死を厭はざる、是れ方便なり、喜心を修する時、樂無きに樂に處る、是れ方便なり、捨心を修する時、發心して一切の善根を修集する、是れ方便なり、能く天眼を修するは、諸の佛眼を成就せんと欲するが爲の故なり、是れ方便なり、天耳を修集するは、諸の佛耳を成就せんと欲するが爲の故なる、是れ方便なり、他心智を修するは、佛智を得て、諸衆生の根量の深淺を知らんが爲の故なる、是れ方便なり、宿命智を修するは、佛智を得て、三世を知るに、聖礙無からんが爲の故なる、是れ方便なり、神通を修集するは、諸の佛の神通力を得んが爲の故なる、是れ方便なり、衆生の心に隨ふ、是れ方便なり、既に自ら曉了し、復衆生を了する、是れ方便なり、能く自ら度し已りて未度を示現し、方に勤修して世を度することを求むる、是れ方便なり、已に煩惱を離れ

【七六】この二句、同に亦復不住六度無極、吾願奉行諸度云云といふ。

【七七】自力云云、晉譯に如く是像法、無有伴侶、當自獨立、而無二伴といふ。

【七八】一念の慧、同一發心頃、得成無上道と。

【七九】方便、晉譯に善權といふ。晉譯は說相や異なる。

契經・偈頌を讚說し、若しは大衆・刹利衆・婆羅門衆・長者衆・三十三天衆・魔衆・梵衆に至り、在在處處に、自然に能く衆生の根量を知り、無礙の辯を以て說法を爲す。是の菩薩、本の如く喜樂して法要を講宣し、終身不斷なる、是を辯才と名く。舍利弗、是を菩薩の總持・辯才も亦不可盡なりと名く。

「復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の撰集の四法も、亦不可盡なり、何等か四なる。是の菩薩は、一切の行は無常なり、一切の行は苦なり、一切の法は無我なり、一切の法は寂滅涅槃なるを知る。云何が無常とならば、義として所有無き、是れ無常の義なり、破壊する所無き、是れ無常の義なり。是の無常の義は、即ち無我の義なり。若し法にして我無く、能く壞する者無くんば、性は寂滅なるが故に、是を無常の義と名く。云何が苦の義なることならば、所求無きが故に、是れ苦の義、愛染盡くるが故に、是れ苦の義、所願無きが故に、是れ苦の義、空にして有無きが故に、是れ苦の義なり、是を苦の義と名く。云何が無我の義なることならば、畢竟して我無き、是れ無我の義、無我の義の如く、即ち是れ空の義、無所有の義、虚誑不實の義、是を無我の義と名く。云何が寂滅涅槃の義なることならば、是の寂滅の義は、念念の滅に非ず、如し念念の滅に非ざれば、即ち是れ寂滅なり。菩薩は是の無盡の智慧を得て、一切法の相は寂滅に同じきを知る。寂滅とは即ち是れ涅槃なり、是を寂滅涅槃の義と名く。舍利弗、是を菩薩の、撰集の四法も、亦不可盡なりとは名く。

「復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の、一道も、亦不可盡なり。云何が一道なる。菩薩所得の眞實の智慧は、他より聞かざるなり、又一道とは、菩薩獨一にして伴侶有ること無く、已に阿耨多羅三藐三菩提に於て、能く大いに莊嚴し、自の力勢を以て精進擲取し、畢竟自ら修して、他の作を假らず、自ら因縁・勇猛の力を以て、是の如き堅固の莊嚴を建立し、諸衆生所作の善業の如きは、我も亦是の如く、悉く當に之を作すべし、及び諸聖人の、初發心より作す所の諸の行をも、我れ亦當に作すべし、施は我が伴に非ず、我は是れ施の伴なり、戒・忍・精進・禪定・智慧は、是れ我が伴に非ず、我

【三〇】禪定、晉譯には一心に作る。

【三二】一道、晉譯に、菩薩所行一道、不違他行とし、また、一乘道とも云へり。

發起して悲心に入り、喜心に安住して善く捨心を修し、正しく六六初禪・二禪・三禪・四禪、空處六六・識處・無所有處・非有想非無想處に入り、善能く六六九次第定を思惟する、是を名けて定と爲す。要を擧げて之を言へば、菩薩は助定を、無量無邊に、勤行修集す、是を菩薩の定は不可盡なりと名く。

「云何が慧と爲す、是の慧とは道を修して、諸法の我無く、人・衆生・壽命無きに入るなり。是の如き智慧は、諸陰は幻の如く化の如く、諸界は平等、入は空聚の如しと分別し、諸諦を分別して、皆悉く明了に、十二因縁に隨順し、觀知し、諸見・因果・果證を分別す。所謂分別とは、一切の法に於て能く正見を得、如實に見、眞に空見・無相願見を見るなり。又分別とは無分別の故に分別するなり。所謂見とは、亦見る所も無く、別知する所も無きなり。是の如き見をば、眞實の見と爲す。眞實を見れば、即ち方便を得。是の菩薩、是の如き慧見もて、無爲に隨はず、諸善を修行して、心所住無し。是を名けて慧と爲す。舍利弗、是を菩薩、定慧を修行して不可盡なりと名く。

「復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の總持七〇辯才も、亦不可盡なり。云何が總持なる。修する所の善根をば、正念に積集し、有らゆる八萬四千の法聚をば、能く正しく受持して忘れず失せざる、是を總持と名く。又復總持とは、若しは一切の佛所説の妙法、一切菩薩・緣覺・聲聞・凡夫衆生の音聲・善語など、悉く能く受持するをば、是を總持と名く。設ひ劫災起らんに、命・餘生を捨てて、菩薩爾の時、正念もて總持し、不忘不失なること、掌中の阿摩勒果を觀んが如し。菩薩の、一切諸法を觀見せんこと、亦復是の如くなり。是を總持と名く。

「云何が辯才なる。菩薩は所説に、滯礙有ること無く所説に住する無く、所説に斷無く、所説通利し、所説に喜豫し、所説捷疾なり。是の如き所説は、皆是れ先業の清淨なる果報なり。諸佛は護念し、諸天は攝受す。説に錯謬無く、功唐捐ならず、進んで涅槃に向ふ。菩薩は是の如き辯才を成就して、有らゆる色像及び衆生の類には、辯才機に應じ、豫め思惟せず、豫め分別せずして、善能く

【六六】初禪以下の四を四禪と稱し、之を修して色界の四禪天に生ずるなり。

【六七】空處以下の四を四無色定といふ、之を修して無色界の四空處に生ず。

【七〇】九次第定は、右の四禪四無色並に滅受想定の九種の禪定をば、他心を雜へず、次第に一定より一定に入る法を云ふ。

【七一】音譯には何謂爲觀と。【七二】諸界、三科に於ける十八界をいひ、次の入は所謂十二處なり。

【七三】總持は陀羅尼 Dhāraṇī の譯、善を持して失はず、惡を持して起らしめざる義。念と定と慧とを體とす。菩薩所修の念定慧に、この功德を具す。

りて、終に敢て作さず。若し業にして非黒非白ならば、非黒非白の報有り。若し業にして能く業を盡さば、是の業は必ず作す。是の菩薩の依止する所の業は、是の如き諸の正業等を勤修す、是を正業と名く。云何が正命なる、若しは聖を捨せずして、頭陀・威儀を種え、不動・不轉にして、諸の姦諂無く、世間の利養の爲に牽かれず、易養・易滿にして、常に自ら威儀禮節を堅持し、他の利を得るを見て、心に熱を生ぜず、已が利養に於て、常に止足を知る、是の如き正行は、聖人の讚する所たり、是を正命と名く。云何が正進なる。若し進にして邪に向へば、聖の讚する所に非ず、所謂貪婬・瞋恚・愚癡の煩惱なり。是の不正の精進をば、終に之を爲さず。若し法にして能く、正誦・聖道・寂滅・涅槃・緣の正路に入れば、是の正精進は、勤行を修集す。是を正進と名く。云何が正念なる、若し念にして、法を失せず動ぜず、正直にして曲ならず、生死の過を見て涅槃に進向し、心を繋けて正道を忘れず失せざる、是を正念と名く。云何が正定なる。若し定にして、一切法に於て亂れざれば、是の菩薩、是の如く住する時、正決定を成す、是を正定と名く。菩薩は是の三昧に住し、一切衆生の爲に、解脱を得るが故に、正決定を成す、是を正定と名く。是の八聖道は、悉く是れ過去未來現在の諸佛の道なり。是の菩薩、覺了し已つて演說開示し、分別顯現して佛道を成就す。舍利弗、是を菩薩の八聖道分も、亦不可盡なりと名く。

「復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の、定と慧とを修行するや、亦不可盡なり。云何が定と爲す、若し心に寂靜、正しく寂靜・寂滅にして不然に、心常に亂れずして諸根を守護し、不動不轉にして卒暴有ること無く、安詳靜默にして堅持不失、善調柔軟にして獨り閑靜に處り、其の身遠離し、小廻轉せず、空寂の阿練若處を思樂し、惡求有ること無く、亦所求無く、多求有るに非ず、正命正行もて威儀堅固、時を知つて時に隨ひ、常に止足を知り、易養易滿にして——堪忍力の故に、心に高下無くして能く惡罵を忍び、發心して専ら善法の思惟に向ひ、思惟の處及び諸の禪支を樂ひ、慈心を

【五七】正業 S-karmānta. 眞智を以て、身の一切の邪業を除き、清淨の身業に住するを云ふ。晉譯は正治とし、所説頗ふ。曰はく、何謂正治、所修行者非福業義不行此法、唯修正道平等之義、是謂正治、と。

【五八】黒、白に對す、染淨と云はんが如し。

【五九】本文に若業能盡業是業必作とあり。

【六〇】正命 S-ṛjivā. 身口意の業を清淨にし、正法に順ひて活命し、五種の邪法を離るをいふ。晉譯は正業とす。

【六一】正進 S-ṛjyama. 眞智を發用して強め、涅槃の道を修するをいふ。晉譯には正定とす。

【六二】正念の S-samiti. 晉譯に正意とあり。

【六三】正定 S-samadhi.

【六四】定、晉譯には菩薩寂然所觀察者、亦不可盡と云ふ。

【六七】特に Anuyukta. 閑靜、遠離處など譯す、人里遠く離れたる靜寂の處をいふ。「後には寺院の讎名と化せり」

覺分と名く。云何が、進覺分なる、若しは、念法・喜法・除法・定法・捨法などをば、智を以て攝取し、精進勇猛にして、不退轉を欲し、勤修力勵して、本意を捨せず、正道を行する、是を進覺分と名く。云何が、喜覺分なる、修する所の法喜は、無量の法に於て、心に悅豫を生じ、懈怠有ること無く、清淨の樂法は是れ喜にして踊躍、能く身心を除き、諸の煩惱を捨する、是を喜覺分と名く。云何が、除覺分なる。若し身心及び諸煩惱を除けば、覆蓋を離れて定の境界に入り、心をして正しく住せしむる、是を除覺分と名く。云何が、定覺分なる、所入の定は、悉く能く覺了する如く、定に入らずんば、是れ覺了の法に非ず。又諸見・煩惱の結縛を了し、無始無終にして、其の心平等、一切の諸法は別異の相無し。能く是の如く諸法の等しきを覺する、是を定覺分と名く。云何が、捨覺分なる、若し法にして憂なるも喜なるも、其の心没せず、亦復世法の爲に牽かれず、高無く下無く、正住不動にして諸漏有ること無く、喜無く著無く、諸の障礙無く、正直に眞諦正道に隨順する、是を捨覺分と名く。舍利弗、是を菩薩の七覺分、亦不可盡なりと名く。

『復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の八聖道分も、亦不可盡なり。何等をか八と爲す。正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり。云何が、正見と爲す。若し出世を見んに、我見・衆生・壽命・養育・士夫の「見」、斷見・常見・有見・無見などを起さず、亦復善と不善と無記等の見を起さず、乃至生死と涅槃との二相の見を起さざる、是を正見と名く。云何が、正思惟なる。若し思にして、貪欲・瞋・癡の諸煩惱等を起さば、是を正と名けず。是の正思惟は、是の如き等の事を思せず、起さず、唯戒・定・智慧・解脫・解脫知見などを思す。是の正思惟は、能く是の如きを思し、戒等の聚に住す。是の如き思惟を、正思惟と名く。云何が、正語なる、凡そ演説する所は、其の身をして、憊憊有らしめず、亦他を損せず。是の如き善妙の好語を成就して正道に趣かしむる、是を正語と名く。云何が、

正業なる、若し業にして、黒ならば、黒報有り、白ならば、白報有り、黒白ならば、黒白の報有

【八一】進覺分 Vipriva 勇猛の心を以て、邪行を離れ、眞法を行するなり。
 【八二】念法以下、七覺分の初の一と後の四となり。

【八三】喜覺分 Prekha 心に善法を喜て歡喜を生ずるなり。
 【八四】除覺分 Prahobhā 身心繁重を斷除して、身心を輕利安適ならしむるなり、輕安覺分とも名く。晉譯には信覺意と云へり。

【八五】定覺分 Samādhi 心を一境に住して、散亂せしめざるなり。
 【八六】捨覺分 Upekka 諸の妄謬を捨て、一切の法を捨て平心坦腹更に追憶せざるなり。晉譯には護覺意といふ。

【八七】八聖道分 Ariyaṅga 八聖道分。また八正道といふ。その道偏邪を離れば正道といひ、聖者の道なれば聖道といふ。

【八八】正見 Samma-ditṭhi 無漏の慧を以て體とし、八正道の主體たり。蓋し正見は道にして亦道分、道支なり、餘の七は只道分、道支たるのみ、道には非ざればなり。

【八九】正思惟 Sāma-kkham, 晉譯に正念とす。
 【九〇】正語 Ariya-vācī, 晉譯には

【九一】其の身云云、晉譯には不自見身不見他人とす。

の禪定を修せる諸天及び人も、能く壞する能はざる所、本願する所の如きは、皆悉く成就す、是を進力と名く。云何が 念力なる、菩薩は諸の善法に住し、煩惱の爲に破壊せられず。何を以ての故にとならば、是の菩薩正念の力もて、能く摧伏するが故なり。是の如き念力は、能く壞する者無し、是を念力と名く。云何が 定力なる、憍闍を遠離して常に獨り行ずることを樂ふ。是の菩薩は、説く所有りと雖も、言語音聲は初禪を礙へず、善く覺觀して二禪を礙へず、心に歡喜を生じて三禪を礙えず。是の菩薩、衆生を化することを樂むと雖も、佛法を捨せず、亦第四禪をも礙えず。是の菩薩、四禪を行ずる時、諸の定を妨ぐるの法も、能く爲す無し。菩薩爾の時、定を捨せず、亦定に隨はず、而も能く自在に、處處に往生す、是を定力と名く。云何が 慧力なる、是の菩薩、世間法・出世間法の、一法として、能く是の智を壞する有ること無きを知る。菩薩は在所生の處に、一切の伎藝をば、師より受けずして、悉く自然に知る。世間外道の苦行難行をも、是の菩薩は、教化の爲の故に、亦悉く現に受くること、其の所行に同じ。是の出世の法、能く世に過ぐるは、慧力成就の故にして、諸天及び人の、伏する能はざる所たり、是を慧力と名く。舍利弗、是を菩薩の五力無盡とは名く。

【四】復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の 七覺分も、亦不可盡なり。何等か七と爲す、念覺分・擇法覺分・進覺分・喜覺分・除覺分・定覺分・捨覺分なり。云何が 念覺分なる。若し念覺分もてせば、能く法を觀じ、能く法を分別し、撰集して思するの智あり、亦能く諸法の自相を觀察す。何等をか自相と爲すとならば、一切法の自性は皆空なりと觀するなり。是の如き等を念じ、其をして覺了せしむる、是を念覺分と名く。云何が 擇法覺分なる、若し能く八萬四千の法聚を分別し曉了せば、所了の法の如く、了義は是れ了義、不了義は是れ不了義、世諦は是れ世諦、第一義諦は是れ第一義諦、假名は是れ假名、正しく了して疑無きは是れ正了無義など、是の如き等の法を、分別選擇する、是を擇法

【四】念力 *Smṛtibala* 晉譯に意力といふ。

【五】定力 *Samādhibala*

【六】慧力 *Prajñābala*

【四】 晉譯卷第七。

【四】 七覺分 *Saptā bojjhaṅgāni*。七覺支、七菩提分など稱す。覺は覺了觀察の義、聖道の生ぜざるは定と慧との調はざるに由る。故に心の定慧に據るを明かに見分けて、一方に偏せしめず、定慧均等からしむるが故に等覺と名け

【五】 覺法七種に分るれば、支又は分といふ。修道に於て思惑を斷ずることの十覺の力なり。

【六】 念覺分 *Smṛti-sādhana*、*dhāraṇa*、常に定慧を明記して忘れず、之を均等ならしむるなり。

【七】 擇法覺分、*Dharmapavicaya*、智慧を以て、法の眞偽を簡擇するなり。

「復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の^{三〇}五根も、亦盡すべからず。何等をか五と爲す。信根・進根・念根・定根・慧根なり。云何が^{三一}信根なるとならば、四法を信するなり。何等か四なる。生死の中に於て、世の正見^{三二}を行じ、業報を信じ、乃至命^{三三}を失するまで、終に惡を作さざると、菩薩の行を信じて、諸見に隨はず、専ら菩提を求めて餘乘を求めざると、諸法は空・無相・無願の法に同じく、第一義に同じく、了義に同じく、甚深の因縁には、我と衆生と無く、分別有ること無きを信解すると、一切佛の十力・四無所畏・十八不共法を信じ、是の如く信じ已つて、疑網を消除し、佛法を修集するとなり、是を信根と名く。

「何等か^{三三}進根なるとならば、若し法にして信根の所攝ならば、是の法は即ち進根の所攝と爲す。是を進根と名く。云何が^{三四}念根なるとならば、若し法にして進根の所修ならば、是の法をば、終に忘れざる、是を念根と名く。云何が^{三五}定根なるとならば、若し法にして念根の所攝ならば、是の法をば、忘れず失せず、一心不亂なる、是を定根と名く。云何が^{三六}慧根なるとならば、若し法にして定根の所攝ならば、是れ慧の所觀たり、是れ慧の體性たり、内に自ら照了して、他に從つて知らず、自ら正行^{三七}に住する、是を慧根と名く。是の五根は共に相續して生じ、一切法を具すれば、記別を受くるを得るなり。譬へば外道の^{三八}五神通の仙も、定んて胎中の差別を知る能はず、男女の相現れて、然る後乃ち知るが如し。多く菩薩有り、信等の根無ければ、諸佛世尊は、授記を爲さず、若し成就すれば、便ち與に記を授けたまふ。舍利弗、是を菩薩の五根無盡とは名く。

「復次に舍利弗、菩薩の^{三九}五力も亦盡すべからず、何等をか五と爲すとならば、信力・進力・念力・定力・慧力なり。云何が^{四〇}信力なる、是の信は一向にして、沮壞すべからず、乃至天魔の、變じて佛身と爲り、禪定解脫に出入することを示現するも、菩薩の信力を懈動する能はざる、是を信力と名く。云何が^{四一}進力なる、菩薩は精進もて、諸の善法に於て、堅固力を得、所得の力の如きは、諸

【三〇】五根、Pañcāṅgāni 次の五力と同一の徳にして、菩提を證知る機關方法としては五根と稱し、道行の徳としては五力と名く。

【三一】信根、Śraddhābhūmika 三寶を信じて戒を修するを根本となす。

【三二】進根、Virāgābhūmika 善法を修め惡法を退治する爲に行を専らにするなり。之が爲には前の四正勤を修するなり。

【三三】念根、Smṛtibhūmika 正念なり、四念處を修す。菩薩は慧根とす。

【三四】定根、Samādhibhūmika 四禪の修行をいふ。

【三五】慧根、Prajñābhūmika 主として四諦の證悟をいふ。

【三六】受、麗本に授となすも、今三本に従ふ。

【三七】五神通の仙、麗本は五神通仙に作る。今三本に依る、五種の神通を具する仙をいふからべし。

【三八】五力、Pañcābhūmika

【三九】信力、Śraddhā bhūmika

【四〇】進力、Virāgābhūmika

【四一】進力、Virāgābhūmika

の正勤——未生の善法を、生ぜしめん爲の故に、欲・勤進を生じ、心を攝して正しく除く——とは名く。

【二六】 是の諸の善法は、無量有りと言く、何を以ての故にとならば、無量の善法をば、菩薩は修集し、是の法中に於て、欲を根本と爲す。勤進修集して心を攝すれば、善法に出過し、正しく除けば、在々處々、常に善法に在り、是を第三の正勤——已生の善法に安住し、修集して増廣不失ならしめん爲の故に、心を攝して正しく住す——と名く。

【二七】 是の諸善根をば、悉く已に阿耨多羅三藐三菩提に迴向す。何を以ての故に、善根を無上菩提に迴向すれば、則ち不可盡なればなり。所以は何ん。是の如き善根は、三界に依らず、若し三界に依れば、是れ則ち損耗あり。是の故に一切種智に迴向する諸善根等は、盡すを得べからず。是を第四の正勤と名く。舍利弗、是を菩薩、四正勤を修して窮盡すべからずと名く。

【二八】 復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の四如意分も、亦不可盡なり。何等をか四と爲す、欲・進・心・思惟なり。是の如き四法は、慈・悲・喜・捨を以て根本と爲す。是の四無量は、心常に親近す、常に親近するが故に、心に調柔を得、心調柔なるが故に、初禪・第二禪・第三禪・第四禪に入るを得、諸の禪に入るが故に、身の輕軟を得。是の如き身の輕と心の柔とを成就するが故に、如意分に入る。善く如意分に入り已れば、即ち神通を生ず。若しは欲、若しは進、若しは心、若しは思惟なり。欲とは専ら彼の法に向ひ、精進とは彼の法を成就し、心とは彼の法を觀察し、思惟とは彼の法の方便なり。是の如意分、已に具足するが故に、能く神通を得。欲は莊嚴し、進は成就し、心は正しく住し、思惟は善能く分別するなり。是の菩薩、如意分を得れば、其の所解に隨ひ、其の所作の如く、心に自在を得、意の所往に隨ひ、善く諸業を作し、畢竟して一切の本行を成就すること、風の空を行くや、聖礙する所無きが如し。舍利、弗是を菩薩の四如意分は、窮盡すべからずと名く。

【二六】 その三。

【二七】 その四。

【二八】 四如意分 *Chetivirecchā* 四正勤に次で、修する四種の禪定なり。四念處に在つては實智慧を修し、四正勤に於ては正精進を修したれば、次で四種の禪定によつて心を攝むるが故に、定と慧と均等にして所願の如くなるを得るを以て、如意足といふ。
【二九】 欲等の四は、智度論等の名に同じきも、俱舍(二五)には欲勤心慧と列し、四教儀には欲念心慧と列ぬ。

處の、不可盡とは名くるなり。

『復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の四正勤も亦不可盡なり。何等をか四と爲すとならば、若しは未だ生ぜざる惡・不善の法の、生ぜざらんが爲の故には、欲・勤進を生じて心を攝し、正しく除くと、已に生じたる惡・不善の法をば、斷ぜんが爲の故には、欲・勤進を生じ、心を攝して正しく除くと、已に生せる善法をば、安住・修集し、増廣して失せざらん爲の故には、欲・勤進を生じ、心を攝して正しく除くと、未だ生ぜざる善・不善の法の、生ぜざらん爲の故には、欲・勤進を生ずるとなり。所謂欲とは、善く思惟するなり、勤精進とは善思惟を捨せざるなり。心を攝して正しく除くと、善思惟を觀するなり。何を以ての故にとならば、善く思惟するの時には、惡・不善の法をば、心に入らしめざればなり。云何が惡不善の法なる、惡・不善の法とは、非戒聚の伴、非禪定の伴、非智慧の伴たり。云何が非戒聚の伴なる、若しは重戒を破すると、及び餘の戒を毀つとなり、是を非戒聚の伴と名く。云何が非定聚の伴なる、若しは威儀を毀つと及び餘の亂心の法とは、是れ非定聚の伴なり。云何が非智慧の伴なる、若しは諸見及び餘の見の障礙を攝取する、是れ非智慧の伴なり、是を惡不善の法と名く。善く思惟するの時、是の如き等の惡法をば、心に入らざらしむる、是を初正勤——已生の惡・不善の法を、斷ぜんが爲の故に、欲・勤進を生じ、心を攝して正しく除く——とは名く。

『上に説く所の如く、惡不善の法は、心に聚集せず、方所有ること無く、住處有ること無し。是の不善の法の心行、斷するが故なり、已に覺するが故なり、緣に従つて生ずる故なり。淨なるが故に欲を生じ、疑の故に志を生じ、無明の緣の故に愚癡を生ず。是の善の思惟もて、不淨を觀する時、欲心を滅し、慈心を修集して瞋恚を滅し、十二因緣を觀じて愚癡を滅す。是の如き煩惱、永に寂滅ならば、即ち是れ一切の假名を除斷するなり。亦復斷すべき者有るを見ざるなり。是れ第二

【四】四正勤 Cūṭvāriṇī, Cūṭvāriṇī, Cūṭvāriṇī, Cūṭvāriṇī 念處に次で修する所の行品なり。一心に精進して、四法を行ずる故に四正勤といひ、能く辨忘を斷する故に四正勤と名け、正しく身語意を策勵する中に於て、これ最勝なるが故に、四正勤といひ、意中決定して之を隨行すれば四意斷と名く。

【五】四正勤の第二。

三「舍利弗、云何が菩薩は法念處を觀するとならば、常に慧眼を以て一切の法を見、道場に坐するに至るまで、未だ曾て中に失せず。是の菩薩、法を觀する時に當り、一法乃至微相の、空・無相・無願・無作・無生・無滅・無物を離るゝを見ず、亦一法乃至微相の十二緣に入らざる者を見ず。菩薩の法を觀するや、諸の非法を見るに、是れ法にあらざる無し。云何が法と爲すとならば、謂はく無我の義、無衆生の義、無壽命の義、無人の義、是を名けて法と爲す。云何が非法とならば、謂はく我見・衆生見・壽命見・人見、斷見・常見、有見・無見、是を非法と名く。

「復次に一切の法は是れ法、一切の法は是れ非法たり。何を以ての故に。空・無相・無願を觀する、是をば一切法は是れ法なりと名け、我慢・憍慢・我及び我所攝取の諸見、是をば一切法は非法なりと名く。是の菩薩、法を觀する時、法にして菩提の因、出世道の因に非ざるもの有るを見ず。是の菩薩、一切の法は悉く是れ出世なるを知り、無礙の大悲を得、一切法は、煩惱の結縛にして、幻化の相の如しと觀じ、是の諸法は、煩惱有るに非ず、煩惱無きに非ざるを知る。何を以ての故に、諸法の義は、二性有ること無きを了すればなり。是の諸煩惱は隱蔽の處無く、聚集有ること無し。若し煩惱を解すれば、即ち菩提を解し、煩惱性の如く、菩提の性「も亦爾り」。是の菩薩、正念に安住し、一法の分別を作すべき有ること無く、諸の障礙も無く、善能く、正しく法性に住することを解了し、法性に住するが如く、即ち衆生性に住し、衆生性に住するが如く、即ち虛空性に住し、虛空性に住するが如く、即ち一切法性に住す。菩薩の法を觀する時、佛法に依つて、一切法は即ち是れ佛法なるを解す。其の心爾の時、盡智の無爲を生ぜず、盡と雖も亦不盡にして、無生智に入る。亦衆生を觀じて假名を捨せず。法念處とは、安住して正しく一切諸法を念するなり。所謂聲聞・緣覺・菩薩・正覺所知の、一切假名の諸法をば、未來際を盡して、終に忘失せざるなり。又法念處とは、無量の行を説いて佛法に親近し、諸の魔衆を壊して自然智を得るなり。舍利弗、是を菩薩の、正法念

三「四念處の第四、音譯には、自觀其法、觀他人法、得法意止と。

三「盡智、煩惱を斷盡し終りし時に生ずる自信の智、即ち我れ已に苦を知り、集を斷じ、滅を證し、を修せりと知るなり。

三「無生智、既に盡智を生じて、知斷修證の事畢れば、更に重ねて知斷修證の事かきを無生といひ、この無生を自覺して、我れ再び知斷修證すること無しと知るを無生智といふ。

す、善根の心と迴向心と合せず、迴向心と菩提心と合せず」と。若し菩薩、是の觀を作す時も、驚かず怖れざる、是を菩薩の勤精進と名くるなり。

「又復甚深の十二因縁を思惟觀察して、因果を失せず。是の心性は、衆の因縁に屬し長養すべからず、作無く繫無し。一切の諸法も、亦復是の如く、如法に修行して、莊嚴する所の如くなるを知る。

「我れ今當に、勤めて莊嚴を修集し、心性を離れざるべし」と。云何が心性、云何が莊嚴するとならば、心性は、猶ほ幻化の如く、主無く作無く施設有ること無し、莊嚴とは、作す所の布施、悉く以て嚴淨の佛土に迴向するなり。心性は、夢に見る所の如く、心相寂滅なり、莊嚴とは、持戒を具足し、諸通を修集するなり。心性は鏡中の像の如く、其の相清淨、莊嚴とは、修する所の諸忍を、悉く以て無生法忍に迴向するなり。心性は熱時の焰の如く、究竟して寂滅、莊嚴とは、一切の善に於て、深く精進を發し迴向して無上の佛法を具足するなり。心性は無色無對、爲作する所無し、莊嚴とは、一切所修の禪定・解脱・三摩跋提をば、迴向して佛の禪定を具足するなり。心性は見るを得べからず、亦取るべからず、莊嚴とは一切の間難に於て、善能く分別し迴向して、佛の智慧を具足するなり。心性は縁無くして生ぜず、莊嚴は常に善根を觀す。心性は因無くして生ぜず、莊嚴は助菩提に因つて、心を發起するなり。心性は六塵を捨離して心則ち無起、莊嚴は佛の境界に入るなり。是の如く菩薩は、是の心行を觀じ、念を神通に繫け、神通を得已つて能く一切衆生の諸心を知り、既に心を知り已らば、其の心量の如くに說法を爲す。

「又心の行を觀じて大悲に繫け、衆生を教化して、厭倦有ること無し。又心行の、不起・減盡・變異の相を觀じ、生死を捨てずして、煩惱を相續し、正しく是の心を念じて、生死無きを知り、正決定を成す。是の如く行すれば、聲聞・辟支佛地に墮せず。是の心勢を極め、一念の智を以て、阿耨多羅三藐三菩提を成す。舍利弗、是を菩薩の正心念處の、不可盡とは名く。

は樂を受「くるを説かん」と。

「云何が受を解するとならば、所謂受者無く、我一人衆生・壽命・養育・士夫無く、受を攝取する者、攝者、取を受くる者、有を受くる者、顛倒を受くる者、分別を受くる者、諸見を受くる者、眼相を受くる者、耳鼻舌身意の相を受くる者、色・想を受くる者、聲香味觸法の想を受くる者を除くなり。受とは眼の色に縁つて觸を生じ、苦を受け樂を受け不苦不樂を受くるなり。受とは耳の聲、鼻の香、舌の味、身の觸、心の法に縁つて觸を生じ、苦を受け樂を受け、不苦不樂を受くるなり、是を名けて受と爲す。復一受有り、心意覺了するなり、復二受有り、内受と外受となり。復三受有り、過去・未來・現在の受なり。復四受有り、四大を覺了するなり、復五受有り、五陰を思惟するなり。復六受有り、六入を分別するなり。復七受有り、七識住處なり。復八受有り、八邪法なり。復九名有り、九の衆生居處なり。復十受有り、十不善の法なり。舍利弗、要を擧げて之を言へば、無量衆生の諸受、思惟所縁の境界の一切をば受と名く。菩薩中に於て、受を修し觀行して、大智慧を起し、諸衆生の善不善と、生・住・滅の相を受くるとを知る。舍利弗、是を菩薩の正受念處の、不可盡とは名く。

「云何が菩薩、心念處を觀するとならば、菩提の心を忘れず失せず、正念不亂にして、是の如く心を觀す。一心生じ已れば、滅して住相有ること無く、内に於て住せず、外より來らずと。我れ初めて起す所の菩提心は、是の心已に盡き、過去に變異して、方所に至らず、宣説すべからず、住處有ること無し。若しは心所集の諸善根等も、亦是れ過去にして、滅盡變異し、方所に至らず、宣説すべからず、住處有ること無し、若しは心の善根廻向の阿耨多羅三藐三菩提も、是れ亦滅盡變異の法にして、方處に至らず、宣説すべからず、住處有ること無し。心は心を見らず、心は心を生ぜず、我れ何の心を以てか、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん。是の菩提の心と善根の心と合せ

【六】 想、麗本は相に作るも、三本等想となす。今後者に從ふ。

【七】 七識住、三界五趣に於て、識を長養し、識自ら住せんことを樂ふ所を差別して七識住を立つ。一、色身を有する有情にして、身と想と共に異なる處、即ち人趣の全と一分の天。二、同じく色身を有する有情にして、身異想一なる處、色界初靜慮の梵天。三、第二靜慮の三天にして、身一想異なる處。四、第三靜慮の三天、身一想一なる處。五、無色界の二無邊處天。六、同の識無邊處天。七、同無所有處天。(五六七の三天は、身形なく、只捨受相あるのみ)。

【八】 九有情居、前七識住と、有頂天と無想天との九は有情の樂んで住する處なるが故に、九有情居といふ。晉譯は九神處といふ。

【九】 四念處の第三、晉譯にいふ、何謂菩薩自觀己心觀他人人心、其意止也。

と無し、是の身は堅ならず、依怙すべからず、當に菩提正覺の身を求むべしと見るなり。云何が菩提正覺の身とならば、所謂法身なり、金剛の身なり。不可壞の身なり、堅牢の身なり、三界を出づるの身なり。我が身は無量の過患有りくわんげんと雖も、願はくは當に除滅して、如來の身を成すべしと。是の菩薩、堪忍して久しく四大諸結の焦然せうぜんに處る所以は、皆諸衆生を利益せんが爲の故なり。外の四大の地水火風、種々の門、種々の所作、種々の形貌、種々の器物、種々の所用など、皆一切衆生を利益せんが爲なるが如く、我が今の此の身の、衆生を利せん爲なること、亦復是の如くなり。

『菩薩摩訶薩、是の如き利益を見じり、身の衆苦を觀じて、厭離を生ぜず、身の無常を觀じて生死を厭はず、身の無我を觀じて、教化を捨せず、身の寂滅を觀じて、捨に墮せず。是の菩薩、内身を觀する時、煩惱を生ぜず、外身を觀するも、亦復是の如くなり。是の菩薩は、黒汚の身を離れて白淨びやくじやうの身業を成じ、妙相を具足して、以て自ら莊嚴し、人天の中に於て、利益する所多し。是を菩薩の、身を觀じ身を修するの行とは名く。

『云何が菩薩の、受を觀じ受を修するの行なる。菩薩は是の如く思惟す、諸受は一切皆苦なりと。

善く受を分別し、智慧もて籌量し、受の寂滅を知り、若しは樂を受くるの時も、所欲に貪せず、若しは苦を受けん時、三惡道を觀じて、大悲心を起し、瞋恚を生ぜず、若しは不苦不樂を受けん時、愚癡を起さざる、是は菩薩の正念受處なり。其の所受の——若しは樂、若しは苦、若しは不苦不樂なるが如く、是の諸の受に於て、出を知り修を知り、諸衆生の受は、寂滅莊嚴なるを觀じては、一是の諸衆生は、諸の受の中に於て、出と修とを知らず、若し樂を受くるの時は、貪著を生じ、若し苦を受くる時は、便ち瞋恚を生じ、若し不苦不樂を受くる時は、便ち愚癡を生ず。我れ今要す當に、進んで智慧を修し、一切の受を除いて、諸の善根を發し、大悲心を起して、智慧を攝取すべく、亦衆生の爲に、諸の受を除斷して說法を爲し、未だ受を解せざる者は苦を受け、受を解せる者

【四】 隨、麗本隨に作り、三本亦然り。古寫本隨に作る有り。今是に依る。

【五】 四念處の第二、晉譯には、何謂菩薩自觀三痛痒、觀他入痛痒二而得三意止」と。

と名く。

『菩薩は復、四力有つて智慧を具足す。何等をか四と爲す。一に精進力もて多聞を求め、解説を得るが故に、二に念力もて菩提の心を、忘失せざるが故に、三に定力もて、等しく分別する無きが故に、四に慧力もて多聞を修するが故に。是を四力もて智慧を具足すと名く。』

『復四の方便有りて智慧を具足す。何等をか四と爲す、一に世の所行に隨ひ、二に衆生の行に隨ひ、三に諸法の行に隨ひ、四に智慧の行に隨ふ、是を四の方便あつて智慧を具足すと名く。』

『菩薩は復、四道有つて智慧を具足す。何等をか四と爲す、一に諸の波羅蜜道、二に助菩提道、三に、八聖道を行じ、四に一切智慧を求むるの道なり。是を四道あつて智慧を具足すと名く。』

『菩薩は復、四の無厭足の行有つて、智慧を具足す。何等をか四と爲す、一に多聞を樂うて厭足有ること無く、二に説法を樂うて厭足有ること無く、三に慧を行じて厭くこと無く、四に智を行じて厭くこと無し。是を菩薩、四の無厭足あつて、智慧を具足すと名く。』

『復次に助智慧とは、一切衆生の心行に隨ひ、一切の法行に隨ひ、布施の行に隨ひ、持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の行に隨ひ、慈・悲・喜・捨の行に隨つて、智慧を具足することを得。何を以ての故にとならば、諸菩薩、發起する所の行の如きは、皆智慧を以て根本と爲す。智慧を成じ已つて、還智に依止す。是の菩薩、智に安住し、一切智に依るに、諸魔眷屬も、留難する能はず、是の故に能く一切智を具するを得るなり。舍利弗、是を菩薩の助智の無盡とは名くるなり。』

『復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の 四念處も、亦不可盡なり。是の菩薩、身を觀じ身を修するの行もて、過去未來現在の諸身は、顛倒・和合せること、外の草木・墻壁・瓦石の、因縁に従つて有り、長養すべからず、繫屬する所無きが如く、此の身も是の如く、因縁より生じて、長養すべからず、繫屬する所無し、是の陰界入中の我と我所とは空、常無常も空なり、是の身には我無く、我所有ること

【三】 二と三とは、晉譯異る。

【三】 四念處 *Catvāri an. Āyasmānānaṃ* 四念住ともいふ。衆生は身受心法の四に對して、淨樂我常なりとする四種の顛倒の妄見を起す。この見を破せん爲に、身の不淨、受の苦、心の無常、法の無我を觀するをいふ。此の念處は慧と體とし、慧の力能く身受心法の所觀の處を念せしむるが故に念處と名け、慧の力能く念をして所觀の處に住せしむるが故に念住と名く。

演説し、二に戒を持して常に法を勤求し、三に戒を持して正しく法を分別し、四に戒を持して菩提に廻向するなり、是を菩薩、四種の持戒ありて智慧を具足すと名く。

「菩薩は復四種の忍辱有つて智慧を具足す。何等をか四と爲す。一に求法の時に於て、他の惡罵を忍び、二に求法の時に於て、飢渴・寒熱・風雨を避けず、三に求法の時に於て、和上阿闍梨の行に隨順し、四に求法の時に於て、能く空・無相・無願を忍ぶなり。舍利弗、是を菩薩、四種の忍辱もて智慧を具足すと名く。

「菩薩は復、四種の精進有つて智慧を具足す。何等をか四と爲す、一に多聞を勤め、二に總持を勤め、三に樂説を勤め、四に正行を勤むるなり。舍利弗、是を菩薩、四種の精進もて、智慧を具足すと名く。

「菩薩は復、四種の禪定有つて智慧を具足す。何等をか四と爲す、一には常に獨處を樂み、二には常に一心を樂み、三には禪及び通を求め、四には無癡解智を求むるなり。舍利弗、是を菩薩四種の禪定もて智慧を具足すと名く。

「菩薩は復、四種の智慧有つて、智慧を具足す。何等をか四と爲す、一に斷見に住せず、二に常見に入らず、三に十二緣を了し、四に忍無我の行なり。舍利弗、是を菩薩、四慧を修して智慧を具足すと名く。

「菩薩は復、四の擁護法有りて、智慧を具足す。何等をか四と爲す、一に法師を擁護すること、己が君主の如くにし、二に諸の善根を護り、三に世間を將護し、四に他を護つて利益す。舍利弗、是を菩薩、四の擁護法ありて、智慧を具足すと名く。

「菩薩は復、四の満足法有りて、智慧を具足す。何等をか四と爲す、一に説法の満足、二に智慧の満足、三に利益の満足、四に諸法の満足なり。舍利弗、是を菩薩、四の満足法あつて、智慧を具足す

【九】第四、晉譯に務求三要素、以法爲戒と。

【一〇】この四に類するもの、晉譯は、先の施の四種の次に出す。

【一一】この四も亦、晉譯に在つては、先に註する所へに出づ。

因縁は、佛の智慧に依り、聲聞・緣覺の智慧に依るに非ず。智に親近すれば、心に傲慢無く、常に其の人に於て、世尊の想を起す。是の諸智は、受法の人を知り、心已に柔和にして、智慧を説かんに、依止を教令し、其の正器に隨ひ、無染の法を説く。聽法の人、是の法中に於て、助法精進を勤修聚集する、是を智慧とは爲す。

「云何が菩薩の助法精進なる。若しは怖求無く、事務を簡絶し、語言を省少にし、諸の所欲に於て、心常に知足し、初夜後夜に睡眠を減損し、凡そ聞く所の義を、能善く思惟し籌量し分別し、數善法を求めて、心に愛濁無く、諸の陰蓋を除いて、障礙有ること無く、犯す所の過失を、尋で能く除滅し、正行堅固にして、趣向傾仰し、法行を尊敬して精進行を具し、法を求めて懈らざること、頭然を救ふが如くし、我有ること無き行、遲緩ならざる行、本を捨てざる行、心増上の行、衆聞を呵するの行、獨を愛樂するの行、阿蘭若に向ひて、思惟に處るの行、聖種知足の行、不動頭陀の行、法を欣樂するの行、世間言語を思惟せざるの行、出世間法を求むるの行、正念を失せざるの行、諸法の義を發く行、眞正道の行、知縁總持の行、慚愧莊嚴の行、智慧堅牢の行、無明の網纏と結の繫縛とを除く淨慧眼の行、善く覺了するの行、廣く覺了するの行、覺を滅せざるの行、覺を分析するの行、現在知の行、他の功德に従はざる行、自ら功德を恃まざる行、他人の諸功德を讚歎する行、善く作業を修する行、因果不動の行、清淨業を知るの行、などなり。舍利弗、是を助法精進とは名く。

『復次に舍利弗、菩薩摩訶薩に 四種の施有りて、智慧を具足す。何等か四と爲す、一に紙筆墨を以て法師に施與し、經を書寫せしめ、二に種々に校節せる莊嚴の妙座を、以て法師に施し、三には諸の須つ所の供養の具を以て、法師に奉上し、四には詔曲の心無くして法師を讚歎するなり。舍利弗、是を菩薩、四種の布施もて智慧を具足すと名く。』

「菩薩は復、四の禁戒を持する有つて、智慧を具足す。何等か四と爲す、一に戒を持して常に法を

【六】 晉譯に、何謂法業と。

【七】 この四種、晉譯や異る。

【八】 晉譯は現いて、禁業を成する數種の四法を掲ぐ。

德は、梵天勸請の福にも等し。諸相を具足するは、門を開いて大に施す故なり、隨形好を得るは、諸の善根を修する故なり、身を莊嚴するは、憍慢無き故なり、口を莊嚴するは、口の過を離るゝ故なり、意を莊嚴するは、法に住せざる故なり、佛土を莊嚴するは、神通もて教化する故なり、法を莊嚴するは、諸の欲を離るゝ故なり、大衆を莊嚴するは、兩舌・惡口もて他を破壞せざる故なり、受法の者に於ては、如實に説くが故なり。法を説かば歡喜して善い哉と稱讚す。作す所の功業、唐捐ならざる故なり。覆蓋を離るゝは、往いて一法を聽くが故なり。菩提樹を莊嚴するは、妙園林を以て、佛に施し奉る故なり、道場を莊嚴するは、一切の諸善根を成就する故なり。清淨に出生するは、煩惱の爲に染汚せられざる故なり、寶手を得るは、能く一切所重の物を捨する故なり、無盡を得るは、無量の寶藏を、以て布施する故なり、見る者歡喜するは常に和悅する故なり、法性を體得するは、心慧・光明等、衆生を照す故なり、光明を莊嚴するは、末學を輕んぜずして善く誘導するが故なり。生生に清淨なるは、持戒の功德、悉く成就する故なり、胎に處つて清淨なるは、他の罪を見ざる故なり、人天に生ずるは、淨く十善を行する故なり、慧明もて獨歩するは、教化すべき所に、分別を生ぜざる故なり、法に於て自在なるは、愛重する所の法に、惋惜無き故なり、世中に獨り尊きは、畢竟清淨の故なり、微妙の解脱あるは、少分の行を求めざる故なり、一切の功德を行ずるは、一切智の心を捨せざる故なり、七財の滿ち具はるは、信を根本と爲す故なり、正法を攝取するは、身命を惜まざる故なり、世間を誑かざるは、本誓願を具する故なり、一切の佛法を具足するは、諸善の根本を、本已に行じたる故なり。舍利弗、是を菩薩の功德を略説すと名く。若し廣説せば、若しは一劫を經、若しは一劫を過ぐるも、盡すを得べからず。

『云何が菩薩の智慧無盡なる。若しは一一の因に、智慧を説くを聞き、若しは一一の縁に、智慧を得ればなり。云何が因と爲す。内に欲を増上す。云何が縁と爲す。外に法を勤求するなり。是の如き

【四】 往の上、麗に故の字有り、今三本に依つて除く。

【五】 七財、七種の出世間の法財、この七種に依つて、道果を得るが故に財と名く。七は信心、精進、戒律、慚愧、聞法、布施、止觀(定慧)。

卷の第三十

無盡意菩薩品 第十二之四

「復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の 助道を修集する功德智慧も、亦不可盡なり。云何が修集の功德無盡なる。若しは布施持戒もて心に修集する所、慈悲を發行し、自所有の罪を發露懺悔し、亦衆生に代つて發露懺悔し、已に懺悔を行じては、次に當に隨喜すべし、一切の衆生、學、無學の人及び辟支佛、發心の菩薩、已に習行せる者、堅住不退・一生補處など、是の如き諸人、三世の中に於て集する所の功德をば、當に一心を以て、共に隨つて歡喜すべし。復過去・未來・現在の諸佛世尊所有の善根に、隨喜の心を生ず。是の隨喜の菩薩、悉く當に是の如き功德成就すべし。隨喜し訖り、次に當に十方世界の一切諸佛を勸請すべし。始めて道を成ずる者には、轉法輪を請ひ、涅槃を示す者には、常に住せん」ことを請ひ、及び一切の菩薩聖人には、常に衆生の爲に、世に住して說法せんことを請ふ。是の如き善根をば、菩提の想の如く、悉く以て無上菩提に廻向す。是の菩薩は、未發心の者を、發心せしめ、已發心の者には、爲に諸の 度を説き、貧窮の者有らば、救攝するに財を以てし、病めるものには醫藥を施し、時に隨つて瞻療し、勢力無き者には、忍辱を行することを勧め、禁を犯す者有らば、覆藏せざらしめ、已に覆藏する者には、勸めて發露せしめ、現在の諸佛及び涅槃せる者には、悉く皆發心して供養・恭敬し、師長を敬重すること佛世尊の如くす。若し法を求むる時は、命を没するも懈たらず。此の法寶に於て無價の想を生じ、說法の者に於ては、諸佛の想を生じ、法を聽かん爲の故には、百由旬を過ぐるも、心力勇銳にして疲勞の想無く、凡そ講説する所は、利養の爲ならず。父母の所に於て恩を知り恩を報じ、供養給事して、心に初より悔無く、作す所の功德に、常に厭足する無く、身・口・意を護つて詛曲無からしめ、佛塔を建立して得る所の功

【一】 晉譯卷第六。
【二】 助道云云、晉譯に功徳業及聖慧業、亦不可盡と。

【三】 度、六度十度などの波羅蜜の行をいふ。

大悲の心を生じ、人天の中に於て、^{五五} 偏潤する所多し。所謂佛世尊なり、是の如き等をば、佛世諦に依り、衆生を化せんが爲の故に、是の説を作すと名く。若し是の如き見を擧取する者有らば、是を人に依るとは謂ふ。如來は人見を擧する者を化せんが爲の故に、法に依つて人に依らざれと説く。是の法性は、不變不易にして作と非作と無く、住と不住と無く、一切平等にして、等も亦平等、不平等も亦復平等、^{五五} 因無く緣無く、正しく決定を得、一切法に於て別無く異無く、性と相と無礙なること、猶ほ虚空の如し。是を法性^{五五}と名く。若し是の法性に依止する有らば、終に復一相の法を離れず。是の門に入る者は、一切法の同一法性を觀ず、是の故に説いて、一切の法に依り、人に依らざれと言ふなり。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の^{五六} 四依の無盡とは名く」と。^{五七}

【五四】繞、慶本餘に作る、今三本に従ふ。

【五五】因、慶本思に作る、今三本に従ふ。

【五六】四依、晉譯に四處之義といふ。

【五七】晉譯卷第五終。

「云何が智に依つて識に依らざるとならば、識とは四識の住處なり。何等か四なる、色識の住處と受・想・行識の住處となり。智とは四識の性は住する所無きを解了するなり。識とは若しは地大、水・火風大を識り、智とは識の住する四大は、法性と別無きなり。識とは眼識は色に住し、耳鼻舌身意識は法に住し、智とは内性寂滅にして外に所行無く、諸法を了知して憶想有ること無きなり。識は専ら所縁を取つて思惟分別し、智は心に所縁無く、相貌を取らず、諸法の中に於て悌求する所無きなり。識は有爲法を行じ、智は無爲法に、識の所行無く、無爲の法性には、識知有ること無きを知るなり。識は生住滅の相、智は生住滅無き相なり。舍利弗、是を智に依つて識に依らずと名く。」

「云何が了義經に依つて不了義經に依らざるとならば、不了義經とは修道を分別し、了義經とは果を分別せざるなり。不了義經とは、作す所の行業に果報有ること無きなり、了義經とは諸の煩惱を盡すなり。不了義經とは諸の煩惱を訶し、了義經とは白淨の法を讚ふるなり。不了義經は生死の苦惱を説き、了義經は生死と涅槃と、一相にして二無きを 讚ふるなり。不了義經は種々莊嚴の文字を讚説し、了義經は甚深の經の、持し難く了し難きを説くなり。不了義經は、多く衆生の爲に罪福の相を説き、開法の者をして心に欣感を生ぜしめ、了義經は、凡そ演説する所、必ず聽く者をして心に調伏を得しむるなり。不了義經は、若しは我・人・衆生・壽命・養育・士夫・作者・受者などの、種々文字と、諸法に施者受者有ること無きことを説き、而も他の爲に施有り受有りと説き、了義經は空・無相・無願・無作・無生と、我・人・衆生・壽命・養育・士夫・作者・受者有ること無きとを説き、常に無量の諸解脱門を説く。是を了義經に依つて、不了義經に依らずと名く。」

「云何が法に依つて人に依らざると。人とは 人見・作者・受者を攝取し、法とは人見・作者・受者無しと解するなり。人とは凡夫・善人・信行人・法行人・八人・須陀洹人・斯陀舍人・阿那舍人・阿羅漢人・辟支佛人・菩薩人などなり。一人世に出づれば、利益する所多く、多くの人樂を受く。世間を憐愍して

【四六】 四依の第二を説く。

【四七】 晉譯に、住於識者、則有四事、一曰識在於色、心處、其中、二曰而懷三想、一處在縛著。三曰遊於生死、識在周旋。四曰、迷識識者不能自拔、と。

【四八】 この句、同に、何等爲慧、其識不處住五陰地、諸諸陰蓋、色痛想行識、是謂爲慧と。

【四九】 本文に、智者知無爲法、識無所行、無爲法性無有識知とあり。

【五〇】 四依の第三、晉譯には、歸於要經而不迷惑、本に依つて加ふ。

【五一】 讚、麗本に缺く、今三本に依つて加ふ。

【五二】 四依の第四、晉譯には自歸於法、而不取人、と。

【五三】 人見は實の人我有りと執する見、即ち(人)我見なり。

に依つて語に依らざると、智に依つて識に依らざると、了義經に依つて不了義經に依らざると、法に依つて人に依らざるとなり。云何が義に依つて語に依らざるとならば、語とは若しは世法の中に入つて説く所有るなり、義とは出世の法を解し、文字の相無きなり。語とは、若しは布施・調伏・擁護を説き、義とは施・戒・忍を知りて平等に入るなり。語とは生死を稱説し、義とは生死の無性を知るなり。語とは、涅槃の味を説き、義とは涅槃の性無きを知るなり。語とは、若しは諸の乘を説くに、安止する處に隨ひ、義とは善く諸乘を知つて、一相の智門に入るなり。語とは、若しは諸の捨を説き、義とは三種の清淨なり。語とは身口意の、淨戒・功德・威儀を受持することを説き、義とは身口意の、皆所作無きを了し、而も能く一切の淨戒を護持するなり。語とは若しは忍辱の、恚怒・貢高・憍慢を斷除することを説き、義とは諸法を了達して無生忍を得るなり。語とは、若しは勤めて一切の善根を行することを説き、義とは精進に安住して終始有ること無きなり。語とは若しは諸禪・解脱三昧・三摩跋提を説き、義とは滅盡定を知るなり。語とは悉く能く一切の文字・智慧の根本を聞持し、義とは是の慧の義、宣説すべからざるを知るなり。語とは三十七助道の法を説き、義とは正しく諸の助道の法を修行することを知つて、能く果を證するなり。語とは苦・集・道諦を説き、義とは滅諦を證するなり。語とは無明の根本、乃至生は老死を緣することを説き、義とは無明滅すれば乃至老死滅するを知るなり。語とは助定慧の法を説き、義とは解脱の智を明すなり。語とは貪・恚・癡を説き、義とは不善根即ち是れ解脱なるを解するなり。語とは障礙の法を脱し、義とは無礙解脱を得るなり。語とは三寶の無量の功德を稱説し、義とは三寶の功德と離欲の法と、性同じく無爲の相なるなり。語とは發心より道場に坐するに至るまで、修集・莊嚴する菩提の功德を説き、義とは一念の慧を以て一切の法を覺するなり。舍利弗、要を擧げて之を言へば、能く八萬四千の法聚を説く、是を名けて語と爲し、諸の文字の宣説すべからざるを知る、是を名けて義と爲すなり。

【四七】三種の清淨、捨を行ずる時、捨する物と、捨すること、捨を受ける人とに就て、何等の思念無きをいふ。

辭無礙智と名く。是の如き語法文字を思惟・覺するに礙無し。是の菩薩、一語二語三語乃至多語、男語・女語・非男女語、過去語・未來語・現在語を知り、一字を積んで多字に至る語を知る、是を辭無礙智と名く。是の辭無礙智もて説く時、謬ること無く滯礙無く、妙語もて通暢し、言ふ所審諦。正直にして龜無く、有らゆる文字に莊嚴を具足す。大衆の聞く者、歡喜せざる無し、是の如き種々の微妙の音聲は、深遠にして廣普し、俗語・第一義語を莊嚴し、智慧の箭を以て善く邪見を射るなり。是の辭無礙は、諸佛の許したまふ所、能く衆生をして皆歡喜するを得しむ。舍利弗、是を菩薩の辭無礙智の不可盡とは名く。

【舍利弗、云何が菩薩の樂說無礙智の、不可窮盡なる。所說無礙にして、所說不住、所說速疾にして所說捷利、所問の如く答へ、罣礙無く答へ、違順無く答へ、是に相應して答へ、忍力に住して答へ、二諦に依つて答へ、施戒忍進定慧に依つて答へ、一切の法・章・句に依つて答へ、念處・正勤・如意・根・力・覺・道の甚深の義に依つて答へ、寂滅の思惟に依つて答ふ。所謂樂說無礙智は、若しは一切の言語文字、口の分別する所に、正直に答へ、所謂一切の禪定・三摩跋提の眞諦智もて答へ、三乘を辯暢し、諸衆生の一切心行に隨つて、應の如くに答へ、所言巧妙にして、啞羊の如きに非ず。強梁・龜惡・卒暴・恍惚など、是の如きの語、悉く復有ること無く、宜ぶる所寂滅にし、人の受用する所、威徳の言にして諸の纏縛無く、相應して違する無く、微妙柔軟にして、譏訶すべき無く、聖人の讚ふる所たり。佛世尊の教誨したまふ所の語の如く、梵音清徹にして一切悉く聞く。是の樂說無礙智は、諸佛の所許にして、他の衆生の爲に微妙の法を説くに、是の法を聞かん者、出世の樂を得、諸の苦を滅盡す。是を樂說無礙智と名くるなり。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の四無礙智の不可盡とは名く。

【復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、四依の法有り、亦盡すべからず。何等をか四と爲すとならば、義

【二】樂說無礙智 *Pratibhāna*
Pratibhāna-vit. 音譯に辭辯とす。

【三】梵に *Samāpatti* 定の一種。

【四】四依 *Outvāri* *Pratibhāna-vit.* この四音譯に、菩薩辯才、復有「四事」、一曰取義不取諱、二曰歸慧不取所議、三曰歸於要經、而不迷惑、四曰自歸於法而不取人と。

れ緣覺乘の、十二因縁を觀するの智なり、是れ大乘の、一切善根を具足するの智たり。舍利弗、是を菩薩の義無礙智とは名く。

「又復義無礙とは、一切法の義を思するなり、何を以ての故に、是の一切法は、我・衆生無く、命無く人無ければなり。如し我・衆生無く命無く人無ければ、即ち名けて義と爲す。命の義の如く、色等の諸法も、亦復是の如し、是を義無礙と名く。又復義無礙とは、是れ無住の説なり、是れ無盡の説なり、是れ一切法を得るの説なり。是の如き義無礙は、諸佛の許したまふ所たり。是の眞實義は、別無く異無く、智慧もて分別するに、障礙有ること無し、是を菩薩の義無礙智の不可盡と名く。

「舍利弗、云何が菩薩の法無礙智なる。若し諸法——所謂善法・不善法、世法・出世法、可作法・不可作法、有漏法・無漏法、有爲法・無爲法、黑法・白法、生死法・涅槃法——を觀じて、是の智法性と平等、是の智菩提と平等、是の智性と平等ならば、是を法無礙智と名く。又復法無礙とは、衆生の多欲の心行、少欲の心行、初發欲心行、欲相の心行、現在所緣欲心の行、現在因緣欲心の行を觀するなり、衆生の、内に欲行有りて外に欲行無く、外に欲行有りて内に欲行無き有り、内外の欲行有り、内外に欲行無き有り、色の欲行にして聲香味觸に非ざる有り、聲の欲行にして色香味觸に非ざる有り、香の欲行にして色香味觸に非ざる有り、味の欲行にして色聲香觸に非ざる有り、觸の欲行にして色聲香味に非ざる有り。是の如くにして衆生の諸欲行の門を觀する行に入れば、欲行に二萬一千、慧行に二萬一千、癡行に二萬一千、等分の行に二萬一千あり、是の如き衆生の八萬四千心の所行を觀じて、如實に知り、其の所應に隨ひて、説法を爲す。舍利弗、是を菩薩の法無礙智の不可盡とは名く。

「舍利弗、云何が菩薩の辭無礙智なる。諸の音聲に於て、悉く觀じて了知す。所謂天・龍・鬼神・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人など、是の如きの言語・文字・音聲をば、皆悉く能く知る、是の如き五道雜類の衆生に、其の種類に隨つて、一一の音聲・語言・文字もて説法を爲す、是を

【四〇】 法無礙智 Dharmā Praṭi-
sarvit 音譯に法辯とす。

【四一】 辭無礙智 Nirakṣati
Pratishrupyati 音譯に應辯とす。

是を菩薩、四攝しよさつの法を以て衆生を攝取しやくしゆすること、不可盡なりとは名く。

「復次に舍利弗、菩薩摩訶薩ぼつさつまがさつの 四無礙智しよむがいちも、亦盡すべからず。云何が四と爲す、一に義無礙、二に法無礙、三に辭無礙、四に樂說無礙らくさつむがいなり。云何が 義無礙ぎむがいなる、諸法の中に於て、第一義を知るなり。是れ比智なり、是れ因智なり、是れ緣智なり、是れ和合智なり、是れ邊に墮せざる智なり、是れ中に住せざる智なり、是れ十二因緣の智なり、是れ法性に異らざる智なり、是れ如實智なり、是れ眞際智なり、是れ空を觀する空智なり、是れ無相の相智なり、無願の願智なり、是れ無爲の爲智なり、是れ一相を觀するの智なり、是れ無我 觀するの智なり、是れ無衆生を觀するの智なり、是れ無命を觀するの智なり、是れ無我を觀する第一義の智なり、是れ過去を觀する無罣礙の智なり、是れ未來を觀する邊有ること無きの智なり、是れ現在を觀する一切種智なり、是れ諸陰は怨賊おんそくの如しと觀する智なり、是れ諸界は毒蛇の如しと觀するの智なり、是れ諸入は空聚の如しと觀するの智なり、是れ内の法は永に寂滅なりと觀するの智なり、是れ外の法は、行處無しと觀するの智なり、是れ所緣は幻化の如しと觀するの智なり、是れ念の正住を觀するの智なり、是れ忍の正法を觀するの智なり、是れ自身を觀するの智なり、是れ諸の諦を觀するの智なり。是れ苦の不和合「を觀する」の智なり、是れ集じふの不作ふさく「を觀する」の智なり、是れ滅の自性「を觀する」の智なり、是れ道の能く到る「を觀する」の智なり。是れ諸法を分別するの智なり、是れ衆生の諸根心行は所入に隨ふを觀するの智、是れ諸力の能く伏するもの無き智なり、是れ諸覺の、如實に解する智なり、是れ禪定受持の智なり、是れ慧光明の智なり。是れ幻化莊嚴「を觀する」の智なり、是れ熱時の煩惱惑する「を觀する」の智なり、是れ夢中所欲「を觀する」の智なり、是れ響の所緣「を觀する」の智なり、是れ鏡中の緣は去來無き「を觀する」の智なり、是れ種々の相と無相「を觀する」の智なり、是れ扼やくと離扼りやくと「を觀する」の智なり、是れ取生しゆじやう・離生「を觀する」の智なり。是れ聲聞乘の、他より聞くの智なり、是

【三八】四無碍智 *catvārah*
prati-mūlyā また四無碍辯
(解)ともいふ。これ諸菩薩説
法の智辯なれば、意業に約し
て解といひ、智といひ、口業
に約して辯といふ。音譯は四
辯才とす。

【三九】義無碍 *Artha priti-*
panviti 音譯には義辯とす。

は、行に限齊無きなり、利行とは畢竟悔せず、同利とは、大乘に迴向するなり。復次に施とは、慈
を行じ捨を行じ、愛語とは、喜心を捨せず、利行とは、大悲もて莊嚴し、衆生を利するなり、同利
とは、高下を捨し、發心して一切種智に迴向するなり。復次に施とは、如法に財を求め、清淨に施
を行するなり、愛語とは、愛する者を將導して善法に安止せしめ、利行とは、己利を説いて以て他
を利益し、同利とは、諸の衆生をして、一切智の心を發さしむるなり。復次に施とは、内外を捨し、
愛語とは、功徳智慧ありて、心に慍懣無きなり、利行とは、自利の行を捨てて利他を行じ、同利と
は、重位を棄捨して、心初より悔無きなり。復次に法施とは、聞く所の法の如く、悉く能く演説す
るなり、愛語とは、利養の爲に、法を演説せず、利行とは、他を誨へて諷誦し、心に疲厭無く、同
利とは、一切智の心に得る所の妙法、即ち此の法を以て、衆生を勸勵するなり。復次に法施とは、
若し衆生有り、一一に法を聽き、次第に説を爲して錯謬無きなり、愛語とは、人の爲に法を説くに、
遠近を辭せざるなり、利行とは、法を求むる人有らんに、衣服・飲食・臥具・病瘦の醫藥を供給して、
乏しき所無からしめ、既に安んずる所を施して、然る後應に隨つて演説を爲すなり、同利とは、凡
そ講説する所、常に衆生に勸めて、阿耨多羅三藐三菩提に迴向せしむるなり。復次に法施とは、諸
の施の中に於て、其の最勝なるを知り、此の勝法を以て、人の爲に演説するなり、愛語とは、常に
衆生を利益せんが爲の故に説くなり、利行とは、義に隨つて説き、文字に隨はざるなり、同利とは、
常に佛法を具足せんが爲の故に説くなり。復次に施は檀波羅蜜を具足し、愛語は尸羅・屬提波羅蜜を具
足し、利行は毘梨耶波羅蜜を具足し、同利は禪那・般若波羅蜜を具足す。復次に施とは、初めて菩提
心を發し、愛語とは菩提を修行し、利行とは菩提を退せず、同利とは一生にして補處するなり。復
次に施とは、菩提の種子根本に安住し、愛語とは、滋もて菩提の芽莖・枝葉を長ぜしめ、利行とは、
漸く以て開敷して菩提の華を生ぜしめ、同利とは、已に能く菩提の果實を成就するなり。舍利弗、

を成就じゆん示現する時、能く是の如き瞋恚・憍慢・貢高の衆生をして、内に善く調伏せしめ、調伏を知り已つて然る後、應に隨つて說法を爲す。

『是の菩薩、如意通を修して、能く智慧變化の勢力を得、變化の力を以て、諸の作さんと欲する所をば、悉く成就するを得、能く大海を變じて以て牛跡ごしと爲すも、大海は小ならず、又牛跡を變じて以て大海と爲すも、牛跡大ならず。若しは劫盡きんとして火災起る時、變じて水と爲さんと欲するに、能く意の如くに變じ、水災起らん時、能く變じて火と爲し、風災起らん時、能く變じて火と爲し、火災起らん時、能く變じて風と爲し、風災起らん時、能く變じて水と爲し、水災起らん時、能く變じて風と爲し、是の如き變化をば、皆悉く成就す。若しは上中下の法をも、意に隨つて變化す。唯諸佛を除き、更に人の、能く、菩薩の如意神通を移動し留礙りうがいし破壊するもの、有ること無し——所謂釋梵・天王・魔王破旬及び其の眷屬などなり。是の菩薩、種種の變化を作して、諸の衆生に示し、歡喜せしめ已つて、然る後、意に隨ひて說法を爲す。是の菩薩、神通は、勇健自在ゆうけんざいざいにして、能く諸魔・煩惱の境界まうがいを過ぎて、佛界に入り、衆生を惱まさず、有らゆる善根をば、皆悉く成就し、一切の魔衆も、能く斷する者無し。舍利弗、是を菩薩の如意神通の不可盡とは名く。』三六

『復次に舍利弗、菩薩の四攝しやくも亦盡すべからず。云何が四とは爲す、一に布施、二に愛語、三に利行、四に同利なり。云何が布施なる。施に二種有り、財施と法施となり。云何が愛語なる。財を求むる人、及び法を聽く者に於て、柔和に與に語るなり。云何が利行なる、求財ぐざいの人及び聽法の者に於て、其の求むる所に隨ひ、悉く満足せしむるなり。云何が同利なる、財と法とを求むる者には、大乘と已利とを以て、彼をして安止せしむるなり。又復施とは、諸の乞求を見て、心に清淨を生じ、愛語とは、諸の乞士に於て、心に歡喜を生じ、利行とは、諸の乞士に於て、其の利する所に隨ひ、満足せしめ、同利とは、常に大乘を以て、衆生を勸誨するなり。復次に施とは、所謂捨心、愛語と

【六】 晋譯は、次に菩薩の漏盡通に就て述ぶ。

【七】 四攝 Caturāṅgaha vaduḥ、菩薩が衆生を度脱せしむるにつき、先づ用ひて衆生を攝招する四種の法、晋譯は四恩行と云ひ、布施、仁愛、利益、等與とす。

苦・無我を念じ已り、過去の穢行は發露懺悔し、現世の諸惡は乃至命を失し終るまで、之を爲さず。過去の善根をば、増廣せしめんと欲して、阿耨多羅三藐三菩提に迴向し、現在の善根をば、衆生と共に、阿耨多羅三藐三菩提に迴向す。是の菩薩は、諸惡を離れ、三寶の種を斷ぜざるが故に、有らゆる善根をば、悉く以て阿耨多羅三藐三菩提に迴向す。舍利弗、是を菩薩の、宿命智を念じて不可盡なりとは名く。

〔復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の如意神通も亦盡すべからず。云何が菩薩の如意神通なる。若しは欲進心慧所攝の諸法もて、調伏柔和にして、心に自在を得るなり。善く修集するが故に、現在に能く是の如意通を得。是の菩薩、種種の神通變化を作すは、是の神通を以て、衆生を化せん爲なり。是の菩薩は、一一に種種の神通を示現して、衆生を教化す——所謂若しは色相、若しは力勢、若しは變化などなり。〕

〔是の菩薩、種種の色相を示し、衆生をして見せしむるに、見已つて心伏す——所謂、若しは佛の色縁、若しは緣覺の色像、若しは聲聞の色像、若しは釋・梵・護世・轉輪聖王の色像、及び餘の種種無量の色像など、乃至畜生の色像を示現す。衆生を化せんための故に、是の示現を作し、是を示現し已り、其の所應に隨つて、説法を爲す。〕

〔若し衆生有り、自ら謂はく、己身には大勢力有りとして、傲慢・瞋恚・貢高を起さんに、菩薩は是の如き諸の衆生を、調伏せんが爲の故に、大力を示現せんと欲す。所謂那羅延力の、四分の一、或は四分の二、或は四分の三を示現し、或は須彌山王——高さ十六萬八千由旬、縱廣八萬四千由延なる——を示現せしめ、三指を以て、擧げて他方無量の世界に擧置すること、譬へば一阿摩勒の果を擧つが如くにして、菩薩の力に於ては、損減する所無く、一また三千大千世界を斷取して、下水際を盡し、手を以て之を擧げ、高さ有頂に至り、住すること一劫を經ん。菩薩は是の如き大勢力

【一〇】如意通 Rahitvānti 自身の變現自在を得る通力なれば身如意通といひ、遊涉往來の自在なる通力なれば神足通といひ、不思議に境界を變現する通力なれば神境通といふ。

【三】この句、晉譯に、自察己心、而好三精進、攝受法、典、所修業行、輒能成就云云と。

【三】せしめ(令)、麗本全に作る、今三本に依る。

【三】梵に Amulika 玄應音義に依れば、葉は小莖の如く、花は白小、果は胡硯の如し。薬用とすべしと。

【四】水際、世界は五輪より成るとの説に依れば、九山八海の下に地輪あり、その下に水輪あり、風輪と虚空輪と、次第してその下に在りといふ。水際とは、即ちこの水輪の最下層をいふ。

【五】有頂、梵に Akāśa-parāṇi 色究竟天なり。色界の最も頂なれば有頂といふ。

にして無諍むじやうの故に、諸の煩惱ぼんなん無き故に、淵流えんりゅう有ること無き故に、一切の法を照すが故に、善く一切衆生の心に入るが故に、能く是の如くに解す。是の菩薩の心・智、猛利にして、是の如きの法に於て、正しく知に入る者、是を菩薩の他心智通の、不可盡とは名く。

〔復次に舍利弗、菩薩の二九宿命智通も亦不可盡なり。云何が菩薩の宿命智通なる。是の菩薩、宿命の事を念じ、若しは自・若しは他なるも、善く受けて憶持し、法界に安住して傾動きやうどう有ること無し。傾動無きは、能善く善の作業を解了するが故なり、是の念に惱無し、禪定に安住するが故に、是の念は畏無し、善く智慧を攝する故に、是の念は他より求めずして、現に善く知るを得るが故に、是の念は正しく憶すれば、畢竟不失の故に、是の念は功德を助けて善く大乘を解するが故に、是の念は智を助け、他に從つて具足せざるが故に、是の念は善根・諸波羅蜜を具足す、能く一切の佛法に到るが故に。

〔是の宿命智は、若しは一生・二生・三生・四生・五生・十生・二十生・三十生・四十生・五十生、乃至百生・千生・百千生・無量の百生・無量の千生・無量の百千生、及び天地の成壞じやうくわい、無量の成世、無量の壞世、無量の成壞世、無量の成壞劫を念じ、諸の衆生の、是の中に於て、是の如き種姓に生れ、是の如き名字、是の如き色像にして、是の如き飲食おんじき、是の如き壽命あつて、苦樂等を受け、是の中に於て死し、還是の中に生れ、彼の中に死して、還彼の中に生れたるを知る。是の菩薩、是の如き等の無量の生死を念じ、自ら宿世を念じ、及び他の衆生の「宿世を念じて」過去際を盡す。是の菩薩は、自の善根・廻向・阿耨多羅三藐三菩提を念じ、他の善根を念じ、願ふて阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ。是の菩薩は、正念の心を以て、本の生死・行苦に於て、善く無常・苦・無我を觀じ、若し無常・苦・無我を觀ずれば、諸の色・封・壽祿・壽命・眷屬に於て自在にして、悉く貪著無く、亦梵・釋・護世・轉輪聖王、及び生を受くる處の五欲の歡樂に食せず、衆生を化せんが爲の故に、現に生を受く。是の菩薩、無常・

【二九】宿命通 Purvataṅga-
jñāna 自己及び六道
衆生の、宿生の生涯を知るに
於て、無碍なるもの。晉譯に
は念往古知とす。

未來世中に精進の因有り、現在世中に忍辱の因有るを知り、是の衆生、未來世中に禪定の因有り、現在世中に精進の因有るを知り、是の衆生、未來世中に智慧の因有り、現在世中に俗心を行するの因あるを知り、是の衆生、未來世中に大乘を發す因あり、現在世中に下根の因有るを知り、未來の衆生、是の如き等の諸の因・諸の緣有り、是の諸因緣をば、能く如實に知る。菩薩は未だ化を受けざる衆生に於て、終に疲厭せずして、其の心根の如く如實に能く知り、其の器量に隨つて、而も說法を爲し、若し少聞を樂はば、則ち多く説かず、説かば必ず益功有つて唐捐ならざる、是を菩薩の他心を知るの智と名く。

『若しは現在世の衆生の所行、心と心數の法とを、悉く如實に知る——所謂欲心を如實に知り、欲心と離欲の心とを如實に知り、離欲の心と恚心とを如實に知り、恚心と離恚の心とを如實に知り、離恚の心と癡心とを如實に知り、癡心と離癡の心とを如實に知り、離癡の心と散心とを如實に知り、散心と攝心とを如實に知り、攝心と懈怠の心とを如實に知り、懈怠の心と精進の心とを如實に知り、精進心と下心とを如實に知り、下心と上心とを如實に知り、上心と亂心とを如實に知り、亂心と定心とを如實に知り、定心と無解脫心とを如實に知り、無解脫心と有解脫心とを如實に知り、有解脫心と無寂靜心とを如實に知り、無寂靜心と有寂靜心とを如實に知り、有寂靜心と有量心とを如實に知り、有量心と無量心とを如實に知り、無量心と、一一の衆生の一一の煩惱纏覆の心とを、一切皆知り、是の如く知り已つて、其の出道の如くに說法を爲す。』

『又是の菩薩、所住の處には、先づ衆生を觀じて其の根の量を知り、隨つて爲に出要の法を説き、是の諸衆生の上中下の根をば、悉く如實に知る。是の菩薩、他心を知るの時、障礙有ること無し、何を以ての故にとならば、是の菩薩の心・智、猛利にして善く分別するが故に、念意と進慧との所知の故に、善能く菩提の相を解了する故に、諸の習氣を斷する故に、清淨にして無垢なる故に、明了

若し不實なるも、他を利益せんが爲には、清淨心の方便を以て説くを得、若し喜ぶ所の聲ならば、即ち能く聞くを得、喜ばざる所ならば、即ち復聞かず。若し大衆に於て、諸の衆生の爲に、法を演説せん時は、其の耳識の所解・所受に隨ふ。是の菩薩の天耳は、悉く聞知するを得。若し説法の時、或は衆生有り、應に解悟すべくんば、便ち法を聞くを得しめ、解悟せざらんには、則便ち聞かざらしむ。

『是の菩薩の耳界は、法界のごとく、其の性清淨なり、我・人・衆生の悉く清淨たるを知見するが故なり。是の菩薩、正しく耳界を分別すること、言語・文字・所説の相の如し。若し五、五趣雜類の衆生有らんに、其の解する所の言語・音聲に隨つて説法を爲す。是の天耳を持つて、如來所得の耳界に廻向す、餘の乘を求めざる故に。舍利弗、是を菩薩の天耳神通の、不可盡とは名く。

『復次に舍利弗、菩薩の他心を知るの通も、亦盡すべからず。云何が菩薩の知他心通なる。若しは諸衆生の上中下の心を、菩薩悉く知る。是の衆生の施根に因る心相を知り、是の衆生の戒根に因る心相を知り、是の衆生の忍根に因る心相を知り、是の衆生の進根に因る心相を知り、是の衆生の定根に因る心相を知り、是の衆生の慈悲喜捨の根に因る心相を知り、是の衆生の、聲聞・緣覺・大乘の根に因る心相を知り、是の衆生、力の増上に因つて、善根の具足するを知り、是の衆生、行に因つて善根を増上するが故に、此に生ずるを得るを知り、是の衆生は、其の行清淨なるも、心の清淨ならざるを知り、是の衆生は、其の行不淨なるも心清淨なるを知り、是の衆生は心行俱に淨なるを知り、是の衆生は行と心と、二俱に不淨なるを知り、是の衆生の、過去世の心と諸根と行の因とを知り、是の衆生、縁に隨つて法を悟るを知る、是を菩薩の、他心を知るの智と名く。

『又復他の未來世の心を知り、是の衆生の、未來世中に、戒を持する因有り、現在世中に布施の因有るを知り、是の衆生、未來世中に、忍辱の因有り、現在世中に持戒の因有るを知り、是の衆生、

【五】五趣、概は衆生が、業因によつて趣き住む處の意。之に地獄、餓鬼、畜生、人間、天の五種あるを五趣といふ。

【六】晉譯卷第五。

【七】他心通 Paravajñāna。他人の心念を知るに於て無碍なるもの。晉譯には知他心念とす。

【八】是、晉譯によれば某といふに同じ。

ば、若しは十方なる無量無邊の諸佛世界の、有らゆる諸聲——所謂天・龍・鬼神・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人の聲、及び聖聲——所謂聲聞・緣覺・菩薩・正遍知の聲など、一切は凡て是の耳根の所持なり。乃至地獄・餓鬼・畜生、蠅蟻蚊虻などの有らゆる諸聲をも、一切悉く聞く。若しは諸衆生の、心所緣の處、若しは善・不善・無記の所作の事業など、諸の音聲を出すも、一切悉く解す。若しは口の善業、口の不善業、口の無記業など、是の如き諸業をも、悉く如實に知り、若しは口業有り、愛欲に因つて瞋を説き癡を説くも、若しは口業有り、瞋恚に因つて欲を説き癡を説くも、若しは口業有り、愚癡に因つて欲を説き瞋を説くも、若しは欲に因つて欲を説き、瞋に因つて瞋を説き、癡に因つて癡を説くも、是の如き諸聲をば、亦皆能く知る。或は口業有り、心淨なるも口塵に、或は口業有り、口淨なるも心塵に、或は口業有り、口淨にして心も淨、或は口業有り、口塵にして心も塵なる、是の如き一切をば、無礙の耳通は、能く如實に知る。

『是の菩薩の天耳は、亦聖聲及び非聖聲をも知る。若し聖聲を聞くも愛善を生ぜず、非聖聲を聞くも、心に礙を生ぜず、聖人の聲に於て大慈を具するを得、非聖人の聲に於て大悲を具するを得。若しは過去未來の諸聲を聞くも、本際を盡す如實の正智を得。』

『是の菩薩の天耳は、一切の諸佛世尊所説の妙法を聞くを得んに、聞き已つて憶念し、正智もて總持して忘す失せず、衆生の器に隨つて、而も爲に説法し、善く諸法の堅不堅の相を知る。是の菩薩、若し一佛の説法を聞かんに、餘佛所説の法を聞かざる、是の處有ること無く、一切諸佛の演説すべき所をば、悉く能く聽受す。菩薩若し善・不善・無記の法聲を聞かんに、皆悉く善く時と非時とを知る——所謂若し衆有るの時は、説法の時に非ずとして、聞き已つて、默然として説く所無く、若し説く有る時は、衆有る時に非ず——所謂正しく一人の能く受くるに堪ふる者の爲にす。是の故に説くと雖も、一切の爲にせず。事若し眞實なるも、或は他を傷くるを畏るる故に、説を爲さず、事

【三】 正遍知は三藐三佛陀 Sāma-sambodhi の譯、佛は正理を窮め盡して、知らざること無きが故に此の名あり。
 【四】 無記は善にも惡にもあらざる性質、非善非惡の性は、その何れとも記別すべからざるが故に無記といふ。

て無上の大利を得。菩薩の天眼は、亦其中なる、菩薩大衆の、道を修行して、身に三四威儀あり及び正しく憶念し、解脫の法を得て、總持に安住し、辯才の方便もて慧の方便に入るを見、見已つて自らは是の如き諸行を修し、悉く備足せしむ。

『是の菩薩の眼は、清淨無礙なり、色を見るを得るが故に。是の眼は汚れず、色に著せざるが故に。是の眼は解脫す、諸の見と煩惱とを遠離せるが故に。是の眼は清淨なり、性明了の故に。是の眼は不依なり、所縁を離るるが故に。是の眼は不發なり、煩惱を斷ずるが故に。是の眼は無礙なり、疑網を斷ずるが故に。是の眼は不起なり、障礙を斷ずるが故に。是の眼は明を得たり、法を照了するが故に。是の眼は知を念ず、識を行ぜざるが故に。是の眼には貪・瞋・愚・癡無し、能く一切の諸結使、斷ずるが故に。是の眼は無上の趣なり、聖の本なるが故に。是の眼は無礙平等の光明なり、衆生を照すが故に。是の眼は無垢なり、惡法を斷ずるが故に。是の眼は不染なり、性清淨の故に。是の眼は佛眼に入る、畢竟不捨の故に。是の眼は不縛なり、愛と恚とを斷ずる故に。是の眼の行義は、眞實の修行より出づ、淨道法を念知するが故に。』

『何を以ての故にとならば、是の居士、大悲に安住して、深く法相を解し、善く義を分別して、諍訟有ること無く、見聞に隨つて、不善の法に背くことを説き、道場に趣向して心に障礙無く、慳惜の人を見ては能く財を捨して施し、毀禁の者を見ては淨戒を修持し、瞋恚の者を見ては、忍を修して諍はず、懈怠の者を見ては、攝取勸勵し、散心の者を見ては、諸の禪文を示し、智慧無き者には慧眼を施與し、邪道を行する者には、示すに正道を以てし、下行を修する者には、爲に甚深微妙の佛法を説いて、一切智に入らしめ、諸通を退せずして菩提を具足す。舍利弗、是を菩薩の天眼神通は盡すべからずと名く。』

『復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の、天耳神通も、亦盡すべからず。云何が菩薩の天耳神通なるとなら

【三】 四は行住坐臥、常に心を調へ、規矩に合して、戒を失はざること。

【三】 天耳通 (Divyāśrotṛa) 色界の耳根を得て、聽聞無礙なるもの。

故に捨と名く。第一義に於て評論を生ぜず、是の故に捨と名く。己心の中に於て能善く分別す、是の故に捨と名く。己身を捨捨することを觀す、是の故に捨と名く。他身を害せず、是の故に捨と名く。菩薩は捨を修し、諸の禪定に於て、常に捨心を行す。諸佛世尊は菩薩の、諸衆生に於て、捨心を行すを聽さず、何を以ての故にとならば、菩薩の常に精進を修するは、自他を利し善根を勤求する爲なり、是を菩薩の、己他を護ることを捨すとは名く。

「何が時と非時とを捨するとならば、器に非ざる衆生は、捨して引接せず、衰毀・毀苦を捨して受けず、聲聞を求めて決定を成ずる者を捨し、布施を行する時、持戒を修することを捨て、持戒を修する時、布施を捨し、忍辱を修する時、施と戒と進とを捨て、精進を修する時、施・戒・忍を捨て、禪定を行する時、布施を捨て、智慧を修する時、五波羅蜜を捨て、應に作すべからざる所をば、終に復作さず。是の如き諸法、戒行に安住し、精勤勇猛にして修行を具足する、是を菩薩、無盡の捨を修すとは名く。

「復次に舍利弗、菩薩の諸通も、亦盡すべからず。云何が諸通なる、天眼通・天耳通・他心通・宿命通・如意通なり。云何が天眼通なる、菩薩の天眼は、諸天龍・鬼神・諸乾闥婆、學・無學の人、聲聞・緣覺など所有の天眼のうち、最第一と爲す。微妙殊勝開達明了にして、向の一切智の功德の所成、天龍二乘と之を共にせず。若し十方無量無邊の諸佛の世界有るも、有らゆる形貌・色像・光明の、若しは龜・若しは細、若しは近き・若しは遠きをば、菩薩の天眼は、一切悉く見、照了分明に善く解し、善く見ん。亦其の中の有らゆる衆生の、諸趣に生ずる者、無色天を除き、其餘の業行、生死の相續、若しは業・業の果などを見、諸根を分別し、悉く知つて遺す無し。若しは十方の無量無邊の諸佛世尊の、有らゆる莊嚴と淨妙の國土とをば、悉く見て餘す無し。是の如く見已つて清淨に戒を持し、願ふに己が土に廻向莊嚴せんことを以てす。是の持戒に住して、其の所願の如く、悉く成就し

【二九】次に五通を明す。晉譯には六通を擧ぐ。
 【三〇】天眼通 Diyaṅketaṅga. 色界天の眼根を得て、照久無碍なるをいふ。

き故に。是の喜は誠諦なり、如の所作の故に。是の喜は能く捨す、力堅牢の故に。是の喜は大力なり、能く勝るる無き故に。是の喜は能く諸佛の神力を作す、諸佛の法を求むる故に。舍利弗、是を菩薩、喜を修行して、盡すべからずとは名く。

『復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、捨を修行して、亦盡すべからず。云何が菩薩は捨を修すること無盡なる。菩薩の捨を行するや、捨に三種有り、云何が三と爲す。諸の煩惱を捨すると、己・他を護ることを捨すると、時・非時を捨するとなり。』

『云何が諸の煩惱を捨するとならば、恭敬・供養せらるるも、其の心高からず、輕蔑毀皆せらるるも、心亦下らず、若しは利養を得るも、心貪恃せず、若しは衰惱に遭ふも、心亦愁へず、若しは譽讚に遇ふも心に喜慶無く、若しは毀者に遭ふも、心退縮せず、若しは識者に遭ふも、心に虧・蔽無く、若しは稱者有るも、善く法界に住し、若しは苦事に遭ふも心力忍受し、若しは樂事に遇ふも、明に無常を見、愛する所を放捨して瞋恚を斷じ、親と非親とに於て平等の心を得、持戒と毀戒とに、意増減無く、作善と作惡とに二相有ること無く、愛と非愛とに於て、心著する所無く、善と不善とを聞くも、心能く堪忍し、善惡の語に於て、心繫著せず、味と過思とに於て其の量二無く、諸の衆生に於て平等心を得、上中下に於て等しき光明を得、身命を惜まず、好惡・名聞は法界に同じく、實・不實の法に於て、心に清淨を得、世法等に於て菩薩の捨を得る、是を菩薩、煩惱を捨つと名く。』

『云何が菩薩は、己・他を護ることを捨するとならば、若しは身體支節を割截せらるるも、心に瞋恨無く、讎報を求めず、捨心を得るを以ての故に、能く二を捨し、内外・身口など、此の二の中に於て、諍訟を生ぜず、眼と色とに於て、欲汚有ること無く、耳と聲・鼻と香・舌と味・身と觸・意と法にも、亦復是の如し。故にこの中に於て、諍訟を生ぜず、是の故に捨と名く。傷けず害せず、是の故に捨と名く。己・他を護ることを捨す、是の故に捨と名く。利と非利とに於て、心平等を行す、是の

【七】 其四、捨無量心(捨無量心)を説く。上の三心を捨して、心に存着せざるなり。又怨親平等にして、怨を捨て親を捨つるなり。普譚には行護とす。所説殊に簡なり。

【八】 蔽は愧づるなり。

て、心に歡喜を生じ、歡喜を生じ已つて、得法の悲を具し、常に衆生に於て碍心を生ぜず、増上の欲を以て法を勤求し、法を勤欲し已つて、深く心に甚深の佛法を解するを得、來り乞ふ者を見ては、心に歡喜を生じ、捨する時にも歡喜し、施し已つて悔無く、是の如きの布施、^五三時に清淨、清淨を得已つて心則ち悅豫し、持戒の者には常に布施を行じ、毀禁の者をば喜心もて攝取し、自ら禁戒を保持して心則ち清淨、能く惡道に怖懼する衆生をして、無所畏を得て惡處を遠離せしめ、一心に如來の禁戒を迴向し、堅持牢固にして毀壞すべからず、惡罵を加へらるるも、堪忍して報ぜず、諸の衆生に於て、心に憍慢無く、諸の尊長に於て、謙下恭敬し、語常に和悅にして嘔噎を離れ、先づ愛語を以てして終に詔曲無く、邪心を以て人を誘誑せず、利養を以て他の爲に執役せず、其の心清淨にして應過有ること無く、諸の不可なることに於て其の過を見ず、他の短を求めず、人の罪を擧げず、專心に諸の禮敬の法を正念し、諸の菩薩に於て如來の想を生じ、説法の者を愛して己が身より重んじ、如來を愛重して己が命を惜むが如くし、諸の師長に於て父母の想を生じ、諸の衆生に於て兒息の想を生じ、諸の威儀に於ては頭首を護るが如くし、諸の波羅蜜に於ては手足を愛する如くし、諸の善法に於ては珍寶の想を生じ、教誨の者に於ては五欲の想を生じ、知足の行に於ては無病法を求むることを愛樂して妙藥の想を生じ、擧罪の者に於ては良醫の想を生じ、諸根を攝護して懈怠有ること無し。是の故に喜と名く。

『是の喜は寂靜なり、覺知微妙なる故に。是の喜は寂滅なり、憍戲無き故に。是の喜は倚を行す、戲論せざるが故に。是の喜は根本なり、心亂れざる故に。是の喜は多聞なり、善語を取る故に。是の喜は平等なり、心柔軟の故に。是の喜は勇猛なり、善く業を作す故に。是の喜は不悔なり、専ら善を行する故に。是の喜は正しく住す、懈怠せざる故に。是の喜は不動なり、所依無き故に。是の喜は不共なり、摧伏し難き故に。是の喜は實義なり、忘失せざる故に。是の喜は眞實なり。變異無

【五】三時は來り乞ふ者を見る時、施する時、施したる後をいふ。

【六】憍は輕薄なり。

是の如き大悲は、厭ふて汚すべからず、瞻病者を出す、是の如き大悲は、法を得ること自在にして、鈍根を教化することを出す、是の如き大悲は、自の功德を覆ひ、他の功業を顯はすことを出す、是の如き大悲は、諸苦を離るることを出す、是の如き大悲は、無漏の樂を求むることを出す、是の如き大悲は、所愛の物を捨つることを出す、是の如き大悲は、衆の善業を作すことを出し、擾亂する所無し、是の如き大悲は、善く禁を持して戒を毀捨せざることを出す、是の如き大悲は、衆生を教化することを出す、是の如き大悲は、身命を惜まざることを出す、是の如き大悲は、自の支節を捨つることを出す、是の如き大悲は、他の善根を生ずることを出す、是の如き大悲は、自ら善根を利益することを出す、是の如き大悲は、諸禪を味はふこと無きことを出す、是の如き大悲は、欲界を厭はざることを出す、是の如き大悲は、觀慧を出す、是の如き大悲は、善根を汚さざることを出す、是の如き大悲は、諸の衆生、所願の如く成ずることを出す、是の如き大悲は、有爲・無爲を出す、是の如き大悲は、無爲を證せざることを出す、是の如き大悲は、衆生の性、無爲に同じきを知つて、能く教化することを出す、是の如き大悲は、毀戒の者を護ることを出す、是の如き大悲は、佛戒を讚歎することを出す、是の如き大乘の諸悲は、大悲を出す、是の因縁を以ての故に、大悲とは名く。

『大悲と謂ふは、必定して善く布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧、諸の助道の法を行じ、自然・無師の智慧を得んが爲に、他の衆生所作の事業を營み、精勤專著して、己が務を修する如きなり。

是の因縁を以ての故に、大悲と名く。舍利弗、是を菩薩、大悲を修行して、盡すべからずと名く。

『復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、喜を修行して、亦盡すべからず。云何が喜と爲すとならば、常に法を念じて歡喜踊躍し、懈怠を生ぜず、諸の惱熱無く、五欲の樂を離れて法樂に住し、心出して悦豫し、身輕くして柔軟、意に勸督を勤め、心に常に悲を生じ、如來無上の法身を樂求し、樂うて相好を修し、以て自ら莊嚴し、法を聽いて厭くこと無く、正法を行することを念じ、正法を行じ已つ

【四】その三、喜無量心(三喜)を説く。人の苦を離れ樂を得るを見て、慶悅の心を生ずるをいふ。

「舍利弗、夫れ慈を修すれば、悉く能く一切の衆生を擁護し、能く己が愛を捨てて、他の衆生に與ふ。聲聞は慈を修して、齊しく己身の爲にするも、菩薩の慈は、悉く一切無量の衆生の爲なり。舍利弗、夫れ慈を修する者は、能く諸の流を度る、慈所及の處には、衆生を緣する有り、又法を緣じ、又無所緣を緣す。」衆生を緣するは初發心なり、法緣を緣するは已に習行せるなり、無緣を緣するは深法忍を得たるなり。舍利弗、是を菩薩、大慈を修行して盡すべからずと名く。

「復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の、大悲を修行する、亦盡すべからず。何を以ての故にとならば、舍利弗、人の命根は、即ち出息入息を以て本と爲す如く、菩薩も是の如く大乘を修學するに、大悲を以て本と爲せばなり。轉輪聖王は、輪寶を以て本と爲す如く、菩薩は是の如く、一切の智を修するに、大悲を以て本と爲す。大長者の、唯一子有り、慇懃して情に重んずるが如く、菩薩の大悲も亦復是の如く、諸の衆生に於て、之を愛すること子のごとし。是の如き大悲は我れ已に行じ已る、是の如き大悲は己利を作し已る、是の如き大悲は他事を假らず、是の如き大悲は、己心の作出する所にして、詔曲ならず、是の如き大悲は所作畢竟して正快定を出す、是の如き大悲は、種性の所作にして、直道に出づ、是の如き大悲は心に邪曲無く、正直を出生す、是の如き大悲は、僣慢有ること無く、衆生の境を出づ、是の如き大悲は、己身を捐捨て如來の身を出す、是の如き大悲は、壽命に食せずして、惡を作さざることを出す、是の如き大悲は、衆生を擁護して菩提を出す、是の如き大悲は、眞實の法を護り、心の清淨を出す、是の如き大悲は、諸の窮厄を見ては拔濟の事を出す、是の如き大悲は、本誓堅固にして、不動の心を出す、是の如き大悲は、己身・人・天・賢聖を欺かず、不虛誑を出す、是の如き大悲は、其の行清淨にして、善業を出す、是の如き大悲は、自ら己が樂を捨てて、他に樂を出與す、是の如き大悲は、他に苦を與へず、不焦熱を出す、是の如き大悲は、能く衆生をして重擔を捨てしめ、堅き精進を出す、是の如き大悲は、忍の勢力有りて、護無力を出す、

【九】以下の三は、衆生を緣じて起す衆生緣の慈悲と、五陰を緣じて起す法緣の慈悲と、空理を緣じて起す無緣の慈悲となり。晉譯には、慈有三事。一曰慈施一切曉了、慈施法等。二曰慈正眞等。三曰、常以二菩薩・加于衆生一と。

【一〇】深甚の無生法忍なり。

【一一】その二、悲無量心（Kṛpā）を説く。悲は苦を抜く心をいふ。

【一二】輪寶、晉譯に紫磨金輪とす。

【一三】賢聖、賢は善に和する義、聖とは正に會する義。善に和し惡を離るるも、未だ無漏智を起し、理を證し惡を斷ぜざる、凡夫の位に在る者を賢と云ひ、既に無漏智を發して、理を證し惡を斷じて、凡夫の性を捨てしものを聖といふ。

「唯善男子、是の虚空の性は、尙ほ盡すを得べきも、菩薩の慈心は盡すべからず。若し菩薩有り、是の説を作すを聞くも、驚怖を生ぜざれば、當に知るべし、是の人は無盡の慈を得べし。舍利弗、是の慈は能く自ら己身を擁護す、是の慈は亦能く他人をも利益す。是の慈は諍無く、是の慈は能く一切の瞋恚・荒破・繫縛を斷つ、是の慈は諸の結及び使を離る、是の慈は歡喜なり、是の慈は一切衆生の破戒の過を見ず、是の慈は無熱にして、身心樂を受く、是の慈は一切の惱害を遠離す、是の慈は能く一切の怖畏を離る、是の慈は能く衆の聖人の道に順ず、是の道は能く瞋る者をして歡喜せしむ、是の慈は能く一切の鬪諍に勝る、是の慈は能く利養と稱歎とを生ず、是の慈は釋梵の威徳を莊嚴す、是の慈は常に智人の讚ふる所と爲る。是の慈は常に凡夫・愚人を護る、是の慈は常に能く梵道に隨順す、是の慈は不雜にして欲界を遠離す、是の慈は能く解脱の法門に向ふ、是の慈は能く一切の諸乘を攝す、是の慈は能く非財の功徳を攝す、是の慈は一切の功徳を長養す、是の慈は諸の無作の功徳に過ぐ、是の慈は悉く能く相好を莊嚴す、是の慈は能く下劣の鈍根を離る、是の慈は天人に涅槃・諸善の正道を開く、是の慈は能く三惡・八道を離る、是の慈は諸の善法等を愛樂す、是の慈は願の如く、一切の所欲を成就すること自在なり、是の慈は諸の衆生に平等なり、是の慈は行を發して諸の異相を離る、是の慈は正しく持戒の門に向ふ、是の慈は能く諸の禁を犯す者を護る、是の慈は能く無上の忍力を成す、是の慈は能く諸慢・放逸を離る、是の慈は無諍精進を發起して正道に入らしむ、是の慈は根本となりて、聖禪定に入らしむ、是の慈は善能く心を分別して、諸の煩惱を離れしむ、是の慈は慧に因つて生じ、語言文字を總持す、是の慈は定に伴ひ、魔の結伴を離る、是の慈は常に歡喜と同止す、是の慈は善く心の使する所と爲る、是の慈は堅く威儀と戒とを持する法なり、是の慈は能く諸の掉・動等を離る、是の慈は能く種種の諸相を滅す、是の持は善く香と慚愧ともて身に塗る、是の慈 能く煩惱の臭氣を除く。

【六】 八道は八難（見佛開法に障礙ある八處）をいふなるべし。

【七】 本文に是慈根本入聖禪定とあり。

【八】 掉、心をして高擧せしめ、安靜せしめざる煩惱。

卷の第二十九

無盡意菩薩品第十二之三

爾の時無盡意菩薩、復舍利弗に語るらく、「菩薩の慈を修する、亦復盡すべからず。何を以ての故に。菩薩の慈は無量無邊なり、是の慈を修する者、齊限有ること無くして、衆生界に等し。菩薩の慈を修し、發心するや、普く覆ふ。舍利弗、譬へば虚空の、普く覆はざる無きが如く、是の菩薩の慈も、亦復是の如く、一切の衆生を、覆はざる者無し。舍利弗、衆生界の、無量無邊にして、窮盡すべからざるが如く、菩薩の慈を修する、亦復是の如く、無量無邊にして、窮盡すること無し。虚空無盡なるが故に、衆生も無盡なり、衆生無盡の故に、菩薩の慈を修すること、亦盡すべからず。是を大士所修の慈心は、盡すを得べからずと謂ふ。」

舍利弗の言はく「善男子、幾に齊しきを衆生界と名くるや」と。無盡意の言はく「有らゆる地界、水火風界は、其の量無邊なるも、而も猶ほ衆生界より多からず」と。舍利弗の言はく「唯善男子、頗し譬喩を説いて比ぶるを得べきありや不や」と。

無盡意の言はく「説くべし。但だ小事を以て喩と爲すを得ず。舍利弗、東方に此を去ること一恒沙の佛の世界を盡し、南・西・北方、四維上下も、皆一恒沙の佛世界を盡して、一の大海を作し、其の水満溢し、一恒河沙等の諸衆生をして聚集せしめ、共に一毛を以て、破つて百分と爲し、一分毛の滴を以て一滴を取り、是の如くにして、一恒河沙共に、一滴を取り、二恒河沙共に二滴を取り、是の如く展轉して、乃至此の大海に満てる水盡くるも、是の衆生界は猶ほ盡すべからず。菩薩の慈心は悉く能く是の如き衆生を遍覆す。舍利弗、意に於て云何。是の慈を修する善根は、豈に盡すべけんや」と。舍利弗の言はく、「實に盡すべからず」と。

【一】 晉譯卷第四のついき。以下、二四〇頁に至るまで、慈・悲・喜・捨の四無量心(Compassion)を説く。

【二】 初に慈無量心、Mittāya 能く榮を興ふる心なり。晉譯には初句に、慈氏菩薩、而不可盡、所以者何、其慈曠大、無邊際故といへり。

【三】 この句、晉譯には、衆生四大數、不可盡、爲何謂一也とあり。本文に齊幾名衆生界とあり。

【四】 一恒河沙云云、晉譯に、舉一一滴水爲一江沙人、舉二滴水爲二江沙人、とす。

【五】 乃の下、麗、盡の字有り、今宋本に依つて省く。

慧は殊勝なり、頂法を得るが故に。是の慧は微妙なり、自然に覺するが故に。是の慧は不行なり、三世に近らざる故に。是の慧は攝取す、一切の方便を具するが故に。是の慧は能く斷ず、諸の思想に過ぐる故に。是の慧は不放逸なり、闇昧を捨離するが故に。是の慧は初始なり、一切の諸善法を發行するが故に。是の慧は能く發す、諸乘を具するが故に。是の慧は照明なり、無明の網を除くが故に。是の慧は眼を與ふ。一切の衆生、其の所解の如くに明了を得るが故に。是の慧は無依なり、眼色を過ぐる故に。是の慧は第一義なり、眞實を出す故に。是の慧は無諍なり、善く分別するが故に。是の慧は明了なり、智門に向ふが故に。是の慧は無盡なり、能く遍く行するが故に。是の慧は不逆なり、十二縁を見るが故に。是の慧は解脫なり、諸纏・繫縛を悉く善く斷つが故に。是の慧は不雜なり、一切障碍の法を離るるが故に。舍利弗、一切衆生所有の心行をば、是の如き智慧は、悉く能く照達す。衆生の心行の如く、慧・思・智もて諸煩惱の門を知る、是の如き智慧は、皆悉く觀了す。若し聲聞・緣覺・菩薩・如來所有の智慧をば、是の菩薩、悉く能く遍く學す。舍利弗、是を菩薩の無盡の慧と名く。是の無盡の慧を以て無盡の智を具するなり』と。

是の法を説ける時、三萬二千の菩薩と、善根の熟せる者とは、無生法忍を得たりき。

大方等大集經卷第二十八

【三】 智の下、三本、知を加ふ。今是に依る。

ほ一切種智を成ぜん願する、是を菩薩の無爲方便と名く。復次に有爲の方便とは、無碍平等の心中に住し四攝の法を以て衆生を攝取する、是を有爲の方便と名く。云何が無爲の方便なる。善く衆生の、我無く人無く、怖求する所無きを解し、四攝の法は無爲解脱に同じきを知り、而も能く一切種智に廻向する、是を無爲の方便と名く。復次に有爲の方便とは、若し諸の煩惱・生死の相續を、斷じて起らざらしめ、有らゆる善根の、菩提 助くる者を、斷絶せざらしめ、乃至少煩惱の分をも行ぜざる、是を有爲の方便と名く。云何が無爲の方便なる。空・無想・無願を觀すと雖も、此の三の空は即ち助道の方便なるを知るが故に、能く證せざる、是を無爲の方便と名く。復次に有爲の方便とは、三界に在りと雖も、三界の煩惱の汚す所と爲らざる、是を有爲の方便と名く。云何が無爲の方便なる。三界を出づと雖も、出を證せざる是を無爲の方便と名く。佛の説きたまふ所の如く、諸法を知るの方便は、則ち能く一切種智を具足す。何を以ての故に、一切種智は無量無邊にして、正念・慧の方便を具足するが故なり。是の故に名けて一切法の方便とは爲す。

「舍利弗、是を菩薩の智慧所緣の八方便とは名くるなり。舍利弗、是の八方便は、能く菩薩の無盡の智慧を攝す。舍利弗、是の慧は能く解す、善法・不善法を觀了するが故に。是の慧は箭の如し、善く法を射るが故に。是の慧は 能く行す、聖法現在するが故に。是の慧は眞に解す、諸見煩惱の障礙・諸の覆蓋を斷除するが故に。是の慧は定んで願す、悉く能く本の所求を満足するが故に。是の慧は消融す、能く煩惱の諸焦熱を除くが故に。是の慧は悦豫す、法樂を斷ぜざるが故に。是の慧は正念なり、所緣の義を了するが故に。是の慧に安住す、三十七助道の法を具するが故に。是の慧は相を得、所行の乘の如くに、能く具足するが故に。是の慧は相を解す、性智照らすが故に。是の慧は能く度す、諸流を過ぐるが故に。是の慧は能く進む、正決定を成するが故に。是の慧は正見なり、一切の諸善法を具足するが故に。是の慧は歡喜たり、煩惱に墮せる者を、能く拔濟するが故に。是の

【六九】能、麗本財に作る。今三本に依る。

【七〇】正の下、麗本定を加ふ。今三本に従ふ。

事を簡び、能く衆生の爲に世の福田を現じ、其の心翫樂して十二縁を觀じ、常に一法の出世涅槃を念じ、數禪定に遊び、他より聞かずして自然に少分の境界を覺了し、縁に因つて道を悟るが故に緣覺と名く。若し能く是の如く開示分別する、是を菩薩の、緣覺乘を觀する方便と名く。

〔六六〕云何が菩薩、大乘を觀する方便なる。其の乘は無量なり、今此の中に於て、當に少分を説くべし。是の乘は無量なるも、悉く能く受容す。一切の衆生、罪障無き故に。是の乘は一切の善根を増長す、無量の衆生をして、受用するを得しむるが故に。是の乘は諸波羅蜜を具足す、能く衆生の心行に隨つて化するが故に。是の乘は能く助道の法を過ぐ、進趣無碍にして道場に至るが故に。是の乘平等にして、無碍の光明、一切を照らす、無量の衆生悉く受くるに堪ゆるが故に。是の乘無畏にして、怯弱の道を過ぐ、悉く能く諸佛の法を示現するが故に。是の乘能く一切の諸魔外道の邪衆生を壞し、十二縁を了了す、菩提の幢を建立・佐助するが故に。是の乘は能く一切の諸邊を除き、斷常の因縁、諸見所起の煩惱の障礙、覆・疑網調戲など有ること無し、佛の無碍の眞智慧を得るが故に。是の乘は富足にして諸の珍寶を具し、眞實不虛にして能く衆生を益す、大悲勇猛にして本願成就の故に。是の乘は十力・無畏・不共の法を具足す、相好もて身と身・口・意とを嚴するが故に。是の如き方便、是を菩薩の、大乘を觀する方便と名く。

〔六七〕云何が菩薩の、一切法を觀する方便なる。所謂若しは有爲、若しは無爲に、菩薩は中に於て善く方便を知る。云何が善く有爲を觀する方便なる。有らゆる身の善業、口の善業、意の善業を以て、無上菩提に廻向せんと願する、是を有爲の方便と名く。若しは身・口・意の業、菩提の相に同じきを觀じ、菩提に廻向する、是を菩薩の、無爲を觀する方便と名く。復次に有爲の方便とは、若し能く五波羅蜜を聚集する、是を有爲の方便と名く。般若波羅蜜は其の性無爲なるを知ると雖も、聚集する所に於て、終に厭賤無く、要す諸波羅蜜を具足せんと欲し、深く善根の無漏菩提に同じきを解し、而も猶

〔六六〕初句、晉譯に何謂「暢」解大乘之業とあるもの。

〔六七〕本文に相好嚴身口意とあり。初の身は肉體的特徴を指し後の三は、身口意に現はるる三業を謂へるか。
〔六八〕八法の第八、晉譯に菩薩の演ずる諸法を分別するものに當る。

化す可き者をば、其の所樂しよらくの如く、悉く已に化し訖やむり、若しは未來世の有らゆる衆生の、或は佛及び諸の聖人を見るを頌しよつて、度を得ん者には、形に隨つて應適し、悉く度を得しめ、若しは現在世の有らゆる衆生の、若しは應に法を聞くべく、應に神力を見るべきものをも、亦所應に隨つて皆悉く之を化し、隨所に諸衆生を教化し已り、即ち三世に於て自他の利を成ぜん。是の如き利は悉く菩提の爲に無碍の智を具す、是の如き方便、是を菩薩、三世を觀するの方便と名く。

〔六〕舍利弗、云何が菩薩の、諸乘を觀する方便なるとならば、世に三乘有り、何等か三なる、聲聞乘、緣覺乘、大乘なり。復二乘有り、何等か二乘なる、天乘と人乘となり。

〔云何が菩薩は聲聞乘を觀する。佛未だ出に其でざれば、聲聞乘無し。何を以ての故に、他より法を聞いて正見を生ずればなり。所謂聞くとは戒と威儀とを持するなり、威儀具するが故に、戒聚具足し、戒聚具足し已れば定聚具足す。定慧具足し已れば慧聚具足し、慧聚具足し已れば解脫聚具足し、解脫聚具足し已れば、解脫知見聚具足す、是の如き方便、是を菩薩、聲聞乘を觀する方便と名く。〕

〔復次に聲聞乘の、若しは善・不善及び不動の行を觀じ、心常に三界を毀く皆厭離いんりし、一切行の無常・苦・無我・寂靜涅槃を觀じ、乃至一念も受生を五希はず、常に怖懼を懷き、心に甘樂せず、陰おんは怨の如く、界は毒蛇の如く、入は空聚の如しと觀じ、一切の趣に於て、生を受くることを願はず。若し能く是の如く開示分別する、是を菩薩、聲聞乘を觀するの方便と名く。〕

〔云何が菩薩の、緣覺乘を觀するの方便なる。若し緣覺出世せば、其の所行を觀じて實の如く之を知る。緣覺の所行は聲聞所有の功德に出過し、精進を欲して放逸ならず、戒を持して少聞、多く供養せざるも、諸佛世尊給侍使令す。中根を以ての故に常に厭心有り、作す所の衆事、皆悉く少少、憍闍りやうがつを厭患いんおんし、常に樂して遠離し、獨り空閑くうかんに住して威儀庠序、出入澁重じやくじゆうなり、安心靜默じやうもくにして人

〔六〕八法の第七、

〔六〕希、麗本怖おそに作る、今三本に依る。

心數の法を呵責・毀訾し、善の心數の法を悉く以て無上菩提に廻向する、是を菩薩の、過去を觀する方便と名く。若しは未來世の心と心數の法もて、一向に菩提の道に專念し、若しは善心を起して、悉く無上菩提に廻向し、有らゆる不善の心と心數の法とを心に入らしめざらんと願す、是の如き願を發す、是を菩薩の未來の方便と名く。若しは現在世の心と心數の法、善思惟等の所作の諸業を、悉く以て無上菩提に廻向する、是を菩薩の、現在を觀する方便と名く。是の如き方便を作す、是を菩薩、三世を觀するの方便と名く。

『復次に善く三世の苦・無所有なるを解す。若し是の觀を作さば、三世の空を觀する智慧力の故なり。若しは三世の諸佛所種の無量の功德を、悉く以て無上菩提に廻向す——方便力の故に——是の如きの方便、是を菩薩の三世を觀する方便と名く。』

『復次に過去は盡の法にして、未來に至らざるを見ると雖も、而も常に善を修し、精勤して懈らず、未來の法を觀じては、生出無しと雖も、精進を捨てずして、菩提に願向し、現在の法を觀じては、念念に滅すと雖も、其の心、菩提に發趣することを忘れざる、是の如き方便、是を菩薩、三世を觀する方便とは名く。』

『過去は已に滅し、未來は未だ至らず、現在に住らず。是の如く心・心數の法、生滅散壞するを觀ずと雖も、而も常に善根と助菩提の法とを聚集することを捨てざる、是の如き方便、是を菩薩、三世を觀する方便と名く。』

『復次に若し諸の神通もて、過去世所作の善根を念じ、念じ已つて無上菩提に廻向し、未來世の未生の善根を念じ、願心の圖る所をば、意の如く成就し、現在世中に常に善根を生じ、專念にして懈らず、無上菩提の道に廻向する、是の如き方便、是を菩薩、三世を觀する方便とは名く。』

『復次に若しは衆生を化せん、過去所作の善根・助道の功德を念じ、所謂衆生の心に隨ひ、應に

行の集あり、行の集の故に識の集あり、識の集の故に名色みやうじきの集あり、名色の集の故に六入の集あり、六入の集の故に觸の集あり、觸の集の故に受の集あり、受の集の故に愛の集あり、愛の集の故に取の集あり、取の集の故に有の集あり、有の集の故に生の集あり、生の集の故に老死の集あり、老死の集の故に憂悲苦惱うゑひくうなうの集あり、若し是の如き諸苦の聚集を知れば、是を菩薩の縁を觀する方便と名く。若し是の如き諸法の聚集に住すれば、則ち長養せず、所作しよさく無く、譚訟たんそう無く、主有ること無く、所屬無く、繫縛けいばく無し。所謂若しは善法に因り、不善法に因り、不動法に因り、若しは涅槃に向ふ法に因つて、是の如き等の法を如實に分別す。若し諸衆生の根量齊限なれば、是の諸根所作しよこんしよさくの諸業に因り、若しは受の報及び非受の報有り、善く其の因を知つて、方便を聚集する、是を菩薩の觀縁の方便と名く。

『不善の思惟滅すれば無明滅し、無明滅するが故に行滅し、行滅するが故に識滅し、識滅するが故に名色滅し、名色滅するが故に六入滅し、六入滅するが故に觸滅し、觸滅するが故に受滅し、受滅するが故に愛滅し、愛滅するが故に取滅し、取滅するが故に有滅し、有滅するが故に生滅し、生滅するが故に老死滅し、老死滅するが故に憂悲苦惱うゑひくうなう諸の苦聚滅す。若し是の如き諸苦聚の滅を知れば、是を菩薩の縁を觀する方便と名く。』

『一切の諸法は因に屬し縁に屬し和合に屬す。若し法にして因と縁と和合とに屬すれば、是の法則ち我が・人・衆生・壽命に屬せず。若し法にして我・人・衆生・壽命に屬せざれば、則ち法數ほうすうに入らず、能く是の如くに知る、是を菩薩の縁を觀する方便と名く。』

『若し菩薩修する所の諸法は、菩提を助け菩提を安止する爲なれば、是の如き諸縁は、悉く滅盡するを見、而も證を取らず——衆生を化せんが爲に——是を菩薩の縁を觀する方便とは名く。』

『云何が三世を觀する方便なる。若しは過去の己身・他身、善不善の心と心數しんすうの法を念じ、不善の

を觀ずとは名く、若し五陰は畢竟盡じんの相なり、過去已に滅し、未來は未だ生ぜず、現在住まらざらざる、是を名けて滅と爲す。能く是の如くに知る、是を滅智もて滅聖諦を觀ずと名く。若し道を得れば、集滅の智、比智を證して、知り已る、是を名けて道と爲す。若し是の中に於て、悉く空性を見る、是を道智もて道聖諦を觀ずとは名く。若し能く是の如く、四聖諦しやうたいを觀する、是を菩薩の諦を觀する方便とは名く。

「若しは一切の受、是を名けて苦と爲し、若しは諸の受到に於て、思惟・分別する、是を苦智もて苦聖諦を觀ずと名く。受の因和合する、是を名けて集と爲す。若し受の因に於て、眞實の如くに知る、是を集智もて集聖諦を觀ずと名く。若し諸の受を除き、受者と受と無く、受の滅盡を觀するも、滅を證せざる——衆生を化せんが爲に——是を滅智もて滅聖諦を觀ずと名く。若し所受有れば、是を名けて道と爲す。和合有りと雖も、猶し筏ぶた喩の如く、所受の爲ならず、道を求めざる、是を道智もて道聖諦を觀ずと名く。是の如き知を作し、四聖諦の清淨平等なるを見る、是を菩薩の諦を觀する方便と名く。

「復次に略して説かんに、生苦は是を名けて苦と爲し。若し生を觀する、是を苦智もて苦聖諦を觀ずと名く。生は因縁に従ふ、是を名けて集と爲す。若し有と非有と觀する、是を集智もて集聖諦を觀ずと名く。一切の生と非生とは是れ即ち滅に非ず、若し法不生ならば、即ち滅有ること無し、是を名けて滅と爲す。若し此の滅を觀すれば、即ち是れ滅智もて滅聖諦を觀するなり。若し是の如き等の、推求・稱量・思惟・分別など、是を名けて道と爲す。若し是の如き求・稱量等を滅して、法門に入るをば、是を道智もて、道聖諦を觀ずと名く。若し智に住し、聖諦を證せざれば、是を菩薩の諦を觀する方便と名く。

「云何が菩薩の、縁を觀する方便なる。不善の思惟を集むるが故に無明の集あり、無明の集の故に

【六二】 本文に若得道者、證集滅智比智知已云云とあり。

【六三】 八法の第五、晉譯に、何謂達於十二因緣、といふもの。晉譯說相や異る。

を修せざる者に於て、大悲心を生じ、道に入るを捨てず。是を菩薩の觀入の方便と名く。

「云何が菩薩の、諦を觀する方便なる。所謂甚深難入なり。云何が難入なる。若しは苦智・集智・滅智・道智なり。苦智とは陰の無生を觀するなり、集智とは愛の因を斷ずることを觀するなり。滅智とは無明等の諸煩惱、和合有ること無きを觀するなり、道智とは、平等の觀を得、一切の法に於て、倚著する所無きなり。菩薩若し四聖諦の中に於て、是の如き觀を作し、而も證を取らざる——衆生を化せんが爲に——是を菩薩諦觀の方便とは名く。

「復二諦有り、何等か三なる、俗諦と第一義諦と相諦となり。云何が俗諦なる、若しは世間所用の語言・文字・假名の法等なり。云何が第一義諦なる、乃至心の行有ること無し、何ぞ況や當に言語・文字有るべき。云何が相諦なる、一切の相は一相に同じく、一相は即ち是れ無相なりと觀するなり。菩薩は俗諦に隨順して厭倦せず、第一義諦を觀じて證を取らず、諸の相諦の一相無相なるを觀ず、是を菩薩の實を觀する方便と名く。

「復二諦有り、何等か二なる、俗諦と第一義諦となり。何等か俗諦なる、若しは苦集滅道を説き、若しは世間の語言・文字・假名の法等なり。云何が第一義諦なる、若しは涅槃の法に於て、終に忘失せざるなり。何を以ての故に、如と法界と、其の性常なるが故なり。菩薩は俗に隨つて厭倦を生せず、第一義諦を觀じて證を取らず。

「復一諦有り、何等か一と爲す。一切の法に於て倚著する所無く、衆生を化せんが爲に、現に所著有る、是を菩薩の諦を觀する方便と名く。

「復次に五陰は苦なり、若し五陰の苦なる相を見なば、是を名けて苦觀と爲す。苦は即ち空なる、是を苦智もて苦聖諦を觀すと名く。若し五陰は諸煩惱・愛の因、見の因なりと觀する、是を名けて集と爲す。若し愛の因・見の因なるを觀して、取らず著せず希はず求めざる、是を集智もて集聖諦

【六〇】八法の第四、晉譯に別四諦といふ。晉譯說相や異る。

を觀する方便とは名く。所謂陰とは、即ち世間の相なり、世間の相は壞すべきの相なり、壞すべき相の如きは、即ち無常の性、苦の性、無我の性、寂滅の性なり。能く是の如くに知る、是を菩薩の陰を觀する方便とは名く。

【五九】云何が菩薩の、界を知る方便なる。法界・地界・水・火・風界などなり。是の法界の中、堅相・濕相・熱相・動相有ること無く、法界は眼界・耳界・鼻界・舌・身・意界なり。是の法界中には、見相・聞相・嗅相・別相・覺相・知相有ること無く、法界は色界・聲・香・味・觸・法なり。是の法界の中には、眼の見るべき相・耳の聞くべき相・鼻の嗅ぐべき相・舌の別つべき相・身の覺すべき相意の知るべき相無く、法界は眼識界・耳鼻舌身意識界なり。是の法界中には、眼の識知する色無く、乃至意の識知する法も無く、法界は色界なり、法界は色の作相に非ず、乃至法界も亦復是の如くにして、法界と我界とは無二無別なり。法界と欲界・色界・無色界・我界・生死界・涅槃も無二無別なり。法界と虚空界、一切法界と我界・空界、無相・無願・無作・不出・不生・無所有等は涅槃の如く、虚空と涅槃、及び一切の法等、二有ること無し。是の如き無量の有爲の法界は無爲界に入る。能く是の如くに知り、是の如くに説くをば、是を菩薩の知界の方便とは名く。

【六〇】云何が菩薩の、入を觀する方便なる。佛所説の如く、眼も空・我も空・我所も空なり。何を以ての故に、是の眼性の中に、我無く我所無し。耳鼻舌身意の空なること、亦復是の如し。是の入を觀する者は、一切法の、若しは善不善の、二相有ること無きを見る。是を菩薩の入を觀する方便と名く。若しは眼の入・色の入、若しは眼・色の離欲を見て、離欲の法を證せざる、是を菩薩の觀入の方便と名く。耳入・聲入・鼻入・香入・舌入・味入・身入・觸入・意入・法入の、若しは離欲を見、離欲の法を證せざる、是を菩薩の觀入の方便と名く。所謂入とは、若しは聖入と非聖入なり。云何が聖入なる、若しは道を修集するなり。云何が非聖入なる、道を修集せざるなり。若し菩薩、道に住すれば、道

【六〇】 八法の第二、

【六一】 八法の第三、晋譯に解六衰といふもの。

憶想・分別想・緣相想・境界・見聞覺知に住せず、乃至一切の諸結に住せず、隨業生心行の智に住せず、乃至八萬四千の法聚ほふじゆに住せず、慳貪けんこんと布施・破戒と持戒・瞋恚けんと忍辱・懈怠けんと精進・亂意と禪定・愚癡と智慧などに住せず、乃至諸波羅蜜の伴・非伴等に住せず、定と亂・邪と正・善と不善・世間と出世間・可作・不可作・有漏と無漏・有爲と無爲・黑法と白法・生死と涅槃などに住せず、乃至一切諸法の伴と非伴等に住せず、衆生の異相、諸乘の異相、佛界の異相、諸佛の異相、諸法の異相、聖衆しやうじゆの異相に住せず、乃至一切の異相に住せず、知と不知・識と不識、世諦と眞諦に住せず、乃至一切の諸相に住せざるなり。所謂菩薩思惟の慧は、聞無く行無く相無く形無く爲無し。是の如き眞の慧は、一切の憶想・思惟・心作・止住・名字・異相に住せず。舍利弗、是を菩薩の眞智慧は、是の如き十六法中に住せずとは名く。

「舍利弗、云何が菩薩の慧なるとたらば、處所ごに八方便を具するなり。何等か八たる。諸陰しよおんの方便、まほ諸界の方便、諸入の方便、諸諦の方便、諸縁の方便、三世の方便、諸乘の方便、諸法の方便なり。

「云何が諸陰の方便なる。若し諸の陰は、沫すくの如く泡ほうの如く、熱の如く焰えんの如く、芭蕉樹の如く、幻の如く夢の如く、呼聲こゑの響の如く、鏡中の像の如く、影の如く化色けしきの如く、水沫の如く、水沫の性の如く、我に非ず、衆生に非ず、命いのちに非ず、人に非ず、色も亦是の如しと説き、能く是の如く知る、是を名けて、菩薩の色を觀する方便とは名く。受は喩たとへへば泡の如く、想は喩たとへへば焰の如く、行ぎやうは芭蕉の如く、識は喩たとへへば幻の如し、泡の如く焰の如く、芭蕉の如く、幻性にして、我無く衆生無く、命無く人無し。受想行識も亦復是の如し、能く是の如く知る、是を菩薩の受想行識を觀する方便とは名く。諸陰は夢の如く響の如く、像の如く影の如く、化かの如く化等の性の如く、我無く衆生無く、命無く人無し。是の諸陰等も、亦復是の如し、能く是の如く知る、是を菩薩の陰

【五〇】以下の二句、普譯に、了三四大六解三六義といふ。

【五七】八法の第一、五陰を曉るについて。

識界に住せざるの句なり、是れ身界・觸界・身識界に住せざるの句なり、是れ身界・觸界・身識界に住せざるの句なり、是れ義を念するの句、是れ智を念するの句、是れ了義經の句、是れ法を念するの句なり、是を菩薩、善く思惟に入るとは名く。

「又復善く思惟するとは、所謂一切の諸法——若しは我、無我など、是の如き諸法を、隨順觀察するなり。若しは衆生の、我有ること無きを知らば、即ち是れ諸法に隨順し觀察するなり。是の如く觀察するは、即ち是れ善く思惟に入るなり。善思惟は、即ち是れ生死と涅槃と同一法界なるを思惟し、是の二句に差別有ること無きを觀するが如く、是の如く見る者をば、是を進を勤めて善く思惟に入ると名く。若し黑法及び白法の二性、平等にして差別有ること無きを觀すれば、是を進を勤めて善く思惟に入ると名く。若し諸の 扼及び無扼の、不動不恃なるを觀すれば、是を進を勤めて善く思惟に入ると名く。若し菩薩、善思惟を起せば、諸の衆生の爲に捨離せられず、諸法の相に於て、亦分別せず、是を菩薩善思惟を發すと名く。舍利弗、聞の如く行すれば、是の如く入るを得て、善思惟を報す。是を名けて慧と爲す。

【四】舍利弗、菩薩の慧は、十六法有り、中に於て住せず。云何が十六なる。無明・行・識・名色・六入・觸・受・愛・取・有・生・老死に住せず、乃至無明の滅【乃至生死の滅に住せず、根本の身見に住せず、乃至六十二見に住せず、高下に住せず、乃至世法・利衰・毀譽・稱讚・苦樂に住せず、慢慢・增上慢・勝慢・我慢・不慢・憍慢・邪慢に住せず、乃至二十煩惱に住せず、貪に因つて起る所の諸結——若しは龜若しは細・若しは上中下——に住せず、乃至貪欲所起の一切の諸結に住せず、癡闇覆蓋の諸癡に住せず、乃至癡に因つて起る所の一切の諸結に住せず、姦欲・愛濁に住せず、陰・死・煩惱・天の魔に住せず、乃至魔に因つて起る所の諸の魔事等に住せず、我・人・衆生・壽命・養育・士夫に住せず、乃至取衆生の相に住せず、業障・報障・法障・煩惱障・諸見障に住せず、乃至一切の習氣に住せず、思想・

【五】 扼、麗本概に作る、今三本に依る。扼は輓に通ず。煩惱は衆生をして種種の苦惱に繋縛するクビキなるが故に名づく。
【五】 本文に如開行者、如是得入報善思惟云云と。
【五】 晉譯卷第四。初句に曰ふ、菩薩習智、入於諸法、故無所著、是名曰慧、有二十六事、不與慧合。
【四】 六十二見は、外道のあやまれる見解六十二種を數へたるなり。その數へ方一準ならず。本經に在つては、卷第二十二、參照。
【五】 障は正道を障へ、善心を害するの謂。業障は五逆十惡の業。報障は地獄餓鬼畜生等の苦報。煩惱障は貪・瞋・癡等の惑。

十二なる。善く入つて定を受持し、善く入つて慧を分別し、善く入つて心柔和に、善く入つて身獨行じ、善く十二緣に入り、善く不斷に入り、善く不常に入り、善く因緣生の法に入り、善く無業生・無命・無人に入り、善く來去住の無き處に入り、善く無進に入つて因果を斷ぜず、善く空に入つて懈らず、善く無相に入つて廢せず、善く無願に入つて捨せず、善く入つて空無相無願を證せず、善く入つて諸の禪三昧を生じ、善く入つて禪定の生に隨はず、善く入つて諸通の智を生じ、善く入つて無漏の法を證せず、善く入つて内に法を觀じ、善く入つて決定を證せず、善く入つて有爲法の、過患あるを思量し、善く入つて有爲の法に著せず、善く入つて一切衆生の無我を觀じ、大悲を捨せず、善く一切の趣・諸の怖畏の處に入り、善く入つて諸の趣に生ずと雖も、業の故に生ずるに非ざる、善く入つて欲を離れ、善く入つて雜欲の法を證せず、善く入つて樂欲する所を捨て、善く入つて法樂を捨てず、善く入つて一切の戲論諸覺を捨て、善く入つて方便の諸觀を捨てざるなり。舍利弗、是を菩薩、般若波羅蜜の三十二事を行じて、善く思惟に入るとは名く。

一又復善く思惟するとは、所謂善順の句なり、善順の句とは是れ不始の句なり、是れ不住の句なり、是れ無依の句なり、是れ不動の句なり、是れ不猗の句なり、是れ平等の句なり、是れ非等の句なり、是れ無眞の句なり、是れ正眞の句なり、是れ不變の句なり、是れ清淨の句なり、是れ永寂の句なり、是れ不然の句なり、是れ不舉の句なり、是れ不下の句なり、是れ不滅の句なり、是れ不增の句なり、是れ不共の句なり、是れ不戲論の句なり、是れ如の句なり、是れ不如の句なり、是れ如・非如の句なり、是れ非如・非不如の句なり、是れ如實の句なり、是れ三世平等の句なり、是れ三際の句なり、是れ色に住せざるの句なり、是れ色受想行識に住せざるの句なり、是れ地大に住せざるの句なり、是れ水火風に住せざるの句なり、是れ眼界・色界・眼識界に住せざるの句なり、是れ耳界・聲界・耳識界に住せざるの句なり、是れ鼻界・香界・鼻識界に住せざるの句なり、是れ舌界・味界・舌

【五】以下の二段、音譯に缺く。

は聞の如く修行し、善く思惟に入るなり」と。舍利弗の言はく「唯善男子、云何が聞の如く修行するや」と。無盡意の言はく「聞は八十の行を具す。何等か八十なる。修行せんと欲して心に順するの行、畢竟の心行、常發起の行、善友に親近するの行、無憍慢の行、不放逸の行、恭敬の行、教に隨順するの行、善語に従ふ行、數法師の所に往くの行、至心に法を聽くの行、善思惟の行、不亂心の行、進心を勤むるの行、寶想を生ずるの行、藥想を起すの行、諸病を除くの行、念器の行、進覺の行、意喜の行、入覺の行、聞いて厭く無きの行、捨を増長するの行、調智の行、多聞に親近するの行、歡喜を發すの行、身輕悅の行、心柔和の行、聞いて疲倦無き行、義を聞くの行、法を聞くの行、威儀を聞くの行、他説を聞くの行、未だ聞かざる所を聞くの行、諸通を聞くの行、餘乘を求めざる行、諸波羅蜜を聞くの行、菩薩藏を聞くの行、諸の攝法を聞くの行、方便を聞くの行、四梵を聞くの行、正智を聞念する行、生の方便を聞くの行、無生の方便を聞くの行、不淨を觀するの行、慈を思惟するの行、因縁を觀するの行、無常を觀するの行、苦を觀するの行、無我を觀するの行、寂滅を觀するの行、空を觀するの行、無想を觀するの行、無願を觀するの行、無作を觀するの行、作善の行、眞實を持するの行、不失の行、好惡の住處に心を防護する行、進を勤めて懈る無き行、善く諸法を分別する行、諸煩惱の伴侶に非ざるを知る行、諸の善法を護つて自の伴侶とするの行、煩惱の非伴侶を降伏するの行、正法の財に親近するの行、諸の貧窮を斷するの行、智者所讚の行、利根を欣樂するの行、衆衆勤むる所の行、聖者に非ざる者をして歡喜を生ぜしむる行、諸諦を觀するの行、陰の過患を觀するの行、有爲の過患多きを思量するの行、義を思するの行、一切の惡を作さざるの行、自利利他の行、諸の善業に隨順し増進するの行、進の増上する行、一切の佛法を得るの行なり。舍利弗、是を菩薩、其の所聞の如く、八十行を具すと名く。

『舍利弗、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜を行するや、三十二事を具して、善く思惟に入る。何等か三

【四一】畢竟の心行、晉譯に尋如意とす。

【四二】教、同に従經業。

【四三】この二、同に、樂忍辱、思樂語と云ふ。

【四四】調智、同に施無適英と。

【四五】義を聞く、同に所學如本と。

【四六】以下の四、同に、聞欲向道、法自守者、好聞正

【四七】この四、やゝ異なる。

【四八】同に不食觀と。

【四九】同に曉生生死と。以下の句、晉譯は所説前に過ぎ、本文と合し難し。就て照合すべし。

【五〇】三十二、晉譯は明に之を教へ、第二十九の闕けたるを注記す。兩本を對照するに出没多し、煩しければ略す。

出三昧、照明三昧、無垢光明三昧、功德光明三昧、一切法中得自在三昧、吉道三昧、無憂三昧、堅
 稱三昧、勇出如須彌山等三昧、法炬三昧、法健三昧、法尊三昧、自在知一切法三昧、住法聚三昧、
 總持法淨三昧、隨知他心行三昧、法幢瓔珞三昧、燒一切煩惱三昧、破四魔力三昧、十力聲勇健三昧、
 無礙斷礙三昧、手燈三昧、施名聞三昧、持地三昧、住無我如須彌山三昧、勝諸明智三昧、智焰三
 昧、生慧一昧、修禪三昧、無量自在三昧、心調伏、無我、無我所成就三昧、水月三昧、日聲三昧、無
 有高下如佛三昧、勝淨光無我三昧、空三昧、無相三昧、無願三昧、住心平等三昧、金剛三昧、增上
 三昧、不洵三昧、勝淨光無我三昧、空三昧、無相三昧、無願三昧、住心平等三昧、金剛三昧、增上
 三昧、無能勝三昧、施三昧、淨聲三昧、善分別三昧、離煩惱三昧、廣大如空三昧、入諸功德三昧、
 念意進覺三昧、勇慧三昧、辯無盡三昧、語無盡三昧、總持三昧、不忘三昧、善作三昧、觀一切世三
 昧、善知所樂三昧、生踊躍三昧、勇慈心淨三昧、大悲根本三昧、入喜三昧、捨離三纏三昧、法義三
 昧、法作三昧、智炬三昧、智海三昧、不波蕩三昧、一切心喜三昧、調伏三昧、解脫智三昧、已自在
 三昧、法場金剛幢三昧、蓮華三昧、蓮華增上三昧、離世法三昧、不動三昧、慧增上三昧、諸佛所念
 首楞嚴三昧、無諍三昧、火三昧、火明三昧、解脫勝智三昧、莊嚴佛身三昧、遍照三昧、入衆生心歡
 喜三昧、順助道三昧、莊嚴諸波羅蜜三昧、寶鬘三昧、與諸覺華三昧、與解脫果三昧、甘露三昧、速
 疾如風三昧、實際三昧、遮海濤三昧、山相持三昧、廣大神速三昧、見無量諸佛三昧、聞持三昧、不
 亂三昧、一念智無量功德海淨三昧など、是の如き等の不可計、那由他の諸三昧は、禪波羅蜜に入る
 時、悉く清淨なるを得。舍利弗、是を菩薩、禪定を修行して盡すべからずとは名く」と。

爾の時舍利弗、無盡意に語つて言はく「善い哉、善い哉、仁已に快く菩薩の禪波羅蜜を成きつ。唯
 願はくは仁者、當に菩薩の般若波羅蜜の、諸菩薩所得の無盡の般若波羅蜜の如くなるを説くべし。
 善男子、般若波羅蜜は、云何が行じ、云何が入るや」と。無盡意の言はく「唯舍利弗、般若波羅蜜

便と名け、佛の法身に於て、分別を生ぜざる、是を名けて慧と爲す。入るの時、佛を念ずるの聲、梵音ぼんの如くなる、是を方便と名け、法性の中に於て、言説の相無き、是を慧と爲す。入るの時、受持の心、金剛の如くなる、是を方便と名け、諸法の本性ほんしやうを思惟して亂れざる、是を名けて慧と爲す。入るの時、本誓願もとせがなする所を捨てずして、衆生を教化する、是を方便と名け、一切の法に於て無我を思惟する、是を名けて慧と爲す。入るの時、一切の善根を思惟する、是を方便と名け、善根の性を思惟して、住する所無き、是を名けて慧と爲す。入るの時、遍く諸佛の世界を觀する、是を方便と名け、諸の佛界は、虚空に同じきを見る、是を名けて慧と爲す。入るの時、菩提道場を莊嚴する、是を方便と名け、莊嚴する所、寂滅に同じきを觀する、是を名けて慧と爲す。入るの時、無上の法輪を轉せんと欲する、是を方便と名け、法輪に轉と不轉と無きを思惟す、是を名けて慧と爲す。入るの時、一向に助覺分を修する、是を方便と名け、衆生の諸熱惱の心を知らんが爲に、是の故に如來の禪定を修集して、一切法の相應と不相應、有相うさうと無相、一切の相續を知り、菩薩決定けつぎやうの思惟に隨順する、是を名けて慧と爲す。是を菩薩、禪定の方便と慧とに入ると名くるなり。是の如く、菩薩は禪波羅蜜の方便と智慧との、二事俱に行じて佛の法器を得、一切の諸魔も破壊する能はざるなり」と。

是の法を説ける時、三萬二千の菩薩は、日燈三昧にちとうさんまいを得たり。『何の因縁の故に、日燈三昧と名くるとならば、譬へば日出づるや、燈火・月光・星宿しやうしゆくの諸明あきら、悉く復現ぜざるが如く、菩薩大士の、是の定を得已るに、先に修する所の智も、一切二乗の學と無學、及び餘の衆生所得の諸智も、皆亦是の如く、悉く復現ぜざれば、是を日燈三昧と名く。

『菩薩の禪波羅蜜に住するや、即ち無量百千の種種の三昧に於て自在を得。今此の中に於て當に少分を説くべし。其の名を電燈三昧、淨三昧、月光三昧、淨莊嚴三昧、日光三昧、不可思議三昧、湧

【三】 日燈、晉譯には日明とす。

【三】 以下の諸三昧の名、晉譯多く異なる。

「唯舍利弗、菩薩は善く一切衆生の煩惱、心を亂すを知る、是の故に諸の禪定の法を修集し、住心を助成す。舍利弗、是の如く衆生は煩惱のために心亂れ、菩薩は中に於て、善く禪定を聚集・助成することを修し、此の禪定をして、平等心に住せしむ。是を菩薩、禪定を修行すと名く。若し衆生平等智中に住せば、是を名けて定と爲し、心と行と平等、性と相と平等、畢竟平等、發行平等なる、是を名けて定と爲し、施・戒・忍辱・精進・禪定・智慧及び諸の法等に住する、是を名けて定と爲し、定等しければ則ち衆生等しく、衆生等しければ、則ち諸法の等しきが如く、是の如きの等に入る、是を名けて定と爲す。是の如き等の定は、則ち空に等しく、空に等しければ、則ち衆生等し、衆生等しければ、則ち諸法等し、是の如き等に入る、是を名けて定と爲す。空等しければ、則ち無相等しく、無相等しければ、則ち無願等しく、無願等しければ、則ち無作等しく、無作等しければ、則ち衆生等しく、衆生等しければ、則ち諸法等しきが如く、是の如き等に入る、是を名けて定と爲す。自心等しき故に、他心も亦等しき、是を名けて定と爲す。一切の等しとは、所謂利衰ろへて地水火風の如きなり。是の等心を得れば、心虚空の如く、高下有ること無くして、常住不動、行ずる所の威儀は常に定にして轉せず、本性自爾にして怵へず高からず、自在にして無畏、寂黙にして無言、義を知り法を知り、時と非時とを知り、世の所行に隨つて、世に雜はらず、世の八法を捨てて一切の結を滅し、穢闍を遠離して獨處を樂む。菩薩は是の如く諸法を修行し、諸の禪定に於て、心安止して住し、世の所作を離る。

「是の菩薩、方便と慧とを以て、禪波羅蜜に入る。禪定に入るの時、大悲心を生じて、諸の衆生の爲にする、是を方便と名け、其の心永に寂なる、是を名けて慧と爲す。入るの時、佛を念ずる、是を方便と名け、禪に依止せざる、是を名けて慧と爲す。入るの時、一切の善法を攝取する、是を方便と名け、法性を分別せざる、是を名けて慧と爲す。入るの時、佛身に趣向して莊嚴する、是を方

【三五】善、麗本は若に作る、今三本に依る。

【三六】方便、晉譯に善權といふ。

【三七】前の句の如く、禪定に入るの時をいふ。以下同様な

過ぐるが故に。菩薩の定を修するや、其の心寂滅なり——二乗の諸禪三昧に勝るが故に。菩薩の定を修するや、更に^三廢すること有ること無し——畢竟已作なるが故に。菩薩の定を修するや、諸の衰耗^{しょうこう}無し——善く諸の習氣を斷除して滅するが故に。菩薩の定を修するや、常に智慧に入る——諸の世間を過ぎて彼岸に到るが故に。菩薩の定を修するは、衆生の心知らんが爲なり——一切の諸衆生を度脱せしむる故に。菩薩の定を修するや、三寶の種を斷せず——無盡の諸禪定を具足するが故に。菩薩の定を修するや、退失有ること無し——其の心常に定にあつて諸の錯謬無き故に。菩薩の定を修するや、自在を得——一切の諸善法を具足する故に。菩薩の定を修するや、内に善く思惟す——入出の息を斷つて勝智を得るが故に。舍利弗、是を菩薩、十六事を以て禪定を修行し、盡くる有ること無く、聲聞・辟支佛と共ならずと名く。

【三】云何が名けて菩薩定を修するとは爲す——諸の通と智とを具する故に。云何が通と爲し、云何が智と爲す。若し諸の色相を見なば、是を名けて通と爲し、若し一切の色は、盡く法性なるを知つて、而も證盡せざる、是を名けて智と爲す。若し音聲を聞かば、是を名けて智と爲し、三世の一切音聲言辭の相無きを解了する、是を名けて智と爲す。若し一切衆生の心行を知らば、是を名けて通と爲し、若し心行は悉く皆滅盡するを知つて、滅を證せざれば、是を名けて智と爲す。若し過去を念ずれば、是を名けて通と爲し、三世を知つて、聖礙有ること無ければ、是を名けて智と爲す。若し能く遍く諸佛の世界に至らば、是を名けて通と爲し、若し佛界の、虚空の相に同じきを知らば、是を名けて智と爲す。若し諸法の、無破壞の相を求むれば、是を名けて通と爲し、若し法を見ざれば、是を名けて智と爲す。若し世間を壞せざれば、是を名けて通と爲し、若し雜行を見ざれば、是を名けて智と爲す。若し梵・釋・護世天王に過ぐれば、是を名けて通と爲し、二乘・學・無學の智に過ぐれば、是を名けて智と爲す。是を菩薩の、禪定を修行する通と智との差別と名く。

【三】廢、麗本發に作る、今三本に従ふ。

【三】音譯に、何謂爲禪心寂定故。何謂神通、慧具足故と云へり。本文は通と智とを相對して説くも、音譯は通のみに依つて説き、説相少異あり。

【三】見、麗本に缺く、今三本に依る。

故に。云何が心に終る、所作無きが故に。云何が心に始まる、四魔を降すが故に。云何が心に終る、結の誓を捨つるが故に。云何が心に始まる、方便を知るが故に。云何が心に終る、慧を了するが故に。云何が心に始まる、善く發を知るが故に。云何が心に終る、善く度を知るが故に。云何が心に始まる、世俗を知るが故に。云何が心に終る、善く眞諦を知るが故なり。是を菩薩の心精進と名くるなり。是の心は精進を具足すること無盡なり、故に始終を説く。菩薩は是の如き作相を具足して、而も心未だ常に作業に任せず、是の菩薩、諸の業相に於て、知つて故に作す。云何が菩薩は知つて故に作すとならば、諸の善根の爲の故なり。諸の衆生の爲に大悲を修するが故に、有爲を離れず、一切佛の眞妙の智の爲の故に、生死に墮せず。是を菩薩摩訶薩の毘梨耶波羅蜜の不可盡とは名くと。

是の法を説ける時、七十那由他の諸天及び人は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、三萬二千の菩薩摩訶薩は、無生法忍を得たり。

爾の時舍利弗、無盡意に語つて言はく「善哉、善哉、唯善男子、仁、已に快く菩薩の毘梨耶波羅蜜

の、不可盡なるを説きつ。唯願はくは仁者、當に菩薩の禪波羅蜜の、諸菩薩所得の無盡の禪波羅蜜の如くなるを説くべし」と。無盡意の言はく「若し菩薩摩訶薩にして、十六事を以て禪定を修行せんに、盡くる有ること無く、聲聞辟支佛と共にらず。何等か十六なる。菩薩の定を修するや、吾、我有ること無けん——如來の諸禪定を具足するが故に。菩薩の定を修するや、味はず著せず——已が樂を求めざる故に。菩薩の定を修するや、大悲を行す——諸衆生の煩惱の結を斷つが故に。菩薩の定を修するや、諸の禪觀を増益す——欲界の諸過患を見るが故に。菩薩の定を修するや、諸通の業を具す——衆生の諸の心行を知らんが爲の故に。菩薩の定を修するや、其の心柔軟なり——衆生の中に於て自在を得るが故に。菩薩の定を修するや、諸禪三昧もて善く入出を知る——色界・無色界を

【元】墮、麗本隨に作る、今三本に依る。

【二〇】晉譯によれば、舍利弗、阿差未菩薩に告げて、豈復有善、施度無極、不可盡乎と問ふに、阿差摩菩薩十六事を以て施の不可盡を説く。本文も十六事を説けども、その禪波羅蜜に關するを以て、其の内容を異にするが故に、次には「定」に關する所説あるべきにて、茲に又晉譯の如く、重ねて施に關する所説の來るべき謂れ無きに似たり。

【三】座禪して眞理を觀念すること。

に終るとならば、三界無きが故に。云何が心に始まる、所有を捨つるが故に。云何が心に終る、輕んずる所無きが故に。云何が心に始まる、戒を受持するが故に。云何が心に終る、戒を持せざるが故に。云何が心に始まる、忍を修行するが故に。云何が心に終る、忍諍無きが故に。云何が心に始まる、諸善を發行するが故に。云何が心に終る、獨にして雜はらざるが故に。云何が心に始まる、定を修集するが故に。云何が心に終る、心清淨なる故に。云何が心に始まる、多聞にして厭かざるが故に。云何が心に終る、善く思惟するが故に。云何が心に始まる、義を習問するが故に。云何が心に終る、法に言説なきが故に。云何が心に始まる、智慧を求むるが故に。云何が心に終る、戲論を斷つが故に。云何が心に始まる、四梵行を修するが故に。云何が心に終る、眞智を捨つるが故に。云何が心に始まる、五通を具するが故に。云何が心に終る、漏盡を具するが故に、云何が心に始まる、念慮を發す故に。云何が心に終る、念に思惟無き故に。云何が心に始まる、正勤を發す故に。云何が心に終る、善と不善とを統ぶるが故に。云何が心に始まる、如意分を發す故に。云何が心に終る、報得を具するが故に。云何が心に始まる、諸根方便を發すが故に。云何が心に終る、諸根の法を觀るが故に。云何が心に始まる、諸力を集むるが故に。云何が心に終る、智も壞せざるが故に。云何が心に始まる、助菩提分を發す故に。云何が心に終る、善く諸覺方便を知つて分別するが故に。云何が心に始まる、助道の法を求むるが故に。云何が心に終る、進趣する無きが故に。云何が心に始まる、寂滅を求むるが故に。云何が心に終る、心は永に寂滅なるが故に。云何が心に始まる、慧を發起するが故に。云何が心に終る、善く法を知るが故に。云何が心に始まる、因を覺知するが故に。云何が心に終る、善く因を知るが故に。云何が心に始まる、他より聞くが故に。云何が心に終る、諸法の中に於て放逸無きが故に。云何が心に始まる、嚴飾を發すが故に。云何が心に終る、身性を知るが故に。云何が心に始まる、口を莊嚴するが故に。云何が心に終る、聖は默然たるが故に。云何が心に始まる、三脱を行する

【七】統、麗本脱に作る、今三本に従ふ。

【八】覺、麗宋本學に作る、今元明本に依る。

の貪癡・瞋恚・愚癡及び諸の煩惱など、若しは一人有り、一念の中に於て、是の如き等の三世の衆生所有の煩惱を具し、是の如き念念に、當に亦是の如く、諸の煩惱を具すること、無量無邊たるべし。一人の心中に具する所の諸結の如く、一切の無量無邊の衆生も皆亦是の如くなり。菩薩は中に於て慧の光明を生じ、一念の慧光には諸の摩翳せんぱい無く、悉く過去・未來・現在の衆生の煩惱・諸心所縁しよえんの境界・生住滅の相などを照して、餘遺有ること無し。是の菩薩は、諸の衆生の三世相應の諸煩惱等に於て、盡く知らざる無し。舍利弗、譬へば虚空の、覆はざる所無きが如く、菩薩の慧光も亦復是の如く、照さざる所無し。若し菩薩是の説を作すを聞き、驚かず怖れず畏れずば、當に知るべし、是の菩薩は勤行精進ごんぎやうしやうじんするを。是を菩薩の助慧無盡とは名く。

【三五】云何が菩薩は助佛法を修集すること無盡なる。菩薩行する所の助佛法を修すること、無量無邊なり、若しは菩薩中に於て限量すべからず。初めて發心ほつしんしてより道場に坐するに至るまで、其の中間に於て、六波羅蜜を具足することを修行し、諸の助道の法を具足することを修行す。是の如き一切の發心・修行と、一切善根の稱計すべからざるとは、悉く佛法を助く。是を菩薩、助佛法を修して盡くる有ること無しと名け、是を菩薩、八事もて精進を修行すること無盡なりとは名く。

【復次に舍利弗、菩薩の精進は亦盡くすべからず。若しは身の善業、若しは口の善業、若しは意の善業など、常に勤めて住ままらず。何を以ての故に、菩薩作す所の精進は、常に身口意と相應す。身・口の精進は皆心に由ると雖も、心を增長みちがうと爲す。云何が菩薩は心に精進するや。所謂心に始まり心に終るなり。云何が心に始まるとならば、初めて發心ほつしんするが故に。云何が心に終るとならば、菩提の心は寂滅なるが故に。云何が心に終るとならば、諸の衆生に於て大悲を起すが故に。云何が心に終るとならば、我・人無きが故に。云何が心に始まるとならば、衆生を攝するが故に。云何が心に終るとならば、諸法を取らざるが故に。云何が心に始まるとならば、生死を厭はざるが故に。云何が心

【三五】 八事の第八。晉譯は第八を一切佛法亦不可盡と云ひ、所説簡なり。

【三六】 此の句、晉譯相當文に復有菩薩合集精進亦不可盡とあり。

含の成就する所の智に比せんに、百分・千分・百千分・百千萬分、乃至は算數譬喩の及ぶ能はざる所たり。若し三千大千世界の有らゆる衆生、悉く阿那含の智を爲すも、一の阿羅漢の成就する所の智に比せんに、百分・千分・百千分・百千萬分、乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所たり。若し三千大千世界の有らゆる衆生、悉く緣覺の智を成ずるも、一の緣覺の成就する所の智に比せんに、百分・千分・百千分、乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所たり。若し三千大千世界の有らゆる衆生、悉く百劫の菩薩、成就する所の智を爲すも、一の得忍の菩薩、成就する所の智に比せんに、百分・千分・百千分、乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所たり。若し三千大千世界の有らゆる衆生、悉く不退の菩薩、成就する所の智を爲すも、一不退の菩薩成就する所の智に比せんに、百分・千分・百千分、乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所たり。若し三千大千世界の有らゆる衆生、悉く不退の菩薩の智を得んも、一の補處の菩薩成就する所の智に比せんに、百分・千分・百千分、乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所たり。若し無量無邊の世界の衆生、悉く補處の成就する所の智の如くなるも、一如來の是處非處の智に比せんに、百分・千分・百千分、乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所たり。總じて如來の諸力・無畏・不共の法を説かんに、亦復是の如くなり。若し菩薩にして是の説を作すを聞き、驚かず怖れず畏れずば、當に知るべし、是の菩薩は勤行精進するを。是を菩薩の助智無盡とは無く。

云何が菩薩の助慧無盡なる。一切衆生所有の心行は窮盡すべからず、菩薩は中に於て應に計數すべからず。若しは過去・未來・現在の衆生所有の心行など、若しは人有り、一念の中に於て、是の如き等の三世の衆生所有の心行を具し、是の如き念念に、皆亦是の如く諸の心行を具す。一人の心中に具する所の心行の如く、一切の無量無邊の衆生も皆亦是の如し。若しは過去・未來・現在の衆生所有

り。

【二】 小乘の菩薩は三大阿僧祇劫の行を終へて、佛果に至るまで、更に百大劫の福業を修するを要す。晉譯には一の發智菩薩の智に如かずと云へり。

【三】 忍位を得たる菩薩、この場合は無生法忍なるべし。晉譯には略す。

【四】 不退、阿毘跋致 Avinivartika、無上菩提に於て、退轉せざる位。

【五】 前佛に續ぎて、成佛すべき菩薩、而かも一生を隔つて成佛すれば、一生補處といふ。

【六】 如來の是非の理を分別したまふ智力、十力の一。

【七】 八事の第七。晉譯にては、第七の項下に攝し、習無窮慧・而不可盡といふ。

譬喻所知の衆たるのみ。何を以ての故にとらば、是の衆生の性は無量無邊にして、稱計すべからず、思議すべからざればなり。若し菩薩、是の説を作すを聞き、驚かず怖れず畏れざれば、當に知るべし、是の菩薩は精進を勤修するを。是を菩薩の教化無盡とは名く。

「云何が菩薩の助道無盡なる。菩薩所修の助道の功德は、無量無邊なり、菩薩は中に於て應に限量すべからず。何を以ての故に、一切衆生所有の功德——若しは去・來・現在、及び聲聞・緣覺所有の功德は、佛世尊に於て、始めて一毛孔の功德を成就するのみ。是の如き一一の毛孔所有の功德、乃至一切の毛孔の功德、聚集成就して、始めて如來の一隨形好を成ず。是の如き一一の隨形好等、乃至一切の隨形好の功德、聚集成就して、是の如く如來の一相を成就す。是の如き一一の相より三十相に至り、是の如き三十相を聚集せる百倍の功德こそ、始めて如來眉間の毫相を成じ、乃至是の毫相を倍すること百千の功德を修集して、始めて如來の無見頂相を成ず、是を菩薩の助道功德の無盡とは名く。

「云何が菩薩の助智無盡なる。菩薩所修の助智は無量無邊なり、菩薩中に於て應に限量すべからず。若し三千大千世界の有らゆる衆生にして、一信行の成就する所の如き智あらんに、是の如き信行を、一法行所成就の智に比せんも、百分・千分・百千分・百千萬分、乃至は算數譬喩の及ぶ能はざる所たり。若し三千大千世界の衆生にして、悉く法行を爲さんも、一の八人成就する所の智に比せんに、百分・千分・百千分・百千萬分、乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所たり。若し三千大千世界の有らゆる衆生、悉く八人の智を爲すも、一須陀洹の成就する所の智に比せんに、百分・千分・百千分・百千萬分、乃至は算數譬喩の及ぶ能はざる所たり。若し三千大千世界の有らゆる衆生、悉く須陀洹の智を爲すも、一迦陀含の成就する所の智に比せんに、百分・千分・百千分・百千萬分、乃至は算數譬喩の及ぶ能はざる所たり。若し三千大千世界の有らゆる衆生、悉く斯陀含の智を爲すも、一の阿那

【一〇】 晉譯は茲に是謂き造立無數功德と結ぶも、これ誤なり。前註を見よ。

【一一】 八事の第五、晉譯に造立無數何謂き三了智慧而無窮極と(第七)。

【一二】 佛の相好即ち肉體的特徴に、大相と小相とあり、大方なるを相といひ、小なるを好といひ、大相に隨ふ細小なる相好なる故に隨形好といふ。普通は相に三十二、好に八十を數ふ。

【一三】 佛は眉間に内毫あり、右旋して光を放つと云はる。

【一四】 佛の烏瑟膩沙相中の好なり。佛の頂上に髻形の隆起あり、これに一切の人天等の見る能はざる頂點あり、無見頂相といふ。

【一五】 八事の第六、晉譯には、第七(曉了智慧而無窮盡)項下に説く。

【一六】 信行は法行に對す。

自ら聖法に依つて行ずるを法行と云ひ、他の教を信じて行ずるを信行といふ。晉譯相當文には、只佛を篤信するものと、衆信の者とに分つのみ。

【一七】 八人、晉譯相當文に八等人とす。八忍を得たる者をいふ。卷二參照。

【一八】 同相等文に其(八等人)智百倍不如三遺迹と云ひ、次の斯陀含以下の三を略説して、往來、不還、無著と云へ

菩薩は、精進を懈らざるを。是を菩薩の莊嚴無盡と名く。

【五】云何が菩薩の勇進無盡なる。若し三千大千世界に、中に満ちて火を盛り、佛を見んが爲の故には、要す當に是の火中に従つて過ぐべく、若しは法を聞き、衆生を教化し、衆生を善法に安止せん爲の故には、亦應に是の如く火中に従つて過ぐべき、是れを菩薩の勇進無盡と名く。何の因縁の故に、名けて勇進と曰ふとならば、常に他の爲の故に、他を靜かならしむる爲の故に、他を調伏する爲の故に、他を滅盡する爲の故に、常に懈慢ならず、堅牢不退にして、心善く大悲の中に安止し、常に精進を勤む。而も衆生の爲のなるが故に勇進と名く。菩薩の行く時は、歩歩に心を御し、悉く菩提に向ひ、常に衆生を觀す——化度の爲の故に。是の觀を作すと雖も煩惱を起さざる、是を菩薩の勇進無盡と名く。

【六】云何が菩薩の修習無盡なる。發起する所の一切の善心の如く、常に菩提を願ふ、是を菩薩の修習無盡と名く。何を以ての故に、諸の善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に迴向し、初より無盡なるが故なり。舍利弗、譬へば天の、一滴の水を雨らして、大海中に墮すに、其の諦微なりと雖も、終に滅盡する無きが如く、菩薩の善根を菩提に願向する、亦復是の如くにして、滅盡有ること無けん。

善根を修習すとは、所謂正しく迴向して善根を修習し、衆生を護らん爲に善根を修習し、衆生の諸所須に隨はん爲の故に、善根を修習し、一切智を成就せんと欲する爲の故に、善根を修習する、是を菩薩の修集無盡とは名く。

【七】云何が菩薩の教化無盡なる。衆生の性は、稱計すべからず、菩薩は中に於て、應に稱計すべからず。若し一日に三千大千世界の、中に満てる衆生を教化すと言はば、是の如き計數、乃至無量不可思議・不可稱劫に、衆生を教化せんに、是の如く教化せらるる衆生は、不可稱計・不可思議たりと雖も、衆生の分に於ては、猶ほ未だ是れ教化せられざるものの、百分・千分・百千分・百千萬分、乃至は算數。

【五】 八事の第二。晉譯には增長精進の不可盡といふ。

【六】 八事の第三。晉譯相當文には長養一切精進而不可盡と云ふ。

【七】 習、麗宋二本集に作る、今元明の兩本に依る。以下亦同じ。

【八】 この節、晉譯は八精進の第五、何謂造立無數功德として説くものに當る。晉譯に云ふ第四の説明を缺く、次註參照。

【九】 八事の第四。晉譯の、先に八精進を擧ぐるや、その第四に常欲養育善法及衆生を擧ぐるも、下文にその説明無し。以上の文は八法の第六、何謂心求三諸度無極一として説かる。

卷の第二十八

無盡意菩薩品 第十二之一

爾の時舍利弗、無盡意に語つて言はく「善い哉・善い哉、唯善男子、汝已に快く菩薩の屬提波羅蜜の、盡すべからざるを説きつ。唯願はくは仁者、當に菩薩の毘梨耶波羅蜜の、諸菩薩所得の、無盡の毘梨耶波羅蜜の如くなるを説くべし」と。無盡意の言はく「唯舍利弗、菩薩は八事を具足し、精進を修行して、盡すべからず。何等か八と爲すとならば、大莊嚴を發して盡くる有ること無きと、積習勇進して盡すべからざると、諸善を修行して盡すべからざると、衆生を教化して盡すべからざると、助道功德は盡すべからざると、助無上智の盡すべからざると、助無上慧の盡すべからざると、集助佛法の盡すべからざるとなり。

【一】云何が菩薩は、莊嚴無盡なるとならば、諸の生死に於て、心疲倦せず、劫數の、當に佛道を成すべきを計せず、若干劫の在、莊嚴を作し、若干劫の在莊嚴を作さず。菩薩莊嚴所經の劫數は稱計すべからず。今日より生死に至る如きを、本一日一夜と爲し、是の如き三十日を一月と爲し、この十二月を一歳と爲し、是の百千歳に於て、一道心を發し、一如來を見まつる。是の如く發心して、見る所の諸佛は、恒沙の數の如く、爾所の佛邊に於て、方に一切衆生の心行を知るを得、是の如くして過く一切衆生の心の所行を知り、猶ほ退没せざる、是を則ち名けて不懈の莊嚴、無盡の莊嚴と曰ふ。經に是の如く佛を見て發心し、他の衆生の心所行を知るの時、常に檀波羅蜜・尸波羅蜜・屬提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を具足することを修し、一切の助菩提の法を修集し、具に相好・十力・無畏・不共の法を修し、具に一切の諸佛法を修するが故に、是を不懈莊嚴・無盡莊嚴と名く。若し菩薩有り、是の説を作すに聞き、驚かず怖れず畏れずんば、當に知るべし、是の

【一】 晉譯卷第三のつとぎ。

【二】 菩薩、八事を具足して精進を修行する中の第一。
 【三】 莊嚴無盡、晉譯に被弘誓隨一と。
 【四】 若干劫云云、晉譯に亦不ノ思ヲ念於若干劫一行・菩薩業と。

すべし」と。時に無盡意菩薩摩訶薩、是の三昧に於て、久しく已に通達したり。是の故に能く一切の大衆・十方の諸來大菩薩等、佛及び聖僧を以て、悉く身中に内る。爾の時、其の身は猶ほ大寶莊嚴の世界の如く、諸の菩薩摩訶薩等、有らゆる種種莊嚴の事を受けたり。是の時大衆は、悉く自ら、形無盡意菩薩の身肉に在るを見たり。時に無盡意、是の如き大神通を示現し已るに、是の時、大衆は各還つて故の如くなり。

時に大莊嚴菩薩摩訶薩、無盡意に問ふらく「善男子、我れ昔より來、未だ曾て是の如き三昧・神通の變化を見聞せず」と。無盡意の言はく「善男子、假使三千大千世界の一切所有、悉く我が身に入るも、猶ほ増減無し、況んや此をや」と。

是の無盡の忍辱を説き、大神變を現じたる時、七十六那由他の天及び人は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、萬二千の菩薩摩訶薩は無生法忍を得たり。「舍利弗、是を菩薩、忍辱を修行して盡すべからずとは名くるなり」と。

大方等大集經卷第二十七

【八三】身中に内る、晉譯に悉自見、坐ニ阿差末躋」と。

別無く、莊嚴無く、修治無く、發進無く、終に造生せず、若し無生ならば、是れ不可盡なり、是の如き忍は、是れ無生忍なり。無生忍は是れ不出忍なり、不出忍は是れ畢竟忍なり。是の如く菩薩は是の忍を修行して、受記の忍を得。舍利弗、是を菩薩忍を行する、無盡なりとは名く」と。

是の忍を説ける時、一切の大衆、無盡意を讚へて言はく「善男子、善い哉・善い哉、快く是の忍を説けることや」と。言ひ已るに、即ち種種希有の諸華、塗香・末香、無數の雜衣、幢幡・寶蓋を雨らし、以て無盡意を供養す。百千の伎樂、上空中に於て、自然に聲を出し、是の如き言を作す「若し衆生有つて、如來甚深の忍を得んと欲せんもの、是の説を作すを聞いて、應に驚怖すべからず」と。時に諸の華香・雜衣・幡蓋など、普遍充溢して、此の三千大千世界を滿たしぬ。

爾の時佛、無盡意に告げて言はく「善男子、汝供養せらるる華香等の物をば、自ら器を求めて除去・振擗すべし」と。無盡意の言はく「唯然り、世尊、我れ今當に、神通の力を以て、即ち身を器と爲すべし」と。時に無盡意、即ち菩薩の色身三昧に入り、三昧に入り已つて、一切所有の供養の具をば、悉く齋中に入れ、身界は故の如く、不増不減なりき。

爾の時、衆中に一菩薩有つて、大莊嚴と名けたるが、無盡意に問ふらく「善男子、入る所の三昧をば、名けて何等と爲す。仁入り已るに、諸の供養の具は悉く身中に入り、身界は故の如くにして、増減せず」と。無盡意の言はく「善男子、其の三昧に名けて一切色身三昧と名く」と。大莊嚴の言はく「是の三昧定は、頗し復更に餘の力勢有るや不や」と。無盡意の言はく「是の三昧の力は、能く身界をして、悉く三千大千世界の、有らゆる色相を受け、身界は故の如くにして、亦増減無からしむるなり」と。

爾の時、衆中に、或は人・天有つて、是の思惟を作す「寧ろ是の定の力を見るを得べきや不や」と。爾の時佛、一切の大衆人天の所念を知り、無盡意に告げたまはく「善男子、汝是の定の神力を示現

【七六】 晉譯卷第三。

【七九】 振擗、おほひかくすをいふ。

【八〇】 大莊嚴、晉譯に大淨といふ。

【八一】 一切色身三昧、晉譯に普受色身といふ。

忍ばず、我れ善を忍ぶも不善を忍ばず、我れ出世を忍ぶも在世を忍ばず、我れ無諍を忍ぶも諍を忍ばず、我れ無漏を忍ぶも漏を忍ばず、我れ白法を忍ぶも黒法を忍ばず、我れ寂滅を忍ぶも生死を忍ばずとする、是の如き忍は、是れ相對を觀するものにして、畢竟の忍に非ざるなり。

「云何が名けて畢竟の忍と爲すや。若し空寂に入り、諸見と和合せず、空に倚著せざれば、是の諸見等、亦復皆空なり、是の如き忍は、是れ無二の相にして、是れ畢竟の忍なり。若し無相に入り、諸の覺と和合せず、無相に倚らざれば、是の覺皆空なり、是の如きの忍は、是れ無二の相にして、是れ畢竟の忍なり。若し無願に入り、願と合せず、無願に倚らざれば、是の願皆空なり、是の如きの忍は、是れ無二の相にして、是れ畢竟の忍なり。若し無作に入り、作と合せず、無作に倚らざれば、是の作は皆空なり、是の如き忍は、是れ無二の相にして、是れ畢竟の忍なり。若し盡結に入り、結と合せず、盡結に倚らざれば、諸結皆空なり、是の如き忍は、是れ無二の相にして、是れ畢竟の忍なり。若し善に入り、不善と和合せず、善に倚らざれば、不善皆空なり、是の如き忍は、是れ無二の相にして、是れ畢竟の忍なり。若し出世に入り、世と合せず、出世に倚らざれば、在世皆空なり、是の如きの忍は、是れ無二の相にして、是れ畢竟の忍なり。若し無諍に入り、諍と合せず、無漏に入り、漏と合せず、無漏に倚らざれば、諸漏皆空なり、是の如きの忍は、是れ無二の相にして、是れ畢竟の忍なり。若し白法に入り、黒と合せず、白法に倚らざれば、黒法皆空なり、是の如き忍は、是れ無二の相にして、是れ畢竟の忍なり。若し寂滅に入り、生死と和合せず、寂滅に倚らざれば生死皆空なり、是の如き忍は、是れ無二の相にして、是れ畢竟の忍なり。若し性は自ら生ぜず、他よりも生ぜず、和合して生ぜず、亦出有ること無く、破壊すべからざらん、壞すべからざる者は是れ不可盡なりと、是の如き忍は是れ畢竟の忍なり。作と非作と無く、倚著する所無く、分

せざるが故に。若し樂事に遇ふも、心歡逸ならず、有爲法の無常の相なるを觀するが故に。若し苦事に遇ふも、心疲憊せず、衆生の爲の故に。世法も染せず、依止せざるが故に。忍んで諸の苦を受け、危逼の者を見ては、身を以て代るが故に、節々支解するをも忍ぶ、覺支を具足するが故に。衆の苦身に加はるも、悉く能く堪受す、佛の身相を具するが故に。他の過患をも忍ぶ、善く業力作すが故に。燒熱を現するも、諸の苦行を修す、外道を伏するが故に。現に諸の道に入り、釋梵・護世諸天に出過する故に。是を菩薩の忍辱とは名く。

「又畢竟の忍は、諍訟有ること無し。何を以ての故にとならば、若し他の、我を罵るを見るも、能く忍はゞ、是の如きの忍は、是れ二相を觀じて畢竟の忍には非ず。若し誰か我を罵ると言はゞ、是の如きの忍辱は、是れ法の功德にして、畢竟の忍に非ず。若し眼を罵らんか、是の如きの忍は、是れ入相を觀するものにて、畢竟の忍に非ず。耳鼻舌身、若しは意を罵らんか、是の如き忍は、諸入を觀するものにして、畢竟の忍に非ず。若し罵無きも、是の如きの忍辱は、是れ無我を觀する者にして、畢竟の忍には非ず。若し假名を知らば、是の如きの忍は、是れ響相を觀するものにして、畢竟の忍に非ず。彼と我と二俱に無常なりとする、是の如き忍は、是れ無常を觀するものにして、畢竟の忍には非ず。彼は是れ顛倒し、我に顛倒無しとする、是の如きの忍は、是れ高下を觀するものにして、畢竟の忍に非ず。彼は勤行せず、我は是れ勤行すと、是の如きの忍は、是れ勤懈を觀する者にして、畢竟の忍に非ず。彼は惡道に住し、我は善道に住すと、是の如き忍は、是れ善惡を觀する者にして、畢竟の忍に非ず。我れ無常を忍ぶも有常を忍ばず、我れ能く苦を忍んで諸の樂を受けず、我れ無我を忍ぶも有我を忍ばず、我れ不淨を忍ぶも淨を忍ばずと、是の如き忍は、是れ有對を觀するものにて、畢竟の忍に非ず。我れ空を忍ぶも諸見を忍ばず、我れ無相を忍ぶも諸の覺を忍ばず、我れ無願を忍ぶも願を忍ばず、我れ無作を忍ぶも作を忍ばず、我れ結の盡を忍ぶも結の在を

【七七】代、麗本役に作る、今三本に依る。

業報を識るが故に、當に知るべし、是れ忍なり。身を莊嚴するが故に、當に知るべし、是れ忍なり。口の演ずるところ淨なるが故に、當に知るべし、是れ忍なり。心清淨の故に、當に知るべし、是れ忍なり。心堅牢なるが故に、當に知るべし、是れ忍なり。言語自在なるが故に、當に知るべし、是れ忍なり。憶想せざるが故に、當に知るべし、是れ忍なり。善く心を分別するが故に、當に知るべし、是れ忍なり。他心を護るが故に、當に知るべし、是れ忍なり。梵世の行を修するが故に、當に知るべし、是れ忍なり。人天の報を受くるが故に、當に知るべし、是れ忍なり。身相勝るゝが故に、當に知るべし、是れ忍なり。妙梵音を具するが故に、當に知るべし、是れ忍なり。諸の過患を除くが故に、當に知るべし、是れ忍なり。諸の荒穢を斷するが故に、當に知るべし、是れ忍なり。一切不善の根を斷するが故に、當に知るべし、是れ忍なり。諸結の賊を殺すが故に、當に知るべし、是れ忍なり。惱害の衆生に於て、超越を得るが故に、當に知るべし、是れ忍なり。一切の佛法を具足するが故に、當に知るべし、是れ忍なり。舍利弗、是を菩薩の三十二事——忍辱を修行して盡すべからざる——と名く。

「舍利弗、云何が忍と爲す。若し罵る者を見るも、黙して受け、報せず、善く音聲は響相の如くなるを知るが故に。呵責する有るを見るも、黙して之を受く、善く身相は影像の相の如くなるを知るが故に。瞋る者有るを見るも、心に恨を懷かず、善く心法は幻相の如くなるを知るが故に。忿るも忍に報せず、心清淨なる故に。稱名有るを聞くも、心に愛を生ぜず、自ら高からざるが故に。不稱名を聞くも、心に礙を生ぜず、功德具足せざるが故に。若し榮利に遇ふも、喜悅を生ぜず、善く自ら調するが故に。若し衰耗に遇ふも、罪礙を生ぜず、心寂滅なるが故に。稱有る者を見るも、心に驚動せず、善く分別を知るが故に。毀有る者を見るも、心縮没せず、其の心廣大なるが故に。識有る者を見るも、其の心下らず、善く安住するが故に。譽有る者を見るも、其の心高からず、傾動

受生するに在り、是の故に盡くる有り。人中の十善は盡くるが故に盡有り。欲界諸天の福報功德は盡くる有るが故に盡有り、色界諸天の禪・無量の心は盡くるが故に盡有り、無色界の天所入の諸定は、盡くるが故に盡有り、外道・仙人所有の諸戒は、神通を退失して盡くるが故に盡有り、一切聲聞の、學・無學戒もて入る涅槃際^はは、盡くる有るが故に盡有り、辟支佛の戒は、大悲の心無くして、盡くるが故に盡有ればなり。

『舍利弗、菩薩の淨戒は、皆盡くる有ること無し。何を以ての故にとならば、是の戒中より、一切の戒を出し、種の無盡なるが如く、果も亦無盡なればなり。是の菩提の種は、盡すべからざるが故に。如來の戒禁も、亦盡くる有ること無し。是を以ての故に、諸の居士等所持の諸戒は、皆不可盡なり。舍利弗、是を菩薩、淨戒を修持して盡すべからずと名く』と。

爾の時舍利弗、無盡意に語つて言はく『善哉、善哉、善男子、仁已に快く、菩薩の尸波羅蜜の、盡すべからざるを説けり。唯願はくは仁者、當に菩薩の屬提波羅蜜の、諸菩薩所得の無盡の屬提波羅蜜の如くなるを説くべし』と。

無盡意の言はく『唯舍利弗、菩薩は三十二事を具足し、忍辱^をを修行して亦盡すべからず。何等か三十二なる、諸の結^をを斷するが故に、當に知るべし、是れ忍なり。害を生ぜざるが故に、當に知るべし、是れ忍なり。纏^有ること無きが故に、當に知るべし、是れ忍なり。惱有ること無きが故に、當に知るべし、是れ忍なり。覆蔽^無きが故に、當に知るべし、是れ忍なり。瞋有ること無きが故に、當に知るべし、是れ忍なり。忿^無きが故に、當に知るべし、是れ忍なり。闘訟^無きが故に、當に知るべし、是れ忍なり。諸の塵界に於て、心不異なるが故に、當に知るべし、是れ忍なり。自他を護るが故に、當に知るべし、是れ忍なり。菩提心に順するが故に、當に知るべし、是れ忍なり。善く思惟するが故に、當に知るべし、是れ忍なり。二の想無きが故に、當に知るべし、是れ忍なり。

【七六】 三十二、音譯と出沒あり。

に抵突無きが故に、調伏戒を持して惱害無き故に、寂滅戒を持して、心に垢穢無きが故に、願語戒を持して如説に行ずる故に、化衆生戒を持して、攝法を離れざるが故に、護正法戒を持して如實に遠せざる故に、如願成就戒を持し、諸の衆生に於て、心平等なる故に、親近佛戒を持して、如來の無上戒を願求するが故に、入佛三昧戒を持して、一切諸佛の法を具足するが故に。舍利弗、是を菩薩の、六十七事の淨治戒衆——盡すべからざる——とは名くるなり。

『又舍利弗、菩薩は無盡の清淨戒中に、倚著有ること無し。所謂我・人・衆生・壽命・養育・士夫・色・受・想・行・識、地・水・火・風を破す。是の淨戒中に、眼色の相、耳聲・鼻香・舌味・身觸・意法等の相無く、亦身心も無し、是の戒は定相にして一向不共の故に、是の戒の分別相は、方便もて一切法を緣するが故に、是の戒空相にして無相の際を得、三界を雜へざるが故に、是の戒不作にして無生忍なるが故に。是の淨戒中には已作・今作・當作有ること無く、是の清淨戒は過去に滅せず、未來に來らず、現在に住せず。と』

『又舍利弗、是の淨戒中には、心淨くして垢無く、識は止住せず、思も親近せず。是の清淨戒は、欲界に依らず、色界に近かず、無色界に住まらず。是の清淨戒は、欲塵を捨離し、瞋恚の礙を除き、無明の障を滅す。是の清淨戒は、斷にあらず常にあらず、因緣に逆はず。是の清淨戒は、我相有ること無く、我所の相を捨して、身見に住せず。是の清淨戒は、假名を取らず、色相に住せず、名色を雜へず。是の清淨戒は、因に繫らず、諸見を起さず、疑悔に住せず。是の清淨戒は、貪瞋癡に住せず、善根に著せず。是の清淨戒は、不惱不熱、寂滅にして相を離る。是の清淨戒は、佛種を斷ぜず——正法を求むるが故に。法種を斷ぜず——法性を分別せざるが故に。僧種を斷ぜず——無爲を修するが故に。』

『舍利弗、淨戒を持する者、相續して斷ぜざるが故に不盡なり。所以は何んとならば、凡夫の戒は、

【七二】 以下、晉譯に其戒常母、是相一心、而不迷荒。論云、觀諸法戒以過空無想不願、亦無形像過於三界。

【七三】 身見、梵に薩迦耶達利惡致 (Sakāyaditī) 身に於て實我を執する見なり。

【七四】 この句、晉譯に因本清淨一故不可盡、何謂一俗戒一謂生死處亦有盡矣。所以者何、在三子五趣一故曰盡、有二往返一故、不レ住一處、云云と。

【七五】 本文に凡夫戒者、在所受生是故有盡と。

信順して善く法を觀するが故に、僧を信敬して聖衆を尊重するが故に、五體を地に投じて佛を志念するが故に、五體投地して法を思惟するが故に、五體投地して僧を宗敬するが故に、堅く禁戒を持し、一切犯す無く、乃至小禁をも放捨せざる故に、不戒戒を持して餘の乘に依らざる故に、不穿戒を持して惡處に生ずることを離るゝが故に、不荒戒を持して諸結を雜へざるが故に、不汚戒を持して専ら白法を長ぜしむる故に、甚深戒を持し、意に隨つて廻向し、自在を得るが故に、讚歎戒を持して智者も呵せざる故に、純善戒を持して正念に知るが故に、不呵戒を持して一切の戒不散の故に、善堅戒を持して諸根を防護する故に、名聞戒を持して諸佛に念ぜらるゝ故に、知足戒を持して厭かさる無き故に、少欲戒を持して貪惜を斷つ故に、性淨戒を持して身心寂滅なる故に、阿蘭若戒を持して憍闍を離るゝ故に、聖種戒を持して他の意を求めざるが故に、威儀戒を持して、一切の善根自在なるを得るが故に、如說戒を持して人天歡喜する故に、慈心戒を持して衆生を護るが故に、悲心戒を持して能く諸の苦を忍ぶが故に、喜心戒を持して心懈怠ならざる故に、捨心戒を持して愛恚を離るゝ故に、自省戒を持して心に善く分別するが故に、不求短缺戒を持して他心を護るが故に、善攝戒を持して善く守護するが故に、惠施戒を持して衆生を教化するが故に、忍辱戒を持して心に悲礙無きが故に、精進戒を持して退還せざるが故に、禪定戒を持して諸の禪支に長ずるが故に、智慧戒を持し、多聞にして善根あり、厭足する無きが故に、多聞戒を持して、博學堅牢なるが故に、親近善知識戒を持して、菩提を助成するが故に、遠離惡知識戒を持して、惡道を遠離するが故に、不信心戒を持して、無常の想を觀する故に、不信心戒を持し、勤めて善根を行する故に、不悔戒を持して心清淨なるが故に、不邪命戒を持して、心行清淨なるが故に、不焦戒を持して畢竟清淨なるが故に、不燒戒を持して、善の行業を修するが故に、無慢戒を持し、心下りて橋らざる故に、不怖戒を持して、諸欲を遠離するが故に、不高戒を持して、心平直なるが故に、柔和戒を持して、心

【七〇】不戒、晉譯相等文は、戒禁完具、未だ會闍漏。戒を守らざるに依つて戒を犯すを缺といふ。
 【七一】以下、晉譯は、戒に違違せず、戒を奉じ、戒に順ひ、戒を護り、戒を持することなどを擧げて説き、一一をげ戒の名稱の如くに扱はず。

刀毒の施無く、衆生を惱ますの施無し。

「菩薩の施を行するや、智者の輕笑する所と爲らず、何を以ての故にとならば、空寂を觀じて施を行ふ、是の故に無盡なり。無作所熏の施なり、是の故に無盡なり。三有の相を出でて施す、是の故に無盡なり。處を取らずして施す、是の故に無盡なり。解脱の果の爲に施す、是の施は無盡なり。衆魔を伏せん爲に施す、是の施無盡なり。結・愛を斷ぜん爲に施す、是の施無盡なり。増長の爲に施す、是の故に無盡なり。善分別の爲に施す、是の故に無盡なり。助菩提の爲に施す、是の故に無盡なり。正廻向の爲に施す、是の故に無盡なり。道場と解脱の果とを莊嚴せんために施す、是の故に無盡なり。是の施は無邊なり、是の故に無盡なり。是の施は壞する無し、是の故に無盡なり。是の施は不斷なり、是の故に無盡なり。是の施は廣大なり、是の故に無盡なり。是の施は無住なり、是の故に無盡なり。是の施は無伏なり、是の故に無盡なり。是の施は無住なり、是の故に無盡なり。是の施は一切種智に進趣す、是の故に無盡なり。唯舍利弗、是を菩薩は布施を修行して、不可盡なりと名くるなり」と。

爾の時舍利弗、無盡意に語つて言はく「善哉・善哉、唯善男子、仁已に快く、菩薩摩訶薩の、檀波羅蜜を修行して、不可盡なるを説きつ。唯願はくは仁者、當に菩薩の尸波羅蜜は、諸菩薩所得の無相の尸波羅蜜の如くなるを説くべし」と。無盡意の言はく「唯舍利弗、菩薩の戒衆六十七事を、清淨に修治すること、亦盡すべからず。何等か六十七なる。諸の衆生に於て惱害を起さず、他の財物に於て、竊盜を生ぜず、他の婦女の中に於て、邪視を生ぜず、諸の衆生に於て、欺誑すること無く、初より兩舌せず、自の眷屬に於て止足を知るが故に、惡口有ること無し、龜穢を忍ぶが故に、綺語有ること無し、常に善く説くが故に、他の樂事に於て貪嫉せざる故に、初より瞋恚無し、惡言を忍ぶが故に、正見あつて邪ならず、餘道を賤む故に、深く佛を信じて、心濁らざるが故に、法に

【六】施、麗本缺く、今三本に依つて加ふ、以下の二句、亦同じ。

【六】戒衆は戒の條々と云ふが如し。六十七、晉譯に六十四となす。

せば、無量の法樂を具足して樂むが故に。若し脚足を持って以て布施せば、法足具成し、進んで道場に至るが故に。若し手を以て施せば、法手を具足して衆生を安持し、樂を得しむるが故に。若し耳鼻を以て、用て施與せば、諸根を具足し、悉く通利なるが故に。若し眼目を以て持用て施すは、無礙の法眼を具足せんと欲するが爲の故なり。若し頭を以て施せば、三界の中に於て、殊勝一切の智慧を具足するが故なり。若し血肉を以て、持用て施せば、諸の不堅牢に堅牢を具するが故なり。若し髓腦を以て持用て施せば、金剛の身を具して不壞を得るが故に。菩薩は邪命を以て、財を求め布施を行ぜず、衆生に逼り、強て他物を求め、轉じて以て人に施さず、恐怖して施す無く、羞恥の施無く、慳惜の施無く、其の所許の如く、損減の施無く、不愛の施無く、畢竟して常に施し、不畢竟の施無く、諛諂の施無く、姦詐の施無く、業報を疑つて施せず、邪命の施無く、愚癡の施無く、不信の施無く、不解の施無く、疲歎の施無く、依著の施無く、選擇の施無く、異相の施無く、受者を求めて施せず、衆生の、受くるに堪えざる者、戒を持し戒を犯すも、増減無く施すこと有ること無く、受者の所に於て、報を望んで施せず、名を求めて施せず、施を毀譽せず、慢・非慢の施無く、熱惱の施無く、悔心もて施せず、白讃して施せず、雜穢の施無く、業報を望んで施せず、定處に施する無く、瞋怒垢愛等の施有ること無く、來り乞ふ者有らば、惱害せずして施し、輕易の施無く、頓面もて施せず、揀擇して施せず、故ならざるに施すること無く、手づから與へずして施する無く、不常の施無く、斷絶の施無く、嫉慢の施無く、齊限の施無く、其の許す所の如きも、貿易して施さず、堪任と不堪忍との施有ること無く、非福田の施無く、小施を輕んぜず、多施を讚せず、衰耗の施無く、後生を求めて施せず、自在に財寶を得んことを求めて施せず、釋・梵・護世の天王・轉輪聖王などの諸果を求めて施せず、聲聞・緣覺乘を願ふて施せず、王子の自在を得んことを求めて施せず、一世の爲の故に施せず、厭足の施無く、一切智を迴向せざる施無く、不淨の施無く、不時の施無く、

【六五】 本文に無有衆生不堪受者持戒犯戒無增減施とあり。

【六六】 頓、頓首なり、不正なるをいふ、
【六七】 揀はとるなり。

爾の時舍利弗、無盡意菩薩摩訶薩に語つて言はく、「唯善男子、頗し復更に無盡の法有るや不_レや」と。無盡意の言はく、「有り、菩薩の檀波羅蜜を修すること、窮盡すべからず。何を以ての故にとならば、菩薩摩訶薩は施を行_フること無量なり、所謂食を須_レたば食を與へて、命・辯・色力の樂を具足せしむるが故に。飲を須_レたば飲を與へて、渴愛を離れしむるが故に。衣を須_レたば衣を與へて、清淨の色を具し、無慚愧を除くが故に。乘を須_レたば乘を與へて、一切の樂を得、神通を具せしむるが故に。燈を須_レたば燈を與へ、佛眼を具足して清淨ならしむるが故に。音樂を須_レたば音樂を施與し、天耳を具足して清徹ならしむるが故に。香を須_レたば香を與へ、身より具足して微妙の香を出さしむるが故に。鬘を須_レたば鬘を與へて、陀羅尼七覺の華を具せしむるが故に。塗香・末香を須_レたば、悉く之を施與し、戒定慧・塗香の身を具せしむるが故に。種々の味を須_レたば、意に隨つて之を與へ、味相成就せしむるが故に。依止無き者には依止を施與し、能く衆生の爲に救護を具足し、歸依と爲るが故に。敷具を須_レたば悉く之を施與し、究竟して陰蓋を斷除することを具足せしめ、梵天・賢聖・諸佛の妙床座を成就するが故に。座を須_レたば座を與へ、具足して三千大千世界を、以て道場と爲し、金剛座處を悉く成就するが故に。其の須_レつ所に隨つて悉く能く之を與ふ。菩提の諸の須_レつ所を成就するが故に。病に隨つて藥を施し、老死無きを得しむ、甘露の法藥悉く成就するが故に。僕使を須_レたば、皆之を給與す、自在の智慧、具足するを得るが故に。若し金・銀・琉璃・頗梨・眞珠・珂貝・璧玉・珊瑚・種々の諸珍を以て、用て惠與すれば、大人の三十二相を具足するが故に。能く種々の瓔珞を以て施せば、八十隨形好を具足するが故に。若し象馬車乘を以て施せば、大乘を具足するが故に。若し園林を持て以て布施せば、諸の禪支を具するが故に。若し妻子を持つて以て布施せば、無上道法の愛を具足するが故に。若し倉庫の穀財を以て施せば、諸善法の寶藏を具足するが故に。閻浮提の、若しは四天下を以て、意に隨つて施せば、法王を具足して自在を得るが故に。諸の樂具を以て、持用て施

【六四】珂は美石、貝は貝殻の美なるもの。懸琳音義二五によれば、往古、中天、五印度に於ては、貨幣として用ひたりと。

難施を畢竟して、頭目をも惜まざるが故に、難戒を畢竟して、禁を犯すを擁護するが故に、難忍を畢竟し、忍に力勢と諸の過惡と無きが故に、精進を畢竟して、専ら苦行を修し、二乗を捨つるが故に、難定を畢竟して、心諸の禪定に味著せざるが故に、難慧を畢竟して、一切の諸善根に著せざるが故に。行を發しては能く到り、一切の善事悉く成就するが故に、畢竟して、慢・增長・慢・勝慢・我慢・下慢・憍慢・邪慢を遠離し、善く分別するが故に。畢竟して能く施を諸の衆生に捨し、報を求めざるが故に、畢竟して驚かず、深き佛法を觀するが故に、畢竟増進して停滯せざるが故に、畢竟して無盡に常に精進するが故に、畢竟して誑かず、必ず衆生の爲に重擔と作るが故に。

『又畢竟とは、衆生を調柔し、慈もて覆ひ、諸の賢善の人を利益し、悲心もて諸の惡を行する者に拔救し、尊長を恭敬し、護無き者を護り歸する無き者を歸せしめ、照無き者を照らし、依無き者に依となり、伴無き者に伴となり、諸の曲れる者を直し、不善の者を善くし、姦者をして姦無からしめ、邪命の者を淨め、恩ある者、及び恩無き者・恩を知らざる者を恩み、不利の者を利し、虚謗の者を實あらしめて、不憍、慢の者・不毀作の者とし、軟語もて、諸の作惡の者を教呵し、邪行の者を護り、行方便を見て以て過を爲さず、諸の受者に於ては、心を等しうして恭敬し、餘の菩薩に於ては常に誘導を行じ、柔軟語を以て教誨を述べ、樂うて空處に在りて善法を修行し、諸利養を離れて身命を惜まず、邪念有ること無く——心寂靜の故に、言に邪詔無く——口の過を攝するが故に、邪業を以て利益を求めず、其の心常に少欲に——常に足るを知るが故に、心調柔和に——垢穢無きが故に、生死に迴在し——善根を具するが故に、能く諸苦を忍ぶ——衆生の爲の故に。是を大士は一切畢竟して盡すべからずとは爲す。是の菩薩の心をば、生死の煩惱も永に壞する能はず。何を以ての故にとならば、是の心は諸の功德を増長するが故なり、一切の諸衆生を含受するが故なり、無盡の妙智慧を成就するが故なり。大德、是を菩薩摩訶薩の畢竟無盡と名くるたり』と。

【五】 本文に、畢竟難忍無力勢諸過惡とあり。

【六】 慢、麗本、憍に作るも、今三本に依る。以下七慢なり。第一番五〇頁參照。

【六】 本文に無姦姦者とあり。

【三】 慢、麗本憍に作る。今三本に依る。

【三】 晉譯相當文に、以三權方便、明了隨時訓誨衆生、迷於終始といふ。

無量の功徳を聚集して、厭足無きと、多く學問を求め、廣く諸の義を知つて厭足無きと、常に無上菩提の智慧を願じて厭足無きとなり。是を菩薩の四行無盡と名く。菩薩に復四行の無盡なる有り、何等をか四と爲す。校計を覺すること無盡なると、稱量を覺すること無盡なると、思惟を覺すること無盡なると、觀法を覺すること無盡なるとなり。是を菩薩の四行無盡と爲す。菩薩に復四行の無盡なる有り、何等をか四と爲す、垢の因を覺すること無盡なると、白法を覺すること無盡なると、諸の煩惱を呵すること無盡なると、白法を讚歎すること無盡なるとなり。是を菩薩の四行無盡と名くるなり。菩薩に復四行の無盡なる有り、何等をか四と爲す、諸陰の盡を觀すること無盡なると、諸界の盡を觀すること無盡なると、諸入の盡を觀すること無盡なると、因縁の盡を觀すること無盡なるとなり。是を菩薩の四行無盡と名く。菩薩には復四行の無盡なる有り、何等をか四と爲す、無常の行を説くこと無盡なると、苦行を説くこと無盡なると、無我の行を説くこと無盡なると、寂靜涅槃を説くこと無盡なるとなり。是を菩薩の四行無盡と名く。要を擧げて之を言へば、菩薩の所行は一切無盡にして、一切智に向ひ、一切智を尊び、一切智を仰ぐ。一切智は無盡なり、是の因縁を以て、菩薩の行する所は、悉く皆無盡なり、是を菩薩の心行無盡とは名く。

『復次に舍利弗、是の菩薩の心は畢竟無盡なり、何を以ての故にとならば、其の思惟する所は、乃至一念も、常に菩提心を緣じて疲倦せず。専ら諸地に趣いて生死を過ぐるが故に、畢竟增長して彼岸に至るが故に、畢竟して本行轉勝れて增長するが故に、畢竟して負を離れ勝法を攝するが故に、畢竟して等しきもの無く、一切諸佛の法を具足するが故に、畢竟して所緣、善法を増長するが故に、畢竟して能く心の行處に到過するが故に、畢竟莊嚴して疲倦する無きが故に、畢竟して吉祥菩提を修行し、種々の苦行悉く成就するが故に、畢竟して己が樂を望まず求めざるが故に、畢竟して隨順し、諸の惡無きが故に、畢竟して調伏し、聖法に住するが故に、畢竟不雜にして煩惱を離るゝが故に、

【五四】校、計に同じ、かぞふるなり。この四、晉譯に、一曰校計程度、二曰思惟惟本末、三曰智慮通達、四曰所念善具とをあぐ。

【五五】この四、同に、一曰離于染惡、而修上脫、二曰其上脫者、是菩薩教。三曰解諸惡本。四曰念于微妙無上之脫。【五六】白淨の法なり。一切の善法を總稱す。

【五七】以下の三、晉譯に、地水火風の四大を曉ると、六衰の原を了すると、十二因縁の邊際有ること無きとを擧ぐ。

【五八】この句、晉譯に、菩薩修行心、不可盡と云ひ、次の「専ら諸地に趣いて」の句は、從つて轉上、成就其處、所云處者、菩薩十地とす。以下説相異る。

の善法に於て、精勤修習するを見る。菩薩の禪を行すること、亦盡すべからず、一切皆諸の禪定に於て、錯亂有ること無きを見る。菩薩の慧を行すること、亦盡すべからず、一切皆多聞を修習するを見る。是を菩薩、施を行じ戒を行じ忍を行じ進を行じ慧を行すと名くるなり。菩薩の慈悲喜捨を修行すること、亦盡すべからず、一切皆、利益し拔苦し歡喜・踊躍し、善く愛悲を斷つを見るなり。是を菩薩の慈悲喜捨と名く。

『菩薩の行する所の三業は清淨にして、身の三惡及び口の四過を離れ、心に三惡を離る。所謂貪欲・瞋恚・愚癡なり。菩薩の多聞を修學すること無盡なるは、格惜せざるが故なり。菩薩の格惜すること無きを修行するは、一切智を集むる故なり。菩薩の一切智を修集するは、餘の菩薩を勸めて、道心を發さしむる故なり。餘の菩薩を勸めて道心を發さしむるは、修行して善根に安止するが故なり。修行して善根に安止するは、無上菩提の道に願向するが故なり。無上菩提の道を願ふは、一切諸佛の法を攝取するが故なり。一切諸佛の法を攝取するは、四事攝取の故なり。菩薩の四事の攝取を修行するは、諸罪を懺悔する故なり。菩薩の悔過法を修行するは、諸惡を發露するが故なり。菩薩の諸惡を發露することを修行するは、一切の諸功德を迴向するが故なり。菩薩の諸功德を迴向するは、無量の諸珍寶を積聚するが故なり。無量の諸珍寶を積聚するは、諸佛を勸請する故なり。諸佛を勸請するは、諸法を攝取する故なり。諸法を攝取するは、大士の法を行する故なり。大士の法を行するは、能く衆生の爲に重任を作すが故なり。諸衆生の爲に重任を作すは、堅牢の諸莊嚴を捨せざるが故なり。堅牢の諸莊嚴を捨せざるは、衆生は一切善事を成就する故なり。

『復次に舍利弗、菩薩摩訶薩には四行の無盡なる有り。何等をか四と爲す。菩薩は心行無盡なり、法施無盡なり、教化無盡なり、善根無盡なり、是を菩薩の四行無盡と爲す。菩薩は復四行の無盡なる有り、何等をか四と爲す。樂んで空閑に在り、威儀を攝持して厭足有ること無きと、常に樂んで

【五二】 四事は、布施・愛語・利行・同事の四攝法をいふべし。

【五三】 發露、犯す所の罪を發き露して、隱す所無きをいふ。

【五四】 この四、晉譯に、一曰開示之心、二曰法施、三曰開導衆生、四曰捨累功德と。

せざる故なり、錯謬せざるは滯る所無きが故なり、滯る所無きは退轉せざる故なり、退轉せざるは衆生を觀るが故なり、衆生を觀るは、大悲の根深きが故なり、大悲の根深きは、善く衆生を化して疲倦せざる故なり、善く衆生を化して疲倦せざるは、己が樂を求めざる故なり、己が樂を求めざるは、利養を食らざる故なり、利養を食らざるは、愛に染せざる故なり、愛に染せざるは諸法を緣するが故なり、諸法を緣するは、羸劣を觀るが故なり、羸劣を觀るは衆生を見るが故なり、衆生を見るは常に擁護する故なり、常に擁護するは、歸依を爲すが故なり、歸依を爲すは垢累無きが故なり、垢累無きは善能く觀察する故なり、善く觀察するは、譏論無き故なり、譏論無きは心純善の故なり、心純善なるは動搖せざる故なり、動搖せざるは善く清淨なるが故なり、善く清淨なるは常に精進するが故なり、常に精進するは内清淨の故なり、内の清淨なるは、常に鮮明なるが故なり、常に鮮明なるは垢染無きが故なり。

『舍利弗、其れ淨心ならば、能く慳惜を斷じ、亦他人を化して慳惜を斷ぜしむ。其れ淨心ならば、能く破戒を斷じ、亦他人を化して破戒を斷ぜしむ。其れ淨心ならば、能く懈怠を斷じ、亦他人を化して瞋恚を斷ぜしむ。其れ淨心ならば、能く懈怠を斷じ、亦他人を化して懈怠を斷ぜしむ。其れ淨心は能く亂心を斷じ、亦他人を化して亂心を斷ぜしむ。其れ淨心は能く愚癡を斷じ、亦他人を化して愚癡を斷ぜしむ。舍利弗、淨心は是の如く能く一切諸不善の法を斷じ、諸の衆生を善法中に安す、是の故に名けて、菩薩の淨心は盡すを得べからずと名く。』

『復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、心の行清淨にして、亦盡すべからず。何を以ての故に、菩薩の施を行する時、一切皆諸の所有を捨するを見る。菩薩の戒を行すること、亦盡すべからず、一切皆諸の禁戒を持し、頭陀の正行もて威儀無犯なるを見る。菩薩の忍を行すること、亦盡すべからず、一切皆諸の衆生に於て、心に罣礙無きを見る。菩薩の進を行すること、亦盡すべからず、一切皆諸

【四九】この句、晉譯に、菩薩所習、亦不可盡といふ。

【五〇】梵に Dhuta、煩惱の塵垢を拂ひ去り、佛道を求むること、修行の謂。

つて發心するが故に、盡すべからず。唯舍利弗、如來の戒・定・智慧・解脫・解脫知見は其の性無盡なり、是の五衆に因つて菩提心を發すなり、豈に盡すべけんや。如來の十力・四無所畏・十八不共法も無盡なり、是の如き等に因るが故に菩提心を發す、是の故に無盡なり。唯舍利弗、要を擧げて之を言へば、一切の如來は悉く皆無盡なり、是に因つて發心するが故に盡すべからず。三寶は不斷なり、故に盡有ること無し。衆生の性は無盡なり、故に盡くる無し。如實智は無盡なり、故に盡くる無し。諸衆生の無量の心行に隨ふ智も無盡なり、故に盡くること無し。無上に迴向すること無盡なり、故に盡くること無し。衆生を教化すること無盡なり、故に盡くること無し。無盡の智は無生なり、故に盡くる無し。性を離れて生無し、故に無盡なり、一切法の本性は無盡なるを知る、故に盡くる無し。唯舍利弗、是を菩薩、菩提心を發すこと、盡すべからずと名くと。

〔四七〕復次に舍利弗、是の菩薩の心清淨なること無盡なり。心の清淨なるは、詔ごんを作さざるが故なり、詔ごんを作さざるは、姦詐かんと無き故たり、姦詐無きは善く分別する故なり、善く分別するは、邪命じやめい無き故なり、邪命無きは、心清白しんせいぱくの故なり、心清白なるは、常に正一なる故なり、常に正一なるは、性殊勝じゆしやうの故なり、性の殊勝なるは、輕毀けいゑする無き故なり、輕毀無きは、諸の曲を滅するが故なり、諸の曲を滅するは、心質直しんしつぢくの故なり、心の質直なるは、平正へいせいに入るが故なり、平正に入るは、心堅實しんけんじつなるが故なり、心の堅實なるは、壞くわいすべからざる故なり、壞すべからざるは、性牢固しやうらくこの故なり、性牢固なるは動すべからざる故なり、動すべからざるは、所依しよい無き故なり、所依無きは我心わがこころを除く故なり、我心を除くは伴等ばんとう無き故なり、伴等無きは皆蔑しやべつを息しむる故なり、皆蔑を息しむるは善ぜんを作す故なり、善業ぜんごふを作すは呵責かじやく無き故なり、呵責無きは、過失かふしを消すくが故なり、過失を消すは熱惱ねつなうせざる故なり、熱惱せざるは、性眞實しやうしんじつの故なり、性の眞實なるは虚誑こじやう無き故なり、虚誑無きは如説にょとくに行する故なり、如説にょとくに行するは善能ぜんにやうく作すくが故なり、善能く作すは瑕疵かじ無き故なり、瑕疵無きは錯謬さくみう

〔四七〕 以下、普譯卷第二。

〔四八〕 この句、同にいふ、發菩薩心ニ永無窮盡ト。

異無き故に。發心は鮮明にして、性常に淨なるが故に。發心すれば無垢の智慧明了なるが故に。發心すれば善く解して畢竟を離れざるが故に。發心は廣快にして、慈あること虚空の如くなり。が故に。發心は廣大にして、悉く能く諸の衆生を容受するが故に。發心すれば、無礙の智慧通達するが故に。發心すれば、遍く大悲を至して斷ぜざるが故に。發心すれば善解・立願を斷ぜざるが故に。發心は歸と爲る、諸佛に讚せらるるが故に。發心は殊勝にして二乘も宗仰するが故に。發心は深遠にして、一切の衆生知らざる所なるが故に。發心は佛法を敗せず破せざるが故に。發心は安隱にして、善く衆生に諸の快樂を與ふるが故に。發心もて莊嚴せば、一切の功德悉く成就するが故に。發心もて善く察すれば、智慧成就するが故に。發心増長せば、意に隨つて施與するが故に。發心すれば願の如く戒清淨なるが故に。菩提心を發して普く怨親に及べば、忍辱を具するが故に。發心にして壞し難ければ、精進を具するが故に。發心して寂滅ならば、禪定を具するが故に。發心にして無毀なれば、智慧を具するが故に。發心して無願なれば、大慈を増長するが故に。菩提心を發して根に住すること堅牢なれば、大悲を増長するが故に。發心して和悅なれば、大喜を増長するが故に。發心不動なれば、大捨を増長するが故に。發心任重なれば、諸佛の受くる所たるが故に。發心絶えざれば、三寶も斷ぜざるが故に。唯舍利弗、菩薩は是の如く、一切智の爲に菩提心を發すなり。豈に盡すべけんや」と。

四五

舍利弗の言はく『唯、善男子、譬へば虚空の、窮盡すべからざるが如く、一切智の爲に菩提心を發して、盡すを得べからざること、亦復是の如くなり』と。無盡意の言はく『唯舍利弗、佛の戒は無盡なり、戒に因つて發心するが故に、盡すべからず。佛の定は無盡なり、定に因つて發心するが故に、盡すべからず。佛の慧は無盡なり、慧に因つて發心するが故に、盡すべからず。佛の解脫は無盡なり、解脫に因つて發心するが故に、盡すべからず。佛の解脫知見は無盡なり、解脫知見に因

【四五】 舍利弗の言、晉譯は、同じく阿差摩即ち無盡意の言と爲す。

【四六】 戒云云、晉譯によれば、戒はこれ根原なるが故に、不可盡なりと。

亦十方世界の諸來菩薩有りて、共に能仁佛所に聚集し、供養・恭敬・尊重讃歎して、佛世尊の大集經を説きたまふを聽く。是れ其の大衆の散ずる所の華なり」と。彼の諸菩薩、復佛に白して言はく「其の佛世界は何の方面に在り、是を去ること遠きや近きや」と。彼の佛答へて言はく「諸善男子、此の西方に在り、是の佛土を去ること、十恒河沙の世界の微塵に等しき國を「過ぎて」、彼に世界有り、名けて娑婆と曰ふ」と。諸菩薩の言はく「願樂して釋迦文佛及び其の大衆を見んと欲す」と。爾の時普賢如來、尋で大光を放ちたまふに、其の明、此の佛世界を徹照す。彼の諸大衆は、佛の光明に因り、悉く遙に娑婆世界の釋迦文佛、及び諸の大衆を見ることを得、見已つて歡喜し、合掌恭敬して、是の如きの言を作す「希有なり、世尊、其の土の菩薩一切の大衆は、何所より來つて此の集を作し、其の界の間に遍滿して、空處無きや」と。彼の佛答へて言はく「諸善男子、其の大衆は、悉く十方無量の世界より來つて集會し、深甚の妙法をば諸啓・聽受するなり」と。

時に舍利弗、無盡意に問ふらく「誰か仁者に字して無盡意とは爲す」と。無盡意答へて言はく「唯舍利弗、一切諸法の因果・果報をば、名けて無盡意と爲す。所以は何んとならば、一切諸法は盡すべからざるが故に」と。舍利弗の言はく「唯善男子、願はくは仁、當に無盡の法門を説くべし」と。

無盡意の言はく「唯舍利弗、初て無上菩提の心を起す時、已に盡すべからず。所以は何んとならば、菩提心を發さば、煩惱を雜へざるが故に。發心相續すれば、餘の乘を怖はざるが故に。發心堅固なれば、外論に參せざるが故に。發心不壞ならば、魔も沮まざるが故に。發心恒順ならば、善根增長するが故に。發心は經に常なり、有爲法は無常なるが故に。發心不動ならば、一切の諸佛は安慰・護助するが故に。發心勝妙ならば、衰損を離るるが故に。發心安止すれば、戲論せざるが故に。發心は喻ふべきなし、相似る無きが故に。發心の金剛は、諸法を壞するが故に。發心無盡なれば、無量の功德悉く成就するが故に。發心すれば平等に衆生を利するが故に。發心は普く覆ひて別

【一〇】 能仁、釋迦 (Sakyā) の譯。

【一】 釋迦文、(Sakyamuni) の音寫。

【二】 この句、骨譯に、用諸法「故、曰不可盡」と。

【三】 雜、麗、明二本は離に作る、今宋元二本に依る。

【四】 經、麗本至に作る、今三本に依る。

「舍利弗、彼の普賢如來は、此の土の如く、二の因縁を以て正見を演說せず、所謂他より聲を聞く
と、内に正しく憶念するとなり。彼の諸の菩薩、佛を見る時に當つては、尋で能く諸の深妙の義を
分別して、六波羅蜜を具足成就す。何を以ての故に、若し色相を取らざれば、即ち是れ檀波羅蜜を
具足するなり、若し色相を除けば、即ち是れ尸波羅蜜を具足するなり、若し色の盡を觀すれば、即
ち是れ屬提波羅蜜を具足するなり、若し色の寂滅を見れば、即ち是れ毘梨耶波羅蜜を具足するな
り、若し色相を行ぜざれば、即ち是れ禪波羅蜜を具足するなり、若し色相を戲論せざれば、即ち是
れ般若波羅蜜を具足するなり。是の諸菩薩、即ち佛を觀する時、尋で是の如き六波羅蜜を具し、無
生忍を得るなり。舍利弗、諸佛の世界は、嚴淨微妙なるも、彼の普賢如來の不問世界の如くなるも
の、有ること少し」と。

時に舍利弗、無盡意に語るらく「唯善男子、快い哉、仁者、汝等大士は、彼の土に在つて普賢佛
を見、無量の利を獲るを得んことや」と。時に無盡意、舍利弗に語るらく「大德、今、頗し不問世界
と普賢世尊及び大衆とを見るを得んと欲するや不や」と。舍利弗の言はく「唯然り、見て此の大衆を
して善根を増長せしめんと欲す」と。

時に無盡意、即ち菩薩の示現、一切佛土三昧に入り、三昧に入り已つて、此の大衆及び舍利弗を
して、尋で彼の土の普賢如來及び其の大衆を見せしむ。此の事を見ざるや、即ち座より起ち、合掌
して遙に彼の佛・大衆を禮す。此の會の大衆は、佛世尊及び無盡意の神通道力を以て、微妙華——世
に希有なる所にして、其の華の色香未だ曾て見聞せざるもの——を得、自然に滿擲して遙に東方に
散じ、以て普賢如來を供養するに、華尋で遍く彼の佛世界の普賢如來及び其の大衆に至る。彼の
諸菩薩、是の華を見已り、佛に白して言はく「世尊、是の華嚴麗にして世に希有なる所たり、何處
よりして此に來至すと爲さん」と。彼の佛答へて言はく「是れ無盡意、娑婆世界に在り、此の中に

【三七】 二の因縁云云、普譯に
普賢如來、其所ノ頌宣、初無
二言、何謂爲、二、一不講者、
二不說斷。
【三八】 若し色相云以下、同
に捨三衆想、無所怖望、則是
具足施度無極。不思想佛身、
達之本無、則已備戒度無極。
所以者何、不思想故、以得
成就三十二相、計於諸法假
有、號耳、相無有盡、住是不
起、是故名曰忍度無極。一切
諸法、皆不可見、無所聞
……。是故名曰進度無極。心
不思想、不可想者、而寂恬
怕、是故名曰寂度無極。解
色相空、不以此相而擯、自
大、是故名曰智度無極。

【三九】 この三昧、普譯に、遍
見諸佛土と名く。

【三六】云何が佛を念ずるとならば、謂はく、色相・出生・種性・過去の淨業を觀ぜず、是の時心中に自の高を生ぜず、現在の陰・界・界・諸入、見聞・覺知・心意識等を觀ぜず、戲論・生住滅の相無く、不取・不捨・不念・不思にして、思想及び非思想、不分別の想・法想・己想・無一異の想、境界功德・内外中間を觀ぜず、覺觀・始終の念を起さず、形貌・威儀・法式を觀ぜず、戒・定・智慧・解脫・解脫知見、十力・無畏・不共の法を觀ぜざるなり。正しく佛を念ぜんこと、不可思議なり、行を造らず、想を作さず、等に等しき無く、思惟を離れ、所念無く思慮無く、陰・入・界、生住滅の想無く、處所有ること無く、處所無きに非ず、動に非ず住に非ず、色に非ず識に非ず、想に非ず受に非ず行に非ず、識に於て識知を生ぜず、地・水・火・風に於て識知を生ぜず、眼色・耳聲・鼻香・舌味・身觸・心法も亦復是の如く、是の如く一切の境界を緣ぜず、諸の相・我及び我所を生ぜず、見聞覺知の想を起さず、究竟して能く一切解脫に至り、心・心數の法、滅して相續せず、諸の憶想・非憶想等を淨め、善く愛・悲を除き、因縁の相を滅し、彼此の中間、悉く斷じて餘無きなり。是の法は清淨なり、文字無きが故に。法に歡喜無し、動轉せざるが故に。法に苦有ること無し、味著せざるが故に。法に熾熱無し、本寂滅なるが故に。法に解脫無し、性捨離の故に。法に身有ること無し、色想を離るるが故に。法に受の相無し、我有ること無き故に。法に結縛無し、寂にして無相の故に。法相無爲なり、所作無き故に。法に言教無し、識知無き故に。法に始終無し、取捨無き故に。法に安止無し、處所無き故に。法に作有ること無し、受者を離るるが故に。法に滅有ること無し、本無生なるが故に。心數の思惟所念は法に住するも、其の相を取らず、分別を生ぜず、不受・不著、不然・不滅、不生不出にして、法性平等なること、猶ほ虚空の如く、眼色・耳聲・鼻香・舌味・身觸・心法を過ぐ。是を菩薩の念佛三昧と名く。

『菩薩定の念佛三昧を得なば、一切の法中に、自智陀羅尼門を得、佛の所説を聞きては、悉く能く受持して、終に忘失せず、亦一切衆生の言辭・音聲・無礙の辯才を曉了す。』

【三六】この句、晉譯に何謂得三佛心意定。

法輪を轉するなり。舍利弗、彼の土には、純ら是の如き菩薩摩訶薩等有り、以て眷屬と爲る。

爾の時大會は、佛の彼の菩薩衆の功德・智慧を稱讃したまふを聞き、踊躍歡喜し、天の優鉢羅華・拘拘頭華、波頭摩華、分陀利華、曼陀羅華を以て、無盡意及び諸の菩薩に散じ、異口同音に是の如き言を作す『我等今日快く善利を得、是の如き諸正士等を見て、禮拜・供養・恭敬・圍遶するを得たり。若し衆生有つて、其の名を聞かん者、亦是の如き無量の善利を得ん。若し其の功德を讃歎するを聞かば、悉く皆當に無上道の心を發すべし』と。是の語を説く時、大會の中に、三百六十萬の衆生有りて、阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。

佛舍利弗に告げたまはく『彼の佛の世界には、三惡道及びその名字無く、亦邪行と越戒との名も無く、又女人・慳貪・嫉妬・破戒・瞋恚・懈怠・亂心・愚癡の名、及び障礙・陰・蓋などの集名も無く、衆生の根も等しくして上中下無く、純ら是れ一乘にして、大小の名無く、佛土に淨穢の名無く、亦三寶差別の稱も無く、飢渴・飲食の聲、及び我・我所・遮護の名を聞かず、諸の魔網・妄見の集名無し。彼の佛世界は平坦廣大にして、一の日月照らすこと、六十億百千那由他由延を周匝す。是れ希有の事にして、是れ彼の菩薩の本願の致す所たり。其の土平正にして、猶し手掌の如く、琉璃衆寶など雜剛共成す。其の地柔軟にして、猶し天衣の如く、若し觸るる者有らば、微妙の樂を受く。寶樹莊嚴して行伍相當り、寶繩連綿として以て八道を界る。有らゆる諸華、常に自ら開敷し、亦石沙・荆棘・穢惡無く、有らゆる諸山は、純ら衆寶を以て之を校飾す。人と天と別無く、法喜・禪味をば以て飲食と爲す。其の土には王者の名有ること無く、唯普賢如來法王を除く。彼の佛・世尊及び諸の菩薩は、文字を以てせずして、而も説く所有り。彼の諸菩薩は、唯佛を觀することを修し、諦視して厭くこと無く、日會て胸かず、即便能く念佛三昧を得、無生忍を悟る。是の故に彼の土を名けて不胸とは曰ふなり。

【二八】この諸華、晉譯は、譯して、則取天上青黃紅白上好蓮華、及諸意華一と。

【二九】正士、菩薩の譯。正道を求むる大士。

【三〇】越、戒に違越するなり。

【三一】一の佛乘のみにして、二乘三乘なし。

【三二】遮止すべきものと、護持すべきもの。

【三三】梵に Yojana 由旬に同じ。

【三四】剛は雜なり、まじはるをいふ。

【三五】晉譯には、法喜爲樂、解義爲樂といふ。定慧の能く法身の慧命を養養するを名けて食と爲す。又外、佛法に従ひ、法を聞いて歡喜するを法喜と爲し、内、如説に修行するを禪悅と爲す。

有り、名けて不^三胸といふ、是の中に佛有し、號して普賢如來・應・正遍知・明・行・足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ひ、今現に在す。舍利弗、其の土には聲聞・緣覺有ること無く、乃至二乘の聲を聞かずして、一切の聖業は純^一は是れ菩薩なり。已に過去に於て、久しく徳本を修し、善業成備して布施調伏し、自守防護して戒・忍・多聞なり、心不放逸にして功徳に安住し、威儀成就して忍力無礙なり、無上の道に於て堅固に精進し、所修の善根は一切成就し、諸禪・解脫・三摩婆提あり、神通に遊戲し、大智もて照明し、善く分別して一切の諸法を知り、懐く所の慈等の心は虚空の如く、大悲堅固にして衆生を拯濟し、常に喜心を行じて、彼をして同じく歡ばしめ、所有の捨心もて、善く憎愛・魔網・諍訟を滅し、悉く餘無からしめ、善く衆生諸根の趣く所を知り、其の根の量に隨つて法財を授與し、其の心平等にして、地・水・火・風の如くなり。能く一切の外道・異論を壞し、敵陣を摧伏して勝幡を建立し、深き佛法・十力・無畏に入り、諸の大衆に於て心に懼るゝ所無く、常に甚深の十二因縁を觀じ、有無の見を離れて中道を行じ、我及び我所・衆生・壽命・養育・士夫・作者・受者、斷常・有無などの一切の諸見と、結縛の因縁とは、皆悉く滅して起らず、總持王の印もて以て之に印し、所有の辯辯もて分別敷演し、那由他劫のたひだ、説くとも盡すべからず。大神力を得て無量無邊の佛土を感動せしめ、諸の佛土に於て善能く往來し、瞋怖・憍慢・放逸を斷除したり。其の演説する所は、師子の吼ゆるが如く、一切の衆生怨親中の人、悉く皆安じて究竟涅槃に止る。法雲垂布して以て雷震を興し、^{三三}三・解脫は以て電光と爲り、無上の法雨は以て甘露と爲り、能く法財に注いで三寶斷せず、内外清淨なること、譬へば寶珠の如く、相好殊勝にして最上無比なり。諸の善根を以て其の身を嬰瑤し、佛法の灌頂もて補處の位を得、善能く諸の衆生の行を分別し、隨つて調伏して解脫を得しめ、能く道場を淨めて師子座に坐し、諸法の中に於て無所畏を得、能く自ら形を變ずること、猶し佛身の如く、一切の佛事をば悉く能く示現し、心に自在を得て、

【二】不胸、晉譯には音寫して阿尼彌沙といふ。

【三】普賢も音寫して、三曼多跋陀といふ。正しくは三曼多跋陀羅(Samantabhadra)彌吉とも譯す。後には一切諸佛の、理、定、行などの徳を主るものとして、常に文殊と相對せしめられ、この二者、釋尊の脇士として、その左右に配せらる(普賢は白象に乗り、文殊は獅子に駕す)。

【三】梵に Zaratustri 定の別名なり。

【三】三明は宿命明、天眼明、漏盡明をいふ、即ち六通の中の三に當る。法を知ること顯了なる智なれば明といふ。

【三】注、麗本惠に作る、今三本に従ふ。

【三七】寶珠、梵に Mani 如意珠と譯す。

く非縁無きが如く、縁無く非縁無ければ、即ち不去不來なり、不去不來ならば是れ聖行處なり。唯舍利弗、去來有るは即ち因等の生する相なり、因相に、因無く非因無きが如く、因無く非因無ければ、即ち不去不來なり。不去不來ならば聖行處なり。唯舍利弗、去來有るは即ち是れ文字語言なり、文字の相には、文字無く非文字無きが如く、文字無く非文字無ければ、即ち不去不來なり、不去不來ならば是れ聖行處なり」と。

舍利弗の言はく『唯善男子、汝今説く所の微妙の事相は、吾れ昔よりこのかた、未だ曾て聞かざる所なり。向に疑ふ所をば、當に還啓請すべし。關を主どる人の、若しは空しくして行くを見、若しは擔へる者を見れば、即ち應に詰問して、汝の齋持する所は、悉く是れ何物なる』と。若し三種稷なるを知らば、應に其の税を收むべきが如し。唯善男子、我等も是の如く、他より法を聞くに、音聲に隨つて解じ、以て自ら心を照す。是の故に我れ今應當に諮稟すべし。『汝等大士は、大乘を護らんが爲に、無量の聲聞・緣覺を出生するや』と。唯善男子、願はくは爲に分別して、其の來處を説かんを』と。無盡意の言はく『唯舍利弗、汝今自ら如來に諮請しまつるべし、如來は當に説いて、汝の疑網を斷じたまふべし』と。

時に舍利弗、即ち佛に白して言はく『唯願はくは世尊、是の菩薩は何處より來り、佛を何等と號し、世界を何と名け、是を去ること遠きや近きや。若し彼の佛及び世界の名を聞かば、則ち無量無邊の菩薩をして菩提を莊嚴せしめん』と。佛舍利弗に告げたまはく『諦に聽き諦に聽きて、善く之を思念せよ。吾れ今當に、彼の土の功德及び佛の名號を説くべし。汝是れを聞く時、疑懼を懷く勿れ、應當に一心に信受奉持すべし』と。時に舍利弗、是の語を聞き已り、讚へて言はく『善哉・善哉、世尊、願はくは、時なり、宣説したまへ。我れ當に一心に頂戴して受持すべし』と。

佛舍利弗に告げたまはく『東方此を去ること、十恒河沙の國土、微塵等の世等を度り、彼に世界

【三〇】已下、晉譯に欲得實稅、故宜難詰、轉何所實、以時輸稅。
【三一】種、五穀の長、キビ。
【三二】種は五穀の種子の謂なるべし。

人の親近する所は、聖智の呵棄る所たり、法の牢固ならざるを解し、獨り有の流を披渡したまふ。其の面目開明なること、譬へば優鉢羅の如く、微妙にして甚だ清淨、百千の日月にも過ぎたり。有らゆる過去世、及び現在の衆生、一切讚歎する所は、如來悉く受くるに堪えたまふ。調と不調とを伏したまふが故に、熱を除いて清涼なるを得しめたまふ、是の故に我れ今日、無上尊に稽首しまつる。世を度して福を増長し、功德極まり有る無きこと、人中の牛王の如し、佛福田を頂禮しまつる」と。

爾の時無盡意菩薩、如實の讚を以て佛を讚歎し已り、宮中より下り、及び六十億の諸菩薩衆と、佛足を頂禮し、佛足を頂禮し已つて右遶三匝し、華臺の上に、結加跏趺座す。

爾の時舍利弗、佛に白して言さく「世尊、是の無盡意菩薩摩訶薩は、何處より來り、佛を何等と號し、世界を何と名け、此を去ること遠きや近きや」と。佛告げたまふらく「舍利弗、汝自ら問ふべし、無盡意當に汝の爲に説くべし」と。

時に舍利弗、佛の教に敬順し、無盡意に問ふらく「唯善男子、何處より來り、佛を何等と號し、世界を何と名け、此を去ること遠きや近きや」と。無盡意の言はく「唯舍利弗、來の想有りや」と。舍利弗の言はく「唯善男子、我れ想を知り已る」と。無盡意の言はく「若し想を知れば、應にこの想無かるべし、何に縁つて問ふて何處より來る」と言ふや。唯舍利弗、來去有らば和合の義と爲す。和合の想に、是れ合無く不合無きが如く、合無く不合無ければ、即ち不去不來なり、不去不來ならば是れ聖行處なり。唯舍利弗、去來有らば即ち是れ業相、業相に作無く非作無きが如く、作無く非作無きは、即ち不去不來なり、不去不來ならば、是れ聖行處なり。唯舍利弗、來去有らば是れ國土の相なり、國土の相に、國土無く非國土も無きが如く、國土無く非國土無ければ、即ち不去不來なり、不去不來なれば、是れ聖行處なり。唯舍利弗、來去有らば即ち是れ縁の想なり、縁想に、縁無

【一七】 梵に「tṛṇa」蓮華なり。

【一八】 本文に、調不調伏故とあり。

【一九】 聖行處、晉譯に聖道行とあり。以下の説相、兩譯異なる。就て見るべし。

り、誰の爲す所によつて、是の光明及び諸の蓮華有るや」と。佛阿難に告げたまはく「菩薩摩訶薩有り、無憍意と名く、此の東方に在り、六十億の諸菩薩と俱に、眷屬に圍遶せられて、此に來至せんと欲するが故に、先づ瑞を現するなり」と。未だ久しからざる間に、時に無盡意、即ち神力を以て、此の地を感動して大に震動せしめ、無量の光を放ち、種々の華を雨らし、億那由他の諸天人等は、百千の伎樂を作して、六十億の諸菩薩衆と、周匝圍遶して佛所に來至し、佛所に至り已つて、尋で佛前に於て、虚空中の高さ七多羅樹のところに住まり、合掌向佛して微妙の音を出すに、其の聲遍く大千世界に聞ゆ。即ち偈頌を以て佛を讚歎すらく

『清淨にして永く垢を離れ、勇健にして諸欲を除き、能く衆の塵勞を滅して、淨妙の眼をば得たまふ。』
三垢荒穢等をば、善く斷ちて吐洗して滅し、一切皆餘無し、大慈覺に稽首しまつる。

諸の怖畏を除去し、善く無明の網を滅したまへる、十力聖主王は、邪論もて伏する能はず。外道異見の人も、皆悉く怖畏を懷く、猶し師子王の、獨歩して懼るゝ所無きが如し。正覺の

淨光明は、無垢にして普く照耀し、天人世間の中にて、能く一切の闇を離る。衆の闇冥を除き盡して、無明の網有ること無く、其の光常に明常にして、日の雲霧を出づるが如し。衆生

老死の苦は、救護する者有ること無し、是等を調せんが爲の故に、而も無量の苦をば受けたまふ。能く堅き慈悲を生じ、唯等正覺有り、猶し大醫王の、勤行して衆の疾を療するが如し。

一切諸法の本は、其の性我有ること無し、譬へば山谷の響の如く、皆衆の縁に従つて生ず。衆生は本性無く、作無く受者無し、而も能く此の爲の故に、大慈悲を生じたまへり。諸有

の淵海は、無明の闇甚深なり、其の中に覺觀多く、湧溢して波浪となる。他に従つて法を聞かず、自然に彼岸に到りたまひ、蓮華の水に在るが如く、世を行じて染汚せられず。秋月草木の零は、盛熱の河池をも竭す、比智もて、世法の遷動して常住ならざるを知りたまふ。愚

【四】 阿に阿差末といふ。

【五】 三垢は貪瞋癡の三毒。

【六】 草木にそゞぐ秋雨は、熱水をたゞふる河池の熱をもつくすを云へるならん。

輪を轉じ、諸法の一相に同じきことに通達し、一相の法に於て、分別を生ぜず、諸の衆生の根性を
 知ること無礙にして、善能く諸法の實相を觀察し、一切諸塵の境界を破壞し、通達・善思惟の門に入
 り、能く一切煩惱の諸見を除き、無礙の智慧・善權の方便もて、一切佛法の平等無二なるを知り、
 諸佛智慧の門を受持し、諸法を演説して、眞實の相の如く、憶想・取相もて平等の門に入り、功徳を
 成就して深因緣に入り、佛身と身口意の業とを莊嚴し、念意進持もて、四諦を顯示し、妙慧を分別
 し、聲聞を化するが故に、身心寂靜にして、緣覺を化するが故に、一切智を得——大乘に化す
 るが故に、一切法に入つて自在智を得——如來の諸功徳を讃歎するが故に、是の如き等の門を、宣
 説開示・教導・分別したまへり。

『時に佛、是の大集經を説きたまへる時、此の東方に於て、自然に大金色光を出現し、此の三千大
 千世界を照して周遍せざる際し。佛の光明を除きて、其の中には有らゆる日月・釋梵・護世の天王、
 諸龍・鬼神、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽などの有らゆる光明、悉く復現れず、諸の牆壁
 等、樹木叢林、小山大山、目眞彌陀山、鐵圍山、大鐵圍山、及び國土の中間に、其の光徹照す。此
 の世界の有らゆる地獄のごときも、皆其の光を蒙り、其の中の衆生、光の身に觸るゝ時、一切の苦
 を除いて微妙の樂を受く。』

爾の時佛前の大衆の中に、其の地に自然に六十億の淨妙蓮華を出し、好香流布して種々に莊嚴し、
 諸の華雜色にして衆心を悅可す。其の華各億百千葉有り、寶羅網を以て其の上を彌覆す。華の質柔
 軟にして猶し天衣の如く、其の觸るゝ者有らば、妙快樂を受く。是の一一の華の出す所の諸香は、
 遍く三千大千世界に満ちて、是の世界中の若しは天・若しは人など所有の諸香は、悉く滅して熏ぜ
 ず、諸龍八部などの其の香を聞く者、皆妙喜を得て、暫く煩惱を離る。

爾の時、尊者阿難、是の金色の光明及び諸の蓮華を見、佛に白して言さく『世尊、今此の瑞應あ

【七】是の大集經、晉譯相當文には、只世尊陶演講經法教といふのみ。

【八】梵に Anāthina もと龍王の名にしてその住する所なるが故に、山名とす。

【九】鐵圍山、梵に (akavāhi) 須彌山の外周に七山八海あり、この第八海に瞻部等の四洲あり、この第八海を繞るもの鐵圍山にして、以上を一小世界とす。鐵より成るとせらる。

【一〇】大鐵圍山は、三千大千世界(即ち右の小世界の十億倍)をめぐる山をいふ。

【一一】諸龍八部、佛法を守護する大力の諸神、天、龍、夜叉、阿修羅、迦樓羅、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽の稱。

【一二】暫・麗本は漸に作る、今三本に従ふ。

【一三】晉譯には賢者舍利弗とす。

卷の第二十七

無盡意菩薩品 第十二の一

是の如く我れ聞く、一時佛、王舍城なる如來行處の寶莊嚴堂に遊びたまふ。是れ大功德の修成する所にして、佛の一切法の本行の果報なり。無量の諸菩薩衆を包容し、其の講宣する所は、悉く是れ無量甚深の義にして、皆是れ如來の神力に護持せられ、無礙の行・微妙の智門に入り、其の心歡喜して、念・進の意を得、智慧を分別して、輕毀する者無し。若し其の功德を稱讚し、歡喜すること、未來世を盡して窮盡すべからず。如來の正覺は平等の法を覺し、善く法輪を轉じて無量の衆を度し、一切法に於て自在を得、衆生の意を知り、其の根の源を盡し、善く衆生の爲に、諸の習氣を斷ち、佛事を爲したまふと雖も、心に所作無し。大比丘六百萬人と與なり。悉く是れ如來法王の子にして、善く解脫を得、煩惱の習を斷じ、甚深の無生法忍を曉了し、威儀を成就して其の行端嚴、供養を受くるに堪え、衆の福田と爲り、善く諸佛所説の教・戒を持す。復菩薩摩訶薩衆有り、其の數無量にして、稱計すべからず、思議すべからず、宣説すべからず。此の諸の菩薩は、一念の頃に於て、能く無量無邊の佛刹を過ぎ、已曾て過去の諸佛を供養し、妙法を諍受して、厭足有ること無く、常に勤めて無量の衆生を教化し、善く方便を解して智慧具足し、其の心無礙解脫に安住し、善く憶想・取相・戲論を除き、一切智に近きて、悉く是れ補處たり。其の名を、電天菩薩、勝淨菩薩、日藏菩薩、勇健菩薩、離惡意菩薩、遊行菩薩、觀眼菩薩、離闇菩薩と曰ひ、是の如き無量の菩薩大士は、德皆是の如くなり。

爾の時世尊、諸菩薩所行の無礙諸法門の經に入りたまふ。所謂諸菩薩の道・甚深の佛法を莊嚴し、十力・無畏・智慧を成就し、自在・總持印門を獲得し、諸辯・大神通門を分別し、不退轉・無生法の

無盡意菩薩品第十二之一

五六九

【一】西晋法護譯、阿耨摩菩薩經(七卷)參照。

【二】晋譯卷第一、
【三】同に寶嚴淨觀々道場とあり。

【四】一生補處の略、次の生には佛の位を補ふべき菩薩をいふ。

【五】以下の菩薩、晋譯には天明、遷戰、照藏、除慢、勇歩、眼根、離言、除冥とあり。

【六】同に其法名曰無陰蓋門と。

爾の時寶髻、授記を聞き已り、心大に歡喜し、偈を説いて讚歎すらく

一切の知あり一切事を見て、一切法の彼岸に到るを得、一切の諸煩惱を遠離したまふ、是の故に佛・無上尊と名く。我れ供養する所の無量の佛を、如來善く了したまふこと一佛の如し、

如來は無礙の智を獲得したまふ、故に三世を知るに障礙無し。如來は今我が爲に記を授け、

我をして疑網の心を遠離せしめたまふ、我れ亦當に眞實の道を得て、今の釋迦牟尼尊の如くなるべし。一切の大地は能く散ぜしめ、虚空・日月は落ちしむべきも、如來の言には二有ること無し、是の故に我れ定んで菩提を得ん。正語・實語・微妙語もて、我に無上菩提の記をば

授けたまふ、若し我れ眞實に菩提を得なば、當に善く無量の衆を調すべし。我が得る所の淨妙の國、及び其の大衆をば、佛已に説きたまへり、我れ今此の無上の法を聞き、疑を壞して菩提に趣向す、今の佛口は、我に信力・無上智慧及び佛力を施したまへり」と。

是の偈を説ける時、萬二千の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、各是の言を作せり「願はくは我れ皆、彼の世界に生るゝを得んを」と。

爾の時世尊、阿難に告げて言はく「汝當に是の如き正法を受持し、讀誦・廣説して、大に諸天・世人を利益すべし。阿難、若し衆生有りて、是の經を信受せば、定んで當に我の授記する所と爲るべし。善男子、若し三千大千世界の、中に滿てる七寶を以て、衆生に給施して、一千年を滿さんも、

人有つて是の如き經典を受持・讀寫せんには如かじ」と。阿難、佛に白して言はく「世尊、是の經を何が名け、云が奉持せん」と。「阿難、是の經は名けて 大方大集大陀羅尼大行菩薩入處と曰ふ」と。爾の時、阿難、佛の説を聞き已り、諸天世人、皆大に歡喜して、信受奉行したり。

【七〇】 本文に一切知見一切事とあり。晉譯相當文には、普知悉能見とす。意同じ。

【七一】 晉譯相當文にいふ。名曰菩薩淨行寶髻所聞と。名曰寶髻菩薩會終。

大方等大集經卷第二十六

たまふ」と。佛の言はく「善男子、汝寶髻の、我に頂寶を施したるを見たるや不や」と。「已に見まつる、世尊」と。「善男子、是の如き菩薩は、已に無量無邊の佛所に於て、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、持戒精進して菩提を求め、無量恒河沙等の諸佛世尊を供養し、亦已に恒河沙等の無量の衆生を調伏したるなり。

「善男子、是の如き菩薩は、未來世に於て、十阿僧祇劫を過ぎ、當に阿耨多羅三藐三菩提を得、號して寶出と曰ひ、世界を淨光と名け、劫を無垢と名くべし。其の佛世界は七寶の所成にして、光明遍く十方世界を照し、一切の人民は飢渴有ること無く、一切皆是れ清淨の菩薩にて、耳に初より二乗の名を聞かず、常に純一大乗の法を聞かん。是の故に如來を名けて寶出と曰ふ。一切の菩薩は、神通を具足し、其の土には主無けん、唯法王を除く。一切の衆生、悉く化生するを得、亦復三惡の名、及び男女根・愛欲の名も無く、衆生の諸根を具せざるものも無く、亦邊地も無けん。衆生の壽命は四萬中劫ならん。

「是の佛世尊は餘事を説かず、唯六度を除く。菩薩は慈悲あり、一切利根にして、一句を説くを聞いて千句を悟解せん。是の佛常に一切菩薩の爲に、陀羅尼金剛句を説かん。云何が名けて陀羅尼金剛句とは爲す。陀羅尼金剛句とは、即ち是れ一句なり、是の如き一句は即ち一切法句を攝する無盡の法句なり、無盡の法句は、一切の諸佛も盡す能はざる所なり、是の故に名けて無盡の法句の行と爲す。無盡の法句は一切の字を攝し、一切の字は一切の法句を攝す。一時に二字を説くを得ず、一字亦復二字を合せず。是の故に一句と名け、名けて作句と爲し、名けて字句と爲す。若し字句・法句・作句を分別せざれば、是を陀羅尼金剛句とは名く。善男子、是の如き陀羅尼金剛句をば、彼の佛、常に諸の菩薩の爲に説かん。善男子、若し我れ一劫・若しは滅の一劫にも、彼の如來所有の功德を説いて、具盡する能はず」と。

【七二】寶出、晉譯には寶成に作る。
【七三】淨光、同に離垢光に作る。

【七四】邊隅の土地、三寶を見聞すること稀なり。以下の二句、晉譯に相當文缺く。

加ふる所の苦を懺悔して、我れ今國土の事及び上妙の五欲の樂を捨離し、憍慢を壞破せんために佛所に至り、甘露の法を聽いて衆生を調せんとして、八萬四千の衆に圍遶せられ、妙香華を持つて供養のために往き、到り已つて即便佛に奉獻し、慢を破して至心に法を聽き、禮拜合掌して心に歡喜し、佛世尊に向つて是の言を發す、「我れ今淨精進に歸依す、苦を受くるも悔ひず、我を調伏したまへ。多くの供「養」を設くと雖も、報する能はず、今佛の前に於て至心に悔ゆ。我が修行する所は菩提道と、慈悲心を以て衆生を調せんことなり、我れ更に放逸の心を造さじ、乃至菩提道を獲得せんことを」と。

「善男子、爾の時王子、即ち王位を捨て、佛の法中に在つて、出家聽法し、如法に住して無生忍を得たり。善男子、汝知れ、爾の時の常精進とは、豈に異人ならんや、斯の觀を作す莫れ、即ち我が身是れなり、財功德とは即ち彌勒是れなり。

「善男子、是の故に、菩薩の衆生を調するの行は、無量無邊不可思議なり。若し菩薩有りて、能く衆生を調すれば、是れ眞に菩薩所修の業なり。善男子、菩薩摩訶薩には四種の業有り、一に淨佛國土の菩薩業、二に淨身の菩薩業、三に淨口の菩薩業、四に求一切佛法の菩薩業なり。復四法有り、一に心を知り、二に根を知り、三に病を知り、四に能く治するなり」と。

爾の時寶髻菩薩、是の法を聞き已り、髻上の眞寶珠——價値無量にして、無量業より出生したる所——を以て如來に奉獻し、是の誓願を作す「我れ今是の頂寶を以て佛に施しまつる。願はくは此の功德もて、衆生の首と爲らんを」と。是の因縁を以て無上の智を得たり。

爾の時 世尊、即便微笑したまふ。是の時、口中に大光明を出す、種々雜色にして、悉く能く一切の光明を隱蔽したり。

爾の時 疾辯菩薩、即ち起ちて合掌し、佛に白して言はく「世尊、何の因縁の故に、如來微笑し

【六七】 晉譯は、第一を超越諸魔、靡不歸伏とし、第二と第三とを一句とす。

【六八】 病、同には分別一切諸病所由とす。

【六九】 疾辯、同に捷辯に作る。

【七〇】 晉譯に依れば、この句の代りに、捷辯菩薩は頌を以て、長く世尊を歎す。

して苦を受けん」と。是の語を説ける時、三千大千世界は、大震動を爲し、一切の人・天、咸共に同聲にて唱へて言はく「善い哉・善い哉、大士」と。時に淨精進菩薩、即便彼の王子の門に往くに、王子之を見、惡言もて皆毀し、土を以て面に塗き、刀杖瓦石もて其の身に加ふ。菩薩爾の時、瞋らず去らず、心に疲倦せず、一千年を経て、是の如き苦を受け、二萬歳を過ぎて、乃至彼の第二の門下に至り、八萬四千年に、七日満たざるに、方に其の第七の門下に至る。爾の時王子、是の菩薩を見、便ち是の言を作す「道士、今來るは何の求索する所かある」と。即ち菩薩に於て、不思議の心を生じ、「云何が是の人、爾所の時を経て、多く衆苦を受け、心に厭はざる」と。第二・第三も亦是の如くに言へり「道士、今來るは何の求むる所をか欲する」と。

「爾の時菩薩、彼の王子の心、已に調伏せられたるを知り、即ち偈を説いて言はく

「世間の有らゆる一切の財——金・銀・琉璃及び頗梨、及び四の供養をば、我れ須たず、唯法の爲の故に此に來至するなり。此の世に佛有して廣光と名け、衆生の爲に無上の法を説きたまふ、衆生聞き已つて煩惱を離れ、亦無量の甘露味をば受く。諸佛世尊の世に出でますこと、

甚だ彼の 靈瑞華よりも難し、今此の世に無上尊出でますに、汝は乃ち放逸にして欲界に沈めり。一切の衆生は常に闇に行けば、無上如來は慧炬を施したまへども、自ら財色を恃んで憍慢を生じ、如來尊に往詣せず。一切の財寶は衆生の命たり、佛説きたまふらく、是の二は悉く無常なりと。衆生若し是の甘露を聞くと、佛に詣らざるをば放逸と名く。汝は本往昔に菩提を行じ、諸の衆生を請じて法味を許したるに、汝今猶ほ諸の煩惱に屬す、云何ぞ能く諸の放逸を調せん。我れ今汝に求む、共に佛に詣り、憍慢を破壊して煩惱を離れ、勤めて精進を行じて國事を捨て、汝をして「命」終らん時、汝に悔ひざらしめんを。

「是の時王子、是れを聞き已り、憍慢を遠離して即ち信を生じ、讚歎恭敬して精進を淨め、先來

【六】梵語、優曇〔婆羅〕華 (Udumbara) の譯、長年月に一度開くのみなるより、希有なるに喩ふ。

薩能く六波羅蜜を行じ、菩提の法を具足佐助し、神通を具足して衆生を調伏すと名く。

「善男子、若し菩薩、四法を具足する有らば、則ち能く一切衆生を調伏せん。一に心に厭悔せず、二に諸の樂を食らず、三に時と非時とを知り、四に諸の心を了知するなり。復四法有り、何等をか四と爲す、一に正語、二に愛語、三に淨語、四に如法語なり。復四法有り、一に諸の衆生に於て、心に罣礙無く、二に悲心あり、三に利益の心あり、四に自ら諸根を調するなり。復四法有り、一に自心を淨め、二に他心を憐愍し、三に勤行精進し、四に樂を受くることを遠離するなり。善男子、是の故に、菩薩摩訶薩の調伏の行は、無量無邊にして、思議すべからず。

「善男子、過去無量阿僧祇劫に、劫有つて愛と名け、是の中に佛有して、廣光明如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號し、世界を寂靜と名けたり。彼の佛は九萬六千億の聲聞衆と、八萬四千の諸菩薩衆とを具有し、其の土の人民、壽命十七萬二千歲なりき。

「爾の時一大王の子有り、財功德と名け、婆羅門種にして、顏貌端正、衆生樂見したり。年十六の時、自ら端正を恃んで傲慢を生じ、初より佛に向つて、恭敬禮拜せざりき。爾の時如來、即ち是の念を作したまふ、「是の如き王子は、今將に阿耨多羅三藐三菩提を退失し、善根熟せざらん。若し善友を得なば、則ち佛に詣り、法を聞いて受持するを得べし」と。

「爾の時如來、八萬四千の菩薩大衆の中に於て、行壽して言はく「誰か能く是の婆羅門の子を調伏する。誰か能く是の八萬四千年中に於て、經常に是の王子の家を往返し、若しは衆の苦を受け——所謂罵打せらるゝも、心に悔を生ぜざらん」と。八萬四千の諸菩薩等、乃至一人の壽を取る無く、第二・第三にも亦復是の如くなりき。第三に唱へ已るに、一菩薩有り、淨精進と名けたるが、即ち座より起ち、偏袒右肩、右膝著地、合掌して言はく「世尊、我れ今能く彼の王子の家に詣り、甘心

【五七】心、衆生の心性と所行とを分別するなり。

【五八】この四、晉譯には(一)所說柔和(二)奉戒清淨……(三)顔色常悅(四)常懷慈心と。

【五九】他心を憐愍す、同じ無有と誤語と。

【六〇】愛、晉譯に愛敬といふ。

【六一】廣光明如來、同じ離垢光如來とす。

【六二】寂靜、同じ寂然とあり。

【六三】財功德、同じ業首とす。

【六四】壽、梵に命羅(ハヤヒロ)と。人數を算する器、竹木を以て作り、投票に用ふ。壽を以て投票を行ふを行壽といふ。

【六五】淨精進、晉譯に純妙精進とす。

『善男子、云何が菩薩は調伏を淨むるとならば、善男子、衆生の行は、無量無邊にして不可思議なり。調伏も亦爾り、無量無邊にして不可思議なり。菩薩の行も亦無量無邊にして思議すべからず。菩薩摩訶薩は、一心至心に衆生を調伏す。善男子、諸の衆生有り、惠施を説くを聞いては、則ち調伏を得、或は衆生有り、持戒を説くを聞いては、調伏を得、復衆生有り、施戒を説くを聞いては、調伏を得、復衆生有り、軟語もて調伏せられ、復衆生有り、瞋語もて調伏せられ、復衆生有り、二種の語を具して調伏を得、復衆生有り、身業を説くを聞いて、調伏を得、復衆生有り、捨身を説くを聞いて、調伏を得、復衆生有り、能く調伏することに勝れ、復衆生有り、強ひて調伏すべく、復衆生有り、呵責を説くを聞いて、調伏を得、復衆生有り、施時に調伏せられ、復衆生有り、初時に調伏せられ、復衆生有り、妙色を見已つて調伏を得、聲・香・味・觸も亦復是の如く、復衆生有り、常に親近するが故に調伏を得、復衆生有り、常に遠く住するが故に調伏を得、衆生有り、佛を見て調伏せられ、或は衆生有り、法を聞いて調伏せられ、或は衆生有り、無常の法を聞いて調伏を得、苦・空・無我也、亦復是の如く、或は衆生有り、施を説くの聲を聞いて調伏を得、戒・忍・精進・禪定・智の聲も、亦復是の如く、或は衆生有り、一切の有爲にして無常なるを説くを聞いて、調伏を得、或は衆生有り、人・天を讃ふるを聞いて、調伏を得、或は衆生有り、聲聞乘を聞いて調伏を得、辟支佛乘・佛乘も、亦復是の如く、或は四攝を以て調伏を得、或は三攝・二攝・一攝を以て、調伏を得、或は復四攝の法を以てせずして、調伏を得、或は内の施に因つて調伏を得、外の施・内外の施も、亦復是の如く、或は地獄中の苦を宣説するを聞いて、調伏を得、餓鬼・畜生・人・天も、亦復爾り、或は純樂を聞いて調伏を得、或は純苦を聞いて調伏を得、或は苦樂を聞いて調伏を得、或は比丘の形像を觀見する有つて調伏を得、比丘尼・優婆塞・優婆夷の像もて、調伏を得、或は種々の作侶・伎樂に因つて、調伏を得。善男子、菩薩は是の如く、能く種々に衆生を調伏するの行を知る。是を菩薩

【五】 以下、菩薩の四行（一四三頁）の第四、調衆生行を説く。晋譯に菩薩開化衆生といふ。

【五〇】 聞、麗本說に作る、今三本に依る。

如來の所說唯是れ一句なるも、而も諸の衆生は、百千句なりと解せばなり。如來は常に四淨の法を説きたまへり、一に波羅蜜の淨、二に助菩提の淨、三に神通の淨、四に衆生を調することの淨なりと。

【時に菩薩有り、名けて五三寶聚と曰ふ、佛に白して言さく「世尊、云何が菩薩は自身を莊嚴し、亦衆生をして大利益を得しむる」と。彼の佛答へて言はく「善男子、菩薩若し無礙智を具せば、名けて莊嚴と爲し、能く智の明を作すを、大利益と名く」と。爾の時彼の佛、是の法を説きたまふに、六千の菩薩は無生忍を得たりき。

【時に彼の菩薩、復佛に白して言さく「世尊、云何がして菩薩は菩提の樹を莊嚴するや」と。佛の言はく「善男子、菩薩若し能く不放逸を修せば、是を菩提の樹を莊嚴すとは名く。云何なるを名けて、不放逸とは爲すとならば、不放逸とは、如法の住に名く。如法の住とは、説の如くに住するなり。復次に不放逸は、無量莊嚴、無量布施、無量持戒、無量忍辱、無量精進、無量禪定、無量智慧、無量佛法、無量調伏、無量功德智慧莊嚴、供養無量諸佛世尊と名け、智慧を具するが故に無量の多聞あり、智慧を増すが爲の故に、無量に奢摩他、毘婆舍那を修し、是の如き無量等の法を成就するを、名けて菩提の樹を莊嚴し、亦能く疾く阿耨多羅三藐三菩提を得とは爲す。善男子、一切の菩提を佐助するの法は、不放逸を以て根本と爲す。大莊嚴・一切の智慧を具し、一切の善法を失せず、一切の煩惱を遠離し、一切の諸法を攝取し、一切の法に於て罣礙有ること無く、諸根を調伏し、諸の善法を護つて過失せしめず、時と非時とを知り、十力・四無所畏・佛法・頂法を具足するをば、不放逸と名くるなり」と。善男子、是の法を説ける時、萬二千の菩薩は無生忍を得たりき。爾の時の寶聚菩薩とは、即ち汝の身是れなり。善男子、汝今、當に知るべし、不放逸を具せる菩薩摩訶薩にして、則ち能く菩提の樹を莊嚴したるなり。

【五】寶聚、同に珍寶といふ。

【五四】頂法、音譯によれば、佛法の至極を曰ふか。同には無放逸者、得無所畏、具足成就一切佛法、歸其頂頂と。

爲し、如を説き行を説くをば大利益と名く。復次に能く一切に施すを、名けて莊嚴と爲し、果報を求めざるを、大利益と名く。善男子、是を菩薩の、自身を莊嚴し、亦衆生をして大利益を得しむとは名く。

「善男子、過去無量阿僧祇劫に、劫を喜樂と名け、彼に佛有つて、一切衆生樂念如來・應・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號し、其の佛の世界を名けて天觀と曰へり。善男子、何の故に、彼の劫を名けて喜樂と曰ふとならば、彼の大劫中に、共に六萬の諸佛有つて出世し、彼の劫の初に、首陀婆王、是の如き言を唱へたり「是の劫には、當に六萬の佛出づる有らん」と。衆生聞き已り、心皆樂喜したり。是の故に彼の劫を名けて喜樂と曰ふなり。善男子、其の佛世界の莊嚴は、微妙にして限量有ること無く、快樂好妙なること、天の如くにして別無かりき。是の故に世界を名けて天觀と曰へり。其の土皆悉く梅檀を地と爲し、一切土砂塵霧有ること無く、其の香遍く無量の佛土に熏じたり。其の地は周遍して諸の蓮華を出し、一一の諸華に大光明有つて、遍く其の土を照し、其の土の衆生は、悉く神通を得て、足地を踏まず、乃至一人の、胎に處するもの有ること無く、皆悉く、化生し、一切女人の名をば聞かず、亦苦を受くる三惡道の名無くして、一切の衆生は禪・喜を食と爲し、其の土には三乘の名も有ること無く、一切皆眞金の瓔珞・天冠・寶飾を以て、自ら莊嚴し、剃髮し、衣を袈裟に染むる無しと雖も、而も亦出家の人と名くるを得たり。何を以ての故にとならば、一切の物に於て、捨して貪無きが故なり。彼の土の如來は、色は梵天の如く、梵天の身を現じて、諸の菩薩の爲に法要を演説したり。若し他の世界に、諸菩薩有り、彼の佛を見已るに、大歡喜を受けたり。

「善男子、彼の佛若し法を宣説して化せんと欲すれば、大法座に昇り、大衆の上に在ること、七多羅樹にして、常に略して法を説きたり。何を以ての故にとならば、一切の衆生は根猛利なるが故に、

【四八】喜樂、晉に欣豫といふ。
【四九】一切衆生樂念如來、同に普樂世如來といふ。

【五〇】梵に Śuddhāvāsa 淨居天と譯す。

【五一】化生、有情の生れ來る徑路を四種に分ち（四生といふ）、胎に處して生るもの（Dārīpita）乃至化生するもの（Upādānika）これなり。化生は託胎すること無く、唯業力に依り、忽に起るものにして、諸天、乃至劫初の衆生皆是なりといふ。
*袈裟 Kāṣṭhīya 不正、壞、濁など譯す。青黃赤白黑等の正色に非ずして雜色なるをいふ。比丘の衣の色なり。轉じて衣をもいふ。

【五二】七多羅樹、晉譯に去地六十六丈とす。

寶誓菩薩の佛に白して言はく『世尊、佛所説の如く、大慈大悲は不可思議なり、實に聖教の如し。

但に慈悲の、不可思議なるのみにあらず、善方便力も亦不可思議なり、菩薩は了了に自ら知つて、當に阿耨多羅 藐三菩提を得て、而も之を證せざるべし。衆生の爲の故に生死に行き、生死の爲に汚染せられず。世尊、菩薩摩訶薩は、何等の法を具してか、生死の中に在つて、心に厭悔せざる』と。

『善男子、菩薩摩訶薩は、二十一法を具し、生死の中に在つて悔を生ぜず。一に修する所の善法は、大慈の行と共なり、二に修する所の慈心は、大悲の行と共なり、三に修する所の大悲は、調衆生の行と共なり、四に衆生を調伏すること、精進の行と共なり、五に修する所の精進は、善心の行と共なり。六に修する所の善心は、方便の行と共なり、七に修する所の方便は慧と共に修す、八に修習する所の慧は禪定の行と共なり、九に修する所の四禪は神通の行と共なり。十に修する所の神通は、智と共に修す、十一に修習する所の智は、欲と共に修す、十二に修習する所の欲は、念と共に修す、十三に修習する所の念は、菩提心の行と共なり、十四に修する所の菩提は、四攝の行と共なり、十五に修する所の四攝は、戒と共に修す、十六に修する所の戒禁は、多聞の行と共なり、十七に修する所の多聞は、如法住の行と共なり、十八に如法は陀羅尼に住するの行と共なり、十九に陀羅尼は無礙智の行と共なり、二十に無礙智は功德莊嚴の行と共なり、二十一に功德莊嚴は智慧莊嚴の行と共なり、是を菩薩の二十一法と名け、生死の中に在つて厭悔を生ぜざるなり』と。

寶誓菩薩佛に白して言はく『世尊、云何が菩薩は自身を莊嚴し、亦衆生をして大利益を得しむる』と。佛の言はく『善男子、菩薩摩訶薩、若し多聞を具せば、則ち莊嚴と名け、他の爲に演説するを大利益と名く。復次に大總持を得るを名けて莊嚴と爲し、他の爲に演説するを大利益と名く。復次に放逸有ること無きを、名けて莊嚴と爲し、衆生を調伏するを大利益と名く。復次に三十二相を名けて莊嚴と爲し、大智慧を具するをば大利益と名く。復次に口言の柔軟なるを、名けて莊嚴と

【四七】二十一法、晉譯は二十に作る。

明と愛及び四倒に因つて生ずと了知し、是の身は施の因縁の故に、財物及び眷屬を具足すと了知するに、是の如き等の智をば、是を菩薩の淨宿命智の行とは爲く。

「云何が菩薩の淨神通の行なる。神通の行には亦五種有り、一に色を示し、二に種種の語を解して説法を爲し、三に善能く心意識等を了知し、四に能く諸法を覺つて一切の法を説く、是を菩薩の淨神通行とは名く。

「善男子、是の如き五通は、漏盡の爲の故たるも、菩薩修習して漏を盡さず。一切の諸法を了知せんと欲するが爲に。何を以ての故にとならば、衆生を調するが故に。善男子、譬へば一城の、縦廣一由旬にして、多く諸門有り、路險にして黒闇、甚だ怖畏すべきも、城に入る有らば、多く安樂を受けん。復一人有り、唯一子有りて爰念甚だ重し。遙に彼の城の、是の如き快樂を聞き、即便子捨て、往いて城に入らんと欲す。是の人方便もて險道を過ぐるを得、彼の城門に到り、一足已に入り、未だ一足を擧げざるに、即ち其の子を念じ、尋て是の念を作す「我が唯一子をば、來る時云何ぞ俱にせざりけん。誰か能く養護して、衆の苦を離れしめん」とて、即樂城を捨てて還子の所に向はんが如し。善男子、菩薩摩訶薩は、亦復是の如く、憐愍の爲の故に、五通を修習す。既に修習し已り、漏盡を得るに垂として、而も證を取らず。何を以ての故にとならば、衆生を惑むが故に、漏盡通を捨て、乃至凡夫地の中に行くなり。

「善男子、城とは大般涅槃に喩へ、諸門多しとは八萬の諸三昧門に喩へ、路險難なりとは、諸の魔業に喩へ、城門に到るとは、五通に喩へ、一足入るとは、智慧に喩へ、一足未だ入らずとは、菩薩の未だ解脱を證せざるに喩へ、一子と言ふは、五道は一切衆生に喩へ、子を顧念すとは大悲心に喩へ、子の所に還るとは、衆生を調するに喩へたるなり。能く解脱を得て、而も證せずとは、即ち是れ方便なり。善男子、菩薩摩訶薩の大慈大悲は、不可思議なり」と。

【四】神通、また如意通、*divyābhīṣāna*。以上の五を五神通といひ、有漏の禪定なり。呪力に依つて得べきが故に、外道も之を成就するを得。是の五に、次の漏盡通 (*ābhayaṅkaraṅgāna*) を加へて六通とす。是を成就するは、三乘の聖者に限るなり。

【五】茲に五種と云へども、下掲ぐる所は四のみ。宋等の三本も亦爾り。初譯本に第五を脱せるか。晉譯には、第四を一切衆生、心所娛樂、神足皆別とし、第五を親近所見、神足成至に作る。

【六】法、麗本漏に作る、三本に依つて法と爲す。

正念有り、諸の煩惱を攝して、妄みだりに起らしめず、一切の惡魔の諸業に近かず、惡道に墮せず、惡心を起さず、常に一切の正善の法を修して、一切邪惡の法を遠離する、是を正念と名く。菩薩是の正念の中に住して、正聚沙門しやもんの正果を獲得する、是を正念と名く。

『云何が 正定なる。聖行しやうぎやうを修行して、苦を知り、集を離れ、滅を證し、道を修する、是を正定と名く。復正定有り、一切の法は悉く平等なるを觀じ、若しは我淨なれば一切も亦淨なりと觀じ、若しは我空なれば一切も亦空なりと觀じ、是の觀を作すと雖も、正位に入らざる、是を菩薩の正定とは名く。菩薩摩訶薩は、是の定中に住し、一念の頃に於て一切智を得る、是を正定と名く』と。是の法を説きたまへる時、萬六千の天と人とは、阿耨多羅三藐三菩提の心を起したり。

『善男子、云何が菩薩の淨神通の行なる。善男子、天眼に五種あり、悉く能く十方の世界を觀見すること無きと、一切の聲聞・緣覺及び諸の天人に勝るとなり。菩薩は是の如き九事を具足して、則ち能く了了に一切法を見るなり。是を菩薩の淨天眼の行と名く。菩薩摩訶薩は、天耳通を得て、五種の聲を聞く、人聲・非人聲・地獄聲、十方諸佛說法の聲と、一切衆生の語言の音聲となり、是を菩薩の淨天耳行とは名く。』

『云何が菩薩の淨他心智の行なる。他の心を知るの智に亦五種有り、悉く一切人天の心と、地獄・餓鬼・畜生等の心とを知ると、過去の心を知ると、未來の心を知ると、現在の心を知るとなり。是を菩薩の淨他心智の行と名く。復他心智有り、是の衆生は是れ正定聚、是れ邪定聚、是れ不定聚なるを知り、是の衆生、貪瞋癡有るを知り、既に了知し已り、應に隨つて說法するに、衆生聞き已つて煩惱を壞するを得る、是を菩薩の淨他心智の行と名く。』

『云何が菩薩の淨宿命智の行なる。是の身は貪恚癡の因縁より生ずと了知し、是の身は施・戒・忍精進・定慧・慈悲喜捨の因縁より生ずと了知し、是の身に具足と不具足とあるを了知し、是の身は無』

【一五】 正聚は正定聚の略。衆生の機根を三類に分てる一、必ず證悟するに定まれるをいふ。

【一六】 正定、その第八 *Sam-yakamadihi*。
【一七】 滅、音譯に盡諦とす。

【一八】 音譯は次に菩薩の護覺意を説く。

【一九】 以下、菩薩の四行（一四三頁）の第三、神通行を説く。是に五種あり。

【二〇】 天眼 *Divyayacakṣuḥ*。
【二一】 天耳通 *Divyaṃ śro-tvaṃ*。

【二二】 他心智、*Paravajñāna*。

【二三】 宿命智、*Pūrvanvāna-nūmāpti-jñāna*。

【云何が是れ 正語なる。口所出の言、自ら焦惱せず、他をも焦せず、自ら汚辱せず、他をも汚さず、自ら慢を生ぜず、他の慢をも生ぜず、自ら誑惑せず、他をも誑惑せざる、是を正語と名く。復次に正語とは、凡そ説く所有らば、一切の法皆悉く平等なりと説き、善能く有爲の相を分別する、是を正語と名く。復次に正語とは、一切法の空・無相・願と、無生・無滅・無出・無没とを説く、是を正語と名く。復次に正語とは、有爲の苦・無常・無我・涅槃寂靜を説く、是を正語と名く。若し衆生有り、説いて、衆生には、一切、壽命・士夫有ること無し、一切の諸法は、因縁に従つて生じ、因縁に従つて滅すること、猶し子・果の如しと説かば、是を正語と名く。淨正語とは、即ち是れ佛語なり、是を淨正語の行と名く。

【云何正業なる。正業とは、若し業にして能く一切の業を壞すと雖も、亦業とは名けず。若し業にして能く寂靜の因と作り、不垢不淨にして能く煩惱を壞して增長せしめざる、是を正業と名く。業を知ること是の如くにして、猶ほ善業を作し、亦諸の業は皆悉く空寂にして、堅實有ること無く、是れ苦にして樂無しと觀する、是を正業と名く。

【云何が 正命なる。正命とは、若し命にして自身他身を妨げず、一切の諸惡煩惱を増さず、惡業の活に非ざる、是を正命と名く。菩薩摩訶薩は、諸の衆生に於て、正命を淨め、是の正命を以て、菩提に向はんと願する、是を正命と名く。是の如き正命は能く自他を利す。

【正精進とは、勤めて方便を作して、諸の善法を求め、欲心息まずして、厭悔有ること無き、是を精進とは名く。諸法平等の理を推求し、亦法の等と不等とを觀ぜず、作に非ず不作に非ず、如法の性と實性とを了知するを、正精進と名く。正法を宣説して、諸の衆生をして邪の精進を離れしめ、亦衆生の修行する所の行を知る、是を正精進と名く。

【云何が 正念なる。若し施・戒・忍辱・精進・禪定・智慧・四無量心を念すれば、是を正念と名く。復

【九】 その第三 Samyag-tāṇi 晉譯に正言といふ。

【一〇】 正業、その第四、 Samyakkammāṇi

【一一】 正命、その第五、 Sammagāmiṇi、初句 晉譯に不計有レ我、不計有レ人、と。

【一二】 増 晉譯に不積累一切塵勞と。

【一三】 正精進、その第六 Sammagāmiṇi、 晉譯には正使とす。

【一四】 正念、その第七 Sammagāmiṇi 晉譯に正意といふ。

我見・斷見・空見有り、正見と名けず、是の如き三見は、亦復同見なり。又有見・無見・空見有り、正見と名けず、是の如き三見は亦復同見なり。復四見有り、佛見・法見・僧見・空見なり、是を正見と名く。是の如き四見は空見と名けず。

『善男子、若し人有り、是の如き見に著すれば、正見と名けず。若し著せざれば乃ち正見と名く。何を以ての故にとならば、夫れ正見とは、見に分別無くして平等二無なればなり。云何が名けて平等の見と爲すや。若し是の念——凡夫法・下學法を上に爲す——を作さば、是の如きを名けて非平等の見と爲す。凡夫の法は漏にして學法は無漏なり、凡夫法は 食にして緣覺は 無食なり、凡夫法は垢あり、菩薩法は淨なり、凡夫は有爲にして佛は是れ無爲なり——是の如きの見は平等の見に非ず。若し能く凡夫の法乃至佛の法を觀察して、差別有ること無きをば、乃ち平等と名く。若し能く凡夫法の空にして、「乃至佛の法の空なるを觀見せば、是を正見と名く。凡夫の法は因緣より生じ、辟支佛の法も亦緣より生ずと觀すれば、乃ち正見と名く。若し凡夫法空寂にして、菩薩の法も空寂なりと觀すれば、是を正見と名く。若し凡夫の法は不具足なり、乃至佛の法も亦不具足なりと觀すれば、是を正見と名く。若し我と無我とを觀じて、差別有ることなく、差別の見無ければ、乃ち正見と名く。若し是の如く見れば、則ち上中下の法を見ず、一切の法に於て亦覺觀なし、是を正見と名く、正見とは所見無きに名く、所見無ければ、即ち是れ正見なり。若し是の如く見なば、是の人は乃至一法・一法の相觀（一）一法の光明をも見ざらん。善男子、若し是の如く見なば、是を佛法の正見とは名く」と。是の法を説きたまへる時、五百の比丘、阿羅漢果を得たり。

『善男子、云何が 正覺なる。正覺は一切の覺を離る。覺とは名けて智慧方便と爲し、法を觀じ法を知る、是を正覺と名く。諸法は何者か是れ垢、何者か是れ淨なるを觀察し、是の如く觀じ已つて、都て等と不等とを覺知せず、一切の覺を離るる、是を正覺と名くるなり。

【二五】食、凡夫の法は衣食を求むるをいふ。

【二六】無食、緣覺の法は供養を望まざるをいふ。

【二七】この句、晉譯には、凡夫之法、無所成就—諸佛之法、亦無究竟—とす。

【二八】八正道の第二、Sammāyakkammatthi pa. 普通正思惟といふ。晉譯には正念に作る。

喜覺分と名け、身心寂靜なるを、除覺分と名け、解脱の味を得るを、定覺分と名け、所作已に辦するを、捨覺分と名く。

「復次に菩提心を捨せざるを、念覺分と名け、至心に法を護るを擇覺分と名け、諸の衆生を調して、休息有ること無きを、進覺分と名け、善法を具足するを、喜覺分と名け、諸の煩惱を離るるを除覺分と名け、能く衆生をして三昧の中に住せしむるを、定覺分と名け、諸の衆生をして、悉く法界を知らしむるを、捨覺分とは名く。

「復次に聲聞・辟支佛乘を念ぜざるを、念覺分と名け、一切法の字・句・義を分別するを、擇覺分と名け、善法を求むるの時、三業の息まざるを、精進覺分と名け、怨親の心を離るるを、喜覺分と名け、如法に住するを、除覺分と名け、諸の世間に隨つて能く調伏するを、定覺分と名け、二法を觀ぜざるを、捨覺分とは名く。

「善男子、助菩提とは、一切の法を覺し、一切の法を知り、諸法を分別し諸法を籌量し、諸衆生の心性と心行とを知る、是を菩提分と名け、亦聖行とも名く。是の如き聖行は、是れ一切の凡夫、衆の邪見の行する所に非ず、是れ色・聲・香・味・觸の行に非ず、一切の相、一切の受に非ずして、諸の心意識の見・聞・覺・知、有想・無想の一切法の行なり、故に聖行と名く。夫れ聖行は、覺に非ず、非覺に非ず、亦大覺にも非ず、而も能く一切の諸法を對治す。然も復諸法と諍訟せず、是を聖行とは名く。聖行は即ち是れ菩提の法を佐助するなり。

「善男子、云何が是れ菩薩の淨八道の行なる。八道とは所謂正見、正見とは、一切の法皆悉く平等なりと見るなり。是の如き正見は空見と名けず。何を以ての故にとならば、自ら正見有る、是れ空見には非ず。是の二見は亦同見と名く。復我見・衆生見・空見有るを、正見とは名けず。是の如き三見は亦復同見なり。又衆生見・命見・空見は、正見と名けず、是の如き三見は亦復同見なり。又

【二八】喜、Priti。同に歡悅覺品者、心成無所樂とす。

【二九】除、また觸安、Prasrabdhi。同に信覺品者、身意休息、得至究竟とす。

【三〇】定、Samadhi。同に定覺品者、離於志味、而得遠至とす。

【三一】捨、Upeksha。同に觀覺品者、所可造作、而悉成辨とす。

【三二】八正道 Aṣṭāṅgamaṅgā。

【三三】正見 Samyagdrṣṭi。

【三四】一切の法……同見と名く、晉譯に、若能來一行一切諸法、於我不我不往空觀、所以者何。察三身吾我等無差特一

慧力に住するの時、作戒を遠離す。

「復次に信力に住するの時、瞋心を遠離し、精進力に住しては、忍辱を修習し、念力に住するの時、所修の忍を以て、菩提に迴せんことを願ひ、定力に住するの時、諸の衆生を護、慧力に住するの時、衆生・士夫・壽命を見す。

「復次に信力に住するの時、懈怠を遠離し、進力に住する時、所修の諸行をもつて、畢竟の岸に到り、念力に住するの時、所修の精進もて、菩提に迴せんことを願ひ、定力に住するの時、身心、寂靜に、慧力に住するの時、善惡に住まらず。

「復次に信力に住するの時、一切忽務の事を遠離し、進力に住するの時、勤めて禪支を求め、念力に住するの時、所修の定を以て、菩提に迴せんことを願ひ、定力に住するの時、其の心常に定に、慧力に住するの時、諸定に著せず。

「復次に信力に住するの時、無明を遠離し、進力に住するの時、勤めて諸善を求め、念力に住するの時、所修の智を以て、菩提に迴せんことを願ひ、定力に住するの時、善を修して思惟し、慧力に住するの時、如法に住す。

「復次に信力に住するの時、七力を具足し、進力に住するの時、七覺に住するを得、念力に住する時、八念處を得、定力に住する時、七識處を離れ、慧力に住するの時、八邪支を離る。

「復次に心、菩提に於て退轉有ること無き、是を信力・淨信力行と名け、不取・不捨なる、是を進力・淨進力行と名け、四念處を修する、是を念力・淨念力行と名け、心を調伏する、是を定力・淨定力行と名け、諸の見を遠離して善方便を知る、是を慧力・慧力行と名く。

「善男子、云何が菩薩の淨・七覺行なる。終に助菩提の法を失せざるを、念覺分と名け、不取・不捨にして奢摩他なるを、擇覺分と名け、一切の惡を離るるを、進覺分と名け、諸の憍惱を離るるを

【八】作戒、受戒等の時、身口に發表する作業をいふ。

【九】七力晉譯によれば七財なり。

【一〇】八念處は、念佛、念法、念僧、念戒、念施(捨)、念天、念出入息、念死の八念をいふからん。晉譯には、其意力者、心常整齊、未(會)三(禪)觀(亂)といふ。

【一一】七識處は七識住からん。三界五趣に於て、識を長養して、識自ら住せんことを樂ぶ所を差別して、七識住を立てたり。人趣より、無所有處天に及ぶ。

【一二】八邪支は八正道の反對をいふ。

【一三】此の段、晉譯は說相となる。

【一四】七覺支 Zaphra-bodhi-nikāya. 【一五】念覺分 Sam Khambho-dhānā. 晉譯に覺品。而得自在不共道慧とす。 【一六】擇(法) Dharmā pra-viṣṭyā. 同に觀(察)所行(一期)隨(應)時(而)無(所)著(と)す。 【一七】精進 Viriyā. 同に所(勤)修(一)行(至)無(二)懈(三)とす。

「復信根有るは、即ち是れ初めて善法に入るの心なり、精進根は能く憍慢を壊し、念根は我と我所とを離れ、定根は一切の六十二見を遠離し、慧根は一切の諸惡煩惱を遠離す。是を菩薩の淨五根の行と名く。

「云何が菩薩の淨五力の行なる。善男子、菩薩摩訶薩は五根を具足して、諸魔の爲に破壞せられず。故に名けて力と爲し、一切の聲聞・辟支佛乘の及ぶ能はざる所にして、一切の衆生も、其の大乗心を退せしむる能はず、一切の煩惱も、破壊する能はず、能く其の心をして知足少欲ならしめ、身に大力を得て善く諸根を覆ひ、金剛の身を得しむ、是を名けて力となす。

「善男子、菩薩摩訶薩の、信力に住するの時、終に一切の諸惡を造作せず、進力に住するの時、一切の善を造し、念力に住するの時、善法を失はず、定力に住するの時、五欲の樂の爲に壞せられず、慧力に住するの時、一切の諸法・煩惱を遠離す。

「復次に信力に住するの時、他の語に隨はず、進力に住するの時、善を求めて止まず、念力に住するの時、陀羅尼を得、定力に住するの時、法の平等を説き、慧力に住するの時、能く一切衆生の疑心を壊す。

「復次に信力に住するの時、解を得るの力を具し、進力に住するの時、精進力を具し、念力に住するの時、解脱力を具し、定力に住するの時、願力を具足し、慧力に住するの時、諸の行力を具す。

「復次に信力に住するの時、慳の罪過を見、進力に住するの時、慳貪を遠離し、念力に住するの時、所修の善を以て、菩提に迴せんことを願ひ、定力に住するの時、其の心平等に、慧力に住するの時、心終に施・戒・定の報を求めず。

「復次に信力に住するの時、能く一切破戒の垢を離れ、進力に住するの時、至心に戒を具し、念力に住するの時、持する所の戒を以て菩提に迴せんことを願ひ、定力に住するの時、清淨地を具し、

【六】六十二種の邪見なり。
卷二十二註四五―四八、參照。

【七】五力 Pañca balāni 一々の名は五根に同じ。

卷の第二十六

「云何が菩薩の淨五根行なるとならば、菩薩の信心あつて動轉すべからざるを、名けて 信根と爲し、他の教に由らずして精進を行するを、精進根と名け、常に菩提を念するを、名けて 念根と爲し、常に大悲を修するを、名けて 定根と爲し、善法を攝取するを、名けて 慧根と爲す。

「復次に諸佛の法を信するをば名けて信根と爲し、諸佛の法を求むるを精進根と名け、諸佛の法を念するを、名けて念根と爲し、佛の三昧を得るを、名けて定根と爲し、諸の疑網を斷するを名けて慧根とは爲す。

「復次に心菩提に向ひ、疑網有ること無きを、名けて信根と爲し、善法を増長するを精進根と名け、善方便を求むるを、名けて念根と爲し、諸の衆生を視るに、其の心平等なるを、名けて定根と爲し、諸の衆生の、上中下の根を、觀するを名けて慧根と爲す。

「復次に心淨にして濁無きを、名けて信根と爲し、衆の濁心を壞するを、精進根と名け、清淨の法を念するを、名けて念根と爲し、心性の淨なるを觀するをば、名けて定根と爲し、能く衆生をして清淨の法に住せしむるを、名けて慧根とは爲す。

「復次に一切繁惡の法を遠離するを、名けて信根と爲し、諸の善法を求むるを、精進根と名け、得已つて失はざるを、名けて念根と爲し、既に善法を得て、如法に住するを、名けて定根と爲し、善法と不善と無記とを思惟するを、名けて慧根と爲す。

「復次に信根とは、即ち是れ施心なり、精進根とは、即ち是れ施を樂んで休息有ること無きなり。念根とは既に施したる後、果報を求めざるなり、定根とは即ち平等に施し、心に分別無きなり、慧根とは福田及び非福田を觀ぜざるなり。

※ 大寶積經一一八(寶髻菩薩會第四十七の二)參照。

【一】 信根、Śraddhā-indriya

【二】 精進根、Vīrya-ī

【三】 念根、Smṛti-ī、音譯に意根とす。

【四】 定根、Samādhi-ī

【五】 慧根、Prajñā-ī

るを得。一切の梵天・帝釋・四王、阿修羅、乾闥婆、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽なども、亦復是の如くなり。

「云何が淨嚴の四如意足なるとならば、善男子、若し能く父母・和上・師長・有徳を供養し、諸の衆生を見ては、先づ意に問訊し、柔軟に與に語り、語の如くに作し、諸の衆生を視るに、其の心平等にして、善心・正心・恭敬心・慚愧心あり、貪欲・瞋恚・愚癡を遠離し、欺無く貪無く垢無く慳無く、他の事業を營んでは己が所作の如くにし、勢力無き者には、其の力勢を助け、泥塗の處には土石を薦治し、河澗・溝渠には橋梁を造作し、或は身を以て負ひ、或は船を施して濟ひ、常に衆生の須つ所の物を施し、口には他の衰惱の事を説かず、亦他の犯す所の罪を諷刺せず、罪を犯す有れば、能く法の如くに除き、諸の煩惱を遮して生起せざらしめ、重んずる所の物をば、能く以て人に施し、既に施したる後、心に悔を生ぜず、諸の衆生の爲に、願を發して信心を迴向し、善を以て諸の衆生を勧め、身命を惜まず、少欲もて知足し、他の利養に於て心に怖望無く、常に出家を念じ、亦衆生にも勧め、善知識を念じて心に捨離する無く、怨親の中に於て平等無二に、種種の乘を以て行路の者に施し、羸乏の人には床・臥具を施し、恐怖有る者には、能く妙護を爲し、諸の衆生を視ること、父母の想の如くし、毀戒を輕んぜず、貧には財物を施し、病瘦有る者には其の醫藥を給し、恩を他に施して自ら稱説せず、終に三寶の種性を斷絶せず、常に無爲を念じ、世事と一切の諸惡不善の法とを遠離し、世法の爲に汚染せられず、菩提至心の念を失はざる、是を四の淨如意足の行を莊嚴すとは名くるなり。

大方等大集經卷第二十五

【八】 淨嚴、清淨莊嚴の謂。

【八二】 薦、麗本發に作るも、今三本に従ふ。

『善男子、菩薩摩訶薩は、無量世に於て、善行を修集す、是の故に性は善なり、方便を以て惡をして生ぜざらしめず。若し菩薩有つて、四正勤を修すれば、心に自在を得。四正勤とは、菩薩爾の時、心及び心數と大慈悲と、和合して共に行す、故に正勤と名く。菩薩爾の時、次第に四如意足を修集す、一に欲、二に心、三に進、四に慧なり。專念至心に菩提を念する、是を名けて欲と爲す。大悲を修するが故に、覺心輕便なる、是を名けて心と爲し、惡法を遠離する、是を精進と名け、方便を得るが故に、之を名けて慧と爲す。菩薩は四如意足を修し已つて、四の自在を得。一に壽命自在なり。自在を以ての故に、生くること短命なりと雖も、自ら長壽を得。衆生を調して長壽を與へん爲には、正法を演說す。長壽の中に於て、自ら能く短壽を現す。是の菩薩所生の處——若しは天若しは人——に隨ひ、命の自在を得。二に身に自在を得。自在を以ての故に、心に隨つて身を作し、心に隨つて色を示す。威儀を示現するは、衆生の爲の故なり。菩薩は若し諸の衆生と、其の身同等ならんと欲すれば、高・大・微小など、悉く皆能く作す。三に法の自在を得。自在を以ての故に、能く一切の世・出世の法を知り、諸の衆生に一切の世事を示し、出世の行に於て、心も亦不退にして、明に甚深の十二因縁を知り、無礙智を得、能く衆生の爲に、種種の法を説くに、無量の衆生、是の法を聞き已つて、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。四には願に自在を得。自在を以ての故に、四大海をして合して一の海と作すも、不來不去にして動轉有ること無く、本の如くにして異らざらしむ。亦三千大千世界をして、諸の須彌山と合して一山と爲すも、不來不去にして動轉有ること無く、本の如くにして異らず、四天王・三十三天に於て、妨礙する所無からしむ。三千大千世界をして、悉く金寶・七寶・梅檀・華香・瓔珞、虚空水火と作らしめんと欲するも皆意に隨つて成す。是を菩薩四の自在を得とは名くるなり。

『善男子、菩薩若し四如意足を得なば、則ち面に十方の諸佛を見、與共に語言し、進止一處な

【七五】 また四神足といふ。梵

に Caturāra pādūpādā.

【七六】 欲 Candra

【七七】 心 Citta

【七八】 慧 Mīmāṃsā

【七九】 身に、晉譯には身口自在に作る。

如くなり。是の如き二界を、虚空界と名く。一切の諸法は、悉く法界に入る。夫れ法界は即ち衆生界にして、衆生界は即ち無分別なる、是をば一切法を觀察すと名け、等しく一切界は、即ち是れ法界なるを見る。明了に見ると雖も、而も心著せず、著せざるを以ての故に、則ち分別無きなり。菩薩摩訶薩は、肉眼・天眼・慧眼を以て法念處を觀ぜず。何を以ての故にとならば、是の如き三眼は、相貌無きが故なり。是の故に法を觀するには、則ち法眼を以てし、了了に知ると雖も、心著せず、復著せずと雖も、法界を失はざる、是を佛智と名く。能く是の如き甚深の法界を知り、亦一切の智念を失はざる、是を菩薩、法法念處を修すと名くるなり。

『善男子、菩薩摩訶薩は、何の故に是の四念處を修集するとならば、四顛倒を遠離せんが爲の故なり。身念處を修するは、淨の倒を離れんが爲なり、受念處を修するは、樂の倒を離れんが爲なり、心念處を修するは常の倒を離れんが爲なり、法念處を修するは、我の倒を離れんが爲なり。又四念處を離る。身念處を修して、搏食を離れ、受念處を修して、觸食を離れ、心念處を修して、識食を離れ、法念處を修して、思食を離る。又復、識の四住處を遠離す、身念處を修して住色處を離れ、受念處を修しては、住受處を離れ、心念處を修しては住想處を離れ、法念處を修しては、住行處を離るるなり。復五陰を離る、身念處を修しては、色陰を遠離し、受念處を修しては、受陰を遠離し、心念處を修しては識陰を遠離し、法念處を修しては、想・行陰を離る。是を菩薩の淨四念の行とは名く。』

『善男子、云何が菩薩は、四正勤の行を修するとならば、菩薩摩訶薩は、常に樂んで一切の善法を修集し、未だ生ぜざる惡法を、生ぜざらん爲の故に、勤行精進し、已に生じたる惡法を、遠離せん爲の故に、勤行精進し、未だ生ぜざる善法を、生ぜしめん爲の故に、勤行精進し、已に生じたる善法をば、住めて失はざらん爲の故に、勤行精進するなり。』

【六】 四顛倒、不淨なるを淨と見、苦なるを樂と見、無常なるを常と見、無我なるを我有りと見るなり。

【六八】 四食、次に説く搏食以下の四種をいふ。この段、晉譯缺く。

【六九】 搏食、また段食と云ふ梵に *Kaṇṭha-jīvaṇa-shāra*、鼻舌を以て、分分段段に、食するもの。香味觸を以て體とす。普通の吾々の食物なり。

【七〇】 觸食、樂食ともいふ、梵に (*Spṛśati*)、喜樂の事に觸れて、身を長養するもの。觸の心所を以て體とす。(神劇を見て、終日食はざるも、飢を感じざる如し)。

【七一】 識食、梵に *Vijāna*、六識(小乘)又は第八識(大乘)は、有情の身命を支持すれば、食と名く。

【七二】 思食、また念食といふ、梵に *Manuskamoethana*、第六意識の、思所欲の境に於て、希望の念を生じ、以て諸根を資助するもの(人飢渴するも、飲食の處に至り、飲食を得らるべきを思ひて、身死せざるが如し)。

【七三】 五陰の中、識即ち心王を除ける他の四陰。

【七一】 四正勤 *Outvāri pūha-*
pani

を淨むるは、衆生に障と無障とを知らんための故なり、十八法を淨むるは、三世の障礙無きを知らん爲なり、一切の佛法を淨むるは、一切の衆生、能く勝るもの無からん爲の故なり。菩薩摩訶薩は、能く是の如く觀じ、諸の善法及び諸の功德に於て、厭足を生ぜずして善行に親近し、惡行及び煩惱の習を遠離し、眞實に不動の行を了知し、不貪の心を知つて自在を得と雖も、願に隨ひ往いて四五非結業の生に生れ、欲界に生るるは、衆生の爲の故なり。

【善男子、菩薩摩訶薩は、善方便を得て、法念處を觀じ、助菩提の法を修集莊嚴して、一切の障菩提の垢を遠離す。是の功德を得て、常見に著せず、斷見に著せず、是の二見を遠離して、中道を行す。夫れ中道は、二種の法有つて——一に不善の念、二に無明——是の二法の中に、心の放逸ならざる、是を中道と名く。復二法有り、一に行、二に識なり。復二法有り、一に名色、二に六入なり。復二法有り、一に觸、二に受なり。復二法有り、一に愛、二に取なり。復二法有り、一に有、二に生なり。復二法有り、一に老、二に死なり。是の二法の中に、不放逸ならば、是を中道と名く。是の如き中道は、世間の智の見る能はざる所にして、宣説すべからず、顯示すべからず、相貌有ること無く、色無く處無く、取無く捨無く、清淨寂靜なり。善男子、夫れ中道は、眼もて見るべからず、乃至觸もて觸るべからず、亦至處無く、亦世にして出世なり、宣説すべからず、多に非す少に非す、故に中道とは名くるなり。

【善男子、我と無我とを名けて二邊と爲す。若し説いて言ふ有り、常に非す斷に非す、命に非す土に非す、想に非す非想到に非す、覺に非す、非覺に非す、實に非す虚に非す、此に非す彼に非す、有に非す無に非す、有爲に非す無爲に非す、行に非す非行に非す、生死に非す涅槃に非すと、是の如きを作さずば、是を中道と名く。

【復次に善男子、菩薩摩訶薩は、法法念を觀じて、法界を分別せず、法界の如く、衆生界も亦是の

【六】 非結業の生、業の結果として生るべきにあらざる所に生るるをいふ。

【六】 中道、普譚は中間に作る。

違事^{ちゐじ}を想^{おも}ふが如く、獨り行きて身無く、常に轉じて停^{とど}まること無く、諸界^{しよがい}に貪著^{こんちやく}して次第^{じだい}に生滅^{しやうめつ}すと。能く是の如き無量の心を攝して、一處に住^{すま}まらしめ、不動不轉、不漏不錯、不亂不定^{ふらんふてい}ならしむる、之を舍摩他^{しゃまた}と名く。菩薩若し能く是の如き觀を作さば、是を觀心心念處を成就^{じゆじゆ}すとは名け、是を心の境界^{きんがい}を知ると名け、是を心の法界を知ると名け、是を心の眞實の相を知ると名け、是を心の眞實の性を知ると名く。即ち是れ廣知、即ち是れ淨知にして、眞知實知の幻の如くなるを了知す。是をば法を知ると名け、心性を知ると名け、心を知り盡すと名け、無取知と名け、無礙礙知とは無く。菩薩摩訶薩は是の如く觀じ已つて、善く一切衆生の心性を知り、知り已つて應の如く、而も爲に法を説く。自の心性を知ることが如く、一切衆生の心性を知ること、亦復是の如く、自の心相を知ることが如く、一切衆生の心相を知ること、亦復是の如く、自心の平等なるを觀するが如く、一切衆生心の平等なるを觀すること、亦復是の如くなり。是の觀を作し已つて、法界に動ぜざる、是を菩薩、心心念處を修すとは名く。『善男子、云何が菩薩は法念處を修するとならば、菩薩摩訶薩は、是の如き觀を作す』法は出で、法は滅す。我衆生・壽命・士夫無く、生無く滅無く没無く出無き、是を法性と名く。若し能く法を求むる、是を出法と名け、若し法を求めざる、是を滅法と名く。若しは善・不善の、出づるも縁に従ひ、滅するも縁に従ふと。是の如く觀する時、三行を觀す、所謂惡行と善行と不動行となり。是の三行の中、我れ當に常に極善の行を行すべしとて、十の善法を爲す。十の善法とは、身業を淨めんがために、如來の三十二相・八十種好の、他の能く害せざるを欲求し、口業を淨めては、凡そ所説有れば、衆樂うて聽受し、心業を淨を淨めては、諸の衆生に於て、其の心平等にして、常に禪定に入り、四無礙智を淨め、慈心を淨むるが故に、衆生に常樂を施し、悲心を淨むるが故に、無量世中に、衆生の爲に苦を擧げて、其の心に悔ひず、十力を淨むるは、衆生諸根の利鈍を知らん爲なり、四無畏

【六】是、麗本眞に作る、今三本に依る。
 【七】本文に了知眞知實知如幻とあり。

【八】法念處(Thanasamīty-nupatthana、音譯に觀法知本無法一といふ。

【九】極、麗本、福に作る、今三本に依る。

苦受は即ち是れ空無、不苦不樂は即ち是れ無我なりと觀す。

『菩薩爾の時、是の觀を作し已り、是の諸の受は即ち是れ無受なるを見、一切の受は即ち是れ有爲なりと見る。若し是れ有爲ならば、即ち是れ生滅、散漏無住なり。是の如く觀じ已り、我を見ず、受者を見ざる、是を菩薩の大智方便と名く。是の方便に因り、一切の受は無常にして生滅あるを見、一切法は悉く是れ空無、受無く・受者無く、作無く・作者無し、緣に従つて生じ、緣に従つて滅すと觀じ、屬無く取無く、諸の因緣に於て覺觀を生ぜず、覺觀無きに因つて、是の如き言を作す。』諸の因緣の法は、皆悉く是れ空なり」と。菩薩摩訶薩は、是の如く觀する時、受念處を成じ、能く身心をして皆悉く寂靜ならしめ、一切の行を知る。是を一切智とは名け、是を受受念處とは名く。

『云何が菩薩は、心念處を修する。菩薩摩訶薩は、菩提心に住し、是の心性を觀じて、内外の心を見ず、外入の心を見ず、内外入の心を見ず、陰中の心を見ず、界中の心を見ず。既に見ずして是の思惟を作す。是の如き心と緣とは、異にして不異なり。若し心にして緣に異れば、則ち一時中に、應に二心有るべし。若し心即ち緣ならば、應に復能く身心を觀すべからず。猶し指端の、自ら觸るる能はざるが如く、心も亦是の如くなり」と。是の觀を作し已り、心の無住無常にして變異あるを見、所緣の處滅すれば、即ち知る、是の心は緣より生ずるに非ず、緣より生ぜざるに非ずして、常に非ず・斷に非ず・内に非ず・外に非ず・有に非ず無に非ずと。心を觀することは是の如くならば、如法に心の寂靜を知るを妨げず。是を菩薩、心心念を修すと名く。

『復次に善男子、菩薩摩訶薩は、心の非色にして觀見すべからず、是れ覺觀に非ざるを觀す。是を菩薩、心念處を修すと名く。心の如く、心數も亦是の如し、心數の如く心行も亦是の如し、心行の如く心所求の法も亦是の如し、所求の法の如く、菩提も亦是の如く、菩提の如く一切の善法も亦是の如くなり。菩薩若し心を觀すれば、獼猴の水に畫き、朝露・蚌王・魚母の如く、河の如く焰の如く、

【五】 心念處 *Cittamety-nivāṭṭhana*。晉譯に、菩薩觀心丁三本無心いふ。
【六】 内人の心、晉譯に内心とす。次の外入の心、内外入の心、亦同じ。

【七】 心數、心所〔有〕の法

欲漏・有漏五五・無明漏なり。菩薩は了々に三漏を知り已り、衆生の爲の故に、欲界に生れ、亦復欲漏の爲に汚されず。色・無色界にも、亦復是の如くなり。無明漏とは、已に其の根を抜く。何を以ての故に、無明を抜くが故に、則ち五六、日漏無ければなり。菩薩摩訶薩は、身念を修し已り、是の身中に於て、我及び我所を見ず、憍慢を生ぜず、我と我所とを離るるが故に、一切の財物を求めず取らず、取求せざるが故に、物に於て五七、證無く、證無きを以ての故に、即ち是れ寂靜なり。夫れ寂靜は即ち是れ忍辱なり、忍辱に住すれば上ならず下ならず、上ならず下ならざれば、即ち如法に住するなり。如法の住とは、善法を行ぜず、惡法を行ぜざるなり。上・下あざれば、即ち善友を得、善友を得已れば善知識に遇ひ、善知識に遇ふが故に、正法を聞くことを得、正法を聞くが故に、漏心を以て有漏の法には向はず。是をば諸漏の境界を過ぐとは名く。漏の境を過ぎ已れば、常に禪定に入る。既に定に入り已れば、乃至一法も覺觀を生ぜず。覺觀無きが故に、一法を作さず、一法をも變ぜざる、是を如法と名け、是を一切法の平等と名く。若し是の如き諸法の平等を得れば、是を一切智とは名く。善男子、菩薩摩訶薩、若し能く是の如く、身念處を觀する、是を觀身身念と名く。

『善男子、菩薩は爾の時、次に五八、受念處を觀じ、受有る者に於て、慈悲の心を生じ、諸の衆生に向つて是の如き言を作す「畢竟の樂は一切の受を斷ず。若し人、能く一切の受を斷ずれば、即ち是れ常樂なり」と。菩薩爾の時、受くる所に隨つて、慈悲の心を生ず。若しは自、若しは他の、樂受を受くる時は、愛心を遠離して慈心を生じ、若し苦を受くる時は、瞋心を遠離して悲心を生じ、若し不苦・不樂を受くる時は、無明の心を離れて捨心を生ず。是の故に菩薩の樂受を受くる時は、貪著を生ぜず、苦受を受くる時は、瞋恚を生ぜず、不苦不樂を受けて、無明を生ぜず。菩薩爾の時、一切受の無常・苦・無我なるを觀じ、樂を受くる者を見ては、即ち是れ苦なるを知り、苦を受くる者を見るごと、癭の如く瘡の如く、不苦不樂の受は是れ寂靜ならずと見、樂受は即ち是れ無常なりと觀じ、

【五五】 無明漏、音譯は見漏に作る。

【五六】 見漏、三界の見惑なり。其の體四流の見流と同じ。

【五七】 受念處 Vedanāsmṛty upasthāna。音譯には菩薩の痛痒意止といふ。即ち身の痛痒を觀じて、本痛無きを了するの謂。

爾の時一切の天と人と、聲を同じくして言はく「世尊、若し人有つて能く是の經を信すれば、當に知るべし、是の人は諸佛に護らる。何ぞ況んや能く受持・讀誦・書寫・供養する有るをや」と。

「善男子、云何が菩薩摩訶薩の淨菩提行なる。菩薩摩訶薩の、身念處を觀するに、二種の行有り、一に不淨行、二に淨行なり。不淨行とは、身の不淨にして臭穢充滿し、無常・不住にして諸の凡夫を誑くを觀するなり。淨行とは菩薩摩訶薩、是の思惟を作すなり「我れ今是の不淨の身に因りて、淨佛身を得、淨法身・淨功德身、一切衆生の樂見する所の身を得るなり」と。

「復次に善男子、菩薩摩訶薩は、身身を觀じ已り、能く二行を淨む、一に無常、二に常なり。菩薩摩訶薩は、身の無常にして、必ず定んで當に死すべきを觀じ、是の如く觀じ已つて、身の爲の故に、諸の惡業を造りて邪命自活せずして、三堅の法を修す、一に身堅、二に命堅、三に財堅なり。是の如く觀じ已り、能く衆生の爲に給使を作し、即ち身口意の曲れるを遠離す。菩薩は是の如く身の無常を觀じて、是の如き等の無量の功德を得。

「云何が常と爲す。菩薩摩訶薩は、無常を觀じ已つて、則ち常身を得、無常に因るが故に功德身を得、無常に因るが故に、佛種・法種・僧種を斷せず。善男子、又復常は、即ち是れ無盡なり、無盡は即ち是れ無爲なり、無爲は即ち是れ一切智所行の處なり、一切智所行の處は、是れ空・無相・願なり。又復常は即ち是れ虚空なり。菩薩摩訶薩は、一切法の、猶し虚空の如くなるを觀す。是を菩薩摩訶薩の常行とは名く。

「善男子、復菩薩有つて身念處を修し、一切衆生の身は、畢竟じて當に是れ如來の佛身、如來の身の如く法身も亦爾り、是の二身の如く、我が身も亦爾りと觀察す。是を菩薩、無漏の身を觀すと名く。菩薩爾の時に得る所の善法は、其の多少に隨ひ、悉く是れ無漏なり。是の如き法を以て、發願して一切種智に廻向す。無漏を得已つて終に漏を起さず。言ふ所の漏とは、即ち是れ三漏なり、所謂

【四】 以下に菩薩の四行の第二、助菩提行（一四三頁參照）を説く。助菩提の行は、（一）四念處、（二）、四正勤、（三）四神足、（四）五根、（五）五力、（六）七覺分、（七）八正道の七科三十七より成る。始に四念處を説く。

【四】 身念處 Kayamety-npattiṇa. 音譯には、自觀其身一知三本無身とす。

【五】 身身を云云、同に菩薩觀身了無身一已とす。

【六】 必、麗本は畢に作る。今三本に依る。

【七】 堅、音譯は要に作る。次の二亦然り。

【五】 この句、音譯には、一切人身、皆悉本空、以解二身空、意無所著、觀三衆生身二立三在佛身二云云と。

【六】 一切種智、佛智なり。佛智は圓明にして、總相別相、化道斷惑、一切種の法に通達すればなり。

く迂る無く、善く時節と時節を過ぎたるを知り、正法の衆を護り、畢竟覺・正覺・實覺あつて、諸の垢穢を遠ざけ、一切の訶責する所と爲らず、一行にして無行、一切衆生の行にして、無足跡の行なり、一切世間の行を離ると雖も、亦一切の世行を遠離せず、世界を離ると雖も、佛土を離れず、一切諸行の莊嚴を離ると雖も、亦衆生を調伏することを遠離せず、諸行を離ると雖も、善行を離れず、衆生心行の因縁を離ると雖も、衆生の心行を知ることが離れず、世行を離ると雖も、世法を離れず、諸の身を離ると雖も、衆生心に入る、是を名けて慧と爲す。是の如き智慧は甚だ得難しと爲す。善根純熟するに非ずんば、終に能く得る能はず。常に善法を修行する能はざる者は、亦是の如き智慧を得る能はず。菩提樹下に乃ち能く之を得、眞に法性は諸佛の護る所にして、度して彼岸に至らしむるを知り、一切の法は甘露味を施こすを知る。是の故に名けて般若波羅蜜と爲す。

「善男子、是の如き智慧は、畢竟して一切の縁、一切の相、一切衆生心の所行を了知す。是の義を以ての故に、名けて智慧と爲す。是の如き智慧に二種の寂靜有り、一は礙相を知るの寂靜、二は無礙の相を知るの寂靜なり。復二種有り、一は無覺の淨、二に離諸見の淨なり。是の如き智慧もて、菩薩摩訶薩、常に衆生の利・鈍の根の中、衆生の心の中、一切法の中に遊び、諸の煩惱は即ち是れ智慧なるを觀す。菩薩は諸の界に住すと雖も、多く佛界に住し、善能く十方世界の、一切の蓋を離れて、悉く是れ一切佛法の根本なるを觀見し、一切無上の佛法を具足して、諸法を學せず諸法を離れず、一法を壞せず一法を成ぜず。菩薩は是の如き智慧を成就し、能く功德を作し、能く讀誦して、一切佛法を説き、一切の福德をば、悉く能く之を得、皆能く一切の善法を修成す。是を菩薩の淨般若波羅蜜の行と名く」と。

是の法を説きたまへる時、二萬二千の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、八千の菩薩は無生忍を得、五百の比丘は漏盡きて意に解し。十千の天人は須陀洹果を得たり。

【四〇】 この二、晉譯には、一曰無礙慧想清淨之行。二曰嚴淨、莫能有人、當其慧相とす。

【四一】 この二、同じ、一曰淨除顛倒、二曰淨去誘見と。

【四二】 蓋は煩惱の謂。

【四三】 漏盡云云、一切の煩惱斷盡して、心意解脱するなり。小乗の阿羅漢の證果なりと云はる。

「譬へば三千大千世界の有らゆる衆生、悉く善く畫を知り、其の中に或は善能く泥塗する有り、或は能く磨彩するあり、或は身を畫くを曉つて手足を曉らざるあり、或は手足を曉りて面目を曉らざるあり。時に國王有り、一張の氈を以て是の諸人に與へ、之に告げて言はく「凡そ能く畫く者、悉く來つて此の氈上來聚し、吾が身の像を畫け」と。爾の時諸人、悉く來つて聚集し、其の所能に従つて共に之を作すに、一畫師有り、事に縁るを以ての故に竟に來るを得ず。諸人畫き已り、持つて共に王に上る如し。善男子、諸人悉く集つて作すと云ふべきや不や」と。「不らず、世尊」と。

「善男子、我れ此の喩を説くも、某の義未だ顯れず。善男子、一人來らざるが故に、一切集まりて作すと云ふを得ず、亦像已に成就すとも言ふを得ず。佛法の行者も亦復是の如し。若し一行の成就せざる有らば、如來の正法を具足すとは名けず。是の故に要す當に諸行を具足すべし。これを名けて無上菩提を成就すと爲すなり」と。是の法を説きたまへる時、六萬の菩薩、一切の行に於て、空を具足するを得たり。

「善男子、云何が菩薩摩訶薩の淨般若波羅蜜 行なる。善男子、菩薩摩訶薩は 十二の慧を具す。一に過去を知ること無礙なり、二に未來を知ること無礙なり、現在を知ること無礙なり、四に有爲を知ることに無礙なり、五に無爲を知ること無礙なり、六には一切世の作を知ること無礙なり、七に出世を知ること無礙なり、八に辯才を知ること無礙なり、九に實を知ること無礙なり、十に世諦を知ること無礙なり、十一に第一義諦を知ること無礙なり、十二に諸衆生の利鈍を知ること無礙なり、是を名けて慧と爲す。破し難きを能く破し、觀難きを能く見、解し難きを能く解す。譬へば金剛の沮壞すべからざるが如し。是を出世の慧、畢竟の慧、一切衆生の眞解の心慧と名け、行じ難く入り難く見難く、甚深にして習學すべきこと難し。正見正聚にして、諸見及び習氣を遠離し、自ら知るところと了了にして、一切衆生の心を見し、法智・義智あつて貪著する所無く、曠大の光明あつて、評無

【四】 吾が身、晉譯には三界の諸形を畫作せしむとす。
【二】 一畫師云云、同は一師最上、悉得二其體一とし、譬の説相異なる。

【三】 行、麗本缺く、今三本に依る。
【二】 十二の後半晉譯異なる。

觀じ已つて定に入り、既に定に入り已り、色・受・想・行・識に貪著せざる、是を名けて禪とは爲す。

【三六】 眼の禪乃至意の禪に著するに非ざる、是を名けて禪と爲す。色の禪乃至法の禪に著するに非ざる、是を名けて禪と爲す。地水火風空の禪に著するに非ざる、是を名けて禪と爲す。日・月・釋・梵・自在天の禪に著するに非ざる、是を名けて禪と爲す。欲界・色・無色の禪に著するに非ざる、是を名けて禪と爲す。此彼の禪に著するに非ざる、是を名けて禪と爲す。身心の禪を觀するに非ざる、是を名けて禪と爲す。上下の禪に著するに非ざる、是を名けて禪と爲す。四取の禪に著するに非ざる、是を名けて禪と爲す。衆生・壽命・士夫・我人の相の禪に著するに非ざる、是を名けて禪と爲す。常見・斷見・有無の見の禪に著するに非ざる、是を名けて禪と爲す。畢竟して漏を盡す禪に非ざる、是を名けて禪と爲す。定聚の禪に入るに非ざる、是を名けて禪と爲す。沙門果を得るの禪に非ず。是の如き禪は、畢竟行の禪に非ず、空調伏の禪と名け、真空の禪に非ず。無相調伏の禪と名け、眞に無相の禪に非ず。無願調伏の禪と名け、眞の無願の禪に非ず。是を菩薩は、大慈大悲の一切空行の禪を具成就すと名くるなり。

【云何が名けて一切空を具すとは爲すとならば、若し能く布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の方便、慈悲喜捨、四諦の菩提、智慧・善願の莊嚴、舍摩他・毘婆舍那、解脱慍愧などを觀ぜざる、是を諸佛の方便・三昧・神通・無礙智と名け、十力・四無所畏・十八不共法を攝取し、二乗の爲に染汚せられず、諸の習氣を斷ち、無量の大神通智を具足し、諸の衆生の歸依する所となり、世法及び出世法を莊嚴し、能く一切の衆生を調伏し、四流・生死の大海を渡らしめ、能く一切の有らゆる繫縛を斷ち、諸の法性を淨むるなり。是を性の寂靜と名け、法の寂靜に向ふに非ず、亦法の捨性に取向し、了了に法の盲性に向ひ、聞く有れば法の聲性に向ひ、勤めて調伏して法の停住に向ひ、涼滅寂靜にして、熾然を調伏する、是を一切の行空と名く。

【三六】 眼の禪云云、晉譯には彼若禪者、不著二眼耳……意と云ふ。以下亦同じ。

【三七】 四取。一に欲取（色聲等の五塵の境に貪欲取着するをいふ）、二に見取（五欲の法に於て、我見、邊見等を妄計取著するをいふ）、三に戒取（外道の非理の禁戒を取着修行するをいふ）、四に我語取（我見・我慢に取著するをいふ）。

【三八】 名く、麗本に缺く、三本に依つて加ふ。

【三九】 以下、晉譯に觀る於身法、無所貪愛、志於佛法、了了自然想、越諸住行、默二口言辭、有所說者、當宣佛語、以此至誠消滅常然、開化衆生、是曰具足行空。

す。復次に善男子、淨忍じやうにんの菩薩は、則ち能く一切法中に衆生有ること無きを觀察す。是の故に忍を修す。一切諸法は其の性解脱なり、是の故に菩薩は、一切の法を觀じて、忍無く瞋無し。若し諸法に於て、心に所著無ければ、是を名けて忍と爲す。善男子、菩薩は二忍有り、一には觀みすること法身の如く、二には觀すること法界の如し。菩薩摩訶薩、若し能く是の如く二法を觀すれば、是を菩薩ぼだい摩提波羅蜜ぼだいの行を淨むとは名く。

『善男子、云何が菩薩の、淨毘梨耶波羅蜜の行なるとならば、若し菩薩摩訶薩、諸の修行に於て息はす悔ひず、諸の善法に於て心に厭足無く、亦樂んで五波羅蜜を修行し、常に一切の善法を莊嚴することを求め、正法しやうぽうを擁護ようごし、樂たのうて之を宣説し、衆生を調伏して心に休息しやうそく無く、聲聞しやうもん・辟支佛びやくしふつ・佛乘を過ぎ、一切諸佛の正法を擁護し、諸の苦行を修して其の心悔ひず、終に本昔ほんこくの善根を喪失せず、廣く多聞たもんを修して心に厭倦ひんげん無く、衆の爲に走使して愁悔しうげを生ぜざる——是を精進と名く。

『是の如き精進をは、云何が淨と名くる。若し能く身は猶し影像えいざうの如く、口には言説無く、心は畢竟じやうじやうして淨なりと觀じ、盡智じんぢぢを以て諸の滅法を觀じ、無生智を以て諸有しやうの盡つくるを知る——是の如く觀する時、則ち能く三種さんしゆの精進を莊嚴す。一に體莊嚴、二に覺莊嚴、三に分別莊嚴なり。復三種有つて精進に著せず、一に眼に著せず、二に色に著せず、三には識に著せず、乃至法も亦復是の如くなる、是を不取不捨の精進と名く。是の如き勤精進ごんしやうじんを具足し已り、惠施ゑせを取せず、慳貪けんこんを取せず、持戒を取せず、毀戒を取せず、忍辱を取せず、瞋慧ちんゑを取せず、精進を取せず、懈怠せたいを取せず、禪定を取せず、亂心を取せず、智慧を取せず、愚癡ぐぢを取せず、善法を取せず、惡法を取せず、佛道を取せず、二乗を取せざる、是を二種の勤精進ごんしやうじんと名くるなり。是の二の精進は、能く佛法を具す。

復二種有り、所謂すゐん内外ないがいなり。若し菩薩、能く是の如く精進を勤むれば、是を毘梨耶波羅蜜びりやと名く。『善男子、云何が菩薩の淨禪波羅蜜の行なる。若し菩薩摩訶薩、諸の禪支を取り諸の禪支を觀じ、

【三】本文に一者觀如法身、二者觀如法界と。晉譯には、曉了身分散事、と明識諸法皆悉本無一とを擧ぐ。

【三】晉譯は、この句に代ふるに、彼以三事、離於精進、一日倚著因緣、二日行顛倒事、三日望三想之滅、とす。

【三】内外、晉譯は、内外に就き、二重の淨を説く。

し、八には勤めて精進を行じ、九に衆生を欺かざるなり。復十種有り、一に身の三業を淨め、二に口の四業を淨め、三に意の三業を淨め、四に嫉妬を遠離し、五に詭曲の心を離れ、六には至心に戒を念じ、七には持戒の爲の故に、勤行精進し、八に軟語す、衆生を調せんが爲に、九に身を受くるは衆生の使の爲なり、十に諸の福田に於て輕慢を生ぜざるなり。

「善男子、菩薩の尸波羅蜜を修行するや、二種の淨行有り、一には有心・有相及び莊嚴もて、寧ろ壽命を捨つるも、終に戒を毀たざると、二に無心・無相及び無莊嚴もて、一切の法に於て心に所著無きとなり。復二種有り、一に内入を淨め、二に一切の外入を求めざるなり、復二種有り、常に菩提を願ふの心、二に本菩提に向ふ戒相を觀ぜざるなり。

「善男子、云何が菩薩の淨摩提波羅蜜の行なるとならば、善男子、菩薩摩訶薩は罵を受くるも報ぜず、口業淨なるが故に。打を受くるも報ぜず、身業淨なるが故に。瞋を受くるも報ぜず、意業淨なるが故に。善男子、菩薩摩訶薩は罵辱を受くと雖も、酬ひざる所以は、衆生を護るが故なり。諸の楚毒を受くるも報ぜざる所以は、後世を護るが故なり。手足を截らるるも慈心ありて瞋らざるは、菩提を護るが故なり。求むる有る者を見るも、心に瞋を生ぜず、四攝の爲の故に、慈心を生ずるが故に、菩提の道を増すが故に、慳貪の心を壞し、魔業を破するが故なり。善男子、菩薩摩訶薩は、念佛を修し已りて、忍辱を行じ、一切の苦を受く、佛身を得んが爲の故に。善男子、復菩薩有つて、忍辱を修す、具足して十力を得んと欲するが爲の故に。復菩薩有つて忍辱を修す、大師子吼を成さんと欲するが爲の故に。復忍を修する有り、三世の無罣礙なるを知らんが爲の故に。復忍を修する有り、大慈大悲力を得んが爲の故に。復忍を修する有り、一切智を具足するを得んが爲の故なり。

「善男子、菩薩摩訶薩は、二力を具足せば、能く忍を成就す。一に智力、二に修力なり。智力を以ての故に、身・心を觀ず、是の故に忍と爲す。修力を以ての故に、諸法に著せず、是の故に忍と爲す。

【二六】身の三業は殺生、偷盜、邪淫、口の四業は、妄語、兩舌、惡口、倚語、意の三業は貪欲、瞋恚、邪見の三なるべし。

【二七】内・外の二入とは、十二入に就て、内外を分てるなるべし。内入は十二入の中、意根・法境の二、外入は五根・五境。

【二八】この二、晉譯によれば、一、淨其道心、解自法相、故と、二戒品清淨、無諸相となり。

【二九】楚毒は、つらいくるしみをいふ。

【三〇】この二、晉譯によれば、一曰精修道業、二曰合集義力と。

を憐愍し、聲聞・辟支佛の慈に勝り、能く魔業を壊して諸衆生を調し、無量の功德寶聚を具足して、放逸有ること無きなり。復二種有り、一には諸の衆生に於て、悪心を生ぜず、二には諸の衆生を調して菩提に向はしむ。復三種有り、一に身を淨む、一切の身の惡業を遠離するが故に。二に口を淨む、一切の口の惡業を遠離するが故に。三には意を淨む、一切の貪恚・邪見を遠離するが故に。復四種有り、一には諸の衆生を勸めて、禁戒を持せしめ、二には諸の衆生に勸めて淨戒を具足せしめ、三には諸の毀戒の者を調し、四には持戒の者を見ては供養・恭敬・尊重・讚歎するなり。復五種有り、一に戒を持し已つて憍慢を生ぜず、二に戒を毀つ者を見るも輕慢を生ぜず、三に戒を持するを見て、心に嫉妬無く、四に終に聲聞の乘を求めず、五に辟支佛乘を念ぜざるなり。復六種有り、一に佛を念ず、戒を過ぎんが爲の故に。二に法を念ず、戒を過ぎ已つて、心に悔を生ぜざらんが爲に。三に僧を念ず、能く如來の戒を具足せんが爲の故に。四に戒を念ず、諸の果報有ることを求めざるが爲の故に。五に施を念ず、能く一切に悉く施與せんが爲の故に。六に天を念ず、諸の善法を具足せんと欲するが爲の故に。復七種有り、一には深く一切の佛法を信じ、二には勤めて精進を行す、佛法を得んが爲の故に。三には智を具す、一切諸佛の法を知らんが爲の故に。四には聞き已つて能く一切の佛法を説くが故に。五には父母・師長・和上を供養す。六には現在・未來の惡業を畏る。七には慚愧の心有るなり。復八種有り、一に利養の爲に異を顯はして衆を惑はさず。二に自の事を説かず、一切を離るるが故に。三に供養を讚へず、心知足するが故に。四に聖種性を行す、善法を樂むが故に。五に頭陀の法に隨ふ、身命を惜まざるが故に。六には寂靜を樂む、世事を説くことを離るるが故に。七に深く心に法を樂む、三界を厭ふが故に。八には至心に法を護る、身命を惜まざるが故に。復九種有り、一に九の惡心を離る、九の衆生所居の處を過ぐるが故に。二に淨を念じ、三に修を念じ、四に善法を増長し、五には心に寂靜を樂み、六に煩惱の想を離れ、七に舍摩他を莊嚴

【二四】 晉譯によれば、以此戒法、教化衆生一とあり。

【二五】 晉譯之を缺き、第五に無所貪者一を加ふ。

【二六】 二一五は、晉譯と異なる。次の八種、九種、十種も、兩者合せざるものあり。

【二七】 九の衆生所居の處とは、三界五趣の中にて、有情の樂で住する處に就て九有情居を立つるもの、是なるべし。

【一】願を分別せずとは、施する時、帝釋の身、梵王の身、轉輪王の身、魔の身、長者・大臣の身を得んが爲にあらす、亦復大白在の爲の故、大眷屬の爲の故にもあらす、上有の爲にあらす、聲聞・辟支佛乘の爲にあらす、乃至阿耨多羅三藐三菩提の爲の故にもあらすして、布施を行する、是をば願を分別せずとは名くるなり。

【善男子、菩薩摩訶薩の惠施を修するの時、是の如きの四事を具足成就せば、即ち八不正見を遠離するを得。一に我見、二に衆生見、三に壽命見、四に士夫見、五に常見、六に斷見、七に有見、八に無見なり、是を名けて八と爲す。復四種の功德を遠離するを得、一に凡夫功德、二に聲聞功德、三に緣覺功德、四に餘習功德なり。是の如く施し已れば、四相——一に常相、二に樂相、三に我相、四に淨相——を觀ぜず、能く四法——一に身を淨め、二に口を淨め、三に心を淨め、四に願を淨むる——を淨め、三礙——一に果報の礙、二に聲聞の礙、三に悔心の礙——を遠離せん。

【善男子、菩薩是の如き施を修行する時、三畏を遠離す、一に憍慢の畏、二に上慢の畏、三に魔業の畏なり。菩薩の是の如き施を修行する時、四種の印を具足す、一に内空の印、二に外空の印、三に衆生空の印、四に菩提空の印なり。是の如く施すの時、四精進を具す、一に衆生を満たさんための故に精進を具足し、二に佛法を護らんための故に精進を具足し、三に三十二相・八十種好を具せん爲の故に精進を具足し、四に佛土を淨めんための故に精進を具足するなり。是の時復四念を具足するを得、一に菩提心を念じ、二に佛を見んと欲することを念じ、三に心常に慈を念じ、四に煩惱を離ること念するなり。是の如く施する時、三事——一に自身、二に他身、三に菩提——を念す。

是の如く施する時、四智——一に界智、二に衆生満足智、三に願智、四に助菩提智——を淨む。善男子、菩薩若し能く是の如き法を行ぜば、則ち能く檀波羅蜜を淨む。

【善男子、云何が菩薩の淨尸波羅蜜の行なる。善男子、一種の淨有り、所謂菩薩は一切世間の衆生

【一七】その第四、晉譯は、志性所施、亦無若干に作る。
【一八】上有は、色・無色界の生をいふ。

【一〇】七を晉譯に不レ住三處、とす。
【二〇】四種の功德、同に四住業とす。而してその四は、一に經典を以て衆生を開化し、二に聲聞を捨てて意に大道を志し、三に緣覺の法を捨てて平等を修し、四に止處と諸の倚著する所とを遠くるなり。

【二二】この四は四種顛倒の妄見なり。
【二三】三礙、晉譯によれば、捨衆を捨て、懷恨を棄て、小乘を離るるなり。

【二三】四智、晉譯によれば、一に以て慧布施、二に則能可レ悅衆生之心、三に曉了勸助、四に明解三觀の經典なり。

菩提行、三に神通行、四に 調衆生行なり。波羅蜜行とは、是れ願方便、助菩提行とは、是れ修道の方便、神通行とは、是れ 調心の方便、調衆生の行とは、是れ菩提心堅固の方便なり。

「善男子、云何が檀波羅蜜と名くるとならば、檀波羅蜜とは即ち是れ淨行、能く 癡心を壊し、能く捨心を修し、捨心を修し已つて、能く一切に施すなり。若し菩薩有りて能く一切に施せば、即ち四種の無分別を得。何等をか四と爲す、一に衆生を分別せず、二に法を分別せず、三に心を分別せず、四に願を分別せざる——是を名けて四と爲す。

「衆生を分別せざるとは、是は與ふべく是は與ふべからず、此は多く與へ此は少く與ふ、此は上の與にて、此は下の與なり、此は恭敬の與なり、輕慢の與なり、此は全く與へ、此は半與ふ、此は戒を持し此は戒を破る、此は福田にして此は福田に非ず、此は大報を得、此は大報を得ず、此は是れ正見、此は是れ邪見なり、此の行は正聚、此の行は邪聚なるを「分別せざるなり」。善男子、若し菩薩摩訶薩、是の如き心を得るを、不分別の心、無憍慢の心、無上下の心、無罣礙の心、是れ平等の心、眞正の心、平等施の戒、平等の慈悲と名け、分別有ること無くして猶ほ虚空の如くなり。是をば衆生を分別せずとは名く。

「法を分別せずとは、菩薩終に是の分別——受くる者には爲に説き、受けざるものには説かず、法を受くる者には其の須つ所を施し、法を受けざる者には則ち供給せざる——を作さず、終に凡夫の人には惠施すべからず、賢聖の人には則ち應に布施すべきを觀察せざる。是をば法を分別せずと名く。

「心を分別せずとは、諸の衆生を觀するに、心皆平等にして、報の爲に施せず、内外の貪無く、名の爲に施すに非ず、果を求めて施さず、所愛の物を施し已つて悔いず、衆生を攝せん爲の故に惠施を行す、是を心を分別せずとは名く。

【七】 晉譯に、開化衆生とす。

【八】 同に所、可勸助、靡不周普、入衆德本と。

【九】 同に遊于大慈、曉了、應時慧之所入と。

【一〇】 同に分、別人民心念所行善惡衆。

【一一】 麗本、調心方便に作るも、縮刷に依れば、明本には調衆生行と爲すと。今後者に依る。

【一二】 晉譯は大哀堅固、明識志性之所歸趣に作る。

【一三】 癡は、愚癡闇鈍にして、事物の道理を知る能はざる精神作用をいふ。

【一四】 四種無分別心の第一。

【一五】 その第二。

【一六】 その第三、晉譯には所可勸助、亦無差別といふ。

上の法を聽受し、并に十方の諸菩薩の、三十二の妙相を具足せるを見んとせば、應當に速に大寶坊に詣るべし。今若し諸の善根を種まざれば、後必ず大涅槃を得じ、若し人身を具足せんと欲すれば、應當に速に娑婆界に詣るべし。若し三惡道を破壞せんと欲し、人天の微妙の樂を受け、無上無比の樂を獲得せんと欲すれば、應當に娑婆界に詣るべし。大醫は今甘露味を施して、衆生の諸煩惱を除滅したまふ、如來商主・大法王は、今日無上界を演説したまふ」と。

寶髻菩薩、是の偈を説ける時、其の聲は大千世界に遍滿したり。時に舍利弗、是の偈を聞き已り、即ち佛に白して言はく「世尊、是の如き偈音は、何處の演説なるや」と。佛の言はく「舍利弗、東方に九萬二千の諸佛世界を過ぎて、彼に世界有り、名けて善華と曰ひ、其の土に佛有り、號して淨住と曰ひ、彼に菩薩有り、名けて寶髻と曰ふ、八千の菩薩と俱に、此に來至す。是れ其の所説にして、其の聲大千世界に聞ゆるは、諸の衆生に勧めて善法を修せしむるなり」と。

爾の時寶髻菩薩、八千の菩薩、及び無量の人天と、佛の所に來至し、頭面もて禮拜し、佛に白して言はく「世尊、善華世界なる淨住如來に、敬を致して問訊すらく「起居輕利にして氣力安きや不や。眷屬の大衆は、樂んで法を受くるや不や」と。世尊、我れ彼より此の世界に來至せるは、菩薩の淨行の法印を聽かん爲なり。唯願はくは如來、普く一切の爲に、大慈もて憐愍もて、分別解説したまへ。諸の菩薩をして、聞き已つて修集し、一切煩惱の習氣を破壞して、菩薩の行を修し、一切衆生の心を了知し、能く菩薩の有らゆる行相を修し、能く智慧の行を解了するを得、能く一切の煩惱等の行を知り、能く菩薩所修の法行を修し、能く深く一切の罪過を觀察して、身に無礙を得て、一切の佛を見せしめたまはんを」と。

佛の言はく「善い哉・善い哉、善男子、諦に聽き諦に聽け、我れ今當に是の如き淨行の十分の一を説くべし。善男子、菩薩摩訶薩には四の行有り、何等をか四とは爲す、一に波羅蜜行、二に助

【六】波羅蜜多 Paramita の略、到彼岸、度など譯し、六種あり。この六種の行は、特に菩薩の、心して修する所なり。一に檀那(布施)、二に尸羅(持戒)、三に羼提(忍辱)、四に毘梨耶(精進)、五に禪定、六に般若(智慧)なり。以下一七二頁に亘つて、この六種の淨行を説く。

卷の第二十五

寶髻菩薩品 第十一之一

爾の時世尊、故に欲色二界中間の大寶坊中に在り、師子座に坐して、大光明を放ちたまふこと、猶ほ日月の如く、大自在を得たまふこと、猶ほ梵釋の如く、功德の高顯なること、獨り須彌山の如く、法海甚深なること、猶ほ大海の如く、大衆中に於て正法を演説したまふに、初中・後善く、字・義真正にして、清淨を具足し、梵行を瑠宜したまひ、諸の菩薩の爲に法印を淨め、諸の菩薩をして、聞き已つて修集せしめたまへり。

爾の時東方に、九萬二千の諸の佛世界を過ぎて、彼に世界有り、名けて善華と曰ふ。其の土に佛有り、號して淨住如來・應・正遍知・明行・足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ひ、衆生を化せん爲に正法を宣説す。一菩薩有り、名けて寶髻と曰ふ、諸の菩薩——其の數八千——と、彼の世界に没して此の土に來らんと欲し、妙寶蓋を齎て如來に奉らんと欲す。其の蓋は一十千の世界を周覆す。及び諸の香華もて、佛を供養せんと欲し、妙音もて偈を説き、如來を讚歎すらく

【若し諸の人天にして佛を觀るを得なば、則ち大利益を獲得すも爲す、如來所受の苦は無量なり、精進を勤めたるが故に菩提を得たまへり。往昔に精進して菩提を修したまへること、一切の諸菩薩に超過す。衆生をして利益を得しめん爲の故に、無上の正法輪を轉じたまふ。

如來は是の如く見るを得ること難し、所説の正法も亦聞き難し、人身を獲得すること亦復難く、諸根具足せんこと亦是の如くなり。若し諸の衆生にして不善を行すれば、亦三の善業を作す能はず、若し人、大利益を得んと欲すれば、應當に釋中の尊を觀見すべし。若し人、無

【一】西晋法護譯、寶髻菩薩所問經（現藏にては大寶積經四十七會、寶髻菩薩會第四十七之一）參照。

【二】晋譯には、佛、羅閱祇雲覺山に在はして説き給ふ處とす。

【三】以上の序分、晋譯全く異なる。

【四】善華、晋譯は善變に作る。

【五】寶髻、同に羅陀摩那朱に作り晋曰ニ寶髻と註す。

の業を滅し、能く一切の諸悪果報を破す。若し善男子、善女人有つて、是の經を供養せば、則ち十方の諸佛を供養すとは爲す」と。

爾の時婆婆世界の一切の衆生、異口同音にして是の言を作せり『善い哉・善い哉、世尊、我れ初より未だ聞かざる是の大法聚をば、今之を聞くを得たり。世尊、我れ能く是の法を受持守護せん。護法の爲の故には、身命を惜まず。若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷有つて、是の經を受けなば、我れ當に供養し、其の須つ所に隨つて一切を給與すべし。若し復能く是の如く經を受持する者を供養する有らば、我等亦當に勤めて之を守護し、内外の財寶に、損耗無からしむべし。是の經法の流布する處に隨ひ、亦其の土を護つて、諸の惡を無からしむべし』と。

佛の言はく『善哉・善哉、善男子、汝能く是の如くに法を守護せんには、則ち三世の諸佛を供養すとは爲す。善男子、若し諸の衆生、護法の心有らば、若しは人・天に生れて、大自在を得、乃至畜生に「生れて」亦大力有り、人の爲に重んぜられ、寒苦を経ざらん。善男子、是の護法の者には惡も加ふる能はず、心に所畏無く、能く破壊する無く、諸魔煩惱も其の便を得ず、眷屬多饒にして智慧具足し、凡そ所説有るも、罪礙する所無く、樂んで十善を行じ、正定を修集し、父母諸王も、見て則ち恭敬し、能く法座に昇つて正法輪を轉じ、凡て聞く所有らば、終に妄失せず』と。

大方等大集經卷第二十四

辭にして、行乞して自活し、常に惡心を生ぜん。是の惡心に因り、復當に還つて地獄中に墮つべし。王の夫人・太子・大臣・城主・村主、將帥・郡守・宰臣の如きも、亦復是の如くならん」と。

頻婆娑羅、耳に是の語を聞き、悲泣哽咽し、涙を收めて言はく「世尊、我れ如來に値ひまつるも猶ほ故のごとく、如法に國を治むる能はず、況んや未來世の放逸なる諸王は、戒を持し修行精進して、惡比丘を治し、佛法を護持する能はず、三寶の種性を紹繼する能はさらん。是の如きの諸王は、長夜常に三惡道を行かん」と。

爾の時諸王の夫人、太子・大臣、城主・村主、將帥・郡守・宰官など、皆佛に白して言はく「我等今現在の世に於て、要す當に心を勤めて、佛法を守護すべし、亦當に法を受持する者に、衣服・飲食・臥具、醫藥を供養し、惡比丘を治して三寶の性を紹がしむべし」と。

佛の言はく「善男子、汝等若し能く此の事を建立せば、則ち三世の諸佛を供養すと爲し、亦無量不可思議の諸善功德を得ん」と。

虚空目分中 大衆還口品第十

爾の時世尊、復諸天に告げたまはく「善男子、汝等今は憂慮を懷く勿れ、我れ今當に未來の弟子の與に、護法の爲の故に、嚴峻の制を立つべし、三寶の性を斷絶せざらん爲の故に、諸の善法を増長せんと欲するが爲の故に、多聞を増長し寶藏を滿たさんが爲の故に、一切の苦・煩惱を離れんが爲の故に、無上菩提の道を成ぜんが爲の故に。善男子、我が今説く所により、一切の聲聞は、具足して聲聞乘を得ることを成就し、一切の緣覺は、具足して辟支佛乘を獲得し、一切の菩薩は具足して三種の梵行を成滿し、無上の智を得べし。」

「善男子、是の經は能く諸の惡業生を離れ、能く衆生の惡・不善の法を壞し、能く身・口・意の不善

宮に入るを聽さざる」と。「世尊、二十年を過ぐれば、則ち入るを聽さず」と。佛の言はく「我も亦是の如く、沙彌は二十、乃至得道まで、衆に入るを聽さざらん」と。王の言はく「世尊、我が國法の如きは、罪を作す者有らば、必ず死せんこと疑あらじ。或は打ち或は罵り、閉繫して物を三輸し、界外に擯出す。如來の法中には、其の義云何」。大王、私の法中も亦復是の如し、罪を犯す者有らば、或は苦作せしむること一月二月、或は與に語り共に坐し共に食せず、或は共に住せず、或は擯けて出でしめ、或は一國より出で、或は四國より出でしめんに、佛法有るの處には、是の如き等の惡比丘を治し已り、諸の善比丘は安樂に法を受くるが故に、佛法をして久住して滅せざらむべし。大王、若し未來世に、我が弟子有り、饑財多寶にして大力勢有り、王の親愛する所にして、一切の大衆は擯治する能はざらん、是の如き等の人をば、汝等當に治すべし。刹利・婆羅門・毘舍・首陀などの治する能はざる者——是の如き四姓は、則ち我が三寶の種性を斷ぜんが爲に、能く法炬を滅し、法船を破壊し、法味を焦爛し、衆生の眼を奪ひ、我が法の壞せん時、心則ち放捨せん。大王、譬へば一人の、一切の眼を奪はんが如し。意に於て云何、是の罪多きや甚だ多からざるや」と。

「世尊、稱量すべからず、計數すべからず」と。

「大王、若し刹利・婆羅門・毘舍・首陀有つて、大力勢有り、我が法の滅するを見、捨して守護せずんば、其の所得の罪も亦復是の如くならん。大王、若し國主有つて、無量世に於て施・戒・慧を修し、我が法の滅するを見て擁護せざれば、是の如き所種の無量の善根は、悉く皆滅失し、其の國には常に三の不祥事有るべし、一に穀貴、二に兵革、三に疫病なり。一切の善神は悉く之を捨離し、其の王の教令には人隨從せず、常に隣國の爲に侵襲せられ、暴火横に起り、惡風雨多く、暴水増長して人民を吹漂し、内外の親信は戒共に謀叛せん。其の王、久しからずして當に重病に遇ひ、壽終の後、地獄中へ生るべし。若し宿善追及せば、還人身を得、無量の世中、常に盲にして目無く、貧窮踰

【三】輸、今は苦役するの謂か。

【三】宿世の善根。
* 踐は行きて正しからざるなり、躡は散走するなり。

て人間に處らん。是の人身を捨てんに、即ち天に生るるを得、諸天は色力・壽命を増長し、有らゆる惡相滅して遺餘無けん。其れ無信の者は、我れ能く信ぜしめん。

「若し佛弟子の、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷など、是の如き經典を受持して讀誦書寫する能はず、寂靜を樂はず、不善に思惟し、供養を樂求して淨戒を持せず、癡情・憍慢にして、心に慚愧無く、白衣に親近せんに、是の如きの比丘は、財・俗力を以て佛弟子を毀ち、若しは打ち若しは殺し、若しは縛し、若しは罵り、王・大臣に向つて其の過惡を説かん。佛の諸弟子は、是の事を聞き已つて大惡心を生ぜん。惡心を生じ已るに、諸の善鬼神は捨てて他の土に至らん。是の故に惡鬼即ち其の便を得、既に便を得れば、諸國兵を興して、互に相討伐し、惡風雨を降らして、穀を登らしめず、人民飢饉して共に相ひ茹はん」と。

爾の時、十方世界の菩薩、佛に白して言さく「世尊、諸佛如來は、是の如き等の五滓の衆生の爲に、禁戒を制したまふ。唯願はくは、如來、法の久住の爲に、復禁戒——所謂身の戒・口の戒・意の戒——を制して、一切の惡物を受畜し、惡心もて鬪諍し、國王・大臣・長者に親近し、一切の俗人の物を受畜するを得ざること、餘の佛土所制の淨戒の如くにしたまはんを」と。

佛の言はく「善男子、止めよ止めよ、佛自ら時を知る。善男子、因緣未だ出でざるに、如來則ち豫め禁戒をば制せず」と。

爾の時世尊、頻婆娑羅王に告げたまはく「大王、汝の國法は、何をか大罪と名け、何をか小罪と名くるや」と。頻婆娑羅の言はく「世尊、我が國法に、四の重罪有り、一に他の命根を斷つと、二に偷んで五錢に至ると、三に他の婦女に姦すると、四に五錢の爲の故に、大衆・王の邊に於て、故に妄語を作すと、是の如き四罪は犯す者活かさず」と。

佛の言はく「我れも今亦未來の弟子の爲に、是の四重を制せん。復次に大王、王子は幾歳にして

多く重業を造つて是の經を受けされば、是の人死し已つて、惡鬼の身・惡龍の身を受けん、是の惡鬼龍は佛法を壞せんと欲し、惡雨・惡風・塵空を降注し、諸の三業を修行する比丘の爲に、重病を作し、手を以て腹を探り、其の心肝を取り、惡氣を吹吐して飲食中に置くが故に、食者をして大重病を得しめ、良醫も拱手して療治する能はず。是の如き三業を修行するの比丘、盡く命を捨し已る、是を法滅と名く。是の如き惡鬼は、復如來の有らゆる弟子——刹利・婆羅門・毘舍・首陀、大臣・長者——をして、悉く惡心を生ぜしめ、惡心既に生じて互に相殘賊せん。

「爾の時に當り、閻浮提の國土城邑には、空荒にして人無し。人民既に無くんば、誰か當に是の如き經典を流布すべき。是の故に我れ今是の經を以て、菩薩・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、及び諸國主に付囑せず、以て四王乃至地神に付す。是の如き天神は、至心に護持せん。若し國王・刹利・婆羅門・毘舍・首陀・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷有り、是の如き經を受持讀誦せんに、是の諸天神は、當に至心に護り、諸の檀越に勸めて、供養を致さしむべし。所謂衣服・飲食、臥具病藥、房舍燈燭などなり。是の諸檀越、若し惡相・諸惡病瘦有るも、諸天の力の故に、悉く消滅せしむ。是の因縁を以て法の增長を得、滅沒有ること無けん」と。

爾の時一切の諸天神等、佛に白して言はく『世尊、若し今現在に、若しは佛の滅後に、我等要す當に自らの事を捨離して是の法を守護すべし。若し佛弟子の、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷など、能く是の如き等の經を受持して、勤行精進する有らんに、復八不淨物を受畜し、——妻息、金・銀・琉璃・頗梨、田宅・奴婢・僕使を畜養すと雖も、我れ法の爲の故に、亦當に守護して、諸の惡鬼を遮り、燒近せしめず。是の經典所在の處に隨ひ、其の土地の日月五星をして、常度を越えず、怨讎・兵革を皆悉く消伏し、有らゆる衆生の、若しは男・若しは女、若しは大・若しは小など、悉く樂んで是の如き經典を受誦し、持戒清淨にして勤行精進せしむべし。世尊是の因縁を以て、一切の諸天は、樂う

【一〇】王、麗本に土に作るも、今三本に依る。

【一〇】梵に Dhanapati. 施主をいふ。越は、施の功德を以て、己が貧窮の海を越ゆるの義なりと。

是の無縁の梵行を説きたまへる時、九萬二千の衆生は是の法を成就し、恒河沙等の衆生は、如法の忍を得、恒沙の衆生は、垢穢を遠離して法眼淨を得、一千の比丘は阿羅漢果を得、無量の人天は阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。

虛空目分中 護法品第九

爾の時、一切の欲色界の天は、妙香華・幢蓋・伎樂を以て佛を供養し、佛に白して言はく『世尊、如來は先に閻浮提に於て、正法輪を轉じ、今復此の大寶坊中に於て、大法輪を轉じたまふは、菩提の爲なり』と。一切の大衆、復是の言を作す『如來の境界は不可思議なり。何を以ての故にとならば、如來此の大寶坊中に在して、法輪を轉じたまふ時、十方無量の佛世界中の、有らゆる菩薩、悉く此に來集すればなり、是の如き虛空目の法行を聽かんが爲に』と。

爾の時、文殊師利童子、金剛山童子、無勝幢童子、無勝意童子、是の如き等の童子、其の數九萬二千億なるが、佛に白して言はく『世尊、唯願はくは如來、願力を以ての故に、是の虛空目の法行をして、久しく此の娑婆世界及び十方の土に住まつて、滅没有ること無からしめたまはんを。何を以ての故にとならば、是の如き法中に、三の梵行を説きたまふ。菩薩若し是の如き三行を行すれば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり』と。

佛の言はく『善男子、南方世界の金剛光明功德如來、西方世界の智幢如來、北方世界の發光功德如來、東方世界の寶蓋光明功德如來——是の四如來は、先に已に願有り、是の願を以ての故に、是の經は當に十方に流布し、諸の菩薩をして、悉く是の如き三行を修行するを得しむべし。我れ今此の正法を以て、四大天王、功德天女、四大龍王、誠實語天、四阿須羅王、具天、自在天、八臂の天、地神女等に付囑す。何を以ての故に、善男子、或は衆生有り、其の性弊惡にして大勢力有り、

【六】梵に *Manasa*、妙徳、妙首、濡首、妙吉祥など譯す。普賢と相對して、釋迦如來の左に侍し、智慧を司る。

【七】先已、原本は以先に作るも今三本に依る。
【八】また吉祥天女ともいひ、毘沙門天の妹にして、功德成就して、大功德を衆生に與ふと稱せらる。もと娑羅河の神なりしが、佛教に入りたり。

を過ぎて、一切の眼色の因縁、乃至一切の意・法の因縁を遠離し、法界の如たるを觀じ、隨順不調にして、大慈大悲等の力を獲得し、諸法の中に於て大自在を得、而も生死に於て厭悔を生ぜず、大力勢有つて衆生を調伏し、三乘の中に於て智の方便を得、能く法雨を雨らして無礙智を得て、諸衆生の異語の法便を解す。善男子、是を聖目陀羅尼もて、無礙智を具し、梵行を修集すと名く。

『善男子、若し菩薩有りて是の梵行を修集せんに、是の如き菩薩は、常に佛を見るを得、能く佛法を具し、佛世界を淨め、性淨く衆淨く、行淨く智淨く、意淨く供養も亦淨く、能く十地を具し、次第して當に如來の法座に坐すべし。是の如きを名けて清淨の法行と爲し、是を如來と名け、是を世尊と名け、過四潮と名け、菩提道と名け、能く菩提を得て大法輪を轉ずるなり。』

「云何が名けて一切智と爲すや。智とは能く一切の平等、衆生の平等、三世の平等、不倒の平等を觀じ、是の如き等の一切法は、虚空目なりと見、法の虚空目なるを見、無行の虚空目なるを見、性の虚空目なるを見、如は空にして虚空目なるを見、如は、^{一五}内空にして虚空目なるを見、如は外空にして虚空目なるを見、如は内外空にして虚空目なるを見、如は、^{一六}大空にして虚空目なるを見、如は第一義空にして虚空目なるを見、如は有爲空にして虚空目なるを見、如は無爲空にして虚空目なるを見、如は畢竟空にして虚空目なるを見、如は無始空にして虚空目なるを見、如は性空にして虚空目なるを見、如は散空にして虚空目なるを見、如は自性空にして虚空目なるを見、如は一切法空にして虚空目なるを見、如は無所覺空にして虚空目なるを見、如は無法空にして虚空目なるを見、如は無性空にして虚空目なるを見、如は無法有法空にして虚空目なるを見、如は實性空にして虚空目なるを見、如は無相無願にして虚空目なるを見、如は一切法無邊無處にして虚空目なるを見、如は大慈大悲にして虚空目なるを見、一切の知見は虚空目なるを見て、一切の智を見る。是の如く見已つて、正法輪を轉ずる、是を衆生と共にらざる法界と名け、是を一切智と名け、佛の境界と名くるなり」と。

【一三】 過四潮、四潮は四流なるべし。四潮を過ぐるものは、四流を超えたるもの、即ち佛の謂。
【一四】 麗本、智の上に若の字を加ふ。今三本に依つて略す。
【一五】 内空以下の空の説は、般若の所謂十八空と大差なし。智度論二〇參照。

つて、亦復疑心を生ずべければなり。是の義を以ての故に、應に宣說せざるべし」と。

爾の時世尊、即ち三昧に入りたまふ、其の三昧をば虛空鐘と名く。入り已つて南門より大光明を出したまふに、其の明は種種に十方の諸佛世界を遍照し、日月を蔽ふて復現せざらしむ。其の光明中に、大聲を出して言はく『娑婆世界の釋迦牟尼は、諸衆生の爲に、梵行を宣說して諸の煩惱を壊し、聲聞乘・辟支佛乘・無縁の梵行を説きたまふ。無量の衆生及び諸菩薩は、次第に坐して正法を聽受す。亦清淨菩提の行を説きたまふ、無量の衆生を利益せんと欲したまふが爲の故に。大集を作して種種の行を説き、無量の衆生をして一生及び後生を獲得せしめたまふ』と。

十方の衆生は是の語を聞き已り、一切悉く娑婆世界に集まる。或は菩薩有り、眞金の身を現じて金沙を雨らし、或は銀身を現じて銀沙を雨らし、或は琉璃身を現じて琉璃の沙を雨らし、或は頗梨身を現じて頗梨沙を雨らし、或は沈水身を現じて沈水の沙を雨らし、或は栴檀の身を現じて栴檀の沙を雨らし、或は多摩羅跋身を現じて多摩羅跋の沙を雨らし、佛を供養し、供養し畢つて頭面もて敬禮し、却いて一面に坐したり。

爾の時世尊、虚空聲童子に告げたまはく『善男子、今日十方の諸大菩薩——其の中には或は法忍を得たる者、無生忍・一生・後生を得たる有り——悉く我が爲に證をなす。是の如きの菩薩は、慈悲喜捨の心を修集し、了了に諸法の性に通達し、亦能く身相・業相を遠離し、其の心、有爲・無爲に著せず、亦眼乃至意、色乃至法に貪著せず、至心に無縁の梵行を修集し、諸の覺觀無く、憍慢を生ぜず、貪著する所無くして眞實の性を知り、一切の法皆悉く平等なるを觀じ——所謂三世・三界・三戒——亦復大慈大悲大喜大捨を増長するを得たり。一切の衆生は、三界・陰入界等を遠離し、一切の字聚・名聚・句聚・有爲の法を離る。是の觀を作さん時、即ち大慈・大悲・大喜・大捨を具足するを得、同空三昧・梵行・六波羅蜜を修集し、諸佛に護念せられ、善方便を具して第三忍に住し、聲聞辟支佛道

已つて、乃至一人に於て惡を生ぜず。設ことひ因緣により惡心を生ずる者有らんに、應に是の念を作すべし、「若し我れ彼に於て惡心を生ずれば、云何ぞ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べき。菩薩摩訶薩は、無量純善の功徳を成就し、若し一人に於て、願と惡との心を生ずるも、尙ほ阿耨多羅三藐三菩提を得る能はず。況んや我れ未だ諸の善功徳を成ぜざるをや」と。是の因緣を以て、衆生の慈及び法縁の慈を修す。悲・喜・捨の心も亦復是の如くなり。善男子、若し緣覺乘を學ばんと欲する者有らんに、應に是の如く慈悲喜捨を修すべし」と。

是の法を説きたまへる時、六萬億の衆生は、初地いちじちに住するを得、或は二地にち・三地さんち・四地しち・五地ごちを得、或は衆生有つて無生忍むじゆじんを得、或は辟支佛道及び聲聞道しやうもんどうを獲得する有り、無量の衆生は阿耨多羅三藐三菩提心ぼだいしんを發したり。

虛空目分中 聖無礙智品第八

爾の時、衆中に一童子有り、虛空髻こくうしんと名く。佛に白して言はく、「世尊、云何が菩薩は無上菩提の道を莊嚴しやうげんして、一切智目いちぢもく方便、無緣梵行の一切法目方便、無緣梵行の一切陰入界方便、解脫方便、三昧方便、陀羅尼方便、得忍法便をば修するや。世尊、云何が菩薩摩訶薩は、一切智目の門を修し、虛空こくうに同じき慧もて、彼岸に度し、無緣の梵行もて、四流を越度こし、四魔の繫すをば斷するや」と。佛の言はく「善い哉・善い哉、善男子、汝今能く四無量の海に入り、衆生を生死の河に度せんと欲す。此の故に今是の如き問を發す。復佛の大智海を斷ぜざらんと欲す。善男子、十方佛土に、若し菩薩有り、同じく汝と共に三昧智慧を行ぜんに、我の法を説かん時、是の如き等の輩わいは、悉く明證みんじやうを爲さん。若し是の如き菩薩の證する無くんば、我れ則ち無緣の梵行を説かざるなり。何を以ての故に。我れ若し説かんには、多く是の中に於て疑心を生じ、若しは未だ無緣の梵行を得ざるもの有

【三】初地、十地の第一なり。二地以下亦是に準ず。十地に就ては、卷、第二十三、註の二を見よ。

忍を得たり。

爾の時世尊、明星菩薩に言はく「善男子、云何が衆生を縁する喜を修集すとならば、善男子、若し菩薩有つて慈悲を修せず、衆生の有らゆる樂相を念ぜず、乃至三趣・三界の有らゆる諸苦を觀ぜざるも、而も亦五陰の出滅を觀じ、是の如く觀じ已つて、喜心を生ず。但だ樂んで法を觀じ、觀じ已つて喜を生ず。是の如き喜心の願、衆生に及ぶを願ふ、是を名けて喜とは爲す」と。

「世尊、云何が捨を修するや」と。「善男子、若し菩薩有り、慈悲及び喜心を修せざるも、念を捨し、父母乃至聲聞・緣覺・菩薩諸佛を捨することを修し、是の捨を修する時、一切の法を愛・瞋するの心を遠離せん。是の人、空・無相・願を修集し、現に修集し已つて、久しからざるに、定んで當に涅槃に入るを得べし。若し人は是の如き等の四無量の心を修集せば、則ち十方の諸佛・菩薩・天・龍・夜叉・刹利・婆羅門・毘舍・首陀・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の爲に供養せられ、國土に若しは四部衆の、是の如き四無量の心を修集する有るに隨ひ、其の土には則ち一切衰禍の相を遠離し、其の中の衆生、樂うて惡法遠離し善法を受持せん。善男子、四無量の心は是の如き無量の福德を具足す」と。

虛空目分中 辟支佛乘品第七

無勝童子、復佛に白して言はく「世尊、緣覺乘を修する比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、善男子、善女人は、云何が慈悲喜捨を修集する」と。佛の言はく「善男子、若し辟支佛乘を修する比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、善男子、善女人有らんに、衆生の樂を觀じ、衆生の樂を解し、法縁の慈を念ずるも、終に衆生を縁するの慈を憶念せず。自心中所受の樂事の如く、亦衆生の同じく共に之を得んことを願ひ、法の平等を觀じ、樂の平等を觀じ、心の平等を觀じ、如の平等を觀じ、是の如く觀じ

即ち聲聞・緣覺と共にらざる、衆生縁の悲を得、亦能く疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

『善男子、復衆生の、三惡道の苦の衆生を觀じ已りて、悲心を修集する有り、復三界の所有諸の苦の衆生を觀察して、悲心を修する有り、復五陰の衆生を觀察して、悲心を修する有り。入と界とも亦爾り。善男子、是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩にして、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲すれば、當に慈悲を修すべし、何を以ての故にとならば、夫れ慈悲は即ち是れ一切善法の種子なればなり。若し衆生有つて、色界の身を得んに、亦是れ慈悲を修集する因縁なり。若しは、無色の身、若しは聲聞道、若しは緣覺道、若しは諸菩薩の、莊嚴堅固にして六波羅蜜を行じ、衆生を調伏して無生忍を得、阿耨多羅三藐三菩提を成ずる、皆慈悲種子の因縁に因ればなり』と。

是の慈悲の因縁の法を説ける時、明星菩薩は、無生法忍を得、——是の忍は緣覺・聲聞と共にらず——八萬四千の衆生は、如法忍を得、五萬五千那由他の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、十萬八千の衆生は不退心を得、二萬の衆生は慈悲を成就して、五千の比丘は阿羅漢果を得、五百の比丘尼は一切の漏を盡くし、十萬億の衆生は、大邪見を破して正見の心を得たりき。

爾の時世尊、無勝童子に告げたまはく『善男子、過去に佛有り、發功德意と名け、亦是の如き大慈大悲を説きたり』と。無勝童子の言はく『世尊、言ふ所の如とは、云何が如と名くる』と。佛の言はく『善男子、身相を遠離する、之を名けて如と爲す』と。無勝童子の言はく『言ふ所の身とは、即ち是れ實性、即ち是れ寂靜、即ち是れ法界、即ち是れ無漏、即ち是れ無盡なり』と。佛の言はく『如の身とは即ち是れ一切衆生の身にして、即ち是れ過去未來の邊際、即ち是れ寂靜なり』と。無勝童子の言はく『世尊、若し一切の佛にして如ならば、即ち是れ身あるや』と。佛の言はく『善哉善哉、善男子、如は是れ法界、増減有ること無し、三世に平等にして、不生不出不減なること、猶し虚空の如し。如の身も亦是の如し』と。是の法を説きたまへる時、三萬の衆生は如法の

【二】無色界の身をいふ。

阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲して、云何ぞ是の如くに忍辱せざる——と」。

「菩薩摩訶薩の淨意を修するは、即ち是れ忍辱なり。忍辱に即ち是れ瓔珞・精進・道・性器の四財寶なり。菩薩は是の如き忍辱を修集して、能く身心を淨め、能く淨く莊嚴し、堅固に莊嚴し、大智慧を得て、聲聞・辟支佛と共にならず、諸の衆生に於て、最も殊勝なりと爲す。一切の四魔も其の便を得ず、邪も動かす能はず、煩惱折減し、一切の怨讎も惡を爲す能はず、言辭の所説は窮盡すべからず。其の智甚深にして、猶し大海の如く、精進堅牢にして須彌山の如く、諸の衆生に等しきこと、海の一味なるが如く、能く大に利益すること、猶し大地の如く、衆の垢汚を淨むること、猶し清水の如く、能く光明を作すこと、猶し朗日の如く、衆に無礙なること、猶し猛風の如く、世法の汚さざること、猶し蓮華の如く、衆生を下視すること、金翅鳥の如く、衆生樂見すること、夏日の雲の如く、衆生樂受すること、夏時の雨の如く、見て餘の求むるもの無きこと、猶し病めるものの醫に遇ふがごとく、諸の貧窮を壞すること、如意珠の如く、衆に禪定を施すこと、猶し梵天の如く、生死に無礙なること、猶し虚空の如く、平と不平とを示すこと、猶し明燈の如く、入天の恭敬すること、猶し帝釋の如くなり。

「若し菩薩有り、瞋恚の心を起さば、一切の怨賊は悉く其の便を得、一切の善根財寶を喪失し、一切の衆魔も其の過を得し、諸の煩惱の爲に汚染せられ、大鬧處に入つて一切の善根を失し、諸聖人の爲に呵責せらる。若し菩薩有り、瞋恚の心乃至一念を起すも、則ち爲に一切の善法を喪失す。設ひ我れ悉く一切衆生の無量億數の打罵毀辱を受くるも、乃至應に一念の瞋を起すべからず。何を以ての故に、是の如き衆生は慈悲を學ばざればなり。若し彼の衆生にして、心に瞋無くして打せんに、我れ當に云何が慈悲を修集すべき。是の義を以ての故に、衆生の瞋る時、我れ應に喜を生ずべし、何を以ての故に、即ち是れ我の悲の因縁の故なり。若し善男子・善女人有り、能く是の觀を作さば、

し、我れ當に云何ぞ憐愍を生ぜざるべき。復所愛との別離有り、所謂盛年・財寶・康強・壽命・父母・妻子・親戚・眷屬、上妙の六塵などなり。衆生既に是の如き等の苦を受く、我當に云何ぞ憐愍を生ぜざるべきと。或は衆生有り、三世の中に於て、上の六塵を求むるも、得る能はず、是の因縁を以て、具に衆の苦をば受く。若し我れ此の惡類の衆生に於て憐愍を生ぜざらんには、我れ當に云何ぞ阿耨多羅三藐三菩提を得べき。一切の衆生は五陰の擔を受け、我も亦是の如くなり。若し我れ大悲の心を修せずんば、云何ぞ是の如き重擔を捨するを得ん。一切の聖人は、已に五陰の重擔を遠離するを得たり。若し三種の淨戒を修行せず、善思惟をなさず、其の心放逸にして正道を行ぜず、解脱するを得ざらんには、是の如きの人、百種の苦を受けん。衆生既に是の如き百苦を受く。我れ當に云何ぞ悲心を修せざるべきと。

『若し衆生有り、一日夜に於て、能く是の如く觀すれば、是の人、心猶し虚空の如くなるを得ん、是の人、能く一切の衆生に於て大慈を修集せん、是の人能く身心の寂靜を得ん、是の人、正眞の法界及び法性より遠からじ。是の如き方便もて、能く聲聞・緣覺は衆生縁の悲を得ん。』

『若し菩薩有り、初めて道を修する時、是の思惟を作す、「設ひ我をして恒河沙等の須彌の如き身有らしむるも、當に是の身を以て、一人の爲に、無量世に大劇苦を受け、彼の一人をして、樂を受くるを得しめば、我れ終に悔ひず、亦菩提心を退轉せじ」と。復是の念を作す「假令一切の有らゆる衆生、各各椎の、須彌山の如くなるを執り、來つて我が身を打つて無量歳を経んも、我れ當に忍受して、惡心乃至一念をも生ぜざるべし」と。復是の念を作す「是の人受くる所、百種の苦あらば、一切の衆生も亦是の苦を受けん。而も阿耨多羅三藐三菩提を念することを知らず。我れ今是の阿耨多羅三藐三菩提を學びて、云何ぞ刀劍火石を受けざること、亦復是の如くならん。若し我れ當に、一切の衆生に於て、惡心を生ぜんに、諸佛・賢聖は當に見て呵責し、是の語を作すべし——是の人、

【三】色・聲・香・味・觸・法の六境なり。

伽那と名く、是の時形色胡桃の殻の如し。住まること「第二」八の七日にして、轉ずるを「閉戸」と名く、形色猶ほ頻婆羅果の如し。是の時身の邊に五の胞の出づる有り、謂はく頭と手脚となり。「第一」十二の七日に、始めて腸の相有り、「第二」二十の七日に、男女の根別れ、「第二十一」の七日に始めて骨節を生じ、乃至第三十六の七日中に、其の身に血肉毛根を具足し、「第三十八」の七日に身肢を具足し、四日四夜のあひだ、腸中臭穢の處に住するなり。是の人是の如し、我れ云何ぞ憐愍を生ぜざらんやと。

「爾の時、還本生の事を憶ひ、憶ひ已つて愁苦し、是の念言を作す「若し我れ胎を出でんに、當に善法を修すべし、願はくは後更に、是の如き處に生るる莫けん、不放逸を修して受生を遠離せん」と。初めて母胎を出づるに「爾の時舉身に、迫進の苦を受け、入風身に觸れて、亦復苦を受く。身の初めて地に至るや、水を以て摩洗し、復大苦を受くること、猶ほ地獄の如し。爾の時還宿命の事を失憶す。生れ已れば復老病死の苦有り、隨逐して捨せず、復風病白水・黃水・和合等の病有り、是の如き四病の數、各百一あつて、常に之に隨逐し、髮白く面皺より、智を失して慚愧し、髮毛稀疎となり、諸行久しきが故に、諸根衰熟し、破れ易く壞れ易く、爛朽危脆にして、唯二味を食る、所謂鹹と酢とは、能く安樂の身根を壞して「逼惱す。是の大苦の河、能く衆生三世の壯色を破し、忘ること嬰兒の如く、狂すること鬼の著せるが如し。衆生は是の如き惡事を具足す、我れ當に云何ぞ憐愍を生ぜざるべき。」

「爾の時、復死の爲に侵逼せられ、智慧・壽命・諸有を失ひ、諸陰を捨棄し、身壞し命壞して四大離散すること、三世衆生の壽命の怨たり。一切の衆生は死の法を成就す、我れ當に云何ぞ憐愍を生ぜざるべき。」

「爾の時、復有ら内る不愛の物、來つて親近す、所謂寒熱・飢渴・惡人・惡獸などなり。衆生是の如

【六】梵に Chinna 肢肉、肉斷等と譯す。俱舍論九にては之を、五位の中第四位に置き。

次の閉戸を第三位とす。

【七】梵に Yoni 血肉と譯す。

＊俱舍論卷九によれば、是を鉢置奢佉 Prastakani とし、五七日の位なりとす。

【八】通、麗本并通に作る、今三本に依る。

【九】忘、麗本妄に作る、今三本に従ふ。

卷の第二十四

虚空目分第十之三 中 聖目品第六

爾の時明星菩薩、佛に白して言はく「世尊、聲聞しやうもんの人は聲聞乘しやうもんじやうを行じ、辟支佛びやくしふつの人は辟支佛乘びやくしふつじやうを行す。是の如き二人、云何が悲を修し、何の法を思惟しゆいし、何の煩惱ぼんごうを離るるや」と。佛の言はく「善男子、若し善男子善女人有り、聲聞乘・辟支佛乘を行ぜんに、衆生の有らゆる樂相らくじやうを觀ぜず、怨親おんしん・父母等の相あひまを作さず、衆生を憐愍れんみんして悲心ひしんを修起しゆきし、乃至十方にも亦復是の如くにして、若し我れ惡衆生に於て悲を修集する能はずんば、當に是の人の八種の苦相——生苦乃至死苦——を觀すべし。是の人は是の如き八苦を具足するに、我れ當に云何ぞ、是の人の所に於て悲心を生ぜざるべき。是の人復三種の大苦有り、亦復未だ三惡道を脱するを得ず、我れ當に云何ぞ憐愍を生ぜざるべき。

「云何が名けて生苦を觀ずるとは爲すとならば、業の因縁により父母和合して、初めて意識を受く、歌羅羅かららの時、其の身猶し葶藶ていれき子許こかりの如くにして、是の時未だ入出の氣息有らず、亦苦と樂と不苦不樂とを覺知せず、先の色相を離れて、未だ後の色しきを具せず、無力無欲にして精進有ること無く、憍慢けうまん・上色・上性・上自在相有ること無く、五欲の相無く、諸根具せず。是の如き衆生に、我れ當に云何ぞ憐愍を生ぜざらん。是の如き衆生の過去の愛と取しゆとを名けて無明むみやうと爲し、過去業の有る、之を名けて行ぎやうと爲し、初めて胎に入るの心、之を名けて識しきと爲す、歌羅羅の中の、初色・四陰を名けて名色みやうしきと爲す。是の時未だ十二有支じふにいうしを具せず。生の因縁を以ての故に、十二因縁有りと説くべし。衆生是の如くんば、何ぞ智有る者、憐愍を生ぜざらん。歌羅羅の時、住すること六七日なり、六七日に轉ずるを額浮陀がくぶだと名け、是の時形色猶ほ小棗の如し。住すること「第七の七日にして轉ずるを

【一】 惟、慶本作に作る、今三本に依る。

【二】 八種は、生・老・病・死の四と變別離・求不得・怨憎會・五陰盛の四との苦なり。

【三】 三種は苦苦（寒熱等の苦緣より生ずる苦）、壞苦（樂境の壞する時に生ずる苦）、行苦（一切有爲法の、無常の爲に遷動せらるる苦）となり。

【四】 芥子の謂。

【五】 梵に Arbuda 皰と譯す。胎内五位の第二。

是れ一切法無罣礙の門なり、是の故に至處は住所有ること無し」と。

明星菩薩の言はく『善男子、是の如きは即ち是れ四無礙智淨目陀羅尼なり。若し菩薩有り、是の如き陀羅尼を修集せば、一切の煩惱は則ち爲に爛敗して、法縁の慈に入り、一切法中に疑心有ること無けん』と。

是の法を説ける時、十方世界の無量の衆生は、法縁の慈を得、無量の衆生は四無礙智淨目陀羅尼に近くを得たり。

爾の時世尊、是の二人を讚へて『善哉善哉、善男子、能く如法に問ひ、能く如法に答へたり。是の陀羅尼因縁の力の故に、四天王等は、我が滅後に於て能く法を守護せん』と。

十二獸を見ることを得ん」と。

爾の時、淨德憍婆塞、明星菩薩に語つて言はく「善男子、汝能く衆生を教化調伏す。云何が調伏する。身を以てするや、口なりや、意なりや」と。「善男子、我れ身口を以て爲すに非ず、唯心業を以てす」と。「善男子、若し是れ心業ならば、過去と爲すや未來なりや現在なりや」と。「善男子、亦未來に非ずして、唯是れ現在なり。現在心を制して、惡を作さしめざるなり」と。「善男子、汝猶ほ現在の心をして、解脱を獲得せしむる能はずして、云何ぞ能く衆生を調伏する」と。明星答へて言はく「我れ今四無礙智、淨目持力を受持するが故に、能く一切衆生を調伏するなり」と。淨德の言はく「四無礙智淨目持は、亦復衆生を調伏する能はず、何を以ての故に、覺觀無きが故に。云何ぞ能く衆生を調すとは言ふ」と。

「善男子、我れ今汝に問ひ、意に隨つて答ふるを見ん。善男子、攝入・繫縛・解脱・清淨道及び寂靜は、復平等なりと雖も、亦不平等なり、是の如き平等及び不平等は、何の因縁より生じ、何の因縁より出で、何の因縁によつて增長する、汝寧ろ知るや不や」と。淨德答へて言はく「善男子、是の如き等の事、我と我所とに因つて出生增長す」と。明星菩薩の言はく「善男子、是の我・我所は何の因縁によつて生ずるや」と。「善男子、是の我と我所とは風の因縁より生ず」と。明星菩薩の言はく「風は何處にか住する」と。「善男子、風は虚空に住す」と。又問ふらく「虚空は何所に住すと爲すや」答へて言はく「虚空は至處に住す」と。又問ふらく「至處は復何所に住するや」と。答へて言はく「至處は何處に住するとは、宣説すべからず。何を以ての故にとならば、一切の諸處所を遠離するが故に、一切處所の攝せざる所なるが故に、數に非ず稱に非ず量るべからざるが故に、覺に非ず觀に非ず、有に非ず無に非ず、行に非ず生に非ず、出に非ず滅に非ず、增長有るに非ず、高に非ず念に非ず、作に非ず受に非ず、闇に非ず明に非ず、増に非ず減に非ず、壯に非ず老に非ず。眞實の性は

【四】 麗本は汝寧ろ不知に作るも、三本は汝寧ろ知不乎に作る。今後者に從ふ。

十二月を盡し、十二歳に至る、亦復是の如し。常に諸衆生を調伏せん爲の故なり。善男子、是の故に此の土には、多く功德有り、乃至畜生も亦能く教化して、無上菩提の道を演説す。是の故に他方の諸菩薩等、常に應に此の佛の世界を恭敬すべきなり」と。

爾の時、會中に一優婆塞の名けて淨徳と曰へる有り、佛に白して言さく「世尊、我れ今是の如き、十二獸を觀見するを得べきや不や」と。「善男子、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷有り、是の十二獸を觀見するを得んと欲し、大智・大念・大神通力を得んと欲し、一切の有らゆる典籍・四無量心を受けんと欲し、正道を行じて奢摩他を得んと欲し、寂靜を得んと欲し、善法を増さんと欲せんには、是の人當に白土を以て山を作り、縱廣七尺・高さ一尺とし、種々の香を塗り、金の薄きを之に【四二】貼り、四邊の周圍二十尺とし、所散の瞻婆華をば、當に以て銅器に盛るべく、諸の種々の【四三】非時の藥を之が四面に置き、清淨に戒を持ち、日に三たび洗浴して三寶を敬信し、山を離るる三丈にして、正しく東向して立ち、是の如き呪を誦すべし。

「戰陀羅呵 修利蛇比摩 其羅説 沸已牟邏 若蛇牟邏 阿呵希 婆呵囉希 若蛇呵希 薩婆復

多呵 梨蛇婆呵休 摩莎車婆奈梨 迦駭浮 邏奢浮 住邏蛇牟 吠迦那 摩希叉婆 迦婆摩訶

阿叉比婆邏 多波比莎 沙持因持 利蛇婢莎 阿闍牟他婆 婆盧婆 槃陀哆 遮羅叉婆希

呵迦比牟 哆比勒搜 散遮勒搜 嚩婆浮 婆邏婆叉搜 沸已遮 哆莎賴莎 陀叉邏莎 波利波

遮 修羅修 搜婆莎彌 希邏莎 婆邏牟莎邏莎 牟莎邏私 邏婆邏婆 頻婆只邏莎 嚩婆邏

婆 陀摩盧遮那邏婆 富囊拏蘭呵邏婆 首陀盧遮那邏婆 嚩摩盧邏婆 比摩盧遮那吠伽 薩頭

摩邏婆 阿利耶盧遮那稱 比摩牟 婆羅呵芒嚩呵邏私菴菴 阿由比目猛 牟尼邏提致莎 莎門

「住すること十五日にして、當に山上に於て初て月の像を見るべし。爾の時則ち知れ、十二獸を見、見已つて所願意に隨つて即ち得るを。善男子、若し能く是の如く苦行を修行せんに、即ち眼に是の

【四二】 貼、臘本、麻に作り、宋本帖に作る。今元明に依る。
【四三】 非時は時に對す。比丘は飲食に時あり、日中以後は食するを得ず、故に日中より、後夜の後分に至る迄を非時とす。非時の食は禁ぜられたるも、非時の藥は場合に依つて許されたり。

女の、名けて眼見と曰ふ有り、各五百の眷屬有つて圍遶す。是の二女人は常に共に是の三の鳥獸を供養す。

「善男子、閻浮提の外、北方海中に一の銀山有り、善提月と名け、高さ二十山旬なり。中に一の窟有り、名けて金剛と曰ひ、縱廣高下、亦復是の如くにして、亦是れ菩薩の、昔所住の處たり。中に一猪あつて聲聞の慈を修す。復一の窟有り、香功德と名け、縱廣高下、亦復是の如くにして、亦是れ菩薩の、昔所住の處たり。中に一鼠有つて聲聞の慈を修す。復一の窟有り、高功德と名け、縱廣高下、亦復是の如く、亦是れ菩薩の、昔所住の處たり、中に一牛有つて聲聞の慈を修す。山に風神有り、名けて動風と曰ひ、羅刹女有り、名けて天護と曰ふ。各五百の眷屬有りて圍遶す。是の二の女人、常に共に是の如き三獸を供養す。

「善男子、閻浮提の外、東方の海中に、一金山有り、功德相と名け、高さ二十山旬なり。中に一の窟有り、名けて明星と曰ひ、縱廣高下、亦復是の如くなり、亦是れ菩薩の、昔所住の處にして、一師子有り、聲聞の慈を修す。復一の窟有り、名けて淨道と曰ひ、縱廣高下、亦復是の如くにして、亦是れ菩薩の、昔所住の處たり。中に一の鬼有つて聲聞の慈を修す。復一の窟有り、名けて喜樂と曰ひ、縱廣高下、亦復是の如く、亦是れ菩薩の、昔所住の處にして、中に一の龍有り、聲聞の慈を修す。山に水神有り、名けて水天と曰ひ、羅刹女有り、修慚愧と名け、各五百の眷屬有つて圍遶し、是の二の女人、常に共に是の如き三獸を供養す。

「是の十二獸は、晝夜常に閻浮提の内を行き、天人に恭敬せられ、功德成就し已り、諸佛の所に於て深重の願を發すこと一日一夜、常に一獸をして遊行教化せしめ、餘の十一獸は安住して慈をば修し、周つて復始む。七月一日鼠初めて遊行し、聲聞乘を以て、一切鼠身の衆生を教化し、惡業を離れ、勤めて善事をば修せしめ、是の如く次第して十三日に至れば、鼠復還行く。是の如くして乃至

の諸佛を欺誑するなり。未來世にも亦、我をして阿耨多羅三藐三菩提を得しむる莫けん」と。

爾の時、無勝意童子、佛に白して言はく「世尊、他方佛土の所有人民は、常に是の言を作す「娑婆世界は雜穢不淨なり」と。然も我れ今常に清淨なるを見る」と。佛の言はく「是の如く是の如し。

善男子、汝の所説の如し。又此の世界の諸菩薩等は、或は天の像を作して衆生を調伏し、或は龍の像を作し、或は鬼の像、或は阿修羅の像、或は迦樓羅の像、或は緊那羅の像、或は摩睺羅伽の像、或は夜叉の像、或は拘拏陀の像、毘舍闍の像、護衛陀の像、人の像、畜生の像、鳥獸の像などを作して、閻浮提に遊び、是の如き種種の衆生を教化す。善男子、若し人天の爲に衆生を調伏する、是を難と爲さず、若し畜生の爲に衆生を調伏する、是を難とは難す。

「善男子、閻浮提の外、南方の海中に琉璃の山あり、之を名けて潮と爲す。高さ二十由旬あり、種々の寶を具す。其の山に窟有り、種々色と名く。是れ昔菩薩所住の處たり、縱廣一由旬、高さ六由旬なり。一毒蛇有り、中に在つて住し、聲聞の慈を修す。復一の窟有り、名けて無死と曰ひ、縱廣高下亦復是の如くにして、亦是れ菩薩、昔所住の處たり。中に一馬有りて聲聞の慈を修す。復一の窟有り、名けて善住と曰ひ、縱廣高下、亦復是の如く、亦是れ菩薩の、昔所住の處にして、中に一羊有り、聲聞の慈を修す。其の山の樹神を名けて無勝と曰ひ、羅刹女有り、名けて善行と曰ひ、各五百の眷屬有つて圍遶す。是の二女人は、常に共に是の如き三獸を供養す。

「善男子、閻浮提の外、西方海中に、頗梨の山有りて、高さ二十由旬、其の山に窟有り、名けて上色と曰ひ、縱廣高下、亦復是の如くなり。亦是れ菩薩の昔所住の處たり。一獼猴有りて聲聞の慈を修す。復一の窟有り、名けて誓願と曰ひ、縱廣高下、亦復是の如くなり。亦是れ菩薩の、昔所住の處たり。中に一鷄有つて聲聞の慈を修す。復一の窟有り、名けて法床と曰ひ、縱廣高下、亦復是の如くにして、亦是れ菩薩の、昔所住の處たり。中に一犬有りて聲聞の慈を修す。中に火神有り、羅刹

すに正道を以てすべし。若し衆生有り、世間の事及び出世の事に於て懈怠を生ぜんに、我を窺見し已らば、懈怠を除去して事業を修集すべし。若し衆生有り、正路を迷失せんに、我を見るを得ん時、則ち還道をも見ん。若し衆生有り、身重病に遇はんに、我を見るを得なば、苦痛休息して身に安眠を得、大快樂を受けん。若し老人有り、身には衆苦を受け、心に忘誤多からんに、我を見るを得なば、還念心を得ん。然も我れ出でん時、能く衆生をして、心を繋げて善を念せしめん。若し衆生有り、命將に盡きんとし、最後に一たび念ぜんに、我れ當に爲に大乘の經典を説くべし。彼既に聞き已り、面に佛像を見、身を捨てて淨佛世界に生ずるを得ん。若し辟支佛を求めんと欲する者有らんに、我れ當に爲に辟支佛乘を説くべく、若し聲聞乘を求めんと欲する者有らんに、我れ亦當に、爲に聲聞乘を説くべし。若し衆生有り、三惡の業有らんに、我が説法を聞かば、惡業即ち消滅せん。世尊、我れ先づ閻浮提國に行き、然る後次で瞿陀尼に行き、瞿陀尼の後に、次で鬱單曰に「行き」、鬱單曰の後に、次で弗婆提に「行かん」と。是の如き等の本願力を以ての故に、常に六波羅蜜を修行するを得、乃至は阿耨多羅三藐三菩提を成ずる得たるなり」と。

爾の時明星天子、佛に白して言はく「世尊、我れ今、一切の衆生を利益せんと欲するが爲に、此の陀羅尼を説く、

『盧遮羅 盧遮羅 盧遮那 娑羅叉婆 娑羅叉婆 娑羅叉婆 阿婆呵呵 阿婆特茶 阿婆闍婆

阿婆叉那 阿叉叉叉 富羅婆邏 阿婆叉叉 闍婆闍婆 摩呵迦波 阿婆阿婆 摩呵婆摩 頻

豆 莎闍羯波 阿鞞 阿鞞 呵呵尼摩 沫邏莎律闍 迦留那闍邏 莎呵

『世尊、若しは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、若しは男、若しは女、若しは大若しは小有り、若し至心に我が事を念する有らば、是の人則ち諸業——神通・施・戒・忍辱・精進・禪定・智慧、解脫・佛士・四無礙智——を淨むるを得ん。是の如き諸人にして是の如き事を成就するを得ずんば、我れ則ち十方

【三八】 閻浮が鞞波 (Tambudra) 名の略、また瞻部洲ともいふ。須彌山の南方に在る大洲にして、吾人の住する所なり。提羅波は洲と譯す。此の洲の中心に閻浮樹の林あるを以て此の名ありといふ。

【三九】 梵に Golaṅkya 牛貨と譯す。須彌の西方に在る大洲の名、此の洲にては、牛を以て通貨に代ふるが故に此の名ありといふ。

【四〇】 具に鬱多羅究留 (Uttarakuru) また北拘盧ともいふ。須彌の北方に在る大洲の名。この鬱多羅は上、勝の義、究留は所作、この洲の人、所作の事に於て、皆我所無、餘の三洲に勝るが故にこの名あり。

【四一】 また毘提訶 (Vidhiṅka)、毘は勝の義、提訶は身の義、勝身と譯す。須彌の東方に在る大洲をいふ。以上の四を須彌の四洲といひ、また四天下ともいふ。

「善男子、菩薩若し能く是の如く慈を修せんに、捨命しんめいの時に當り、面に十方の諸佛世尊を見、手もて其の頭を摩せらる。佛手觸るゝが故に、心則ち歡喜くわんぎし、心歡喜の故に、尋で其の佛の國土わうじやうに往生するを得、亦是の如き善妙の言を聞かん、所謂「怖畏を生ずる莫かれ、怖畏を生ずる莫かれ。汝は是れ慈を修せる純善の人なり、定んで當に淨佛世界に生るるを得、無量の諸佛世尊を觀見し、三惡道を離れて必ず涅槃ねはんに入るべし。亦法緣、無緣の慈を聞き、亦四無量心を具足するを得、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ん」と。

爾の時、明星天子、是の法を聞ける時、諸の禪定ぜんぢやうに於て、出入自在なりき。無勝意童子、佛に白して言はく、「世尊、是の如き天子は、何の力を以ての故に、禪定の中に於て、速に入り速に出づる」と。

佛の言はく「善男子、是の天子は、已に無量の諸如來の所に於て、諸の善根ぜんこんを植え、無量世中に法緣の慈を修して、本願力の故に、四天處に生じ、日天の前十千由旬じふせんに在り、所住の宮殿は縱廣三萬二千由旬あり、琉璃るいの所成たり、前後左右は十由旬を滿たし、諸天男女、共に圍繞ゐらうしたり。是の人中に在るや、其の眷屬を離れて、三由旬の所に、獨り寶床に坐し、禪定に出入する一月一夜たり。此の四天下てんかに八十の天處、六十の龍處、四の阿修羅處、四の迦樓羅處、五十二の緊那羅處、四十六の摩睺羅伽處、八の拘憍荼處、三十の富單餓鬼處、三十の毘舍遮處びしゃじや有り、是の如き處に於て、悉く能く是の如き衆生を調伏したり。本願力を以ての故に。往昔に願を發すらく「此の闍浮提かぶつていの夜、五分過ぎて、餘の一分在らんとし、當に日の前十千由旬に在つて、先づ當に闍浮提の園を破壊して明相を作すべし。若し闍浮提の諸善衆生にして、生死を度り禪定を修せんと欲せば、當に是の人の爲に睡眠を除去して、共に念力を施すべし。若し我を見んと欲せんに、我當に夢に和上・師長・父母を現作すべし。若し凡夫有りて外道げだうを修集せんに、我れ當に其の人の邪心を破壊し、示

【三五】植、麗本植に作る。今三本に依る。

【三六】拘憍荼は梵に *Kumbhī-dānā*、鬘形鬼と譯す。人の精鬼を敬ふ我鬼なりとせらる。
【三七】富單、麗本單字を缺く、今三本に依つて加ふ。富單は梵に *Yakand*、臭穢と譯す。その身形臭穢なりと雖も、その福は餓鬼中に於て最勝なりといふ。

亦復是の如くなるべし。是の如く觀じ已り、菩薩は先づ一方の衆生に於て、慈心を修集す。二三四方・四維・上下にも、亦復是の如くならんと。善男子、是を菩薩は慈もて衆生を緣すとは名くるなり」と。

爾の時、會中に一天子有り、名けて明星と曰ふ。佛に白して言はく、「世尊、若し菩薩摩訶薩、初めて慈心を修するに、是の如き慈心は何等の果か有り、是れ現在すと爲すや、未來に在りと爲すや、幾何の福德を具足成就するや。世尊、是の如き菩薩は、慈心を修集して、頗し復當に三惡道に墮すべきや不や」と。

佛の言はく「善哉・善哉、善男子、汝已に昔に於て、無量の諸佛を供養・恭敬したり、是の故に今能く是の如き問を發したり。已に善子を種えて善根堅固なり、無量の世中に慈心を修集して、聲聞・辟支佛と共に共ならず。無量の衆生を利益せんと欲するが爲に、是の故に今能く是の問を作せり。善男子、諦に聽き諦に聽け。今當に汝の爲に分別・解説すべし。若し菩薩有りて、能く我が先に説く所の如く慈を修せんに、是の人則ち臥の安と寢の安とを得て惡夢を見ず、資生の須つ所に乏少する所無く、諸天は守護し、人天は樂見し、惡聲を聞かず、身に惡病あらず、常に寂靜を樂んで勤行・精進し、樂うて正法を受けて無我を知見し、常に國主・沙門・梵志・男女大小乃至は鳥獸の爲に供養せられ、善友——所謂聲聞・緣覺・諸佛菩薩——に親近し、樂うて惠施を行じて能く衆生を度し、所有の善心は三毒の爲に破壞せられず、善名と好譽とは四方に流布し、能く衆生の所有惡病を治し、能く衆生をして衆苦を遠離せしめ、能く衆生の一切繫縛を解き、能く一切の惡邪・異見を壞し、能く衆生に信心と念心と大智慧心とを與へ、心大乘に住して能く傾動する無く、他の語に隨はず、能く衆生の身・口・意の惡を壞し、能く衆生の三種の障業を滅さん。唯五逆と正法・寶聖の人を誹謗すると、招提僧物を劫るとを除く。

【三】 招提、具に招闍提會 (Oatukāśikā) 譯して四方といふ。即ち四方僧の施物を招提僧物といふ。後には招提は寺院の別名となる。

我れのみ此に至つて如來を供養す。獨り佛前に在つて正法を諮問せん。如來は獨り我れ一人の爲に説きたまはん」と。

爾の時世尊、無勝意童子に告げたまはく『善男子、慈には三種有り、一に衆生緣、二に法緣、三に無緣なり。善男子、衆生緣とは、五有を緣す。若し法行の菩薩有り、六波羅蜜と大慈大悲と菩薩の十地とを具足するを得、速に阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得、正法輪を轉じ、無量無邊の衆生を調伏して、無邊の生死の大河を度らしめんと欲し、無量の惡魔の伴黨を壞して、大涅槃に入らんと欲せんに、是の如き菩薩は、應當に四無量の心を修集すべし。』

『應に云何が修すべきとならば、若し菩薩摩訶薩にして、下方の衆生乃至上方の一切衆生の爲に、是の慈を修集せんに、諸の衆生を視ること、父の如く母の如く、師・和上の如く、佛・世尊・聲聞・緣覺の如くにし、爾の時應に是の如く思惟すべし、若し衆生有り、横に我が所に於て、諸の惡事を起さんに、菩薩は爾の時、應に是の念を作すべし、若し我れ是の惡衆生を瞋らんに、則ち十方の諸佛の見る所と爲る、是れ大に恥づべし。當に呵責せらるべし。云何ぞ是の人、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、而も自ら其の心を調伏する能はざると。譬へば人有り、跣足有ること無くして、彼の爵單白土に趣かんとするが如く、無目の者、讀書せんと欲するが如く、無手の者、執作せんと欲するが如し。慈心を遠離して、而も阿耨多羅三藐三菩提を獲得せんと欲すること、亦復是の如し。是の如き瞋心を斷つ能はずんば、尙ほ聲聞の菩提をも得る能はじ。何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。若し我れ自心を調伏する能はずんば、當に諸佛・聲聞・緣覺・天龍八部の爲に呵責せらるべし。若し我れ自心を調伏する能はざらんに、當に大罪を得、地獄の苦を受けて、現在未來の利益を得ざるべし。是の故に應當に慈心を修集すべしと。復是の念を作すべし、若し我に於て已に諸惡を作し、始めて作し、作さんと欲し、或は惡事を以て我が親に加へ、利養の事を以て我が怨を益せんに、

【三】 五有、五趣なり。

【三】 四大洲中の北方の大洲の名。下註三九並に三七―四〇參照。

【三】 天、龍等の八部衆。即ち天、龍、夜叉乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦。

是の如き等の事は、悉く皆四無量心を修したるに因るなり。是の如きは、即ち是れ四無量の果なり。是の義を以ての故に、諸善男子及び善女人は、應當に四無量心を修集すべし」と。

是の法を説ける時、二萬の衆生は隨慈忍を得、無量の衆生は、四無量心を具し、一切の大衆は咸佛を供養したり。

虛空目分中 淨目品第五

爾の時、一菩薩童子有り、無勝慧と名く、長跪合掌して、佛に白して言さく「世尊、慈無量心は何等の相有り、何等の作有り、何等の因縁、何等の果報あり、云何が具足するや」と。

佛の言はく「善哉善哉、善男子、能く是の如き甚深の義をば問へり」と。爾の時如來、即ち三昧に入りたまふ、其の三昧を、調伏衆生・無所畏懼と名く。三昧に入り已り、其の肉髻より大光明を放ちたまふ、其の光猛盛にして、種々の色有り、遍く無量無邊の世界を照し、復妙音を出し、偈を説いて言はく、

「淤泥の中に芙蓉を生じ、亦復種々の華を生ず、衆生は之を以て、佛并に及び一切の諸天神を供養す。一切の惡國にも亦復是の如く、諸の聖人・大菩薩を生じ、能く難調を調し、而も衆生を調すること、猶し衆生の華をもて供養するが如し。娑婆世界の惡土地にも、釋迦中に住して法を宣説したまふ、若し無量の利を獲得せんと欲すれば、應當に彼の娑婆界に往くべし」と。

無量世界の有らゆる衆生、是の偈を聞き已り、各々其の土の世尊を供養し、既に供養し已りて佛の神力に乗じ、悉く來つて娑婆世界に集會し、佛所に至つて頭面もて禮拜し、却いて一面に坐したり。

爾の時、此の界の大寶坊中に、無量の衆生具足彌滿したり。是の諸衆生、各是の念を作す、「獨り

【三九】佛の隆起せる頂骨をいふ。

【三〇】而、原本は不に作る、今三本に従ふ。

く、此無く彼無し。善男子、人の自ら言はんが如し、能く虚空に瓔珞莊嚴を畫かんと。是の言有り
 と雖も、眞實には能はず。一切の諸法も亦復是の如く、出無く壞無く、生無く滅無く、處所有るこ
 と無く、覺觀有ること無く、淨三解脱にして、相無く作・無願無く、爾の如く法界も、轉無く散無く、
 會無く礙無く、濁無く邊無くして、猶し虚空の如く、和合有ること無く、欲無く性無く、見無く説無
 し。法性は數無く、少無く多無く、境界有ること無く、二無く著無く、量無く色無く、聲無くして
 寂靜なり、變無く量無きこと、猶し虚空の如く、比無く勝無く、常無く斷無く、見難く知り難く、
 思惟すべきこと難し。堅固にして行無く、瞋恚有ること無く、諸の佛界を攝す。是を梵行と名け、
 四無量と名く。如來は修集して、心に厭足無く、勤行精進す。是を佛法の、大信大念、大不放逸、
 至心不忘とは名く。

「若し菩薩摩訶薩、是の如き四無量心を修集せば、即ち是の菩薩、菩提の甚深法界を修行するなり。
 是の如き菩薩は、將に近く無生法忍に入らんと欲し、六波羅蜜を行じて諸の佛法を護り、已に第三
 如法順忍に近づき、眞に佛身を見て、能く魔衆を摧き、及び邪道を壞し、生死の河を度つて大智
 海に入り、一切諸佛の境界に通達し、諸佛の功德を具足莊嚴し、諸の所有の色・種・性・財物などは、
 諸の衆生に勝れ、次第して當に如來の法座に坐し、一切の三昧總持を具足し、一切聖人の爲に輕ん
 ぜられず、諸の緣覺の爲に讚歎せられ、常に諸佛の爲に護念せられ、能く一切國土の、種々の語言
 を解し、諸法の中に於て、受者及び施者を見ず、亦説者及び聽法の者も無く、作者及び受者有るこ
 と無きこと、猶し虚空の如くなるべし」と。

淨光の言はく「善男子、是の故に我れ言ふ「汝今無量の功德を成就したらん。何を以ての故に、
 已に無量無邊の世中に於て、勤めて修集したるが故に。善男子、若し佛にして、十力・無畏・一切の
 佛法を獲得し、出家苦行して正覺を速成し、妙法輪を轉じ、大神通を示して大涅槃に入らんこと、

【三七】菩提、麗本菩薩に作る。
 今三本に依る。

【三八】性、麗本は性に作る、今
 三本に依る。

母・師長・和上・香舊・有徳を供養したらんに、是の如きの人、樂うて其の土に生ぜん。四に復衆生有り、已に過去無量世中に於て、天業を成就し、當に天の身を受くべきもの、故に天身を轉じて其の土に來生せん。五に復衆生有り、能く一切三惡道の業を壞したらんに、是の如きの人、樂うて其の土に生ぜん。六に復衆生有り、聲聞乘を具したらんに、是の如きの人、樂うて其の土に生ぜん。七に復衆生有りて緣覺乘を樂ふ、是の如きの人、其の土に來生せん。八に復衆生有り、已に過去無量の世中に於て、六波羅蜜を修したらんに、是の如きの人、樂うて其の土に生ぜん。大王、若し菩薩有りて四無量を修せんに、所住の國に隨ひ、其の土には是の如き八人を具足す。

「大王、若し菩薩有つて四無量を修せんに、所住の國に隨ひ、其の地には上地の水味・無上の法味・衆生の味を具足し、一切の衆生心に相親愛せん。是の如き衆生、是の身を捨し已り、復天上に生ぜん。乃至鳥獸も亦復是の如くならん。大王、譬へば一筐に四種の香——一に沈水、二に多伽羅、三に牛頭梅檀、四に多摩羅葉——を盛らんに、是の如き四香合して四兩有り、四姓の人有り、四種の衣を以て、之を筐中に置き、數日を経已つて、各自齋ち去るに、四香は銖兩も折れず、然も是の衣中に、各各香有るが如く、若し菩薩有つて四無量を修せんに、所住の國に隨ひ、其の土の人、各各種種の功德を成就し、而も菩薩に於て損滅する所無し」と。

爾の時頻婆娑羅王、佛に白して言はく「世尊、菩薩摩訶薩の四無量心を修すること、不可思議なり。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は自身に修集して、能く無量無邊の衆生をして、大利益を得しむればなり」と。

爾の時、會中に一菩薩有り、名けて淨光と曰ふが、無勝菩薩に告げて言はく「善男子、汝今已に無上の利益を得たり。何を以ての故に。汝は常に四無量心を修集したればなり」と。無勝菩薩の言はく「善男子、我れ今云何が大利益を得ん。是の如き法中には、作無く受無く、覺無く見無く知無く

【四】 沈水は沈香。多伽羅は具に多伽羅跋、略して伽羅と云ひ、零凌香といふ。黑沈香ともいふ。牛頭梅檀は、牛頭山より出だす梅檀なり。多摩羅は多摩羅跋の略、香草なり、薔葉香といふ。

【五】 兩はもと衡目の名なり。十二黍を一分、十二分を一銖、二十四銖を一兩とす。

【六】 銖兩は、少しの目方をいふ。轉じて僅少を意味す。

名けて二と爲す。復次に大王、若し菩薩有つて四無量を修するに、所住の國に隨ひ、其の土の人民財寶を貪らず、樂んで惠施を爲し、盜竊を呵責せん。是を名けて三と爲す。復次に大王、若し菩薩有りて四無量を修せんに、所住の國に隨ひ、其の土の人民、自足妻色し、非法を遠離し、欲心を呵責せん。是を名けて四と爲す。復次に大王、若し菩薩有りて四無量を修せんに、所住の國に隨ひ、其の土の人民、眞語・實語・無破壞語をなし、常に善語を修せん。是を名けて五と爲す。復次に大王、若し菩薩有つて四無量を修せんに、所住の國に隨ひ、其の土の人民、嫉妬・濁惡の心無けん、是を名けて六と爲す。復次に大王、若し菩薩有つて四無量を修せんに、所住の國に隨ひ、其の土の人民、正見して謬らず、邪見有ること無けん。是を名けて七と爲す。復次に大王、若し菩薩有つて四無量を修せんに、所住の國に隨ひ、其の土の人民は、一切、三寶を供養・恭敬し、惡見を遠離せん。是を名けて八と爲す。大王、若し菩薩有つて四無量を修せんに、所住の國に隨ひ、其の土の人民は、是の如き八種の功德を具足するなり。

『大王、若し菩薩有りて四無量を修せんに、所住の國に隨ひ、其の土に八怖畏の事有ること無けん。何等をか八と爲す。一に内外の軍の畏無く、二に諸惡鬼の畏無く、三に惡星宿の畏無く、四に諸惡病の畏無く、五に諸惡獸の畏無く、六に諸惡賊の畏無く、七に諸旱澇の畏無く、八に諸穀雜の畏無けん。大王、若し菩薩有つて四無量を修せんに、所住の國に隨ひ、其の土に是の如き八の畏有ること無し。』

『大王、若し菩薩有つて四無量を修せんに、所住の國に隨ひ、其の土に八大丈夫を具足せん。何等をか八と爲す。一に諸の衆生有り、已に過去無量の佛所に於て、深く善根を種ゑたらんに、是の如き人、樂うて其の土に生ぜん。二に復衆生有り、已に過去無量の世中に於て、戒と多聞とを修したらんに、是の如き人、樂うて其の土に生ぜん。三に復衆生有り、已に過去無量世中に於て、父

【三】 澇、大波なり。

於て、陰・界入の相を作す。一切の凡夫は是の顛倒に因つて、生死に輪轉し、窮り有ること無きなり。『若し法行の比丘、是の息冷なれば則ち舉身冷なりと觀じ、是の息煖なれば則ち舉身煖なりと觀ぜん。是の身は爾の時、意に隨ひ風に隨ふ。若し冷なりと觀する時、禪定を得ず定聚は入らずば、是の人則ち冷地獄中に墮せん。若し煖なりと觀する時、禪定を得ず、定聚に入らずば、是の人則ち熱地獄中に墮せん。若し佛弟子にして法行を修集せんに、出入の息の冷煖等を觀察せん時、則ち正道を得。法行の比丘、如實に無明乃至生老病死を觀察して、心顛倒せざる、是を淨目陀羅尼と名くるなり。善男子、汝若し能く是の陀羅尼を受ければ、即ち是れ眞實に入出の息を觀するなり』と。寶幢菩薩、佛に白して言はく『世尊、諸佛の境界は不可思議なり、是れ聲聞・緣覺の及ぶ所に非ず』と。爾の時四天王、佛に白して言はく『世尊、是の經典流布の處に隨ひ、我等要す當に隨侍して守護し、所有惡事をして悉く消滅せしむべし』と。

虛空目分中 四無量心品 第四

爾の時頻婆娑羅王、佛に白して言はく『世尊、諸の聲聞・辟支佛等、法行を修行するに因つて、閻浮提に、疾疫・飢饉・惡事有ること無からしむ。世尊、菩薩摩訶薩の四無量心を修するをば、若し四姓有つて供養・恭敬せんに、幾所の福をか得る』と。

佛大王に告げたまはく『若し菩薩有りて四無量を修せんに、所住の國に隨つて八の上事を見せん。一に其の土の人民、父母を供養し慚愧を増長し、沙門・婆羅門・耆舊・有徳を恭敬し、禁戒を受持せん。大王、諸の國土に、諸菩薩有りて四無量を修せんに、其の土の人民、則ち能く是の如き初事を成就せん。復次に大王、若し菩薩有つて四無量を修せんに、所住の國に隨ひ、其の土の人民、慈心を修集して殺害を遠離し、其の心調柔にして、濁心・瞋恚の心有ることなく、平等無二ならん。是を

【三】また四等、四梵行などいふ。慈・悲・喜・捨の四をいふ。

け、是の中の心意、是を名けて識と爲す。

「善男子、若し辟支佛果を得んと欲する有らんに、當に是の如き十二因縁を觀じ、後三受の因縁——五陰・十二入・十八界——を觀すべし。云何が觀を爲すとならば、念心に隨つて息の出と息の入とを觀じ、内身・皮膚・肌肉・筋骨・髓腦をば、空中の雲の如しと觀じ、是の身中の風も亦復是の如く、風有つて能く上り、風有つて能く下り、風有つて能く滿たし、風有つて能く焦し、能く增長する有り、是の故に息の出入を名けて身行と爲す。出入の息は覺觀より生ずるを以ての故に、名けて意行と爲し、和合して聲を生ぜば、名けて口行と爲す。是の如き等の三行の因縁を以ての故に、識の生ずる有り、識の因縁の故に、則ち四陰及び色陰有り、故に名色と名く。五陰の因縁にて 識は六處に行く。故に六入と名く。情と塵と相對する故に名けて觸と爲し、觸の因縁の故に、念色より念法に至る、是を名けて受と爲す。色乃至法に食著する、是を名けて愛と爲し、愛の因縁の故に、四方に求覓す、故に名けて取と爲す。取の因縁の故に、後の身を受く、故に名けて有と爲す。有の因縁の故に、生・老死・種種の諸苦有り。是を五陰・十二入・十八界・十二因縁の大樹とは名く。

「是の故に出入の息に緣り、能く一切の諸苦・煩惱を生ず。是の故に凡夫生ずる時、亦煩惱の爲に繫縛せられ、死する時も亦爾り。終に身心の自在を得る能はず、三昧を得ず、諸漏を盡さず。若し比丘有りて、入出の息を觀ぜんに、空中の風の、我と我所と無く、作者及び受者有ること無く、緣に従つて生じ、緣に従つて滅し、相無く物無く覺觀有ること無きが如く、衆生の風も亦復是の如く、四大と共に行じ、歌羅羅を生ずるの時、九孔乃至九萬九千の諸孔の出入に、作無く受無し。是の風は、是の如き肉段に出入す、此の因縁を以ての故に、無明乃至老死などの衆苦の聚集有り。善男子、譬へば虚空の物無く我無きが如く、出入の諸息、地水火風、壽命・煖・識、無明乃至生老病死なども、亦復是の如し。衆生は顛倒して非我の中に於て横に我を見、是の如き等の虚空に同じき法に

【一八】 識、麗本缺く、三本に依つて加ふ。

【一九】 情塵は六情とその對策の謂なり。三本には眼色となす。

【二〇】 時、麗本に缺く、今三本に依つて加ふ。

【二一】 九は兩の眼・耳鼻と口と大小便の九處。

し、若し愛心有らば即ち是れ無明、無明の體は能く二過を出す、一に行を出し、二に識を出す。識にも亦二有り、一に名を出し、二に色を出す。名色にも亦二あり、一に無住、二に六入を三作す。六入に亦二あり、一に欲を厭はず、二に能く觸を生ず。觸にも亦二有り、一に受の心、二に受を求む。受にも亦二有り、一に苦樂を受け、二に貪愛を生ず。愛にも亦二有り、一に繫縛堅固なり、二に取を求む。取にも亦二有り、一に貪心、二に有を求む。有にも亦二有り、一に樂住、二に生の因縁。生にも亦二有り、一に生老、二に苦の縁なり。老にも亦二有り、一に壯色を壞し、二に死因を作す。死にも亦二有り、一に壽命を壞し、二に愛と別離す。是を出の因と名くと。

云何が初出なる。若し比丘有り、法行を修集して、是の如き法は、亦出なり亦滅なりと觀する、是を初出とは名くと。

爾の時世尊、憍陳如に告げたまはく「云何が道出なる。若し比丘、道を見んに二種有り、一に行の行、二に慧の行なり。憍陳如、汝頗し是の如き行の行と慧の行とを知るありや」と。憍陳如の言はく「未だ知らず、世尊、唯願はくは如來、十二因縁を觀じて、比丘大智慧を得、諸の煩惱を壞せんが爲に、分別解説したまへ。比丘聞き已りて、當に具に受持すべし」と。

爾の時世尊、寶幢童子に告げたまはく「汝頗し能く息の出入を知るありや不や」と。「不らず、世尊」。「善男子、法行の比丘は、先に無明乃至老死を觀すべし。云何が名けて無明を觀すとは爲すとならば、先づ中陰を觀じ、父母所生の貪愛の心に於て、愛の因縁の故に四大和合し、精・血の二滯合して一滯を成し、大さ豆子の如くなるを歌羅羅と名く。是の歌羅羅に三事有り、一に命、二に識、三に煖なり。過去世中の業縁の果報にして、作者及び受者有ること無し。初めて息の出入する、是を無明と名く。歌羅羅の時、氣息の出入するに、二種の道有り、所謂母の氣息の上下に隨ふなり。七日に一變す。息の出入は名けて壽命と爲し、是を風道と名け、不臭不爛なる、是を煖と名

【三】作、麗本住に作る、今三本に依る。

【四】一、麗本缺く、今三本に依つて加ふ。

【五】云何が云云、この段、第二の初出を明す。

【六】云何が云云、第三に道より出づるを明す。

【七】中陰、また中有といふ。人の死したる後、未だ次の生を受けざる間をいふ。この間の人の身量は、小兒の五六才位の形量にして、淨色を以て成り、肉眼には見えざといはる。俱舍論九參照。

「途路有るに非ざるに、而も輪の轉する有り、如來も亦、一切の道に住したまはず、非道に道を
見、道に非道を見たまふや」と。

佛の言はく「善男子、非道とは即ち是れ不出不滅、不住にして智に非ず。智の境界に非ず、明に
非ず闇に非ず、常に非ず斷に非ず、善に非ず惡に非ず、是れ色陰乃至識陰に非ず。是を實性と名け、
是を法性と名け、一切行と名け、眞實際と名け、是を非道と名く。是の如き道中に、諸佛如來は、
法輪を轉じて、而も是の如き諸道に貪著せず。若し衆生有りて、道を非道と見、非道を道と見んに、
是の衆生は能く道と非道とに達し、及び三道を知る能はず。如來は悉く能く分別解説し、及び道を
斷ず。善男子、如來世尊は、無道の中に於て法輪を轉ず、衆生の三種の道を壞せんが爲の故に。何
等か三道なる、一に煩惱道、二に苦道、三に業道なり。業道とは所謂行の有、煩惱道とは、所謂無
明・愛・取、苦道とは、所謂識・名色・六入・觸・受・生・老死等なり。是の如き三道は何の因縁によつて
か有るとならば、觸の縁の故に有るなり。

「善男子、眼は色を見るに因つて愛の心を生ず、愛の心は即ち是れ無明、愛の爲に業を造るを、即
ち名けて行と爲す。至心に專念する、是を名けて識と爲す。識の色と共に行するを、即ち名けて名
色と爲し、六處の貪を生ずる、是を六入と名け、入に因つて受を求むる、之を名けて觸と爲し、貪
著の心ば即ち名けて愛と爲し、是等の法を求むる、之を名けて取と爲し、是の如き法の生ずる、
是を名けて有と爲し、次第して斷ぜざる、之を名けて生と爲し、次第に斷ずる、之を名けて死と爲
し、生死の因縁より衆苦に逼らるる、之を名けて惱と爲す。乃至識法の因縁より貪を生ずること、
亦復是の如し。

「是の如き十二因縁は、一人一念に皆悉く具足し、出づるに三種有り、一に因出、二に初出、三に
道出なり。若し比丘有りて、法行を修行し、所有の愛の心の相貌を観察せんには、比丘當に觀すべ

【一】道中、爾本中道に作る。
今三本に従ふ。

【二】若し云云、この段、三
種の内の、因より出づる部を
明す。

哀あはれみを梵天ぼんてんに求めんには、梵天ぼんてん當に無礙むがいの天耳てんじを以て汝等の聲を聞き、聞き已つて當に汝の住處に來至すべし。憐愍を以ての故に、來り已つて當に汝等の癡闇を壞し、慧の光明を施すべし。智慧を得已らば、一切の諸天、當に汝を供養すべし、況んや世間の人「に於て」をやと。

「時に十二子、是の語を聞き已り、教の如くに行じて十二年を經たり。然る後梵天乃ち其の聲を聞き、即ち來下して三十三天に至れり。爾の時帝釋、梵天の來るを見、即ち前んで供養し、既に供養し已り、即ち復白して言はく、「大士、何所に至らんと欲する」と。「橋尸迦、汝彼の雪山の中なる十二仙を見ざるや。橋尸迦、共に彼に往くべし」と。時に釋提桓因たいわんいんと無量の天と、相隨つて俱に下り、雪山の中に至る。

「時に十二の仙、梵天の來るを見、歡喜踊躍して、禮拜供養したり。時に梵天王、十二の童子に告ぐらく「汝等何の故に、十二年中、精勤苦行して我を供養したる。何の所求をか欲する。名聲・色力・財寶・聖道の智慧、諸天の身を求めん爲なるや」と。時に竭伽仙、梵天に白して言はく「大士、我れ今是の如き等の事を求めず。我れ智慧を求めんと欲す、衆生の爲の故に。我等孤稚、少にし覆陰を失ひ、自ら其の心に隨ふ、教告する者無し。唯願はくは大士、我れに智慧を施し、我をして善惡等の業を識知し、及び衆生の善惡等の業を了し、亦衆生の國土・城邑、刹利・婆羅門・毘舍・首陀、男女・大小の善惡等の相、苦樂を受くる事、諸王の國を貪りて厭足する無き者、兵を興して相伐ち、衰盛する等の相を知らしめたまへ。若し我れ知り已らんに、當に方便を以て惡相を滅することを教へ、樂を受くるを得しめたまはんを」と。」

虛空目分中 彌勒品第三

爾の時彌勒菩薩、即ち佛前に於て、心に念じて偈を説き、如來に問ふらく

【〇】 三本によればこの次に夾註として佛說相法、悉不譯出の文有りといふ。麗本是の文を缺くも、以上の說話は、佛が十二月相書に關して説き出したまへる所なれば、この十二子と十二月相書との關係を説示するに非ずんば、所説完全ならず。従つて上記の夾註の存するが至當なるべし。

を憐愍して、實語し正語したまふ。唯佛のみ能く是の報應を説きたまはん」と。

爾の時諸王、及び諸の大衆一切は、宗仰して共に佛に白して言はく「世尊、唯願はくは如來、我等の爲に十二月相書を説きたまはんを」と。佛大王に言はく「今此の大會には、應に世間の相書を宣説すべからず」と。頻婆娑羅王、佛に白して言はく「世尊、今此の會中に諸の衆生有りて、如來所有の功德を信ぜず、又是の一切智人をも信ぜず。唯願はくは是の如き疑心を破壊して、之を宣説したまはんを。是の諸衆生も、若し聞くを得已らば、心に喜信を生ぜん。信心を生じ已らば、乃ち爲に出世の道を説きたまふべし。是の如き衆生は、亦當に樂うて受け、調伏すべきこと易かるべし」と。

佛大王に言はく「至心に諦に聽け、我れ當に之を説くべし。大王、往昔雪山に一仙人有り、婆伽婆と名く、果・草根を食して慈心を修集し、而も諸の煩惱の結を除く能はず、貪欲の心を調伏する能はざりき。時に彼の住處に一雌虎有り、即ち共に欲を行す。虎便ち懷妊し、日月已に満ちて此の人の所に至り、十二子を産めり。是の時仙人、心に憐愍せるが故に、即ち取つて洗浴せしめ、之を哺養したり。虎の母も心に愛し、時に隨つて乳もて養ひぬ。

「爾の時仙人、各爲に名を立て、一を躡伽と名け、二を跋伽婆と名け、三を名けて虎と爲し、四を師師と名け、五を重擔と名け、六を婆羅墮園と名け、七を歩行と名け、八を婆羅奴と名け、九を健食と名け、十を惡性と名け、十一を師子擔と名け、十二を健行と名けたり。

是の十二子、年始めて七歳、草根華果を食す。是の人父母、俱時に命終したり。時に十二子、心に愁惱を懷き、天を仰いで啼哭すらく、「云何ぞ一旦にして歸依する所無き」と。時に樹神有り、是の聲を聞き已り、是の如きの言を作す、「諸の童子、且く啼哭する莫れ、歸依すべき處有り。所謂梵天は衆生を憐愍す、汝等應當に、晝夜六時に自らを淨めて洗浴し、虚空に向ひ、至心に禮拜して

供養し、却いて一面に坐しぬ。

諸世界中の外道・相師は、光明を見たるの時、是の思惟を作す『是の如き光は、是れ日月星宿の明に非ずして、必ず是れ異光なり、是の如くにして久しからず、七日並び出でなば、當に四海と須彌山王の一切の草木を焦すべし。其の後は欲界に、火災當に出づべし』と。或は復言ふ有り『却後久しからずして、必ず當に毒を雨らして一切を毒すべし』と。或は復言ふ有り『却後、久しからずして必ず當に刀を雨らして諸の人物を害すべし。惡時の將に至らんとするや、誰か能く之を救はん』と。或は復言ふ有り『瞿曇沙門は一切を憐愍す、唯是れのみ能く其の壽命を救せん』と。

爾の時一切無量の衆生、至心に佛を念じ、念じ已つて即ち是の大寶坊を見、佛力を以ての故に、即ち坊中に至る。

爾の時 波斯匿王、佛の神力を以ての故に、亦寶坊を見、佛力を以ての故に坊中に到るを得たり。憂填耶那王、惡性王、輪頭檀王、摩醯陀王、修陀奢那王、頻婆娑羅王など、是の如き等の王も亦、佛力に因つて寶坊を見るを得、悉く坊中に至り、供養・禮拜し、次第して坐し、各是の念を作す『今此の衆中に大仙人有り、佛世尊有す、今當に誰にか問ふべき、當に仙人に問ふべきや、佛に問ひまつるが可ならんや』と。

時に 須陀舍那王の言はく『我れ今大婆羅門の師有り、名けて電髮と曰ふ、善く相法を知り能く解し能く説く。是れ最も問ふべし』と。電髮聞き已つて、即ち是の言を作す『我れ博く覽る所の一切の相書に、都て此の事無し。我れ實に此の光瑞を解する能はず。閻浮提中の一切の相師は、其の數五百ならんも、悉く解する能はじ』と。

爾の時頻婆娑羅王、諸王に語つて言はく『汝何の故に狂ふや、此の大衆中に佛世尊有し、釋迦牟尼と號し、一切智を具し、善く世間・出世間の相を知り、十二月善相の書を了し、大悲もて一切衆生

る。

【三】 波斯匿、また鉢暹羅那時多 (Tusnuni) の私悅、月光勝軍、勝光など譯す。佛同時の舍衛國王なり。毘奈耶雜事には憍薩羅國王勝光とす。その第二夫人勝蔓の傳説によつて有名なり。

【四】 また優填 (Udayana) ともいふ、拘睺彌國王の名、出愛と譯す。佛は母の爲に、初利天に昇りて説法するや、王は佛を思慕し、牛頭栴檀を以て佛像を刻したる傳説を以て知らる。

【五】 惡生王、Virudhaka、舍衛國、末利夫人 (波斯匿王夫人) の所生。

【六】 輪頭檀、梵は Sudhaka、憍尊の父淨飯王なり。

【七】 摩醯陀は Magadha の音寫か。

【八】 梵に Timbistra、また萍 (瓶) 沙とも寫す。佛時代の摩揭陀國王、その子阿闍世の物語によつて有名なり。

【九】 前に修陀闍那と云へると同一なるべし。

卷の第二十三

爾の時世尊、即ち眉間より白毫相の光を放ちて、悉く十方諸佛の世界の、日月・星・宿・珠火・燈明所照の處を蔽ひ、一切の石山・諸の惡刺棘も爲に復現はれざりき。十方無量の恒河沙等の世界の衆生は、是の光を見已り、各各念を繫けて善事を思惟したり。其の中の諸佛も、是の光を見已り、各己が衆に告げて是の言を作す、「善男子、無量恒河沙の世界を過ぎて、彼に世界有り、名けて娑婆と曰ひ、五淨を具足す。かしこに佛有つて世に出で、釋迦牟尼如來・應正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號す、無量世界の菩薩と無量の聲聞とは、悉く彼の土に集りて彼の佛前に坐するに、彼の佛即ち爲に、法行法目陀羅尼門を宣説し、諸の聲聞の爲に、法行を説き已つて大光明を放ち、將に淨目法門陀羅尼法を演説せんと欲し、中乘の者の爲には緣覺の果を得しめ、諸の菩薩の爲には、阿耨多羅三藐三菩提を莊嚴・成就し、十地と如來十八不共の法とを具足し、不退の輪を轉じて三惡趣を壞し、八聖を修して無上の果を得しめたまふ」と。

爾の時、十方恒河沙等の世界の諸衆、是の語を聞き已り、各各佛に白して言はく「世尊、我れ彼の娑婆世界に往き、説法の處に至り、是の如き淨目法門を聽受せんと欲す」と。

爾の時無量の諸菩薩衆は、悉く共に娑婆世界に來詣し、佛所に到つて、頭面もて禮拜し、却いて一面に坐しぬ。

時に此の世界の無量の梵天、佛所に往至し、供養恭敬して却いて一面に坐するに、百億の化自在天、百億の兜率天、百億の夜摩天、百億の帝釋天、百億の四大王天、百億の日月天、百億の自在天、百億の閻羅王、百億の地鬼、四百億の阿修羅、四百億の龍王、是の如き等の衆、悉く佛所に向ひ、恭敬・供養し、却いて一面に坐し、無量の沙門及び婆羅門は悉く神通を得、佛所に來向して、恭敬

【一】三乘の中、按覺衆は中位に在れば中乘と名く。

※十地、菩薩修行の階位五十位の中、第四十一位―第五十位の十をいふ。一、菩薩既に初阿僧祇劫の行を滿じて、初て聖性を得、見惑を破して二空の理を證し、大歡喜を生ずる歡喜地、菩薩此の位に波羅蜜を成就す。二、尸波羅蜜を成就し、毀犯の垢を除きて、身を清淨ならしむる離垢地。三、忍波羅蜜を成就し、智慧顯發する發光地。四、精進波羅蜜を成就し、慧性をして熾盛ならしむる煥慧地。五、禪波羅蜜を成就し、眞俗二智の行相、互に達するを、して相應せしむる極樂勝地。六、慧波羅蜜を成就し、最勝智を發し、染淨の差別なきを現前せしむる現前地。七、方便波羅蜜を成就し、大悲心起し、二乘の自度を遠離する遠行地。八、願波羅蜜を成就し、無相觀を作し、任運無功用に相續する不動地。九、力波羅蜜を成就し、十力を具足し、一切處に可度と不可度とを知つて、能く説法する善慧地。十、智波羅蜜を成願し、無邊の功德を具足する法雲地。

【二】閻摩羅闍(Yama-raja)の略、縛、雙世、平等王など譯す。地獄の總司なりと云ら

爾の時四天王及び功德天は、佛に白して言はく「世尊、是の經典流布する所に隨ひ、我れ當に其の四部弟子、及び其の國土・城邑・村落と、諸王・人民とを護るべし」と。

大方等大集經卷第二十二

虛空目分第十之一初聲聞品第一

四九七

「憍陳如、假使人有り、能く兔毛の滯を以て海水の滯を數へ知るも、法目陀羅尼の所有功德を數へ知る能はず。若し如來を除き、説き盡さんと欲する者あらんも、是の處有ること無し。乃至一切娑婆世界の微塵も亦爾り」と。

爾の時世尊、金剛山童子に告げて言はく「善男子、汝持ち來る所の法目陀羅尼は、吾が今説く所と、頗し異有るや不や」と。「不ず、世尊」と。「善男子、是の如く説くや不や」と。「世尊、實に是の如くに説く」と。「善男子、若し人有り、能く是の如き法を受持し、讀誦書寫して廣く人の爲に説かんに、當に知るべし、是の人は一切の人・天・龍・神・阿修羅・乾闥婆・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等の爲に守護せられ、一切の四魔、其の便を得る能はず、煩惱の河を度つて八正の道に入らん」と。金剛山童子の言はく「善哉・善哉、實に聖教の如し」と。

爾の時世尊、憍陳如に告げたまはく「若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷など、是の法を修行せんに、能く壞する無し、是を光を施し能く寂靜を淨むるものと名け、行處有ること無く、濁無く動無く、舍宅有ること無く少無く多無し。處行・細行・堅行に至ると名け、能く四魔及び四魔の衆と一切の邪見とを壞し、生死の河を度つて智慧の海に入り、常に諸聖の爲に讚歎せられ、如來所入の處に近くを得、未だ一切の煩惱を斷ぜずと雖も、亦上身の無上菩提と、上色・上力・上辯・上念・上慧・上處とを得、或は典領して四域の王若しは三・二・一の王と作り、若しは帝釋と作るを得、乃至他化自在王と作り、若しは梵王と作るを得、若しは復菩提樹下の金剛の床を獲得し、梵音深遠にして其の心平等に、大慈心を得、舍摩他を得、諸の煩惱を壞して、無上尊と名く」と。

是の法を説きたまへる時、舍利弗・目犍連等、一の坐處に於て阿羅漢果を得たり。爾の時、一切の世人・諸天、讚歎して言はく「如來の功德は不可思議なり、無量の衆生は須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得、阿耨多羅三藐三菩提心を發したり」と。

二道の所斷、後の第四定は、終に世俗の道を以て斷すべからず。凡夫は非想非非想處に於て、龜の煩惱無しと雖も、亦十法有り、所謂一に受、二に想、三に行、四に觸、五に思惟、六に欲、七に解、八に念、九に定、十に慧なり。云何が受と爲すとならば、所謂識の受なり、云何が想と爲すとならば、所謂識の想なり、云何が行と爲すとならば、所謂法行なり、云何が觸と爲すとならば、所謂意の觸なり、云何が思と爲すとならば、所謂法の思なり、云何が欲と爲すとならば、定に入出せんと欲するなり、云何が解と爲すとならば、所謂法の解なり、云何が念と爲すとならば、所謂三昧を念するなり。云何が定と爲すとならば、所謂心如法に住するなり、云何が慧と爲すとならば、所謂慧根慧力もて、四果に向ふの行を觀じ、乃至阿羅漢果を得、生滅及び空三昧を觀じ、四大は四毒蛇の如しと觀するなり。是の如き十法は、第四空處に具足して有り、其の龜煩惱有ること無きを以ての故に、一切の凡夫は、是を涅槃なりと謂ふ。

「橋陳如、若し比丘有り、聖道を修集し、四禪及び四空處を厭離し、滅定莊嚴の道を觀じて、是の思惟を作す」諸の出入の息は、悉く是れ無常なり、我れ若し能く出入の息を斷たば、即ち是れ安樂なり」と。是の故に一切諸行の因縁悉く滅し、受滅し乃至慧滅せん。覺・觀滅するが故に、陰・入・界滅し、貪・患・癡滅し、一切の心數法滅し、一切の非心數法も亦滅せん。是を凡夫と共ならざる法と名け、是れ世法に非ずして無學の法なり。

「橋陳如、若しは須陀洹・斯陀含、終に是の如き滅定を得る能はず、若しは次第して須陀洹果を得んもの、亦得る能はず。若しは須陀洹にして是の身を捨し已り、阿羅漢果を得んもの、亦得る能はず。若し、八解脫を具足する者有らば、是の人能く得ん。

「橋陳如、若し如來をして劫を窮め劫を盡して、是の法目陀羅尼法を説かしめんに、乃ち能く窮盡せん。是を法無礙智と名く。

【一〇〇】雖、麗本離に作る、今三本に依る。

【一〇一】また滅盡定、滅受想定といふ、非想非非想處に依つて、此の定を起す。かの八等至と異り、無心定なり。是の定に入れば、若干時間の間、心と心所と滅して起らず。

【一〇二】また八背捨ともいふ。三界の煩惱に違背し、之を捨離して其の繫縛を解脫する八種の禪定なり。大集部第一、七九頁參照。

比丘有り、四禪を具足せば是を法行と名く。

「橋陳如、若し比丘有り、身を觀じて厭患し、身の相と一切の身の觸・喜の觸・樂の觸を遠離し、色陰を分別して色陰を遠離し、無量の空處を觀する、是を法行の比丘、空處定に入ると名け、是を比丘、法行を修集すと名く。

「橋陳如、云何が比丘は 識處定を得とならば、若し比丘有り、舍摩他・毘婆舍那を修し、心意・識を觀し、自ら此の身の不受を知り、三受を知り已つて是の三種の受を遠離するを得、是の故に名けて識處定を得と爲し、是を法行と名く。

「橋陳如、云何が比丘、少識處定を得とならば、若し比丘有り、三世の空を觀じ、一切法行の亦生亦滅と空處・識處の亦生・亦滅とを知り、是の觀を作し已り、次第に識を觀す、我れ今識を觀するも亦識に非ず非識に非ず、若し識に非ずんば是を寂靜と名く、我れ今云何が永に此の識を斷ぜん」と。是の觀を作し已つて少識處を得る、是を比丘少識處定を得とは名く。

「橋陳如、云何が比丘、非想非非想定を獲得するとならば、橋陳如、若し比丘有り、非心の想有つて、是の願忍を作す「我が今の此の想は、是れ苦なり・是れ漏なり・是れ癢なり・是れ雜なり、是れ寂靜ならず、若し我れ能く是の如き非想及び非非想を斷すれば、是を寂靜と名く」と。若し比丘有り、能く是の如き非想非非想を斷すれば、是を無想解脱門を獲得すと名く。何を以ての故に、法行の比丘は是の思惟を作す「若し受想有り、若しは識の想有り、若しは觸の想有り、若しは空の想有り、若しは識の想有り、若しは非想非非想有らんに、是の如き等の想を名けて龜想と爲す。我れ今若し無想三昧を修せんに、則ち能く永く是の如き等の想を斷ぜん」と。是の故に非想非非想を見て、寂靜處と爲し、是の如く見已り、非想非非想定を得るに、不愛・不貪にして能く無明を破し、無明を破し已るを、名けて阿羅漢果を獲得すと名く。前の三種の定は

【八】空無邊處定の略。心に色を出離せんと欲し、色想を捨てて、無邊の虛空を緣じ、心、空無邊と相應すれば、この名あり。以下四は普通四無色定と呼ぶ。前の四禪定と合して、八等至といひ有心定なり。

【九】また識無邊處定といふ。前の外の空を厭ひ、其の虛空を捨て、内識を緣じて、心識無邊の解を爲すなり。

【一〇】また無所有處定といふ。前の識を厭ひ、心識所有なしと觀すればなり。

【一一】非想とは、前の識處（有想）を捨つるに名け、非非想とは前の少識處（無想）を捨つるに名く。

「云何が法行の比丘、天耳通を得るとならば、僑陳如、若し比丘有り、初禪を得るの時、息の出入を觀じ已つて、次第に聲を觀じ、乃至四禪も亦復是の如くするなり。

「云何が法行の比丘、他心智を得るとならば、若し比丘有り、息の出入を觀じて初禪を得るの時、奢摩他と毘婆舍那とを修する、是を他心智と名く、乃至第四禪も亦復是の如くにす。

「云何が法行の比丘、宿命智を得るとならば、僑陳如、若し比丘有り、息の出入を觀じ、初禪を得るの時、眠の通を獲得し、眠の通を得已つて、初めて 迦羅羅有るの時、乃至五陰の生滅、無量劫中の五陰の生滅を觀ず、乃至四禪も亦復是の如くす。

「言ふ所の禪とは、何の故に禪と名くるとならば、疾の故に禪と名け、疾の「中の」大疾、住の「中の」大住、靜の「中の」寂靜、滅を觀じて遠離する、是を名けて禪と爲す。

「初禪は亦具足と名け、亦遠離とも名く。云何が具足し、云何が遠離する。遠離とは五蓋を遠離するなり。具足とは五支を具足するなり、所謂覺と觀と喜と安と定となり。云何が覺と名くるとならば、心の大覺を覺し大思惟を思惟するが如く、心性を觀する、是を名けて覺と爲す。云何が觀と名くるとならば、心に大行・遍行を行すること隨意なるを觀する、是を名けて觀と爲す。云何が喜と爲すとならば、眞實に大知を知るが如く、心動じて至心なる、是を名けて喜と爲す。云何が安と爲すとならば、所謂身安く心安く受安ければ、樂の觸を受くる、是を名けて安と爲す。云何が定と爲すとならば、若し心大住に住して亂れず、緣に於て謬まらず、顛倒有ること無き、是を名けて定と爲す。

「第二禪は同じく五事、所謂五蓋を離れ、三支を具足す、一に喜、二に安、三に定なり。第三禪に入るも、亦五事を離れて五支を具足す、一に念、二に捨、三に慧、四に安、五に定なり。第四禪に入るも、亦五事を離れ四支を具足す。一に念、二に捨、三に不苦不樂、四に定なり。僑陳如、若し

【七】迦羅羅、梵に Kalala、また羯羅藍とも寫す。胎内五位の一、受生の初より七日間の位をいふ。

の、我と我所と無きを觀する、是を十二因縁の空とは名く。云何が性は空なる、若し比丘有り、眼の空にして我と我所と無きを觀じ、乃至意の空も亦復是の如くなる、是を法行にして能く心に心を觀すと名く。

「是の如き比丘は、衆生・壽命・士夫・某甲を見ず、諸法の性を知り、眞に世諦を解するも、流布の爲の故に陰・入・界を説き、一切法の性は出滅無きを知る。是の如き比丘は能く生死を度し、能く一切の苦集滅道を知り、能く煩惱を斷ず。

「憍陳如、若し比丘有り、法行を修集して、一切法の、因縁に従つて生じ、因縁に従つて滅するを知らば、是の如きの比丘は、三解脱を得、色の眞相を知らん。色の眞相とは、所謂・礙の相、受を受くるの相、覺を想ふの相、行を行するの相、識知の相なり、是を眞に一切法の相を知るとは名く。

是の如く觀じ已つて空解脱門を得。一切法の、作と受者と壽命と自在と無きを見、唯無常・苦・無我等を見る、是を無願解脱門を得とは名く。一切法の、生無く滅無きを觀する、是を無相解脱門を得とは名く。

「憍陳如、法行の比丘は、能く神通を得、惡覺觀無く、口に終に 四種の惡過を説かず、鬪諍有ること無く、惡言を聽かず。爾の時即ち五蓋を遠離しつ五善根を増すを得。是を法行の比丘は初禪を獲得すと名く。初禪に入り已り、身の通を得んと欲し、心を鼻端に繋けて入出の息を觀じ、深く九萬九千の毛孔に息の出入するを觀じて、身の悉く空なるを見、乃至四大も亦復是の如くし、是の如く觀じ已つて、色相を遠離し神通を獲得す。乃至四禪も亦復是の如し。

「云何が法行の比丘、眼の通を獲得するとならば 憍陳如、若し比丘有り、息の出入を觀じて眞實に色を見、既に色を見已つて是の思惟を作す、我が所見の如くんば、三世の諸色は、意に見んと欲すれば意に隨つて即ち見ると。乃至四禪も亦復是の如くなり。

【九四】礙云云、以下の五は、五陰に配して説けるなり。

【九五】四種は妄語、(虚誑語)、兩舌(離間語)、惡口(龜惡語)、綺語(雜穢語)なり。

【九六】名、麗本に缺く、三本に依つて加ふ。

脫門を得とは名く。若し是の如く觀すれば、即ち有漏の心を遠離すること得て、無漏の解脫を得るなり。

『橋陳如、一切有爲の諸行は、決定有ること無し、若し不定ならば、云何ぞ定聚に入るを得ん。若し三世を觀察して已に定聚に入ることを得と言はば、是の義然らず。何を以ての故に。過去は已に盡き、未來は未だ出でず、現在は無常なり、三世の觀異なる、云何ぞ正定聚に入るを得ん。是の故に一切の異觀は、性決定ならず。橋陳如、譬へば殿堂に四の梯橙有らんが如し、若し初第一橙に由らずして四橙に至らんこと、是の處有ること無し。初橙に登る時、亦第四に登ると名くるを得ず。是の如く四橙も亦一と名けず。橋陳如、若し是の四諦即ち一諦ならば、一心に得べし。』

『橋陳如、觀する時亦異らば、得る時も亦異なる。觀する時異るとは、因果盡く壞するなり。得る時異るとは苦智・集智・滅智・道智なり。若し比丘有り、行の無常にして、是れ苦・無我・不淨・無住なるを觀すれば、是の漏結に緣つて、是の一切の有る、是を繫縛と名く。是の故に諸陰・諸行を求めず、一切の行を厭ひて涅槃を樂求し、至心に涅槃の功德を思惟して、深く寂靜を樂み、身命を惜まず、奢摩他と毘婆舍那とを修する、是を比丘法行を修集すとは名く。』

『橋陳如、云何が比丘は、心に能く心を見るとならば、若し比丘有り、能く心を觀察し、心は是れ無常なり、是れ生滅の法なりとする、是を比丘心に能く心を見るとは名く。』

『是の如く比丘空三昧を修す。云何が空と名くる。陰・入・界の空、諦の空・實の空、十二因縁の空、性の空なり、云何が陰は空なる。所謂色は空にして、我と我所と無く、乃至識は空にして我と我所と無き、是を陰の空とは名く。入・界の二空も亦復是の如し。云何が諦は空なる。所謂苦諦は得無く捨無し、乃至道諦も亦復是の如し。云何が實は空なる。一切の法中には、覺觀及び我所有ること無き、是を實の空と名く。云何が十二因縁は空なる、十二因縁とは即ち是れ十二有支なり、十二支

【五】 本文に可一心得と云ふ。

【六】 本文に若有比丘、觀行無常、是漏結緣、是一切有、是名繫縛。

「云何が無常の相にして無常の法に非ざるとならば、若しは相有つて、初無漏根の行を雜へ、若しは相有りて、無願解脫門の行を雜へ、若しは空相・苦相・不淨相・無我相有る、是をば無常相にして無常法に非ずとは名く。

「云何が無常の法にして無常の相に非ざるとならば、所謂三界の色相乃至法相、是を倒相と名け、是を捨相と名け、無常の相に非ず。是を無常の法にして無常の相に非ずとは名く。

「云何が無常の相にして亦無常の法なる。所謂一切衆生の、未だ決定を得ず、世俗の道を以て諸の三昧に入り、法相の忍に隨ふ、是を無常の相にして亦無常の法なりと名く。

「云何が無常の相に非ず、無常の法に非ざる。所謂寂靜の常相、解脫の淨相なり、是を非無常の相、非無常の法と名く。

「云何が第一諦を得るとは爲すとならば、所謂六根・五陰を觀すること、猶ほ鏡像の如くなるを、第一諦を得とは名く。

「云何が一心に四諦を觀するとならば、若し諸行悉く是れ苦の因なり、苦の因たるを以ての故に、見るべく滅すべく遠離するを得べしと觀する、是の如きをば、名けて心無漏を緣すと爲す。是の故に一心に四諦を獲得するを、有漏を離れて心に解脫を得とは名く。若し比丘有り、心心を觀する、是を無願解脫門と名く。心心を觀じ已つて、十二事を觀ず、一には業、二には行、三には苦、四には空、五には壞、六には不自在、七には過去、八には現在、九には未來、十には因緣、十一には無作、十二には無受なり。是を心・心を見るとは名け、無願解脫門と名く。

「若し比丘有つて是の心を觀察し、心の生有ること無く、出入無く、能く遠離する無く遠離すべき無き、是を心・心を見、空解脫門を得とは名く。若し入定の心有ること無きを觀じ、而も一切の煩惱を遠離するを得んに、因緣無きが故に煩惱生ぜざる、是を心・心を見ることを遠離し、無相解

【九】 心は心と心所。

【九二】 生、麗本には主に作る、今三本に依る。

「復次に憍陳如、三解脱門もて莊嚴觀を修し、一切行の、不出不滅にして、出で已つて則ち滅し、滅して至る所無く、至・去・來せざる、是を無願解脱門を莊嚴すと名く。復次に未來世を觀するに、諸行未だ出でず、若しは行未だ出でざれば、則ち滅有ること無き、是を無願解脱門を莊嚴すと名く。畢竟して盡きず、畢竟して盡くれば、則ち生滅無し、若し生滅無ければ、即ち畢竟して盡く、若し畢竟して盡くれば、即ち空因縁なり。若し是の如く畢竟して盡くるを觀すれば、是を空解脱門を莊嚴すと名く。若し諸行是れ畢竟して盡くるを觀すれば、即ち生滅無く、若し生滅無ければ、即ち空有ること無し、何を以ての故に。先に有つて後に無き、之を名けて空と爲す。若し本無なれば則ち無の後も無し。若し無の後も無ければ、云何が空と名けん。若し行無ければ即ち是れ無爲なり。畢竟して盡くれば是れ有爲に非ず、亦無爲にも非ず。空は亦行に非ず、亦行無きに非ず。是の故に畢竟して盡くれば、有爲の攝に非ず、無爲の攝にも非ず。是を無相解脱門を莊嚴すと名く。若し一切の行、畢竟して盡くれば、即ち是れ涅槃にして、過去・未來・現在に非ず、是の故に過去行の滅に非ざるを名けて涅槃と爲す。未來現在の行の滅に非ざるを名けて涅槃と爲す。須陀洹の人は是の涅槃を見、乃至阿羅漢の人は是の涅槃を見るなり。

「云何が苦諦と名くとならば、一切の行を觀じて 第一諦を見ざる、一切の因を觀じて第二諦を見ざる、一切の滅を觀じて第三諦を見ざる、一切の道を觀じて第四諦を見ざるなり。

「云何が生と名くるとならば、本無くして後に有る、是を名けて生と爲す。云何が滅と名くるとならば、有り已つて還無き、是を名けて滅と爲す。出滅有ること無き、是を名けて盡と爲す。何の因縁の故に。出滅有ること無き、之を名けて道と爲せばなり。道に六行あり、修と非修、行と非行、知と非知となり。若し比丘有り、能く是の如き生滅の法を見なば、是の人は能く一切の諸行を厭ひ、能く一切行の無常の相を見ん。

【一六】また舍摩他とも書く。止、能滅また寂靜など譯す。心を攝して緣に住し、散亂を離るるなり。

【一七】即婆舍那、梵に *śamāpāna* 觀(察)と譯し、正見、能見など義譯す。細なる分別心を觀すること也。こまかに明に識別すること。

【一八】心を攝め靜めて、散逸せざらしむること。

【一六】行は、有爲法が、因縁より集起して、三世に遷流するをいふ。

【一七】第一諦は苦諦の謂、第二諦以下は集諦等に當る。

舍那の相と名く。云何が名けて毘婆舍那に従つて決定けつじやうに入ると爲すとならば、至心に毘婆舍那を念じ、恭敬尊重して、莊嚴の道に向ふ。是を毘婆舍那に従ひ決定に入ると名く。

「云何が名けて出法しゆふほふの攝心あつしん、非滅法の攝心と爲すとならば、若し比丘能く心出の因縁いんげん乃至一切行出の因縁を觀する、是を出法の攝心、非滅法の攝心とは名く。

「云何が名けて滅法の攝心、非出法の攝心と爲すとならば、若し比丘、能く深く滅心の因縁乃至一切行滅の因縁を觀察せば、是を滅法の攝心、非出法の攝心とは名く。

「云何が名けて非出法の攝心、非滅法の攝心と爲すとならば、若し比丘、心性しんしやう・眼性がんしやう乃至意識性を觀する、是を非出法の攝心・非滅法の攝心とは名く。

「云何が縁の攝心、非思惟の攝心なる。若し比丘、能く出息を觀じて入息にそそを觀ぜざる、是を縁の攝心・非思惟の攝心と名く。

「云何が名けて思惟の攝心・非縁の攝心とは爲すとならば、若し比丘、入息を觀する、是を思惟の攝心・非縁の攝心と名く。

「云何が名けて、非縁の攝心・非思惟の攝心と爲すとならば、若し比丘、心性、眼性乃至意性を觀せば是を非縁の攝心・非思惟の攝心とは名く。

「僑陳如、若し比丘、能く心を攝せば、則ち八十の諸三昧門を得、及び三解脱門を修す。若し比丘、過去の身を觀じ、及び莊嚴を修し、身を觀じ身を見る、是を無願解脱門を修すと名く。若し比丘、過去の身を觀じ已り、唯心を見て身を見ず、及び莊嚴を修して身を觀じ身を見る、是を無相解脱門を修すと名く。若し比丘、過去の身を觀じ已り、亦作及び作者を見ず、作者に身に無く、身に作者無く、莊嚴道を修して身を觀じ身を見る、是を空解脱門を修すと名く。愛・心・法を觀する亦是の如し。

戒經といふと。上座部の系統に屬し、佛滅三百年頃、有部より分出す。法有我無を主張する點は有部に同じく、他は概ね法藏部に同じと云はる。

【七九】彌沙塞、梵に Mahisa-sattva、化地と譯す。これまた律の五部の一、律本を五分律といふ。佛滅三百年頃、有部より分出す。所說大乘部に近し。

【八〇】婆嗟富羅、梵に Yitthi-pattiva、といひ、檀子と譯す。同じく律の五分の一、律本は傳らずと云はる。有部の一分派、萬有を有爲の三世と無爲と不可説との五藏に分つて説明せりといふ。

【八一】前の婆嗟富羅に至る五部をいふなるべし。

【八二】摩訶僧祇、梵に Mahā-sanghika、大乘と譯す。上座部の律は、優婆塞多に至るまで、五師相傳せられし。

も、是に至つても、佛に生ず。その根本の律を大乘部と稱し、今の摩訶僧祇律はなりといふ。

【八三】隨信行とは、他の知識の教を聞信して、その教の如く修行する義。隨法行の對。

【八四】隨法行とは、他に依らず、自ら佛所說の法に隨順して修行する義。

【八五】奢摩他、梵に Samma-

も皆諸佛の法界及び大涅槃を妨げし。

『云何が名けて 信行に隨ふとは爲すとならば、若し三寶を信じ、信根を具足せば、信根の因縁に從つて決定に入り、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果を得、色・無色界を過ぎて阿羅漢果を得。信に從つて解を得るを、信解脫と名け、亦一分と名け、亦身證とも名け、慧解脫と名け、是を驗信行と名く。』

『云何が名けて 法行に隨ふとは爲すとならば、若し法に從つて決定に入り、慧根を具足し、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果を得、色・無色界を過ぎて阿羅漢果を得る有らんに、是を見到二分解脫と名け、亦身證慧得解脫、心得解脫得滅盡定と名く。是の故に名けて二分解脫と爲し、是を無學解脫と名け、是を法行とは名く。是を身身觀を成就し、乃至法法觀を成就すとは名け、是を毘婆舍那及び奢摩他を成就すと名く。』

『云何が名けて 奢摩他と爲すとならば、奢摩他とは、是を名けて滅と爲す。能く貪心・瞋心・亂心を滅するを奢摩他と名く。云何が名けて奢摩他の相と爲すとならば、能く貪相及び瞋・癡の相を滅するを、奢摩他の相とは爲す。云何が名けて、奢摩陀に隨つて決定に入ると爲すとならば、若し能く舍摩他の行を修するに隨ひ、尊重讚歎し、奢摩他の方便、莊嚴に向ふ、是を則ち名けて奢摩他の相と爲す。若し比丘有つて、深く自ら思惟すらく、私の貪心は唯不淨を觀じて乃ち能く之を壊し、瞋恚の心をば慈能く之を壊し、十二因縁は能く愚癡を壊すと。是を奢摩他相と名く。』

『云何が名けて、毘婆舍那と爲すとならば、若し聖慧を修し、能く五陰の次第に生滅するを觀する、是を毘婆舍那と名く。復次に若し諸法は皆法性の如しと觀じ、實性・實相を眞實に了知する、是を毘婆舍那と名く。云何が名けて毘婆舍那の相と爲すとならば、若し能く念心を成就・具足して、一切の行は緣に從つて生じ緣に從つて滅し、一切の行は自在無く作無く受無きを觀する、是を毘婆

Etia cetera また曇無德ともいふ。法藏、法密、法護など譯す。今は、法を暗隱するを法藏、法密にかけて、云へるならん。優婆耆多 (Upasaka) 五弟子中の一にして、律藏に一部を立て、曇無德部と稱し、その律を四分律と云ふ。佛滅三百年頃、化地部より分出す。五藏を立て、過去未來等は無に非ずといふと。【七一】 佛教以外の教派の典籍をいふ。【七二】 持、麗本有に作る、今三本に従ふ。【七三】 能、同に解に作る、今三本に従ふ。【七四】 姓、四本共に性に作る、宮本に依つて姓と爲す。【七五】 薩婆婆娑、梵に Sākyabīṇḍya また薩婆多部といひ、一切有と譯す。優婆耆多の弟子に五人あり、律藏に於て五部の別を生じたる第二なり。律を十誦律といふと。この部は三世に互つて諸法の體性實在し、空間的に諸法の體性の實有するを主張す。【七六】 經、四本共に轉に作る、宮本に從つて輕に作る。【七七】 迦葉毘、梵に Kāśyapa。また迦葉遺部、飲光部ともいふ。かの律の五部の一、その戒本のみ傳譯せられて、解脫

人有つて初禪乃至四禪を得、決定の觀に入り、一切行の無常にして、次第に生滅するを觀じて、一切凡夫の法を遠離し、人有つて一切行の無常・苦・空・不淨にして、自在を得ず、寂靜有ること無く、緣に従つて生じ、緣に従つて滅するを觀じ、是の觀を作し已つて、寂靜の滅諦を得。是をば比丘、如法に行ずとは名く。如來は一切衆生の諸根の利鈍を了知し、亦一切衆生の心性と、諸煩惱の性とを知る。是の故に如來は、衆生に隨應して說法を爲し、諸の煩惱に隨つて宣說・對治す。是の故に、薩婆若智と名くるを得。

「橋陳如、我が涅槃後に、諸の弟子有り、如來の十二部經を受持し、書寫・讀誦し、顛倒して義を解し、顛倒して宣說せん。倒に解脫するを以て、法藏を覆隱し、法を覆ふを以ての故に、疊摩毘多と名けん。

「橋陳如、我が涅槃の後、我が諸の弟子、如來の十二部經を受持して讀誦書寫し、而も復、外典を讀誦書說し、三世及び内外を受持し、外道を破壊し、善能く論義し、一切の姓を説いて、悉く戒を受くるを得しめ、凡そ問難する所、悉く能く答對すべし。是の故に名けて、薩婆帝婆と爲す。

「橋陳如、我が涅槃の後、我が諸の弟子、如來の十二部經を受持して書寫讀誦し、我と受者と有ること無しと説き、諸の煩惱を輕んずること、猶し死尸の如し、是の故に名けて、迦葉毘部と爲す。

「橋陳如、我が涅槃の後、我が諸弟子、如來の十二部經を受持し、讀誦書寫して、地相と水火風の相と虚空識の相とを作さざらん。是の故に名けて、彌沙塞部と爲す。

「橋陳如、我が涅槃後、我が諸の弟子、如來の十二部經を受持し、讀誦・書寫して、皆我有りと説き空相を説かざること、猶し小兒の如くならん。是の故に名けて、婆嗟富羅と名く。

「橋陳如、我が涅槃の後、我が諸弟子、如來の十二部經を受持し、讀誦書寫して、五部の經書を廣博遍覽せん。是の故に名けて、摩訶僧祇と爲す。善男子、是の如き五部は、各別異なりと雖も、而

準じて知るべし。八忍の第二。

【五】 色界と無色界との苦諦に於ては、欲界の十惑より瞋を除きたる九の煩惱あれば、合して十八を成す。

【五九】 欲界の集諦をいふ。

【六〇】 前に云へる十惑の内、身・邊・戒禁取の三を除ける他の七をいふ。

【六一】 十二は、前の十惑より、瞋・身・邊・戒禁取を除ける六煩惱が色界と無色界とに存すればなり。

【六二】 この七は、前の集諦に於ける七煩惱に同じ。

【六三】 この十二、色・無色界に於ける滅諦の十二に同じ。

【六四】 この八種は、前の十惑より身・邊の二を除けるもの。

【六五】 この十四は、十惑の中より、瞋・身・邊を除ける七が、色界と無色界とあればなり。

【六六】 八十八使ともいひ、三界の見惑、即ち理に迷ふ惑を概擧したるもの。俱舍論一九卷參照。

【六七】 名、麗本に缺く、三本に從つて加ふ。

【六八】 麗本は從一生得云云とするも三本に從の字無し。今是れに從ふ。

【六九】 故、麗本名に作る、今三本に依る。

【七〇】 薩婆若智、皆に Sarva-jñāna 一切智と譯す。

【七一】 疊摩毘多、梵に Dhan-

苦智を成就すれば、則ち十種の煩惱を斷ず、是を初無漏心の觀を修すと名く。爾の時次第に無願三昧を觀ず、無願を觀する時、三十七助道の法を修する、是を無漏定の智と名け、苦法忍、苦法智、集法忍、集法智を得るなり。

「爾の時、色界の五陰と無色界の四陰とを觀すること、欲界の苦の如くにし、色・無色界も亦復是の如く、是の如く觀じ已つて、色・無色の十八種の煩惱を斷じ、十八種斷じ已らば、是の如き思惟を作す」「是の如き諸苦は、何の業より來り、誰の造作する所たる」と。是の觀已らば、是の苦は愛の因縁に従ふ、我れ若し是の如き愛の根を抜かずんば、必ず當に苦を生ずべきを了知す。是の故に集を觀するなり。是の觀を作し已れば、七の煩惱を斷ず。欲界の集を觀じ已つて、色無色界も亦復是の如くにし、是の如く觀じ已つて、比忍、比智を得。是の觀を作す時、十二の煩惱を斷ず。橋陳如、八忍を具する者は、是れ法を見るとは名く。三界の集を斷じ已りて、復是の觀を作す。何の因縁の故に苦と集とをば斷ずると。安樂の爲の故なり。夫れ安樂とは即ち是れ滅諦なり。爾の時、初に欲界の滅諦を觀じて、滅法の忍を得、七の煩惱を斷ず。色・無色界にも亦復是の如くし、是の觀を作し已りて、滅の比忍を得、十二の煩惱を滅し、復是の觀を作す。何の因縁の故に是の比忍を得るやと。八道を修するに因つて、八正道力を以ての故に、欲界の苦・集・滅諦と色・無色界の苦・集・滅諦とを知る。爾の時、次に道法忍を生じ、得已つて能く八種の煩惱を斷ず。爾の時復色・無界を觀じて、道比忍を得、十四の煩惱を斷ず。集を修するを以ての故に、八十八種の煩惱を遠離する、是を決定して須陀洹果を得たりと名け、是を十六心と名け、是を必得菩提と名け、是を七往來して一切の苦を斷ずと名く。

「橋陳如、人有り、信に従つて決定し、人有り、法に従つて決定し、人有り、一生にして須陀洹果を得、乃至阿羅漢を得。人有つて信根乃至慧根に入り、人有つて定を修し、人有つて慧を修し、

又は邊際無しとする邊無邊の
見。
【五】 異事とは、異問異答して、問題を曖昧ならしむるもの。
【六】 六は云云、普通は、亦常亦無常を主張する四と、世界は因無くして生じたりとすることとを擧ぐ。

【五二】 六十二見、斷見、常見等の種々の棄つべき偏見を數へたるもの。長阿含梵動經、跋闍六十二見經、瑜伽論八十七、並に大品般若佛母品、參照。

【五三】 八忍、欲界と、色・無色界の四諦の理を忍可印證する智なり。この八忍を以て、三界の見惑を斷ず。見惑既に斷じて、觀照明了なるを八智とす。八忍八智を合せて見道の十六心といふ。

【五四】 苦智、今は欲界の苦諦を知るの智。
【五五】 十種、貪・瞋・癡・慢・疑と身・邊・邪・取・戒禁取の五惡見となり。これ苦諦の理に惡ひて起す所なり。

【五六】 苦法智忍とも云ふ。欲界の苦諦を觀じて、正しく其の見惑を斷ずる無間道の智を苦法忍といふ。忍とは信なり、理を信じて疑はざる智にして、苦法智を得る因なり。八忍の第一。

【五七】 集法忍、集法智も前に

て甘露を緣するに非ざる有り。空三昧の、甘露を緣じ、甘露に非ざる有り、甘露行にして甘露を緣するに非ざる有り。無相三昧は甘露を緣じ、甘露行に非ず、甘露行にして甘露を緣するに非ざる有り。憍陳如、若し比丘有り、慧の滅を緣じ、莊嚴して無願三昧に入らば、是を甘露を緣じて甘露行に非ずと名く。若し比丘有り、慧の滅を緣じて解脱を得ば、甘露行にして甘露を緣するに非ずと名く。空と無相とも、亦復是の如くなり。憍陳如、若し比丘有り、能く是の如くに觀すれば、是を法行と名く。

「憍陳如、若し比丘有り、受を觀じ心を觀すれば、是を法行と名く。何を以ての故に、能く我見の二十種を壞するが故なり。憍陳如、斷見と我見とに各五種有り、色の斷乃至識の斷、是を五斷見と名く。色の我乃至識の我是を五我見と名く。憍陳如、五種の斷見を分別すれば、則ち四十四種有り、十六種は 四四 想を説き、八は 四六 無想を説き、八は 四七 非想非非想を説き、六は種々想を説き、六種は斷を説く。是を四十四種と名く。我見を分別すれば、十八あり、四は定んで我を説き、四種は 四九 邊を説き、四は 五〇 異事を説き、六は無求三昧を説く、是を 五二 六十二見と名く。二十我見の因緣は、能く四百四種の羅惱を生ず。是の如き諸煩惱を離れんが爲の故に、身心を觀する、是を法門と名く。是の如く、比丘は能く身と心とを觀す。

「憍陳如、云何が八人、云何が決定なる。憍陳如、斷見の人は言ふ、一念は斷なりと。常見の人は言ふ、八忍は斷なりと。是の二種の人、俱に決定を得、後に煩惱を離るゝに、俱に亦妨無し。憍陳如、能く 五三 八忍を得る、是を八人と名け、十六心を得る、是を決定と名け、是を如法と名く。

「憍陳如、若し比丘有り、出入の息を成ずれば、八人の名を得、亦決定と名く。憍陳如、若し比丘有り、數息を成就せば、即ち信根乃至慧根を得、若し五根を得れば、即ち世間第一法を得るなり。是の如きの比丘は、能く一切疑網の心を破す、是を眞實に聖行を修集すとは名く。若し比丘有り、

なり。世第一法は、苦諦の若の一行相を觀す。世と有漏法の謂にして、有漏法中、此の觀智に超ゆる者無きが故に世第一法といふ。

【四六】 斷見と我見。斷見は一切の事物は空なりとする見解。我見はまた常見といひ、一切の事物は實有にして常ありとする見解。佛陀はこの二見を兩極端として排斥し、中道を説きたまへり。

【四五】 想、即ち意識なり。この一類は、死後に我に想即ち意識ありとするものにして、十六種の別は、肉體の有無、意識の有限無限、苦樂の有無、意識の種別に就いて、異見を生ずるに由る。

【四六】 無想を説く八とは、死後我に慧無しとする八種の見にして、大抵右に同じ。

【四七】 非想云々、死後我に想有るに非ず、無きにあらずとする見解。

【四八】 普通六十二見を説ける經に在つては、之に相當するものを願として、現在に生じて涅槃を得べしとして、涅槃に種々の解を興ふる見を擧げ、次の六種の斷に於ては、同じく、七類を數ふ。斷は云ふまでも無く、一切衆生の斷滅を主張するものなり。

【四九】 邊は、世間に邊際有り、

び心相とを觀す。初禪じゆに五支あり、一に覺、二に觀、三に離生喜、四に受樂じゆ、五に定なり。五支を具する時、貪恚癡を離る。若し比丘有りて、是の五支を具すれば、是を法行と名け、五事を遠離し、五事を成就し、梵行を修集して大功徳を成す。橋陳如、若し比丘有り、能く二禪を得れば、名けて法行と爲す。若し比丘有り、息の出入を觀じ、心を一處に繋げ、喜樂を遠離すれば、第四禪を得て、不喜不樂なり。何を以ての故に、一心に念を息の出入に繋げ已り、喜樂を遠離して第四禪を得ればなり。

「若し比丘有り、息の出入を觀すれば、則ち五陰を觀ず、若し五陰ごいんを觀すれば、是を法行と名く。若し比丘、一切法行の生滅を見、乃至一切煩惱の生滅を見なば、是を法忍と名く。若し比丘、眼の空なるを見、乃至意識の空なるを見なば、是を空忍と名く。若し比丘、眼の無相なるを見、乃至意識の無相なるを見なば、是を無相忍と名く。若し比丘、眼乃至意識を願ぜざれば、是を無願忍と名く。若し比丘、苦の異、樂の異、不苦不樂の異を觀すれば、是を中諦忍と名く。若し衆生の爲に生死に行かば、是の如きを名けて隨上諦忍と爲す。云何が忍に隨ひ、根に隨ひ、力に隨ひ、覺觀に隨ひ、乃至涅槃に隨ふや。是の如きの法に於て、心著せざれば、是を信忍と名け、是を名けて信と爲し、信根と名けず。若し身心を攝して惡を造らしめざれば、是を精進と名け、進根と名けず。若し能く是の如き等の法を專念せば、是を名けて念と爲し、念根と名けず。心と心數しんずの法とを能く一緣に繋ぐる、是を名けて定と爲し、定根と名けず。若し能く是の如き等の相を觀ぜれば、是を名けて慧と爲し、慧根と名けず。若し是の如き無根を觀せば、是を法行と名く。

「橋陳如、若し比丘有り、頂法ちゆうぽうほふ、世第一法を觀じ、三解脱の空、無相、願と、無常、苦、空とを觀ぜば、是を法行と名け、是を空三昧と名く。是の如き三昧は無壽命を緣じ、無自在を緣ず。無相三昧は盡じんを緣じ、壞を緣じ、滅を緣じ、厭を緣ず。無願三昧は甘露を緣ずるも、甘露の行に非ず。甘露の行にし

【一〇】支は支持の義、それ等の功徳法を以て、禪を支持するが故に支といふ。五支の内、心は心の處なる性。觀は心の細なる性。離生喜と樂は、欲界の惡を離れて、喜樂の二受を生ずるの謂。

【一一】二禪は、初禪に於ける、覺と觀とを棄てて得るなり。更に第二禪の喜受を棄てて第三禪を得、第三禪の樂受を棄てて、第四禪を得るなり。

【一二】四、麗、元、明の三本三に作り、宋本・宮内省本は四に作る。今後者に従ふ。蓋し喜樂の二支を離るは、俱舍論等に依れば、第四禪なればなり。本文も亦、繫心一處、遠離喜樂、得第四禪、不喜不樂、何以故、一心繫念、息出入已、遠離喜樂、得第四禪と云ひ、何以故以下は、得第四禪不辨不樂の説明と見るべければなり。

【一三】小乗の見道以前の修行位に七位あり、三賢と四善根とあり。頂法とは、四善根の第二、世第一法はその善根の

頂法は、具さに四諦十六行相を修す。頂とは、進んで第三の忍位（この位に入れば退墮することなく、進んで見道に入る）上るあり、退いて第一の煖位（この位に下るあり、その分界なれば、以て出頂に墮へたる

ひ、一切の漏を盡すを無生智と名く。復次に我が生已に盡き、梵行清淨なるを、名けて盡智と曰ひ、更に餘の有無きを無生智と名く。是の如き二智を即ち一智と名け、亦一行にして三道を知るとも名く。若し比丘有り、能く三道を斷する、是を法行とは名く。能く是の觀を作すは、是れ心と受とを觀するなり。

「云何が比丘は能く身を觀察するとならば、若し比丘有り、息の出・入を觀すれば、是を身を觀じ受を觀じ心を觀すと名く。云何が名けて息の出入を觀ずとは爲す。息の入・出を、阿那波那と名け、入を阿那と名け、出を波那と名く。出入を觀すること、門の如くにし、向の如くしす。若し比丘有り、能く是の如く觀すれば、是を法行と名く。若し比丘有り、能く觀じ能く數へ、息の出入・冷・暖・長短、若しは身に遍滿するに隨ひ、心を鼻端に繫け、能く新故を觀じ、諸の相を分別して能く生・壞を觀じ、舍摩他を求めて善く定に入り、亦能く息の龜細を觀察し、乃至内身を觀じ、身に身想を作す、是を比丘・法行を修すとは名く。

「憍陳如、數息を修する時は、二事を獲得す、一に惡觀を離れ、二に息の相貌を觀するなり。修集時に隨へば、亦二事を得、一に念心を專念し、二に善の覺觀を離るるなり。冷・暖を觀すれば、亦二事を得、一に出入を分別し、二に心數の相を觀するなり。觀身を修する時、亦二事を得、一に身の輕、二に心の輕なり。生・滅を觀すれば、亦二事を得、一切法は是れ無常の相なるを知り、二に一切法は是れ無樂の相なるを知るなり。

「善男子、法行の比丘、入・出の息を念じ、心を一處に繫けて、云何が數減すとならば、二を數へて一と爲し、三を數へて二と爲し、乃至十を數へて九と爲す、是を數減すとは名く。云何が數増すとならば、一を數へて二と爲し、乃至九を數へて十と爲す、是を數増すとは名く。

「何の故に、數を修するとならば、一切の覺觀を壞するが故なり。初禪を得るの時、息の出入と及

【三】阿那波那、梵に Anapana 數息觀と名く。出入の息を數へて、心を鎮むる觀法。

【三】前の阿那波那なり。

【三】心數は心所の謂なり。

【三】數、原本は増に作る、今三本に従ふ。蓋しこの節は、息の出入の數を計り、以て散亂心を停止することを説くが故なり。

【三】禪又は靜慮に、初、二、三、四を分つは、龜細の次第によつて、心の一境性を分てるなり。この四禪定に依つて、欲界の惑を超へ、色界に生ずるなり。

佛橋陳如に言はく「至心に諦に聽け、當に汝の爲に説くべし。若し比丘有り、如來の十二部經——謂はく修多羅、乃至優婆提舍——を讀誦せんに是を樂讀と名け、法行と名けず。復比丘有り、如來の十二部經を讀誦し、樂んで四衆の爲に敷揚・演説せんに、是をば樂説と名くるも、法行と名けず。復比有り、如來の十二部經を受誦して、能く廣く演説し、其の義を思惟する、是を思惟と名け、法行と名けず。復比丘有り、十二部經を受持・讀誦し、演説・思惟して其の義理を觀する、是を樂觀と名け、法行と名けず。

「橋陳如、若し比丘有りて能く身心を觀じ、心に外の一切相に貪著せず、謙虛下意にして僞慢を生ぜず、愛の水を以て業の田に澆灌せず、亦中に於て識の種子を種えず、覺觀を滅して心の境界都て息み、永く煩惱を離れて其の心寂靜なる、是の如き比丘をば、我れ則ち之を説いて名けて法行とは爲す。是の如き比丘、若し聲聞の菩提・緣覺の菩提・如來の菩提を獲得せんと欲すれば、即ち能く之を得ん。橋陳如、工陶師の坭埴の泥を調し、之を輪の上に置くに、意に隨つて器を成する如く、法行の比丘も亦復是の如し。

「橋陳如、若し比丘有り、法行を修せんには、當に三事を現すべし、一に身、二に受、三に心なり。三事を觀じ已れば、二種の智を得、一に盡智、二に無生智なり。橋陳如、云何が盡智、云何が無生智なるとならば、煩惱を盡すを知るを、名けて盡智と爲し、有支を盡すを知るを無生智と名く。復次に無行の行智を名けて盡知と曰ひ、無行の果智を無生智と名く。諸使を盡すの智を名けて盡智と曰ひ、煩惱を盡す智を無生智と名く。復次に諸行を盡すを知るを名けて盡知と曰ひ、一切の有を盡すを無生智と名く。分別して物を盡す、是を盡智と名け、諸の縛解を知るを無生智と名く。根界を盡すを知るを、名けて盡智と曰ひ、緣界を盡すを知るを無生智と名く。煩惱を覺觀せざるを名けて盡智と曰ひ、果報を覺觀せざるを無生智と名く。復次に三地を盡す智を、名けて盡智と曰

【三】佛の所説を、形式と内容とによつて分てるもの、大集部第一、三六〇頁參照。

【三】坭は水を土に和して柔かくした土、埴ははに、即ち粘土なり。

【三】受は感覺なり。

【四】有は三有（三界）なり、支は因の義、善惡趣に生ずる因なり。

「婆吒置 婆吒置 休婁 休婁 屯豆婁 屯婁 吒吒 吒吒 比莎訶

』是の時四衆、是の陀羅尼を誦し已り、『我れ當に諸の四衆の願求するに隨ひ、我れ悉く當に一切を成就せしむべし。若し我れ來らずんば、即ち十方の諸佛を欺誑すと爲し、亦我をして阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしむる莫からんを』と。

爾の時佛、羅睺阿修羅王、毘摩質多阿修羅王、毘婁遮那阿修羅王に告げたまはく『我れ今此の淨目陀羅尼を以て、汝等に付囑す。何を以ての故に。汝大力有ればなり。若し衆生有つて三寶を信ぜざらんに、能く信ぜしむるが故に』と。

諸阿修羅の言はく『善い哉世尊、我等護すべし。若し衆——比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷有り、若しは佛在世若しは滅度の後に、是の陀羅尼を受持・讀誦・書寫せば、我れ是等に於て、能く八事を施さん。何等をか八と爲す。一に健行、二樂うて法を聽受す、三に心に怖畏無し、四に常に明かにして闇無し、五に善く具足せんことを願ふ、六に解脱、七に辯才を具足し、八に善法増長するなり。世尊、若し阿修羅の父母・兄弟・妻子・眷屬など、是の人を憫まさば、我等當に治すべし。若し我れ此の世界中に於て、佛法を護らすんば、則ち十方の諸佛を欺誑すと爲す』と。

爾の時世尊、四衆を觀已り、憍陳如比丘に告げたまはく『憍陳如、一切の大衆は甚だ法を聞かんことを樂む、無量世界の無量の衆生は、悉く法の爲の故に、此に來集し、咸皆法行・方便を知り、大智慧を成じ、貪欲・一切の煩惱を遠離し、眞實に清行・方便を了知せんと欲す』と。時に憍陳如、佛に白して言はく『善い哉世尊、誠に聖教の如し。世尊、四方世界の無量の菩薩は、悉く四佛の所與の欲を持して來り、并に虚空目の法行を啓受せんと欲す。今正に是れ時なり、唯憍慙を垂れて、衆生の爲の故に、之を宣説したまはんを。世尊、言ふ所の法行、法行の比丘とは、云何が名けて法行の比丘とは爲す。唯願はくは世尊、法行の比丘を分別演説したまはんを』と。

【二〇】羅睺。梵に Rāhu 摩障と譯す。阿修羅の帝釋と戰ふや、彼は日月の光を障蔽すと云はる。

【二一】毘摩質多。梵に Vemata 淨心と譯す。乾闥婆の女を娶て舍脂を生み、帝釋に嫁せしむと。

【二二】毘婁遮那 (Virocana)。遍照と譯す。

に、我等皆當に誠心もて守護すべし」と。西方・北方も亦復是の如くなりき。

爾の時世界の一一に、各十萬の龍王有り、佛所に來至し、頭面もて禮敬したり。爾の時 龜慈國土に一龍王有り、名けて海徳と曰ふ。是れ 阿那婆達多龍王の弟にして、九萬の龍王とともなり。

于闐國土に一龍王有り、樂藏寶と名く、亦是れ阿那婆達多龍王の弟にして、萬八千の龍王とともなり。波羅越國に一龍王有り、名けて山徳と曰ふ。亦是れ阿那婆達多龍王の弟にして、二萬の龍王

とともなり。師子國に一龍王有り、名けて寶藏と曰ひ、四萬八千の龍王とともなり。毘荼國に一龍王有り、名けて長髪と曰ひ、四萬二千の龍王とともなり。念蜜奢山に一龍王有り、名けて婆修吉と曰

ひ、八千の龍王とともなり、烏菴國に一龍王有り、阿鉢羅維と名け、二萬五千の龍王とともなり、乾陀維國に一龍王有り、伊羅鉢多と名け、三萬の龍王とともなり。眞丹國に一龍王有り、名けて

三角といひ、萬八千の龍王とともなり。難陀龍王、優波難陀龍王も、亦無量の龍王と、共に佛所に至り、頭面もて禮敬し、佛に白して言はく、「世尊、我等皆能く是の如き陀羅尼門を受持・讀誦・書

寫し、乃至一字をも忘れず、失はざらん」と。佛の言はく「善い哉・善い哉、善男子、汝等眞實に能く正法を護れ」と。

爾の時世尊、正語天女に告げて言はく「天女、汝能く我が正法を守護するや不や」と。「世尊、如來の在世及び滅度後は、是の陀羅尼流布する處は、我れ當に守護すべし。受持する有らん者には、其の所求に隨ひ、我れ當に之を與ふべし。若し復我が身を見んと欲する者有らん、我れ當に之

を現はすべし。世尊、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の、我を見んと欲する者有らん、當に其の身を淨くして持戒精進し、一日の中に於て三時に洗浴し、食を斷つこと三日、獨靜處若しくは佛

像の邊に在り、若しは塔中に在るべし。若し靜室に處らん、妙香華・種種の幡蓋、及び諸味の漿

を以て、佛を供養し、面を正東に向け、是の如き陀羅尼の句を讀誦せよ」と。

【八】龜茲 (Kucolia)。また屈支に作る。西域の國名、古來佛教繁盛の地なり。西域記卷一參照。

【九】Anavudhpa (無熱)。

池に住む龍なり。無熱池は雪山の北に在り、閻浮洲を潤はす四大河の源なり云はる。

【一〇】梵に羅薩恒那 (Rushana) 今の Khotan の地なり。往古大乘教の行はれし地にして東來の經典、多くこの地を経て來る。西域記卷十二參照。

【一一】執師子國 (Srinjala) 略、今の錫蘭島なり。

【一二】念蜜奢。翻梵語第九には、譯して陶といふと。

【一三】烏菴。梵に Utryana なた烏仗那に作る、北印度の境に在り。

【一四】梵に Apalah。

【一五】乾陀維 (Gandhara)。

北印に在り、古くは印度と希臘との交通の衝にあたり、西紀、紀元前後の作にかゝる佛像の發見せらるゝもの多し。

【一六】伊羅鉢多 (Erapattra)。

香葉と譯す。本行集經三十一參照。

【一七】眞丹。また震旦に作る。漢國を指す。

【一八】難陀等 (Nanda, nira-nanda) は、摩揭陀に住む兒弟二龍王なり。

願はくは憐愍して法輪を轉じたまはんを」と。

爾の時、一切無量の大衆、心に歡喜を生じ、各是の言を作す、「是の如き無量無邊の衆生は、何處より來り、威儀清淨にして無量の徳を具し、慚愧と智慧とを皆悉く成就したり。我れ昔より來、未だ曾て是の如き妙色あり、五通ある大仙をば觀見せず」と。

爾の時世尊、橋陳如比丘に告げたまふらく、「橋陳如、四方に多く無量の菩薩有り、悉く來つて集會するは、聽法の爲の故なり。今當に至心に其の意を清淨にすべし」と。

爾の時世尊、微妙の音を以て四童子に告げたまふらく、「諸の善男子、善く來れり、甚だ決し。何の方面より、何の故に來れる」と。時に四童子、佛足を敬禮し、周匝圍遶したり。

爾の時金剛山童子の言はく、「世尊、南方の、此を去ること九萬二千億恒河沙等の諸の佛世界に、彼に世界有り、金剛光藏と名け、五淖を具足し、佛世尊有り、金剛光明功德如來と號し、十號具足して、今現在に諸の衆生の爲に、雜四諦の法を宣說開示したまふ。彼の佛、我を勸めて此の世界に至り、世尊を問訊せしめ、并に虚空目の法門を聽受せしめんと欲す。世尊、彼の金剛光明功德如來は、敬を致すこと懇懇、世尊を問訊し、并に是の如き陀羅尼を遺はし、能く大光明を作し、煩惱を乾焦し、乃至能く如來十八不共の法を得んと欲す」とて、即ち佛前に於て、是の如き呪を説けり。乃至四童子、亦復是の如くにし、是の呪を説き已るに、其の地即時に六種に震動し、一切の龍王、各此の言を作す、「我等も亦當に共に佛所に至るべし」と。

爾の時東方に二龍王有り、一を牛護と名け、二を寶護と名く。是の二龍王、六萬の龍王とともなり。南方にも亦二あり、一を名けて月と爲し、二を婆修と名く、七萬の龍王とともにも、佛所に來至し、頭面もて敬禮し、前んで佛に白して言はく、「世尊、我等皆能く是の如き法目陀羅尼を受持・讀誦・書寫せん。若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷有り、是の如き法目陀羅尼を受持・讀誦・書寫せん

【二】梵に Kāṇḍikya 本際と譯す。五比丘の第一、初め釋尊の出家するや、淨飯王の命に依つて供奉苦行し、釋尊の苦行を捨てたまふや、他の四人とりに去り、後に、鹿野苑に於て、佛の教化を受け、最初の弟子となる。

【三】故、麗本處に作る、今三本に依る。

【七】遺、麗本遺に作る、今三本に従ふ。

乃至彼の佛、即ち此の陀羅尼を説きたまはく、

『阿羅摩 阿羅摩 阿羅摩 闍蛇邏闍 首路羅闍 伽闍手 婆邏遮維 阿尼遮 阿呬莎邏 呬
伽莎闍那 那烏訶 那邏咄 那烏訶 摩醯首邏遮摩 阿摩呢 阿蛇莎利邏 遮麗遮摩 遮麗散
遮麗那 那唵 那唵摩闍 阿婆呬唵 車婆那唵呬伽禪頭 娑羅戰陀羅 摩醯首邏尼羅那唵 薩
陀摩叉蛇 莎呵

』善男子、汝當に是の陀羅尼を受持・讀誦・書寫し、彼の世界に往くべし。乃至一面にあつて、合掌して立てり。

時に四童子、此の世界を變じ、地の平かなること掌の如くし、香華・幡蓋・七寶を具足して爲に佛を供養するに、一切の天宮・阿修羅宮は、悉く爲に震動し、諸天悅豫し、多く喜樂を受け、咸香華・幡蓋・種種の伎樂を以て、佛を供養したり。

時に四童子、是の如き等を作して、佛を供養し已り、虚空に上昇すること高さ七多羅樹、各四寶を執り、偈を説いて讚歎すらく、

『佛は是れ清淨の大法王なり、諸の衆生の爲に甘露を説き、諸の衆生に於て心地の如く、大寶ある商主にして一切を喫みたまふ。衆生の爲に清淨の法を説き、諸の苦及び煩惱を離れしめたまふ、如來の心は等しくして虚空の如く、其の語微妙にして眞の道を知る。戒禁及び智慧を具足し、永に煩惱を滅して甘露を降らし、法に渴ける者の爲に惡世に出で、智炬の大明もて能く闇を壞したまふ。八聖道を修集し、及び解脱を證得する者無しと雖も、如來は猶ほ故に憐愍を生じ、諸の人天に淨法眼を施したまふ。能く衆生を生死の岸より度し、能く無上の七財寶を施し、能く衆生をして生死を悔ひ、具に三十七助道を修せしめたまふ。法寶は久しく失れはたるを、佛今示したまふ、是の故に無上尊と名くるを得、四方の衆生已に大に集まる、唯

阿邏闍婆婆 三牟婆邏婆婆 三摩邏婆婆 闍提叉蛇婆婆 摩希闍婆涅畔陀 比牟

遮婆婆 那蛇那婆婆 遮隱婆婆 輸盧多婆婆 其浪那婆婆 韃婆婆 迦蛇婆婆 質多婆婆 三

牟陀婆婆 提邏那婆婆 曠那修留提婆婆 莎呵

「善男子、汝當に是の陀羅尼を受持、讀誦書寫し、彼の世界に往くべし。乃至一面にありて、合掌して立てり。

是の時鬘髮、復東方——此を去る六萬千億の佛土——に至る。彼に世界有り、名けて灑頂くわていと曰ひ、五滓を具足す。佛有り號して寶蓋光明功德と曰ひ、十號具足し、亦四衆の爲に雜四諦の法を宣説・開示したまふ。而も彼の會中に、諸の菩薩・聲聞の四衆、比丘 比丘尼・優婆塞・優婆夷など有り、是の寶蓋の大光明を見已り、四方を觀察し、仰いで、寶蓋の佛の頂上に在つて虚空こくう中に住まるを見、即ち佛に白して言はく「是の如き寶蓋は、何處より來り、誰か遣す所たる」と。

彼の佛答へて言はく「西方此を去る六萬千億の諸佛世界に、彼に世界有り、名けて婆婆と曰ひ、五滓を具足す。佛世尊有り、釋迦牟尼と號し、十號具足し、亦四衆の爲に雜四諦の法を宣説・開示したまふこと、我が今の此の土の如くにして異なること無く、乃至如來の法藏を聞かんと欲したまふ。是の故に此の四寶の華髮を遣はし、我より、欲を索む。我れ今之を與へ、并に彼の聖目陀羅尼を贈り、能く大明を作し、煩惱を乾焦し、乃至能く如來十八不共の法を得んと欲す。是の故に我れ今、是の如き聖目陀羅尼を遣はし、彼の世界に至り、彼の如來に贈らんと欲す」とて、即ち虚空こくう聲童子に告げたまふらく「善男子、汝彼の婆婆世界に往き、我が名字なづなを稱りて、彼の佛を問訊し、并に是の如き聖目陀羅尼を以て、遠く相贈遣すべし」と。

乃至復無量の菩薩聲聞の大衆有り、同音にして言はく「善哉、世尊、我等も亦彼の世界に詣り、彼の佛を禮戴せんと欲し、并に未だ曾て聞かざる所の虚空目の法門を啓受せんと欲す」と。

那 呵那叉陀 阿婆呌伽 那由多文陀 婆婆邏 阿若伽伽 薩遮首留婆躡婆東那 莎呵
『善男子、汝當に是の陀羅尼を受持・讀誦・書寫し、彼の世界に往くべし』乃至一面にあつて合掌して立てり。

是の時寶鬘、復北方、——九萬九億の諸佛世界を過ぎて、彼に世界有り、名けて爲常と曰ひ、五滓を具足せる——に至る。かしこに佛世尊有り、發光功德と號し、十號具足し、亦四衆の爲に雜四諦の法を宣説開示したまふ。而も彼の會の中に諸の菩薩聲聞の四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷など有り、是の寶鬘の大光明を見已り、四方を觀察し、仰いで寶鬘の、佛の頂上に在り、虚空中に住するを見、即ち佛に白して言はく『世尊、是の如き寶鬘は何處より來り、誰の遣はす所たる』と。彼の佛答へて言はく『善男子、南方此を去る九萬九億の諸佛世界を過ぎ、彼に世界有り、名けて娑婆と曰ひ、五滓を具足す。佛世尊有りて、釋迦牟尼と號し、十號具足し、亦四衆の爲に、雜四諦の法を宣説・開示したまふこと、我が今の此の土の如くにして異なる無く、乃至如來の法藏を開かんと欲したまふ。是の故に此の四寶の華鬘を遣し、我より欲を索む。我れ今之を與へ、并に彼の光目陀羅尼を贈り、能く大明を作し、煩惱を乾焦し、乃至能く如來十八不共の法を得んと欲す。是の故に我れ今、是の如き光目陀羅尼を遣はし、彼の世界に至り、彼の如來に贈らんと欲す』とて、彼の佛即ち勝意童子に告げたまふらく『善男子、汝彼の娑婆世界に往き、我が名字を稱して彼の佛を問訊し、是の光目陀羅尼を以て、遠く相贈遺すべし』と。

時に彼の衆中に、復無量の菩薩聲聞有り、同聲にして言はく『善い哉、世尊、我等も亦彼の世界に詣り、彼の佛を禮觀せんと欲し、并に未だ曾て受けざる所の虚空日の法門を啓受せんと欲す』と。乃至彼の佛即ち此の陀羅尼を説きたまふらく、

【閻摩摩 閻婆摩 閻婆摩 阿拘盧吒 比婆闍婆 摩訶陀摩 呌婆 阿邏闍 散菩陀若呌婆

もて足を禮し、供養・恭敬し、尊重・讚歎・右邊に匝し、却いて一面に在り、合掌して立てり。

是の時寶臺、復西方一八萬億の諸佛世界を過ぎて、彼に世界有り、名けて梵闍と曰ひ、五淨を具足するに往く。かしこに佛世尊有り、號して智鏡如來・應・正遍照・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ひ、亦四衆の爲に是の如き難陀諦の法を宣説したまへり。彼の時會中に、諸の菩薩・聲聞の西衆・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷有り、是の寶臺の大光明を見已り、四方を觀察して、寶臺の、佛の頂上に在つて虚空中に注まれるを仰見し、即ち佛に白して言はく「世尊、是の如き寶臺は何處より來り、誰か遺す所たる」と。

彼の佛答へて言はく「善男子、東方の此を去る八萬億の諸佛世界を過ぎ、彼に世界有り、名けて娑婆といひ、五淨を具足す。佛世尊有り、號して釋迦牟尼と號し、十號具足し、亦四衆の爲に難陀諦の法を真説・顯示したまふこと、我が今の此の土に於けるが如くにして、異なる無く、乃至如來の法藏を闍かんと欲して、是の故に彼の佛、此の寶臺を遺て、我より欲を索む。我れ今之を與へ、并に彼の淨目陀羅尼を贈り、能く大明を作し、煩惱を乾焦し、乃至能く如來十八不共の法を得んと欲す。是の故に我れ今、是の如き淨目陀羅尼を遺はし、彼の世界に至つて彼の如來に贈らんと欲す」とて、彼の佛、即ち勝幢童子に告げたまはく「汝彼の娑婆世界に往き、我が名字を稱して彼の佛を問訊し、并に是の如き淨目陀羅尼門を以て、遠く相贈遣せしむ」と。

時に彼の衆中に、復無量の菩薩聲聞有り、同聲にして言はく「善い哉世尊、我等も亦彼の世界に詣り、彼佛を禮観せんと欲し、并に未だ曾て聞かざる所の虚空目法門を聽受せんと欲す」と。乃至彼の佛、即ち呪を説いて曰はく、

「蜜呵 蜜呵 蜜呵 阿婆蜜呵 薩多蜜呵 修婆舍蜜呵 那婆蜜呵 修破婆 阿訶伽提

比叉 闍陀私羅 那羅烏難 呌婆波囉 那邏邏禪 修叉 翅奢私羅 阿婆羅私摩 摩訶則提闍

【二四】佛徳を十種の方面より讚へて立てたる名稱なり。

哉。善い哉、諸善男子、宜しく是れ時なるを知るべし。是の金剛童子は、能く汝を調伏す、即ち是れ汝等の善知識なり」と。

爾の時彼の佛、即ち金剛山童子に告げて言はく『善男子、諦に聽き諦に聽け、我れ當に汝の爲に、是の如き法目陀羅尼を宣説すべし』とて、即ち呪を説いて曰はく、

阿婆 阿婆 阿婆 若那蛇咤 摩訶摩咤 三摩咤婆婆 樹提 阿咄 那婆那蛇薄 佛闍維
哆 安豆頼哆 闍邏迦哆 阿那禰德又 凡浮婆 那婆荼婆 勒又盧戰那 莎致咤婆 陀邏尼又
闍 波邏迦啞婆 鞞那又 婆那鞞吼 阿那迦咤 戰荼呬修 波陀咤多 修盧遮那 盧戰那婆
盧遮蛇若婆婆斯 莎呵

『善男子、汝當に是の陀羅尼を受持・讀誦・書寫し、彼の世界に至り、釋迦牟尼如來を問訊して、我が辭の如くに問へ、四部弟子は樂んで法を受くるや不や、四姓の人、能く供養するや不や。衆生の心、濁亂せざるや不や、常に能く如來に親近するや不や、復能く佛を尊重・讚歎するや不や、佛の正法を増廣・流布するや不や。金剛光明功德如來は、此の法目陀羅尼門を以て、遠く世尊に贈り、能く大明を作し、一切の諸惡煩惱を乾焦し、乃至如來の十八不共の法を獲得せしむ』と。

時に金剛山童子、是の如き陀羅尼を受持・讀誦・書寫し已り、諸の大衆に告ぐらく『若し彼の娑婆世界に往き、釋迦牟尼如來を觀見せんと欲し、并に未だ曾て聞かざる所の虚空目法門を啓受せんと欲すれば、應當に一切の色想を遠離し、亦分別の想を念する莫るべし、常に當に虚空の相を修集し、一切の取捨等の相を遠離し、一切の塵勞等の相を放捨し、諸の結縛を解して、専ら虚空を念すべし』と。

爾の時大衆、咸是の言を作す『善哉・善哉、善男子』と。即ち前んで佛を禮し、禮し已つて念を繋げ、虚空の相を觀じ、一念の頃にして即ち此の娑婆世界に來至し、釋迦牟尼如來を觀見し、頭面

【二】比丘等の四衆をいふ。

【三】塵勞とは、煩惱の謂なり。煩惱は眞理をけがし、身心を勞亂せしむるが故なり。

して龜嶺かめりゅう舞ま、大憍慢を生じて多く惡業を作し、調し難く解し難し。是の故に、釋迦牟尼如來は、この大集の爲に大集中に於て正法を演説したまふは、是の如き諸の大惡事を壞せんが爲なり。彼の世界中の所有衆生は、未得の中に於て得の想を作し、未證の中に於て證の想を作し、未修の中に於て修の想を作す。是の故に彼の佛、大衆の爲に法を説き、如法に修行したまふは、是の如き大憍慢を壞せんが爲の故なり。靈智及び無生智を得しめんが爲に、將に虚空目の法行を宣説せんと欲す。聲聞・緣覺・佛の果を得しめんが爲に、如來無上の法藏を開かんと欲す。是の故に彼の佛、此の寶鬘を遣し、我より欲を索む、我れ今之を與へ、并に是の法目陀羅尼を以て、彼に贈つて、信と爲し、能く無量微妙の大明を作して、能く一切の諸惡煩惱を乾かし、能く一切の所聞しよんを持して忘れず、能く一切心の垢汚を淨め、一切の諸善・禁戒ぎんけいを護り、能く一切の大智慧中に入り、能く一切無上の三昧を護り、能く己心を護つて他に喜心を生じ、聖法を受持して諸病を遠離し、求むる所の法をば願の如くに得、一切の資生の、須つ所を増長し、亦能く一切の善根を長養し、能く惡王及び四姓と、諸の惡鬼神・鳥獸・水虫とを調し、一切諸善の根本を護持し、能く如來の一切諸法を得、乃至能く十八不共の法を得しめんと欲す。是の故に我れ今、是の如き法目陀羅尼を遣して彼の世界に至らしめ、釋迦如來に與へんと欲す」とて、即ち金剛山童子に告げて言はく「善男子、汝彼の娑婆世界に往き、我が名字を稱して、彼の佛を問訊し、金剛光明功德如來は、是の法目陀羅尼を以て「遙に世尊に贈る」と」。金剛山童子の言はく、「世尊、善哉・善哉、我れ亦往いて彼の佛を禮觀せんと欲し、并に未だ會て聞かざる所の、虚空目の法門を啓受せんと欲す」と。

爾の時復六萬億の菩薩摩訶薩と八十千億の聲聞大衆有り、同聲にて言はく「世尊、我等も亦彼の世界に詣り、彼の佛を禮觀せんと欲し、并に未だ會て聞かざる所の虚空目の法門を啓受せんと欲す。唯願はくは如來、我に神力を加へて往返を得せしめたまへ」と。彼の佛、答へて言はく「善い

【一】 信はしるしなり。

【二】 法。麗本に無し、今元明二本に依る。

を親見すれば、是の人は無明の慢を破壊せん、若し善知識に親近する有らんに、是の人速に甘露味を得ん。若し能く生死を呵責すれば、是れ則ち能く彼岸に至るを得、是の人戒を具足して多聞ならん、亦禪定・智慧・聚を具せん。若し人、煩惱魔を壊し、陰魔及び死魔を遠離し、天魔と諸の眷屬とを摧伏せんと欲すれば、常に當に無上尊に親近すべし」と。

是の偈を説き已るに、聲聞弟子にして憍慢有る者、咸是の念を作す「如來は我れ並びに汚心有るを知り、是の故に我が爲に是の如き偈を説きたまふ」とて、即時に心中に大慚愧を生じ、及び四天下の佛の諸弟子も、亦復是の如く慚愧心を生じ、一念の頃に悉く來つて集會したり。爾の時無量百千萬億の聲聞の大衆、悉く來つて聚集したり。是に於て、佛、衆の會已に定まれる知り、即ち爲に雜眞諦を宣説したまへり。

時に此の寶鬘、直に南方——九萬二千恒河沙等の諸佛の世界を過ぎ、彼に世界有り、金剛光藏と名くる——に往く。其の土の衆生五淨を具足す、佛・世尊有つて、金剛光明功德如來・應・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號し、亦四衆の爲に、是の如き雜四眞諦の法を宣説したまへり。而も彼の會中に、諸の菩薩・聲聞四衆——比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷——有り、是の寶鬘の大光明を見已り、四方を觀察するに、寶鬘の、佛の頂上に在つて、虛空中に住まると仰ぎ見て、即ち佛に白して言はく「世尊、是の如き寶鬘は、何處よりか來れる、誰か遺す所たる」と。

彼の佛答へて曰はく「善男子、北方此を去ること、九萬二千恒河沙等の諸佛の世界を「過ぎて」、彼に世界有り、名けて娑婆と曰ひ、佛世尊有りて、釋迦牟尼如來・應・正遍智・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號し、亦具足五淨の衆生の爲に雜四諦の法を宣説開示したまふこと、我が今の此の土の如くにして異なる無し。善男子、彼の佛世界の所有衆生は、甚だ大に癡闇に

【七】人。麗本能に作る、今三本に依る。

【八】煩惱は人の心身を惱亂して、菩提を障礙するが故に魔を以て呼ぶなり。

【九】純粹に四諦のみを説かず、種種まじへ説かれたるなり。

卷の第二十二

虛空目分第十之一 初聲聞品第一

爾の時世尊、故に欲色二界中間の大寶坊中に在し、無量の比丘僧、諸大菩薩の與に圍繞せられて、説法したまへり、時に舍利弗、目犍連等、出家して未だ久しからざりき、舍利弗・目連の因縁を以て、聲聞法に四眞諦を雜へて説きたまへり。爾の時衆中に諸人輩有り、本是れ外道にして、諸根闇鈍なるに、自ら智有りと謂ひ、大橋慢を起し、色の慢・欲の慢・無明の慢・勝の慢・非法の慢を増長して、未だ第二・第三・第四の沙門果の證を得ざりき。是の故に如來、是の如き等の爲に、中道を宣説したまひ、是の如き惡煩惱を離れしめん爲の故に、如來是の中道の義を説きたまへる時、是の如きの諸人、各各斷見・我見を論説したり。

爾の時世尊、即ち是の念を作したまふ「哀れなる哉、諸人、本外道なるが故に、佛法に入ると雖も、猶ほ大慢を生じ、未得の中に於て得の想を生じ、未知の中に於て知の想を生じ、如來の法中に於て修行せず。四諦に願すとも雖も、四無礙智を得る能はず、乃至第四の證果を得ず」と。

爾の時世尊、二手もて瞻波の華鬘を擧捉し、大誓願を發したまふに、願力を以ての故に、華鬘中より四寶を出生せしめたまふ。一に帝釋寶、二に天光寶、三に金剛光寶、四に勝諸光寶なり。一の寶中に大光明を出して、遍く此の間の娑婆世界を照らす。光明出で已つて、之を虛空に擲げたまふ。時に華鬘中に是の偈を説いて言はく、

『鬘髮を除くと雖も結を去らず、染衣を被服するも、染を離れず、佛を示して師とは爲すも、教に隨はざれば、是の如き人は大衆を汚す。如來の正法を宣説したまふ時、而も復至心に聽く能はずんば、是の人は眞實義を得ず、亦諸の煩惱を離るる能はず。若し能く實の法性を以て、衣を染むればなり。』

【一】斷見は一切斷滅すとの見解、我見は實我有りと執するもの。佛よりすれば、共に一邊の義論にして中道の説に非ず。佛の所説は斷常、無有を離れたるが故に中道なりとす。

【二】大慢に我慢の大なるもの。

【三】また四(無碍)辯ともいふ。法・義・辭・樂説の四種にして、諸佛菩薩説法の智辯なれば、意業に約して智といひ、口業に約して辯といふ。

【四】瞻波(Campaka)は樹の名、その花香氣あり、遠く薫ずといふ。

【五】染衣とは、僧の衣なり、木蘭色等の壞色(即ち混合色)を以て、衣を染むればなり。

【六】染は淨に對し、乘・煩惱をいふ。

佛是を説き已りたまふに、諸天・世人、聞き已つて歡喜信受して奉行したり。

大方等大集經卷第二十一

寶幢分中還本品第十三

四六九

上虛空中に種種の華を雨らし、微妙の伎樂、鼓せざるに自ら鳴り、種種の諸香もて以て供養し、一切の大集は悉く共に合掌して諸佛を禮敬したり。

爾の時梵天、月香佛に白して言はく『世尊、是れ誰の神力たる、幾の福德をか成ずる、未來世に於て能く信じて是の如き經典を受持・讀誦・書寫するや』と。『梵天、皆是れ十方現在の諸佛の本願力の故に、魔衆を破壊し、國の霜雹・暴風・惡雨を除き、正法を護持し、衆生を調し正道を宣示せんが爲なり。亦是れ諸佛の本願力の故に、來世の衆生は、十法を成就し、能く未來に於て正法を護持せん。是の人は亦諸天の護る所と爲らん。梵天、若し人有り、能く念心と善意の方便とを具足せば、是の人則ち能く正法を擁護し、五欲を貪らずして常に空を修習し、忍辱なること地の如くにして深大の忍を得、四攝の法を以て衆生を攝取し、此彼無礙にして、清淨の菩提道を修行し、寶幢三昧を行ぜん。是の如きの人は、未來世に能く正法を護り、書寫し・受持し・讀誦し・解説せん。是の人、身を捨せんに、十方現在の諸佛及び比丘僧諸菩薩等を見ることを得、亦諸佛所説の妙法を聞き、聞き已つて即ち聖人の喜樂を得、一切不善の法を滅除して、清淨なる諸佛の國土に生ずるを得、常に大乘の經典を演説するを聞き、終に五淨世界に生れず。常に娑婆世界の是の如き諸佛に親近するを得ん。是の人後の餘の五十年に於て、佛力を以ての故に、則ち能く如來の正法を護持せん』と。

爾の時、釋迦牟尼佛、梵天に告げて言はく『是の經典流布の處に隨ひ、其の土には一切の惡事・惡雨・疾病無く、受者と聽者とは身に患苦無く、衣食に乏しきこと無けん』と。

爾の時華幢佛、諸の大衆に告ぐらく『若し此の娑婆世界に滿つる微妙の七寶を以て、十方の佛に施さんとも、如かず人有つて、佛滅後の餘の五十年に於て、是の經を受持・讀誦・書寫して得る所の福多からんには』と。

【六】 唐譯には大梅檀香佛と名く。

【七】 唐譯には、次にこの十法を掲ぐ。その内容は、本文次下に述ぶる所とキ、出沒あり。

と欲す」と。

爾の時、釋迦如來、曠野鬼に告げたまはく「善男子、十方の諸佛は今已に、汝に神通の力を施したまふ。便ち之を説くべし」と。時に曠野鬼、即ち起つて合掌し、呪を説いて言はく

「豆摩 豆摩 陀摩 陀摩 豆摩 豆摩 那那羅 尼羅 究吒尼 究吒尼 摩訶究吒尼 吒吒吒

株 摩訶吒吒吒 阿婆婆 阿比 利尼 利尼 摩訶利尼利尼 利彌 利彌 陀利徒 摩

訶利徒 首流首流 摩訶首流 首流多 摩訶首流首流 郁究摩 仇摩 仇摩 仇摩那 利彌

利彌 希利 希利 希利 希利 希利 希利 希利 希利 希利 希利 希利 希利 希利 尼彌

尼彌 希尼 希尼 牟尼 牟尼 婆邏婆邏婆邏 路迦那利也 祇禪 祇禪 時禪力

婆婆 時邪 時邪 時邪 邏沙婆 莎訶

『世尊、國土有り、此の呪を誦する處に隨ひ、彼の諸惡鬼は、是の呪を聞くと雖も、諸の衆生に於て、猶ほ惡心を懷き兇暴にして伏し難く、法教を受けず、慈心を起さざらん、我れ是等の諸惡鬼の爲の故に、更に此の呪を説き、以て之を調伏せん。

「阿車 阿車 牟尼 牟尼 尼休休 牟尼 牟尼 摩那邏沙婆 休休 阿尼羅那茶 阿多但茶

阿多阿提 流吒 希尼 希尼 希利 希利 希利 希利 希利 希利 希利 希利 郁仇摩

仇摩 仇摩 仇摩 希梨 希梨 希梨 尼利 尼利 摩訶尼梨 三牟陀呼吒 呵吒 阿吒 阿

吒 陀羅咩吒 又婆咄 又婆咄 卑利癩比 阿波 浪闍 婆由 阿迦奢 啍啍啍 究脾 婆窮

脾 阿又窮脾 視鞞窮脾 薩多伽窮脾 邏闍窮脾 薩多兜窮脾 莎呵

寶幢分中 還本品 第十三

是に於て十方無量の諸佛、各各本の佛世界に還らんと欲したまふに、其の地即時に六種に震動し、

【六五】唐譯、諸佛還國品第十

もて彼の佛を供養し、既に供養し已つて皆阿耨多羅三藐三菩提心を發したり。一切衆生を調伏せんと欲したるが爲なり。尸棄、毘舍浮、鳩留孫佛にも、亦復是の如く、皆供養し已り、散脂大士、彼の佛前に於て大誓願を立つらく「願はくは、我來世に、鬼神の身を以て衆生を教化せん、若し弊惡の惡鬼・衆生有らんに、我れ當に三乘の法を演説して、之を調伏し、乃至は無量恒河沙等の惡鬼惡獸をも、悉く調伏せしむべし。然る後乃ち當に阿耨多羅三藐三菩提を成就すべし」と。亦一萬二千の大鬼有り、此の世界に於て大誓願を發し、衆生を調伏せんとしたり。爾の時我れ復、大誓願を發し、「若し惡鬼有つて、如來の是の如き正法を壞せんと欲せんも、我れ當に之を治すべし」と。是の故に、我れ是の如き鬼身を受く。若し惡鬼有つて、能く衆生を殺し、其の心をして亂れしめ、惡心もて殺害し、邪見に深著し、能く刹利・婆羅門・毘舍・首陀をして亂心・作惡せしめ、その國土の中に於て、日月を移轉し、年歳を錯易し、國をして荒亂せしめ、寒暑所を失し、時節を變改し、惡風雨を降して穀米を登らざらしめ、及び一切の樹木果子を壞せんに、願はくは我れ能く調伏教化して三乘に住せしめん。我れ亦其の命根を害奪せず、同じく其の身を受け、與共に軟語もて言談戲笑し、三乘の法を以て之を教化し、惡道を離れしめん」と。若し衆生有り、善法を遠離し、身口意に不善の業を行ぜんには、是の身を捨て已りて三惡道に生れ、或は善惡の諸業を雜へ作す有らんに、是の人捨命して則ち鬼身を受けん。是の故に爾の時、惡鬼滋多にして、善鬼尠少なり、是の故に我れ惡鬼を調伏せんと欲して、現に是の身を受く。亦刹利・婆羅門・毘舍・首陀をして、惡心を遠離せしめんとす。善男子、金剛槌といふ呪有り、是の呪力を以て、一切の惡鬼も、彼の四姓に於て、惡を爲す能はず。善男子、若し都邑・城村・聚落有り、是の呪有る處には、一切の惡鬼も能く爲す無し。是の處の衆生に皆慈心を修し、一切不善の事・惡病・惡雨・亢旱・鬪諍を遠離し、乃至鳥獸も皆善心生じて、一切の諸惡怖畏を遠離す。我れ今此の十方の佛前に於て、大誓願を發し、是の呪を説かん

【八一】尸棄は、梵に *Śikhin*、智度論九に依れば、賢劫の前、第三十一劫に二佛有り、一を尸棄（又と譯す）といふと。過去七佛中の第二佛なり。
 【八二】毘舍浮（*Vishvānu*）は、かの二佛中の一、一切勝、隨業佛など譯す。

爾の時魔王、堅意に問ふて言はく「善男子、是の太白魔王は、何處より來り、何等の力有つて、而も能く一切の魔衆及び諸の黒業を破壊し、瞿曇の斷滅の法を増長するや。我れ今親見するに、心變吐せんと欲す、四方皆闇く、身心苦痛あるに、彼は之を見て甘樂愛著す。唯願はくは憐愍して我が爲に之を説かんと」と。

堅意菩薩の言はく「波旬、皆是れ一切諸佛の威神、是の太白をして是の如き力有らしむ。是の力を以ての故に諸の魔衆を壊し、如來の無上正法を増長す。是の太白菩薩所有の徳力は、乃至人天の能く壞する無し。波旬、汝は三寶に於て、宜しく應に信を生じ菩提心を發し、一切の身口意の惡を遠離すべし」と。波旬の言はく「大士、我れ今方に種種の身口意の惡を造成せんと欲するも、實に菩提の心を發す能はず」と。

寶幢分中 曠野鬼品第十二

爾の時、曠野菩薩は即ち鬼身を現じ、散脂菩薩は即ち鹿身を現じ、慧炬菩薩は彌猴身を現じ、離愛菩薩は狻羊身を現じ、盡漏菩薩は鴉王身を現じ、是の如き五百の諸菩薩等、各各現に種種の諸身を受け、其の身に悉く大香光明を出し、一一の菩薩、手に燈明を執れり。十方の諸佛を供養せんと欲したるが爲なりき。

爾の時、疑心菩薩、至心に是の五百人を觀察し、即ち悉く是れ菩薩大士なるを知り、曠野鬼に語つて言はく「善男子、汝等何の故に是の如き身を現じて諸佛を供養する」と。曠野鬼の言はく「善男子、往古過去九十一劫に、佛世尊有り、號して毘婆尸如來・應・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號したり。我れ爾の時に於て、是の如き等と、同一父母にして共に兄弟たり、五戒を受持し、勤めて精進を修し、聰明にして智慧あり、心に善法を樂み、種種の供具

【七〇】唐譯に堅固意菩薩といふ。
【七二】黒は白に對す、即ち惡業なり。
【八二】この句、唐譯に乃更建立沙門瞿曇、黒黨親眷、説斷惡見と。

【八一】唐譯卷第十、阿吒薄品第十二。

【八二】以下の諸菩薩を、唐譯には、夜叉衆中の大將軍主阿吒薄は長るべき夜叉の形を作し、爲想と名くる夜叉は鹿形を、智炬と名くる夜叉は彌猴形を、掬湯婆と名くる夜叉は狻羊身を、斷流と名くる夜叉は象形をなすと云へり。

所有しやうの信根は、能く傾動かたむする無く、三寶さんぼうを奉敬ほうけうし、已に諸佛より阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみょうさんぼつの記を受くるを得、仙人の像がうを現じ、坐より起つて長跪合掌し、大音聲——諸佛土に遍ねき——を以て、佛に白して言はく「世尊、釋迦如來は本願の因縁により、憍慢を生じたまへるが故に、此の五滓ごじを具足せし世界の謗法の衆中に於て、阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみょうさんぼつを成ずるを得、憍慢を以ての故に、三乘の法を説いて三惡道さんあくだうを脱せしめ、復無量無邊の菩薩の爲に無生忍むじゆじんを説き、十方諸佛の種性を斷ぜざらしめたまふ。是の故に我れ當に未來世に於て至心に擁護し、釋迦の法をして久住して滅せざらしめ、諸の魔衆をして其の便を得ざらしめん。我れ終に如來の正法を壞せじ、若し持する者無ければ、佛法則ち滅せん。若し諸の四衆にして説聽の者無ければ、法則ち衰滅せん。若し未來世の善男子・善女人、三業さんごふを修立し、三寶の性を紹ぎ、三界の諸惡煩惱を壞せんが爲に、正道を修行し、能く衆生の三惡道の苦を壞せんに、一切の魔衆も能く爲す無けん。唯願はくは十方無量の諸佛、我に功德と智慧との二力を施したまはんを。我れ呪を誦せんと欲す、一切惡魔の眷屬を壞せんが爲に」と。

時に十方の佛、同じく共に讚へて言はく「善哉、善哉」と。時に太白魔、即ち呪を説いて曰はく

『阿摩犁 阿漢咄咄 阿闍婆婆 阿闍婆婆 牟羅婆梨 脾也咄婆哈 闍摩婆梨 呵呵』

呵呵 呵呵 伽羅婆吒 闍婆却伽 若却伽 比若訖婆咄伽 阿牟叉邏 又又 又又 又又

牟邏婆呵咄迦 莎佞若 莎波剌婆多 牟邏 阿若若 戰陀修利蛇若若 婆提若若 那婆呵若若

佞邏又若若 那波邊若若 後多拘知若若 多哆多若若 薩菩婆比若若 邏提悉多若若 遮居

邏摩頻婆多叉婆 又摩摩 又波若 差比多 摩羅比沙蛇 莎呵

此の呪を説ける時、地六種に震動し、一切の魔衆、心に怖畏を生じ、一切の八天、乃至なほ迦羅富單那じらふだんななど皆怖畏を離れ、不退轉の菩提心を得たり。

【七七】また迦吒富單那 Kāṭhā-sūdana とよひ、奇臭鬼と譯す。

『毘地離 毘地離 毘地離 毘地離 阿尼地離 希力多毘地離 婆竭邏希力多 毘地離散究婆地離 陀摩叉地離地離 莎呵』

爾の時、十方の諸佛、梵・釋・四王等を讚へて言はく『善い哉、善い哉、汝等今眞に能く正法を護持せよ』と。爾の時梵・釋・四天王等、佛に白して言はく『世尊、我等是の經典流布の處に隨ひ、要ず當に至心に護持すべし』と。十方の諸佛及び諸の菩薩、同じく共に讚へて言はく『善い哉、善い哉、毘沙門等、汝能く眞實に正法を護持すべし』と。

爾の時、娑婆世界に、萬二千の大鬼將軍有りて此の世界を護る。復四萬四千の小將有り、大力及び大功徳を成就し、同音にして言はく『世尊、我等亦當に未來世に於て、是の經流布する有る處に隨ひ、我れ則ち隨つて護るべし。若し法を説かん時には、我れ亦當に往くべし。法を聽く者有らんに、當に其の種種の魔業を壞せんが爲に、説法の者を護り、一切の善法を増長するを得しむべし。當に諸王・大臣・長者を勸めて、其の衣食・種種資生所須の物を施し、亦其の土に兵革種種の事及び惡風雨有ること無からしむべし。若し我れ虚妄ならんには、則ち十方無量の諸佛を誦くなり』と。

爾の時、娑婆世界に一菩薩有り、名けて 疑心と曰ふ、釋迦牟尼佛に白して言はく『世尊、此の娑婆世界に、百億の魔有りや不や。若し其れ有らば悉く來集せるや不や』と。佛の言はく『一切都て集まる』と。『世尊、若し都て集る者、信心有るや不や』。佛の言はく『善男子、皆信心有り、唯波旬の眷屬千人の、當に未來に於て我が法を破壞し、常に過罪を求めんをば除く。是の魔波旬及び其の眷屬は三寶を破壞す、何を以ての故に、皆是れ過去の惡因縁の故なり、過去に善根を種えざる因縁による。善男子、我が法の滅せん時、是の魔波旬と及び眷屬とは、是の如き法に於て乃ち信心を得、菩提の子を種え、菩薩の道を修し、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ん』と。

爾の時、會中に一天魔有り、名けて 太白と曰ふ、已に無量の諸如來の所に於て、功徳を成就し、

【七】唐譯に懷樂菩薩といふ。

【表】唐譯に名けて不去といふ。

寫解說せん。是の如き法師は、若しは都邑・城村・聚落到に於て、多く無量の衆生を饒益せんと欲せんに、當に淨く潔浴し新好衣を著けて香華を莊嚴し、一突上に於て種種の諸甘味の漿を安置して、高座の前に置かん。汝等爾の時、若し來集して護法の師の爲に、諸の惡事を遮して正法を聽受し、自利・利他せざらんには、汝則ち十方の諸佛を欺誑するなり」と。

爾の時梵天、佛に白して言はく「世尊、是の經典流布の處に隨ひ、都邑にまれ聚落到にまれ、我れ當に至心に之を護護すべし。若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の、是の經を説かんと欲せんには、當に淨く洗浴して新淨衣を著し、香華乃至甘漿を聚集して高座の前に置くべし。我れ眷屬と、定んで其の所に往かん。若し我れ往かすんば、則ち十方の諸佛世尊を欺誑すと爲す。此の世界中、是の經流布する有る處に隨ひ、當に其の地をして諸の兵革及び諸の惡事無からしむべし。我今至誠に、十方佛の前に深重の誓を立つ」とて、即ち呪を説いて曰はく、

「安仇呵 登伽 富羅那呵 蛇呬呬 呬呬 婆呬 婆呬 婆呬 居離那呬婆 莎呵

爾の時、釋提桓因、即ち呪を説いて曰はく

「呬婆密 摩奢密奢 那羅呬 阿牟若 阿牟婆呵 阿呬呬 阿呬 阿伽呬時那律唵 莎呵

爾の時、東方天王 提頭賴吒、即ち呪を説いて曰はく

「頻伽闍那 呬婆闍那 羅牟呬 又娑羅 富那呵 阿末伽娑咤 莎呵

爾の時、南方天王 毘留勒叉、即ち呪を説いて曰はく

「郁呬那婆闍茶 三牟陀斯若 多哆周多 婆邏那婆 婆邏闍 莎呵

爾の時、西方天王 毘留博叉、即ち呪を説いて曰はく

「闍路伽 阿郁伽 阿摩婆伽 阿摩婆婆闍 婆闍也牟闍 莎呵

爾の時、北方天王 毘沙門、即ち呪を説いて曰はく

【七】釋提桓因、また帝釋と云はる。大集部第一、六四頁の註參照。

【七】以下の四王は註三五參照。

一切の人天、復是の言を作す『我等も亦能く佛滅度の後に於て、正法と及び四部衆中の、受持するもの、説く者を護持せん』と。時に十方の佛、復讃歎して言はく『善い哉・善い哉、汝等眞に能く正法を護持せよ。善男子、汝等若し能く正法を護持せんには、應當に是の如き諸佛世尊を供養すべし。我等要す當に是の經流布の處、都邑聚落人民眷屬及び受持の者を擁護し、并に土地穀米をして豐熟し・藥木をして滋茂せしむべし。何を以ての故に、是の經流布の處に隨ひ、我れ是の中に於て大力勢有り、力勢を以ての故に、我れ能く之を護り、一切衰禍の事を離れしめ、亦是の國所有の衆生をして、惡業を遠離し慚愧を生ぜしむべし』と。是の時十方の諸佛、讃へて言はく『善い哉・善い哉、汝今眞に能く正法を護持せんには、亦能く十方の諸佛を供養し、持法の者と法を聽受する者とを護れ』と。

寶幢分中 四天王護法品第十一

爾の時釋迦牟尼佛、諸の梵天・帝釋・四王に告げたまはく『善男子、我れ是の如き惡衆生の爲の故に、本願力の故に、大憐愍の故に、此の惡處に於て、阿耨多羅三藐三菩提を成就したり。無明闇冥の、法に渴せる衆生を利益せんと欲するが爲に、常に樂んで煩惱を増長する衆生に、魔衆を破壊し・法幢を建立し、其に法雨を施し、諸の衆生をして煩惱の苦を離れしめ、不可計・無量の衆生をして、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、無量の諸佛及諸菩薩を、悉く來つて此の世界の集會に在らしめたり。衆生の無量の惡業を壊し、三寶の種を紹がしめん爲に、我が般涅槃後は、所有正法を當に汝等に付すべし、汝等便ち當に深心もて守護すべし。若し菩薩の、福德成就する有らんに、是の如き等の輩は、亦能く我の正法を擁護せん。若し衆生有り、已に諸佛に於て、諸の善根を種えたらんには、是の人、後に法の滅せんと欲する時、餘の五十年、正法を守護し、其の義を信敬・受持・讀誦・書

【七】 唐譯・護正法品第十一

稱多羅三藐三菩提を成ずるを得たるは、皆正法を擁護したる因縁に由ればなり。未來・現在も亦復是の如くなり。若し能く是の受者・聽者を護らんには、當に知るべし、佛法久しく住して滅せざらん、是の故に娑婆世界は、天王と人王と當に法を守護すべし、久しく世に住して斷絶せざらん爲の故に。善男子、若し善男子・善女人有り、佛法をして久しく世に住し、滅盡せざらしめんと欲すれば、應當に是の大集經の受者と説者を供養すべし、何を以ての故に、是の大集經は即ち是れ十方諸佛の印封なり、若し能く是の如き大集を供養せば、即ち是れ十方の諸佛を供養するなり。釋迦如來滅度の後、是の經の流布する有る處に隨ひ、若しは經卷乃至その一偈・一句・一字を、聽いて受持し讀誦し解説し書寫する有らんには、其の國主に一切の惡事、即ち消滅するを得、所有樹木・穀米・藥草などには、四大天王甘露を降施し、以て之を益し、國土と王法と悉く增長を得、鄰國の惡王も勤めて和同を求め、各各自ら喜心と慈心とを生じ、一切諸天の佛弟子たるもの、悉く來つて擁護せん。是の如き國土の王子・夫人諸の大臣は、各各慈愍の心を生じ、穀米は豐熟し、之を食して病無く、亦鬪訟無く兵革起らず、諸の惡獸及び惡風雨無く、一切過去の惡業を遠離せん。若し諸衆生の女業有らん者は、現業の生受と及び後受とに、即ち能く五逆罪を滅除せしめん。方等經及び聖人を謗ぜんもの、四重の禁を犯せる。一鬪提の輩など、其餘の惡業は須彌山の如くならんも、悉く能く遠離して善法を増長し、諸根を具足して身口意善く、惡見を遠離して煩惱を破壊し、正道を修集して諸佛を供養し、善法及び内外の事を具足し、諸の衆生をして壽命增長し念慧成就せしめん」と。

爾の時、彌勒菩薩等の九萬七千億の菩薩の、無生忍を得たるもの、是の如き言を作す『我等亦能く佛滅度の後、正法を護持せん、憍憍の爲の故に。當に都邑・城村・聚落に於て、是の經を廣説すべし』と。

爾の時、娑婆世界の無量の諸佛、同聲に讃へて言はく『善い哉・善い哉、善男子』と。娑婆世界の

【六七】若し云云、唐譯相當女に、是諸衆生、所種女身、現生後受、以三法力故、如是等身、一切皆盡と。

【六八】業、麗本は生に作る、今宋本に依る。

【六九】唐譯卷第九、擁護品の餘。

【七〇】四重の禁、また四波羅夷といふ。淫戒 (Aparihāṣya-saṃya)・盜戒 (Apathāna-saṃya)・殺戒 (Vadhu)・大妄語戒 (Uttara manḍya dhamm) を犯すを云ふ。

【七一】梵に Jeehanika 不信と譯す。成佛するの性無きもの。

魔波旬の言はく「世尊、我れ今乃至一念の心も、阿耨多羅三藐三菩提心を發す無し。瞿曇、今未だ能く永に欲界の衆生を斷ぜざるに、云何ぞ我をして一伴侶を失離せしむる。我れ終に三寶に歸依する能はず」と。

寶幢分中 護法品第十

是の時、會中に佛有し、名けて 曼陀羅華微妙香と曰ふ、釋迦牟尼佛に語るらく「過去世の十方諸佛は、憐愍を以ての故に、亦悉く五淨世界に集會し——護法の爲の故に、魔の怨を壞せんための故に、衆生を憐愍するが故に、大智炬を施すが故に、正道を説かんが爲の故に——たるが如く、十方の現在無量の諸佛も、亦復是の如し。今日十方の無量諸佛は、悉く來つて娑婆世界に集會したり。誰にか釋迦佛の法を付囑すべき」と。

釋迦如來の言はく「我の正法は、以て 頻婆娑羅等の諸大國王、四王・帝釋・梵天王等に付囑すべし。是の如き等の衆は能く我が法を護る。若し能く菩提心を發す者有らば、當に知るべし、是の人則ち能く法を護らん」と。

爾の時、一切の大衆——所有天王・梵王・龍王など、異口同聲に是の如き言を作す「世尊、我等要す當に至心に法を護るべし。何を以ての故に、如來の正法は得難く値ひ難し。一佛界中の無量の佛の會も、亦復遇ひ難きに、十方諸佛は、尙ほ衆生の爲に、來つて集會したまふ、我等云何ぞ正法を護らざらん」と。爾の時、十方の諸佛、同聲に讚へて言はく「善い哉・善い哉、善男子、若し刹利にして能く法を護る者有らば、所有の國土に、衰惡の事・四百四病を、皆除滅せしめ、及び其の國土の、所有樹木・華果・穀米を滋茂・豐登せしめ、其の人民の親戚眷屬を護つて、諸の惡を離れしめん。若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷有らば、亦當に之を護るべし、何を以ての故に、過去の菩薩の、阿

【六三】 唐譯、擁護品第十の一、

【六四】 同には單に曼陀羅華と
いふ。

【六五】 梵に *Pratibhava* また
瓶(逆)沙に作る。佛在世時の、
摩揭國王にして深く佛法に歸
したり。晩年、逆子阿闍世の
爲に幽せられたるを以て有名
なり。

【六六】 登は熟するなり。

方の佛、二正士しんじの大誓願だいせいがんの爲の故に、即ち呪まじなを説いて曰はく、

「樹提婆婆 持律提婆婆 牟尼婆婆 薩多婆婆 富若樓伽婆婆 曠那婆婆 摩訶迦留那婆婆 摩訶伏律多婆婆 阿曇呵婆婆 流提婆婆 闍提婆婆 婆利羅婆婆 却伽婆婆 婆山婆婆 跋多婆婆 阿提單那婆婆 阿摩婆婆 阿頗那婆婆 多龍必婆婆 復多拘置婆婆 尼提提婆婆 梨究舍羅婆婆 梨香那婆婆 梨陀兜婆婆 梨比目叉婆婆 梨道屠羅婆婆 賴吒提那婆婆 婆婆 婆婆 婆婆 三摩多 阿那若三摩多 咤咤咤咤咤咤咤咤 婆咤思提 薩婆佛咤究舍羅牟尼阿提啞那 莎呵

是の呪を説き已り、復二人に告げたまふらく「善男子、汝等若し衆生を教化せんと欲すれば、應當に是の如き等の呪を受持すべし」と。時に莊嚴華菩薩、諸の菩薩——其の數十萬——の與に、是の如き言を作せり「十方諸佛の、衆生の爲の故に、説きたまふ所の神呪をば、我等要す當に受持して心に在らしむべし。若し我れ今十方の佛前に於て、大願を立て已り、是の神呪を聽いて受持する能はざれば、則ち諸佛世尊を欺誑しまつると爲し、亦我をして阿耨多羅三藐三菩提を得しむる莫れ。若し人・天有りて是の呪を持せんに、設たまひ其に於て惡心を起す者有らんも、我れ若し護らすんば、我をして無上道を成ずるを得ざらしめよ。若しは比丘・比丘尼、優婆塞・優婆夷など、是の呪を受持せんに、亦能く是の四衆に於て惡心を起す者有ること無けん」と。時に十方の佛、同聲に讚へて言はく「善哉・善哉、善男子、汝能く無上の法雨を受持せん」と。

爾の時釋迦如來、魔波旬に告げたまはく「汝は佛法に於て當に信心を生ずべし。汝の因縁を以て、當に無量無數の衆生をして解脱の果を得しむべし。汝今一切の伴侶を失離す。誰か當に汝の與に復共に惡を成すべき。我れ憐愍するが故に、惡惡に告教す、汝速に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし」と。

ん。唯願はくは、世尊、此の大衆「の前に」於て、我が與に記を授けたまはんと」と。爾の時、一切の十方諸佛、讚へて言はく「善哉・善哉、釋迦如來は當に汝に記を授けたまふべし」と。

爾の時世尊、吉意に告げて言はく「善男子、汝は當來に、蓮華世界に於て、成じて佛と爲るを得、號して善見と曰はん。吉意女の如く、地天・水天・火天・風天、虚空天、種子天・華天・果天、山天・樹天・草天、遶天・瀾天、寶天・四天下天、乃至六萬七千の神天も亦復是の如く、皆是れ菩薩にして現に女像を受け——衆生を調伏せんが爲の故に——是等の女天は悉く授記を得て、當に阿耨多羅三藐三菩提を成すべし。現に女像を爲して教化する所以は、衆生をして女身を轉ぜしめん爲の故なり。若し男身を轉じて女身を得んこと易きも、若し女身を轉じて男と爲さんこと則ち難ければなり。是の故に此の女身を以て、是等の六萬七千の諸女を教化し、授記を得しめ已る。百億の龍王、百千億の夜叉、百萬億の阿修羅、七萬億の天、九萬九千億の魔王、恒河沙等の人——所謂刹利・婆羅門・毘舍・首陀、數ふべからざる拘辦荼等、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無數の衆生は不退轉の菩提心を得、數ふべからざる衆生は菩薩の三昧を得、數ふべからざる衆生は無生忍を得、數ふべからざる衆生は陀羅尼を得、數ふべからざる衆生は菩薩地を得、計るべからざる衆生は忍辱を成就し、計るべからざる衆生は沙門果を得、計るべからざる衆生は諸漏を盡すを得、計るべからざる衆生は聲聞の心に於て退轉有ること無く、計るべからざる衆生は緣覺の心に於て退轉有ること無く、計るべからざる衆生は不退の心を得ん」と。

寶幢分中 悲品第九

爾の時釋迦如來、諸佛に白して言はく「世尊、我を憐愍するが故に悉く此の娑婆世界に來集したり」と。時に莊嚴華・吉意菩薩、護法の爲の故に、深重の願を發し、願の如くに即ち得たり。時に十

【五】唐譯は偈を以てす、その相當文にいふ、蓮華清淨最上刹、得佛號、毗盧遮那と。
【六】唐譯は續いて持地、地上、示現灰、動衆生離塵、無障礙燈、妙香說、袈裟色の諸菩薩に記を授けて、順次に、智自在、上勝因、燈火、月光と號すべきを述ぶ。
【六】抵は塚なり丘なり。

界を法行と名け、佛を功德意と名けん」と。時に莊嚴華、既に記を聞き已り、即ち香華を以て如來を供養したり。

爾の時、會中に一菩薩有り、名けて吉意と曰へるが、娑婆世界の十方諸佛に白して言はく、「世尊、是の人は既に賢劫の初に於て迦維鳩孫陀佛の所に於て、大誓願を發し、願はくは女身を以て無量の衆生を教化成就し、亦四百四病を遠離せしめんための故に、四百四の善方便を説かん」とて、根藥・果藥・散藥・丸藥・下藥・吐藥・阿伽陀藥・油・蘇・湯藥などの各四百四——是の如き等を以て衆生を調伏し、復四萬四千歳中に於て、迦維鳩孫陀佛及び衆僧を供養・恭敬し、佛を供養し已つて即ち受記を得たり。彼の佛告げて言はく「善男子、未來に衆生の壽命百三十年ならんとき、當に如來有つて釋迦牟尼と號すべし。大願力を以て、娑婆世界に當に十方無量の諸佛菩薩集會する有るべし、是の大集の時、汝彼の中に於て、當に阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを得べし」と。迦那迦牟尼・迦葉等の佛も、亦復是の如くなりき。是の人、爾の時、彼の佛に白して言さく「世尊、我れ本願力を以ての故に、常に女身を以て種種の藥を持し、一切病苦の衆生に給施せん。我が是の願と福德力とを以ての故に、一切の樹木華果、悉く甘露の味を出し、若し食する者有らんに、即ち是れ我が檀波羅蜜の因なり、若し我が是の如く施する所の華果・穀米の甘露味を食する者有り、毀業を捨除し淨戒を受持せば、即ち是れ我が尸波羅蜜の因なり、我が食を受け已り、勤めて精進を行じ、善法を修集せば、即ち是れ我が進波羅蜜の因なり、堪忍して戒を持し、思惟して善を修すれば、即ち是れ我が尸波羅蜜の因なり、深く諸法無常の相を觀ぜんに、即ち是れ我が禪波羅蜜の因なり、法の苦・空・無常・無我を觀ぜんに、是れ我が般若波羅蜜の因なり」と。是の世界に、女身を以て、衆生を教化し調伏して、病苦を離れしめたる如く、十方の世界にも亦復是の如くなりき。世尊、我れ是の事を説き、莊嚴華をして精進の力勢を増長成就せしめ、如來の滅後には、我れ當に彼と共に佛法を護ら

【五】唐譯に成就智と名く。
【五一】 Kāśhāpina の音寫、舊譯に拘留係といふ。

【五二】唐譯によれば、四百四病を治せんが爲に、大地の精味を取り、諸の草木の根を混じて、四百四病を和合し、藥の功能に隨つて用ふるに、病皆消滅すと。次句にいふ根藥、果藥とは、この、根を用ひて作れる藥、果實を以て作れる藥なり。

【五四】下藥は唐譯の三本に瀉藥と作す。下劑ならん。

【五五】阿伽陀 (Agatha) 普去、無價など譯す。不死藥、丸藥なりといふ。

【五六】油・蘇藥は、唐譯に蘇煎藥、油煎藥とす。蘇藥とは、酥を混じて煎じたる藥なるべく、油藥は、油を以て煎じたる藥ならん。

【五七】迦那迦牟尼 Kanaka-nanda はまた拘那含牟尼とも寫す。賢劫中の第二佛にして、過去七佛中の第二佛にして、人壽三萬歳の時、清淨城に生る。迦葉佛 (Kāśyapa) は過去五七佛中の第一、人壽二萬歳の時に出世成道したまへる佛。釋尊の直ぐ前の佛たり。

【五八】唐譯にはこゝに六波羅蜜の一一を擧げず、最後に以此善根、令得我具足、般若波羅蜜と云へり。

て果さしむべし。汝既に果し已つて、當に無量の衆生を利益するを得べし」と。

爾の時魔王、即ち女身を以て、此の陀羅尼を説かく、

「遮彌咤 遮呬咤 遮呬咤 混伏多阿提 嚩呵 嚩呵 嚩呵 沫維 沫迦 娑維知 比婆婆比

娑維婆利地離 娑維摩希地離 娑維嚩時離地離 多波蛇沫迦 休休休休 阿沙伽闍脾 多咤

多咤 多咤 婆油婆嚩 烏波那蛇 薩多波陀 頻闍破羅 富達沙陀 陀那陀薄那 遮居離闍移

闍嚩嚩呵尼 沫維沫迦 三藐波羅提波那婆延 薩多迦利 蛇摩呬 摩呬 摩呬 闍婆羅 莎

呵

「世尊、是の陀羅尼流布の處は、若しは國土・城邑・聚落・村屯ならんも、我れ當に中に住まりて、衆生を調伏し、悉く無上の佛道を具足せしむべし」と。

爾の時、一切の十方諸佛と無量の菩薩、梵・釋・四王、阿修羅・乾闥婆・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽、人非人等とは、同聲に讚へて言はく「善い哉・善い哉、善男子、汝能く是の女人の身を以て、如來の無上正法を護持し、衆生を調伏して、六波羅蜜を修行し具足し、無量の諸佛の功徳を演説せんことや」と。

爾の時、釋迦如來、諸の大衆に告げたまはく「誰か能く此と心を同じくして法を護る」と。爾の時、會中の無量の衆生、咸是の言を作す「我等能く是の善男子と、同じく共に法を護つて相捨離せざること、影の形に隨ふ如くならん。願はくは是の菩薩、無上道を成ぜんとき、當に復我が與に佛道の記を授けられんを」と。

時に莊嚴華、釋迦如來に白して言さく「世尊、如來の滅後には、我れ當に此に於て、如來の無上の正法と及び受法の者とを護持すべし。唯願はくは如來、我を憐愍したまふ故に、我に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまはんを」と。佛の言はく「善男子、汝の阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、世

【五〇】唐譯卷第八、授記品の餘。

如き言を作す『今我れ至心もて、諸佛の前（まへ）に於て大誓願を立つらく「願はくは賢劫（むねごと）の娑婆世界に於て、此の女身を以て、常に衆生に香華・甘果を施して之を調伏し、是の因縁を以て、其をして阿耨多羅三藐三菩提を成就せしめん」と。爾の時、一切の十方諸佛、同時に讃へて言はく『善哉・善哉、善男子、汝は信喜有り、而も今日大に佛事を作せり、當に汝の願に隨ひ、悉く成就するを得べし』と。

魔王復言はく『世尊、何の國土なりとも、人の是の陀羅尼を受持・讀誦・書寫・思惟・分別する有らん處に隨ひ、我れ當に中に住して、爲に種種の華果・樹林・泉源・浴地・穀米などの須つ所を作して、乏しき所無からしむべし。若し衆生有り、是の經中に於て、義を非義と説き、非義を義と説かんに、我れ當に之を治すべし。或は病苦・狂亂・錯謬（ごうご）ならしめ、國主をして之を壞し障害の心を生ぜしむべし。此の言若し虚ならば、則ち十方の大衆を欺誑（ごうごう）すと爲し、亦我れをして未來世に阿耨多羅三藐三菩提をも得しむる莫からんを。若し此の世界及び他の世界の佛の諸弟子の、供養・利安を得ざる者、是の處有ること無し——過去業の必ず應に受くべき者を除く、我が施する所の華果・浴地・泉源・穀米の如きは、即ち是れ我が檀波羅蜜（だんぱらみつ）なり。我が施を受け已り、無上の慈善の心を獲得するは、即ち是れ我が尸波羅蜜（しぱらみつ）なり。我が施を受け已り、勤めて精進を修し、諸の善法を集むるは、即ち是れ我が精進波羅蜜（しんじんぱらみつ）なり。我が施を受け已り、深く諸法無常の相を觀するは、即ち是れ我が禪波羅蜜（ぜんぱらみつ）なり。我が施を受け已り、能く一切の身口意の惡を忍ぶは、即ち是れ我が般若波羅蜜（はんにやぱらみつ）なり。我が施を受け已り、能く諸法の空・無相・願を觀するは、即ち是れ我が般若波羅蜜（はんにやぱらみつ）なり。是の如くして我れ則ち六波羅蜜を具足（ぐそく）成ず。唯願はくは十方無量の諸佛、我をして之を得しめたまはんを』と。爾の時十方の無量諸佛、默然として許可（ごご）したり。

爾の時、慧幢如來、莊嚴華を讚へて言はく『善哉・善哉、善男子、汝所願の如く、當に汝をし

【四七】梵に Bhadrakarma 現在の住劫中には千佛の出現あれば、讚へて賢劫といふ。

【四八】唐譯によれば、善く衆生をして、あらゆる華果美味の屬を、受用せしむる因を以て、我をして檀波羅蜜を具足せしむと。以下も同様なり。

【四九】唐譯には智星と名く。

子、當に無上道を成ずるを得べきこと、久しきや近きや。成道の時、何の國土に在るや。『富樓那、此の世界中に六大劫を過れば、劫を星宿と名く。是の劫中に於て、當に正覺を成じ、號して寶鬘と曰ふべし。是の時、衆生の壽四萬歲にして、多く惡逆を造り、五滓を具足せん。正覺を成じ已つて四十年の中、三乘を宣説して便ち涅槃に入らん』と。

富樓那の言はく『彼の時、衆生の未だ調伏せざる者をば、當に云何がすべき』と。『富樓那、彼の時、衆生に一人の調伏せられざる者有ること無し。富樓那、是の如く菩薩は常に誓願を立てて、十方各各千の佛世界の所有衆生、乃至一人をも調伏せざらんには、我れ終に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜじ。若し我れ了了に是の如き世界の所有諸佛を知見する能はざらんには、亦復阿耨多羅三藐三菩提を成ぜじ。是の如く十方千佛世界の所有衆生のうち、若しは一人の、我が調に非ざる者有らば、我れ亦阿耨多羅三藐三菩提を成ぜじ。若しは他世界の所有惡人、我が國に生ぜんと願じ、我が國に生じ已らんに、我れ當に三乘の法を以て之を調伏せん』と。富樓那、是の如く、菩薩は是の如き不思議の事を具足す』と。

富樓那の言はく『世尊、我れ今大利益を得、是の如き正士を見聞するを得たり。若し人有り、能く至心には是の大集經を聽受せんに、是の人も亦是の如き利益を得ん』と。

寶幢分中 授記品第八

爾の時阿闍佛、大衆に告げて言はく『今是の衆中の梵釋四王、阿修羅王、人王・非人王など、是の如き等の衆の集會せんこと甚だ難し。汝等今日值遇するを得たり、應當に至心に諸佛の前に於て、其の志樂に隨ひ、深重の願を發せ』と。

時に魔王有り、莊嚴華と名く、七寶の首を現じて女像を爲し、身に種種微妙の瓔珞を佩び、是の

【四〇】唐譯によれば、二十六百千の大劫を過ぎて、大劫有り、名けて能度といひ、開敷無邊を摩尼華鬘といひ、開敷無邊光如來の所に於て成道すべし、といへり。

【四一】十惡五逆をいふ。

【四二】唐譯によれば、この句は十方諸佛の刹土より來れる菩薩の言ふ所たり。

【四三】正士は菩薩の謂なり。

【四四】唐譯も亦、授記品第八。

【四五】志、麗本至に作る、今三本に従ふ。

【四六】唐譯に貞華と名く。

爾の時、會中に一菩薩有り、善緊意と名く、寶光功德佛の前に立ち、身を現すること梵の如く、或は帝釋の如く、或は自在天、或は他化自在天の像、或は兜率天、或は夜摩天、或は提頭賴吒天、或は毘樓勒迦、或は毘樓博叉、或は毘沙門、或は龍王と作り、或は阿修羅王、或は緊那羅王、或は伽樓羅王、或は夜叉王、或は羅刹王、或は畢力迦王、或は毘舍闍王、或は拘斡荼王、或は刹利、婆羅門・毘舍・首陀、比丘・比丘尼、優婆塞・優婆夷と作り、或は師子・象・虎・毒蛇・牛馬の像を作し、復種種飛鳥の身と作りて、一時の中に能く八萬四千種の色を示したり。

爾の時、富樓那彌多羅尼子、釋迦如來に白して言さく『世尊、何の因縁の故に、是の善男子は、是の如き八萬四千の種種の諸色を變現するや』と。佛富樓那に言はく『是の善緊意菩薩摩訶薩所入の三昧は、不可思議なり、聲聞・緣覺の境界に非ず。是の善男子は、是の如き等の諸善方便を以て衆生を調伏し、衆生の身・意・色に隨ひ、三昧に悉く能く之を作す。若し衆生有り、梵天に宗事し梵天を敬念せば、即ち梵の像を現じて爲に三乗の法を説き、乃至或は佛に奉事する者有らば、即ち佛身を現じて、爲に三乗を説く。若し衆生有り、畜獸に宗事せば、即ち獸の像を現じて、爲に三乗を説き、若し山谷・河澗・樹林・百卉に奉事する有らば、即ち其の像を現じて之を調伏す。若し衆生有り、財利を貪らんに、先づ財を以て施したる後、爲に三乗の法を演説す。一貪を壊せんが爲の故に。若し病者有らんに、其の須つ所に隨ひて醫藥を給施するに、若しは寤むる時興へ、或は夢中に興へて、其の病者の衆苦をして除愈せしめ、調伏の爲の故に説法を爲す。富樓那、是の善男子は、一日夜に、能く三乗を以て、恒河沙等の衆生を調伏す』と。

富樓那の言はく『是の善男子は、阿耨多羅三藐三菩提心を發してより已來、久しと爲すや近きや』と。富樓那、是の善男子は、已に無量恒河沙等の劫中に發心したり。是の人は是の三昧を得たるより已來、衆生を調伏して、已に六萬四千億阿僧祇劫をば經たり。富樓那の言はく『世尊、是の善男

【三三】善緊意、同に妙慧通達と名く。

【三四】寶光功德、同に勝珠炎王如來とす。

【三五】自在天は摩醯首羅 Mahāsvara の譯。色界の頂に在り、三千世界の主たり。

【三六】以下の四は Dhruvārātra (持國)・Vṛndhāra (增長)・Vṛṣṇakāra (廣目)・Vaiśravaṇa (多聞) の四天王なり。

【三七】梵に Pūrṇamātrayāni、intan 滿慈子、滿願子など譯す。普通は略して富樓那と稱す。釋尊十大弟子の一、説法第一の阿羅漢として知らる。

【三八】作、麗本住に作る、今三本に依る。

【三九】密、麗本悟に作る、今三本に依る。

に是の陀羅尼を讀誦すべし」とと、即ち呪を説いて曰はく、

「阿婆呬 比摩呬 菴婆羅 菴婆哈 波利軍闍那荼 富沙波邏婆呵 閻留迦 摩呬羅蛇 伊利彌

利 冀利彌利 冀提遮羅牟蛇離 牟陀羅目哈 莎呵

若し法師有り、先づ讀誦して是の如き持を説かば、我れ天耳を以て、當に往いて之を聽くべし。

聞き已つて身ら往いて其の會中に在り、諸の會者をして諸惡を遠離し、至心に是の如き持呪を聽受

せしむべし。若し我れ聞き已つて往かずんば、則ち過去・未來・十方の現在の無量諸佛を欺誑すと爲

し、亦未來に於て阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得ざらん。若し我れ往かば、即ち法師をして無

礙辯を得、無所畏を得、聽法の人をして、病苦及び疑網の心・飢渴寒熱・兵革怨敵・虎狼毒獸などの一

切の諸惡を遠離せしめん。唯願はくは十方一切の諸佛、我に神力を加へたまへ」と。

爾の時釋迦如來、諸佛に白して言はく「今我れ當に此の梵天の與に呪を説くべし」、護法の爲の

故に」と。即ち呪を説かく、

「遮慕迦 慕荼波利車陀 阿牟摩 阿牟摩 呵牟摩 娑羅叉 婆羅究思 彌呬波利婆呵 遮羅摩

蛇哆婆 修比呬 阿牟羅波利車題 薩婆佛陀阿提唎泐 莎呵

是に於て如來、是の呪を説き已り、即ち梵天に告げたまふらく「善男子、是の如き持呪の力は、

能く一切の衆生を調伏す」と。爾の時梵天、佛に白して言さく「世尊、我れ今此の女身を現する所以

は、一切の女人を調伏せんと欲するが爲なり。若し女人有り、男に生れんと欲すれば、當に此の持を

讀むべし。是の持を讀み已るに、即ち男に生るるを得ん。兒息を厭はんに、便ち復生まじ。若し之

を受持讀誦する者有らんに、我れ當に至心もて營衛・擁護すべし」と。

寶幢分中 護品第七

したり。

爾の時、一切の梵王・釋王、各是の言を作す「我れ仁にニ欲并に欲の受持を施す」と。

爾の時梵天、即ち呪を説いて曰はく、

「阿摩梨 比摩梨 伽那沙脚 波利戰脚 摩訶戰脚 遮彌 摩訶遮彌 素呼 哆彌 阿婆呵 比

婆呵 修伽闍尼囉跋婆 牟羅波利車陀 夜叉戰脚 比舍遮戰茶 阿婆阿多尼 三婆邏哆尼 婆

伽羅尼 諸婆尼 曇呵尼 郁遮吒尼 阿摩呵 阿多遮尼 咄伽舍婆 阿摩羅 阿牟羅 牟羅叉

利跋沘 阿婆羅跋婆 莎呵 阿遮遮 阿婆呵遮遮 闍尼羅叉 遮遮陀 咄遮遮 那咄伽遮遮

遮遮 遮遮遮遮 阿牟羅遮遮 阿摩摩牟羅遮遮 阿牟羅呵牟婆茶婆呵 莎呵

爾の時、一切の諸天世人、咸皆讚へて言はく、「善哉・善哉、是の陀羅尼は不可思議にして、能く

勝るる者無し」と。爾の時梵王、復是の言を作す「若し惡鬼を調伏する能はざるもの有らんに、是

の持を聞き已らば、即便能く調せん。若し是の如き呪を受持する者有らば、所住の國に隨つて、心

に諸王を信じ、一切の男子女人の、若しは大音しは小、若しは天、若しは人など、皆是の王に於て

惡を起す能はず、若し惡を起す有らんに、首は七分を爲り、其の心 乾焦し身に癩病を被り、神通

有らん者は、即便還失し、暴風に吹かれて身に地に墮入せん。是の持呪流布の處に隨ひ、我れ亦當

に護つて、一切の諸惡を遮離するを得しめ、受者・聽者は、衣食・臥具・醫藥・音生の須つ所に乏しか

らざらん」と。

爾の時、會中に一梵天有り、名けて 正語と曰ふ、亦女の像を現じ、復誓を作して言はく「我れ

今此の娑婆世界に於て、現に佛前に在り、至心に法を護り、乃至釋迦如來の滅後にも、亦當に之を

護るべし。是の持呪流布の處に隨つて、其の國土を護り、説者・聽者をして、魔業・一切の惡業を離

れしめん。若し法師にして、法を説かんと欲する者——衆生を調せんが爲に——有らんに、生づ當

【一〇】 同に我等亦以之此陀羅尼同共與之欲……與此陀羅尼欲」とす。

【二五】 この句、唐譯には心水乾枯、得二百癩病云云といふ。

【三〇】 唐譯卷第七、陀羅尼品の餘。
【三一】 同に妙香といふ。

戲弄の心を生ずる莫れ。何を以ての故にとならば、夫れ戲弄は即ち凡夫の法なり、如來は已に凡夫の事業を過ぎたまふ。一切の有爲は悉く是れ無常、如來は有爲の法を増さず、唯空を増し、聲字の句を斷じたまへばなり。姊よ、如來は汝に於て譚訟を生じたまはず、但だ平等に一相無相なること、猶し虚空の如しと觀じたまふ。夫れ虚空は、三の有爲無く、覺觀すること無く、有爲を離れず、障礙有ることなし。如來世尊も亦復是の如く、一切の法に於て障礙有ること無し。如來の欲に於ける、亦復是の如く、一切の覺觀・壽命・士夫、陰界・諸入、音聲・字句にも、悉く皆無礙なり。姊今云何ぞ、如來の所に於て戲弄を生ずるや」と。

無量壽佛、帝釋に告げて言はく「善男子、當に先づ思惟して、然る後發言し、後に於て悔恨生ずるを得る無かるべし。何を以ての故に。是の女人は即ち大丈夫なり、已に無量の諸如來の所に於て、久しく善本を修したるも、此の大衆を莊嚴せんと欲したるが爲の故に、現するに女身と爲るも、實には女に非ざるなり。即ち是れ菩薩摩訶薩の身なるに、汝云何ぞ言つて、之を稱して姊とは爲す」と。爾の時帝釋、佛語を聞き已り、即ち前んで懺悔するに、自在梵の言はく「我れ汝の懺を受け、汝をして惡口等の果を得ざらしめん」と。

爾の時梵天、無量壽佛に白さく「世尊、若し彼の高持、懺悔せざれば、當に何等の惡口の果報をば受くべき。佛の言はく「善男子、彼れ若し懺せざれば、當に八萬四千世中に於て、常に女身を受け、其の形醜陋臭穢不淨なるべし。是の故に衆生は應當に口を護るべし」と。

爾の時無量壽佛、菩薩に告げて言はく「我れ今汝に威神道力を施す、便ち之を説くべし」と。爾の時梵天、敬つて十方無量の諸佛及び諸の菩薩、一切の人天に白さく「唯願はくは善く聽かれんを。若し如來の正法をして、久しく世に住まらしめ、法を説き及び法を聽かん者を擁護せんと欲せば、唯願はくは諸佛、悉く我れに欲を施したまはんを」と。是の語を説ける時、其の音娑婆世界に遍滿

【五】この一段、唐譯に在つては、無量壽佛と讚樂菩薩との問答とす。

【六】同に作「草驢身、爲他輕蔑とす。

【七】この句、同には、佛の、世自在梵天に對する語とす。

爾の時月光童子菩薩、十方の佛に向ひ、長跪合掌して呪を説いて曰はく、

『那提阿三摩路卑 咩羅素摩婆訶 伊希那遮久遮尼 那婆久遮尼 那遮久遮尼 牟羅輪陀尼 婆

荼呬 婆荼呬 修羅囉尼 那婆修羅囉尼 復多拘知 波利車陀 闍羅呬 闍羅呬婆移 闍羅呬

那 摩叉呬 迦迦呬 呵呵 呵呵 休休休 撥施脾陀那婆利車陀 阿摩摩 若摩摩 呬摩 三

牟陀陀羅 阿陀羅呬婆 散迦羅尼 波利車陀菩薩婆闍提比摩 比比摩摩訶比比摩 復多拘知

阿迦奢或婆娑波利車陀 莎呵

爾の時娑婆世界なる、十方の諸佛・菩薩・聲聞・釋・梵・龍王、阿修羅王、乾闥婆王、迦樓羅王、緊那羅王、摩睺羅伽王等、同聲に唱へて言はく『善哉・善哉・菩薩童子、善能く是の大陀羅尼を説きたり、魔業及び惡知識の身心の諸病を壞せんが爲なり、是れ上慧の印なり』と。

爾の時會中に一梵王有り、菩提自在と名く、自ら其の身を變じて女像と爲るに、端嚴殊特して人天に踰へたり。妙瓔珞を以て自ら莊飾し、西方佛なる阿彌陀の前に在つて、是の如き言を作す『唯願はくは世尊、我に神力を加へ、我が一音をして此の間の娑婆世界に遍滿せしめたまへ、我れ今陀羅尼呪を説き、説法の者及び聽法の者を護らんと欲し、亦釋迦如來の滅後に、是の法を説かんに於て、惡事を生起する有ること無からしめんと欲す。若しは魔、若しは魔の父母・子息・眷屬・親友・僕使、若しは天、若しは龍、若しは阿修羅、若しは乾闥婆、若しは伽樓羅、若しは緊那羅、若しは摩睺羅伽、若しは鳩槃荼、若しは富單那、迦多富單那、荔菟多、毘舍遮、夜叉、羅刹等の、父母・子息・眷屬・僕使なども、亦復是の如く、是の法師に於て、惡を爲す能はず、乃至は其の一毛の分をも動かし、其の身心の爲に惡事を作す能はざらん。唯願はくは世尊、我れに神力を加へ、我が音聲をして此の世界に遍からしめたまはん』と。

爾の時會中に一帝釋有り、名けて 高持と曰ふ、菩提自在梵に語つて言はく『姊よ、如來に於て、

【三】唐に世自在主大梵天王といふ。

【二】唐譯に持鬘と名く。

し、佛力を以ての故に大音聲だいおんしょうを出すに、其の音遍く娑婆世界に聞ゆ。偈を説いて言はく

『是の如き大集は甚だ得がたく、智慧を具足すること亦復難し、善知識ぜんしやくしに親近しんこんするを得ること難く、是の如き法印も亦聞き難し。如來は諸の衆生を憐愍れんみんしたまひ、衆生の爲の故に正法を護

り、是の無上陀羅尼を説きたまふ、種種の諸魔力を壞せんが爲の故なり。十方の諸佛是の持を説くは、三寶の性を斷絶せず、能く一切の諸忿諍ふんじやうを和し、亦能く無上の忍にんを増長せんが爲なり。

衆生の諸善根を増益し、國土の諸惡相を消滅しょうめつし、能く衆生の三惡さんあくの業を破し、亦諸の惡見を遠離せしめんとてなり。如來是の無上の持を説きたまふは、無上の道を顯示せんと欲し

たまふ爲なり、亦六波羅蜜を具し、眞實に菩提の道を修せしめん爲なり。是の持は即ち是れ善方便にして、亦能く無量の智を増長し、一切の諸善法を攝取す、是の故に名けて無上の持とは爲す。具に三十七道品さんじちだうひんを修する、是を無垢の菩提道とは名く、能く一切疑網の心を斷じ、及び

衆生の諸煩惱を斷ず。是の持は即ち是れ眞實の語なり、了了に菩提の道を觀見す。我れ今陀羅尼を説かんと欲す、是れ則ち名けて無上勝と爲す。説法の師及び此の持を聽受する者を、擁護せんと欲するが爲なり。其れ誰か受けんと欲し、聽かんと欲する者あらば、我れ今當に説くべし、疑を生ずる勿れ。無上無勝の陀羅尼は、即ち是れ最上の智慧なるを」と。

爾の時、恒河沙等こんがさとうの菩薩摩訶薩ぼさつまがさつ有り、異口同音に是の如き言を作す『我等も亦陀羅尼を説かんと欲す。若しは比丘びく・比丘尼びくに、優婆塞うぱさい・優婆夷うぱい、先づ當に漫浴まんよくして身心を淨め新衣服を著け、妙香華を以

て三寶を供養し、法座に昇つて陀羅尼を説くべし。是の如くせば四衆に、衆生の能く惡事を起し、以て之に加へん者有ること無く、身心不濁ふたづにして四大清淨に、身の諸病苦を皆遠離するを得ん。是

の如き法師は、若し過去業因縁の病有らんも、悉く皆消滅せん。此の法を聽かん者、亦復是の如く、過去業因縁の病苦を滅せん」と。

去業因縁の病苦を滅せん」と。

末力伽比流比流 婆羅薩哆 阿路沙婆提 希利希利 夜哆婆闍蛇 莎其羅 夜多波蘭遮 希力陀蛇婆呵 薩多波利婆婆 末力伽昆盧呵尼 阿遮羅佛提 陀陀波羅遮羅波遮蛇 賓荼希力陀蛇 戰陀邏婆邏摩 阿遮吟輪陀摩 波邏莫邏摩力伽 伊羅 伊利吟 波蘭脾 波邏婆邏祇 薩婆囉多哆多 薩多兜竭脾 阿那婆羅那伏律祇 阿羅茶 安伽吟 舍彌尼 比婆羅婆命希 阿希多 阿婆希 尼邏婆蛇婆 阿之邏末力伽 羅婆那 邏仇婆吟 鞞勒那朋舍 陀摩伽蛇 闍羅戰陀 三牟陀羅婆提 摩訶復多脾蛇 三牟陀比伽婆 陀羅尼牟陀離那 摩呌牟陀邏 波邏波羅提 思比陀牟陀 阿婆多尼 婆波多尼 三慕迦邏 比豆多邏斯那 闍崙牟陀離都思 移迦之 卑利癡比迦蛇 婆呵婆翼茶 迦婆吒 尸邏波邏提多希力陀蛇 三牟陀多陀羅尼 陀邏 陀邏 陀邏 彈提羅 彈提羅休尼羅薩婆希力陀蛇勿陀離都思闍吒 闍婆吟 闍呌婆吟 修摩提 摩提 摩訶復多勿陀離多 易翅之散迦羅 婆荼蛇多那尼 首力多復多 伊尼彌尼 婆遮尼 輸沙薩遮尼 牟地離多遮利也阿提咩那 婆比哆 阿那若哆 摩呵富若三牟遮蛇婆多邏 摩訶迦留尼迦牟地離多 薩婆三藐波羅提般 至邏邏邏羅闍羅兜 薩婆尼犁 薩婆牟尼婆羅沙婆摩訶迦留那三摩提若那婆離離 咩囉多竭昆 比利也比利也 婆犁那提唵多 薩婆復都波蛇 莎呵

爾の時、娑婆世界の一切衆生、是の呪を聞き已り、各各稱へて「南無一切十方諸佛」と言ひ、第二・第三も亦復是の如くなりき。『甚だ奇・甚だ特なり、諸佛の大會は不可思議なり、諸菩薩の事も亦不可思議なり。我等昔より未だ會て是の如き持の名を聞くを得ざりしに、今之を聞くを得て、能く一切の魔の境界力を壊し、三寶の性を紹ぎ、魔の羅網を斷ち、諸の善法を得て佛事を具足したり。』

是の如き等の爲に是の^三大持を説きたまひ、諸の衆生の爲に、心に封印を著け、諸の衆生に、陰入界の法を印し、乃至は大般涅槃を得しめん爲なり」と。

爾の時會中に一の童子菩薩有り、名けて月光と曰ふ、蓮華より起ち、一心に合掌して十方を觀察

【二〇】同様の言を三回繰り返したるをいふ、

【二一】是の如き云云、唐譯相當文に是一切衆生心印大希有行調伏六入乃至令一切衆生、行無上涅槃故、とあり、
【二二】大持は大陀羅尼の意

けしめん爲の故に、世間の諸悪相を破せん爲の故に、衆生をして悉く六波羅蜜を具足するを得しめん爲の故に、無上の菩提心を發さしめん爲の故に、菩薩に善方便を教へん爲の故に、菩薩をして次第して住せしめん爲の故に——是の如き等の諸因縁を以ての故に、過去の諸佛も、是の如き等の五淨の衆生の爲に、是の一、九だいじふこんこうほつじんなん大集金剛法心因縁自在陀羅尼を説きたまへり。今此の世界の十方の諸佛、悉く來つて集會す、唯願はくは、各是の如き陀羅尼呪を説きたまへ、當に大乘經を流布すべき爲の故に、此の世界に法を久住せしめん爲の故に、諸の惡魔をして便を得ざらしむるための故に」と。

爾の時諸佛、即ち々同聲に、此の陀羅尼句を説かく

「安伽邏 安伽邏 半伽邏 婆婆伽邏 婆邏婆伽邏 婆訶比呵 曼囉婆毘 阿哈 阿佉婆哈 題
 呬 度慕泚 韜婆知 韜由離 三摩婆阿尼 三摩多婆提哈 陀彌 陀移 陀摩闍闍 彌囉免破
 犁 破羅婆泚 伽薄 伽那婆邏泚 希利 希提 希邏 希邏翹 譚婆提 婆伽斯 咤迦泚 咤
 迦婆邏泚 伽那婆呵泚 希利泚戶利泚 頻地利婆泚 具婆希 酬哈 彌囉酬哈 酬徒 阿其離
 阿婆彌 娑利也 多哆旦 富流 希利 戰地離 摩陀彌 陀彌 究周流 牟周流 阿遮吒
 至利 至彌利 遮婆呵 周婆 周婁 悉囉婆呵 究婁 娑維究併 究併 摩訶婆囉婆 斯併
 斯併 摩訶薩哆希力陀蛇 富羅 修富羅 度摩波利呵利 阿婆移 流之薄 迦邏 阿陀摩兜
 比婆呵 提提利 摩摩利 波舍佉 或或邏 路迦比那蛇迦 婆吋離 婆吋離陀哈 婆吋離陀
 提 祈迦邏婆時離 遮尼離 遮迦邏婆提 陀哈 陀哈 牟離陀哈 休休哈 朋伽頻婆哈 舍
 利奢 流流周 之利周利 牟哈慕陀哈 慕茶薄 慕茶薄 伽伽邏尼 牟茶薄 散婆邏牟茶薄
 提提羅蛇尼 摩醯首邏羅蛇尼 律師婆尼 陀邏婆至 戰荼羅素呬 薩婆薩寫阿提嚩多 車陀兜
 嚩阿那 摩彌尼 嚩維邏提 烏闍其離 比比那 嚩那邏訶 復佛哈 仇留 仇留 牟留 牟留
 希希 希希 阿邏 阿邏 迦迦茶婆呵 希希多 阿由那 韃荼譚婆斯 竭陀尼 阿婆陀呵薄

【二】唐譯相當文に金剛法等因縁法心建立摧碎陀羅尼印句入差別記法門とあり。

て善方便を修し、刹利刹利の爲の故には王事を演説し、婆羅門婆羅門の爲には 四毘陀四毘陀・星宿星宿・祀天祀天を説き、諸大臣の爲には治化治化の事を説き、諸醫師の爲には 四大増減等の病を演説し、諸の農夫・商賈の人の爲には、財穀を獲んことを説き、諸の女人の爲には 瓔珞瓔珞を護り、勤めて諸善を修し、不共不共の夫を得んことを説き、出家の爲には忍辱忍辱を説き、調伏調伏の爲の故に是の如き法を説き、未だ善利を得ざるものには之を勤めて得しめ、未だ證を得ざる者には勤めて證を得しめ、未だ解脫解脫を得ざる者には、勤めて解脫を得しめ、衆生の諸苦惱を受くるを調せん爲には、我れ衆生の爲に慈悲を修集す、然も諸の衆生は、猶ほ我が所に於て不善不善の心を生じ、或は打ち或は罵り、或は嫉妬を生じ、或は説いて言ふ有り「沙門沙門瞿曇は即ち是れ幻士なり、戒を持するを讃ふと雖も、自ら妻婦を畜ふ、慈心を讃ふと雖も、衆生を害す、富貴を捨つるを讃ふと雖も、自ら王家に往く。瞿曇沙門は善く方便を知り、妻婦を畜ふと雖も子息を生まず。瞿曇沙門は能く女身を治するが故に、末利をして愛重の心を生ぜしむ、瞿曇沙門は善く呪術呪術を知るが故に、須達須達をして宗敬の想を生ぜしむ、瞿曇沙門は善く藥法藥法を知るが故に、是の故に、其の身に常に光明有り」など、是の如き等の無量惡名を得、或は石土木刀の毒あるを以て、遙に見ては打刺打刺して、爲に我を殺さんと欲し、我を殺さんが爲の故に、故に惡象毒蛇を放ち、我が住處に於て大猛火大猛火・糞穢糞穢・不淨を放ち、種種の諸惡方便を造作造作し、我が法を壞せんと欲す——我が法を滅せんが爲に、法幢を摧かんが爲に、法船を破らんが爲に、法性を壞せんが爲に、法藏を破らんが爲なり。「十方の諸佛、唯願はくは觀察せよ、過去の諸佛は、是の如き五滓五滓の世に在り、佛道を成ずるを得る有つて、是の如き大集金剛法大集金剛法・心因緣自在陀羅尼心因緣自在陀羅尼を説かざる者有ること無きを——一切の諸魔力を壞せんが爲の故に、三寶の種を斷絶せざらんが爲の故に、諸衆生の善法を増さんが爲の故に、一切佛法の怨怨を壞せんが爲の故に、衆生をして苦を遠離せしめん爲の故に、心口意の諸惡業を滅せんが爲の故に、人天人天の性をして調柔調柔ならしめん爲の故に、諸國土に安樂を受

【二】 毘陀 *Vedic* は婆羅門の聖典なり、唐譯には四毘陀、星論等とす。

【三】 唐譯には説三諸藥性、所宜之法所宜之法といふ。

【四】 唐譯には説於嚴飾、養育自在、無他行法。

【五】 梵に *mullika*、又摩利とも書く、波斯匿王 *P. moryia* 注の后。

【六】 また蘇達多 *Sudatta*、善施と譯し、別號を阿那陀撰茶陀 *Anatthaputta*、給孤獨と譯す。今衛城の長者、祇園精舍の施主として知らる。

爾の時、此の間の娑婆世界の、所有地獄・畜生・餓鬼は、諸の苦即ち滅して諸佛を見るを得、諸の衆生有り、疑網あつて信無きもの、即ち淨信を得、一切の衆生、悉く皆貪欲・瞋恚・愚癡・憍慢・惡見・疑網・狂亂等の病有ること無く、身心寂靜にして各各皆是の如き念言を作す『唯我一人、佛前に獨坐して正法を聽受せん、如來世尊は唯我が爲に説きたまふ、獨我を調伏して諸の煩惱を斷ち、我が所請の如くに我が爲に説きたまふ』と。爾の時世界の一切衆生は、異口同音に是の如き言を作せり『願はくは佛、説法したまへ、我れ當に頂受すべし』と。

爾の時、釋迦如來、此の世界所有の衆生に勸めて佛を供養せしめたまふに、爾の時衆生、既に勸を聞き已り、即ち各一切諸佛に香華・幡蓋・伎樂を供養して讚歎したり。爾の時世尊、即ち是の言を作したまふ『十方の諸佛、諦に聽き諦に聽け、我れ往昔の本願力を以ての故に、此の世界の、五洋を具足せる惡衆生の中に在つて、阿耨多羅三藐三菩提を成じたり。是の諸衆生は、正道を迷失し無明に覆はれ、正念を失して煩惱を増長し、安んじて三趣に處り、樂んで十惡を作し、善根を遠離して功德の業を捨て、喜んで五逆を造り非法に耽著し、正典を誹謗して聖人を毀皆し、瞋恚熾盛にして、樂うて慈を修せず、招提僧物をば、隨意に用ひ、業の果報を深信する能はず、樂うて師長和上・有徳の人を供養せず。是の如き等の弊惡の人の爲の故に、是の如き大慈悲心を修集し、是の因縁を以て、是の世界に於て道を成ずるを得たり。既に成道し已り、常に樂んで勤精進の法を修集し、飢渴・寒熱等の苦を忍び、諸の國土・城邑・衆落に遊びては、諸の衆生の爲に正法を宣説し、或は衆生の、貧窮にして病苦あり、身を受くる醜陋なる有らんに、憐愍の爲の故に、其の施する所の臭穢の食を受け、施主の福德を増長せんと欲するが爲に、皆悉く之を食し、亦是の衆生の魚鱗・臭穢・弊壞の衣服を受け、山間・河澗・空曠・林野などの所有住處をも、悉く亦之を受け、若しは草・若しは葉・若しは石・若しは埽など、衆生の爲の故に、施するに隨つて之を受けて其の上に臥し、以て精進を勤め

【三】 招提は拓開提舍Caturの訛略なりと云はる。四方と譯す。四方僧の施物を招提僧物といふ。

【三】 輒に同じ、しきがはらなり。

心を以て法を聽受せんに、是の人即ち能く魔業を破せん。若しは無上乘に通達し、及び八正道を修行せんと欲し、若しは永く諸の煩惱を斷ぜんと欲すれば、應當に至心に正法を聽くべし。諸の十方の佛及び菩薩の、皆此に來至して化華に坐したまふは、釋迦如來、法を説かんと欲したまひ、正法の住すること無量ならんを、護らんとしたまふ爲なり」と。

是の如きの音聲、大會に充滿すれば、無量の菩薩は無量の忍を得、異口同聲に是の如きの言を作す「我れ今坐し已る、唯願はくは如來の、正法を宣説したまひ、一切法をば無畏微妙に攝し、能く魔業を壞して魔道を過ぎ、魔の幢を摧伏して勝幢を建立し、諸の煩惱を壞して怨敵を調伏し、諸の疑網を裂きて、種智の門に入り、諸の怖畏を過ぎて衆の菩薩を護り、亦菩薩をして一切受樂し、諸の菩薩をして慧の方便門と、及び一切安樂の處と、一切三昧・忍辱光明・慧の方便門と、三十七品の心陀羅尼とを得しめたまはんを。唯願はくは如來廣く分別して説きたまはんを。衆生をして諸の安樂を受け、上色・上力・上樂・上觸・上辯・上念・上意を獲得せしめたまはんを。法を聞き已つて忘失せざらんが爲の故に、國土の惡瑞應を壞せんが爲の故に、戒を受持せんための故に、道を修集せんための故に、無上菩提の心を失せざらんための故に。唯願はくは如來、是の如き事の爲に、是の陀羅尼を頌宣・廣説したまはんを。護法の爲の故に、一切三寶の種を斷せざらんための故に、諸の菩薩に菩提道を示さんための故に、虚空の法性と空相等を分別せざらん爲の故に、明闇・有相・無相を顯示し、平等の相・此法の法を觀ぜんための故に、衆生・壽命・士夫等の法を分別せず、不生・不滅にして一切相を斷じ、一切變易は等相無物、虚空こそ實性なるが爲の故に。唯願はくは釋迦牟尼如來、及び諸佛の、大陀羅尼を廣宣分別したまはんを。無量無邊の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめん爲の故に」と。爾の時、一切無量の諸佛は、默然として之を許し、許し已つて即ち諸佛上妙の境界・誓願功德三昧に入りたまへり。

【六】唐譯には依ニ無畏說攝持一切法一とあり。

【七】同に入ニ一切智とす。

【八】同に一切行安樂、成就福德所依・加護三摩提、屬提陀羅尼、入ニ巧明智、乃至持三十七助道法心ニ云云と。

【九】同に五發成熟故とす。

【一〇】同に眞際如如、虚空無差別故と。

【一一】同に即入ニ如諸佛境界、入ニ平等願三昧とす。

卷の第二十一

寶幢分第九中 陀羅尼品第六

爾の時、東方に樂世界有り、佛を阿閼と名く。諸の無量の神通ある菩薩と、彼の世界を發ち、一念に娑婆世界なる釋迦如來の大集の處に來至し、到り已つて化蓮華の上に坐す。無量の菩薩も亦復是の如くに、各々皆化蓮華の上に坐しぬ。是の東方なる無量の諸佛と無量の菩薩とは、各各娑婆世界に來詣し、到り已つて皆化蓮華の座に坐したるが如く、南北二方も亦復是の如くなりき。爾の時西方安樂世界の無量壽佛、亦無量の神通菩薩と彼の世界を發ち、一念に娑婆世界なる釋迦如來大集の處に至り、到り已つて化蓮華の上に坐したり。無量の菩薩も亦復是の如く、各各皆化蓮華の上に坐し、各各己が神通・福力を以て供養の具を作す、或は金沙を作して微妙香を和し、以て佛の上に散じ、或は種種微妙の香華を作し、或は起つて娑婆世界を右邊し、或は長跪し偈を説きて讚歎する有り、或は心を繋けて善思惟する有り、或は金華乃至優鉢羅華を雨らし、或は妙眼を以て佛身を瞻視したり。

時に童子あり須菩提と名く、己が神力及び佛の神力を以て大音聲を出し、偈を説いて言はく、
「諸佛の無量の大寶幢は、能く一切の疑網心を壞す、我れ初より未だ曾て、是の如き無量の大會衆を見聞せず。此の世界を滿たす無量の佛は、福德の諸菩薩を具足したまふ、此の地は即ち是れ大寶塔なり、皆十方の佛を供養するを得。無量の諸佛は何の因縁により、悉く是の惡世界に來集したまへる、今此の國土の惡衆生は、亦復佛事を信する能はず。一切の大魔業を壞せんが爲に、大功德を具足せんと欲するが爲に、大神通を示現せんと欲するが爲に、是の故に諸佛は此に來集したまふ。此の會に若し諸の衆生あり、至心に信喜の心を生じ、若しは此の

【一】唐譯、寶星陀羅尼經卷第六、陀羅尼品第六。
【二】宋元明三本には妙樂世界とし、唐譯には可樂とす。
【三】阿闍鞞 Akṣobhya 略無動、無瞋恚など譯す、東方の阿比羅提國に修行して成佛し、今現に其の土に於て說法すと云はる。
【四】阿闍如來自ら化する所の蓮華なり。
【五】唐譯には南方よりは寶星如來、西方よりは阿彌陀佛、北方よりは鼓音佛の至ることを云ひ、更に下方よりは毗盧遮那佛、上方よりは智光佛の來ることを加ふ。

男子、釋迦如來は、一切衆生の陰所攝の身——一皆須彌山王の如くなる——をば、能く葶藶をして其の座處を容れしめん。是を如來の智慧方便と名く。亦衆をして、葶藶の寛からず、座處の進らず、而も葶藶は其の質、本の如く増減の相無きをば見せしめん。復次に善男子、一切世界の所有大地を、悉く一微塵中に入らしめ、亦微塵をして増減の相無からしめん。是を如來の智慧方便とは名く。復次に善男子、一切世界の所有諸水を、悉く能く一微塵中に入らしめ、亦微塵をして増減の相無からしめん。是を如來の智慧方便とは名く。復次に善男子、一切世界の所有諸火を、悉く一毛孔中に入らしめ、亦毛孔をして増減の相無からしめん。是を如來の智慧方便とは名く。復次に善男子、十方所有の一切衆生を、悉く能く一微塵中に入らしめ、亦微塵をして増減の相無からしめん。是を如來の智慧方便とは名く。復次に善男子、一切衆生三世所有の身口意の業、三世所受の苦受・樂受・無苦樂受、三世の衆生の身口意の業所受の苦報、三世所有の地水火風、乃至一切の法界をば、釋迦如來は一念の中に、了了に通達するも、亦稱へて我れ知る・我れ覺すと云はず、又慮を役して然る後に知るにあらず。善男子、釋迦如來は、是の如き智慧方便を具足して、娑婆世界に住したまふなり」と。爾の時、十方無量佛土の無量菩薩は、既に佛の無量の功德を聞くを得て、即ち各無量の神通を具足したり。

大方等大集經卷第二十

【二七】唐譯には、所有衆生、衆生界所攝者、但界入所依處、彼諸衆生、……假使如須彌等身……如是等身、入芥子中、云云とあり。陰所攝とは五陰によつて成るの謂。葶藶は芥子の義。

【二八】唐譯に、一最細隣虛塵とす。

【二九】同に一最細毛端之中とす。

【三〇】同には、この諸風と次の諸火とを顛置す。

【三一】乃、三本に従つて加ふ。

ぎ、大涅槃だいねはんに入ること、金剛法こんごうぼう心因縁しんいんげん自在じざい陀羅尼だらになど、將まじに是こゝの如ごとき等の法ほふを演説えんぜつせんと欲ほしたまふなり。過去佛こくごふつの如ごとく未來みらいの諸佛しよふつの宣説せんぜつしたまふ所ところたり。現在げんざい十方じふぱうの諸佛しよふつ世尊せそんは、世よに住すして説法ぜつぽうし、衆生しゆじやうを教化けわくわしたまふも、皆是こゝの金剛法こんごうぼう心因縁しんいんげん自在じざい陀羅尼だらになり、過去未來こくごみらいの諸佛しよふつ世尊せそんも亦復また是こゝの如ごとくなり」と。

爾の時、諸方の無量の菩薩、各佛かくぶつに白まをして言いはく、「世尊せそん、我われれ初はつより未みだ會くわいて、金剛法こんごうぼう心因縁しんいんげん自在じざい陀羅尼だらにを聞きかず。云何いんがんが名なけて金剛法こんごうぼう心因縁しんいんげん自在じざい陀羅尼だらにとは爲なす。唯願ただはくは如來にょらい、分別ぶんべつ解説げんざいしたまはんを。乃至乃至大涅槃だいねはんに入いらしめて、無量むりやうの人にん・天てんの雜類じやくるいを利益りやくしたまはんが爲なに」と。爾の時、十方じふぱうの諸佛しよふつ世尊せそん、各各かくかく其そのの諸菩薩しよぼさつに告つげて言いはく「善男子ぜんなんし、我われれ亦また釋迦しやくぢや如來にょらいを見み、是こゝの法ほふを聽受ちやうじゆせんと欲ほす。一切いっせつの衆生しゆじやうを利益りやくせんと欲ほするが爲なに、一切いっせつ衆生しゆじやうの惡業あくごふを壞こせんが爲なに、乃至乃至大涅槃だいねはんに入いらんと欲ほするが爲なに」と。

爾の時、十方じふぱうの諸佛しよふつ世尊せそん、諸しよの菩薩ぼさつに告つげて言いはく「善男子ぜんなんし、若しし一佛いつぶつ世界せかいの無量むりやうの諸佛しよふつを供養くうやうせんと欲ほし、各無上かくむじやうの正法しやうぽう——未みだ聞きかざる所ところの法ほふを聽受ちやうじゆし大集會だいしゆくわいを見みんと欲ほせば、宜よろしく當あたに娑婆世界しあはなる釋迦しやくぢや如來にょらい所住しよじゆの處ところに往むかひ詣ますべし」と。爾の時、無量むりやうの諸菩薩しよぼさつ等らう、默然もくねんとして佛ぶつの勅しやくを授たまへ、各是かくこゝの言ことを作つくす「我われれ彼かの一佛いつぶつ世界せかいに於おて、無量むりやうの諸佛しよふつを供養くうやう・恭敬くわんぎやうしまつらんと欲ほし、亦彼またの無量むりやうの佛所ぶつじよに於おて、種種しゆしゆ無量むりやうの法義ほふぎを聽受ちやうじゆせんと欲ほし、亦無量またの神通しんとう及び無量むりやうの不思議ふしぎの事ことを觀み見けんせんと欲ほす。知らず彼かの土つちに座處ざじよ有あるや不ふや。若しし座處ざじよ有あらば、則すなはち供養くうやうして正法しやうぽうを聽受ちやうじゆするを得えん」と。

爾の時諸佛しよふつ、諸しよの菩薩ぼさつに告つげて言いはく「善男子ぜんなんし、汝等にんらう應おに如來にょらいの所ところに於おて疑慮ぎじゆの心こゝろを生なすべからず。何なにを以もつての故ゆゑにとならば、諸佛しよふつの境界くわんげいは不可思議ふかしぎなり、智慧ちゐゑ・方便ふゑんも不可思議ふかしぎなり、一切いっせつ衆生しゆじやうを調伏ぢゆうふくせんと欲ほしたまふが爲なに。善男子ぜんなんし、娑婆世界しあはなる釋迦しやくぢや如來にょらいの、智慧ちゐゑ・方便ふゑんは限量げんりやうすべからず。善

【二】唐譯相當文には建た立た無餘むじよ涅槃ねはん之の界がいとあり。
【三】將まじ、麗本れいほん持ぢに作る、今三本さんぽんに従したがふ。
【四】唐譯麗本れいほんは、金剛摧碎こんごうさいさい心しん高緣法かうげんぽう等らう句陀羅尼くだらにとし、同三本さんぽんは金剛法こんごうぼう等らう因縁法いんげんぽう心しん建立た立た一切いっせつ法ほふ摧碎さいさい陀羅尼だらにと名なく。

らば、當に一切の惡業を遠離するを得べし。我れ常に種種の方便もて、汝をして解脱せしめんをば思念す。而も汝は我に於て常に惡心を生じ、我は常に汝に於て憐愍の想を生ず。汝は今當に惡見と惡意とを捨つべし、我れ當に汝に阿耨多羅三藐三菩提の記を授くべし」と。

爾の時波旬、是の語を聞き已り、瞋と惡心とを生じ、所止に還らんと欲したるに、復還身の五繫縛を被れるを見、大聲を出ださんと欲するも、出だす能はず、即ち惡氣を吐きて佛を、獻殺しまつらんと欲したり。爾の時如來、其の惡氣を變じて、須曼華と爲し、佛の神力の故に、是の化華をして遍く十方亘河沙等の諸如來の所に至らしめて以て供養し、諸佛の上に一一須曼華蓋を化作したまへり。

爾の時、無量の諸佛世尊の無量なる菩薩は、各各自ら其の時の如來に問ふらく「是の如き變化は誰の神力なる」と。無量の諸佛、各各言ひて言はく「娑婆世界の釋迦如來、五淨を具足せる衆生の爲に、法要を演說せんと欲したまへばなり。所謂法印句門もて陀羅尼に入り、能く一切の魔の境界力を壞し、一切佛の功德力を開顯し、大法幢を豎てて佛種を斷ぜざらしめ、能く一切の善法を増長せしめ、能く一切邪見の衆生を壞し、能く一切惡夢・不祥を壞し、能く疾・病・刀兵・飢饉・鬪訟等の事を斷じ、復能く一切の天龍・乾闥婆等を調伏し、慧炬を熾然して一切平正の道を示導し、能く一切をして惡見を遠離し、能く一切の諸惡種性を斷じ、能く一をして一性に同ぜしめ、能く一切の城邑・聚落の沙門・婆羅門を護り、能く一切の星宿の運度を知り、能く一切世間の諸事を學し、能く一切をして惡口を遠離して無礙の辯を獲しめ、一切法を觀じて其の性に通達し、如法に住し、能く大乘を説いて菩薩を安慰し、悉く能く不退轉の心を得しめ、能く無上甘露の法味を施し、能く無生法忍を獲得せしめ、正法輪を轉じて無量の衆生を利益調伏し、悉く六波羅蜜に住するを得しめ、能く衆生をして無上の道を見せしめ、能く法雨を降らして諸の佛事を示し、四魔の界を過

護、秘密など譯す。王舍城の長者たり。その故事は佛說德護長者經に在り。

【二八】授、麗本受に作る、今三本に依る。

【二九】獻は鼻息なり。

【三〇】また蘇摩那(Sumana)花の名。其の色黄白香氣高しと云はれ、悅意華、善妙意など譯す。

【三三】等、麗本人に作る、今三本に従ふ。

【三三】正、同は等に作る、今三本に依る。

【三三】星宿運行之度合なり、是によつて日月を判するなり。

が故に、五人をして恐怖して我を捨てしめ、我が身の羸瘦するや、復冷風を放ち、及び其の洗浴するや、大暴水を放ち、我れ河を度り已るに、復危害せんと欲して、無量の師子惡獸を化作し、牧牛の女の奉ぐる所の乳糜を受くるや、汝復毒を持つて之に置いて去り、我れ菩提道の樹に趣ける時、復中路に於て金剛の雨を降らし、我れ樹下なる金剛座の上に坐せる時、復四女を遣はし、來つて我を羸亂したり。汝は是の如く、來つて我を害せんと欲したりと雖も、然も我汝に於て、都て惡心無く、是の如き等の事も、終に我が心をして擾亂せしむる能はざりき。復無量百千萬の衆を將て、種種無量の惡事を造作し、我が身をして菩提を得ざらしめんと欲したるも、我れ既に阿耨多羅三藐三菩提を獲得し已るに、復來つて我に請ひ、壽命を捨てしめんとしたり。汝に因るが故に、我をして彼の娑羅大村に於て、乞食して得ざらしむ。汝に因るが故に、阿闍世をして大醉象を放ち、我を害せしめんと欲せしむ。又汝に因るが故に、提婆達多は大石を放下し、又汝に因るが故に、我をして彼の婆羅門の請を受け、三月の中、馬麥を食闕せしめたり。又汝に因るが故に、我をして彼の孫陀利女の爲に詐誘せられしむ、又汝に因るが故に、尸利毬多は火坑毒食を以て我を請じたり。汝爾の時に於て、是の如き等の無量の惡事を作せるも、我を害する能はざりき。今復是の如きの魔衆を聚合し、來つて我を害せしめんと欲す、然も我れ汝に於て都て瞋心無く、我れ今當に無量億の魔を度せんと欲す。我れ衆生の爲に、常に勤めて慈・悲・喜・捨を修集す。汝若し信ぜざるも、十方の諸佛・諸大菩薩は明證を爲すべし、唯汝の爲の故に、我をして此の惡世の中に於て、佛事を施作せしむ。汝は我に於て無量の惡を作すと雖も、然も我れ猶ほ故のごとく、汝に隨逐す。我れ今實に瞋・妬・憍慢無し。我は汝の所に於て慈心を修集するに、汝は我が所に於て大惡心をば生ず。善い哉、波旬、應に惡心を離れて、我が無上の法を説かんとば啓請すべし。我れ汝のために菩提の記を授けんと欲す。既に記を受け已らば、當に廣く汝の爲に、法要を宣説すべし、汝法を聞き已

【一〇】五人、橋陳如等の五人なり。

【一〇】牧牛の女、優婆塞村長の女、須闍陀(Sundari)なり。乳糜乳を以て食れる粥。

【二】故、麗本欲に作る、今三本に従ふ。

【三】(Ajita-ketava) 佛在世の頃、摩揭陀國、王舍城の治者、父は頻婆娑羅、母は韋提希。阿闍世は調達と謀り、惡象那羅者利(Nalagiri)を放つて佛を要撃せんとして兎さざりし事あり。唐譯には凶醉象を放つことをいふも、阿闍世と云はず。

【四】(Dardak) 調達と譯す。佛の從弟なるも、佛に反抗し、阿闍世を説いて惡逆をなかしむ。一時靈鷲山に登り、山麓に經行せる佛陀に、大石を脚下して、殺さんとせるも、僅に足を傷けしのみにて、その目的を達せざりき。

【五】唐譯に三月食大麥と。本に依る。

【六】梵に(Sundari)唐譯に孫陀羅聲とす。外道の一少婦人にして、外道、彼女を利用して、鷄尊を中傷せんとし、彼女を殺して祇桓寺の邊に棄てしむるも、遂に發覺して、かの外道等、處刑せらる。

【七】梵に(Sanghata) 德

十方世界の無量の菩薩は、悉く證人と爲り、了了に能く諸法の空寂にして、相貌有ること無きこと、猶し虚空の如くなるを見、法の無我なるを知らんを。唯願はくは如來、往昔に初めて菩提心を發したまへる時、立てたまひし誓願を憶念したまはんを。如來は爾の時に自ら言はく、「我れ若し十力、四無所畏を具足せんに、當に衆生に甘露の法味を施し、悉く生死の大海を度るを得しめん」と。今已に之を果したまへり。唯願はくは清淨の法を演說して、諸の衆生をして生死海を度らしめ、無量の人をば菩提道に化したまはんを」と。

爾の時世尊、即ち寶梯を登つて蓮華上に坐し、遍く十方を觀じ、波旬に告げて言はく「波旬、汝も亦當に歡喜の心を生ずべし。何を以ての故にとならば、汝の因縁の故に是の大集有り、亦汝に因つて、我をして說法せしめ、説法の因縁は諸の生死を斷ち、四流を度り、諸の衆生をして正法を獲得し、虚空の相を得しめん。是の如き等の事は皆汝に因る、汝當に我を請すべし、我れ當に法を説くべし」と。魔波旬の言はく「瞿曇、若し瞋心・憍慢・嫉妬無ければ、何の故に我を惱まして法をば宣説したまふや。若し瞋恚・憍慢・嫉妬有らば、云何ぞ自ら「我れ解脱を得たり」とは言ふや」と。佛波旬に言はく「我れ母胎に任まつて十月を經歷したり、汝爾の時に、來つて我を殺さんと欲したるも、我が心汝に於て瞋恚なし。我れ初生の時、地六種に動きたり、汝爾の時、復石の雨を降らしぬ。我の乳を飲まんとしたる時、汝毒藥を持つて、之を乳の中に置きぬ。我れ昔、初めて香象に乗りし時、汝此の地を動かし、六種に震動せしめて、我を墮せしめんと欲したり。我の林野に在つて、世の禪を修しける時、汝姝女を將て、來つて我を亂さしめんと欲したり。我れ乞食せる時、汝臭豆を以て、持ち來つて我に施しぬ、我れ時に受けたりと雖も、竟に之を食はざりき。我れ初て城を出でし時、汝自ら身を變じて、黑毒蛇と爲り、又惡賊と作つて城の四邊を圍み、我の虚空を行くや、復風雨を放ち、我の馬を下れる時、大猛火を雨らし、我れ苦行せる時、復惡聲を作せる

【一〇】麗本に發に作る、今三本に従ふ。

【一一】喜、麗本樂に作る、今三本に従ふ。

【一二】依、麗本道に作る、今三本に依る。

【一五】毒藥云云は、唐譯に復欲斷我乳、今乳速乾竭とあり。

【一六】汝臭豆云云は、同に、障他令不施と。

【一七】自ら身を云云、同に、復令夜黑闇、兵衆圍、邊城と。

【一八】唐譯相當文に我住寂靜林、現作畏惡聲となす。

の前に於て、一切の罪を懺悔し發露せば、是の人は邪見を遠離して、能く生死の彼岸に到らん。若しは生死の、多く苦を受け、行業の因縁は三惡に還り、惡友に近づく因縁を以ての故に、無量の惡業を造作するを觀ぜよ。若し能く惡知識を遠離せば、亦能く諸の邪見を遠離せん、是の人は能く生死の過を觀じ、亦能く第一義を諮問す。若し能く第一空を觀する有らば、是の人は能く甘露味を服せん、我れ常に第一義をば説く、至心に聽く者には、相有ることなし。我れ、六入は眞實に空にして、造作有ること無く受者無きを説く、衆生は顛倒して相有りと謂ふも、法性は眞實に無所有なり。若し衆生にして六受の愛有らば、是れ能く六觸の因を生ぜんも、是の如き六觸は眞實に空なり、一切の諸法は生滅無く、亦復然なり。一法性の如く諸法も爾り、一切法の如く一法も然り、一切の諸法は生滅無く、亦相・貌無く物有ること無し。我が宣説する所の無勝の道とは、一切諸法は一法の如しといふなり、若し諸法に性・相無きを見なば、是の人は眞實の義を獲得したるなり。若し十三忍を修行する有らば、即ち能く生死の岸を度らん、眞に法性と衆生の性とを知らば、無上の道を得んこと先佛の如くなり」と。是に於て世尊、是の偈を説きたまへる時、十方の洹河沙等の如き、五淨世界の一切衆生は、悉く之を聞くことを得、一一世界の無量の衆生は、聞き已つて即ち不退轉の心を得、或は陀羅尼を獲得したる者有り、或は復三昧定を得たる者有り、或は諍忍を得ることを成就したる者有りき。此の佛世界の無量の衆も、聞き已つて亦不退轉の心を得、衆生を三乘中に教化したり。

爾の時光味菩薩、蓮華の邊に於て七寶の梯を造り、種種の華を具し、合掌恭敬して佛に白して言はく『如來佛日は大慈悲の光あり、無量の衆生は多く苦惱を受く、唯願はくは無上の法雨を降注して、衆生煩惱の疾病を除滅したまはんを。諸の衆生には法器たるに任ゆる有り、如來無上の法味を受くるに堪ゆるあり、願はくは八道を説いて法眼を淨め、蓮花に上昇して衆魔を摧伏したはんを。

【九九】第一義も尙ほ空なるを觀するなり。

【一〇〇】六受は六根に受領する六塵、又は六根の作業。

【一〇一】唐譯相當文に離十三我相云云と。瑜伽論六四によれば、十三は、三界の凡夫・有學・無學の九と、欲界の緣覺・菩薩と、色界の菩薩と不可思議の如來となり。

く、信も亦爾り、施心と福田も亦復難し。無上の世尊は見るを得難く、見已つて法を聞くことも亦復難し、八難を遠離するを得難く、如法の忍を得んこと亦復難し。其の心調伏するを得難く、空三昧を修すること亦復難し。善思惟を修し、如法に住すること、是の如きの二事も亦復難し。一切の煩惱は遠離し難く、菩提を獲得すること、亦復難し。我れ今菩提に趣く事を説く、猶し世人の變化を説くが如し。我の所説は愛を遠離し、能く闇冥を壊して善法を修せんことなり、示す所の無上正眞の道をば、應當に至心に勤めて修行すべし。若し三惡の苦と、及び餘の一切の諸魔業とを遠離し、煩惱の害する所と爲らざらんと欲せば、應當に佛に従つて正法を聽くべし。若し三種の戒を具足せんと欲せば、應に三脫門を具足することを學ぶべし、即ち能く三界の結を破壊し、亦能く三惡道を過ぎん。若し三寶の性を斷絶せざらんには、正法の爲に身命を喪へ、即ち能く無量の通を具足せん、是の人を名けて如法に住すとは爲す。若し三世に覺・觀無からしめんと欲せば、亦復三世の法に著せされ、是の人能く三界を過ぎ、亦復如法の忍を獲得せん。一切の凡夫は無明に覆はれ、常に四倒の爲に圍遶せられ、無法の中に於て法の想を作し、無物の中に於て物の想を作す。是の因縁を以て顛倒とは名く、是の如きの人は邪道を行す。若し説いて、眼は色を見、乃至意は能く諸法を知ると言ふ有らば、是の如きの人は顛倒を行じ、生死に流轉せんこと無量劫なり。若し四禪定を修集する有らば、是を則ち名けて世間の慧と爲す、能く一切の諸顛倒を度し、亦生死に於て解脱を得ん。若し能く諸の衆生を調伏し、亦復四流を遠離せば、是の如きの人は生死を乾かし、亦復能く彼岸に至らん。若し能く四如意を具足せば、是を菩薩の無所畏と名く、亦能く永に生死を斷じ、諸の衆生をして恐怖を脱せしむ。若し能く了了に五陰を知らば、是の人は能く無漏の邊に到らん、不生亦不滅を了知せば、能く衆生をして彼岸に到らしむ。若し能く佛世尊

言を作す「何の因縁の故に、私の宮殿は是の如く傾動する。我等の所尊は、將た退没せざるや。我が天を失するや。我等復、欲せざるに滅墮するや。我れ往より常に、是の如き世界に五の滓濁有るを見たるに、今何に縁つて忽然清淨なるや」と。爾の時諸魔、悉く十方の清淨菩薩、皆來つて娑婆世界に集會せるを見、此の事を見已つて、復是の言を作せり「佛世尊の光明、嚴麗にして衆生樂見するの因縁を以ての故なり。乃至己が眷屬の、一人として在ること有るを見ざるによる」と。復是の念を作す「我れ今何の故に、佛所に至つて親近供養せざる」と。時に魔波旬、即ち佛所に至り、合掌恭敬し、偈を説いて言はく

「我れ今如來に歸依し、已に歡喜至心の樂を得たり、願はくは放捨せられて本處に還り、還り已つて乃ち當に正法を聽かん」と。

爾の時世尊、偈を説いて答へて言はく

「我れ汝に勸むるに去來を以てせず、諸法の性と相とも亦是の如し、汝今若し大神通有らば、隨意自在にして遮る者無けん」と。

是の時波旬、復偈を説いて言はく

「佛世尊の眞實の語の如く、今實に我を遮ゆる者無きも、我れ適本處に還らんと欲する時、尋で即ち身の五縛を披るを見る」と。

佛の言はく「我れ已に永に一切の繫縛を斷ち、一切衆生の繫縛を解かんと欲す。我れ亦衆生の諸惡を念ぜず、是の故に繫縛を解脫すと名くるを得」と。爾の時世尊、十方衆生の、悉く來つて集會せるを見、即ち偈を説いて言はく

「一切の大衆よ、至心に聽き、一切疑網の心を遠離せよ、我れ今説く所は不思議なり、應當に諦に業の因縁を觀すべし。無上の世尊は甚だ有り難し、法・僧の一寶も亦復然り、人身は得難

たまひ、かの蓮華の所に到つて、右手を以て之に觸れて動したまへるを原因として、一切の魔の宮殿が皆振動する事を記す。

ふ、如來は今に記を授けんと欲したまふ、實義を聽かんと欲するもの、亦に彼に往くべし

云々

此の如き語句は『法華經』卷第三に於て見ゆ。又『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。此の如き語句は、『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。此の如き語句は、『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。此の如き語句は、『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

爾の時世尊、佛の莊嚴瓔珞三昧に入り、三昧こゝれおつて、この娑婆世界を以て正法蓮華の國と稱す。此の國の時世尊の如く、菩薩摩訶薩の衆生衆見し、十方無量阿僧祇劫、この娑婆世界を以て正法蓮華の國と稱す。此の國の時世尊の如く、菩薩摩訶薩の衆生衆見し、十方無量阿僧祇劫、この娑婆世界を以て正法蓮華の國と稱す。

爾の時十方、十方無量阿僧祇劫、この娑婆世界を以て正法蓮華の國と稱す。此の國の時世尊の如く、菩薩摩訶薩の衆生衆見し、十方無量阿僧祇劫、この娑婆世界を以て正法蓮華の國と稱す。此の國の時世尊の如く、菩薩摩訶薩の衆生衆見し、十方無量阿僧祇劫、この娑婆世界を以て正法蓮華の國と稱す。

是の時、一切の魔衆――男女・大小及び諸の眷屬

は、皆悉く動搖して大抵怖を生じ、即ち是の

【九〇】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

【九一】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

【九二】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

【九三】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

【九四】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

【九五】 唐譯は、上記の大衆を隨へて、佛、王舎城に入りた

【九六】 唐譯は、上記の大衆を隨へて、佛、王舎城に入りた

【九七】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

【九八】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

【九九】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

【一〇〇】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

【一〇一】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

【一〇二】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

【一〇三】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

【一〇四】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

【一〇五】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

【一〇六】 『法華經疏』卷第三に於て見ゆ。

をして六種に震動せしめぬ。善男子、汝は來世に於て三阿僧祇劫を過ぎ、當に此の土の北方世界——名けて「香華」といひ、其の界の莊嚴は「阿彌陀」の如くなる——に於て、當に彼の中に於て、成じて佛と爲るを得、光功德如來・應・正遍知・明・行・足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と名け、無量世に於て大乘を宣説し、終に聲聞・緣覺を説かざらん」と。爾の時大衆、光味仙人の、記勅を受くるを得たるを耳に聞き目に見、悉く共に歡喜し、供養恭敬し、五百の弟子と無量の衆生とは阿耨多羅三藐三菩提心を發し、其の意堅固にして、退轉有ること無かりき。

寶幢分中 相品第五

爾の時佛、諸の魔の心を知り已り、即ち三昧に入りたまふに、三昧力の故に、王舍城をして十二門有りて、一一門中に一如來有らしめたまへり。爾の時諸魔、十二の佛を見、自ら其の身を現じて五通の像と爲し、乃至梵天王の像を示現し、妙香・華蓋・伎樂を以て佛を供養したり。佛城に入りたまふ時、足指もて地を案じ、此の三千大千世界をして六種に震動せしめられたれば、其の中の天・人・阿修羅等、帝釋・梵天及び四天王、一切の衆生、悉く皆十方の世界・十方の衆生を見ることを得、皆悉く來つて王舍大城に集まり、香華を齎持して佛を供養したるに、佛の神力の故に、香華中には是の如き偈を説かしめたり。

「若し永に三惡道を斷ぜんと欲せば、應當に菩提心を發起すべし、若し生死に於て獨り覺らんには、是れ能く諸の衆生を度脱せしめん。若し惡業を離れんと欲せば、應當に正道を修集すべし、若し諸の如來に値遇する有らば、是の人即ち道の記を受くるを得ん。如來大士は衆生を利したまふ、今此の王舍城に來入したまふは、一切の諸魔衆を摧かんと欲してなり、無上の正法輪を轉ぜんと欲してなり。佛は五・滓の諸衆生の爲に、三乘と首楞嚴とを宣説したま

【六】唐譯には開敷香といふ。

【七】同に西方安樂世界とす。

【八】同に無垢香光勝如來とす。

【九】唐譯卷第五。同に別行とす。

【一〇】五滓、また五濁といふ、劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の五をいふ。

り、如來は一切の相を具足したまふ、願はくは我が菩提を 得ん時を記したまへ。 我れ當に云何が煩惱を斷じ、一切の苦の衆生を度脱せしめ、眞實眞の道を演べ、平等なること猶し十方の佛の如くなるべき。 衆生は三世に惡業を造る、我れ當に云何が其をして斷ぜしむべき、若し我が身口意にして善業あらば、願はくは此の因縁によつて彼の結を斷たしめたまへ。 永に一切煩惱の病を斷たば、身に妙樂を受けんこと先佛の如くなるべし、衆をして妙色と諸根とを具し、諸惡を遠離して善法を修せしめん。 衆生の諸邪見を斷除し、正見を修習具足し、宿命を識るを得て善行を樂み、生死の河を度つて彼岸に至らしめん。 六波羅蜜を具足するを得なば、佛の深法の常に世に 在るを知らん、無上の大法雨を降らすを樂み、諸の衆生をして貧と渴とを離れしめん。 若しは我が身口意の惡業を、今佛の前に悉く懺悔し、我が今所有の福德力をば、衆生に施與して早く成佛せしめん。 我れ一切諸衆生を請じ、之に勸めて菩提の種を種えしめん。 我れ衆生の爲に苦を受けん時、願はくは悔と退轉とを生ぜざらんを。 世界及び衆生を淨め、無礙智を得、法界を淨めん、若し我れ眞實に佛道を得んには、願はくは此に散ずる所、華蓋を成ぜんことを」と。

爾の時光味、即ち華を以て散じぬ。 是の時三千大千世界、六種に震動し、無量の衆生は歡喜心を生じ、諸の衆生有りて象に奉事する者、佛は是れ象なるを見て、是の如き言を作す「云何が此の象、大福德有り、是の仙人をして敬意供養せしむる。 乃至は若し佛に敬事する者有らんに、彼の仙人の敬心供養するを見、見已つて信を生じ、禮拜讚歎したり。

爾の時世尊、首楞嚴定を出で、定より起ち已りたまふに、一切衆生悉く佛身を見、見已つて心に供養と歡喜とを生じ、各己が力に任せて供養を作せり。 爾の時世尊、光味に告げて言はく「善男子、一切の諸天は、汝の決定して阿耨多羅三藐三菩提心を發したるを見、歡喜踊躍の故に、是の地

【八一】この前後、唐譯相文にいふ、所得三昧、於菩薩三昧、一切觀見、如在高幢、觀見一切三昧云云とて、幢の義を説けり。

【八二】物は掌なり。この所、唐譯相當文に兩手捧華とす。

【八三】得、屬本等に作る、今三本に従ふ。

【八四】在、屬本住に作る、今三本に従ふ。

我れ都て一法の相をも覺せず、是の故に星宿の書をも説かず、法に衆生無く壽命無し、是の故に無我と淨とを演説す。已に三受と三行との岸を度り、諸相を斷するが故に相有ること無し、我れ已に眞實に諸法を知る、是の故に大寂靜を獲得したり。若し罪礙無くして虚空の如くならんには、菩提を行すと雖も法を覺せじ。禁戒と大忍辱を修集せば、即ち無相の大智慧を得、若し業を覺せずして果報を求めなば、如法なるも轉菩提を得じ。心一切の陰に貪著せずんば、亦復此と彼を觀ぜず、又菩提の邊を覺知せずんば、是れ能く速に菩提道を得ん。相統有ること無く想念無ければ、一切の法に於て覺觀無し、亦諸法に貪著せずんば、即ち能く一切の覺を獲得せん。若し淨梵行を修集する有らば、是の人を婆羅門と名くるを得、諸法を觀察すること虚空の如くなれば、是の人即ち大覺と名くるを得」と。

是に於て世尊、是の偈を説き已りたまふに、光味仙人及び諸の眷屬は、一切皆如來の本身を見たり。本身を見已つて、往の善の所追により、即ち各寶幢三昧を獲得したり。是の三昧を得ば、能く遍く一切の三昧を觀察す、故に名けて幢と爲す。諸の三昧に於て自在を得、一切の三昧の境界に遊入す、是の故に名けて寶幢三昧と爲す。爾の時光味、合堂恭敬し、微妙の華を持ちて其の手掬を滿し、偈を説いて佛を讚ふらく

「如來は無量の徳を成就したまひ、猶し大海の水彌滿するが如し、功德の光明甚だ微妙にして、悉く三千大千世界をば照らす。精進に勇猛にして大智慧あり、一切の諸衆生に出勝し、大慈大悲の心の具足したまふ、是の故に我れ無上尊をば禮しまつる。如來は永に諸の煩惱を斷ちたまふ、故に我れ大仙の師に稽首しまつる、清淨金色にして戒の光明あり、我れ今佛日を禮敬しまつる。能く衆生の諸煩惱を乾かし、能く眞實に菩提の行を説き、能く一切の煩惱の山を壞し、無上の正法輪を轉じたまふ。今我れ菩提道を修するは、無上の大智慧を得んが爲な

【一】は次の虚宿の原語なり。從てこの語に依る限り、この文は虚宿に屬する者の説明ならん。

【二】同に舍多毗婆 (Sattva-Bhikṣu) 星生者、從佛膝以下、十六指内、當有黑鬚、爲性愚癡、潮水而死といふ。

【三】唐譯に第一跋陀羅跋陀 (Purva-Bhadrapada) 星生者、從佛膝以下、八指内膊上、必當有疵、令人臍間、愚癡貧窮、好作盜賊といふ。

【四】麗本生に作る。

【五】唐譯には、第二跋陀羅 (Dhvaja-B) 辟宿といふと星生者於虎口内當有鬚子、好施持戒、念力強記、有智有悲、性無所畏と。

【六】尋、麗本等に作る、今三本に從ふ。

【七】相書は占ひの書と云はんが如し。

【八】姓、麗本性に作る、今三本に從ふ。

【九】已、麗本以に作る、今三本に從ふ。

【一〇】相、麗本根に作る、今三本に從ふ。

【一一】麗、麗本學に作る、今三本に從ふ。

【一二】麗、麗本に想に作る、今三本に從ふ。

【一三】邊、麗、宋二本は道に作る、今元明二本に依る。

十年、諸の眷屬に宜し。瞿曇、危星に屬する者は、是の如き相有り。

『空星に屬する者、受性弊惡、多く禁戒を犯す。人となり富貴、壽命百年、死しては惡道に墮せん。父母及び兄弟に宜しからず。瞿曇、空星に屬する者、是の如き相有り。』

『壁星に屬する者、勇猛多力にして、尊榮富貴なり。大名稱有り、眷屬増長す、父母に宜しからず。壽命千年、名聞無量なり。法を樂みて出家し、受法の者を敬し、聰明多智にして、善く世事を解せん。瞿曇、北方星に屬するもの、是の如き相有り。若し是の如き相に通達する者有らんに、彼岸に到り大智慧を得ん』と。

佛の言はく『衆生闇に行き、顛倒に著し、煩惱に繫縛せられ、是の如き星宿の書籍に隨逐す。仙人は星宿好しと雖も、亦復牛馬狗猪に生る。亦同じく一星に屬して生る、者有るも、而も貧賤と富貴との參差あり、是の故に我れ知んぬ、是れ不定の法なるを。仙人、汝禪を得と雖も、我は是れ一切大智の人たり、何の故に解脫の因縁を問はずして乃ち是の事をば問へる』と。光味又言はく『汝今身を現すること、世の如くにして異なる無し。而も其の事を尋ぬる、仙と別無し。我れ今眞實に、汝は是れ天なるや仙なるや、龍なるや鬼なるやを知らず。聲は梵音の如く、色は大仙の如し。我れ昔よりこのかた、未だ曾て是の如き色相、是の如き事業を見聞せず。是の故に今問ふ。汝は是れ誰とか爲し、誰にか繫屬する、姓氏は何等なる、何事をか宣説する。唯願はくは廣説せよ、我れ當に聽受すべし』と。爾の時世尊、即ち偈を説きて言はく

『若し學習して 相書に著する百らば、是の人は此、彼を知る能はず、若し煩惱に縛せらる、有らば、解脫を得ずして常に苦を受けん。我れ今六神通を具足す、是の故に大婆羅門と名く、六波羅蜜は是れ我が 姓なり、六和敬を以て諸根をば調す。我れ 已に三種の戒を受持し、空無相の三脫門を得ず、我れ往初めて菩提心を發したり、爾の時大出家と名くるを得たりき。』

空無相の三脫門を得ず、我れ往初めて菩提心を發したり、爾の時大出家と名くるを得たりき。

【六〇】 同に畢 (Rohini) 星生者、身上有斑、若四指量、聰敏眞實、心常守法、智慧漸塊、爵祿具足、於一切時、心常勇健、能摧惡想。【六一】 同に嚙星 (Marsāyana or Invulsi) 星生者、從頂量、已下一揆手半、左相有鬚、性多威勢、而有爵祿。【六二】 唐譯に、參、(Mars) 星生者、頭下四指中、有黑斑、爲性勇健、爵祿具足。【六三】 同に第二阿沙茶 (Uttaraśāṭāha) 星生者、於右脛上、當有二善鬚、性好調諍、人不依附、而不信受。此の星以下の七は、本經に云ふ北方の七星たり。【六七】 牛宿の原語は abhihitā なるべし、唐譯には此星に關する説明を脱したるなるべし。次註參照。【六八】 同に失羅婆 (Śravāṇā) 星生者、於右脛上、必有二兩鬚、常樂二爵祿、受身無病人、人所愛樂、命終生天、と云ひ失羅婆の下に「唐言牛宿」と註記するも、Śravāṇā は女宿の原語なり。故にこの文は女宿に屬する者の説明なるべし。【六九】 同に陀爾瑟吒 (Dharmī) 星生者、脛上有鬚、多願少貪、雖有智慧、而無爵祿、といひ、陀爾瑟吒には「唐言女宿」と註するも、Dharmī-

て大富貴を得ん、慳ならずして施を樂む。瞿曇、胃星に屬する者、是の如き相有り。

【五】 昴星に屬する者、正法を樂み、辯口利辭にして聰明富貴、多く名稱有り。禁戒を護持し、人に敬信せられ、死し已つて天に生ず、膝に黒子有り、壽五十年なり。瞿曇、昴星に屬する者、是の如き相有り。

【六】 畢星に屬する者、人に信伏せられ、悪性にして鬪を喜び、己が姉妹に貪心を生ず。富貴なるも怨多く、常に胸痛を患ふ。錢財に宜しからず、左に黒子有り。壽七十年、瞿曇、畢星に屬する者、是の如き相有り。

【七】 紫星に屬する者、富貴にして施を樂み、慚愧して食無く、病苦有ること無く、衆生樂見す、死し已つて生天す。衰七十に在り、壽八十を滿たす。瞿曇、紫星に屬する者、是の如き相有り。

【八】 參星に屬する者、受性弊惡、多く惡業を造り、守獄の卒と作り、貪欲偏多にして、聰明なるも貧に苦しむ。壽六十五、多く黒子有り。瞿曇、西方の星に屬せば、是の如き相有り。

【九】 斗星に屬する者、受性愚癡、貪にして足るを知らず。貧窮惡性、壽命短促、當に病んで食して死すべし。黒色にして羸瘦す。瞿曇、斗星に屬する者、是の如き相有り。

【十】 牛星に屬する者、性癡にして貧窮、樂んで偷竊を爲す、心に嫉妬多し。壽七十、妻子有ること無し。瞿曇、牛星に屬する者、是の如き相有り。

【十一】 女星に屬する者、戒を持し施を樂む。其の人足下に多く黒子有り、眷屬を増長す、壽八十年。大名聲有り、病痛有ること無し、父母及び兄弟に宜し。瞿曇、女星に屬する者、是の如き相有り。

【十二】 虚星に屬する者、福德富貴、眷屬愛樂す。慳慳にして施さず、壽六十五、其の人の足下には當に黒子有るべし。瞿曇、虚星に屬する者、是の如き相有り。

【十三】 危星に屬する者は、身に病苦無し、聰明にして戒を持し、世事に通達して、富貴多財なり、壽八

卯、畢、參、觜の四宿を加へたるを東方の七星となす。

【五】 同に、莫伽 (Makha) (唐言「宿星」と註す)、星生者、若胸背背、而有二小疵、是善丈夫、能如法行、而多財貨。

【六】 唐譯に初破求 (Purita-phalSuta) 星生者、或臍左右、必當有疵、多憊短命と。

【七】 類、麗木頂に作る、今三本に従ふ。

【八】 同に第二破求 (Uttara) 星生者、臍下四指、若見、關者、僻疎持戒、皆悉失壞と。

【九】 同に阿薩多 (Asada) 星生者、齋關已下、當有赤鬚、性好作賊、詭曲少智、聰明薄福、と云ふ。

【十】 同に麗婆底 (Revati) 星生者、爲人卑下、庸力自活、といふ。この奎星以下の七星は本經の西方の七星なり。

【十一】 唐譯に阿濕咄賦 (Asvati) 星生者、足拇指間、當有赤鬚、身無病惱、而常大力と。

【十二】 同に婆連尼 (Bhadra) 星生者、於足掌下、當有鬚子、受性無悲、好爲空手、破戒惡行、死入地獄と。

【十三】 同に卯 (Kritika) 星生者、於二面右邊、權下四指、有赤黑鬚、鬚上有毛、名聞智慧、得祿相應、威勢熾盛、則星生者、有如是相と。

【一】鬼星に屬する人、慳慳にして短壽、臂下四指に當に黒子有るべし、父母に宜しからず、評訟を喜樂す。瞿曇、鬼星に屬する者、是の如き相有り。

【二】柳星に屬する者、富貴にして戒を持し、法事を慕樂す、壽七十五。眷屬を増長し、死し已つて天に生ず。腰に赤子有り、受法の者を敬し、人に信服せらる。瞿曇、柳星に屬する者、是の如き相あり。

【三】七星に屬する者、樂んで劫賊と爲り、物を盜むを業と爲す。姦偽詭曲、薄福短壽なり、舉動龜縮にして愚癡狂騒す、必ず兵死を被らん。瞿曇、七星の生者は、是の如き相あり。

【四】張星に屬する者、壽命八十、音樂を善くす。首髮稀少なり、二十七及び三十三に衰ふ。富貴勇健にして大名稱有らん、聰明にして慳無く、法を樂みて慚愧す、父母及び兄弟、宜しからず、頸に瘡癩有り、三十五を過ぎて乃ち子息有り。陰に黒子有り、髀に黃子有らん。瞿曇、張星に屬する者は是の如き相有り。

【五】翼星に屬する人、善く算數を知り、慳慳にして惡性、鈍根にして邪見なり、右に黒子有り、壽命三十三、絶えて子息無し。瞿曇、翼星に屬する者、是の如き相有り。

【六】軫星に屬する人、巨富豪貴、眷屬・奴婢・僕使など多饒にして、聰明勇健、法を樂み法を愛し、受法の者を敬ふ、壽命百年、死し已つて天に生ぜん。瞿曇、南方星に屬する者、是の如き相有り。

【七】奎星に屬する者、其の人の兩頬に當に黒子有るべし、戒を持し法を樂み、受法の者を敬ひ、富貴にして施を樂む、身に火瘡有り、壽五十年。瞿曇、奎星に屬する者、是の如き相有り。

【八】婁星に屬する者、壽命短促、貧窮困苦し、毀戒を樂見し、其の心慳慳。膝下に瘡癩有り、壽三十年、兄に宜しからず。瞿曇、婁星に屬する者、是の如き相有り。

【九】胃星に屬する者、父母に宜しからず、多く財寶・田業・舍宅を失ふ。膝に黒子有り、二十二を過ぎ、

【一】唐譯には、阿奴邏陀 (Anuradha) 星生者、從、膝已上八指量内、若有二小疣、持戒有法、爵祿具足と。

【二】驗はおろかなり。

【三】唐譯に逝瑟多 (Sesha) 星生者、膝内有り、短壽貧窮、犯戒少慈、爲人憎嫉。

【四】唐譯に暮羅 (Mura) 星生者、膝上尙有小疣、此有二福德、而速滅門と。

【五】同に初阿沙茶 (Charya) 星生者、膝蓋有り、性好捨施、能知法道、令終生天と。

【六】跋、麗本疏に作る、今三本に従ふ。

【七】以上にて本經に云ふ東方の七星終る。次の井星以下の七星は、本經に於ては南方の七かり。

【八】唐譯に富那婆蘇 (Purnavasu) 星生者、於左脇下、當有黒髮、財穀具足、而少智慧と。

【九】唐譯に富沙 (Purva) 星生、有最上相、二手中輪相、輪如二日輪、上妙端正、榮相右旋、一切依住、上身圓滿、能破煩惱、爲大導師、

【一〇】同に阿失麗沙 (Ashlesha) 星生者、胸有黒疵、好、鬪犯戒、強、與共住、性多淫欲と、

而して上の井、鬼、柳、の外、

怨も害する能はじ。樂ふて出家を欲し、性を受くること柔軟、輕躁、確盡し、隱藏する所無し。壽六十年なり。三十五の時、身篤病に遇はん。頸を透ること四指なるは、當に瘡癩有るべし。子息に宜しからず。瞿曇、亢星に屬する者、是の如き相有り。

『氏星に屬する者、人と生れて、身を受くること勇健、巨富豪貴なるも、壽二十五。左に黒子あり、父母の所に於て恒に惡心を生ず。出家の人を敬ふも、己が眷屬に於て、増長を得ず。瞿曇、氏星に屬する者、是の如き相あり。

『房星に屬する者、性を受くること弊惡、愚騷無智なるも巨富豪貴。右に黒子あり、壽三十五にして當に兵死を被るべし。兄弟に宜し。瞿曇、房星に屬する人は是の如き相あり。

『心星に屬する人は、富貴多財なるも、愚癡にして風病あり、壽三十五。頭に瘡癩有り、大名聲有らん、毒中る能はず、妻子樂まず。瞿曇、心星に屬する人は是の如きの相あり。

『尾星に屬する人、諸の相好を具し、雄壯富貴、大自在を得。兩乳に輪相あり、大名聲有らん。身の諸光明は日・月に勝れ、聰明大智にして能く勝る者無く、出家を貪樂し、能く煩惱を調す。眷屬を増長するも、多く慚愧有り、壽命百年、四十五の時、暫く一苦を受けん。胸に徳相有りて衆生樂見す。父母に宜しからず。瞿曇、尾星に屬する人は是の如き相あり。

『箕星に屬する人、評訟を樂喜し、多く禁戒を犯す、受性弊惡にして人喜見せず、食欲熾盛なり、壽六十年。貧窮困苦し、常に遊行を樂む。牙齒疎小、胸臆確瘦す。瞿曇、東方の宿に是の如き相あり。

『井星に屬する人、財寶多饒にして、人に恭敬せられ、心に法を樂ひ、齋に瘡癩有り、壽八十年。父母師長に慈孝供養し、父に先んじて母を喪はん。心に慳吝無く、多く慚愧有り、衰禍水に在り。瞿曇、井星に屬する者、是の如き相有り。

第一(四方の第四)、卯宿より説き始め次で南方の七宿を終へて、東方の夫に及ぶ。

『四』一切の星を東西南北の四方に配するを四分といふ。而して二十八宿を四方に配して各七宿ありとせらる。次句に東方に七宿有りといふは即ち是なり。

『五』唐譯に質多維(Chitra)星生者、男女陰上、當有(當有)爲(爲)性純直、而多(而多)愛欲、復好(復好)歌舞(歌舞)とのみ云ふ。

『七』促はせまるなり。

『八』唐譯には薩婆底(Shakya)星生者、或男根頭、或在(或在)根下有(下有)黃(黃)鬚、受性多貪(受性多貪)瞋(瞋)惱(惱)大衆、而無(而無)智慧(智慧)と云ふ。

『九』確は堅正なり。

『十』麗本藥に作る、今元明本に依る。きつあととなり。

『十一』唐譯には蘇舍佉(Shaketa)星生者、從(從)捨佉(捨佉)下(下)八指(八指)掌(掌)内(内)、處(處)而有(而有)赤(赤)鬚(鬚)生(生)者、眷(眷)屬(屬)且(且)足(足)、多(多)有(有)僮(僮)僕(僕)、位(位)居(居)卑(卑)下(下)、聰(聰)明(明)漸(漸)愧(愧)、勇(勇)健(健)謀(謀)決(決)、能(能)退(退)怨(怨)敵(敵)、常(常)受(受)安(安)樂(樂)、命(命)終(終)生(生)天(天)と。而(而)してこの次に上(上)七(七)星(星)屬(屬)南(南)方(方)と註(註)記(記)す。是(是)に依(依)れば七(七)星(星)は、上(上)の三(三)星(星)の外(外)に宿(宿)星(星)、張(張)宿(宿)翼(翼)宿(宿)軫(軫)宿(宿)の四(四)を加(加)ふるなり。

『十二』麗本悔に作る。今三本に從ふ。

爾の時光味、五百の弟子のために、前後圍遶せられて、即ち佛所に至り、是の如きの言を作す。『汝は是れ誰ぞや』と。佛の言はく『是れ婆羅門なり』。光味復言はく『姓は何等なるや』と。答へて言はく『我が姓は瞿曇なり』。又問ふらく『何の戒を受けたる』と。答へて言はく『吾れ三戒を受けたり』と。又問ふらく『何の行をか修集する』。答へて言はく『三空行を修す』と。又問ふ『出家してより已來、久しと爲すや近きや』。答へて言はく『大智を具する時なり』と。又問ふ『汝頗し星宿の書を讀誦するや不や』。答へて言はく『汝今讀誦して何の利益をか得る』と。光味復言はく『我れ此の法を以て諸の衆生を教ふ、我が語を受くる者、多く供養を獻す』。佛の言はく『汝此の書を知るも、頗し能く生老死を過ぐるを得るや不や』と。光味復問ふ『瞿曇、生老病死は云何がして斷すべき』。佛の言はく『汝若し生老死を斷つ能はずんば、何を以て是の如きの星書を讀誦するや』。光味復言はく『瞿曇、汝若し星宿の書を知らずば、身上に何の故にか星の行處有らん。我が知る如くんば、定んで調ふ、瞿曇は是の如き星宿の彼岸に通達したり』。佛の言はく『云何が星宿の道と名くる』。光味答へて言はく『謂はく、二十八宿ありて、日月隨つて行く。一切衆生、日月年歳、皆悉く繫屬す。瞿曇、一切の星宿は跡に四分有り。』

『瞿曇、東方の七宿とは、謂はく角・亢・氏・房・心・尾・箕なり。若し人の生日、角星に屬せば、口闊く、四指と額との廣きこと亦爾り。其の身の右邊に多く黒子を生じ、上に皆毛有らば、當に知るべし、是の人は多財にして富貴なるを。廣額の象に似るは、聰明多智にして眷屬熾盛を示す』なり。其の項は短促、脚の兩指長し。左に刀創有らば、多く妻子有り、惡性にして輕躁なり。命を尋ぬること八十、四十年の時、一衰苦を受け、長子壽あらじ。心に法事を樂ふ、衰患火に在り。瞿曇、角星に屬する者は、是の如きの相あり。』

『亢星に屬する者は、心に法事を樂ひ、性を受くること多功、聰明富貴にして、多く慚愧を懷き、』

【二八】唐譯によれば、この問答は、世尊の志業を仙が問へるに對し、佛は三解脱門なる旨を答へたまふ、戒に就て言ふ所無し。

【二九】唐譯には、この答に我行眞際如とあり。

【三〇】この答、唐譯には如無明、久如所起とあり。

【三一】また宿曜ともいひ、印度の天文法なり。このうち、二十八宿、十二宮七曜の別あり。人界天界の一切の事實は常に相反映し、吉凶の相は宿曜に現はれ、且つ星宿の運行によつて、人界の個人の運命が支配せらるると信じられたり。今は特に人の生日を之に配し、その形相氣質、運命などを説く。占星の一種なり。大方等大集日藏分の星宿品並に同月藏分星宿攝受品及び宿曜經參照。

【三二】この節、以下、唐譯と説相異る。

【三三】二十八は日月の運行圖を區別する爲に、日常目に着き易き群星を撰び、その分野と名けしものにして、新月の始より満月を経て黒月の終に至るまで、一日一宿として、月の盈虚の全過程を測定せる唐譯は、これに續きて星宿の量法を示し、次で二十八宿の

毘遮羅華、優婆鉢羅華、俱物頭華、波頭摩華、分陀利華——是の如き等の華をもつて、如來の行處を莊嚴、遍覆す。路の二邊に於て七寶の行樹あり、高さ一多羅樹なり、樹間に八味の清泉あり、上虛空中に多く諸天有り、手に上妙七寶の寶蓋を持ち、諸の雜華・金・銀・頗梨・琉璃等の寶を雨らし、牛頭梅檀及び白梅檀、堅韌、沈水・種々の華香もて、遍く如來所行の處に雨らしぬ。復種々微妙の伎樂有り、一切の人民悉く共に、王舍城外なる如來の行處を嚴治し、諸の魔の眷屬は城内を莊嚴す。時に佛世尊、王舍城に入りたまふ。

爾の時心首楞嚴定に遊び、微妙の八十種好を示現したまふ——若し象に事ふる者には象の像を現じ、師子に事ふる者には師子の像を現じ、牛に事ふる者有らば牛の像を現じ、命命鳥に事ふるものには命命の像を現じ、兔に事ふる者有らば兔の像を現じ、魚・龍・龜・鼈・梵天・自在・毘陀・八臂・帝釋・阿修羅・迦樓羅・虎・狼・猪・鹿・水・火・風神、日月・星宿、國王大臣、男女大小、沙門・婆羅門、四王・夜叉、菩薩如來などに事ふるものには、各事ふる所に隨つて之を見ることを得しめたまふに、見已つては皆、南無・南無無上世尊と稱し、合掌恭敬禮拜供養しぬ。

爾の時雪山なる光味仙人、其の弟子と西門下に在り、側に立ちて佛を待つ。光味仙人、佛身を觀見するに、是れ光味仙人の像にして、無量の衆生の爲に供養せらるゝにより、即ち是の言を作す「是の如きの人は眞に是れ大仙なり、世間・人天の供養を受けたまふに堪ゆ。何を以ての故に、福德相の故に。我れ云何がして、かれ大なるやわれ大なるやを知るべき。我れ今當に、生・姓・經書・出家の久近を問ふべし」とて、光味仙人即ち佛所に趣き、其の弟子、摩訶に告ぐらく「彼の仙人は徳相成就し、了々に聰明寂靜にして能く深義を解せるを知るべし。汝等應當に至心に信を生ずべし。我が所見の相書所載の如くんば、是の人は必ず能く無上の道を説かん、彼定んで能く我れをして生死を度らしめん」と。五百の弟子、同聲に歎じて言はく「善い哉、善い哉、和上の言の如し」と。

【一七】 並木をいふ。

【一八】 樹の字、麗本に無し、三本に依つて加ふ。

【一九】 牛頭山よりいづる梅檀の謂。

【二〇】 堅韌は卷第三十一の最後の註參照。沈水は略して沈香といふもの。

【二一】 Gauri-gurua また首楞伽摩とも寫す。健州、一切事名など譯す。佛所得の三昧の名。

【二二】 耆婆耆婆迦 Jivajivaka 生生鳥、其命鳥など譯す。一身兩頭の鳥なりと云はる。

【二三】 毘陀は Gandharva なり。

【二四】 八臂天は那羅延天 Bajra devata なり。

【二五】 光味仙人と佛と、誰か勝るやを知らんとするなり。

【二六】 摩訶縛迦 (Mahavajra) の略、儒童、年少など譯す。

【二七】 師の尊稱なり。もと俗語の轉訛なりと。

はく「世尊、一切の魔衆は今、定んで如來を毀害しまつらんと欲す、唯願はくは往きたまふ勿らんを。如來は當に、一切衆生の無明・闇行を滅したまふべし。世尊は往昔に、諸の衆生に請せし、許すに甘露を以てしたまふ、斯の事未だ果したまはざるに、云何ぞ便ち身命を放捨せんと欲したまふや。往昔に菩提樹下に一魔を壞し已りたまへるに猶つて、餘を輕蔑したまふ莫れ。如來、若し王舍城中に入りたまはば、即便ち滅没したまはんこと、復疑無けん」と。

爾の時世尊、大梵音聲を出し、三千大千世界に遍じ已り、是の言を作したまふ「諦に聽き諦に聽け、假使諸魔悉く皆十方世界に遍滿し、其の力勢を盡すも、乃至我が一毛も動かす能はず。我昔已に無量の衆生より請はれ、許すに甘露を以てしたり、今當に第一義諦を演說すべし、善法を増長し正道を説くこと、以て我が願に稱へばなり。我れ往昔、無量世中に、諸の衆生の爲に、多く苦惱を受け、一切の金・銀・琉璃・頗梨・寶貨・國城・妻子・衣服・飲食及び身命を放捨し、妙香華・幡蓋・燈明を以て諸佛を供養し、淨戒を受持し忍辱を修行したれば、誰か能く惡を以て我が身に加へん。我れ衆生に於て常に慈悲を修したり、誰か能く我れをして滅没せしめんや。我れ先に已に魔の眷屬を摧けるが如く、當に知るべし、今も亦能く破壊せん。汝等此れに於て怖畏を懷く勿れ」と。時に無量の天、是の語を聞き已り、心に喜樂を生じて各々言はく「大士・如來世尊に南無す。大魔衆を壞し、諸の煩惱を破し、永く習氣を斷じ、憍慢の山を摧き、生死の樹を抜き、死の日月を滅し、無明の闇を除き、一切邪見の衆生を勸化し、四流を焦涸して大法炬を然し、菩提道を示して大法鼓を擊ち、諸の衆生に善法の樂を施し、復四眞諦の相を覺悟して、生死海を度り、無畏の處に入らしめたまへ」と。是の語を聞き已り、妙香華・幡蓋・伎樂を以て佛を供養し、復種々微妙の好華を以て王舍城に散らしめ——所謂曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・波樓沙華・摩訶波樓沙華・迦迦羅華・摩訶迦迦羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華・陀妙羅華・摩訶瞻婆羅華・歡喜華・大歡喜華・愛樂華・大愛樂華・波利質華、俱

【二四】甘露は、味甘くして蜜の如きもの、天人の所食たり。今は佛の教法を、之に喻へたり。

【二五】 Harivalka 三色華、紫磧花などいふ。唐譯に波盧遮に作る。

【二六】唐譯は迦盧遮に作る。

復二萬有り、躬みを持つて佛を待ち、復二萬有りて弓箭を執持し、復二萬有り、大炬火を持つ。唯願はくは如來、我等の語を受けて、復入城したまふ勿れ」と。如來默然として許したまはざりき。

爾の時世尊、王舍城門に入りたまふに、其の守城天、啼泣して佛に向ひ、是の如きの言を作す「唯願はくは如來、復城に入りたまふ勿れ。何を以ての故に、今此の城中には、惡業彌滿す、若し如來をして此に滅せしめば、我云何がして諸天衆に見えん。魔衆は今、刀劍・猛火・大石を雨らしめんと欲す。如來若し滅したまはば、衆生は闇を行き、大法炬を滅し、大法山を壊し、生老病死を歡喜し受樂せん」と。佛爾の時に於て、是の語を聞きたまふと雖も、亦許可したまはず。時に天復言はく「若し身命を惜まずして、必ず放捨せんと欲したまはば、六大城有り、何ぞ此を必せん、如來若し此の間に滅したまはば、則ち我をして無量世中に大惡名を得しめん」と。爾の時復、無量の諸天有り、俱に佛所に至り、是の如きの言を作す「世尊、我れ已に曾て、無量の諸佛、說法して無量の衆生を教化したまふを見たるも、實に未だ曾て是の如き魔衆を見ず。世間の衆生——常に無量の諸惡煩惱の爲に圍遶せらる——は、良醫——無量の醫方・方便に通達したまふ——に値遇す。如來何の故にか、大慈大悲の心を放捨したまふや」と。復天有つて言ふ「如來は往昔無量の劫中、諸の衆生の爲に、苦行を修集したまへるに、今は云何ぞ、衆生を捨て身命を放棄せんと欲したまふや。唯願はくは、憐愍して正法を演説し、一切の闇昧の衆生を調伏したまへ。願はくは衆生に光明を施し、迷行の人に、示すに正路を以てし、永く一切の三惡道の苦を斷じたまへ。唯願はくは、久しく住して、身命を捨てたまふ莫れ」と。

爾の時復、淨居の諸天有り、諸天に告げて言はく「且く號哭する勿く、愁惱を放捨せよ、如來は十力・無畏をば具したまふ。今一切の魔衆を摧滅せんと欲したまふ、假使無量無邊の魔衆ありとも、乃至佛の一毛だも動かす能はじ」と。爾の時梵王・釋提桓因、往いて佛所に至り、佛に白して言

【一】唐譯によれば、この守城門天は多摩羅樹葉堅固と名けらるると。

【二】淨居天は、色界の第四禪に、不還果を證せる聖の生すべき處にして、無煩、無熱、善現、善見、色究竟の五天あり。

【三】梵に Sakra Devānām Indra (迦提桓因(註釋)の略、須彌の頂上に住し、忉利天の主たり。また帝釋ともいふ。

卷の第二十

寶幢分第九 三昧神足品第四

是の時、如來の四大弟子、諸の魔子と、王舎城に遊び、歌舞し偈を頌す。爾の時大地六返震動し、無量の諸天、悲感啼泣して、「善い哉、善い哉、今如來猶ほ世に在すに、四弟子は諸の魔衆の爲に戲弄せらる」とて、即ち共に集まり、往いて佛所に至り、是の言を作す「世尊、唯願はくは如來、捨心を放捨したまはんを。何を以ての故に。一切の諸魔、佛法を壊せんと欲すればなり」と。佛の言はく「我れ今當に王舎大城に入り、衆生を教化して魔業を破壊し、大神通を示して佛事を施作せんと欲す」と。

爾の時佛、王舎城に入らんと欲したまふ。時に諸の天衆、悲號し、佛に向つて是の言を作す。「今佛城に入らんとしたまふは實に非時なり。何を以ての故に。無量の惡鬼虚空に彌滿し、無量の魔衆は刀・大石を持す。若し佛入城したまはば如來の法幢將に滅せんこと久しからじ」と。爾の時如來、默然として許したまはざりき。復天ありて言はく「世尊、王舎城中には五百の魔子、刀戟を執持して如來を害しまつらんと欲す」と。復一天あり、啼泣して言はく「今は釋種、久しからずして當に壞すべし」と。復天有つて言ふ「無上の法船は今當に散滅すべし。三界の衆生をば、誰か當に濟度して彼岸に至らしむべき」と。復天有りて言ふ「一切の衆生は常に煩惱の爲に纏縛せらる。無上の大師、如し其れ滅したまはば、誰か當に彼をして解脱を得しむべけんや」と。復天有つて言ふ「世尊、見たまはずや、空中の無量の諸魔、刀劍・大石・猛火を雨らさんと欲するを。唯願はくは如來、衆生を愍みたまふが故に、且く入城したまふ莫れ」と。復天有つて言ふ「世尊、王舎城中には二萬の魔有り、各各婆羅門の像を示作し、刀劍を執持して如來を害しまつらんと欲す。

【一】唐譯卷第四、大集品第四。

【二】内心平等にして執着なきを捨といふ。心所の一なれば捨心とす。この唐譯には智者勿二放捨一と云ふ。

【三】號、麗本譯に作る、今三本に從ふ。

【四】唐譯に依れば、同様の詞は護竹林天（名けて端正といふ）の語る所たり。

【五】唐譯に依れば、護伽藍天（持慧と名く）が、佛の法座に起ちたまふ時に言ふと。

【六】唐譯に依れば、佛の伽藍を出でんとしたまへる時、藥天（成慧と名く）の云へる語なり。

【七】度、麗本は渡に作る。今三本に從ふ。

【八】唐譯によれば、佛の伽藍を發たんとしたまへるは、樹天（持勢と名く）の語る所なり。

【九】同によれば、守大門天（水光と名く）の言ふ所なり。

【一〇】同によれば、佛城に入らんとしたまへる時、守城門天の云ふ所たり。

「汝何の縁を以て惡聲を出し、啼哭愁憂して苦惱を受くる、如來は今將に蓮華のところに趣き、能く衆生の種種の苦を壊せんとしたまふ。汝等若し安樂を受けんと欲せば、當に至心に無上尊【一五〇】に依すべし、汝若し五繫の縛を樂はざれば、應に我が語を受けて世尊に歸しまつるべし」と。

爾の時波旬、是の偈を聞き已り、即ち是の念を作す『我れ脱するを得んが爲に、當に詐【一五一】つて歸依すべし、實の心に非ざるなり』と。即ち如來所住の方面に向ひ、合掌して偈を説かく

『我れ今世中の尊——能く衆生の諸苦惱を壊したまふ——に歸依しまつる、亦復一切の惡を懺悔し、佛の眷屬となりて更に造らじ』と。

時に魔波旬、是の偈を説ける時、五繫の縛より尋【一五二】で解脱するを得、解脱を得已つて己が界に趣かんと欲するに、復還縛せられ、第二第三乃至第七なりき。爾の時波旬、既に去ることを得ずして、至心に聽法したり。

【一五〇】 歸依の謂なり。

【一五二】 得、麗本は時に作る、今三本に従ふ。

大方等大集經第十九

種種の幡蓋なるあり、或は佛に向つて種種の華を散らし、燒香禮拜する有り、或は歌頌讚歎し、起つて舞ふ有り。波旬見已り聲を擧げて啼哭し、即ち是の念を作す『我れ今所有福報を喪失す。一切の魔衆は悉く皆瞿曇沙門に歸屬しぬ』と。爾の時波旬、梵天に語つて言はく『我れ福を失し伴黨有ること無しと雖も、猶ほ故に能く瞿曇沙門を壞せん。我れ今當に最後の勢力を示すべし。我れ今能く是の如き蓮華を抜かん』と。爾の時波旬、則ち蓮華に趣くに、復目に靨ると雖も捉ふるを得る能はざりき。世人の『我れ能く電を捉へん』と言ふが如く、電見るべしと雖も而も捉ふる能はざる如く、蓮華も亦爾り。魔見るを得と雖も、捉ふる能はざりき。是の時波旬、心に懊惱を生ずらく、『是の如き蓮華、之を捉へんこと尙ほ難し、云何ぞ抜くべけん』と。復是の念を作す『我れ今當に無量の惡聲を出し、諸の四衆をして、聞き已つて怖畏せしむべし、當に瞿曇を捨て、迸散して去らしむべし』と。波旬爾の時、即ち大聲を出すに、一切の四衆都て聞く者無く、唯魔のみ自ら聞き、聞き已つて復大怖畏心を生じたり。爾の時波旬、怖畏戰慄し、兩手もて地を拍つに、著くる能はずして、猶ほ空を拍つが如くなり。復杖を取り、以て四衆を打たんと欲するも、亦見る能はず、倍怖畏を生じ、擧身戰慄せること、猶ほ猛風の樹葉を吹動するが如くなりき。復是の念を作す『我れ今永に一切の功德と一切の神力とを失ふ、如かず速に本所住の處に還らんには。若し還らすんば必ず死せんこと疑あらじ』と。是に於て去らんと欲するも道徑を知るなし。復是の念を作す『我れ今此に住らば、瞿曇沙門は多く眷屬を將ゐて、今至らんこと久しからじ。如し其れ到れば、必ず屠戮されん、我れ今正しく身を此の地に沈めんと欲す。復此の界の衆生の之を見んことを恐る』と。是の時波旬、上下四方に遁走する能はず、即ち己身の、五繫に縛せらるるを見、見已つて涕泣愁憂苦惱したり。

時に一魔有り、名けて一四九聖道と曰ふが、轉輪王の像を作し、彼の波旬に向ひ、偈を説いて言はく

【一四七】唐譯卷第四、魔王降伏品之偈。

【一四八】唐譯によれば、佛の爲に殺さるゝを、見られざらんと欲するなり。

【一四九】同に智聲といふ。

礙なること虚空の如くならん。能く四魔を壊して煩惱を滅し、正道の諸方便を修集せば、邪見を畏れざること師子の如し、常に如來に親めば則ち之を獲ん」と。

是の如き等の偈の音聲を出せる時、無量の衆生蓮華の所に趣けり。爾の時波旬、耳に是の偈を聞き、又王舍城中の蓮華には、無量の衆生悉く其の下に坐し、次第に乃ち阿迦膩吒に至るを見て、亦復是の如き大苦惱を受け、諸の魔に告げて言はく『諦に聽き諦に聽け。瞿曇沙門は大幻術を作す、汝等當に刀石猛火を雨らせ』と。時に一魔有り、波旬に語つて言はく『瞿曇沙門は悉く已に無量の功德を成就し、二莊嚴を具せり、所謂功德と智慧となり。彼の神力の故に、我をして狂亂し、魔の事業を造作する能はざらしめたり。我れ今彼に於て實に恐懼を懷く』と。復一魔有り、波旬に語つて言はく『汝今愚癡にして邪道を行す、無心の人若し瞿曇を見なば尙ほ信敬を生ぜん。況んや有心の者をや。汝今若し大利益を得んと欲せば、應當に至心に歸依宗敬すべし。復一魔有り、波旬に語つて言はく『波旬、汝今云何ぞ常に惡行を樂み惡業を造作するや。汝當に惡魔の業を遠離すべし。汝今如來世尊に見え、王舍城に趣き衆生に甘露味を施さんと欲せざるや。汝等當に共に瞿曇に歸依すべし』と。

爾の時無量の魔衆、空に乗じて下り、王舍城に至りて或は王像、或は轉輪王像——七寶にて成就せる——を作し、或は復自在天像を示作し、或は沙門・梵志・尼乾の像を作し、或は四天王像、日月等の像、帝釋・梵の像を作し、或は坐し・立ち、及び禮拜して讚歎する者有り、或は周遍して王舍城を遊る有り、或は其の城の上に上ることを示現する有り、或は青色にして白衣・白瓔珞・白幡・白蓋なる有り、或は黄色にして赤衣・赤瓔・赤幡・赤蓋なる有り、或は白色にして種種色の衣・種種の瓔珞・黃幡・黃蓋なる有り、或は赤色にして青衣・青瓔・青幡・青蓋なる有り、或は七寶色にして七寶の衣服・七寶の瓔珞・七寶の幡蓋なるあり、或は琉璃色、或は頗梨色、種種色の衣・種種の瓔珞。

【四三】Akanistha 色界天の最上にして、色究竟と云はるるもの之なり。

【四四】尼乾 Nigrahita は離繫と譯す。六師外道の一。この派にては、裸行、塗灰などの苦行によつて、三界の繫縛を離れんとするが特色なり。

【四五】日天子、月天子をいふ。

【四六】以下、これ等の色に就ては、唐譯と一致せざるもの多し。

「此の世界中に一佛出で、悉く能く一切の魔を摧伏し、能く無上の妙法輪を轉じて、此の間の諸衆生をば調伏したまふ。二足中の尊は能く、優婆塞・拘律陀の、能く二種の煩惱の根を破するを成就したまへり、佛は此に來つて衆生を調せんと欲したまふ。三世を了知したまふこと掌の果の如し、三戒を具足したまひて所説淨なり、三垢を遠離して一切を感みたまふ、佛此に來つて衆生を調せんと欲したまふ。如意と無所畏とを具足し、四衆を調伏して四果を説き、常に樂んで法の眞實義を説きたまふ、聖師子王は我が爲に來りたまふ。五力及び五根を具足し、功德と無礙の智とを成就したまひ、無上世尊は、衆生の爲に悲を修して三惡の業を拔出したまふ。六根を調伏して上信を得、六入を遠離して六念を修し、六通を具足して眞實語したまふ、世尊來つて衆生を調せんと欲したまふ。一切の衆生は煩惱に縛せられ、闇に處りて解脱の道を知らず、常に魔路を行きて實を知らず、顛倒に貪著して智慧を失ふ。彼・此及び生死を知らず、五欲を貪るが故に禪を遠離す、是の故に解脱を得る能はず、道を修して普善に報ゆる能はず。衆生は生老死を知らず、是の故に三解脱を修せず、一切の施・戒・慧を遠離す、是の故に三惡道を出でず。衆生若し欲の樂を離れ、如來に親近して正法を聽き、至心に一偈の義を受持せば、是の人解脱せんこと先佛の如くなり」と。

又復偈の音、色界の十六住處に聞えたり、

「若し清淨の法を修集する有らんには、諍訟を遠離して禪定を修し、至心に諸の解脱を專念し、散亂有ること無く煩惱を壊せよ。十三忍辱法を獲得し、惡觸及び亂心を遠離し、一切の生老死を出過し、四無量・諸禪定を修せよ。永く常見及び斷見を斷たば、三惡道を過ぎて正定を得、深く無常無我の樂を觀じ、隨法忍を獲んこと先佛の如くなり。若し樂を捨つること涕唾の如くならんと欲せば、一切の空を觀じて行に異無かれ、法界及び菩提を淨めんに、法に於て無

【三〇】三戒は戒定慧の三學なるべし。

【三一】三垢は貪瞋癡の三毒なり。

【三二】四衆は比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷をいふ。

【三三】以下の偈は、唐譯相當文に依れば六欲天に聞えたるものとせらる。

【三四】色界の十六天なり、即ち四種の禪定を修して生ずる處の色界の四天處(四禪天)をば、更に細分して十六天とせるなり。色界には十六天を數ふるは薩婆多部の説にして、經量部は十七を、上座部は十八天を數ふ。

【三五】唐譯相當文に、所有我相十三種、分別爲説修勝忍、と云へり。

時に富樓那、是の陀羅尼を説き已るに、五百の魔子、心に調伏を得、調伏を得已つて、禮拜懺悔し、即ち是の言を作さく「大德、我れ今當に阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、三寶に歸依し、一切惡魔の事業を捨離すべし」と。

時に須菩提、北門より入るに、中路にて亦五百の魔子、刀杖を執持せるに値ふ。須菩提に語るらく「大德、汝若し歌舞せば、善哉・善哉、如し其れ不_レすんば、當に汝の命を斷つべし」と。須菩提の言はく「善哉、童子、我れ今當に歌ふべし、汝等當に舞ふべし」と。諸魔子の言はく「善哉、大德」と。時に須菩提、即ち偈を説いて言はく

「我れ今、陰入界を求めず、無量世中に誑惑せるが故に、若し是の如きの法を求むる有らば、是人終に解脱を得じ」と。

時に須菩提、此の偈を説き已り、復此の陀羅尼の句を説かく

【娑茂提 比茂暎 茂利蛇闍醯 思隸 思隸 娑思隸 娑思隸 唵唎思隸 復多拘置思隸

莎呵

時に須菩提、是の陀羅尼を説き已るに、五百の魔子、心に調伏を得、調伏を得已つて禮拜懺悔し、即ち是の言を作さく「大德、我れ今當に阿耨多羅三藐三菩提心を發し、三寶に歸依し、一切惡魔の事業を捨離すべし」と。

爾の時世尊、神通力の故に、王舍城の所有衆生をして、一切皆百由旬の地を見せしめたまふに、城の四門中に各各皆一 大弟子有り、其の城中に一 大蓮華を生ず、縱廣二十五丈を満足し、琉璃を莖と爲し、黄金を葉と爲し、金剛を鬚と爲して無量の葉有り、光明遠く照らす。衆生皆高く出づること三丈なるを見る。四天王の處、乃至阿迦膩吒天の處にも亦是の如く、高く出づること三丈なるを見る。時に蓮華中には是の如き偈を説くに、諸天・世人は處に隨つて皆聞けり

【三】梵に *śāstā* は善現、善業など譯す、佛弟子中、解空第一と云はる。佛この人をして般若の空理を説かしむと。

【三三】唐譯には西門に作發。

【三四】王舍城の云云、唐譯によれば、令_レ此街道、百由旬量、廣博嚴淨、而爲_レ示現とあり。【三五】四門に舍利弗以下の大弟子あるをいふ。【三六】この蓮華、唐譯には縱廣五十肘、閻浮檀金を莖とし、青毗琉璃を葉とし、勝藏寶を鬚とし、眞珠を葉とす。而して下文にその高さ三丈とあるを三人量とす。

魔の惡業を捨離すべし」と。

爾の時、大德、大目犍連、南門より入るに、中路にて亦五百の魔子、手に刀杖を執れるに値へり。目連に語つて言はく「汝若し歌舞せば善哉善哉、如し其れ不ずんば、當に汝の命を斷つべし」と。目連答へて言はく「善哉、童子、我れ今當に歌ふべし、汝等當に舞ふべし」と。諸魔子の言はく「善哉、大德」と。爾の時目連、即ち偈を説いて言はく、

「我れ今、陰界入を求めず、無量世中に誑惑せる故に、若し是の如きの法を求むる有らば、是の人は終に解脱を得じ」と。

時に目犍連、是の偈を説き已り、復此の陀羅尼の句を説かく、

「阿婆摩 阿婆摩 摩囉拏 囉闍 闍呵奢 摩阇 奢摩阇 奢摩阇 伽伽那 婆摩 莎呵

時に目犍連、是の陀羅尼を説き已るに、五百の魔子、心に調伏を得、調伏を得已つて禮拜懺悔し、即ち是の言を作す「大德、我れ今當に阿耨多羅三藐三菩提心を發し、三寶に歸依し、一切惡魔の事業を捨離すべし」と。

爾の時、彌多羅尼子、西門より入るに、中路にて亦五百の魔子の、刀杖を執持せるに値へり。富樓那に語るらく「汝若し歌舞せば、善哉、善哉、如し其れ不ずんば、當に汝の命を斷つべし」と。富樓那の言はく「善哉、童子、我れ今當に歌ふべし、汝等當に舞ふべし」と。諸の魔子の言はく「善哉、大德」と。時に富樓那、即ち偈を説いて言はく

「我れ今陰入界を求めず、無量を世中誑惑せるが故に、若し是の如き法を求むる有らば、是の人は終に解脱を得じ」と。

時に富樓那是の偈を説き已り、復此の陀羅尼の句を説かく、

「呌竭婆 呌竭婆 呌竭婆 茂遮摩

【三七】 Mohimnuṅgīyayana 摩訶目犍連、略して目連ともいふ。大讚誦、大探救など譯す。佛十大弟子の一、神通第一の稱あり。

【三六】 唐譯には東門とす。

【三九】 富樓那彌多羅尼子 (Pīti-mānāṭikāyāpūtra) の略、當は富樓那と呼ぶ。これ名なり。滿と譯す。彌多羅尼は慈と譯し、母の名なり。具に譯して滿慈子、滿願子などいふ。佛十大弟子の中、說法第一の稱あり。

【三〇】 唐譯に北門とす。

【三一】 汝、麗本三本皆如に作る。今宮内省に依る。

らし、瞿曇を壊破すべし」と。復魔有つて言はく「我れ當に詐つて瞿曇の弟子と作るべし。既に弟子と爲らば當に親近するを得べし。親近するを得已れば、當に其の命を斷つべし」と。復魔有つて言はく「我れ當に長者の像を現作し、食を設けて之を請すべし。彼若し請を受くれば、我れ當に之を害すべし」と。復魔有つて言はく「我れ當に姪女の像を現作し、諸王の所に至つて云ふべし「彼の瞿曇、我と交通したり」と。復魔有つて言はく「我れ當に彼の瞿曇沙門のところに至り、其の身を壞して七分と爲すことを現すべし。汝等當に言ふべし「是の如きの屍は瞿曇の殺す所たり」と。復魔有つて言ふ「我れ當に彼の虚空の中に於て、大聲に唱へて言はん「沙門瞿曇は是れ大悪人なり、若し男女有つて之を供養せん者は、命終へて當に阿鼻地獄に生るべし」と。

爾の時世尊、魔の心を知り已り、此の三千大千世界を變じて悉く金剛と爲し、遮るに石雨・火雨・刀雨を以てし、悉く衆生の眼をして、是の如きの魔業を覩見せざらしめたまへり。爾の時、世尊の四大弟子、王舍城に入り、次第乞食す。時に舍利弗、東門より入るに、中路にて、五百の魔子、刀杖を執持せるに值遇す。舍利弗に語るらく「汝若し歌舞せば善哉・善哉、如し其れ不すんば、當に汝の命を斷つべし」と。舍利弗の言はく「善哉童子、我れ今當に歌ふべし、汝等當に舞ふべし」と。諸魔子の言はく「善哉、大徳」と。時に舍利弗、即ち偈を説いて言はく

『我れ今、陰界入を求めず、無量世中に誑惑せる故に、若し是の如き法を求むる有らば、是の人終に解脱を得じ』と。

時に舍利弗、是の偈を説き已り、復陀羅尼の句を説かく

「婆呵羅 婆呵羅 婆羅婆呵囉 摩利至婆羅呵 薩陀婆囉呵 阿摩婆呵囉 莎呵

時に舍利弗、是の陀羅尼を説き已るに、五百の魔子、心に調伏を得、調伏を得已つて禮拜・懺悔し、即ち是の言を作す「大徳、我れ今當に阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、三寶に歸依し、一切の

【二四】阿鼻旨と云ふの略、無間と譯す。苦を受くること間斷なき義、この獄地下の最低にあり、他の獄其上に重疊す。

【二五】舍利弗多羅云、Sāriputraの略、舍利は母の名、舍利弗は舍利女の子の義なり。佛十大弟子の中、智慧第一と云はる。

【二六】唐譯は南門に作る。五百を五十とす。

復魔有つて言ふ「若し三界の爲に繫縛せらるれば、我れ則ち能く害せんも、彼の釋子は、三界の爲に繫縛せられず、我れ何ぞ能く害せん」と。波旬復言ふ「汝等若し能く我が計に隨はば、彼を害せんこと難からず。汝等悉く比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の像を作し、諸の國土・城邑・聚落に至り、諸の國王・大臣・長者に向ひ、是の如きの言を作せ「我れ等已に沙門瞿曇に屬す、沙門瞿曇は實には沙門に非ずして空に沙門と言ふ、婆羅門に非ずして虚しく自ら稱して是れ婆羅門なりと言ふ、實には戒を持するに非ずして持戒の相を現じ、眞實には戒を破して凡夫に異らず。汝等若し信ぜば、善哉・善哉。如し其れ信ぜずんば、七日の後、當に大石・猛火・利刀を雨らすべし」と。是の言を作し已り、便ち當に空に於て之を雨らすべし。若し是の如き種種の方便を作さんに、瞿曇の眷屬、將に壊せんと久しからざるべし」と。

時に諸の魔王、咸言はく「善哉」と。爾の時諸の魔王、各自ら莊嚴し、莊嚴し畢つて、鶉伽摩伽陀國に趣向す。爾の時波旬の所有一切弊惡の眷屬、悉く莊嚴し已つて雪山に趣向す。時に雪山中に一人有り、名けて光味と曰ふ、眷屬の五百は悉く五通を具したり。波旬到り已り、頭面もて禮敬し、是の如きの言を作す「沙門瞿曇は悉く一切の異見・外道を壞し、處在の大衆に是の言を宣説す「一切衆生中には實に沙門及び婆羅門無し」と。大徳、若し能く我れと俱に摩伽陀國に至らば、我れ則ち能く沙門瞿曇を壞せん。沙門瞿曇は殊に大徳と論議し、神力を揆試する能はじ。沙門瞿曇をば若し摧滅し已らんに、一切衆生は悉く當に汝を供奉恭敬すべし」と。爾の時波旬、是の語を作し已り、還り來つて無量の魔衆に向ひ、上の事を廣説したり。

時に一魔有り、復是の言を作す「瞿曇沙門の王舍城に入り、乞食せん時、我れ其の中路に於て、師子・虎狼・雜利・惡鬼等の像を作し、彼をして見已つて怖畏を生ぜしめんに、既に怖畏を生じて論議し・神通力を現する能はざらん」と。復魔有つて言ふ「我れ當に彼の虚空の中より、大石を降雨

【二三】此の段と、次の段とは、唐譯やゝ異なる。

煩惱とを壊し、身淨く心淨し、汝等惡を起し害を加ふる能はじ」と。波旬の言はく、「我が諸眷屬は彼の釋子の爲に誑惑せらる。汝等若し方便を作さずんば、是の如き世界は久しからずして空しかるべし」と。

復魔有りて言ふ「如來は一切諸有に住せず、心淨く身淨し、一切の諸惡・煩惱を遠離し、三界の中に於て解脱を得たり。一切の有爲は繫縛する能はじ。是の故に名けて無上の寂靜といふ。是の如き寂靜をば、誰か能く毀害せん」と。波旬の言はく「若し欲界中の所有衆生、五欲に貪著するも、釋子に歸せば、是の人則ち能く四魔を破壊す。是れ等の惡人を若し治せざれば、汝等云何ぞ能く欲界を治めん」と。

復魔有つて言ふ「彼の釋子は幻の如く炎の如し、宣説すべからず、處所無く、諸の障礙無し。是の如きの人をば、云何が害すべけん」と。波旬の言はく「釋子は此の欲界の中に於て、食の供養を受けて衆生を誑惑す、我れ當に云何ぞ治せざらんや」と。

復魔有つて言ふ「我れ今所有の神通の力と、及び我が眷屬の神通の力は、釋子神通の力に及ばざること十六分の一なり、我れ當に云何が能く加害すべけん」と。波旬の言はく「若し彼の瞿曇、城に入つて乞食せんも、我れ當に方便もて、其をして終日に一粒をも得ざらしむべし。當に大石・罵辱・大頤を放たんこと、我れ唯一己にして猶ほ望んで能く辦すべし。況んや汝等諸眷屬多きをや」と。

復魔有つて言ふ「設使是の如き等の事を造作して彼の釋子に加へんも、彼をして瞋・喜の心を生ぜしむる能はじ。若し瞋・喜せずんば、云何ぞ害すべけん」と。波旬の言はく「彼の釋子は大智慧有り、智力を以ての故に、瞋處にも瞋らず、喜處にも喜ばず、大慈大悲の心を修集して、諸の衆生に於て平等無二なり。是の故に我れに於て瞋・喜を生ぜじ」と。

【三】大、麗本三本、ともに使に作る、今宮内省本、聖語藏本に従ふ。

誓願を發しぬ「若し我が所に於て信心を生せん者は、當に與に授記すべし」と。是の故に我れ今汝の本願に稱ひ、與に阿耨多羅三藐三菩提の記を授くべし。波旬、汝往昔に香功德の所に於て禮拜、供養したり、是の善根を以て、我れ今汝の與に菩提の記を授く」と。是の法を説きたまへる時、五百の姦女は男子の身を得、無量の衆生は三乗の法を以て、調伏を得たり。

寶幢分中 魔調伏品第三

爾の時、世界百億の魔王、悉く來集して聚まり、波旬の所に至る。波旬諸の魔王に語つて言はく「諸善男子、汝等知るや不や、釋種の子有り、世に出現して大幻術をば作す。六年苦行して菩提樹に趣く。我れ爾の時領するところの三萬六千億の衆を將て、彼の所に至り、然も我が力を盡すも、乃至金剛座を動かす能はざりき。爾の時瞿曇、菩提樹に於て幻術を成就す、幻力を以ての故に、此の三千大千世界をして六種に震動せしめ、我が眷屬をして顛倒墮落せしめたること、樹の根を抜けるが如くなりき。爾の時に當り、釋子は無相の幻術を成就し、幻力を以ての故に、十方の智人皆歸屬したり。瞿曇度する所の衆生を推求するに、心相の所在は、其の處を知る莫し。若し人有つて能く至心に歸依せば、力を盡すとも其の一毛をも動かす能はず、誑惑すべからず、怖畏せしむべからず、我が今の姦女五百の衆、及び諸の眷屬、悉く復歸向せるも、我れ遮止し動轉する能はざりき。汝等今福德弘大にして幻力有ること多し、若し能く心に、助佐する者を見る有らば、然る後我れ能く彼の釋子を壞し其の命を誓絶し、亦能く諸の歸依者を摧破し、沙門の法を滅して魔業を増長せん。爾の時我れ當に無上の樂を受くべし」と。

爾の時魔有り、名けて親近と曰ふ、即ち是の言を作す「彼の釋子は悉く已に無量の功德を成就し、功德莊嚴と智慧莊嚴とあり、諸有に住せず、悉く能く一切の衆生を調伏し、能く種種の諸苦と

【二八】唐譯卷第三、魔王歸伏品第三。

【二九】經迦種族の子の謂かり、略して釋子ともいふ。

【三〇】佛成道の時坐したまへる床座、摩揭陀、佛陀耶那の菩提樹下に在り。上方は地の面に建し、下は金輪に至るといふ。

【三一】唐譯に依れば、以下、光明、毘伽彌迦、新羅、刀月、地水、捨髮、知眼、羅薩伏などの諸魔、順次に魔王と物語るなり。而してその詞は、同譯には偏を以て示さる。

哉、我れ今若し不見不聞に惡沙門を遠離せんと欲せば、當に深山に入るべし」と。爾の時諸人、既に山に入り已り、家を捨てて婆羅門の法を修集し、是の如き言を作す「解脱有ること無く善惡の果も無し。此の世に今一沙門の出づる有りて、斷見を宣説し、魔業を説いて衆生を欺誑す、是れ大幻師たり。若し人往いて見、其の所説を聴き、親近禮拜・供養・恭敬せば、心即ち狂亂して曉知する所無く、鬚髮を剃除して袈裟を被著し、家の所有を捨てて、乞食の制を受け、塚間に住して、一食の法を受け、生死の中に於て厭離の想を生じ、五欲の樂及び諸の香華・璎珞・伎樂を樂受せず、世間の事を宣説するを樂はず、是の如き諸の不善の法を具足し、斯の斷見を説いて魔業を行ぜしむ。是の諸衆生の大怨讎は、無量無邊の衆生を教化して、斷見を生ぜしむ。若し見聞せざれば大利益を得」と。

「時に華目比丘、無量の人、大邪見を生ずるを聞き、即ち是の念を作す「我れ若し是の如き邪見の衆生を調伏する能はずんば、云何が當に阿耨多羅三藐三菩提を得べけん」と。時に華目比丘、即便往いて香功德佛に請ひ、無量の比丘僧と、國土の城邑聚落を周遍し處處に説法したり。所謂惡法を遠離し善法を修集することなり。或はまた大乘、或は緣覺乘及び聲聞乘、或は比丘戒、或は優婆塞戒などを説き、或は三歸を説き、或は復女身を轉ずるの法を説き、或は寶幢陀羅尼門を説き、或は十善を説けり。是の法を説ける時、無量衆生の疑網を破除して善心を生じ、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無量の衆生をして佛所に來至せしめたり。唯一人を除くのみ。善行大臣彼の華目に向ひ、惡誓願を發すらく「汝若し未來に無上道を成ぜば、我れ當に汝成佛の國土に於て、惡魔と作り、菩提樹に詣つて大恐怖を作すべし。若し成佛し已らば、當に汝の法を壞すべし。若し我汝に於て信心を生ぜば、汝便ち當に我が與に記別を授くべし」と。諸善男子、爾の時の比丘とは、即ち我が身是なり、夫人善見は即ち彌勒是れなり、善行大臣は魔波旬是れなり。波旬、汝爾の時に於て是の

【二三】剃、麗本二本別に作る、今元明二本に従ふ。

【二四】又常乞食ともいふ、自ら行いて食を乞ひ、敢て他の請待及び僧中の食を受けざるなり。

【二五】また一坐食ともいふ。午前中只一度の正食を作す外、更に小食をも作さざるなり。以上の二は共に十二頭陀の一なり。

【二六】集、麗本並に三本、並に作る、今聖語藏本に従ふ。
【二七】具に三歸依といふ。佛・法・僧に歸依するをいふ。

【二八】授、麗本並に三本みな受に作る、今聖語藏本に依る。以下同じ。

毘婆闍隸 究羅呵 因陀婆隸 婆訶那毘婆車陀羯婆 遮婆婆 遮婆婆 遮婆婆 呵暮阿陀舍尼

婆隸跋婆 婆師久摩羯 摩樹婆 羯闍闍闍樹婆 威迦毘羅婆 毘羅婆 毘羅婆 毘羅闍

毘闍 闍 劫婆摩訶劫婆 利嚕隸曠隸阿 那婆婆那婆婆曇摩檀那阿婆羅彌隸 施訶羅軍陀

羅 波食毘婆悉那 帝隸婆凡羯摩又裔婆羅維咄頗婆 富婁沙多凡阿三摩 三摩三摩 毘婆 若多

陀 阿竭陀沙訶

「爾の時世尊、即ち大衆の爲に陀羅尼を説きたまふに、五百の姪女、聞き已つて即ち男子の身を得たり。復無量の人天の諸女有りて、亦男子の身を受け、及び不退の菩提の心を得、永く一切の決定の女業を斷ちぬ。善男子、爾の時夫人、是の持を聞き已るに、將ゆる所の八萬四千の女人も、亦女身を轉じて男子の身を得たり。復無量の人天の婦女有り、亦女身を轉じて男子の身を得たり。爾の時聖王、四天下を以て千子に委付し、無量の人と出家修道したり。爾の時復無量の諸天有り、各是の念を作す「轉輪聖王は何の因縁を以て、國を捨てて出家せる」と。復相謂つて言はく「此の界の如來は妙法を演説したまひ、法力を以ての故に女轉じて男と爲る。人の出家する有らば能く袈裟を施し、諸の白衣の爲に人天の樂を説き、三惡の善を壞して一切有を滅し、諸の魔業を摧き、魔をして苦を受けしめ、魔既に苦を受け、法を聽くことを樂はず。大幻師とは謂はく香功德沙門是れなり」と。復有が説いて言はく「當に知るべし、沙門は即れ是れ魔なり。何を以ての故に、能く女身を轉じて男子の身を得しむればなり」と。

【二】時に大臣有り、名けて善行と曰ふが、是の如きの言を作す、「我が諸の婦女は悉く男子と爲りぬ。汝等の無量の妻妾諸女も、亦本の形を捨てて男子の身を受け、鬚髮を剃除し袈裟を被著して、咸皆歸向して彼の沙門に屬したり。唯我れ一己のみ獨任して往かざりき。我等當に是の國土を捨て去り、永く是の大惡人を見聞せざるべし」と。爾の時諸人、是の語を聞き已り、唱へて言ふ「善い

【二〇】染衣に對す。出家の人は染衣を用ひ、在家の人は白衣を用ふ。白衣とは即ち俗人をいふ。

【二一】唐譯に鳩摩羅臣とあり。

く共に護念し、其の國土をして和安無諍ならしめ、疫病有ること無く、兵革起らず、惡風雨無く、不寒不熱にして、穀米豐熟し、諸の惡鬼神及び惡禽獸など、悉く善心を懷きて惡想をば生ぜず。是の經典所住の國土に隨ひ、其の土に若し惡星・不祥の惡相・惡病有るも、皆悉く除滅す。若し刹利王、兵を興して攻伐せんも、専ら是の經を念すれば、能く強敵を伏し、己をして勝を得しめん。二王俱に念せば、則ち二兵和同して相浸害せじ。若しは國土・城邑・村落の人「に疫病」有り、若しは畜生に疫病有らんに、當に是の持を寫して幢頭に安著せば、其の土の不祥の疾疫、悉く皆除滅せん。若し法師有り、戒を持し精進にして、月の十五日には淨むるに自ら洗浴し、妙香華を以て三寶を供養し、師子座に昇りて陀羅尼を誦へんに、是の人能く住する所の國土を護り、所有惡相尋いで即ち消滅し、亦能く衆生を調伏・教化して、阿耨多羅三藐三菩提を得ん。善女人、若し人有り、能く此の經乃至は一偈を讀誦せんに、是の如き人は終に復更に女人の身をば受けず、亦不退の菩提の心を得ん」と。

爾の時香功德佛、是の陀羅尼を説き已り、足指もて地を按ふるに、即持に大地六種に震動し、乃至十方も亦復是の如くなりき。其の中の所有天・龍・夜叉など、佛・如來の功德力を以ての故に、心に歡喜を生じ、陀羅尼を説くを、亦は見・亦是は聞けり。爾の時如來、寶幢陀羅尼を説いて言はく

- 一 闍落翅 闍落翅 目翅闍隸 闍羅闍 憐泥闍羅跋賴帝 闍醜隸波羅 富婁沙 三摩奢阿摩彌沈
 摩彌摩阿彌闍摩彌 婆羅彌婆婆毘 婆婆毘 婆婆毘 婆闍毘 婆隸徒 闍訶彌 婆
 羅訶 沙隸徒 阿羅闍醜 闍闍目法 婆沛羅 婆沛羅 私陀 跋賴堪 檀帝隸 檀帝羅 檀帝
 隸 修隸毘訶伽 旃陀毘 訶伽旃陀毘訶伽斫嗽 樹提沙毘訶伽 薩婆叉裔帝多凡 修羅毘訶
 迦 闍羅闍羅迦奢彌隸呵 奢彌隸呵 奢彌隸呵 奢彌隸呵 奢彌隸呵 奢彌隸呵 毘婆車陀羯
 摩 豆寧 豆寧 豆寧 溫摩 涅毘婆車提 闍那吃栗多 阿訶婆陀隸 奴耆彌隸 多囉隸

【一〇】善、闍本は喜に作る。今三本に従ふ。
 【一一】相、麗本は想に作る、今三本に従ふ。

【一二】陀羅尼の謂なり。

【一三】唐譯によれば、香功德佛の語は以上を以て終り、以下は釋迦牟尼佛の所説なり。

「爾の時、聖王に一夫人有り、名けて 善見と曰ふ、八萬四千の諸姪女と俱共に佛を供養し、既に供養し已り、即ち偈を説いて言はく

「大千世界に勝るる者無し、常に寂靜を樂んで子の想を修し、善行もて諸の塵垢を遠離したまふ、云何が我をして女身を離れしめたまや。已に一切の怨を遠離するを得、眞實に生老病死を見たまふ、唯願はくは我が爲に道を演説し、我をして男子の身を具足せしめたまへ。諸有を離れて無上の道を得、能く歡喜を施し善法を増し、十力四無畏を具足したまふ、云何が我をして女身を離れしめたまふや。四魔を摧滅して四梵を修し、實語もて語り」巧方便と三十二相・八十好とを具足したまふ、云何が我をして女身を離れしめたまふや」と。

「佛の言はく「善女人、巧方便有りて、女身を離れ、能く女業を壞するを得、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得、終に復女人の身をば受けず。たゞ其の誓願あるを除く。巧方便とは所謂 寶幢陀羅尼門なり。若し能く是の陀羅尼を 修する有らば、女身を離れ、身・口・意を淨めて三障を遠離するを得、若し是の陀羅尼の名を聞く有らば、即ち女身を離れて男子の身を受け、身に微妙の智慧を具足し、身口意を淨め、善行を樂み、多聞を具足し、惡業及び苦報を受くることを遠離し、能く五逆無間の重罪を滅するを得。何を以ての故に、是の如き寶幢陀羅尼は、即ち是れ過去無量諸佛の演説せる所——惡業を破し善法を増せんが爲の故に。十方の現在無量諸佛も亦共に之を説く——惡業を破し

善法を増さんが爲の故に。未來世の十方諸佛も亦共に之を説かん——惡業を破し善法を増さんが爲の故に。我れ今現在に亦復是の如き寶幢陀羅尼門を宣説するに、十方の現在の無量の諸佛も、悉く共に是の陀羅尼を讚歎す。善女人、若し 刹利王所領の國土に、若し是の如き陀羅尼の名有り、讚歎・受持・讀誦・書寫せば、其の王は則ち十方現在の諸佛世尊の爲に護念讚歎せられ、乃至阿迦尼吒諸天と、亦復護念して之を讚歎せん。是の王の行住坐臥の處には、亦無量の諸天・龍・夜叉有り、悉

【九】唐譯に天孫陀利といふ。

【一〇】道、麗宋二本は有に作る、今元明二本に従ふ。

【一一】唐譯には智方便に作る。善良にして巧妙なる方便をいふ。

【一二】唐譯には除ニ自發願といふ。

【一三】同に寶星陀羅尼とす。

【一四】唐譯によれば至心に念誦するなり。

【一五】刹利(Khattiya) 王族階級なり。

是の佛智の不可説を説きたまへる時、一切の魔衆は無生法忍を得、龜身を捨てて細身・隨心意身・法化の身を獲得したり。復二萬八千の衆生有り、諸法の中に於て無生忍を得、九萬二千の菩薩は無量の陀羅尼を得、一切の衆魔は妙香華・伎樂を以て如來を供養し・讚頌して、是の如きの言を作す。「世尊、善知識は即ち是れ一切善法の根本たり、我れ今佛善知識に遇ひて、大利益を得たり」と。佛の告げたまはく「善男子、汝當に至心に諸業を觀すべし」と。

爾の時世尊、即ち衆會の爲に過去の業を説きたまはく「善男子、過去無量阿僧祇劫において、劫を電持と名けたり。時に世の衆生の壽命六萬八千を満足し、世界を名けて妙香光明と曰ひ、是の中に佛有り、香功德如來・應・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號く。爾の時彼の世には五滓を具足したり。また轉輪王有り名けて華目と曰ひ、四天下に王たるが、諸の眷屬・大臣・人民とともに佛所に至り、妙香華・幡蓋・伎樂を以て、佛及び比丘・僧を供養し、敬意禮拜、右遶三匝して、偈を以て佛を讚ふらく

「佛は人・天の爲に讚歎せられ、諸惡を遠離して寂靜を樂み、七財を具足して貧窮を破りたまふ、云何が衆をして深智をば得しめたまふ。三種の解脱門を修集し、己に生老病死を離るるを得、能く三惡道の諸生を度したまふ、云何が衆をして魔業をば過ぎしめたまふ」と。

「佛大王に言く、三法を具足して甚深の智を得。何等をか三と爲す。一には至心に一切衆生を緣念するなり、二に大悲を修集して衆生の苦を破するなり、三に一切法に衆生・壽命・士夫有ることなきを見て分別を生ぜざるなり。又三法有りて能く魔業をば過ぐ。一に諸の衆生に於て惡心を生ぜざるなり、二に施を修行する時、福田及び非福田を觀ぜざるなり、三に一切法は平等無二なること、猶ほ虚空の如く、不生不滅・無行無物にして、相貌有ること無く、宣説すべからざるを觀するなり。菩薩是の如き等の法を具足せば、甚深の智を得て魔業を過ぐるを得」と。

- 以二一切智得乃得是法。云何一切法、不妄置立一所謂不生不壞際、不妄置立、生死涅槃際、不妄置立、虛空涅槃際、不妄置立、無生無說際、乃至一切諸法、亦復如是。示一切衆生、一切法無實際、示一切著物、一切三世三界際入等、無所有際、入三行空際、入三法陰報聚散除無實際、入空入實際、具足一切無說法義、是名菩薩……入二一切智」と。
- 〔八七〕唐譯には悉捨一身意所有魔業二得二自性生身」とす。
- 〔八八〕頌、麗本誦に作る、今三本に従ふ。
- 〔八九〕唐譯に具足大勢とあり。
- 〔九〇〕同に月光明香際とあり。
- 〔九一〕五滓は劫・見・煩惱・衆生・命の五濁をいふ。
- 〔九二〕唐譯に優鉢羅華といふ。
- 〔九三〕唐譯には大悲如母、能作一切衆生極依止處といふ。
- 〔九四〕同に精勤不息、能滅一切衆生苦惱といふ。
- 〔九五〕惡心を生ぜず云は、唐譯によれば、瞞を起さず、過と短とを求めざるをいふ。
- 〔九六〕同によれば、平等に一切衆生を觀じて福田の相を作すをいふ。

觀ぜざる、即ち是れ佛智なり」と。

爾の時、衆中に一菩薩有り、名けて 樂欲と曰へるが、文殊師利に語つて言はく「善男子、如來世尊は何の因縁を以て、是の如き等の甚深の義をば説きたまへる」と。文殊師利の言はく「善男子、衆生をして邪見を遠離し正見を得しめん爲の故なり。正見を得已れば、染著を生ぜず、慳吝有ること無く、惡友に近らず、正命自活し、三結に著せず、衆生を憐愍し、三寶に著せず、一切を誑かず、諸の衆生に於て不捨・不著、財物に著せず、三界に著せず、衆生怖畏せば能く救護を爲し、能く惡道を壞して正路を開示し、忍辱に著せず、一切の想を離れ、一切の垢を滅し、一切の闇を除き、果報を求めざればなり。善男子、是の 因縁を以て一切智を求め、是の智を得已らば、聲・字・句に於て覺觀を生ぜず、佛語と邪語、佛行と餘行、佛法と餘法、陰・界・諸入、功德莊嚴と智慧莊嚴、十波羅蜜と三解脱門、業と果、世智と佛智など、是の如きの法に於て分別を生ぜず。是の故に如來は是の如き等の甚深の義をば説きたまふなり」と。樂欲菩薩の言はく「善哉・善哉、文殊師利、實に所言之如し。甚深の義とは即ち是れ佛智なり。何を以ての故に、所覺無きが故に。若しは所覺無きが故に不可説なり。不可説とは即ち是れ佛智なり。若し能知有るも是れ不可説なり、當に知るべし、是の人即ち佛智を得たるを」と。

佛の言はく「善い哉・善い哉、善男子、善能く分別して佛智を宣説したり。何を以ての故にとならば、諸法に著せずして、不生・不滅とする、即ち是れ佛智なればなり。善男子、諸法に著せざるは、即ち不出の邊・不破壞の邊なり、無明・涅槃は眞の無出の邊なり、虚空・涅槃と、一切の諸法、一切の衆生は不可説の邊なり、是れ虚空邊・無罪礙の邊、無有物の邊・無有陰の邊、三行空の邊なり、法陰・業陰、果・非果の陰、聚陰は無物なり、無物の邊は虚空の邊、一切諸法不可説の邊なり。菩薩摩訶薩、若し能く是の如き等の邊を具足せば、即ち佛智を得るなり」と。

【七】 同に不思議とす。

【七〇】 同に蓮華藏に作る。

【八一】 唐譯に虚空無量心とす。

【八二】 過現未の三世と、施・戒

忍・進・禪・慧の六度と、施・戒

唐譯には修・習三輪清淨波羅

蜜とす。この際三輪は身口意

【八三】 唐譯麗本に懷受樂に作

るも同、三本には懷受樂に作

【八四】 正命とは身口意の三業

を清淨にし、正法に従ひて活

命し、邪の活命を離るゝなり。

【八五】 唐譯によれば、上の染

著を生ぜざる以下に、二十を

數へ、此二十種方便、能得一

一切智智とす。一切智智と

は、前の三智の中の佛智なり。

【八六】 福德を積で身の莊嚴と

なすものと、智慧を研いて身

の莊嚴となすものとなり。

【八七】 施・戒・忍・進・定・般若、

方便・願・力・智の十を十波羅

蜜といひ、空・無相・無願を三

解脱門とす。

【八八】 唐譯によれば「甚深の

法を解せば、一法の見るべき

無く、亦所説の法も能説の者

も無きなり」云云と。

【八九】 善男子以下の句、唐譯

に云ふ、汝能善説此一法門、

其れ無と説かば即ち是れ斷見なり。我等、當に是の如き二邊を遠離して中道を説くべし」と。
 是く思惟し已り、佛に白して言はく「世尊、是の如きの義は亦有亦無なり。世尊、若し出滅に
 あらず、數無く量無く、明に非ず闇に非ざれば、即ち是れ佛智なり」と。電意菩薩の言はく「世尊、
 去來無ければ即ち是れ佛智なり」と。善見菩薩の言はく「世尊、得無く離無く、證無く修無き、即
 ち是れ佛智なり」と。無盡意菩薩の言はく「世尊、若し法にして三世の所攝たらず、三界に墮せず、
 是れ三結・三智・三乘、陰入界等に非ず、増減有ること無きは、即ち是れ佛智なり」と。金剛意菩
 薩の言はく「世尊、若し凡法と聖法、學と無學の法、聲聞・緣覺及び佛の法を分別せざれば、即
 ち是れ佛智なり」と。堅意菩薩の言はく「世尊、如法にして轉無き、即ち是れ佛智なり」と。寶手
 菩薩の言はく「世尊、若し諸法生・壞の相を觀じ、觀じ已つて通達して得失無きを知らば、即ち
 是れ佛智なり」と。善覺意菩薩の言はく「世尊、三界の衆生は、意に従つて意を觀じ亦意を覺せざる、
 即ち是れ佛智なり」と。分別怨親菩薩の言はく「世尊、若し人有り、能く煩惱を樂ます、煩惱を厭
 はず、愛せず瞋らず、捨せず求めず、施せず念ぜざる、即ち是れ佛智なり」と。蓮華子菩薩の言は
 く「世尊、罪福を樂まざれば深法忍を得、我及び我所を覺せず。知らず。若し我と我所とを覺知せ
 ざれば、即ち是れ佛智なり」と。月光童子菩薩の言はく「世尊、若し能く一切諸法は、猶ほ水月の
 如しと觀察し、亦法に増有り減有るを見ざるは、即ち是れ佛智なり」と。無邊意童子菩薩の言はく
 「世尊、若し諸法に於て明闇を見ず、一切の心に於て生滅を見ざる、即ち是れ佛智なり」と。彌勒菩
 薩の言はく「世尊、若し能く四種の梵行及び不善行は、平等無二なるを觀察する、即ち是れ佛智
 なり」と。無盡意菩薩の言はく「世尊、若し三世と六波羅蜜との二相の差無きを觀する、即ち
 是れ佛智なり」と。文殊師利童子菩薩の言はく「世尊、若し諸法に於て心に貪瞋無く、亦諸法甚深の
 境界を觀じ、亦了知するに非ず了知せざるに非ず、亦法に増有り減有るを觀ぜず、智慧及び無明を

【六三】二邊とは有の邊際と無の邊際となり。この二邊を執ずるは共に邪見なり。
 【六四】偏邪を離れたる中正の道、中とは不二の義、絶對の稱。有に偏せず、空に著せざる非有非空を中道といふ。
 【六五】有とは我あり法ありと執する常見、無とは我無く法無しと執する斷見なり。有とも云はれ無とも云はれると計するを亦有亦無といふ。
 【六六】出滅、また生滅ともいふ。有爲の諸法、因縁の和合に依て、未有の法の有かるを生(出)といひ、因縁の離散に依て已有の法の無となるを滅といふ。中道の正見より云へば、有爲法の生滅は假にして實に非ずといふ。
 【六七】唐譯に電慧とす。
 【六八】同には毗盧遮菩薩とし、その説相や異なる。
 【六九】同に地慧菩薩とす。
 【七〇】三結は見結(即ち我見)と戒取結(邪戒を行ふ)、と疑法(正理を疑ふ)となり。
 【七一】聲聞緣覺の智と菩薩の智と佛の智とを三智といふ。唐譯相當文に三明に作る。
 【七二】同に金剛慧とす。
 【七三】凡法と聖人法となり。
 【七四】同に堅慧とす。
 【七五】同に如寂靜、如如觀察とす。

味・觸そく法を捨せず、不捨不取にして、亦我・我所の想を覺知する無きをいふ。四に若し菩薩有り、能く深く是の如き等の法を觀察し、佛の正智に於て覺・觀を生ぜざるをいふ。何を以ての故に。一切の行を斷ち・一切の智を斷つをば、名けて佛智とは爲す。有無く・乘無く、聲無く・想無く・字無く、有無く・量無く、生無く・出無く・滅無く、想無く・礙無く・障無く、見無くして寂靜じやくじやうに我無く・命無く・名無く、明無く・闇無く・處無く・界無く、根無く・翹無く・思惟有ること無く、食無く・貪無く・淨無く・垢無く、塵無く・節無く・邊無く・數無く、行無く・受無く・業無く・害無く、取無く・作無く。顯示けんじすべき無く、念念の滅無き、即ち是れ佛智なり。猶なほし虚空の如く、空の覺無く宣說せんじつすべからず、染著せんじやく有ること無く覺知有ること無きが如し。善男子、菩薩は是の如き等の法を具足して、惡友に親まず、速に阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得るなり。

「善男子、若し能く是の如き智慧を求むる有らば、當に知るべし、是の人は能く二法を觀す。所謂眼がんと色しき乃至意いと法ぽうなり。復二法有り、一には常じやう、二には斷だんなり。復二法有り、衆生と壽命じゆめいとなり。復二法有り、一には此こゝ、二には彼かなり。復二法有り、一に内ない、二に外がいなり。善男子、若し是の如き佛智を欲求よくぐする有らば、是の二法を離る。異法を觀ぜん者は、當に知るべし、是の人即ち得ること能はじ。善男子、譬たとへへば人有り、火を求めて水を取り、水を求めて火を取り、食じきを求めて石を取り、華けを求めて鐵てつを取り、香かうを求めて屍しかばねを取り、衣いを求めて木を取り、塗香とじかうを求めて虚空こくうを取らんが如し。佛智を求めん者、若し是の二を離れて更に異法を觀する、亦復是の如くなり」と。

是の時、寶坊大會ほうぼうたいかいの中に、一菩薩有り名けて地意ちいと曰ふ。是の語を聞き已り、佛に白して言く「世尊、不可説の義は覺知すべきや不なや。若し覺すべからずんば、云何ぞ一切智と名くるを得んや」。善男子、我れ今汝に問はん、汝の意に隨つて答へよ。意に於て云何。我れ如來の一切智を得たる時、所得じゆじつ有りや不なや」と。地意菩薩ちいぼさつ即便思惟いひしゆいすらく「我れ若し有と説かば即ち是れ常見じやうけん、如し

【五九】 唐譯に四者空無分別とす。

【六〇】 この句、唐譯の説相や異なる。

【六一】 眼とその對境(即ち色)、並に意とその對境(即ち法)をいふ。

【六二】 地意、唐譯には持智といふ。

獻奉^{けんぽう}しまつり、衆生の爲の故に佛を供養す、善友に親近^{しんこん}し善思惟^{ぜんしゆい}し、至心に聽受^{ちんじゆ}して妙法に住せん」と。

爾の時五百の姦女及び魔の眷屬など、妙香華・幡蓋・伎樂^{ぎがく}を以て、我を供養するに、此の供養の具は、遍く無量恒河沙等の諸佛世界に至つて、一時に無量の諸佛を供養し、一切の魔衆は悉く皆、一切諸佛——形色・修短^{しゆたん}・方圓の相、等しくして異有る無き——を觀見したり。唯^{ただ}かの師子座は世界の樹林・所居の舍宅と差別^{さべつ}あつて同しがらざりき。魔の衆、見已つて各心に歡喜^{くわんぎ}し、佛邊に坐して至心に聽法^{ちんぽう}し、法を聽受し已りて波旬の所に還り、應に啓白^{けいぱく}して言はく『我等彼の罽曇^{きんどん}の所に往至して、其の神力^{しんりき}を盡すも、乃至一毛をも動かしむる能はざりき。大王、應に知るべし、我れ今已に瞿曇沙門に屬しぬ』と。爾の時波旬、心に惡みて瞋^{ちん}を生じ、即ち是の念を作す『我れ當に云何^{いんげん}が彼の釋子を殺して此の怨を除滅^{じよめつ}すべき』と。爾の時、波旬及び其の眷屬は、心に憂惱^{うねう}を生じて、苦宅に入りぬ。

寶幢分 中往古品第二

爾の時魔衆、復我が所に還り、我に白して言はく『世尊^{よそん}、我れ大乘を欲し、大乘を念じ、神通・大慈・大悲を具せんと欲す。世尊、菩薩摩訶薩^{ぼつさつまがさつ}は幾の法をか具足して、惡友に近^{ちか}らず、速に阿耨多羅三藐三菩提^{あうたろさんびやくさんぼだい}を成就するを得るや』と。『善男子、菩薩摩訶薩は、四法を具足して、惡友に近^{ちか}らず、速に阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得。何等か四と爲す。一に若し菩薩有りて諸法に貪せず。諸法を捨せず、諸法を受けず。諸法を覺せず、亦我及び我所の想有ることなく、布施^{ふせ}を行じて果報^{くわんぱう}を求めず、貪著を生ぜずして捨せず取せず、亦我と我所との想を覺知する無く、乃至^{乃至}般若^{ぼんげ}も亦復是の如くなるをいふ。二に若し菩薩ありて衆生・壽命・士夫^{しふ}を見ず、亦復衆生界を捨せず、不貪^{ふこん}・不取^{ふと}にして、亦我、我所の想を覺知する無きをいふ。三に若し菩薩有りて、色・聲^{しやう}・香・味・觸^{じゆく}・法を見ず、色・聲・香・

【五】 唐譯には唯彼世尊、在師子座、一種々眷屬功德莊嚴所現レレトナす。
【二】 唐譯、卷第二、本事品第二。
【三】 この句、唐譯に我等今者、志求如是相、如是乘、如是辯才智慧、如是神通、大悲方便、と云へり。
【四】 唐譯には一者不取とす。身は五蘊の假和合なるを覺せずして、常一主宰の我有りと執するを我想と云ひ、この我に對して一切の外界の實在すと執するを我所の想といふ。
【五】 般若（Prajna）は智慧と譯す。
【六】 唐譯には二者不説とす。衆生とは五衆即ち五陰和合の生（即ち衆生）ありとの迷執。壽命とは實に長短の壽命ありとの迷執。士夫とは衆生實に士夫の用ありて能く一切の營務を作すとすとの迷執をいふ。唐譯には衆生・壽命・壽者、人を説かざることを云ふ。
【七】 唐譯には三者不見とす。

魔力勢三昧に入る。魔子爾の時、雨らす所の刀・箭・石・火・毒など、我が力を以ての故に、皆悉く變じて、**曇鉢羅華**、**鉢頭摩華**、**拘頭頭華**、**分陀利華**と爲し、**王舍城**に墮せしむ。復種種微妙の好香を闍らし、是の惡聲を變じて如來の聲、法の聲・僧の聲・神通の聲、**波羅蜜**の聲、不退轉の聲、菩薩の聲、**破四魔**の聲、**涅槃**の音聲と作し、其の惡風を壞して遺餘無からしむ。其の土の所有一切草木をば、悉く皆變じて微妙の七寶と爲したり。我が身爾の時、高き初禪に至り、三十二相・八十種好もて、大光明を放ちて悉く三千大千世界を照し、其の中の所有一切の天・人、諸龍・夜叉・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人など、地獄・畜生・餓鬼等の類、皆我が身を見、無量の諸天など、大に、**華香**・**幡蓋**・**伎樂**の屬を供養することを設け、三惡の衆生、「南無佛」を稱し、即ち解脱を得、人の身を受けたり。爾の時魔衆、佛の是の如き神力を承現したまへるを見、皆信心を生じ、信心を生じ已つて、即ち偈を説いて言はく

「我れ今如來に歸依しまつる、身口意を淨め無上の智あり、能く魔界・八正道を示し、闇の衆生に大光明を施したまふ。大力を具足したまひて能く勝るる無く、等しく一切を視たまふこと子の想の如く、其の心平等なること虚空の如し、故に我れ大商主に稽首しまつる。煩惱に汚されず、慈悲を修し、吉祥を獲得して因果を示し、能く衆生に眞解脱を施したまふ、是の故に我れ今稽首し禮しまつる。大慈大悲にして天中の天たり、最勝無上の世尊は、一切の法は水月の如しと説きたまふ、我れ今大幻師を敬禮しまつる。衆生は重煩惱の病に遇ふ、是の故に大醫王に歸依しまつる、三惡の衆生は七財に貧し、今當に歸依して諸漏を離るべし。唯願はくは哀愍して、我的佛所に於て諸の惡心を生じたるを懺するを聽したまへ、佛は是れ衆生の慈父・母たり、我れ今諸の魔業を棄捨せん。我れ能く諸の衆生を請召し、其の爲に菩提心を發起す、願はくは我が爲に無上道を説きたまへ、何等を具足してか菩提を得るやを。我れ今妙香華を

【四〇】 四種の蓮華なり。

【四一】 南無 Namo は時令と譯す。歸依なり。

爾の時波旬、大悪心を生じ、五繫を以て諸の姪女を繫せんと欲するに、佛神力の故に繫する能はず。時に諸姪女、即ち佛所に還る。波旬眼に見るも遮止する能はず、復空中に於て毘嵐風を作し、諸女をして處々に散滅して佛に見えざらしめんと欲するも、佛力を以ての故に壊せしむる能はず。爾の時魔王、啼哭懊惱し、大音聲を以て其の妻子に告げて「我れ今大神通力を喪失す、一毒樹有つて今世に出で、諸の衆生の爲に斷滅を説き、大幻を成就して巧方便あり」と。魔の諸眷屬、是の語を聞き已り、悉く來つて聚集し、魔王の所に至り「大王は何の故に大悲苦を生ずる、既に退相無く又火災無し、欲界の中にも怨敵無けん」と。魔王、子に言ふ「汝今見ずや、世に一人の有り、菩提樹に坐し、四兵の聚を壞すること猶ほ猛火の乾草を焚燒するが如くなり。世間の所有一切智人は、今已に歸屬すること此の如し。即ち是れ我が怨敵たり。汝今五百の姪女、我れを捨てて去り、彼に歸依せるを見ざるや。汝等若し彼の釋子を治せずんば、此の如きの三千大千世界は、久しからずして當に空しかるべし。汝等各當に牢として自ら莊嚴し、威共に力を盡して彼の釋子を除くべし」と。

魔王言つて曰はく「善い哉大王、我れ當に莊嚴して其の神力を盡すべし。若し我れ能く除かんに、善い哉、快い哉。如し其れ能はずんば、復當に歸依すべし」と。魔王復曰はく「惡人、汝今云何が是の如き言を發すや」。「大王、瞿曇沙門は往獨一己にして菩提樹に坐したるに、猶ほ沮壞し難かりき。況んや今眷屬、無量殷多なるをば除滅す可きをや」と。魔王の言はく「愛子、若し能く彼の瞿曇沙門を殺さば、甚だ善く甚だ善し。如し其れ能はずんば、自ら土境を守れ」と。

爾の時四兵、其の數無量にして、閻浮提の高さ八十由延を滿たし、大惡風を放ち大雨を降注し、手もて須彌を拍ち、四天下を動かし、大惡聲を出すこと、大龍王・夜叉・諸鬼の如く、一切の河池泉源を振動するに、一切の龍鬼人天など、咸怖畏し心驚き毛豎てり。時に彼の魔衆、須彌山より一大石を取り、王舍大城迦蘭陀林の諸善男子を覆蓋せしめんと欲したり。我れ爾の時に於て、即ち破

【四〇】 五繫、天魔が兩手、兩足及び頭の五處を繫縛するをいふ。

【四一】 梵に Vāyambhūka、迅猛風と譯す。この風至る所、悉く皆散壞すと。一大劫中の第三期即ち壞劫の末に、世界を蕩盡する大風災起り、下は無間地獄より上は色界の第三禪天に至るまでの間に及ぶ。この風災の時に吹く風を毘嵐風と名く。

【四二】 大王云云の語は唐譯によれば、魔王の一子、勝智と曰へるが、説く所なり。

【四三】 この句、唐譯相當文に「此非劫燒、非死相」と云へり。

【四四】 四兵、象兵、車兵、騎兵、歩兵の四種の兵をいふ。

【四五】 魔王云云の語は、唐譯によれば、魔王の一切諸子及びその眷屬の言ふ所なり。

【四六】 由延は Yojana の音寫、由旬といふに同じ。

【四七】 唐譯に碎魔軍場三昧とす。

是の大惡人成就の幻術を、若し治せずんば、我が界則ち空しからん」と。諸姪女の言はく「彼の釋種の子は、何を以て莊嚴し、何の道力か有り、誰をか伴黨と爲して、能く王の界を空くする」と。

魔王答へて言はく「彼の人は戒・施・忍を以て莊嚴し、無常・苦・空を以て器甲とは爲す。若し衆生の、諸有に受生するを壞せんに、我れ能く其の所住の處を知る莫し。無上の大神通力を具足し、大慈大悲を伴黨と爲し、能く一切三有の衆生を度せん。是の故に能く我が界をして空虚ならしむ」と。

時に諸姪女、佛の功德を聞き、香華及び諸の伎樂を齎持して、佛所に來至し、心を盡して供養したり。是の大衆中に、唯佛のみ之を見、其餘の衆生は悉く觀る者無かりき。爾の時大衆、咸疑心有り、即ち佛に白して言はく「世尊、是の如き香華伎樂の供養は、將た舍利弗・目乾連等の力の所作に非ずや」と。佛の言はく「不ず、此は是れ波旬の五百の聞女の供養の具なり。魔王久しからずして當に此に來至すべし」と。時に諸姪女、佛語を聞き已り、心に歡喜を生じ、菩提の心を失せざるを得たり。爾の時姪女、長跪合掌して、偈を説いて言はく、

「如來は永く諸の煩惱を斷ち、能く衆生に淨法眼を施し、衆生をして生死の河を度らしめたまふ。是の故に至心に讚歎し禮しまつる。一切の人・天は、無量無邊の智を具足したまへる「佛」を、讃へ供養す、願はくは佛、我が爲に方便を開き、我れをして女身を脱するを得せしめたまへ。世尊は大空三昧を修し、了了に第一諦に通達したまふ、法寶を具足したまへる大商主よ、願はくは魔力を壞して我れ等を調したまはんを」と。

爾の時姪女、偈を説いて讚へ已り、即ち魔所に還り、偈を説いて言はく、

「王の自在は常我に非ず、亦生老病死を離れず、衆の苦・煩惱は王の身を繞り、常に癡闇處・惡道に行かしむ。若し生老病死の河を度らんと欲せば、當に信心を生じて如來のみもとに詣るべし、我れ今還佛所に至り、甘露を踏受して諸味を斷たんと欲す」と。

【三八】菩提の心、麗宋本は菩提心定に作る、元明本は菩提之心とす。今後者に從ふ。

【三九】脱、麗本は解に作る、三本脱に作る、今後者に從ふ。

「世間に若し智慧の人、世の方術を具足成就せる有らんに、悉く來つて我れを禮敬・供養せん、我れも亦彼の爲に淨道を説かん。瞿曇、若し生死を度せんと欲せば、今當に誠心もて歸依を見せ、我れ今所説の淨道は、先佛の説の如くにして異有る無けん」と。

我れ時に偈を以て魔王に答へて言はく、

「我れ眞實に八正道を知り、能く永に諸の苦を遠離して破せり、汝等眞實に知る能はず、狐身の師子吼する無きがごとし」と

爾の時魔王、自在天像を隠し、復梵の像を現じ、偈を説いて言はく、

「眞實に諸の煩惱を遠離せば、能く三千大千界を過ぎん、衆生の爲に諸の苦を受くる莫れ、應當に默然として禪の樂を受くべし。世間に乃至一人の、甘露の味を盛受するに堪任する無し、我れ今憐愍の故に汝に告ぐ、應當に速に涅槃に入るべし」と。

我れ時に偈を以て復魔王に答へて言はく、

「我れ世間を見るに、衆生の能く生死の大嶮河を度すべきもの多し、是の如き上中下の品類をば、先づ度するを得已らば、我れ乃ち滅せん」。

と。爾の時魔王、大憂惱を受け、苦宅に入り其の所に還つて止まる。其の諸眷屬、各是の言を作さく「我が王は何の故に是の大苦をば受くる」と。是の語を作すと雖も能く知る者も無し。時に魔の姪女、其の數五百、身に瓔珞を佩びて飾好を莊嚴し、魔波旬の爲に諸の伎樂を作し、歌舞嬉戯して以て相娛樂するも、波旬手を以て之を遮止す。姪女是に於て默然として住しぬ。かくすること二より七に至るに、魔も亦是の如く遮止すること七に至る。時に一女あり、名けて電光と曰へるが、波旬に語つて言はく「大王、何の故に是の如く愁惱すること、天意を失ひ、火災起る〔時の〕如くなる。將た怨有るも壞する能はざる無きや」と。波旬答へて曰く「我に大怨有り、釋種の子と謂ふ、

【三三】 魔王の姪女、歌舞伎樂すれば、魔王之を制止すること、七回に及ぶをいふ。

【三三】 唐譯に電可意聲とす。

若し能く生・老・病・死を壞すと「言はんも、亦復是の如くなり」と。時に拘律陀、魔王に語つて言はく「我れ清淨の法に通過して諸の苦を遠離せんと欲す。一切の出家は皆悉く、是の如き煩惱・苦を解脫する者有ること無し、是の故に我れ今如來のみもとに詣らんと欲す。魔王は野狐の啼くが如くなり、云何が師子吼せん。色は相似たりと雖も、實は師子に非ず。魔王、汝今比丘の形像を作すと雖も、汝の所説は比丘の説に非ず。夫れ比丘は諸の煩惱を破す、煩惱を破すれば語即ち是れ清淨なり、善惡無しと言ふは、比丘の語に非ざればなり」と。時に虛空中の一切諸天、各各讃へて言はく、「善い哉、善い哉、善男子、一切出家のうち、佛道最勝たり。夫れ佛道とは即ち是れ涅槃、汝今魔の所説を受けず。善哉、善哉」と。爾の時魔王、大苦惱を受け即便隱滅したり。

時に諸弟子、二師に向つて言はく「師今羅曇沙門の無上の正法を受けたるが如く、我れ等も亦爾らん、當に往いて啓受すべし」と。時に二大師、五百の弟子の與に前後圍遶せられ、迦蘭陀長者の竹林に往けり。爾の時魔王、復其の路に於て、大坑の深さ百由旬なるを化作し、諸人をして佛に詣るを得ざらしめんと欲したり。如來「これを」知り已り、即ち神通を以て、彼の二人をして、見る所平坦にて坑嶮有ること無からしめたり。魔復前に於て大山の高廣千里なりを化作するに、如來神力もて、其をして見ざらしめたり。時に魔復百千の師子を遣はして其の道路を遮らしむ。時に諸師子、優波提舍及び拘律陀と五百の弟子とを見るや、善心即ち生じ默然として潛伏す。諸人即ち前んで佛所に至るを得、到り已つて頭面もて佛足を禮敬し、却いて一面に住し、佛に白して言く「世尊、唯願はくは如來、我が出家せんを聽したまはんを。我れ佛の清淨梵行を修せんと欲す」と。佛の言はく「善來、諸善男子、意を恣にして清淨梵行を修集せよ」と。是の言を作し已りたまふに、比丘戒を具せり。時に魔王、この二人の出家を得たるを見已り、即便自在天の像を化作し、佛所に向ひ偈を説いて言はく

【三二】唐譯相當文に作「野干聲」とす。

【三三】師子吼、大獅子の吼ゆる時、小獅子は勇み、一切の禽獸は避伏するが如く、佛の説法を聞きて、菩薩は精進し、外道惡魔は慚伏するをいふ。轉じて總て法を説くの義に用ひらる。

【三四】唐譯に見諸諸天云とあり。

【三五】唐譯によれば、この二人佛所に近づくや、佛諸比丘に對して、二人を讃へ、一人は我が聲聞弟子の中にて智慧第一たるべく、一人は神通第一たるべきを物語りたまふ事を記す。

【三六】比丘の持つべき戒にして、一切の身口二業の過非を防止する戒なり。

の言はく、『是の如きの言は、能く四流を過ぎ生死を度す、五陰に通達し永く煩惱を滅す、是れ甘露味なり、我れ今已に得たり。宜しく此に住すべからず。善男子、是の如きの師は何處に住するや』。優波提舍の言はく『我れ聞く、王舎大城なる迦蘭陀竹林に住したまふ』と。爾の時、優波提舍、及び拘律陀は、諸の弟子に告げて『此の間に今釋迦如來有す、我れ已に其の所説の法をば諍受したり。汝等今何處に趣かんと欲するや』と。

爾の時魔王、諸の天衆に告げていふ『驚伽摩伽陀國に二の大人有りて智慧最勝たり、一を優波提舍と名け、二を拘律陀と名く。今彼の瞿曇の弟子と爲らんと欲す。若し此の二人にして彼の瞿曇に従ひ、沙門となり法を受けなば、我が境は則ち空し。我れ今往いて彼の二人の、出家の心を轉ぜんと欲す』と。爾の時魔王、即ち其の身を化して馬星の像を作し、優波提舍と拘律陀との所に至り、是の言を作す『善男子、我れ先に説ける所は汝の智を試みたるのみ。汝既に答ふる無かりき。釋迦如來は、眞實に是の如きの言をば作したまはず。如來常に説きたまふらく、——善業の果無く、惡業の果も無し、若し能く五欲の樂に親近せば、是の人即ち甘露の法味を得ん——と。又言はく——今世・後世有ること無し、是の故に業無し、若し業無くんば誰か作し誰か受けん。既に種子無し、云何ぞ果を得ん——と。釋迦如來は唯是の説を作す』と。爾の時優波提舍と拘律陀とは、各相謂つて言はく、『是の如きの語は即ち是れ魔の説のみ、如來の語に非ず、また馬星比丘の所説にも非ず』と。魔是を知り已り、即便ち滅して去りぬ。

爾の時二人、復弟子摩納に告げて『汝常に諦觀す、生・老・病・死は世に免るる者無きを。我れ今已に能く永に諸の苦を滅したり。汝等今日何の志求をか欲する』と。

爾の時魔王、復更に馬星の形像を化作して、是の言を作せり『誰か能く生・老・病・死を破壊せん。譬へば人有り説いて——我れ能く彼の虚空を壞せん——と言ふも、是の處有ること無きが如し。』

辭ニ善知識及諸眷屬、詣佛出家と云ふ。

【二〇】梵志は、婆羅門の生活に於ける四期の第二、師に就いて修學する者をいふ。

【二一】唐譯この次に拘律陀の偈あり。

【二二】梵行、梵は清淨の義にして、清淨なる行を梵行といふ。

【二三】次の詞、唐譯は偈を以てし、やゝ異なる。

【二四】四流、見流、欲流、有流、無明流の四、有情はこの四法の爲に漂流して息まざれば流と名く。一は、大集部第一冊五九頁を参照。

【二五】唐譯に中摩伽陀國有二外道と云す。驚伽摩伽陀は、四分律飾宗記によれば、鞞掘多羅ともいひ、摩伽陀の北に位する國なりといふ。

【二六】唐譯は偈を以てす、説相やゝ異なる。

【二七】唐譯には、二人、別々に偈を以て説く。

【二八】摩納は Manavala 摩納婆の略、備童、年少淨行など譯す。

【二九】この一節、唐譯に缺く。

言はく「汝の師は常に何等の法義をか説く」と。「善男子、汝今諦に聽け、我れ當に汝の爲に分別解説すべし。すなはち法は縁より生ず、此の因に通達せば、因縁滅するが故に、即ち是れ寂靜なり。世間は即ち苦、苦の因をば 集と名く。若し 八正を修せば世間の集は滅せん。若し苦の集無ければ——我が師説いて言はく——名けて涅槃とは爲すと。善男子、我が師は唯是の如き等の法を説きたまふ」と。優波提舍、是の語を聞き已り、法眼淨を得、須陀洹と名けたり。即ち 偈を説いて言はく

「我れ比丘の 四諦を説くを聞き、即ち三惡道を過ぐるを得たり、昔よりこのかた未だ聞かざるをば今聞くを得たり、昔より未だ得ざる所をば今已に得ぬ。我れ今已に三惡趣を過ぎ、眞實に道と非道とを了知しぬ、我れ今誠心もて佛に歸依す、能く是の法を宣説せるを以ての故に」と。是の偈を説き已り、復比丘に語るらく「是の如きの世尊は今何處に住したまふや」。馬星答へて言はく「世尊は今王舍大城なる迦蘭陀長者の竹林の中に在し、迦葉等の千比丘と俱なり、菩薩も十千あり、汝彼に往くべし」と。優波提舍の言はく「我れ 今先づ當に還つて同學及び我が徒衆に問ふべし」と。時に優波提舍は敬意もて馬星比丘を禮拜し、右邊三匝して所住の處に還る。

拘律陀 梵志、遂に優波提舍を見、即便ち問ひて言ふ「優波提舍、汝今諸根清淨にして悅豫し、顔色光澤あり、將た甘露味を獲得したるに非ずや」と。「善男子、我れ已に得たり、諦聽諦聽せよ、當に汝の爲に説くべし。法は縁より生ず、此の因に通達せば、因縁滅するが故に、即ち是れ寂靜なり。世間は即ち苦、苦の因を集と名く。若し八正を修せば、世間の集滅す、若し苦の集無くんば——我が師説いて言はく——名けて涅槃とは爲す」と。拘律陀の言はく「善男子、是の如きの言は能く諸苦を盡す、即ち是の 梵行は、能く邪見の一切因縁を斷じ、亦一切有爲は皆空なり」と説く、善男子、唯願はくは更に説け」と。優波提舍復本の如くに説き、説き已つて即ち須陀洹果を得たり。拘律陀

【九】唐譯には阿説示(Anandya)に作る。五比丘の一にして、彼の端正なる威容と、庠序たる舉止とは、時々人目を引きたりと云はる。
 【一〇】一人の沙門、原本は若人沙門に有る、今元明に従ふ。
 【一一】牟尼 muni、寂默、寂靜など譯す。もと身口意の三業を靜止する學道者の尊稱にして、内外に通じたるなり。
 【一二】この段、唐譯は偈を以てす、その説相や異なる。
 【一三】集(Shandhya)四諦の第二、
 【一四】八正、八聖(又は正)道をいふ。
 【一五】唐譯に得須陀洹果とす。Gotthapanna 入流、預流かと譯す。聲聞四果の初。三界の見惑を斷じて、この果を得。
 【一六】この偈、亦唐譯異なる。
 【一七】四諦、又四聖諦ともいふ。生死の苦(苦諦)其の原因たる業煩惱(集諦)、苦集の滅了りたる悟境(滅諦)、及びこの悟境に達する修行(道)をいふ。聲聞はこの四を觀じて修行すと云はる。
 【一八】唐譯はこの十千につき、本は外道、值佛出家と云ふ。
 【一九】優の字、以下麗本臺に作る。今三本に従ふ。
 【二〇】この句、唐譯には我今

大方等大集經

北涼天竺三藏曇無讖譯

卷の第十九

寶幢分第九 魔苦品第一

爾の時世尊、故に 欲色二界中間の大寶坊中に在し、諸の眷屬の與に圍繞せられ、說法して大眾に告げて言はく、我れ昔初めて阿耨多羅三藐三菩提を得たる時、王舍城なる 迦蘭陀長者の竹林に住しぬ。爾の時城中に二の智人あり、一を 優波提舍と名け、二を 拘律陀と名け、ともに 十八種の術を具足成就し、五百の弟子、常に相隨逐したり。是の時二人、各相謂つて言はく『若し先に甘露味を得る有らん者、要す當に相惠むべし』と。

時に比丘有り、名けて 馬星と曰ふ。其の晨朝に於て禪定より起ち、王舍城に入りて次第に乞食す。優波提舍、中路に遙に馬星比丘を見、即ち是の念を作す『我れ久しく是の王舍城中に住するも、初より未だ會て、一人の沙門婆羅門等有りて、威儀の庠序たること、此の人の如くなるを見ず。我れ當に往いて、事ふる所は何の師たる、誰に従つて法を受くるやを問ふべし』と。時に優波提舍、即ち往いて彼の馬星比丘のところに趣き、是の如きの言を作す『比丘、汝の師は是れ誰ぞや、誰に従つて法を受くるや』と。馬星答へて言はく『善男子、釋迦 牟尼如來大士といへる有り、諸の出家に勝れたる無上の尊なり、已に生死を度して解脱を獲得し、能く一切無量の衆生を度したまふ。之を名けて佛と爲す。能く衆生を悟らしめ、善く諸の行を作し、能く苦河を乾かしたまふ、是の如き等の法を具足成就したまへり。是ぞ即ち我が師たり、我れ従つて法をば受くるなり』と。優波提舍の

寶幢分第九魔苦品第一

三九三

【一】 吳譯、唐天竺三藏波羅頗密多羅譯寶星陀羅尼經十卷

【二】 唐譯、降魔品第一

【三】 欲色云云、唐譯には。直に王舍城竹林迦蘭陀邊と云ひ、大比丘衆一千人、大菩薩一萬人と共なる事を記し、その中の上首として持須彌頂童真以下十一の童真、菩薩を掲ぐ。

【四】 王舍城、梵に Rājagṛha 中印度摩伽陀國に在り、頻婆娑羅王が、舊都上茅城より新に移せる都なり。王舍城を圍つて五山あり、靈鷲山はその第一なり。

【五】 迦蘭陀長者の竹林、梵に Kāṇḍakāyāryama 王舍城と上茅城との間に在り、迦蘭陀長者の所有に係り、もと尼隄子外道に與へしを、後に佛に奉て僧園とす。是れ印度僧園の初、所謂竹林精舎なり。

【六】 優波提舍、唐譯は底沙に作る。

【七】 拘律陀、同に俱利多に作る。

【八】 唐譯に十八明處といふ。また十八大經とも稱せられ、外道所學の根本的典籍たる四吠陀 (Vedas) と音韻・語法・祭式・天文・詩法・語源に關する六吠陀支分と、神話・哲學・論理・法律・醫藥・音樂・弓杖・建築に關する八論とをいふ。

の娑婆世界に來る。南・西・北方の三世界からも、夫々一人の童子を遣はして、釋尊の所へ、陀羅尼の送付がある。阿若憍

陳如は、この四陀羅尼を廣説せられんことを願ふ。佛は愛(欲・色・無色)から始め

て、欲の罪過と、欲を離れん爲の不淨觀を説いて、如實陀羅尼を解説し、蓮華陀

羅尼は、十八不共法で、佛のみ能く知るも、二乗は知り難しとて、南方世界から

の、空行陀羅尼に移つて、解欲を述べ、次に無願陀羅尼を説いて一切世間不可樂

の想と、食不淨の想とを語り、最後に北方からの欲淨陀羅尼として、四倒を壊せん爲の無我を説かれる。

次に頻婆娑羅王との問答あつて、三昧に入られると、佛身より出づる光が、十

方の佛土を照すので、一切の諸佛菩薩聲聞などが娑婆に來り、皆菩提心を發し、乃至阿羅漢果を得る。

たゞ魔王波旬のみ、愁惱する。魔王の大匠空樹(後には戒梯とある)が、魔王

と議して、諸方から無量の龍を遣はせども、佛に一指も染むるを得ない(麗本は終る)。

そこで佛は、常身を現はして、摩伽陀に出でられると、魔王と大臣とは、佛の神通退せりとて、佛所に至り、佛を謗す

るも、劫つて教化せられて、大臣は歸佛する。一切の諸龍は、佉羅塹山に在るも、

動くことすら出来ないで、或は佛を謗り、或は讚へて居る。その聲が、雪山なる光

味仙人に聞えたので、仙人はかの山へ行

くと、諸龍は、星宿が誰の作なるかをたづねる。光味仙人は、驢唇仙人の故事を説くと、更に諸龍は仙人に救を求めらる。

仙人は如來こそ汝等を救ひたまはんといふ。

爾の時、佛は摩伽陀から須彌山に歸らんとせられると、諸天が諸の寶を以て床座を作つて迎へる。世尊は化して、六座

に就かれる。諸龍が佛に救を求めるので、佛は我れ能く救はんと言はれる所で終る

(卷三三)——了——

附記 前に言ふ如く、日密分は完譯で無く、従つて説話は首尾揃はない。詳しくは日密分の註記と、日藏分とを參

照。

昭和六年二月二十日

解題

譯者 蓮

澤成淳識

五

これが十方に流布せられんことを述べ、經を四天王以下に付囑せられる。十方世界の菩薩が、令法久住の爲に、戒を制せられんことを乞ふた爲に、頻婆娑羅王と佛との間に、罪に關する問答があり、娑婆世界の一切衆生等が、護法を誓つて終る(二四)。

寶髻菩薩品(卷二五—二六) 佛依然として大寶坊中に在はすと、東方なる善華世界の、淨住如來の所に、寶髻菩薩と云ふがあり、諸の菩薩と共に、此の土に來り、菩薩淨行法印を聞かんと乞ふので、佛は、菩薩の四行(波羅蜜行・助菩提行・神通行・調衆生行)を説かれる。

始めに法數に據つて六度を説き、次に助菩薩行の下で、四念處・四正勤・四如意足、五根・五力・七覺支・八正道など、所謂三十七菩提分を説き、次に神通行の下で、五通を説かれるが、是には過去の一切衆生樂念如來の所に於ける、寶聚(今の

寶髻)菩薩に關する物語が加へられて居る。終の調衆生行には、種々の調伏を述べ、過去の寂靜世界なる廣光明如來の所で、淨精進菩薩(今の佛陀)が不信の一王子(財功德といひ、今の彌勒菩薩)を調伏した物語がある。

最後に、寶髻菩薩は、未來(淨光世界と名く)に於て成佛し、寶出如來と名くべきことが述べられる(二六)。

無盡意菩薩品(卷二七—三〇) 佛が王舍城なる寶莊嚴堂に在つて、大集經を説かれると、東方から無盡意と名くる菩薩が來る。舍利弗が、無盡意の處・佛・世界などを問ふので、佛は、東方普賢如來の不胸世界——その土は一切純ら菩薩のみで、三惡道の名も、女人の名も無き——がその住處であることを物語られる。舍利弗は無盡意にその名の由來を問ふと、一切諸法因果は、不可盡なることを休得せるが故に、この名があるといふ。それから

發心・菩提心・心行などの無盡、四行・六度・四無量・四攝・四無礙智・四依・功德・智慧等の無盡なること、七科の助菩提分、定・聚・總持辯才・撰集の四法、一道・方便、これ等すべての無盡なることを述べ、阿難に對する付囑があつて、經は終る。

日藏分(卷三一—三三) 佛がかの大寶坊の中で(虛空目出息入息甘露門を説かれて後)蓮華光功德大梵菩薩に對して、大乘と小乗との無差別なることを語り、次で十方無量世界の、菩薩道を行するものが、皆この寶坊中に來集したので、是に法供養等の説法があり、また伽耶迦葉や、頻婆娑羅王などに對して、破戒の比丘や、僧物を掌護するものなどに就ての説法がある。

次に東方なる無量國の、五功德佛の所から、日密菩薩が、無量の功德を具する眞陀羅尼と、聞き已るや女身を轉じて男身を得しむる蓮華陀羅尼とを持つて、こ

各その本國に還り、經の流布に關する説があつて終る(一一)。

虛空目品(卷二二—二四) 佛が大寶

坊中に在つて、中道の義を説き已り、瞻波

の華鬘を把つて、大誓願を發されると、

華鬘の中から大光明が出る。それを見て、

聲聞弟子並に四天下の諸佛弟子が來集す

る。この寶鬘が、先づ南方の金剛光藏世

界に飛行すると、その世界の諸弟子、そ

の所以を問ふので、金剛光明功德如來が、

娑婆世界に在る佛が、大集の爲に正法を

演説し、將に虛空目の法行を宣説せんと

するしるしであるとし、我れも今送るに

法目陀羅尼を以てせんとて金剛山童子を

遣はされる。同じ様にして、西方慧鬘世

界の智幢如來は、勝幢童子を以て淨目陀

羅尼を送り、北方の常具足五淨世界なる

發光功德如來は、勝意童子を以て光目陀

羅尼を遣はし、東方の寶頂世界からは、

寶蓋光明功德如來が虛空聲童子を以て聖

目陀羅尼を送られる。四童子は各その國の大衆と共に佛前に至つて、その陀羅尼を説くと、諸龍が來り集まつて、是を護持せんと誓ふ。

橋陳如比丘は、四方四佛から送られた

所をば、宣説したまはんことを請ふので、

佛は先づ法行の義から始めて、頂法・世第

一法・八忍、並に四果を説かれ、次で攝心・

三解脱門・四諦・五通・五蓋・四禪・四無色

定などを説かれる。金剛山童子は、この

所説と、我が所持の法目陀羅尼と異なるこ

と無きを述べる(一二)。

時に佛の眉間より光が放たれると、十

方世界の衆生、是を見て娑婆世界に至り、

無量諸天龍なども來集する。波斯匿王以

下の諸國王も亦、寶坊中へ來て、佛に十

二月相書を説かれんことを請ふ。佛は昔

雪山なる婆伽婆仙人に、十二人の子あり、

十二年苦行を修したることを云ふのみ

で、十二月相書の事に説き及ばないのは、

恐らく缺本に由るものであらう。

次で彌勒菩薩に、道と非道との説法、

橋陳如に十二因縁の觀法を説き、頻婆娑

羅王との間に四無量心に就ての問答があ

り、終つて如來は三昧に入り、四無量の

中、初づ慈を説かれ、人天を調伏するは

難からざるも、畜生の調し難きことに關

し、十二獸に就ての物語、並に十二獸を

見る爲の土壇作法や、陀羅尼が説かれる

(密教的の分子見るべし)(一三)。

次で明星菩薩の問に對して、慈を説き、

八苦・三苦を示し、是を觀する方法とし

て、不淨觀を説かれ、次に聲聞乘を修す

るものが、如何に四無量心を修するかの

説があり、更に虛空聲童子に對して、無

縁の梵行を修して、無礙智を得るの説法

がある。

次で金剛山童子以下、九萬二千億の童

子が、虛空目の法行を、久住せしめんと

とを乞ふと、かの四方の四佛の願に依り、

るも、四大弟子の爲に、皆調伏せられ、種々の姿となつて、魔王を説く（一九）。

佛は王舍城に入つて、親しく魔業を破せんとせられると、その守城天を始め、梵天帝釋までが、一切の魔の衆の、如來に毀害を加へんとして居ることを告げる。

佛は大音聲もて、彼等がその力を盡すも、その一毛をだに動かすを得ざる者を選べて、入城されると、種々の供養がなされ、國王大臣より虎狼に至るまで、佛に歸依する。雪山なる光味仙人も、城中の西門下に在り、佛と問答の末に、星宿道的事を述べるが、遂に佛に破せられ、劫つて佛に歸して、將來北方華香世界に於て、得佛（光功德如來）すべき記弼を受ける。次で佛が三昧に入つて、王舍城なる十ニ門に、十二の佛を現したまふと、迦蘭陀竹林の大衆が、悉く王舍城に集まり、十方世界は一切衆生も亦、來集して、魔に屬するもの一人も無きを見、魔王波旬

も、一旦は佛に歸するやに見える。佛は光味菩薩所造の寶梯によつて、大蓮花上に座し、魔王の爲に說法せられると、十方世界の如來は、各々の菩薩に告げて、釋迦如來の信すべきことを説かれる（二〇）。

即ち東方の阿闍如來を始め、四方の諸佛が、無量の菩薩と、かの釋迦如來大集の處に來られ、諸佛同聲にて大集金剛法心因緣陀羅尼を説かれる。娑婆界の一切衆生は、是を聞いて、南無一切十方諸佛と稱へる。次で梵天が呪を説き、釋迦如來の滅後にも、此の呪の流布する處には、是を護り、女人にして男に生れんと欲する者、亦此の呪を持すべきことを述べる。（變成男子の思想見るべし）。佛は波旬に、佛法の信すべきこと、彼の因緣によつて、この無量の衆生が、こゝに集まり、解脱の果を得て、汝の伴侶となるもの、一人も無きを説かれるが、

魔は我不能歸依三寶といふ。

此の時會中の、曼陀羅華微妙香菩薩が、今十方無量の諸佛、悉くこの娑婆世界に來集す、誰にか釋迦佛の法を付したまふやをたづねる。佛はその正法を頻婆娑羅以下の國王、四天王並に梵釋に付囑せられる。すると、大衆の天王・梵王・龍王や、彌勒・一切の娑婆の人天など、佛の滅後にも、至心に法を護らんことを誓ふ。

會中の一魔王（太白といふ）、佛に歸依して、法を護り、魔をして便を得ざらしむることを誓ふと、十方の佛、之を讚へる。魔王は賢意に、太白は何處より來り、何の力あるやを問ふ。堅意は、皆これ一切諸佛の威神の然しむる所と答へるが、魔王はなほ菩提心を發すことを得ない。時に曠野鬼等が、種々の身を化現して、彼等は、毘婆尸佛以來、世々に兄弟となり、菩提心を發して、惡鬼を調伏したる因緣を説く、そこで十方の無量の諸佛が、

大方等大集經

(卷一九——三三)

各品概要(其二)

寶幢分(卷一九—二二) 世尊が、欲・色二界中間の大寶坊中に在つて、大衆に告げたまふやう、昔初めて正覺を成じ、王舍城の迦蘭陀竹園に居られた時、城中に優波提舍と拘律陀と名くる智者があり、二人の中、最初に甘露味を得た者が、他方に對して、之を惠まんと約束をする。時に優波提舍が、入城乞食せる馬星といふ比丘の、威儀庠序たるを見て、誰に師事し、どんな教を受けて居るかを尋ねると、比丘は釋迦牟尼如來を師とし、法は因縁によつて生じ、因縁が減すれば、即ち寂靜である、世間は苦であるが、八正道を修すれば、此の苦は滅する、是を我が師は涅槃と呼んで居るなどと教へる。然ら

ばその様な世尊は、何處に居られるかの間に對して、迦蘭陀竹林に在はず旨を答へる。優波提舍が、その住處に歸ると、拘律陀は、友の様子が、いつもと異つて居るのを見て、もし甘露味を得たのかと云ふ。優波提舍は、馬星から聞いた所を告げるので、二人は共に竹林に行くことに決心する。

この事を魔王が知つて、二人の出家せんとする心を轉ずる爲に、馬星の姿になつて出て、自分が先刻話した事は、君を試みる爲であつた、世尊の教といふのは、今世とか後世とか業とか云ふものは實は無いので、唯五欲の樂に耽るものが、甘露の法味を得るといふのだと話す。けれども、二人は是を魔の言だと云つて信じない。虚空中の一切の諸天も、善哉善哉

と云つて、是を讚へるので、二人は、五百の弟子と共に竹林へ行くことになる。

魔王は是を妨げる爲に、いろんな方法を講ずるが、佛の神力の爲に、徒勞に歸し、劫つて大苦を受けて憂惱する。それを見た魔の眷屬が、いろ／＼感め問ふと、彼は佛の偉大さの爲に、我が勢力の狭められることを話す。是を聞いた魔の姪女等は、劫つて佛を供養するので、魔王は愈懊惱する。魔衆は更に手段を換へて、世尊を害せんとするが、世尊の破魔力勢三昧の爲に、その努力も空しくなつて、歸佛するものが簇出する。

そこで佛は、惡友に親近せざる法を述べられ、寶坊大會中の諸菩薩との間に、佛智に關する問答があり、次で佛の過去業の物語(妙香光明世界の香功德如來の所に於ける)が述べられる。

爾の時、諸の魔衆が、魔王の所に集まり、種々の法を以て、世尊を害せんとす

卷の第二十四	〔五二九—五三三〕	一三五
虚空目分第十之三中聖目品第六		一三五
虚空目分中辟支佛乘品第七		一三八
虚空目分中聖無礙智品第八		一三九
虚空目分中護法品第九		一四三
虚空目分中大衆還品第十		一四六
卷の第二十五	〔五三四—五五〇〕	一四八
寶誓菩薩品第十一		一四八
卷の第二十六	〔五五一—五六八〕	一六六
無盡意菩薩品第十二之一		一六五
無盡意菩薩品第十二之二	〔五六九—五九五〕	一八五
無盡意菩薩品第十二之三	〔五九六—六一九〕	二一〇
卷の第二十八	〔六一〇—六二〇〕	二三四
無盡意菩薩品第十二之三		二三四
無盡意菩薩品第十二之四	〔六一四—六六四〕	二五五
卷の第三十	〔六六五—六八〇〕	二七九
無盡意菩薩品第十二之四		二七九
卷の第三十一	〔六八〇—六八八〕	二七九
日密分中護法品第一		二七九
日密分中四方菩薩集品第二之一		二八八
日密分中四方菩薩集品第二之二	〔六八四—七〇〇〕	二九八
日密分中四方菩薩集品第二之三		二九八
日密分中分別說欲品第三		三〇〇
日密分中分別品第四		三〇七
日密分中分別品第四之一	〔七〇一—七二六〕	三二六
日密分中救龍品第六		三三六

目次

(本丁)

(通頁)

大方等大集經解題

[一—五]

一

大方等大集經……(自卷第十九至卷第三十三)

[三九七—七二六]

七

卷の第十九

[三九七—四一九]

七

寶幢分第九魔苦品第一

七

寶幢分中往古品第二

一五

寶幢分中魔調伏品第三

二四

卷の第二十

[四二〇—四四〇]

三四

寶幢分第九三昧神品第四

三四

寶幢分中相品第五

四四

卷の第二十一

[四四一—四六九]

五五

寶幢分第九中陀羅尼品第六

五五

寶幢分中護品第七

六五

寶幢分中授記品第八

六七

寶幢分中悲品第九

七二

寶幢分中護法品第十

七五

寶幢分中四天王護法品第十一

七九

寶幢分中曠野鬼品第十二

八二

寶幢分中還本品第十三

八二

卷の第二十二

[四七〇—四九七]

八四

虚空目分第十之一初聲聞品第一

八四

卷の第二十三

[四九八—五一八]

一一三

虚空目分中彌勒品第二

一一三

虚空目分中四無量心品第四

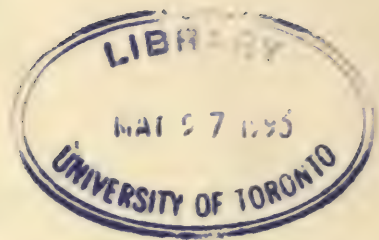
一一九

虚空目分中淨目品第五

一二二

大
集
部
二

蓮
澤
成
淳
譯



CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

29

國譯一切經

大東出版社藏版

國譯一切法

大東出版社發行

